THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋期大附録號

第三十三年第十號

第三百六十一號



腦神經病に適藥ありや？

コヽに最良の適藥あり

島村博士有効證明

健腦丸を服め!!

健腦丸を常用せば逆上を引下げ頭痛眩暈を治し、腦充血を快治し便通をよくし、怖ろ可き中風卒中を未發に豫防し、記憶力增進頭腦明快の効あり。

コンナ兆候はありません？

▲頭が變で重い物被つた心地はありませんか
▲頭痛眩暈がして眠むられぬ事ありませんか
▲氣分悪しく逆上せて便祕に苦む事ありませんか
▲仕事も手に付かずクヨクヨ思ふ事ありませんか
▲記憶力が薄くなり決斷力が乏き事ありませんか

コレ腦神經病の症候也健腦丸服用あれ



藥價
一週分四十錢　五週分二圓八十錢
二週分七十錢　十週分五圓
三週分一圓卅錢　到る處にあり

本舖　大阪東京　丹平商會藥房

如何にして正しく活くべき乎之を本書に聞け

武者小路實篤氏新著

新しき村の生活

岸田劉生氏裝畫
中版特製三百頁
▲定價八拾五錢
▲送料八錢

忽ち再版出來

白樺派の重鎭として、人道主義者の領袖と目されて來た武者小路實篤氏は、單なる藝術家として甘んずるの人ては無かつた。氏は、その熾烈の精神を實行に驅つて自らの理想に驀進せんと企て、こゝに「新しき村」の計畫を發表された。「新しき村」の何ものなるかは、此の書、よくこれを説明して剩すところがない。同志を糾合して、一廓を構へ、純眞なる人間性の要求に基ける生活によつて、一理想郷を建設し、以て、來る可き時代の眞の文明の酵母たらしめんとするが、即ち、此の「新しき村」の企てである。氏は、本書の序に於て曰く、「自分達は先づ自己の生活を改造する。新しき世界に最も調和し易い生活をこの世で生活して見せる、かくて個人の生活を改造する。我々は自己を最も人間らしく生かすことから始める。よき花がさき、よき實が結ぶには、よき生活が必要だ。」又曰く、「自分はこの本にのせたものを、第一部と、第二部に分つた。第一部は本論で、第二部は本論に達する迄の自己の内面生活の經路を示す。自分がこゝにくる迄に何年を要したか、どの位、躊躇したか、又どの位何かの手に盲目に導かれて來たか、それを知つて貰ふ事は、自分の精神を一層はつきりさせて呉れることゝ思ふ。」と。いかにして活く可きかを思ひ煩ふものは、必ず本書を讀まなければならぬ。

東京牛込矢來町中の丸　振替東京四七二四番

新潮社

電話番町　八八〇九番　八九九九番

ツルゲエネフ全集第二編

ルーヂン

「ルーヂン」一篇は、薄志弱行、夢想徒らに繁くして、何事にも熱する能はざるルーヂンといふ人物によつて、四十年代に於ける露西亞人の生活を描き、ツルゲエネフ自身の胸に漲りたる悲哀の情を抒したるもの、その全作中に於ても屈指の名篇である。ルーヂンに戀する少女ナタリヤを描きて、其の筆最も靈活を極め**戀愛文學者**としての作者の**大手腕**は遺憾なくこゝに發揮し盡くされてゐる。既に二葉亭の譯『うき草』があるが、新しき時代には新しき譯がなければならぬ。人々は、此の新譯によつて、生鮮斬新の情趣を掬することを得よう。附錄『彼等の手紙』の一篇は、男女互に贈りかはせる書簡の體に擬して、作者の哲想と情懷とを披瀝せるものである。

田中純氏譯

（新刊）

總洋布製極美本
定價金九拾錢
郵送料六錢

叢書第一 獵人日記
生田長江氏譯（再版出來）
價一圓五十錢、送料八錢

縮刷

サフオ

ドオデエ作
武林夢想庵氏譯

（縮刷新刊）

定價八十五錢
送料八錢

燈火花の如き南歐の春の宵に、はしなく結ばれた美くしい女優と若い詩人との戀の經緯を描けるものである。凡そ世に戀物語も多いが、此篇の如く**濃艶**を極め**豐麗**を極め**哀婉**を極めたものは少いであらう。卷を開けば、隨所に、若き人々の血潮を攪き亂さずに措かない幾情景を見る可く、その溢るゝばかりに、**ローマンス**の甘美を漲らしてあるところは、固より原作者の特色ではあるが、それと同時に、鋭利な解剖と深刻な描寫とに、自然派の嚴肅を示してゐる**サフオ**とは老ゆるを知らぬ妖姬の美くしさと飽くを知らぬ魔女の淫縱とを有てる、南歐の唄名の名。譯者は本篇に多大の感興を抱き、異常の苦心を重ねて成せる暢麗の名譯である。

東京牛込區矢來町　**新潮社**　電話番町八〇九九番
振替東京一七四二　　　　　電話番町八八九九番

洛陽堂圖書秋季大特賣

新秋の候を期し各位の御眷顧に酬ゆる爲め弊堂圖書特賣仕候尚紙價暴騰の爲め〆切後定價改正のもの多數有之候間此際御買上の榮を得度く期限は九月一日より十月廿日迄左記は其一部にて「詳細目錄」は御一報次第進呈可仕候期限以後は斷然正價に復し候

書名	著者	定價	特價	郵稅
▲泰西の繪畫及彫刻 第一卷	洛陽堂編	三、〇〇	二、五〇	、一二
△同 第二卷	同	三、〇〇	二、五	、一二
△同 第三卷	同	三、〇〇	二、五〇	、一二
△同 第四卷	同	二、四〇	二、〇〇	、一二
△同 彫刻集	同	三、〇〇	二、五〇	、一二
▲ダンテ神曲(地獄篇)	中山昌樹	一、九〇	一、五五	、一二
△同(煉獄篇)	同	一、九〇	一、五五	、一二
△同(天國篇)	同	一、九〇	一、五五	、一二
△ダンテ新生	同	一、二	、八	、〇八
△平叙日本佛教	藤本慶祐	一、六〇	一、二	、〇八
△世界自然科學史	ギユンター	二、五	二、〇〇	、一二
△哲理と人生	帆足理一郎	一、五〇	一、二〇	、〇八
△宗教と人生	同	一、六〇	一、三〇	、〇八
▲トルストイ一日一想	加藤一夫	一、一〇	、九〇	、〇八
△土の叫び地の囁き	同	一、五〇	一、〇〇	、〇八
△我等何を爲すべき乎	トルストイ	二、〇〇	一、[illegible]〇	、〇八
△我等何を信ずべき乎	同	一、七〇	一、三〇	、〇八
△神人論	ソロイヨフ	一、二〇	、八〇	、〇八
△トルストイ民話集	塚本弘	一、一〇	、九〇	、〇八

△滅び行く宇宙及人類(脚本)	兒玉昌	一、七〇	一、三五	、〇八
△彼が三十の時(脚本)	武者小路實篤	一、五〇	一、二〇	、〇八
△向日葵(同)	同	一、五〇	一、二〇	、〇八
△後に來る者に(感想)	同	一、六〇	一、二八	、〇八
△ある青年の夢(脚本)	同	一、四〇	一、一二	、〇八
△留女(小說)	志賀直哉	一、〇〇	、八〇	、〇八
△銀(歌集)	木下利玄	一、〇〇	、六〇	、〇四
△彼等の運命(小說)	長與善郞	一、九〇	一、六〇	、〇[illegible]
△求むる心(感想)	同	一、二〇	、九〇	、〇八
△死の舞踏	ストリンドベルヒ	一、三〇	、九六	、〇八
△癡人の懺悔	同	一、六〇	一、二〇	、〇八
△ノア、ノア	ゴオガン	一、〇〇	、八〇	、〇八
△ハイネ評傳	藤浪由之	一、〇〇	、六〇	、〇八
△ヘッベル傑作集	吹田順介	一、六〇	一、三〇	、一二
△ドストイェフスキー	新城和一	一、三〇	、九〇	、〇八
△近代音樂家評傳	ロマンロラン	一、四〇	一、〇〇	、〇八
△ベエトフェンとミレエ	同	一、五〇	一、二〇	、〇八
△ミケルアンヂェロ	同	二、二〇	一、八〇	、一二
△茶話	薄田泣菫	、七五	、六〇	、〇六
△文學に現はれたる我國民思想の研究 貴族文學の時代	津田左右吉	三、〇〇	二、五〇	、一二
△同 武士文學の時代	同	三、五〇	二、八〇	、一二
△文藝復興の三大藝術家	中山昌樹	一、〇〇	、五〇	、〇八

東京市麹町區平河町五丁目
洛陽堂
電話番町四三五八
振替東京[illegible]

學生募集

新學期授業開始各科共九月十一日

大學部（法律科・政治經濟科）

修業年限三ケ年（午前八時始業）

○第一學年入學試驗九月八日、九日○願書（試驗料金貳圓添付）受付九月六日迄○受驗者ハ中學校卒業生又ハ檢定試驗合格者ニ限ル○其他ノ者ハ中學校卒業程度ノ試驗ヲ施行シ合格者ハ特科ヘ入學ヲ許ス○試驗科目ハ英語、代數、國漢、地歷トス

大學豫科（法律科・政治經濟科）

修業年限二ケ年（午前八時始業）

○第二期ヘ若干名編入ス○願書受付九月二十五日迄

專門部（法律科）

修業年限三ケ年（午後五時半始業）

○中學校卒業者又ハ檢定試驗合格者ハ正科、其他ノ者ハ別科ヘ入學ヲ許ス

○二年級三年級編入試驗ハ九月十六日ヨリ施行ス

東京高等豫備校

受驗準備教育（午前八時始業）

○隨時入學ヲ許ス○授業ハ一高、高商、高工等各高等專門學校教授ニ囑託ス

（學則ハ郵券二錢封入ヲ要ス）

東京九段坂上　**法政大學**　電話番町七四・四六六二

史眼炬の如く論斷痛快

故文學博士　吉田東伍先生著

縮刷新刊

維新史八講と德川政教考

袖珍天金美本一冊
紙質六百七十餘頁
特價壹圓參拾錢（正價壹圓五拾錢）郵稅八錢

幕府瓦解して維新の治に就きしは日本未曾有の大變にして、明治歷代の由來近く形跡を此間に發したり。吉田博士獨特の史眼を此方面に轉注し、博索精考、丁卯戊辰の前後十數年間の眞相を捉へて「維新史八講」の作あり。正確なる事實の上に條理ある論斷を加ふ。講說縱橫道破して些の忌憚なく、時に萬丈の氣焰生者をも愧死せしめ、死者をも蘇息せしむ。蓋し最も完備徹底せる唯一の維新史なり。

「德川政教考」は博士壯年の際「讀賣新聞」に連載して史學界を驚到せしめ、斯界伏龍の名を成したる傑作。三百年間政治文教の由來變遷を精叙詳說し、時代思想の精髓を探り、國體國情の推移を原ぬるに、多く代表的偉人傑士を拉し來り、其言動を評隲して、褒貶殺活自由自在、意氣千古を呑むの概あり。何れも異彩ある斯界の名著、兩篇併せ讀みて、幕府倒壞の機、王政維新の運始めて釋然たる者あるべきなり

――異彩ある最近史界の名著！

發兌元　東京神田　冨山房　振替五一〇　賣捌　全國書店



"NARCISSUS"
J. W. WATERHOUSE

洛陽堂圖書秋季大特賣

東京市麹町區平河町五丁目
洛陽堂
電話番町四三五六
振替東京一五九二

新秋の候を期し各位の御眷顧に酬ゆる爲め弊堂圖書特賣仕候尚紙價暴騰の爲めメ切後定價改正のもの多數有之候間此際御買上の榮を得度候期限は九月一日より十月廿日迄右記は其一部にて「詳細目錄」は御一報次第進呈可仕候期限以後は斷然正價に復し候

書名	著者	定價	特價	郵税
▲泰西の繪畫及彫刻	洛陽堂編	三、〇〇	二、五〇	、一二
△同 第一卷	同	三、〇〇	二、五〇	、一二
△同 第二卷	同	三、〇〇	二、五〇	、一二
△同 第三卷	同	二、四〇	二、〇〇	、一二
△同 第四卷 彫刻篇	同	三、〇〇	二、六〇	、一二
▲ダンテ 神曲(地獄篇)	中山昌樹	一、九〇	一、五五	、一二
△同 (煉獄篇)	同	一、九〇	一、五五	、一二
△同 (天國篇)	同	一、九〇	一、五五	、一二
△ダンテ新生	同	一、二〇	、八〇	、〇八
△平叙日本佛教	藤本慶祐	一、六〇	一、二〇	、〇八
△世界自然科學史	ギユンター	二、五〇	二、〇〇	、一二
△哲理と人生	帆足理一郎	一、五〇	一、二〇	、〇八
△宗教と人生	同	一、六〇	一、三〇	、〇八
▲トルストイ 一日一想	加藤一夫	一、一〇	、九〇	、〇八
△土の叫び地の囁き	同	一、五〇	一、〇〇	、〇八
△我等の何を爲すべき乎	トルストイ	二、〇〇	一、六〇	、〇八
△我等何を信ずべき乎	同	一、七〇	一、三〇	、〇八
△神人論	ソロイヨフ	一、二〇	、八〇	、〇八
△トルストイ民話集	塚本弘	一、一〇	、九〇	、〇八
△滅び行く宇宙及人類(脚本)	兒玉昌	一、七〇	一、三五	、〇八
△彼が三十の時(脚本)	武者小路實篤	一、五〇	一、二〇	、〇八
△向日葵(同)	同	一、五〇	一、二〇	、〇八
△後に來る者に(感想)	同	一、六〇	一、二八	、〇八
△ある青年の夢(脚本)	同	一、四〇	一、一二	、〇八
△留女(小說)	志賀直哉	一、〇〇	、八〇	、〇八
△銀(歌集)	木下利玄	一、〇〇	、六〇	、〇四
△彼等の運命(小說)	長與善郎	一、九〇	一、六〇	、〇八
△求むる心(感想)	同	一、二〇	、九〇	、〇八
△死の舞踏	ストリンドベルヒ	一、三〇	、九六	、〇八
△擬人の懺悔	同	一、六〇	一、三〇	、〇八
△ノア、ノア	ゴオガン	一、〇〇	、八〇	、〇八
△ハイネ評傳	藤浪由之	一、〇〇	、六〇	、〇八
△ヘッベル傑作集	吹田順介	一、六〇	一、三〇	、一二
△ドストイエフスキー	新城和一	一、三〇	、九〇	、〇八
△近代音樂家評傳	ロマンロラン	一、四〇	一、〇〇	、〇八
△ベエトフエンとミレエ	同	一、五〇	一、二〇	、〇八
△ミケルアンヂエロ	同	二、二〇	一、八〇	、一二
△茶話	薄田泣菫	、七五	、六〇	、〇六
△文學に現はれたる我國民思想の研究 貴族文學の時代	津田左右吉	三、〇〇	二、五〇	、一二
△同 武士文學の時代	同	三、五〇	二、六〇	、一二
△文藝復興の三大藝術家	中山昌樹	一、〇〇	、五〇	、〇八

學生募集

新學期授業開始各科共九月十一日

大學部（法律科 政治經濟科）修業年限三ケ年（午前八時始業）

○第一學年入學試驗九月八日、九日○願書（試驗料金貳圓添付）受付九月六日迄○受驗者ハ中學校卒業生又ハ檢定試驗合格者ニ限ル○其他ノ者ハ中學校卒業程度ノ試驗ヲ施行シ合格者ハ特科ヘ入學ヲ許ス○試驗科目ハ英語、代數、國漢、地歷トス

大學豫科（法律科 政治經濟科）修業年限二ケ年（午前八時始業）

○第二期ヘ若干名編入ス○願書受付九月二十五日迄

專門部（法律科）修業年限三ケ年（午後五時半始業）

○中學校卒業者又ハ檢定試驗合格者ハ正科、其他ノ者ハ別科ヘ入學ヲ許ス
○二年級三年級編入試驗ハ九月十六日ヨリ施行ス

東京高等豫備校・受驗準備教育（午前八時始業）

○隨時入學ヲ許ス○授業ハ一高、高商、高工等各高等專門學校教授ニ囑託ス

（學則ハ郵券二錢封入ヲ要ス）

東京九段坂上　**法政大學**　電話番町一七四・四六六二

史眼炬の如く論斷痛快

異彩ある最近史界の名著！

故文學博士　吉田東伍先生著

縮刷新刊

維新史八講と德川政教考

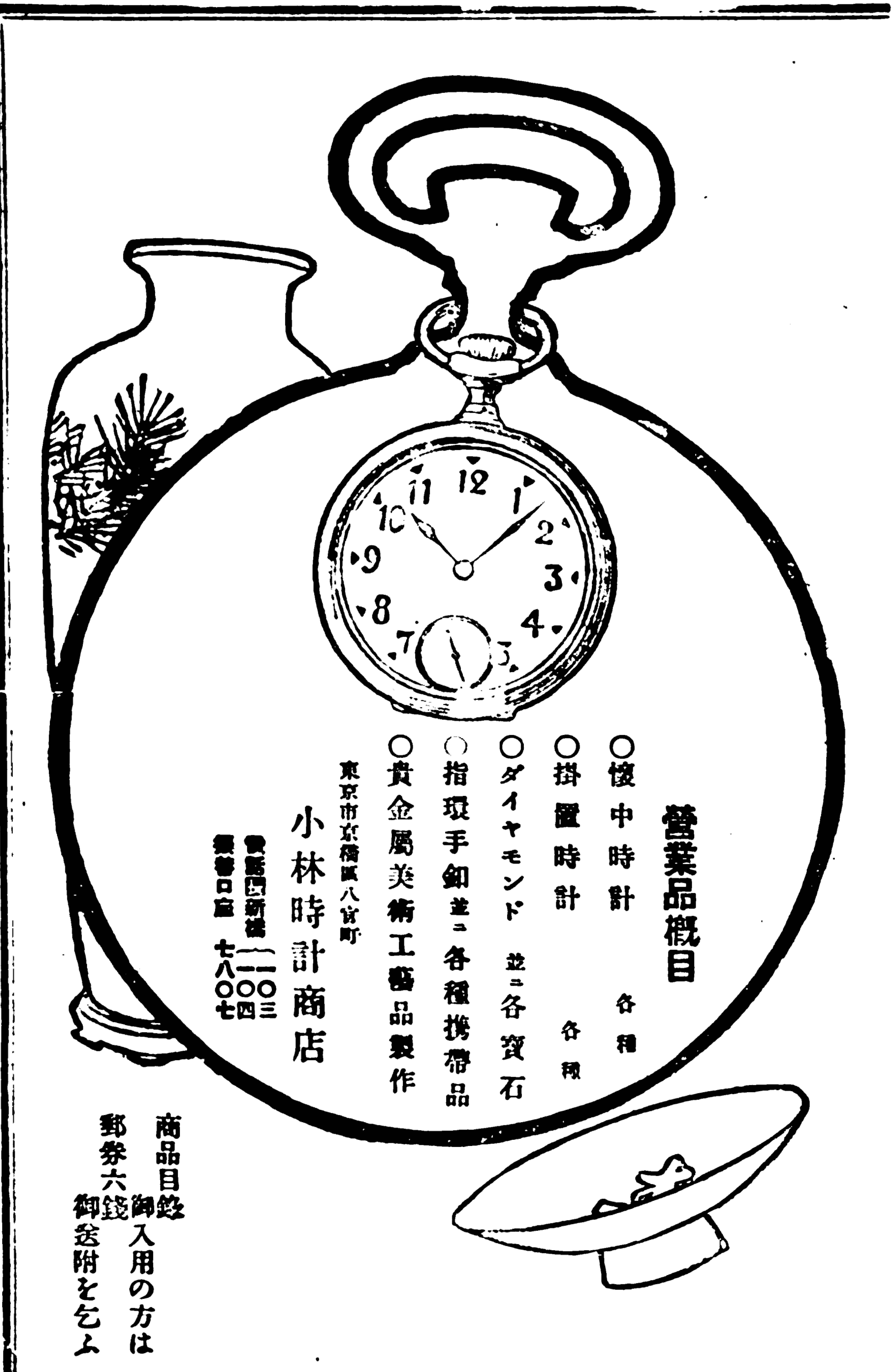
袖珍天金美本一册
紙質六百七十餘頁

特價壹圓參拾錢（正價壹圓五拾錢）郵稅八錢

幕府瓦解して維新の治に就きしは日本未曾有の大變にして、明治歷代の由來近く形跡を此間に發したり。吉田博士獨特の史眼を此方面に轉注し、博索精考、丁卯戊辰の前後十數年間の眞相を捉へて「維新史八講」の作あり。正確なる事實の上に條理ある論斷を加ふ。講說縱橫道破して些の忌憚なく、時に萬丈の氣焰生者をも愧死せしめ、死者をも蘇息せしむ。蓋し最も完備徹底せる唯一の維新史なり。

「德川政教考」は博士壯年の際「讀賣新聞」に連載して史學界を驚到せしめ、斯界伏龍の名を成したる傑作。三百年間政治文敎の由來變遷を精叙詳說し、時代思想の精髓を探り、國體國情の推移を原ぬるに、多く代表的偉人傑士を拉し來り、其言動を評隲して、褒貶殺活自由自在、意氣千古を呑むの槪あり。何れも異彩ある斯界の名著、兩篇併せ讀みて、幕府倒壞の機、王政維新の運始めて釋然たる者あるべきなり

發兌元　東京神田　冨山房　振替一〇五　賣捌　全國書店


營業品概目
○懷中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
小林時計商店
東京市京橋區八官町
電話新橋 一一〇三 一一〇四
振替口座 七八〇七
商品目錄御入用の方は
郵券六錢御送附を乞ふ



"NARCISSUS"
J. W. WATERHOUSE

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる寳品の廣告掲載は謝絶す



"NARCISSUS"

J. W. WATERHOUSE

[redacted]

中央公論



第卅三年第拾號
秋期大附錄號
第三百六拾一號

妖雲に包まれたる政界の現狀

北昤吉

一

余輩は社會政策を伴はざる軍國主義の危險なるに想到して嘗て云つたことがある「民を養はずして之をして戰はしむるは國家の自殺行爲である」と。露國が國家的自殺の既遂者たることは餘りに明白なる事實である。されど露國を嘲笑しつゝある我が國家も、果して何等國家的自殺の傾向なきか。少くとも最近に國家的自殺の未遂行爲なかりしか。余輩の疑問を以て奇矯に失すとなす樂天家は、遺書に依つて始めて子弟の厭世的傾向を覺り、地圖の彩りの變化に依つて漸く一國の滅亡を知る實證論者ならずんば幸ひである。

余輩は國民の多數を飢餓に瀕せしめて不得要領なる西比利亞出兵を敢行したりとの理由に依つて、敢て內閣諸公を以

て國家的自殺の危機を生める非國民なりとは云はない。寧ろ余輩は、動もすれば地主の代辯者ならんとする政友會と、資本家の傀儡たるを常習とする憲政會との板挾みとなりつゝも、仲小路農相が多數國民の爲めに好個組代に然髮を重く猪勇を振ふするに吝なる者ではない。寺內內閣成立の當時の社會政策の實行の豫約すら、政黨に基礎なき超然內閣の、下層階級に友を求めんとする窮餘の窮策であるとしてよりも、眞に既成政黨の罪惡を惡んで、誠實に、文字通りに、善政を布かんとせる意志に出でたものとして、之を承認すべき雅量を有する。併しながら法治的非常觀念に刺戟せらるゝ農相の岡半や增賞等を屈伏せんとする猪勇や、この明名賢相を氣取る內閣諸公の善政主義の背景に潜める高意氣は、多數國民をして西比利亞出兵に血を沸かさしめずして、米價の暴騰に對し、米價暴騰の原因と見做せられたる凡ての行爲に對し、其の日常の放縱なる生活が對比的に貧民の生活を益々悲慘ならしめたる一般富豪に對し、延いては自分等と同列ては同列以下の可憐なる者共に對し、更に延いては成金の歡樂を以て迎へらるべき資本家商人に對してまでも、滿身の血を沸かさしめた國民生活の變調とは、自から別問題であらねばならぬ。內閣諸公の勇氣や熱意やは一の事實であらう。而も又各國に於て最も威力を誇らうするに足るべき寺內內閣を首班とする內閣の下に、首相が最も悲慘措く能はざるべき事出ある以下の御實家を蔑まし得れる一大不祥事が勃發したことは嚴然たる別個の事實である。而して此の不祥事は、軍國の然國民が忍ぶべき限りを忍びて戰國、我の士氣を維持し來つた從來の歷史に背くのみならず、若し一朝國力を賭する國際戰爭に際して國民生活が威嚇せらるゝ場合、我が國民は果して冷靜に忍耐し得るやの將來の危險を示せる一大不祥事、余輩が國家的自殺の非國行爲を名けんとする一大不祥事たることとは、更に嚴然たる別個の事實である。

余輩はこゝに此の一大不祥事を仔細に且つ詳細に叙説せんとする意志を持たぬ。不祥事を不祥事として片付けるが如く叙説するには、世間自から其の人がある。政府自も國際に出張した形である。又新聞記者諸君は夫々の日頃の敏感を示すべき時こそ來れと、機に乘じたに相違ない。殊に自から良心の責なくして唯挑兇亂を好む大衆の鼓舞あり、數萬の滿出に投ぜる者も決して尠くはなかつたであらう。只管に專心して、昨日の事實を明日に傳ふる新聞紙を通じて傳へに於ての一識を傳へ知る事態は、此の事件の發敗の如きは其の徑とするのではない。況んや不祥事の發生の責任を內閣に

歡して之を糺彈するが如きは尙更ら余輩の能事ではない。之が爲めには、政權の爭奪には如何なる不祥事をも歡迎せんとする特殊の變態的心理と、政敵を攻擊するには最上級の理想を標準とし、自家の立場を辯護するには最下級の現實に訴へる特殊の政治道德を有する政黨員諸君がある。從つて此の際余輩が不祥事に關する研究は著しく制限されてゐる。其は不祥事の明細書の提出でもなければ、內閣の責任問題でもない。卽ち其は奸商を征伐する勇氣があり、下層民に善政を布く誠意ある內閣の下に、下層民の多數が、何故に善政の押し賣りを事とする內閣に信賴せずして、敢て識者の指導を待たず、政黨の聲援を乞はず、法律の保護を求めず、奸商のみならず富豪といふ富豪を、手當り次第に、征伐せんとする勇氣、否自暴自棄的無鐵砲を發揮するに至つたかといふ問題に關するものである。此は余輩の如き境遇に在る人々の好個の研究問題であるが、而も考ふれば考ふる程不可思議なる問題である。再び問ふ、勇氣あり誠意ある內閣の下に、何故に一般人民が、內閣を信賴せずして、直接行動に出でたであらうか。此の一疑問を中心として幾多の疑問が簇出する。內閣諸公の勇氣と誠意とは果して無條件的であつたであらうか。別言すれば彼等は內閣の存在の危機に瀕するゝ場合、勇氣と誠意とを棄てゝ、怯懦と不正直とを曝露しなかつたであらうか。抑も又我が政界に於ては如何なる內閣も其の聰明と勇氣と誠意とを用ふるに由なき程に根本的缺陷あるに非ざるか。而して又內閣に信賴せずして直接行動の横道を選びし一般人民は、果して訴へんとして訴ふる所なきに苦しみしことなきか。更に又歷代の內閣が勞働運動を彈壓し來りたる爲め、我が國の勞働者は團體的訓練に馴れず、其の直接行動は直ちに常規を逸して暴動と化する結果を招かざりしか。斯くして問題は極めて複雜となり重大となる。

二

余輩は先づ內閣諸公の勇氣と誠意の有無乃至程度を檢覈する必要がある。余輩は曩に哲人政治善政主義を標榜する內閣諸公の名譽の爲めに勇氣と誠意との存在を一應は承認したが、之を無雜作に承認して一般人民の責任を問ふは論理學上所謂不當假定の誤謬に陷らざるを得ない、何等內閣諸公の責任に觸れずして、騷動に關與した人民にのみ事件の全責任

を擁するは一法律の條文を金科玉條視する檢事諸君の斷定である。檢事諸君に比して法律以外に多量の知識を有し、舊秩序の維持に腐心すると同様、若しくは夫れ以上に、新秩序の確立の必要を認むる法律家ならざる識者は、檢事の論告に全き眞理を認めざらんとする傾向がある。從つて余輩は一般人民の責任を問ふに先だつて、内閣諸公の誠意の有無、並びに、若し之れありとせば、其の程度乃至性質を究明せざるを得ない。

卒直に問ふ、内閣諸公は元帥寺内伯を首相とするに適はしき勇氣ありや。勿論彼等には或る種の勇氣が認められる。大隈内閣破壊の陰險手段を見よ。内閣組織當時に於ける憲政會に對する挑戰振りを見よ。大隈雙脚侯は山縣公の援助を義足として内閣を組織せるも、侯を利用して政友會打破に成功せる山縣公は、侯の失政に失政を重ねると共に、其の義足を抜き去りて侯の惰愚を見て兩頬に意地惡き微笑をたゝへた。此の前後に於ける後藤、田、仲小路諸氏の内閣破壊の運動は殆んど目的の爲めに手段を選ばざる觀があつたではないか。既に破壊に勇なりし彼等は寺内々閣樹立の爲めに官僚特有の蠻勇を發揮したのは元より當然である。「棘道の士」加藤子は勿論彼等の蠻勇の犠牲となつた。原氏は山本内閣當時の傷痍未だ癒えずして問題の人ではなかつた。彼等は遂に山縣公の意中の人たりし寺内伯を擁立し得た。而して民間の政黨内閣論者に對しては、内閣の組織は大權の發動に依ると威嚇した。「宮中云々」の文字を示した某代議士其者等は遂に世外に追ひ去られた。殊に地方官會議の席上に於ける寺内首相及び後藤内相の憲政會を逆賊呼はりをする大膽さに至つては、勇氣の範圍を超出して、幾分逆上の氣味とまで疑はれた。其の後、昨年の總選擧に際して閣員一同の發表した自畫讃的聲明は蠻勇内閣の面目を備ふるに餘りあつた。有龍子ならずも、寺内、後藤、仲小路諸氏の治安妨害的面相を引いては、物凄内閣とでも評しやう。依之觀之、内閣諸公の勇氣の存在に就いては、毫も之を疑ふべき餘地がない。

併しながら彼等の勇氣は、果して無制限無條件のものであつたであらうか。疑問はこゝに伏在する。而して此の點に就いては、内閣諸公と雖も、其の外硬内軟的態度に鑑みて、狭心恥づる所なきを得まい。試みに内閣成立當時よりの政友會に對する態度を見よ。政友會が大隈内閣成立當時よりの怨恨に痛憤せる敵本主義より寺内内閣に好意を寄せて、殊更黨人の理由を單に政權に[illegible]なりとの非難を避けて是々非々を標榜するや、内閣は政友會を以て最も信

[illegible]なる[illegible]なる[illegible]く時に[illegible]するの[illegible]を[illegible]し、更に之に對して政[illegible]を以て[illegible]ゐんとするもの[illegible]を弄した。而も政友會が政權移動の意外の遷延に業を煑やし、去る第四十議會に於て政府の眞意に對して、是を是とするよりも寧ろ非を非とする意地惡き拘束を加ふるや、政友會の意志に反しては一日も存立する能はざるを知れる政府は、唯々として其の意志に媚び、内閣が對支外交刷新、軍備充實と共に三大政綱の一とせし社會政策的施設が悉く葬り去らるゝに及びても、豫算の編成は軍備充實を第一義とし、社會政策は必ずしも重要なる政綱に非ずとの遁辭を吐き、曩に標榜せし善政主義を忘れたるかの如くであつた。選擧法の改正の如きも天下の輿論たりしにも拘はらず、政友會の反抗を恐れて其の成案を暗中に葬り去るをも厭はず、對支外交策の如きも、外交調査會に於て原犬養諸氏の爲めに得意の偏殺政策が拘束せられて南北妥協の方針に變更を餘儀なくせらるゝ不面目をさへ忍んだ。殊に西比利亞出兵に至つては、内閣の延命策として、擧國一致を強ひ反對黨の口を塞ぐ絶好の問題として、閣員一同が熱狂せるにも拘はらず、冷々水の如き原氏の是々非々主義の最も露骨なる翻弄の對象となつて其の面目を蹂躙せられ、自主的出兵は必ずしも沙汰止みとなりたるに非ずとの詭辯を以て僅かに世間の耳目を欺かんとしてゐる。斯かる政友會に對する重ね重ねの屈辱と追從とは、内閣成立の際に於ける憲政會に對する罵詈と總選擧の際に於ける干渉と言論迫害に對する蠻勇とを對比すれば、殆んど同一内閣の爲し得る所ではない。實に寺内内閣の如きは、正に獅皮を被りて驢鳴するものと評せざるを得ない。憲政會に對しては獅皮を以て威嚇し、政友會に對しては驢鳴して哀求するが、正に其の二重人格である。

こゝに於てか現内閣諸公の勇氣と誠意の有無乃至程度は自から明かである。彼に取つては政權維持、内閣存立が根本の動機であつて、此の根本の動機を阻害せざる限り、勇氣も發揮すれば、誠意も披瀝する。即ち彼等とても勇氣と誠意は多量に持つてはゐるが、而も此等は内閣存立を條件としてゐる。されば彼等の勇氣と屈從との二元性を以て二重人格視したことが既に誤謬である。彼等の勇氣も屈從も共に政權を徹底的に執着する一元的人格の二元的表現に外ならない。若し内閣諸公にして憲政會に對して寛大であり、論客に對して筆端の自由を許したならば、總選擧の勝利すら覺束ない。之れ彼等が蠻勇を發揮した所以である。又若し彼等にして政友會の自黨本位の陋態を惡んで社會政策の實行を計り

選擧權の停止を賭して一快戰を試みたならば、内閣は立どころに瓦解する。之れ彼等が政友會に對して忍從に徹した所以である。要するに彼等の勇氣や誠意は條件附きである。下層民は斯かる條件附きの勇氣や誠意に對して信頼するには餘りに生活を惱んで居る。斯くて彼等は内閣諸公の鐵腕政治の標榜や善政主義の呼號にも拘はらず、自から解決を求めて、羊の如き柔順を棄てゝ、暴虎の兇威を逞うするに至つた。

三

併しこゝに一の疑問が生ずる。内閣諸公の勇氣と誠意とは彼等の饒舌にも似合はず、極めて信頼し難き條件附きのものであるとしたならば、生活に追迫せられつゝある國民は、何が故に内閣以外の政黨に信頼しなかつたか。何が故に政黨に信頼して自家の生活問題の解決を求めなかつたか。此は當然の疑問なるが如くして、實は甚だ然らざるものである。蓋し日本の政黨は生活の脅威に襲はれつゝある下層民とは徹頭徹尾沒交渉なるではないか。歐米の或る種の論者は云ふ。議會政治は君主及び貴族等の特權の濫用に對する中產階級の反對の結果に爲つたものである。從つて議會政治に關係ある政黨は第四階級の生活とは沒交渉である。財産と自由とを政治問題とする政黨は下層民の胃腑の問題とは無關係である。よし普通選擧制が實施せらるゝに至つても、被選擧者は下層階級を踏臺として、中產階級若しくは上層階級の間に位せんとする傾向がある、從つて此の制度を以てしても、下層民の利益は決して代表されるものではないと。此は一面の眞理である。果して然らば直接國稅拾圓、若しくは男子滿廿五歳と云ふが如き不合理極まる制限の下に選擧權を行使せしめらるゝ現狀の我が日本に於て、政黨が下層民の利益と沒交渉なるべきは識者を待たずして自から明かである。現に各地に於ける總選擧の例に見らるゝが如く、政友憲政兩黨共に、土地の富豪若しくは成金等を擁立して一票を爭ふに熱中するに拘はらず、此度の大暴動事件に對しては、原氏は盛岡に形勢を觀望し、加藤氏は輕井澤に保養し、犬養氏は長岡に避暑し、院外團の機關のみに一任したるは、政黨と下層民との無緣を立證して餘りがある。實に我が國の政黨首領は[illegible]には、[illegible]として自ら北馬し、多數國民が地獄の苦しみを受けつゝある生活

の危機に際しても、猶好個の學術長養の時期と心得てゐるのである。官僚派は宮中と府中と貴族院とを勢力の中心とせるに對して、政友會は田園の地主に、憲政會は都會の成金に各々勢力の中樞を定めて、天下三分の形を成しつゝある。而して官衙、會社、學校等の腰辨の最下級者と田園の水呑百姓と都會の勞働者とは、以上の三勢力以外に立ちて、二六時中生活の壓迫を受けつゝ、危き一日々々を過しつゝある。又此等以外に、最も危險なる階級が各地に散在してゐる。彼等は肉體的勞働をなすには餘りに怠惰なる習性を有すると共に、肉體的勞働が無限の輕蔑を受くるが爲めに自から之に從ふを恥とする意氣地を有し、且つ勞働の結果が大部分無爲遊食の地主と資本家に掠奪さるゝことを不當とする權利思想を有するが爲めに、市井の間に横議を逞ふして兇險亂を好むの風を流布しつゝある。此等の處士階級は、先の腰辨階級及び勞働階級と共に、最も生活の壓迫を被りつゝあるに拘はらず、官僚も政黨も共に彼等の生活とは沒交渉に徒らに政權の爭奪を事としてゐる。彼等は如何にして政黨に信頼して、生活問題の解決を期待することが出來やう。

勿論官僚の優秀なる者は仲小路氏の如く下層民の爲めに努力する勇氣と誠意とを有せんも、政黨に基礎を有せざる内閣が、政黨の利益を顧みずして、下層民と提携せんとすれば、内閣存在の基礎を危くする。下層民は到底斯かる官僚に多くを期待することが出來ない。現に去る四十議會に於て政府の企てたる社會政策的施設が無雜作に撤回せられたではないか。若しまれ政黨に至ては、地主と資本家とに對して娓々として尾を垂るゝのみにて、下層民に對しては風馬牛全く相關せず、當然爲すべき選擧法の改正をも爲すの誠意なく、外米に對する關税の撤廢は勿論、通貨の收縮に依つて下層民の生活費を低廉ならしむる程の善根すらない。斯くては腰辨階級が如何に從順に、勞働階級が如何に無智なりとて、自から解決を求めて風雲を捲き起す危險あるは自然の數である。況んや市井の間を浪々して横議を事とする處士階級が、教唆煽動するに於てをや、當局者は今回の米騷動に就いても、暗に新聞記事の煽動的なるに一部の原因を求めてゐるが、記者の多くは腰辨階級の從順なる心事よりも寧ろ處士階級の險惡なる心事を有する以上、動もすれば腰辨階級や勞働階級と聲息を通ずべきは想察するに難くはない。由來革命の導火線たるものは何等正業を有せざる浪人又は讀書兒なることは歷史の常である。維新の革新は各地を浪々する浪人に依つて端緒を啓き、支那の革命も亦、白面の讀書兒に依つて

火を點せられた。されば官僚と政黨とが下層民に對して冷淡を極むる結果は實に恐怖すべきものがあるのである。實に我國に於ても腰弱階級と勞働階級とは、遂に虚上階級と提携する傾向がないではない。下層民が從順にして無智なる間は、それは眠れる獅子である。されど彼等が虚上階級に覺醒さるゝ時は、獅子が鬣を振うて立ち上る時である。眠れる獅子は狐狸も之を愚弄し得る。鬣を振うて咆吼する獅子の雷聲は百獸を戰慄せしむるに足りる。此の時に至つて官僚と政黨者流とが右往左往互に通路を爭ふ狐狸たらざるやは、何人か之を保證し得るか。露國を見よ。ツァールとツァールを擁護せる專制政治家は眠れる獅子を久しく愚弄し來つた。而も卑怯なる腰弱と無智の農民とが一朝レーニン、トロツキー等の懐上に煽揚せられて、今日の勞農會と化して政界の一角に獅子吼するや、通路を爭ふ憐むべき狐狸の醜態は如何なりしか。

誤解すれ勿れ、余輩は日本の官僚と政黨員とを狐狸に比して、彼等を故意に誹謗せしめんとする者ではない。唯余輩は官僚と政黨とが下層民を無視して、政治を私議し政權を私有せんとするは、國家の深憂たるのみならず、彼等自身に取りても危險至極なることを警告すれば足るのである。余輩は素より日本國民の從順を知り、愛國心、忠誠を識る。されど日本國民は從順なると共に、自他の生命を輕んずる弊あり、自殺と他殺との數に於て歐米列國を凌駕せるの伊太利國民以上なりと云はるゝではないか。然らば其の所謂從順も休火山的にして、時に爆發する危險なしと云ふことが出來ない。窮して亂せざるは獨り君子の能くする所、東洋の君子國とは云ふものゝ、日本人悉くが君子ではない。窮境に陷られ、妻子が空腹に泣く時――而も其の原因が天災に非ずして惡政にある時、誰か能く亂するなきやは、誰か之を否定し得べき。國民の多數を不斷の緊要狀態に陷れつゝ常規を逸するなきを望むは、餘りに難きを望むものである。民の如きは恒產なきときは恒心なし。苟くも恒心なきものは放逸邪侈爲さゞるなしとの孟軻の言は正に爲政者の銘たるべきものである。八月半ばに勃發せる米騷動を見よ。僅々漁夫の女房、嬶共の火狀となりて、端なく全國の大都市に炎々たる火焰を揚げたるは、畢竟何が故ぞ。日本が建國以來未曾有の順境に立ち、一部の國民が黃金の洪水に浴しつゝある間、知らず大部分の人民が、國家の前途を暗澹たらしむる不祥事の發生は何が故ぞ。物價暴騰の國民性の然らしめし所もあらう。……の運動的影響もあらんも、彼等其の他の者に對する國民の反抗心もあらん。又殊に露國革命の暗示作用もあ

りしならん。されど此等は要するに誘因である。眞の原因は官僚の無能と政黨の冷淡とに對する國民の不信任にある。切言すれば日本の政治の無力が不祥事の最大原因である。然らずんば、下層民の自主自決と云はんよりは、自暴自棄的無鐵砲は到底說明することが出來ぬ。

四

余輩は我が國の政界の現狀を見て、其の病患が意外の所に潛むを憂ひざるを得ない。問題は政黨の冷淡や官僚の無能ではない。問題は政治其物の無力なることである。詳言すれば如何なる人物が如何なる系統の內閣を組織するも、到底內、一般國民の生活を保護し、外、諸外國に對して國威を發揚すべき政治を爲す能はざることである。而して此は云ふまでもなく政治の中心勢力が確立せざるが爲めである。先づ我が政界を大觀するとせば、何人も宮中、樞府、貴族院、軍隊を中心とする官僚閥族の一派と衆議院を兩斷して各其の一を保つ政友會と憲政會との鼎立の勢ひを看取せざるを得まい。官僚閥族の利益は勿論黨人の利害と衝突する。黨人相互の利害も亦決して兩立しない。併しながら三勢力鼎立せる儘では如何なる一勢力も內閣を組織することは出來ない。よし强いて內閣を組織し得ても、其の抱負を實現することは思ひも寄らない。從つて我が國に於ては衆議院の二勢力が合體するか、衆議院の何れかの一勢力と官僚派と提携するかを外にしては、內閣の組織も政權の運用も到底不可能である。衆議院の二勢力が合體して貴族院と戰ひ樞密院を壓し更に餘威を以て軍閥を制するは、政黨內閣論者の日夜忘る能はざる理想である。併し此の善美なる理想が實行圈內に齎らされたのは、議會創まりてより前後唯一回である。而も唯一無二の隈板內閣は官僚の毒計と民黨諸氏の政治的訓練の缺乏に出づる我見と猜疑との爲めに、誕生後直ちに頓死した。最近に於て比較的政黨內閣の體を爲せるものを求むれば、西園寺公を首相とせる數次の政友會內閣であつたが、閣員に黨員以外の異分子を包含するは元より、常に官僚に使嗾せらるゝ貴族院や軍閥の毒計の爲めに不幸短命に了つた。斯の大隈內閣の如きは、表面は侯の家の子郎黨を率ひて立てるを以て如何にも純政黨內閣なるかの觀はあつたが、元來が山縣公の政友會破壞の敵本主義の副產物であつたから、

一に官僚軍閥に驅使せられ、其の當時より云へば、西園寺内閣よりも遙かに政黨内閣の理想に近さかつてゐた。山本内閣の如きは長閥に向つて最後の打撃を加へんとの雄心を懷いて薩派と政友會と相結んで現はれたものであるから、閥族の正統派の致命傷を與ふべき筈であつたが、遂に貴族院の爲めに葬り去られた。山本内閣が衆議院に於て反對黨に打ち勝ち、シーメンス事件に義憤を起せる議院外の民衆の暴動を厭伏し、新聞紙の一齊射撃に對しても敢然として恐るゝ所がなかつたにも拘はらず、貴族院に於て海軍豫算を削減せられて直ちに瓦解の運命に陷ゐつたことは、斯の大隈内閣が大浦事件の痛手にも懲りず、内閣を改造して徹頭に居据りを繼續したるに際し、貴族院の鬼蝕に類する彈劾論の爲めに遂に内閣投げ出しの最後を遂げたことゝは、衆議院に於ける絶對的勢力も官僚派の貴族院に於ける勢力に堪ふる能はさる明證である。官僚派と二大政黨との鼎立の政界の現狀に於ては、二大政黨が提携して官僚派を威壓する雄心なき限り、絶對多數の一政黨を基礎とする内閣か、よし官僚の一角と握手して内閣を組織したりとて、貴族院を根據とする官僚軍閥の毒手を免かるゝことは出來ない。從つて現狀に於ては政黨内閣の樹立の如きは、殊に第四階級の解放を計る社會政策の實行を目的とする國民的内閣の樹立の如きは、徹頭徹尾痴人の夢であらねばならぬ。

然らば貴族院を牙城として反田高内の勢力を擁らす官僚派其物を中心とする内閣は如何。余輩は最近數十年の政治史に鑑みて官僚の破壞力の偉大なるに比して、其の建設力の意外に薄弱なるに吃驚する。官僚閥族の政黨操縱時代の多年の後、官僚と政黨との默契となり妥協となり、更に進んで桂公の所謂情意投合となつたことは、孤立しては官僚も極めて無力なりしことが歴史的に實證されてゐるではないか。伊藤公の政黨組織の眞意は暫らく問はない。少くとも桂公に於ては、政黨の操縱に依つて到底政權を運用する事は出來ざるを知り、遂に妥協となり情意投合とまでなつたが、斯くては自から得る所よりも失ふ所多くなき少人の爲めに救さるゝ所も亦た痛感して、山縣公の感情を害するをも顧みず、斷然同志會を組織して有力なる政治をなはんとしたことは、疑ひない事實であらう。余輩は桂公を以て當代唯一の政黨政治に意ありし者とは認めぬ。併し彼の政治の實驗が、遂に彼をして官僚派の一角に擴守するを止めて、國民と共に國民的政治を行はんとする奮發を一大發したることは有り得べき事であらう。此の桂公の實驗は明かに官僚の無力を實

[illegible]受けずば、殆んど一事をなす能はざる狀態にある。現に衆議院と貴族院と樞密院との寵兒たる寺內內閣が、政友會に對して如何に怯懦なるかを見れば解る。官僚の寵兒にして、而も犬猿啻ならざる政憲兩黨の爭ひに漁夫の利を占め得る地位にありながら、在職二年、常に政友會に迎合し左支右吾、曠職の責を免れ能はざる程の無能を發揮し、更にサーベルの威力を侮辱すること最も甚だしき窮民の蜂起を招くとは、官僚派の無力を最も雄辯に最も露骨なる實物教訓を以て證明したるものと云はざるを得ない。上杉博士の憲法論は超時間的眞理として天壤と共に窮りなく、高閣に光を放つかも知れない。然れども、政治の實際は、時代錯誤の官僚政治家を民衆の嘲笑の渦中に投じつゝあるを如何。果然――官僚は政黨內閣を毒殺するに有力にして積極的政治に對しては極めて無力である。而して政黨もまた、官僚政治家の手足を縛して立往生を餘儀なくせしむるに有力にして、官僚派の金城鐵壁を衝いて國民的政治を行ふには極めて無力である。而も如何なる內閣も命ありての物種である。政黨は貴族院にありて猫の如く、官僚派は衆議院にありて同じく猫の如くならざるを得ぬ。姑息なる微溫なる政治はこゝに由來する。一括して政治の無力と云はずして何と云はう。重ねて云ふ、問題は官僚の無力に非ず、政黨の姑息に非ず、我が國の政治其物の無力である。さもあれ生活の壓迫に苦しむ下層民は、知らず、何れの邊に向つて其の苦悶を訴へんとはする。民間の識者に訴へんか。

多くは官僚と政黨の傀儡たるを如何。若し夫れ傀儡たらざる人に訴へんか、筆端の拘束を如何。然らば國家が高祿と榮稱と閑暇とを以て、眞理の研究を一任しつゝある大學教授の一團に訴へんか。俗事に容喙するは學者の恥づる所なりと超然たるを如何。剩す所は慈善の一事か。而も民衆は漸く醒めつゝあるに非ずや。醒めつゝある民衆に對して慈善呼ばりは、獸王の面前に麵麭を投ずるものに非ずして何ぞ。斯くて依然として處士橫議の階級が腰辨と勞働者の不平に乘ずる危險がある。歷史は繰り返す、一回せるものは二回三回せざるも保せない。世界の神經は共通す、一國の神經に起れる興奮は他國の神經の興奮をも促がす。斯かる危險に際して政治の無力とは何事ぞ。禍脚下に生じて遁路を求め得るか。

我が國の政界は今や正しく妖雲に包まれつゝある。否時に雷光の閃くを見る。疾風と暴風と百雷との一時の襲撃を恐

怖する者は、[illegible]く妖怪の去來するを見よ。

五

余輩は十八世紀的天賦人權說を信條として官僚政治を呪んとする者ではない。又素より政黨政治を以て國體を危ふくするとなして之を恐怖する者でもない。政治に古今不變の定則はない。要は國民の歷史と國民の要求と國民の發達の程度とを參照して時勢に適切なる政治を行へば足りる。而して此の目的の爲めには、政府の形式は何れなりとも、政治的勢力の中心を確立し、此の中心より生れ來たる有力なる政治を行ふべき必要がある。如何なる時代、如何なる國民に於ても、最も恐るべきは、政治的中心勢力なく、有力なる政治を行ふ能はざることである。支那の憂は實にこゝにある。現今の歐洲の悲劇も亦、實にこゝに因する。而して反對に、獨逸の強み、米國の強みは、其の政治的中心勢力の儼乎として確立する事實にある。然るに既に述べし如く我が國は政治的中心勢力の不確立の爲めに、一大危機に迫りつゝあるではないか。一部の憂國者が擧國一致を叫ぶのも、實に此の危機を豫感せる結果に外ならぬ。問題は唯一である。政治的中心勢力の確立の方法の研究である。茲に勇氣あり誠意ある內閣の下に一大不祥事の發生せる所以を尋ね來つた余輩は、此に至つて、無力なる政治を有力ならしむる唯一の方法として政治的中心勢力の確立を攻究すべき必要に迫つて來た。

政界の妖雲を排して天日の赫々たるを仰ぐ所以の方法は、國民が政治的中心の確立を要求する熱意に比例して明かになつて來る。必要は法則を生むとは、此の場合に於ても、例外なく適用さるゝ。此の際或る階級的偏見には囚るゝ者は、到底此の問題を攻究すべき資格がない。階級的偏見に囚はれ、切々たる人爲を以て中心的勢力の確立を計るが如きは、勞して功がない。官僚派の無能、政黨の無策が明かに之を告白してゐる。惟ふに此の問題の解決は、寧ろ切々たる人爲を棄て、有らゆる階級の階級的要求を解放して、各階級間の勢力の衝突軋轢の裡に自然に其の歸趣を見出すの外はない。軍閥をして其の軍閥的要求を貫徹するに勇敢ならしめよ。貴族をして其の貴族的特權を擁護するに汲々たらしめよ。政黨をして其の黨勢擴張に熱中せしめよ。而して勞働者をしてその利得分配の餘りの不公平を矯めんとして企つる[illegible]

[illegible]級をして横暴を逞しふせしめよ、斯く各勢力の相搏ち相摩する間、勢力の均衡は自然に保たるゝであらう。

然るに不幸にして現狀は全く之に反してゐる　軍閥的要求の貫徹は勇敢である。貴族的特權の擁護は露骨である　政黨の黨勢擴張は惡辣である。富豪特に成金の非倫理消費は放縱である。而も腰辨階級と勞働階級とは其の要求を滿すべき何等の自由がない。殊に處士階級に至つては、多くは、嘖倣すべき警視廳備附けの危險人物帳の甲乙丙各種の何れかの合格者たるべき名譽を有するのみであつて、處士階級唯一の特權たるべき筆舌の自由は徹頭徹尾蹂躪せられつゝある。階級的勢力の發揮、階級的要求の表白は餘りに片手落である。物平を得ざれば則ち鳴る、從順なる腰辨諸君は可憐なる妻子に人生の行路難を呟き、勞働者は滿腔の不平を酒に遣り、而して處士諸君は、塹壕内の勇士の如く、巧みに法律の危險區域を避けつゝ、筆舌を武器として軍閥と貴族と富豪とを狙擊し、機會あらば腰辨と勞働者とを率ひて敵陣を突破せんとしてゐる。現に今回の騷擾は單なる米騷動ではない。若し米價の廉價のみが目的ならば、米商ならざる一般富豪の襲擊官衙の破壞其他掠奪放火の如き暴行は、何に依つて說明する。余輩は寧ろ今回の騷擾に於て一種の階級戰的色彩を存取せざるを得ない。別言すれば、軍閥と貴族と富豪と黨人との飽暖階級に對する腰辨と勞働者と處士との飢寒階級の反抗運動を存取せざるを得ない。若し斯かる觀察にして誤なしとせば、今回の不祥事は軍閥と貴族と富豪と黨人との教唆(敢て意識的とは云はず)に依る腰辨と勞働者と處士との共犯なりと云はざるを得ない。現に黨政會は政府の抑壓政治の致す所と強ひ、政府は政黨が社會政策の實行を妨げたるが爲めなりと責任を轉嫁し、又識者は阪神地方の成金等の非倫理的行爲の罪と稱してゐる。故に此等の主張を綜合すれば、少くとも官僚と黨人と富豪とが夫々責任を分擔せざるべからざることゝなるではないか。

誤解する勿れ、余輩は今回の不祥事を誇張して、殊更ら階級戰を叫ばんとする者ではない。階級戰は近世社會の自然の產物たる觀があるが、其は國家の爲めに憂ふべき現象たるに相違ない。殊に國家興亡の國際的危機に際して、兄弟墻に鬩ぐが如きは最も戒心すべきことである。斯かる際に於ける階級戰は國家的自殺に了る惧れがある。現に露國の

如きは戰時を利用して階級戰を敢行したが、階級戰の勝利者たる勞農會は國家を墓場としてこゝに凱歌を揚げつゝあるではないか。されば國家の大事に際して階級戰なからしめんが爲めに、爲政者並びに國家の上層階級たる者は、常に各種階級の自然の要求を表白せしめ、各階級の勢力の自然的扞格の裡に政治的中心を確立することを怠らざらんことが肝要である、若し階級の自然的要求を壓迫せば、不平の激する所、最も不自然なる又最も危險なる方法を以て要求の貫徹を企つる結果を招くものである。物平を得ざれば鳴る。餘りに甚だしき人爲的壓制は一種の教唆犯を構成することは今回の不祥事に於ても十二分に看取し得らるゝ。されば余等は腰辨と勞働者と處士との階級に一層の自由を與へて、不祥事の再發を防ぐと共に、各階級の勢力の自然の權衡に依つて政治的中心を確立する必要を認める。此の際自由と解放とは唯一の安全辨である。妖雲を排して天日を望むの方法は、到底之を外にして求むることは出來ない。

六

以上余等は政治的中心勢力の確立の方法として各種階級の自然的要求の解放を主張したが、以下進んで其の内容を述べんと欲する。第一の必要は普通選擧制の實施である。今日の選擧制度が不合理不當なることは、官僚も各政黨も之を認めてゐる。元來衆議院の性質として國家的經綸の識見を有すると共に各種階級の利益を公平に代表すべき人々を網羅しなければならぬ。今議員の名譽の爲めに假りに國家的經綸の識見は承認するとしても、今日の議員が各種階級の利害を公平に代表せざることとは何人と雖も異論がないであらう。議員の大多數は地主、資本家、辯護士、退職官吏、老朽記者である。腰辨と勞働者と處士とは殆んど代表者らしき代表者を有しない。元より代議士たる者は此等の階級をも眼中に置くには相違あるまい。中には言ふ能はざる階たるべき人々の爲めに代辯せんとする俠氣に富める者もないではあるまい。されど自から壓迫せられたる階級に在りて感ずる要求と、斯かる階級以外に在りて感ずる同情との間には多大の距離がある。彼特別階級が直接其の代表者を出さずとも其の階級の利益が公平に代表せらるべしとの主張にして眞理ならば、當然[illegible]がある。[illegible]の餘地がある。蓋し超然内閣の諸公は[illegible]を標榜し、同

家本位の政治を行ふべしと主張しつゝあるではないか。故に若し當然之等を危險視するならば、必然に資本家が故に現在の代議士の代表權を危惧すべき理由がある。直接國税拾圓の制限の如きは、或種の選舉人を政治の圏外に放棄せんとする貴族富豪其の他の第三階級の特權の濫用に外ならない。從つて現在の如き極端なる制限選舉制は舊來の階級政治貴族政治の遺風に過ぎない。法律は公民國家の理想にまで進み、貧民と雖も貴族と同一の人格者として待遇せられつゝあるが、政治的自由なき以上、貧民は政治的には一個の人格者として成立しない。而も貧民が犯罪を爲す時は貴族富豪と同一の法律行爲の能力者として同一の刑罰を科せらるゝとは奇怪千萬であらねばならぬ。法律行爲の能力に於ては嚴然たる人格者と見做され、高が隣村の同胞に一票を投ずる丈けの政治的能力に於ては、非人格者として取扱はるゝとは餘りに甚だしき矛盾ではないか。

元來納税の多寡を理由として選舉權を制限するは、投票を税金に依つて買收し得る商品視する遺習である。此は英國に於ける議會政治の發達の痕を見れば自から明かである。假りに一歩を讓つて納税が政治的自由の條件たることを合理なりとせば、今日血税の無能力者が議會に出でゝ國政を議するは、如何なる理由に依つて是認せらるゝであらうか。一身を國家の祭壇に捧ぐる獻身的行爲は、高利貸や相場師の納附する拾圓の端金よりも、政治的自由を得べく無效力なるであらうか。徴兵忌避に依つて血税の納附を免れたる貴族の子弟が、貴族院に據守して自家の特權を濫用するを是認しつゝ、家郷の老母と病妻とを飢に泣かしむるをも顧みず、慨然として決死隊に加はることを辭せざる勇敢の國士に向つて、政治的權利を否認する法律家あるならば、寧ろアリストテレースの學説を引說を引用して奴隷の存在を擁護し、國際法の制定に反對して捕虜の虐殺を主張すべしである。

或る論者は現行制度以上に選舉權を擴張し若しくは普通選舉制を實施するならば、選舉民の知識の低下を如何せんと危惧するが、之れ亦、謂れなき危惧である。余輩は反問する、今日の有權者は果して知的修養を備めるか。又有權者以外の人々は果して知的修養に缺くる所あるかと。元來有權者に向つて知的修養の高きを求むるは、選舉權の行使が必ずしも深く政治の實質に觸れず唯候補者の政見を聽き其の人物の良否を知りて信頼すべき代議者の爲めに一票を投ずれ

ば可なる事實を知らざる者である。殊に選擧無資格者中の腰辨階級と處士階級とに至つては、田舍の地主や都市の小商人に比して遙かに政治的知識を有してゐる。彼等が腰辨たり處士たるは恒產なくして地主たり資本家たる能はず、又身體薄弱なるか、一種の威嚴感あるが爲めにか、肉體的勞働に携はらざる者なれば、其の賴む所は多少の才學である。從つて彼等は選擧權を行使するに最適任者と云はざるを得ない。假りに數步を讓りて今日の無資格者が知識に於て劣りたりとするも、選擧權の極端なる制限が投票買收の弊風を醸成し、之が爲め幾多の重大なる政弊を生じつゝあると比すれば、普通選擧と制限選擧との理否自から明瞭である。現在の制限選擧制に於ては多額の選擧費用を要するを以て、候補者たる者は地主若しくは資本家に限られ、之が爲め議會は豫算に於ても立法に於ても常に下層階級に不利益の結果を招いてゐる。現在の各政黨が選擧法の改正に對し、社會政策の實施に對し、官僚派以上の冷淡を示しつゝあるは其の實例である。選擧法の大々的改正が嘗て山縣公の手に依つて企てられ、工場法の制定が公の意を奉する官僚に依つて策せられたるが如きは、日本の政黨が官僚以上に人民の敵たるを示すものである。之れ一に現在の制限選擧の弊害である。其の他制限選擧の最大弊害は代議士が選擧區に多額の選擧費を支出するを要し、官僚との政爭に於て、議會解散を以て威嚇せらる場合に、勇敢なる鬪爭を爲す能はざる結果となる。之れ今日に於て政黨が益々無力となり、反對に貴族院が益々有力となる原因である　故に金權政治の弊害を除き、訴ふる所なき飢寒階級の要求を表白せしめ、官僚と貴族との横暴を制するには、現行の制限選擧制度を改除して普通選擧制を採用するの外はない。斯くして政黨は始めて國民生活に根帶し眞の國民的政治を爲すべき政治的勢力の中心を確立することが出來る。今日の政黨に依る政黨內閣の如きは、啻に識者の是認する能はざるのみならず、下層民も亦之を歡迎することが出來ない。

或は普通選擧制を實施して腰辨と勞働者と處士との飢寒階級の多數を議會に送るは暴民政治の端を啓くべしと危惧する論者もあらう。併しながら此は謂れなき危惧である　勿論或る種の民本主義者の如く衆議院の多數決を絕對的に神聖視し、貴族院の盲從を強ひ、更に之に依つて大權の發動までも制限せんとするが如きは、慥かに危險を伴ふてゐる。されど余輩は普通選擧制の實施は必ずしも貴族院の特權を否定すべき理由ありとは認めない。衆議院が各種の生活階級の

代表者に過ぎざる時、動もすれば作爲的に政黨の要求を本意として國家百年の大計を忘れしむる危險がないではない。故に余輩は今日の貴族院を改正して、國家に功勞あり政治に經驗ある有能の士を以て滿さしめ、衆議院の誤れる決議に對して反省を促し得べき餘地を存せしむる必要ありと認める。又大權と衆議院との關係に於ては、極端なる民本主義者の如く政黨の實體如何をも顧みず、大權の發動が常に衆議院の多數黨の希望と一致せざるべからずと要求することも不可であり、又憲法の形式的解釋を楯に取つて大權の發動は絕體的に自由なりとして、元首の意志と議會の多數者の意志とを分離せしめんとすることも不可である。日本の政治が常に例外なく衆議の多數黨の意志通りに運用せられざるべからざるならば、天皇存在の意義は勿論貴族院存在の意義も疑問となる。殊に立法並びに豫算の編成に於て議會の協賛權と天皇に裁可權とを分離した憲法の精神とも背馳する。故に余輩は此の點に於て過激なる民本主義者の衆議院萬能論に反對する。而して又憲法の形式的解釋を能事とする論者の、爲めにする所ありて唱ふる議論の如きは、議會の多數黨の意見を妄りに無視するもの、議會存在の意義を薄弱ならしめるは辯を待たぬ。余輩は必ずしも衆議院の多數決の絕對的神聖をも主張せず、大權の發動が衆議院の多數黨の意志と異なる方向に向ふことを以て天皇の神聖なる所以とも信じない。要は一面君德の養生に依り、他面一般人民の政治的訓練に依り、天皇の意志と議會の意志とが自然に一致し、君民同治の實を擧ぐることを希求するの外他意はない。されば余輩が殊更ら大聲に普通選擧制の實施を要求するは、國民の各階級の代表者を議會に送り、政黨をして一層有力ならしめ、各種階級各種機關の勢力を自然に發揚せしめて、政治の中心を確立せしめんとする意志に出づるのみである。現在に於ては各階級各機關共に互に相殺して何等補足の任務を盡さゞるではないか。斯くて如何にして政治の無力を救ひ得やう。又如何にして政治の中心を確立し得やう。政界の妖雲は官僚の無能と政黨の無力と、飢寒階級が訴ふる所なくして、自暴自棄的盲動に出でんとする事とに依つて發生するではないか。

六

普通選擧に次いで必要なるは言論の自由である。言論は元來實行の先驅たるべきものである。實行が動もすれば現實

の事情に拘束せられて自由なる能はざる時、之を刺戟し之を指導して一段の高所に至らしむるものは、實に言論の力である。此は殊に當局者の政治を批評する識者並びに反對黨の言論に於て見らるべき現象でなければならぬ。勿論識者並びに政敵の言論は情實に拘束せらるゝ政府當局者より見れば、時に苛酷の要求ともなり、甚だしきは施政の妨害ともならう。併しながら之あるが爲めに政府の施設は國民の監視と批評との爲めに大過なきを得る利益もある。然るに我が國の歴代の内閣は民間論客の言論に對して餘りに惡意を以て望み、謂れなき拘束を事としてゐる。當局者は政府と國家とを混同し、政府の存立を危ふする言論は直ちに國家に危險なる言論なるかの如く錯誤し、之に對して壓迫を事とする。之が爲め民間の論客は如何なる政府にも反對する惡弊に陷り、今や言論は政治の指導たり啓發たらずして、政治の阻止となり妨害となつてゐる。今や政論家の政論は何れも皆、建設的批評に非ずして破壞的批評である。誠意ある鞭撻と勸告とは論壇に跡を絶ちて、冷嘲と惡罵とのみが論壇に跋扈してゐる。こゝに亦、各種機關の補足と協力とがなくして、相剋と相殺との新たなる實例がある。こは主として歴代の内閣の責任であるが、言論を業とする人々にも一部の責任がある。此の責任の分擔は何れにもせよ、當局者の言論壓迫は餘りに辛辣である、殊に寺内々閣成立當時の無謀なる言論の壓迫は、國家の將來に危險を醸す程の失態であつた。今次は大隈内閣の失政を思ふの餘り、現内閣の成立に對しては、惡意なくして承認するの雅量を有した。加之、之に對して政黨内閣の企て及ばざる或る種の政策の遂行を希望した。而して現内閣は例へば教育會議に於ても大の成績を擧げんとしてゐる。併しながら現内閣の言論壓迫に至つては甚大の罪惡である。今日政黨政派に關係なく、誠心誠意國家の前途を憂ひつゝ論陣を張る論客も、現内閣の峻烈なる言論迫害に至つては、個人の迷惑としてよりも、寧ろ國家の將來の爲めに深憂なきを得ない。現内閣は昨年露西亞革命の勃發に際して、其の危險なる影響を過大視して無謀なる言論の迫害を加へ、更に今回の米騷動に際しては、露西亞の專制政治にも有るまじき程に言論の絶對的封鎖を試みるに至つた。之れ國家の一大不幸事に非ずして何であるか。

物其の平を得ずんば鳴る。一切の不平を説くるを許さずとせば、之れ却つて不平の爆發を助成するものである。由來言論を武器とする言論戰は政爭を戰場とする投票戰と共に、古の政權爭奪の爲めの腕力戰の進化に外ならない。然るに現

[illegible]とを以てするとは。之れ明かに腕力沙汰ではないか　余輩は現内閣諸公は口舌に巧なる[illegible]答なるに、何故に言論に對するに言論を以てせざりしかを怪しまざるを得ない。論爭に武力を用ひずば、過激思想横流すべしと危惧するは、之れ即ち言論の範圍に於て穩健着實の思想が驅逐せらるゝことを言明するものではないか。而も内閣諸公の留意せざるべからざることは、人間は言論を抑壓せらるゝも、必ずしも意志を抑壓せらるゝものに非ざることである。余は言論の無謀なる抑壓の恐るべきことを内閣諸公に警戒せんが爲めに、日露戰爭當時、露國内相プレヴエを暗殺せるサソノフの言を引用する。「露西亞政府は吾人に禁ずるに言論の自由を以てする。言論なくんば吾人は意志を通する能はずと思ふか。人類は言論なくとも意志を通じ得る靈性を有する。」彼は實に斯くして爆裂彈の使用者となつた。之れ豈に戰慄すべき事例ではないか。露國は積り重る政府の虐政と、此の虐政に痛憤するサソノフの同類に依つて今日あるに至つた。余輩は過日新聞紙の騷擾記事差止めの命令を聞きて一度は戰慄した。併しながら流石は露國と異なる日本であつた。春秋會の警告に聞いて、水野内相が無法なる命令を撤回するに至ると共に、余輩は先の戰慄の念は歡喜の情に變じた。

如何なる國家、如何なる時代に於ても、階級の利害の衝突と政權の爭奪とは、全然之を免るゝことは到底不可能である。而も政治の要は此の衝突と爭奪とを緩和し國家の秩序を破壞せしめずして、政治的勢力の中心を自然に定めしむるにある。之が爲めには議會に各生活階級の代表者を送ることと、言論の自由を保證することが絕對に必要である。若し此の二途に出でずば、寒飢階級は遂に自暴自棄となり、處士階級は益々兇險亂を好むに至るであらう。余輩は現内閣の言論彈壓の急なると正比例して、民間の論客が益々横議を逞しうし、不祥事の勃發に際しても、仲小路農相の誠意にすら何等同情する所なく、或は却つて現内閣の斷末魔を悲慘ならしむるものとして衷心自から慰むる所なきやを危む者である。

此の言論自由の問題に就いて余輩は閑却すべからざる一事を認める。其は學者階級が時局に對して餘りに沈默なることである。學者の沈默は、迂儒爲すなしとして一般世人の之を顧みざるが爲めなるか、官廳が其の調査材料を公にせざるが爲めに學者が時局に就いて論議する能はざるに出づるか、時局に就いて論議を逞ふすれば禍身に及ぶを知るが爲め

なるか、抑も亦、學者は俗事に容喙すべきものに非ずとして超然自から高くして自己の無能と無識との安全を擁護せんとするに因るか。理由は何れにもせよ、此の曠世の時局に際して、學者の沈默は餘りに甚だしいではないか。迂儒爲すなしとして世人に葬り去らるゝならば、如何ともすることが出來ない。されど若し官廳が其の調査材料を秘密にするが爲めと時勢に適切なる議論をなす能はざるならば、眞理の擁護の爲めにも、時弊を救ふ爲めにも、學者は大同團結して官廳に調査材料の公開を要求すれば宜しい。又若し對時局の意見の爲めに地位の安全を危くするならば、由々しき大事なれば、寧ろ進んで自由の天地を打開するに力めなければならぬ。而して此の目的の爲めには、大學中少くとも法科大學と文科大學とは實際政治を指導し、國民思想を涵養すべき重大なる任務あるを以て、之を民間の經營に移し、教授をして官吏服務規律の拘束外に立ちて論議を自由ならしめる必要がある。此は法科偏能を打破する捷徑なるのみならず、二科關係者が動もすれば權力者の前に屈伏して、保守頑迷の思想を傳搬する危害を防ぐ便法ともなる。法科文科の二科を官設大學の埒外に置き、關係教授を官吏服務規律の拘束より脱せしむるは、學者の自由と威嚴とを擁護するに必要なるのみならず、民間の暢達なる議論を起さしむるに於ても必要である。斯くすれば、言論の範圍にサーベルの威力を用ひずとも、正論の勝利は期して待つことが出來る。實に今日一面言論の威力を發揮し、他面言論の危害を防ぐは、一に現在の學者をして不羈獨立の志士階級に降すの外はない。位階勳を濫用して得々たる教授連の如きは、權力者より見れば、調馬人の馴致した奴隷學者に比すべき者であつて、之に向つて不羈獨立の意見を求むるは、猶溝に子を求むるよりも甚だしい。

七

普通選擧制の實施と言論の自由とは社會の各階級に勢力均分を與へ、政治的中心勢力を確立するに必要であるが、之のみにては未だ充分ではない。普通選擧制を利用して議會に入り得る者は、飢寒階級中の比較的有福なる極めて少數者に過ぎぬ、又言論の自由を利用して自己の要求を伸べ得る者も亦素より讀書階級の一小部分に過ぎない。故に余輩は而

局者並びに一般識者に向つて勞働者の組織運動の自由を承認せんことを要望せざるを得ない。我が國に於ては、何れの文明國にも見られざる程に、勞働者の運動は迫害せられてゐる。余輩は我が國の勞働運動に何等の危險性を認めざるが故に勞働者を信頼せんとするものではない。歐米の勞働者と異なり、我が國の勞働者は團體的訓練を缺き、團體的要求は直ちにストライキと化し、又直ちに暴動と化する傾向がある。小人閑居して不善を爲し、小人群居して不穩を企つるは我が國に於て最も著しき實例を認めることが出來る。併しながら之れ我が國に於て爲政者の怠慢の爲めに未だ自治的教育が徹底せず、國民が團體的行動に經驗なきが爲めに外ならない。必ずしも國民性の弱點ではない。頼らしむべし知らしむべからずとの專制的政治の餘弊は支那に於て最も能く現はれ、團體的行動は暴擧と化し、更に一時的一揆は流賊となつて常設的犯罪團體を形成してゐる。日本に於てはストライキが直ちに暴動と化する傾向あるも、暴風一過すれば、暴徒は一朝にして元の溫順なる良民に歸つて了ふ。之れ日本の勞働運動の危險性が決して永久的のものでないことを證するものである。故に自治的教育を盛んにし、常に勞働者の團體的訓練に意を用ふれば、何等恐るべき結果を生ずべき筈がない。否余輩は日本の勞働者は適當の訓練を經ば、最も規律ある階級たり得ることを確信する者である。例へば日本の軍隊を見よ。現在の國民皆兵主義を實行せんとするに際しては、南洲翁の如き烱眼の士すら、農民を兵卒とすることを危ぶみしに拘はらず、今日の如き規律ある軍隊を形成する意外の結果を生じた。之れ單にサーベルの强制力の致す所と思惟してはならぬ。戰場に於て上官のサーベルの威力の衰ふる時と雖も、我か忠良なる兵士諸君は自家の體面と國家の威嚴を重んじて嚴正なる規律に服し、秋毫も犯す所なく、諸外國をして畏敬せしめたるではないか。兵卒として團體的行動に巧なる者、如何にして勞働者として市民として之に拙なるの理由があらう。今日の勞働者の團體的行動に拙なるは一に當局者並びに一般識者が、勞働者の團體的行動を彈壓し來りたる結果に外ならぬ。

我が國に於て勞働者の團體的行動が如何に彈壓され來つたかは、我が國に於て勞働組合すら發達の餘地なく、又兼より勞働者の政治的自由を求めんが爲めに勞働黨を組織せんとするが如きは全然不可能となつてゐる事實に現はれてゐる。若し國家の前途の爲めに勞働者の政治的解放を企てんとて勞働黨を組織せんとする者あらば、其の人は直ちに

主義者と同一視せられて、其の筋の不斷の迫害の的となる。誠に文明國の名に恥づべきではないか。勞働者が自己の階級的利益を擁護し、市民としての自由と威嚴とを求めんとする團體的行動は、如何なる種類のものと雖も危險なるものなるか。若し勞働者が利得配分の不合理を叫んで自家の經濟的利益の伸張を圖らんとすることが國家に危害あるならば、學者が國家の薄遇を咳いて學者優遇の途を講ぜよと迫るは同じく國家に危害なきか。又嘗て現農相仲小路氏等を筆頭として試みたる司法官優遇の運動の如き同じく國家に危害なきか。學者が優遇を求むるも、司法官が增俸を迫るも、皆之れ利得配分の不合理の叫びたることは明かである。飽暖階級に屬する者の利得配分の不合理の叫びが國家の利益にして、飢寒階級に屬する者の利得配分の不合理の叫びが國家の危害なりとは、地獄に於てのみ通じ得べき論理である。余輩は敢て社會的生產の時代至れりとなして、斯の社會主義者の流に倣ひて土地資本の公有を叫ぶ者ではない。併しながら國家が國家として此の劇烈なる生存競爭に堪へんには、是非共國家の各階級の協力に待たなければならぬ。或る階級を飢へしめ、或る階級に不平を懷かしめて、國家の統一的活動を求むるは、木に據つて魚を求むるよりも愚である。今日の國民的協力の時代に於て獨り勞働者の團體的解放運動のみを禁制せんとするは、之れ實に公民國家の理想に反し、國民の一部を敵視するものに外ならぬ。日本は家長國時代を經、更に貴族國時代を經て、法律の前には聖上御一人を外にして四民平等の時代となつたが、之れ唯に法律上に於て國家が公民國家の面目を發揮するに至つたことを示すのみで、政治的若しくは經濟的には未だ公民國家の理想に遠く、依然として貴族主義的階級國家の實體を備ふる所以を否認するに足らない。されば國家の爲めを口にして勞働者の團體的行動を禁壓するを能事とする當局者並びに一般識者は、意識的はた無意識的に、國家內の或る階級の利益の爲めに、他の階級を犧牲に供しつゝあることを三思しなければならぬ。

余輩は一片の正義論を振り翳して飢寒階級の團體的解放運動を是認すべしと云ふ者ではない。此が同時に又國家の全體の利益なるからである。勞働運動の自由を叫ぶ者が若し勞働者の階級的偏見にのみ支配さるゝならば、國家の爲めに對抗する必要がある。されど現代の國家は各種階級の協力に依る事を痛感して飢寒階級の解放を叫ぶ以上、苟しくも非

要求な[illegible]る限り、[illegible]を齎らし來るや。此の疑問に對する正當の答案を得んと欲する者に、先づ勞働者が團體的運動以外に[illegible]することが果して利益なるかの疑答に問へよ。今回の不幸事に余輩に代りて明答を與へつゝある。罷業階級の要求が阻塞せらるゝ時は最も危險なる方法を以て爆發することゝ、日常團體的訓練なき飢寒階級は直ちに一揆となり暴徒となりて國家の秩序を破壊することゝは、以上の疑問に對しては滿點を以て酬ゐらるべき明答ではないか。今回の勞働者の暴行は、歴代の政府が勞働者の冷靜なる合理的なる團體的行動を彈壓し來りたる爲め、遂に勞働者の狂激なる不合理なる團體的暴行を誘致したる事實に説明の理由を求むべきならば、春秋の筆法は、勞働者と共に否夫れ以上に歴代の政府に責任の主體を見出すであらう。窮すれば亂す。窮民と亂民とは間髪を容れない。窮民の合理的運動を彈壓して、之を驅りて亂民たらしめ、而も之に臨むに酷刑を以てせば、之れ民を網するものに非ずして何であらう。

因に記す、狼狽の甚だしきが爲めか、はた時勢の進化と共に進化せる爲めか、抑も又民衆の勢力の伸展に退却を餘儀なせられてか、余輩は近時往々にして國家社會主義の名が頗る意外なる種類の人々の口に上つたのを聽くに至つた。後藤外相、仲小路農相、及び德富蘇峰氏の如き卽ち此の種の人である。嘗て社會學の研究會すら社會主義の團體なりとして警戒されし數年前と比較すれば、時勢の變も亦、驚くべきものがある。されど諸氏の主唱する國家社會主義の正體は何ぞ。若し國家が土地資本を國有にして生産と分配とを國家の手に於て司ることを意味するならば、之れ現代の資本制度の根柢を覆す一種の革命である。國家の要職に在る前記諸氏は決して官許革命黨員たる筈はない。然らば諸氏の所謂國家社會主義は資本制度の弊害に惱みつゝある窮民の爲めに國家本位の善政を布かんとするにあらう。國家本位素より可である。皇室中心素より慶賀すべきである。併しながら勞働者自身をして自己の階級的要求を解放して自主的に自己の救濟を計るべき團體的行動を許さず、民は賴らしむべし知らしむべからずとの意味の善政を強ひんとするを稱して國家社會主義となさば、之れ勞働者の自尊心と權利思想とを無視する一種の團體的慈善行爲である。今日の覺醒せる勞働者に、增賞や岡半輩の自家保存的恐怖心より出づる寄附金に依る慈善行爲を以て向はんとするは、[illegible]の前に[illegible]を投

すべきものではないか。而も如何せん、今日の勞働者は動物虐待防止會の對象たるには餘りに意氣地がある。

九

妖雲に包まれたる政界の現狀なる哉。官僚も軍閥も黨人も富豪も政界の危機たるを思せよ。官僚と黨人との相殺は政治の無力を來す政界の危機である。更に飢餓階級に對する資本家と勞働者と兵士との不平も同じく政界の危機である。飢寒階級の困憊をも無視し、官僚と黨人との一時的妥協を以て擧國一致なりと誤想して大膽なる軍事的活動を企つるが如きは、更に重大なる政界の危機である。社會政策を伴はざる軍國主義の危險は現に露國特有の危險ではない。無力なる內閣が有力なる政治をなさんと企つる國家を死地に陥るゝものである。今日は謂ふまでもなく、我が國の對外的發展の好機會である。而も遺憾にも我が國は對外的活躍をなすべき有力なる政府を有しない。又此の有力なる政府を組織すべき國民的協力もない。從つて余輩は新興階級の向上の爲めにも、又國家の對外的活動の爲めにも、各種階級の要求を解放し凡ての勢力の融合の裡に政治的中心を確立する必要を痛感する。惟ふに此の政治的中心は決して今日の官僚若しくは黨人の特殊階級に於て成立するものでない。此は恐らくは學者の健實なる輿論に啓發せられ指導せられたる一般國民を背景とする政黨に存するであらう。勿論政黨は作らるゝものに非ず自然に發達し來るものであらうから、國民的背景を有する政黨の爲す所と雖も、必ずしもすべてが合理的のものではあるまい。此の際にこそ、學識に富み、政治的經驗を積める國士的風格を有する貴族院議員——今日の夫れと同名にして異質なる貴族院議員が公平なる訂正の任務を果すべき時である。又民間の博士と大學教授が不偏獨立の境地に立ちて侃諤の論を通るべき時である。言論の自由は今日の如く上層階級に向つてのみ放たるべきものに非ずして、下層階級に向つても放たるべきものである。ステューアート・ミルの所謂學者の自由は輿論の專擅に對する學者の自由なる論議を意味した。余輩は各種階級の要求を解放して國民的後援を背景に成立する內閣の一日も早く出現せんことを希望する。而して余輩の如き博士階級は徒らに兇險亂を好むの風を棄てゝ、民衆的勢力の動もすれば陥り易き弊害に對して、口舌の武器を揮ふべき時代の一日も早く到來せんことを希望す

る。今日の如く無爲無能なる內閣員を攻擊し、眼中黨利以外何物もなき政黨員を窒息するが如き事を祈らんことは余輩の日夜忘れざる要求である。而も如何せん今日は斯かる理想の實現に遠ざかつてゐる。止むなく、國家內の各種階級協力の時代を造らんが爲めに、此の協力より除外されつゝある腰辨諸君と勞働者諸君との爲めに解放を叫ばんと欲する。これ余輩が自から飢寒階級に屬するが爲めに、階級的偏見に囚はれて殊更に階級戰を叫ぶのではない。今日が國民的協力の時代にして、之を無視しては政治は永久に無力ならざるを得ずと考ふればこそ、余輩敢て大聲叱呼して識者に訴ふるのである。

狐狸の通路を爭ふ醜態なからんとせば、獸王の醒めつゝあるを察せよ。疾風と豪雨と電雷との一時の襲來に恐怖する者は、妖雲の去來するを見よ。而して互に相協力して、獸王を愚弄するを止め、妖雲を排して天日を仰ぐべき方法を講ぜよ。

（大正七年八月二〇—二一）

本號に於て論議せられたる四大問題

寺内内閣の引退・軍閥の跋扈に對する國民の監視・米及び其代用食物の研究・一揆暴動に關する政治的及社會的の考察。記者は此四つのものを我國の現在及び將來に於ける最も重大なる問題と信じ、本號の時事に關する論議は、主として此四大問題の研究に向つて集められた。

寺内内閣の攻撃には、最早や一般國民も聞き飽きる程、又攻撃者自身も攻撃疲れのする程繰り返された。國内の政爭や、内閣の更迭には、冷淡に近き程冷靜を持するを常とした我等も、今度といふ今度は全く我慢の轡を抑へ兼ねた。世界の思潮に共鳴せざる迄も、之に對する相當の理解を有たなければ、どうして今日の國際關係を處置し得よう？ 國内の民心を指導せざる迄も、其向ふべき方向を洞察してゐなければ、どうして治安保持の責が盡さう。而して此二つの大きなものを寺内内閣は全然缺如してゐる。一々例を擧ぐるまでもない、あらゆる外交の失敗も内政の混亂も、其根本は皆世界の思潮と國内の民心に對する無理解と没[illegible]から生み出す所である。此時代錯誤の内閣をして永く國政に携はらしむるは、國家の爲國民にとつて一層恐るべき禍であり脅威である。而かも如何なる攻撃に遭ひ、如何なる勸告を受くるも、彼等は水をかけられたる蛙よりも尚[illegible]然たる顔をしてゐる。時には有を攻撃されたる蛙輩の如く其論旨を曲げて其嘗の氣焰を示してゐる。無神經なのか、厚顔なのか、[illegible]なのか、常人には理解の出來ない心理状態である。我等は終に寺内内閣を見限つた。[illegible]には見限れた。今ではもう憐れむやうな心さへ起る。然し個人として憐れむことゝ、國民に見捨てられたやうな人間が、永く國政の局に當つて居ることに對する義憤とは全然別物であることを深く心に銘して貰ひたい。此意味に於て、我等は諸氏の論文、吉野博士の時評、讀者の「後繼內閣の推薦者」を特に掲載して當局の反省を促さうと欲したのである。

軍閥の跋扈に對する國民の監視と、米及其代用食物の研究と、及び暴動事件に對する政治的及び社會的考察とは、寺内内閣の引退と否とに拘らず、今後永きに亘つて、日本の運命を左右するにも足るべき重大問題である。從つて我等は本號に於て、各方面の大家を網羅して此問題の根本的解決を努めたが、尚今後も此方面の研究には特別の注意を拂ふべきことを讀者諸君にお斷りして置く。（一記者）

軍閥問題

誰が軍閥の跳梁を抑へ得る者ぞ

文學博士 三宅雪嶺

軍閥問題は明治維新當初よりの事で、西郷と大久保との爭も之れに屬する。西郷は強ち軍閥を擁するの意無いが、薩摩の軍隊を以て國内統一に與つた結果、之れと離るべからざる關係になり、大久保は軍隊との關係無く、必要の場合は長州の兵を籍りて來たものである。長州は兵數寡く、薩摩に當るに他の地方の兵と共にするを要する。長州で徴兵令を按出したのは、國家の上から考へたものであつても、幾分か薩摩を抑へる底意無かつたとせぬ。薩摩で西郷以下が兵を擧げたのは、大久保派が促した所があり、其裡面に長州が潜んでゐる。伊藤は實に大久保の智惠袋であつた。薩摩の戰役は薩摩軍隊が二分した形になる。人數から云へば西郷に從つたのが遙かに多いけれども、將校には有力なのが大久保側になつて居る。黒田中將も居り、西郷の弟なる從道中將も居り、從弟たる大山少將も居り、野津兄弟も居り、高島、樺山等も居る。それに長州派及び其他を悉く加へたので西郷一派を抑へ付けて了つた。其一派が消滅したのは、薩摩の勢力が半減したものと云へる。併し大久保が勝を制したのは、少くとも外觀に於て、文治派を以て軍閥を抑制したものである。大久保が横死して、長薩寄合ひ世帶となり、力を官制の整備に注ぎ、伊藤が官制改革及び憲法制定に從事し、此類の事を最も必要とする間、伊藤の力が最も顯はれた。何でも六つかしい事は伊藤に持つて行くといふ事になつて居る。最初の總理大臣、最初の樞密院議長、最初の貴族院議長、次ぎから次ぎと伊藤が膺る事になつた。大久保の下で、伊藤が政治上に働き、山縣が軍事上に働いたが、伊藤が主、山縣が從たる地位で、政治に關して山縣は特別に伊藤の爲す所に喙を容れようとしなかつた。

所か内亂鎮撫の爲めに兵を用ゆる事こそ全く不必要となつたれ、國家の利權を擁護するが爲めに、陸海軍を擴張するの當然なる次第となつた。財政に餘裕無く、急激な擴張を爲し得ぬにしても、能ふ限り擴張する事になり、遂に之を用ひて支那と戰端を開き、三國干渉を招いたが爲め、更に露國と戰端を開き、陸海軍の功用を事實上に證明する事を得た。斯くなりて見れば、軍隊に關係ある者が自づと幅が利く。初期議會に一介の武弁といふた山縣が、先進元帥として軍隊に重きを爲し、延いて政治にも重きを爲すは、勢の避け難い所である。伊藤は個人として山縣を抑へる事が出來る。從來の關係上山縣は伊藤に頭か上らぬ。併し背後に控へる軍隊の力が強大を加へたが爲め、軍隊の代表者としての山縣は、大いなる力を具へて居る。軍隊にはいろ／＼若手で働く者があり、それかいろ／＼と註文する。山縣から聞いて見れば尤もであり、それを容れねばならぬ。容れるとして、行政上他の釣合があり、行はれぬ事もある。山縣は無理にも行はれぬ事を行ふとするのでなけれど、自分一了簡で抑へつける事も出來ず、成るべく軍事關係者の都合の好い事を爲さうとする。時として行政上に威嚇を試みるやうな事もある。そこで伊藤と衝突し、度々啀み合ひがあつた。井上か中に這入つて取なすといふやうな事もある。然し次第に軍隊が重きを爲し、軍隊の反對を受ければ、行政に多大の困難を感じたりする。能く軍隊を綾なし得る者が行政上の衝に膺るやうになり、桂が三度まで首相の地位に立つた。寺内の首相となつたのも之に外ならぬ。

所で何人か此勢を禦ぎ得る者無いかと云ふに、等しく軍閥と云ひつゝ、陸軍と海軍と分れて居る。初め海軍が微弱で、陸軍に抑へられて居つたが、次第に力を得、支那との戰役、露國との戰役で、僅かに有用なるを示した。山縣は先進元帥として力あるにしても、其力は海軍部内に及ばぬ。海軍は西郷及び樺山が陸軍より轉じて力を張り、山本が之を引承けて、他より侮るべからざる勢を作つた。偶々桂失敗の後を受けて首相となるや、山縣の勢力以外に立つて力を揮ひ、動もせば其範圍を犯さうとする。山縣及び陸軍派でも、不快の感じ得ぬものがある。コンミッション事件を以て、物の見事に山本を叩き付け、之を政治上に放逐した。山本も現役にあつてこそ將校の羈絆を自由にし、「山本の海軍」の如き觀を呈すれ、現役を離れては河童が陸へ上つたも同然、何をする事も出來ぬ。山本は位置が得れば大に威力を逞しくし、位置を失へば可哀想な代物が出來ぬ。海軍から出て、陸軍の横暴を抑へやうとした山本が失脚してから、山縣はいよ／＼大御所となり、其後見で寺内が今まで首相

の地位を占めて來た。

今後何人が首相となるか。軍閥と云ふても、政治に密接の關係あるは陸軍で、陸軍が承知しなくては、首相たるに堪へぬかの恐れがある。之れと折合ひを好くするが爲めに、山縣の御機嫌を取らねばならぬといふのである。山縣の御機嫌を取つて地位を占めて行くか、敢て其御機嫌を取らず、必要と見ては之と衝突するを辭せぬやうな事を爲し得るか、屢々疑問となる。誰が大御所に楯衝く事が出來るか。仲の惡かつた大隈も首相となつては、双方から接近しつゝあつた。大隈はなか〳〵之れに楯衝かうとせぬ。されば他に誰があるか。楯衝かうとする者は、地位も無く、力も無い連中である。薩辨慶に過ぎぬ。政黨の首領なる原や加藤や犬養や、之れに楯衝く事が出來るかどうか。山縣も先が長くないと云ふ位のものである。けれども山縣が居なくても、軍閥の依然存續するを否定する事が出來ぬ。山縣を大御所として崇めるのは、山縣個人として有力なのでなく、陸軍を背景にして居るからである。背景を除いて芝居にも何にもならぬ。強く言へば山縣は一の傀儡と言はざるを得ない。誰か山縣に楯衝き得るかと云ふは、人の問題でなく、團體の問題である。言ひ換へれば個人の問題でなくして、山縣や桂や寺内や、元帥を以て政治上に力を伸ばすのは、陸軍といふ團體を背後に控へての事である。一個人として何程勢力智略を具ふるとも、之れに當るは六つかしい。多勢に無勢、どうする事も出來ぬ。山本が彼の如く力を伸ばしたのは、海軍といふ團體を控へたが爲めである。軍閥の跋扈に氣遣ふは、首相職に居る者で、陸海軍に氣兼ねして、其大政の方針に背くのを防ぐ事が出來ないといふ所にある。陸海軍大臣は必ずしも内閣更迭に伴はぬ。治外法權の地位に居る。陸海軍が天皇の統帥する所なるは、憲法上に明白であるが、大政の方針に背くべきものではない。其編成の如きは陸海軍當局者に一任すべきであつても、之をして大政の方針に背かしむべきでない。國政は何處までも統一を要する。首相に於て陸海軍大臣の反抗を蒙り、方針を變ずるやうな事があつてはならぬ。大政の方針と確信する所は、陸海軍大臣をして從はめねばならぬ。非常の人物ならば或は我能力を以て陸海軍大臣を從はしむべきも、かゝる人物の出るか出ぬか分らぬ。仍で矢張り團體の力を籍りるの必要を生ずる。

陸海軍と云つても、政治上に直接の關係なく、關係ありと見ゆるは、貴族院の多數が之に傾く事になつて居るからである。陸軍若しくは海軍が、貴族院の多數と共にする所で、軍閥の力が現はれる。仍で之に對しようと思ふならば、政黨の力を籍るの外無い。大政黨は兎も角も人數が多い。數に於て軍閥に

事は出來る。貴族院は衆議院と同權と云ふても、少數者を代表して到底衆議院の多數を代表するに當る事が出來ぬ。一大政黨又は若干小黨の連合が比較的有力なる團體である。一個人の力を以ては、軍閥と衝突して敗ける。軍閥より大なる團體で澁めば勝つ事が出來る。伊藤が政友會を組織したのも、いくらか此意を含んで居る。併し今の政黨でかゝる力を揮ふ事が出來るかどうか。選擧干涉で大政黨が忽ち變じて小政黨となるやうでは、迚も覺束ない。原や加藤や、曾て絕對多數黨を率ゐた事があるが、反對黨となつて大敗北を招いた。さる狀態で軍閥に對抗するなど思ひも寄らぬ。政黨として一層根據を國民の間に深くし、選擧干涉の爲めに大動搖を來さぬやうになれば、闘はずして軍を屈する事が出來る。何度衆議院を改選しても、多數黨が依然多數黨とあつては、貴族院は之に讓らねばならず、貴族院を離れて陸海軍は政治上の手懸りを失ふ。然しさうすれば陸海軍は貴族院と共にするよりも、衆議院と共にする事になる。衆議院とて國防としての陸海軍を大切にする事、貴族院と違ひが無く、陸海軍に於ても別段貴族院と共にせねばならと限らぬ。天皇統帥の下に全國國民と共にするを希望するに相違ない。歐洲戰役を觀ても、軍隊が國民と共にするの必要が、いよ／＼明かになつて來て居る。我が陸海軍當局者も、もはや其邊の事が分つて來て居る。政黨の力が今のやうに上つ面でなく、眞に國民の大部分を代表するようになつたら、軍閥に對抗するは何程の事でなく、軍閥も亦之と爭はうとせぬやうになる。軍閥の弊を矯めるに相當の人が出れば結構であるが、徒らに其人の出るを待ち設ける事が出來ぬとすれば、時を待つの外は無い。日本の國民は進度が遲くとも、必ず進步する。今の果敢ない政黨が根據を黨閥にする事になる。政黨の改造を必要とし、其儘にしては政黨が國民の敵になるに相違ないとて、焦せる者は焦つて可い焦つても效が無いと思へば、唯時を待つべきである。人を當てにせぬ以上、軍閥を抑ふるは人の問題でなく、時の問題である。國民は時を經れば漸々進步する。但だ何程か進步に貢獻するものを以つて其「時」に功ありとする。

武人專權史論

白柳秀湖

「一」

千九百五年五月二十七日、バルチック艦隊が日本海に於いて

我聯合艦隊の爲に擊破され、殆ど全滅の悲運に陷つた時、露西亞の『スローウオ』紙は、悲痛の叫びをなして、『官僚政治は又も我國民に汚辱を加へたり』と云つた。さうして革命の氣運は此時から露西亞の全土に動き始めたのである。一體日露戰爭は露國に於いて初めから一部の官僚若しくは軍閥の內職であるとされ、一般國民は之に對して殆ど何等の興味をも感じなかつた。『ノウオエ、ヴレミヤ』が日本海の敗戰をたとへて、『露國は當初片手を以て戰ひ、漸く雙手を動がさんとするに至りて又片手を失へり』と云つたのも其邊の消息を語り盡して餘りあるものである。苟も一國の運命を賭して起つべき戰爭、幾百萬の生靈を犧牲として國家の存立を爭ふべき戰爭が一部の官僚、若しくは軍閥の內職として行はれるといふことは、吾々日本人には嘘のやうな、又夢のやうな話である。處が、日露戰爭がペトログラードを本店とし、ハルピン、大連を出店とする露西亞の官僚若しくは軍閥の內職から起つたといふことは、少くとも露西亞の側に於いて夙に爭ふべからざる事實として認められて居る。

千九百二年露國參議院議官勳三等の肩書を有するギュンスブルグといふ前科者の親友にして東洋ゴロの名あるブリユンオルといふ人物が、朝鮮鴨綠江の東岸に鬱蒼たる大森林を發見して

之をギュンスブルグに告げた。ギュンスブルグは之を[illegible]閥の巨頭にして、宮廷資本家（官僚）の傀儡たる關東總督アレキセーフに持込み、玆に所謂浪人組を仲介とする軍閥と財閥との握手が行はれ、忠君愛國を旗幟とする事業會社の計畫が成立つた。此會社をものにする爲にアレキセーフ、ギュンスブルグの意をうけてペトログラードに乘込んだのが、露國皇帝陛下の國務尙書として、又露都に於ける放蕩家として有名なベゾブラゾブといふ人物であつた。英、佛の資本家と利害相通ずる民間の富豪は此ベゾラゾフの持込んだ事業に對して甚だ冷淡であつたが、露西亞の宮廷に蟠屈する官僚軍閥の一味、即ち獨逸の資本主義と結托して、東洋に放資の舞臺を發見せんとしつゝありし宮廷資本家は、熱狂して彼を歡迎した。宮廷資本家を代表する二人の大公は先づその大株主たらんことを申出で、諸官省に說き、宮廷に運動した結果、玆に在東洋露國森林採伐株式會社なる官僚の營利會社は成立した。海軍中將アバザはギュンスブルグ、ベゾブラゾフの爲に宮廷に運動して、帝室及皇族から幾百萬といふ株式を取出した。韓國政府は林全權公使の抗議を顧ず、同國駐剳露國公使パウロフの壓迫をうけ同會社に厖大なる森林採伐の特權を許可した。鴨綠江岸にはユコライエフスクなる村落が打建てられた。關東總督アレキセーフは此個人的營利

事業を保護する爲に、旅順口駐屯の守備兵を送り、一等大尉ボチスコをして其指揮を掌らしめた。これらの事がすべて千九百三年の五月までに行はれた。

「三」

殊に吾々の注意すべきは、露西亞の參謀本部に於ける軍人の多くが、平素から右等の東洋ゴロと親交を有し、露國森林採伐株式會社に對して初めから重要な地位にあつたことである。現に露國參謀本部附陸軍中佐マドリトフはこの社長であつた。マドリトフは露國政府の内命をうけて二百の現役兵（まで冒險を生活の保障なき社會に打捨てて國家の義務に服しつゝある忠良の國民）と、千五百以上の馬賊とを率ゐて此會社を護つた。同じく參謀本部附陸軍大尉ワシリエフスキーは彼の副官たる地位にあつた。露國に於いて日露戰爭が一部の官僚、若しくは軍閥の内職であり、大多數國民の利害、卽ち國家の存立に關係なき無用の戰爭であるとされたのは、かゝる明々白々の事實によるものであつた。露國に「軍閥」といふやうな曖昧な、不徹底な文字があるか、ないかは知らぬが、以上の事實に基いて關東總督アレキセーフ以下、參謀本部の軍人を中心とした露國當年の軍閥といふものを解釋するならば、それは、國利を保護し、國威を發揚する爲に存する軍隊を一部少數の官僚、資本家の利益擁護の爲に提供するものであつて、軍隊の頭腦と少數の財閥とが、自家の利益に於いて相一致した形である。さうして兩者の仲を取持つものは、日露戰爭以後我國に於いても立派な職業の一つとなつた支那浪人、滿洲ゴロなど呼ぶ高等浮浪人の一團である。更に換言すれば軍閥とは、軍隊の首腦が、社會的貪欲の勢力に支配せられて、國家の軍隊を、軍隊の軍隊、若しくは小數權力者の軍隊として濫用しつゝある形をいふ。

我國に於いても近年軍閥の專横跋扈を罵るものが漸くにして多きを加ふるに至つた。或人は軍閥を解して長の陸軍、薩の海軍といふ。けれども今日軍閥の本體を封建の政治的地理によつて解釋しようとするのは決して彼の當を得たものでない。維新の當初兵馬の主力が德川氏の事實上の征服者たる薩長二藩の手に落ちたことは寧ろ當然の成行であつて少しも怪しむに足らない。併し、如何に薩長二藩に人材多しとするも、彼等が封建の政治的地理によつて其勢力を永久に保持しようとすることは絕對に不可能である。現代に於ける國際同盟が、民族若しくは地理の關係を超絕して、利害關係の一致する所に成立する如く、軍閥も其勢力を永久に保持せんが爲には門戶を開放して、自家の存立に必要な勢力を迎へ入れなければならなかつた。戊辰戰の血が未だ乾かず、長州人の側には生々しい會津城下の恨みの

跡をとゞめた明治九年といふ時になつて、生存上の利害關係は長岡久茂、井口愼三郎等東北の武人をして起つて前原一誠の擧兵に加擔せしめたのである（思案橋の變）。況んや明治十八年伊藤公によつて文官任用令が公布された後の事をや。私は、今日政治を談ずる人々が、いつまでも『藩閥』といふ古い語を襲用し之によつて現代の新しい支配者を指呼し得たりとする事の無見識に伍し能はざるものである。『藩閥打破』といふやうな明治十年代の死語が再び大正の今日に生きて、民衆の感情を激揚し得る我が政治的進歩の遲緩に驚かざるを得ないのである。軍閥の成立を歷史的に說明する上より長の陸軍といひ、薩の海軍といふはよい。けれども之を軍閥の本體本質を說明する上に用ふるは斷じてよろしくない。軍閥の本體は何れの時代、何れの國に在りても、軍隊の首腦が、社會の經濟的支配者と握手して國家の軍隊を一部階級の利益の爲に動かさんとする形をいふのである。然らば我國に軍閥なるものがあるか。我國の軍隊は「皇威を發揚し、國家を保護する爲に設け置かれたものである。此二つの目的以外に出でゝ軍隊を一部階級の利益の爲に動かし得る力があるか。例へば露西亞の軍閥が、東洋ゴロの設立した鴨綠江の森林採伐株式會社を保護せんが爲に、幾百萬の生靈を犧牲に供した如き恐ろしい內職を營む暗黑の勢力があるか。

私は、今茲に此疑問に明答を與ふることを避け、其代りに之を歷史に溯つて社會の經濟的支配者と兵權との關係を研究して見度いと思ふ。

「三」

白河法皇が深く佛法を信じて天下に殺生禁斷の布令を發せられた時、當時の武將平忠盛の家の子に加藤成家といふものがあつて鷹を養ひ、小鳥を捕つて盛に朝禁を犯すので、檢非違使廳も捨て置かれず、成家を捕へて糺問に及ぶと、成家は平然之に答へて、『我はこれ平忠盛の家の子なり。主人毎日鮮鳥を以て女御（祇園女御）の食膳に供す。我其命をうけて捕獲の任にあたる。若し闕怠せんか、必ず重科を受けん。家法に於いて重科は斬首にあたる。朝廷の禁令重きも禁獄、流罪に過ぎず。寧ろ之を犯して死を免るるの易きに如かず』と云ひ、惡びれた氣色もなかつといふ。朝廷の御威光よりも、直接己れの臣事する主人の方が恐ろしい。朝禁は犯しても、主人の命には從はなければならぬといふ封建の道德は既に此頃から形を成して居たのである。源爲義が死に臨み、『朝敵となりて斬らるるは武門の面目なり』と豪語した（保元物語）のも、此頃の經濟組織に應ずる當然の道德觀念で、武門政治の開山を以て稱せられる源賴朝は、唯、これらの材料を組立てて、要所々々を釘付けにしたと

いふだけのものである。然らばもと確實に朝廷の御手にあつた兵馬の大權が、何故に武門の頭梁たるものの手に移り、果ては政治の大權までも併せて彼等の掌中に歸するに至つたかと云へば、それは武門の頭梁たるものが、兵馬の大權を掌握すると同時に社會の經濟的支配者となつたからである。

此點に於いて私達の特に注意すべきことは武士が社會の經濟的支配者となる過程に於て一つの時代があつたといふことである。此時代の研究は私達が現代を解釋し、現代を理解する上に於いて特に必要であると信ずる。抑も武士が社會の經濟的支配者となつたといふ事は何ういふことであるかといへば、武士が其時代に於いて多數の生命を支配する生産機關、即ち土地の所有者にして同時に其支配者となつたといふことである。然らば武士は此土地の支配權を何處から得たか。申すも畏れ多いことであるが我國の制として、土地と人民とを支配し得るものは、上御一人の外にないのである。然るに此支配權は源頼朝が[illegible]朝權を削減してから承久の兵亂に至る間に全く朝廷の手を離れて武門の手に歸したのである。けれども武家が斯くの如き權力を有するに至つたのは決して一朝一夕の事でない。武家と朝廷との間には藤原氏といふ大豪族があつた。此大豪族は武家に先つて朝廷の御威光を壟斷し、大小の莊園を兼併して其所有にかゝる土地の廣さは、僅に朝廷の御領を凌ぐほどであつた。武家が勢力を得た始まりは此大豪族と結托し、此大豪族の爲に其領土を保護するの役目を勤いたことにある。之を露西亞の事情に例ふれば、藤原氏は朝廷を圍繞した宮廷資本家、即ち官僚の一團である。當時其下にあつて藤原氏の爲に働いた源氏は、アレキセーフ一味の軍閥である。藤原氏と露西亞の官僚とは、土地の豪族と資本の豪族との相違があるだけで、其社會の經濟的支配者たる點に至つては全く一である。此意味において藤原時代の歴史には二つの重要な研究項目がある。即ち其一は、藤原氏が地方に散在した自家の莊園、及び自家の勢力範圍内にある諸國司の私領を保護する爲に、如何に朝廷の兵力を濫用したかといふ事、其二は藤原氏の爲に利用された武士が、如何にして自家の實力を自覺し、如何にして地方に其勢力を扶植したか。換言すれば武家は如何にして、藤原氏に代つて土地、人民を支配するに至る素地を作つたかといふ事である。

「四」

神武天皇の建國から、神功皇后の三韓征伐に至るまでには、我國家の經制も極めて簡單なものであつて、國内に於ける大小の氏族が各しくその宗家として仰ぎ奉つた皇室は、其直轄された土地の廣さに於いても、其領有された人民の數に於いても、各

氏族の上に最高最貴の大氏長たる御威光を示すに十分であつた。神武天皇橿原皇居經營の後、物部、大伴の二氏が兵事を以て職を朝廷に奉じ、禁闕の警護、武器の整備に任じたことは古史に著しき事實である。されば上古にありて、天皇の統治權は直接各氏長の領有せる土地と人民とに及ばず、各氏長を通じて大體に之をシロシメスに過ぎず、必要に應じて各氏長に命じ其領民を徵さるるの制であつたけれども、朝廷の御威光はよく大小の氏長に行き渡り、國家の運營に少しの支障も感ずることがなかつた。處が神功皇后の三韓征伐によつて生じた國富の急激なる發達と、文明の著しき進步とは、國家の組織、社會の制度に甚しき動搖を感ぜしむるに至つた。

三韓服屬の結果として先づ第一に其實力を增大したものはいふまでもなく皇室であつた。仁德天皇から雄略天皇に至る數朝は日本の歷史を通じ、明治、大正の昭代を除いて皇室の御威光が最も盛大を極めた時代で、工藝、農蠶の進步、奴隸の增加、武器發達によつて著しく其勢力を增大した大氏族も、到底その實力を帝權に較するの餘地を發見することが出來なかつた。

仁德天皇の仁政は漢字及漢學に誤られて、皇室の非常な窮迫の中に行はれたことのやうに理解されて居るが、實はその富强前代に比例を見ざる程の盛時に於いて行はれたことである。三韓の貢物は年々其額を定めて筑紫から武庫に進み、遂に畿近に入つて、此處に一大貿易市場が開かれた。仁德天皇は此大勢を察して都を大和から攝津の高津に遷し、難波の堀江を開鑿して海に通じ、住吉の津を定め、猪甘の津に架橋し大道を京の南門から河内の丹比邑に通じて後世に於ける大阪市發達の基を開かれた。

『高き屋に』の御製は延喜六年藤原時平が日本紀の講筵に於いて作つた歌を、後人が改作して天皇の御製としたものではないかといふ近頃の學者の說を當れりとしても、『高き屋に』の建築が此頃から始まつたといふことは爭ふべからざる事實である。天皇三十八年の記に皇后八田皇女と暑を高臺に避け菟餓野に鹿の鳴く聲をきくなどあるのがそれである。又六十七年の十月に、河内の石津原に築かれた御陵の、外堤七百六十九丈、內堤五百七十三丈、陵墓の周圍四百五十七丈、南峰の高さ八丈餘、北峰の高さ十丈、四畔に九つの小家があつたといふに見ても皇室の隆盛を察し奉るべきではないか。

雄略天皇の時には農蠶、織縫の業が大に興り、絹縑殿前に堆積して『內藏』に溢れたので、大に秦氏の部民を役して宮側に八丈の『大藏』を起したとある。朝廷には初め『齋藏』といふものがあつて、神物と官物とを其中に藏めて居たが、朝廷の歲入が

俄に增加して齋藏に餘つたので履中天皇の時、新に『內藏』を起し、雄略天皇に至つて更に『大藏』を起されたのである。此時大藏の管理に任ぜそれたのが蘇我滿智といふもので、後世蘇我氏が朝廷の御威光を凌ぐほどの勢力を得たのは、此時から大藏大臣として國家財政の事を掌つた結果である。

「五」

以上は皇室隆盛の有樣であるが、之と同時に、國運發展の餘慶は皇室を圍繞する大氏族の上にも及び、彼等の中には其實力往々にして皇室を凌ぐものあるに至つた。殊に、大伴氏の如き、物部氏の如き、曾て其部民を率ゐて禁闕守護の任に當り、國家の爲に、皇室の爲に只管忠勤を勵んだものが、三韓征伐の結果として漸に其實力を增大するに及んでは、朝廷の眷寵に狎れて政治に容喙し、互に黨をたてゝ權勢の爭奪に耽り、果ては皇室の御稜威をさへ冒瀆し奉るに至つたことは、日淸、日露の二大戰役を經て國運發展の餘慶を被ること殊に著しき一部階級の特に心すべき事柄ではないか。

雄略天皇の時から、大氏族の跋扈を如何にして制馭すべきかといふことが朝廷の大問題となつたものと見え、天皇の最も御苦心遊ばされたのは刑典の肅正、規律の勵行といふことにあつた。天皇が皇后を日下に訪はれた時、河內國に堅魚木を上げた屋根の見えるのを見て從者に問ひ、それが志城の大縣主の家であることを確めた後、嚴重にその驕僭を責め、人を遣はしてその家を燒拂はせたといふことがある。又、二十三年八月大漸に臨んで天下の後事を憂慮遊ばされた詔勅の中に『大連等、民部廣大にして國に充盈せり』とあるに見ても、天皇の英邁剽悍を以てして如何に大氏族の跋扈に御苦心遊ばれたかといふことが分る。

果然、果然、天皇の憂慮は事實となつて現はれた。雄略天皇以後打續ける太平と、財富の潤澤とになれて朝廷の內部先づ亂れ、仁賢天皇の崩後、皇別大氏（神武以後代々天皇の皇子から出た大氏族）の頭梁たる平群大臣が不軌を企つるに至り、武烈天皇は大伴氏の兵力を以て平群氏を亡ばされたけれども、朝廷はまた大伴氏の跋扈を如何ともすることが出來なかつた。大伴氏は高天原から皇室に隨從して、天孫の移住に供奉した所謂神別大氏で、皇別大氏との間に感情の圓滑を缺いた事情は恰も之に遠からぬ、ちやうど德川時代の諸大名の家老に、關ケ原以前に於ける創業の功臣を以て祖先とするものと、關ケ原以後歷代藩主の庶子その他にして臣籍に入つたものを宗家とするものとの二派があつて、互に權勢の爭奪を事としたやうに、皇別大氏と、神別大氏とは兎角仲が惡かつたものと見える。大伴氏が平

群氏を亡ぼしたのは必ずしも皇室に忠勤を挺んでたのではない。機會に乘じて有力な反對黨の一つを打亡ぼしたのであつた。平群氏滅亡の後は、當時の軍閥たる大伴氏と、物部氏とが對立して互に其勢力を争つたが、大伴氏は三韓に對する外交に失敗して物部氏の爲に彈劾せられ、欽明天皇以後は、形勢一變して物部氏と、蘇我氏との對立となつた。

蘇我氏は雄略天皇以來、大藏の出納を管掌して國家財政の權を執り、皇親、皇族の間に味方多く、物部氏は神武天皇以來兵器の整頓を掌り、三韓征伐の後は所領天下に洽く、良賤の私民を養ふこと最も多きを以て兵力に於いては殆んど之に匹敵するものがなかつた。此二大豪族は折から渡來した佛教を以て黨爭の具となし、互に崇佛、排佛の旗幟を樹てゝ鎬を削つたが、其結果は遂に蘇我氏の勝に歸して物部氏は亡びた。當時の軍閥たる物部氏の力が如何に強大を極めたかは、皇親、皇族をあげて蘇我氏に黨し、炊屋姫皇后を始め、厩戸皇子の如き有力なる後援者があつたにも拘らず、河内國澁河の合戰は物部氏の一族、奴隷、最も勇敢にして防戰大に努め、流石の厩戸皇子も攻めあぐんだとある。物部氏の財産が如何に豐富であつたかは、『太子傳』に、

子孫從類二百七十三人を寺の永き奴婢と爲し、所領田園十八萬六千八百九十代を沒官して寺の永財と定め玉ふ。河內國に弓削、鞍作、祖父間、衣摺、蛇草、足代、御立、葦原等の八箇所の地都集して十二萬八千六百四十代、攝津國に於勢、模江、鵄田、熊凝等の散地都集して五萬八千二百五十代、居宅三箇所、並に資財等悉く寺の分に計へ納る。

とある。之によつて見ると、物部氏は堂々たる大諸侯であつて、其領土國內に洽く其兵力他に匹敵するものがなかつたのであるが、國家財政の鍵を握つた蘇我氏は巧に皇親皇族を統一し、大小の氏族をして物部氏に加擔せしめなかつた爲に、物部氏は孤立して蘇我氏に亡ぼされたのである。

物部氏滅亡の後は蘇我氏獨り政權を擅にし、馬子より蝦夷に及んでは、皇室の御威德を冒瀆して惡逆非道を極むるに至つたので、中大兄皇子が藤原鎌足と謀り、入鹿を誅戮して其一族を殲滅し、茲に國家の編制を根柢より革めんとするの企てに入つた。蘇我氏の勢力が如何に強大であつたかは、蝦夷が其陵墓を大和の今來に築いた時、擧國の民並に百八十の部曲を發し、大陵、小陵二基を作り、一を己れにあて一を入鹿にあてたとある。其擬僭の狀知るべきである。茲に部曲といふのは大小の氏族に隷屬した私民であつて、氏人とは血統上の關係なく、多くの場合特別の技術を以て用ゐられた。家部（奴婢）と稱す

隷と共に古代の主要なる私有財産の一であつたことは記憶を要する。

「六」

大氏族の跋扈を何とかせねばならぬといふことは雄略天皇以來朝廷に蟠つた宿題である。皇別大氏と神別大氏とが極度まで啀合つて最後に蘇我氏のみを餘すに至つたのは毒を以て毒を制せんとした朝廷の策略か。それは餘りに穿ち過ぎた説としても、聖徳太子の如き夙に此問題に觸れて心私に苦衷する所のあつたことは、太子の政治的理想である十七憲法の第十二條がよく之を語つて居る。太子は蘇我氏の專横を拱手傍觀し、又、氏族制度の缺陷に關して、何等の意見も發表されなかつたやうであるが、其政治的理想として發表された十七憲法の第十二條には、「國司、國造百姓ニ斂スルコト勿レ。國ニ二君非ズ、民ニ兩主ナシ。率土ノ兆民王ヲ以テ主トナス。任ズル所ノ官司ハ皆是レ王臣ナリ。何ゾ敢テ公ト與ニ百姓ニ賦斂センヤ」とある。之は明かに郡縣制度を暗示したものであつて、各氏長が土地人民を私有する現在の制度を彈劾したものである。それかあらぬか、太子薨去の後、太子の遺族たる上宮の大娘姫王が、蘇我蝦夷の恣に擧國の民に課し、百八十の部曲を發して大和の今來に大陵墓を築かうとしたのを罵つて、「蘇我臣、國政を專擅し多く無禮を行ふ。天に二日無く、國に二王なし。何により一意の任に悉く封民を役せん」と罵つたのが元で、太子の遺族二十三人は無慚にも大臣入鹿の爲に撲滅されて居る。郡縣制度の理想は既に太子の十七憲法に動いて居る。唯太子が實行に勇でなかつたのは、佛教の信仰が常に太子の興味を形而上の世界に誘つて居たからではないか。之に反し一種の政治學たる儒教から進んだ中大兄皇子と藤原鎌足とが、蘇我氏の一族を殲滅して斷然革新に着手したのも面白い現象である。

大化新制の要點は土地の公有、人民の解放といふことであつた。既に述べた如く大化新制以前の日本に於いては、人民は必ず大小の氏長に統屬し、天皇は唯氏長を通じて全國の人民をシロシメスのみ、其統治權は直接に人民の上に及ばなかつた。處が大化二年の正月に發せられた第一の大詔によつて全國の人民は悉く天皇の直轄となり、大化二年の大詔によつて各氏長の私有する土地は悉く國家の公田となつた。更に詳しく（一）**人民の解放** といふことを、人民の側から説明すれば、各氏族の間には儼然たる血統上の差別があり、その差別が直に國家の秩序であつて、血族の卑しいものは、如何に才能があつても、國家の體制上血族の尊いものの上に立つことが出來なかつた。處が大化の新制によつて此血族制度が壞れ、何人と雖、

奴隷と私民とが漸くの外は其才能によつて賓家の要位に立ち、貴族の上に臨むことが出來るやうになつた。更に之を天皇の側から説明すれば、從來天皇の統治權は（1）國中に於ける氏族を代表して國神の祭祀を司られる事、（2）外國に對する宣戰、媾和。（3）氏族の設置及其廢絕、訴訟の裁斷以上三つに過ぎなかつたのが、大化の新制によつて更に（4）直接全國の人民を支配し、之に賞罰を行ひ給ふ行政上の大權が加はつた譯である。又、

（二）**土地の公有** といふことを詳細に説明すれば、全國大小の氏長から其私有の土地を沒收して之を國家の公田とし、毎戸の人口に割當てて土地を貸與し、六年に一回之を改正するの制を立てた。けれども全國大小の氏長は其私有する所の土地によつて體面を保ち、生活を支へて來たものであるから濫に之を沒收すれば天下の大亂を醸すのは明かな事である。其處で政府は三つの政策を立てて此難關を切拔けようとした。即ち（1）私領に代て食封を與へ、戸數を定めて其朝廷に上納すべき庸調の全部若しくは幾分を氏長に給與し、（2）大化新制以前に設置された地方の守護即ち國造（くにのみやつこ）の中、才幹あるものをあげて郡司に任じ、又（3）國造をして新に中央政府の派遣した國司の監督をさせた。

「七」

以上は大化新制に於ける革新の要點であるが、此れ等の中にはなほ多大の弱點が含まれて居た。此弱點を知ることは如何にして日本の郡縣制度が崩壞し、如何にして藤原氏と稱する官僚の跋扈を來し、如何にして土地、人民の支配權が軍閥の手に歸したかを知る上に於いて最も肝要なことである。缺點の最も著大なるものは、何と何つても、

（一）**私的生活の上に於ける從屬關係** の其儘に放任されたことであらう。大化新制は全國の人民を天皇の直轄とし、各人はその才能によつて國家の官職に就き、貴族の上に位することが出來るやうになつたとは云ふものの、個人の自由を保證し、權利を承認する法律がなかつた爲に、私的生活の上に於ける從屬關係は依然として昔の儘存續し、人民の解放といふことは實際に於いて行はれなかつた。維新の改革は公權の上に於いて人民を解放したと同時に、私權の上に於いても人民を解放した。西郷隆盛は王政復古の賞典に於いて藩主の上に位するに忍びずとして之を辭退したが、それは唯西郷個人の心持であつて、大久保が『昔日譚』に於いて堂々と藩主開要の態度を批難して居る所など、昔の關係は何處へ飛んで行つたかと思はれる程である。殊に大化新制の不徹底は人民の解放と同時に經濟的の自由を[illegible]

するとの出來なかつたことである。政府に於いても此點は早くから氣がついて居たものと見え、持統天皇の頃から、桓武天皇の頃にかけて盛に奴隷の解放を奬勵された事實、良民と奴隷との區別を打破された事實は見えるが、それも正面から堂々とその解放を命令されることは出來なかつたものと見える。されば地方制度の緩解と共に、地方の豪族は依然此奴隷を使役して新田を開拓し、他の豪族の私戰には『郎等』として戰場に驅使し、その軍功によつて『家の子』（良民）の列に加へたので、奴隷は之を唯一の光榮として死を懼れず主人の馬前に目覺しい働きをした。人民を解放し、土地を公有にしたといへば名義は堂々たるものであるが、其裏面には恁んな大きい弱點が潜んで居た。次に大化新制の大なる弱點として擧ぐべきは、

（二）中央政府に兵力の備へなかりし事 である。非常の大改革には必ず地方の反亂が伴ふものである。佛蘭西革命でも、露西亞革命でも殊にそれが著しかつた。明治維新の改革でも明治十年までは士族の反亂が絶えず、それから明治十八年までは政黨者流に煽動せらるる農民の一揆が絶えなかつた。新しい政府は此地方的叛亂の鎭壓を名として武備を整頓し、地方に其威力を示して行くのが殆ど型のやうになつて居る。明治維新でも版籍奉還、廢藩置縣といふ大事業を斷行するには、天下の諸侯を敵としても支障へない程の兵力を用意することが必要であつた。それには薩長土肥四藩の聯立内閣を造る必要がある。明治四年に三たびまで勅使を派遣して西郷を引張り出し、未だ青書生の大隈侯を參議に列し、板垣伯を加へて聯立内閣を組織したのは、全く四藩の兵力を結束して、版籍奉還、廢藩置縣の大事業を遂行するのが目的であつた。然るに大化新制に於ける人民の解放と土地の公有とは、明治維新に於ける版籍奉還、廢藩置縣と同じ仕事であつて、而もそれ以上に困難な事情があつたるも拘らず、中大兄皇子と藤原鎌足とは、朝廷に有力な軍隊を用意することなくして之を行はうとした。故に大小の氏長を始め地方の國造等は初めから中央政府を馬鹿にしてかゝつて居る。又中央政府も一令を布き、一詔を發する毎に豪族の顔色を見て之を行ふと云つたやうな次第で、到底思切つた改革は出來なかつた。人民を私的從屬關係から解放することの出來なかつたのも、奴隷の解放を命令することの出來なかつたものも、國造に國司を監督させるといふやうなことをしたのも、全く中央に兵力がなかつた弱味である。

此弱點は天智天皇崩御の後、直に壬申の大亂となつて現はれた。大化新制は從來、皇室及皇族に直屬した御前地の人民、又は朝廷を圍繞した其勢力には利益であつたが、東國の豪族ども

には少しも毒有くなかつた。其迄で東國の豪族とも天智天皇の崩御を機會とし、大海人皇子（天武天皇）を奉じて弘文天皇を瀬田に破り長等の山前に追窮し奉つて、飛鳥の淨見原の朝廷を立てた。此大戰爭の結果として、從來朝廷を圍繞した舊勢力は殆ど全滅し、天武天皇は潑溂たる新勢力を率ゐて政府を組織し、天智天皇の遺業を繼承して、郡縣制度に應ずる法制の完成に全力を注がれた。此場合に於いて天武天皇の偉大に在せしは、壬申の功臣を賞するに土地を以てせず、八色の姓を立てて彼等の名譽心を滿足せしめ、郡縣制度に對しては一指をも加へられなかつたことである。

雨降つて地固まる。此戰爭の結果として朝廷の御稜威は加はり、兵備も整ひ、大化新制の繼續事業たる新法令の施行も漸く其緒についたが、奈何せん。人民の私權を保護し、地方に於ける豪族の奴隷私有制度を禁止することの出來なかつた結果は、元正天皇の發布された三世一身の土地私有制度から轉じて再び封建の大勢武人の跳梁を誘導するに至つたのである。

「八」

大化新制の精神を體して發布された大寶令によると、土地は國家の公有であつて一人一家の私有すべきものでない。公分の定率によつて各戸平等に收授すべき制であつた。處が、此土地

國[illegible]制度は、[illegible]下に隷屬し、茲に再び豪族割據の形勢が大成された。

莊園とはもと別莊ともいふ程の意味で、權門勢家の宅地や、社寺の寄附田などをさした語であつたが後には、貴族、豪族の領地を一般に呼んで莊園といふやうになつた。莊園の起りには種々ある最も一般的であるのは元正天皇の養老七年に定められた三世一身の法である。即ち荒蕪不毛の地を開墾して新田としたものには三世の間其領有を許すといふ制度であつた。處が此三世一身の法は聖武天皇の時に至つて永久の私有制度に改められた。之は農業を奬勵し、國產を增殖する上から止むを得なかつたことかも知れぬが其結果は中央政府の權力者、地方の豪族若しくは國司、郡司の官をやめて土着した者を利することとなつた。彼等は此法令が發布されると爭つて荒蕪地を開墾し、官許を得て之を私有した。多くの奴隷を私有し、漂泊の農民を集めて之を驅使することの出來るものが多くの墾田を得た、私有地には此外になほ賜田、功田などから來たものもあつた。賜田とは特別勅を以て賜はる所の輸租田であつて、例へば推古天皇の時佛師及太子に賜つたのを始めとして、壬申功臣中の或るものに賜つたのや、博士、遣唐使、官吏等の功績顯著なるものに賜つたのがそれである。功田とは大寶令の定むる所により、國家に對

功のあつた人に賜る所のものであつて、制には一世、二世又は三世の後に之を公に返し奉るべきものとなつて居るが、法令の弛廢と共に子孫之を他人に賣却し、又は佛寺に託して私かに領有するものがあつた。

大化新制によつて全國の人民は天皇の直轄となり、國家に對する權利を平等にせられたと同時に、租庸調の制度が定まり、齊しく納税の義務を負ふこととなつた。處が彼等はその私的生活に於ける自由を保證されて居なかつた爲に、實は舊來の主人たる氏長に對しても納税の義務を負はねばならず、二重の誅求に堪へかねて住みなれた土地を離れ、中央政府の手の屆かぬ地方に漂泊することとなつた。處が權門、豪族の手によつて開墾された新田は國司の支配を受けず租税も輕かつたので、地方に流離した人民は爭つて勢家の民となり、その莊園を耕すことによつて鬼の如き國司の誅求から逋れようと企てた。

處が開墾地私有の許可がなかつた以前から、國司は其管轄内に於いて最も肥沃の地を私し、官より窮民に貸與すべき租稻を横領し、或は中央政府に輸すべき公租を流用するなど、不正の收入が甚だ多かつたので、政府の權力者に對する請託奔走の弊最も甚しく、初めは四年交代の制度であつたが孝謙天皇の時六年となり、果ては任期滿ちた後も其地を去らず、甚しきは官をやめて土着し、殆ど領主の姿を以て新任の國司を睥睨するものあるに至つた。聖武天皇の墾田私有制度が、此弊を利益した事情は察するに難からぬ。

地方制度の斯くの如き廢頽はこれ然しながら中央に於ける官僚政治家の罪であつた。彼等は國司の請託を受け、賄賂を貪つて制規を亂つたのみか、彼等に託して地方に其莊園を開き、權勢にまかせて隣接の民田はもとより、甚しきに至つては朝廷の御領をさへ侵犯し奉るものが多かつた。藤原氏が政權を專らにするに及んで此弊は極點に達した。唯玆に注意すべきは斯くの如くにして全國に蔓延した國土の横領者が、政權の中心たる藤原氏の手によつて統一せられ郡郷を通じて一つの有力なる經濟的支配階級を形成して居たことである。此關係を更に詳しく云へば、功田、賜田の如き小さい莊園の持主は、かゝる天下の形勢に於いて權門勢家の莊園と境を接し、若しくは有力なる國司の私有地に隣接して到底其領地の安全を保つことの出來ない事情を察し、初めから之を權門勢家に託して自分はその領家若しくは地頭の職に甘んずるものが多かつた。其他の國司と雖、何等かの方法を以て歎を藤原氏に通じ、其藩屏を以て甘んずることを明にせざるよりは到底其地位の安全を保つことが出來なかつた。斯の如くにして藤原氏は大體において全國の土地私有者

を統一し、之を自分の支配下に置く事が出來た。

稱德天皇の時、莊園增加の弊を察し、國司、豪族の開墾を禁斷し百姓の流離して權貴の莊園に入るを制せられたのを始めとし、爾後歴朝屡々詔勅を發して國司の非違を責め、百姓の生業を奪ふことを戒められたるにも拘らず其流弊の滔々として底止する所を知らざりしも道理、國土横領の元兇は君側にあつて國司と通じ、陰に陽に彼等を庇護し、彼等の私曲を幇助して居たのである。

「九」

平貞盛は平將門の叛亂を平げ、源頼信は平忠常の叛亂を平げ、源頼義は安倍頼時の叛亂を平げ、源義家は清原武衡等の叛亂を平げ、それ〴〵朝廷に忠勤を勵んだといふことになつて居る。けれども之等の武人は果して皇室の御威光を張る爲に、又、國家の安寧を保持する爲に戰ふの外、中心に不純な何ものをも交へなかつたか。又、平將門の如き、果して歴史の語るが如く朝廷に對して覬覦の心を抱いて居たものか何うか頗る疑問である。純友と牒合せて東西一時に兵をあげたといふことも、今日から見れば頗る怪しい。唯當時の藤原氏としてはさうも云ひ、さうも考へたであらう。忠常、頼時、武衡など恐らく叛逆などいふことには夢にも思ひ及ばなかつたであらう。國司を凌轢し、公田を掠めたものは必ずしも彼等ばかりではない。當時の日本は實に强盜の横行と、豪族の私鬪とで持切つて居た。否、國土横領の元兇は寧ろ藤原氏自身であつた。藤原氏の利害に觸れないもの、詳しくいへば藤原氏の系統に屬する國司、豪族の領土に危害を加へない侵略攻伐は、之を勝手に放任した。而も彼等の足が一歩でもその利益圏内に入つたと見るや、藤原氏は之を謀叛と呼び、逆賊と貶し、彼れ危險思想を抱けりと叫んで禁闕の武人に出征を促した。將門が伯父を殺し、源護の子等と兵を弄したことの申譯が立つたのは、それが藤原氏の利益圏に觸れなかつた爲である。その勢に乘じて關八州に手を伸したのは、やがて彼が危險思想を以て彈劾された所以である。前九年の戰は藤原氏の一門たる藤原登任が挑發したもので、頼時を亡ぼした源頼義には賞があつたけれども、清原家の御家騷動を平定した源義家には賞がなかつた。

之を要するに藤原氏は官僚の總本山で、之に養はれ、之に驅使された源氏はその爪牙であつた。禁闕の守衛たり、國家の干城たる軍隊の首腦が、社會の經濟的支配者と合體し、一部特權階級の利益の爲に兵力を濫用することの興味を覺えることは國家にとつて此上もない危險である。何となれば、彼等は之によつて自家の實力を知り、官僚と提携するまでもなく、自ら社會の

經濟的支配者となり、同時に强大なる軍隊を其手裡に掌握することの興味に思ひ至るからである。

殊に平將門の叛亂以來、中央政府の無力無能は遺憾なく地方の豪族の前に暴露された。國司郡司はあつても案山子同樣のものである。檢非違使も、押領使も實力を以て脅かせば手を出し得るものでない。鎭守府將軍でさへ其率ゆる所の軍隊は主として地方に於ける他の豪族の力をかたらうたものだある。若し地方の豪族にして政府の催促に應じ將軍に加勢しなかつたならば、將軍如何に勇ありと雖も、大豪族の力は之を如何ともすることが出來ないといふことが痛切に地方の豪族の頭腦に刻み込まれた。從來は中央の文飾に驚き、京都の生活の豪奢華美に眩惑して只管官位官職の高きに憬れたものが、藤原氏の勢力を離れて獨立する豪族の叛亂によつて、中央との接觸が頻繁を加ふるに及び中央の文明必ずしも恐るるに足らず、官位官職必ずしも得るに難からず、自分達の實力は反對に中央の政治を左右し得るに足るものであるといふことを自覺するに至つた。日本に於ける社會的大變動の氣運は玆に動いた。

殊に注意すべきは將門の叛亂以來、數度の征戰に將軍として赴任した中央の武官と、地方の豪族との間に切つても切れぬ親密の關係の結ばれたことである。將軍は其加勢を賴んだ地方の豪族を朝廷に推擧して檢非違使とか、莊司とかいふ朝官の世話をしてやつた。朝廷に於いて賞の行はれなかつた場合は自ら私財を割いて之に酬いた。又、將軍は地方の叛亂鎭定に從ふ毎に新領土を得て其處に一門一族を封じた。かくして地方に繁衍した源平二氏の子孫は、氏號の外に其領する土地の名を名乘つて苗字とした。源義家の子義國は上野の新田に居り、佐藤氏の邑、足利を侵略して新田、足利の兩氏を起した。伊豆の北條氏、相摸の三浦氏、武藏の秩父氏、下總の千葉氏は何れも平氏の一族である。

後三條天皇の英邁を以てして始めて官僚の總本家たる藤原氏の專橫驕逸を制することを得たのはもとよりであるが、藤原氏の政權失墜は唯時期の問題で、地方に於ける豪族の自覺はやがて藤原氏を蹴落して武家の政治を建設すべき氣運に迫つて居た。さればこそ後三條天皇は皇室に對する姻戚關係と、其爪牙たる源氏の威力との外には何ものもない藤原氏に對して疾風迅雷的の一擊を加へることには十二分に成功されながら、寛德以後の荘園停廢といふ政治の大眼目に於いて行惱んで居られる。

「十」

藤原氏の爪牙となり、藤原氏の利益を擁護するの機會に於いて、東國にその勢力を扶植して來た源氏が、藤原氏の沒落と同

時に一時中央の舞臺から驅逐されるのは蓋し自然の成行である。

平清盛は決して尋常の人物ではなかつた。瀬戸内海の經營といひ、寺領の沒收といひ、政治家としての著眼は却々非凡であつたが、保元、平治の運動は、彼をして自家の力を餘に過大に信ぜしめたものか、天下の豪族を如何にして制馭すべきかといふ消極的の用意には少しも心を用ゐなかつた。彼は地方生活獨立の大勢に對し、何處に釘を打込めばよいかといふことに思ひ至らざりしのみか、伊豆、相模、武總、上總の地方に繁衍した一門の勢力に釘をさして置くことをさへ忘れて居た。さうして美しい姫を皇室に納れて、外戚の威を張るといふ藤原氏の覆轍を驀然に進んだ。

其處へ行くと源頼朝の經綸は流石に偉大であつた。彼は東國に人となつて豪族の地方生活を眼のあたりに見た。豪族の中央政府に對する意氣込みを十分に理解した。頼朝の政治の要諦をいへば、地方に割據した豪族をして各自其處を得せしめ、其領土の安全を保證することによつて天下の人心を收攬することにあつた。當時の人心を一言にしていへば不安の二字に盡きて居る。一度得た領地を如何にして安全に保持し、之を子孫に傳ふべきか。豪族と豪族との間には激しい存立競爭がある。又一方には公田の横領者でありながら、なほ國司、郡司の職權を濫用しようとする名のみの地方官がある。白晝の强盗とも云ふべき檢非違使、押領使がある。之等の勢力が入亂れて侵略横奪を事として居るのであるから、小國と云はず大國と云はず、其領主たるものは一日も枕を高くして寢ることは出來まい。此情勢を仔細に見て取つた頼朝は若し玆に强力な政府があつて、先づ國司、郡司、領家、地頭などいふ官威官權の濫用者を制壓し、大豪族の野心を挫き、小豪族の財産を保護し、天下の人をして各々其處を得せしむるに足るだけの威信ある政府があるならば、諸大名の心は靡然として歸服するに相違ないといふことを達觀した。

頼朝は平氏を亡ぼし、義仲を討ち天下の大豪族に對して十分に其威力を示した後、先づ、官威官權を濫用して私曲を營む國司、地頭を制馭する仕事に取かゝつた。即ち國司の管轄する所へは守護を置き、權衛勢家の莊園にして領家の管轄する所へは地頭を置き、國司の權を守護の手に收め、領家の權を地頭の手に收めることに努めた。先づ舊來の國司と新しい守護との關係を見るに舊來の國司の職權は其國内に於ける權貴の莊園には及ばなかつたが、守護の掌る所は、其國内の警察事務であつて莊園にせよ、公田にせよ、苟も其管轄區域内にある土地に對しては、何處へでも手をつけることが出來た。此外に守護の職として

には、其管轄區域内から京都の大番（勤番の武士）を出す事があつた。從つて此二つの仕事の外は依然國司が之を掌つたのであるが、實は守護の爲に漸次その職權を奪はれて有名無實のものになつてしまつた事は察するに難からぬ。又中央政府を圍繞する權門勢家の莊園を管するものは、領家といひ、莊司といひ、地頭といひ、その名稱は種々であつたが、賴朝は此處にも地頭といふものを置いて、從來の領家の手から支配權を奪ひ、之を鎌倉幕府の手に收めた。

斯くの如くにして賴朝は全國諸大名の爲に官威官權を濫用する官僚系統の貴族を制馭して其不安を除くことを得たけれども、此施設を徹底させる爲には鎌倉の節度に服さぬ、換言すれば其勢力の擴大なるに任せて飽く迄も其領土を擴張しようとして居る大貴族を武力で極度まで叩きつける必要がある。守護、地頭の設置について此仕事が文治二年に始まり、建久元年に完了し、東は陸奧の果から、西は鬼界ケ島まで賴朝の威令に服することとなつた。玆に於いて賴朝は全國の守護、地頭を總管して六十六國の總追捕使となり、征夷大將軍を以て文武の大權を掌握し、從來極めて不安定であり、不徹底であつた官僚政治に整然たる秩序を與へ、武家專權の基を開いた。

「十二」

賴朝以後の歴史は、唯武家專權の事實を羅列するに過ぎず。本論の目的は大體に於いて以上の叙述に盡きた譯である。何となれば、賴朝以後の官僚政治には悉く『東鑑』を以て教科書とし、賴朝を理想の人物として模倣したものに過ぎぬ。北條氏が諸大名に對して如何に源氏の總番頭たる誠意と、天下の公僕たる謙遜の態度とを披瀝したかは玆に說くまでもない。痴呆の子高時は祖先の心を解する能はずして鎌倉幕府を革命の猛火に投じ、後醍醐天皇の踐祚には、賴朝以來の『御家人』が中興の御事業に味方をした心理狀態を理解するもの少く、彼等の財產慾を適當に導くことが出來なかつた爲に、折角の御努力も中途にして水泡に歸し、足利尊氏は賴朝の幻影となつて諸大名の前に現はれ、努めて賴朝の統御術を學ぶことによつて諸大名の心を捉へた。吉野の朝廷は北條氏の破壞と、北條氏の設置した新補地頭によつて擁立されたけれども、本補地頭の勢力には敵すべくもなく、室町幕府の紀綱が亂れて、諸大名の心から鎌倉幕府の幻影が滅し去ると同時に天下は再び亂れて、諸大名が各自に其財產慾を主張することゝなつた。

此戰國の末にあたつて、日本歴史に中世と近世とを分つべき社會的大變動の種子が播下された。それは西班牙、葡萄牙、和蘭、英吉利の商船が齎した商工資本主義である。さうして此商

工主義の先鋒となつて武士の日常生活から、戰術、戰法に至るまで、ドシ〳〵突き崩して行つたものは、天文年間種子ケ島に渡つて、十年ばかりの間に全國を風靡した鐵砲である。此新しき文明の潮流に乘じて手際よく日本を統一したものは豐臣秀吉である。彼は日本國の富の胃の腑ともいふべき大阪に西洋風の城廓を構へ、海外との貿易によつて財政を豐かにし、商業主義を以て、農業主義の諸大名を壓倒した。彼は新式の武器と戰術とを用ひ、『戰爭目的』を定め、外交に重きを置き、多く百姓を苦しめず、多く人を殺さずして天下を統一した。秀吉から天下を讓り受けた徳川家康は、外國との交通を禁斷して商工資本主義の侵入を防ぎ、『東鑑』を敎科書として武家法度、公武法制を定め、賴朝の政治を理想として兎にも角にも三百年泰平の基を立てた。かゝる歷史の解釋により、私は常に武家、軍閥の專權を大伴、物部氏の跋扈から說き起し、室町幕府の盛時を以て一段落とし、戰國以後は武家の專權に代つて現代を支配すべき資本の力が何處より來り、如何にして農業本位の封建制度を侵蝕し、武家の生活を壓迫して明治維新の政變を現出するに至つたかを硏究すべき時代と信じて居る。武家の政治といへば前に述べた如く、鎌倉以後の覇者は秀吉一人の新模型を除き、他は皆賴朝の模倣者である。秀吉の偉大をいふものは多いが、未だ此意味に於いての秀吉の偉大を云つたものがないのは、[illegible]の研究も幼稚といふを免れぬ。

以上の理由により賴朝以後に於ける武家の專權に關しては利害列擧の煩を避けるが、結論に先ち一言說明を要するは承久兵亂の意義である。或る事象の眞の原因は、多くの場合に於いて直に表面に現はれず、他の小さき原因が導火線となつて現はれるものである。處が承久の兵亂は稀らしくその導火線となつた眼前の事實が根本の意義を說明して居る。承久の兵亂は人も知る如く、後鳥羽上皇が御寵愛の龜菊といふ婦人に賜はつた攝津國長江、倉橋の兩庄に於いて、鎌倉の地頭が龜菊の置いた領家を蔑ろにしたことから起つた。思ふに此種の衝突は此事件一つでなく賴朝が國司に對して守護、領家に對して地頭を置いてから全國到る處に頻々として起つたものと思はれる。さうして朝廷の御憤りが募り募つた所に承久の兵亂が爆發した。故に承久の兵亂は朝廷が武家に對して土地の支配權を爭はれた最後の悲劇であつたといふことが出來る。

處が此兵亂の結果として多數の公卿が其莊園を沒收された。北條氏はかくして生じた闕所を、戰功のあつた將士に頒與した。賴朝の時に封ぜられた地頭は、舊來の領家に對して支配者たるの資格に止まり、その土地の持主は原として存したのである。

が、此時に封ぜられた地頭は、其土地の持主と支配者とを兼ねることになつた。而も北條氏は此新地頭を補するに多く一門の將士を選んで之に宛てたので、頼朝以來の舊地頭は私に不平であつた。世に前者を本補地頭といひ、後者を新補地頭といふ。本補地頭は新補地頭に對して頼朝以來の家柄を誇り、『御家人』の稱號を以て私に俄大名に對する當てつけとした。處が元寇の役後、北條氏は再び將士の功を賞して新補地頭を置いたが其結果は同じく一門一族に厚かつたので本補地頭の不平は愈々加はり、高時の時に至つて遂に爆發して鎌倉の燒打となり、六波羅の攻略となつた。

德富蘇峰先生は南北朝の分立を後世の朱子學に胚胎した國民の思想によつて解釋して居られるやうであるが、私の解釋する所によれば大體に於いて京都の朝廷は本補地頭によつて立ち、吉野の朝廷は新補地頭によつて立ち、本補地頭の内訌から其中の有力な或るものが吉野の朝廷に御味方に參つた時、吉野の兵力は屢々京都を脅威した。

「十二」

版籍奉還、廢藩置縣の後、山縣公は徴兵制度を主張し、西郷隆盛は壯兵制度を主張し互に固く執つて相爭つた。

山縣公は曰く、『親兵（薩長土の兵）をして永く東京に駐屯せしめんか、兵權また三藩の手に歸し、再び中古の源平二氏を生ずるが如きことなきを保すべからず。如かず三藩の親兵を廢して全國皆兵の古制に復せんには』と、西郷は之を駁して曰く、『平民の子は怯懦卑屈にして用を爲すべからず』と。山縣公更に之に答へて曰く、『今の軍隊は銃隊組織にして古の如く個人的の格闘をなすものに非ず。之に團體的訓練を施さば、以て國家の干城たらしむるに足らん』と。兩人は固く執つて動かなかつたが、山縣公陸軍大輔となり、近衛兵の都督を兼ぬるに及んで其説は着々として勢力を占め、明治五年には徴兵令の發布となり、平民の子弟が徴集せられて練習に就くと同時に、曾て各藩から集つた壯兵は悉く解散となつて歸國を命ぜられた。茲に於いてか士族は明治政府によつて祖先以來の職を奪はれた如くに感じ、その不平は鬱勃として天下に漲り、鎭臺兵を以てその仇敵視するに至つた。

佐賀の亂といひ、萩の騷動といひ、神風連の變といひ、秋月の騷動といひその背後の抱懷した主義、思想は種々であつたが、其軍の主力たる士族の不平は皆一つであつた。さうしてこれら大小無數の地方的叛亂は遂に合して西南戰爭といふ大騷動となつた。西南戰爭は山縣公の徴兵主義と、西郷の壯兵主義とが極度の力に於いて、事實の上に其優劣を試驗されたものであ

る。何となれば西洋に古今を通じて無比とまで謳はれた武人中の武人である。さうして之に從ふ薩摩軍人は日本武士の精華として定評のあるものである。又、之を鎭定すべき鎭臺兵は昨日まで土百姓よ素町人よと嘲けられた平民の子倅である。辛うじて小銃の操縱と、團體の駈引とを覺えたばかりの所謂『コッパ』である。然るに其結果は見事に鎭臺兵の勝利に歸した。平民の子倅はその文明の利器と、團體的訓練の力とによつて慓悍決死の薩摩武士に打勝つた。古今無雙の英雄に詰腹を切らせた。山縣公の得意想ふべしである。

此點から考へると山縣公は大の民本主義者である。當時の日本に於いて徵兵制度を主張し、之を實施するのは、今日の日本に於いて普通選擧を實施する以上の大英斷である。殊に薩長土三藩の親兵をその儘にして置いては再び源平二氏の如き豪族が起るといふ所に御氣の付かれたのは、實に驚くべき大見識である。此人に對して軍閥呼ばりをしたり、官僚呼ばりをしたりするのは、如何にも勿體ない。無禮千萬である。デモクラシーを說いて佛蘭西革命を知らず、憲政擁護を叫んで明治維新を解せざる近頃の大膽な政論家でなければ出來ないことのやうにも思はれる。

けれども茲に一つ山縣公の全く判らんで居られることがある。公は嘗て若し親兵を其儘にして置いたならば、再び源平二氏の如きものが生ずると云はれたが、其源平二氏こそ土地の豪族であつて、現代には再び甦ることの出來ぬ歷史上の化石である。明治維新は封建主義に對する國家主義の世界的勝利である。農業主義に對する商工主義の世界的勝利である。大名小名（西洋でいふ貴族、僧侶）と稱する大地主に對する町人と稱する商工階級の世界的勝利である。現代の社會的支配者はモウ昔のやうな土地の豪族ではない。故に若し現代に於いて軍隊の墮落を憂ふるならば、源平二氏の如き地主的軍閥の出現を想像する必要はない。私達の豫想すべきは、舊露西亞が經驗した如き資本的軍閥の出現である。幾百萬の生血を犧牲にして少數資本家の利益の爲に、放資の舞臺と利權とを獲得せんとする資本的軍閥の出現である。

世には浪人といふものがある。働かずして堂々たる門戶を構へ、勞せずして美衣美食に飽き、妾宅に飮み、紅樓に嘯き、口を開けば領土の擴張を論じ、國威の發揚を說き、中心國を憂ひ、民を懷ふが如くに裝ふけれども其生活費の出所に至つては全く疑問である。けれども仔細に彼等の生活を觀察すれば、彼等の背後には石炭の出る國がある。鐵の出る國がある。彼等の足は常に資本家若しくはそれに準縁するものの門を離れぬ。唯、

變ふるのは彼等の忠君愛國呼はりと、怪しげな大陸膨脹論とが覇氣滿々たる軍人の耳に入り易く、互に親交を訂し易きことである。

其日常生活の殆どすべてを富豪と呼び、投資家と稱せられる人々に圍繞せられて憚らざる元帥があり、大汽船會社の重役に別莊をかりて炎寒を避くることを少しも異とせざる大將がある以上、軍閥の跳梁を罵る國民の聲は未だ必ずしも空虚でない。土豪としての源平二氏は過去の夢であるとしても、資本家としての源平二氏は、或は之を見るの日がないとは云へぬ。深くいましむべきである。

軍務と政務との調節

貴族院議員　江木翼

我國の制度並びに實際の上に於て、軍務なる事柄は普通一般政務とは獨立して、別箇の區劃をなし、別箇の活動をなし、普通一般政務の掣肘を受けない場合がある。此點に於て我國國政の全體から之を觀れば、一般政務の上に於ては恰かも半身不隨の狀態にあるが如く、又軍務の側より之を觀れば、別箇の政務團體の存在するが如き觀が無いではない。殊に此狀態は陸軍に於て最も然りとするのである。

陸軍に於て斯くの如くなつて居る理由は、歷史的の因由である事と思ふが、其結果として陸軍には永く世人の稱して軍閥といふものが跋扈して、制度上にも亦實際上にも宛然別王國を形造れるが如き觀なき能はない。惟ふに斯くの如くなつた其根本は如何なる處にあるかといふ事は、詳しく講究する必要も無いが、兎に角憲法制定以前內閣制度改定の際に明かに軍規軍令に關する事項については、政府は關與する限りではないといふ事を定めたのである。爾來今日に至るまで其範圍は漸次伸長するとも縮少する事無く、直接間接に軍務が他の一般政務に影響を及ぼし、掣肘を加へて一般政務の疏通を害し、甚だしきに至つては妨害をなす場合が少くない。殊に陸軍に於ては制度上又實際上、自由活動の範圍が廣く、他を制肘するの力が強いやうである。今一二の事例を擧げて言つて見れば、行政各部の官制なるものは、政府に於て審議して、而して官制を以て公布せらるゝに拘はらず、陸海軍の編成に至つては、政府に於ては全然與り知らないのである。秘密にする必要があるといふ事と、政府が其議を決する事とは全然別問題である。政府が決定して、若し秘密にする必要があれば公布しないまでの事である。陸海軍の編成は公布せぬ主義を取り、其內容に至つては政府は全く決

定權を有つて居ない。一方豫算は政府が之を決定する。然るに一方編成に至つては政府の容喙を許さぬといふので見ても、政務が恰かも半身不隨である事が分かる。

○

其他擧げ來れば斯くの如き事例は非常に澤山の數に上るが、一々茲に列記するの煩は今日之を省略する。か丶る奇怪なる現象が存し、而して斯くの如き制度の運用の、實際に於て甚だ奇怪なる狀態を示す事は、政務の眞諦に觸れたる人の夙に知る處であらうと思ふ。中に就て近頃最も甚だしいと思はれる點は、外交の事に至るまで所謂軍閥なるものが影響し掣肘を敢てするといふ事柄である。元來陸軍は陸軍の必要のために、世界の各地に特派の機關を置いて居る。而して是等の機關から來る所の情報は、參謀本部に集中するのである。參謀本部は豐富なる報告を世界の各地——殊に極東に於ける各方面より得つ丶あるのである。此情報は直接に參謀本部に集まり、而して是等情報の發せられる土地に駐在せる外交機關等を經由する事はないのである。是等の情報こそ即ち所謂軍閥なるものが外交機關に對して物言ひを付ける根據となるものである。之に由つて陸軍の首腦者は、其報告を基礎として外務の外交機關を壓迫するのである。而して外交の進行即ち外交家の協調とか世界の大勢とかから割出して進むべき微妙なる外交の作用を制壓して、不自然なる國家機關の發動を促すといふ事が往々あるのである。斯の如き弊は恐らく歷代の外務大臣にして之を經驗せなかつた者は一人も無いと言つて可からう。外務大臣を經驗したる所の二三の、所謂前外相が相會して往事を語る場合に常に其話頭に上るものは、陸軍軍閥に壓迫せられた苦痛で持ち切るといふのでも、略ぼ其間の消息が知れるであらう。

○

今回西伯利の出兵問題といふものが起る前後より之を察するに、所謂軍閥の壓迫掣肘なるものが甚だ强力なる勢を逞しうした事は、想像するに難くはないのである。將來とても斯の如き制度、又斯くの如き實際上の事態が存續する限りは、所謂軍閥なるものが外交を掣肘し、財政を掣肘し、產業を掣肘し、甚だしきに至つては學問思想までも掣肘せんとするが如きは、決して根絕する事は望まれないものと信ずる。一々之を事例に充て丶批評するに於ては、固より其材料に乏しくないのは申すまでも無いが、今は其煩を避けて、唯斯くの如き制度斯くの如き事態の下にある一般國民は、一日も早く此等の制度事態を改善し、是等の制度事態に由つて受くる國家の累を削減しなければならぬといふ事に深く戒心する所あらん事を希望する。(談話筆記)

マルクス批評家の一模型

(北昤吉君の『近世社會主義の檢討』に就て)

法學博士　河　上　肇

(一)

私は嘗て本誌に井上文學博士の社會主義論を評するの一文を載せて貰つたことがある。其時は、博士が社會主義を以て進化論を無視せるものと爲して之を攻擊せられたるに對し、少くともマルクスの社會主義は、啻に之を無視せざるのみならず、寧ろ之を歡迎し、却て其上に立脚せんとするものなることを、明かにせんとするに在つた、と記憶する。今私は其因みに依つて、北昤吉君が本年八月號の「中外」に載せられたる「近世社會主義の檢討」の一節を批評するの一文を艸し、之を本誌に寄せんとする者である。

北君の議論中、私の默過することの出來ぬのは、同君が其批評の對象物を甚しく曲解又は誤解せられて居る點である。

北君は先づ言はるゝやう、「カール・マルクスは千八百九十六年に「資本論」(Das Kapital)を著はした。之が社會主義のバイブルとなつて居る」と。此一句を見て驚かさるゝ者は、恐らく私一人ではあるまい。兎も角、私の手許に在る資本論を、念の爲め調べて見ると、其は三卷から成り立つて居る。さうして第一卷は——私の手許に在るのは初版では無いが——其初版は確に一八六七年に出て居る筈である。第二卷第三卷は、手許に在るのが何れも初版だと信ずるが、其發行の年を見ると、第二卷は一八八五年で、第三卷は一八九四年になつて居る。然るに北君の説に依ると「マルクスは千八百九十六年に資本論を著はした」と言ふことである。マルクスの書いたものは、縱ひ斷簡零墨でも、苟くも彼の面影を見るに足るものあらば、何れも太く珍重せられて、時折「ノイエ・ツァイト」などに收錄してあるのであるが、彼が一八九六年に著した資本論なるものは、私が今日初めて北君から聞く所である。然らば其資本論には、果して如何なる議論がしてあるか。參考の爲に、北君の紹介せられたる所を、

者少しく左に抄録して見やう。北君曰く、

『マルクスの説いた所の科學的性質は千言萬語、一に攝することは容易に出來難いことであるが、マルクスの學徒等が種々の會合に於ける所の宣言に演説に傳道に若しくは著書に摘要し來る所の中心思想に據つて窺へば、左の思想を中心原理として居る。

一切の富は勞働に依つて生產したものである。これ故に其一切の富は勞働者の受くべきものである。

此原理に接した時、人は何を感ずるであらうか。一面は正義の本能より。他面は利慾の本能よりして之を歡び迎へて眞理とするものが極めて多くあらう。果して之を歡び迎へたとすれば、其後に直ちに來る所の推論がある。一切の富が悉く勞働の結果であるとすれば、勞働せずして其富を受けて所有とするものは、是れ掠奪の性質を有するものである。勞働に生きるものは省ちに其奪はれた富を恢復せねばならぬではないか、と云ふが之である。是等の原理を成立せしむるが爲に、マルクスは生產の史的觀察を以てする。云々』

此一節を讀むに至つて、私は益々疑惑に陷る。何故といふに、今日迄私の理解して居るマルクスの中心思想は、北君の紹介せらるゝ所と、甚しく相違するからである。尤も資本論を見ると、其中には[illegible]ものは[illegible]。併し其も、北君の紹介せらるゝが如きものとは、固より雲泥の差がある。私は今、マルクスの勞働價値說を說明するが如き、餘計な仕事を控へるであらう。北君の言はるゝ所が、私の見た資本論の中の議論と如何に相違して居るかは、其中の一二句を譯出したならば、直ぐに分ることである。

私の使つて居る資本論第一卷の九頁乃至十頁の所には、マルクスは次の如く述べてゐる。

『着物、麻布、其他の使用價値、簡單に言はば商品の體（die Waarenkörper）は、自然の材料及び勞働といふ二個の要素の結果である。若し着物、麻布、其他の商品の上に費されたる種々の有用なる、勞働の總體をば、凡て取り去るならば、殘る所のものは、常に物質的の土臺であつて、それは人間の助力なしに、自然に依つて供給されたものである。人間は貨物の生產に當りて、只自然と同じ働きを爲すものにて、即ち單に材料の形を變化し得るだけのものである。否な、加之、人間は此の如く材料の形を變化せしむるの働きを爲すに於て、常に自然力に依つて助けられて居る。されば、勞働は決して其の生產する所の使用價値、即ち有形の富の唯一の源では無い。げにヰリアム・ペティーの言へるが如く、勞働は其（有形の富の）

父にして、土地は其母である。』

北君の說に依れば、マルクスの中心思想は、一切の富は勞働に依つて生產したものである、と云ふに在るとのことであるが、マルクス自身は、勞働は決して其の生產する所の有形の富の唯一の源では無い、と明言して居るのである。

或は又、資本論の中最後に公にされた第三卷を見ても、例へば第三卷の下册三五一頁には、『土地は生產の原因(Produktionsagent)として、一の使用價値、一の有形的生產物、例へば小麥の生產に參加する』などと書いてある。即ち小麥は勞働に依りてのみ生產さるゝものでは無い、といふのである。

なほマルクスが資本論第一卷の公刊に先つこと數年前、一八五九年に著した「經濟學批評」を見ると、私の使つて居る曲氏本の第十三頁には、次の如く述べてある。

『勞働は、使用價値を作り出すものとして有效なる限り、之を以て、その作り出す所の富、即ち物質的富の唯一の源なりと云ふことは出來ぬのである。』

此の如く、私の見て居るマルクスの著書には、何れも皆、勞働を以て富の唯一の源と爲すは謬誤なり、と論じてある。然るに北君は、一切の富は勞働に依つて生產されたるものであると云ふ主張を、マルクス自身が明かに其は謬誤であると言つて居る主張を以て、マルクスの思想の中心原理たるものなりと斷定され、かくて同君は『此勞働を唯一の富の原因とし、生產の唯一の根源とするの思想は、果して絕對の眞理であるや否や』とか、『勿論マルクスは大材である。其大なる思想に出づる社會主義は、十九世紀に於ける科學的一大產物であることは、云ふを俟たぬ所であるが、而かも近世の最も複雜なる產業に對し、其富の原因を單一に勞働にのみ歸するは、餘りに單純な觀察ではあるまいか』といふ調子を以て、滔々百千言、所謂近世社會主義の檢討の爲に、前後二十餘頁に亘る論文を佛せられて居る譯である。北君の言に依れば、マルクスは偉大なる思想を産んだ大材だといふことだが、その偉大なるマルクスが、『餘りに單純な觀察』を其思想の中心原理として居て、北君の爲め『餘りに單純に』打ち敗かされて居る所は、聊か吾々にとつて不思議の感がある。竊に思ふに、北君御所藏の資本論は、何人かの惡戲に成る僞版ではあるまい歟。

(二)

私は考へるに、其僞版は多分外國で出來たもので、從來歐米にも行はれて居たものゝやうである。例へばマロックといふ英國の學者が、一九〇六年に米國に渡つて、コロンビア、ハアバアド、シカゴ、ジョンス・ホプキンス等の諸大學に招かれ、社會

主義に就て講演したことがあるが、其內容は一九〇七年に『社會主義』（ソシャリズム）といふ標題の小冊子に纏めて公にされてある。それを見ると一大思想家が起つて社會主義に科學的基礎を與へたが、其思想家といふは『有名なるカアル・マルクスで、此人の資本論は、第十九世紀の略ぼ中頃に公にされた云々』と書いてある。（同書六頁參照）。即ちマロックといふ人は十九世紀の中頃に出たマルクスの資本論といふ書物を持つて居るらしいのである。さうして彼の言ふ所に依れば、『マルクスの科學的經濟的の實際的結論は「一切の富は勞働に依つて生ず、故に一切の富は勞働者に歸すべきものである」といふ定式に摘記されてある』といふのである。之に依つて見ると、其出版の時代といひ、其內容といひ、マロックの持つて居る資本論も、北君の見て居られる資本論も、吾々の見て居るものとは、大變に相違して居るのである。

なほマロックは翌一九〇八年に『社會主義の檢討』(A Critical Examination of Socialism) と題する三百頁の著書を公にして居るが、之をば北君の今度の論文と比較して見ると、不思議なことが多い。先づ此書の九頁から十頁の所を見ると、次の如く書いてある。

『マルクスの科學的推理の實際の結論は、一切の富は勞働に依つて生産されたものである。この故に其一切の富は勞働者の受くべきものである（註に曰ふ此一句は上に引用されたる所と同じ）といふ命題に纏められてあるが、之は彼の後繼者の催せし總ての會議、彼等の著せし總ての著書及び宣言書、彼等が街頭に於て吐きつゝある總ての煽動的演說にとりて、其前提となり、又其結論となれる所のものである。――說そのものは、一の信條として見れば、何等新らしきものに非ざれども、只マルクスに在りては、之が複雜面倒なる經濟學の系統（システム）の結論と爲つて居るのである。』

之を見ると、益々北君の說明に近くなるやうであるが、なほ之に引續いて述てある議論を見ると、確にマロックの見た資本論と、北君の見られた資本論と其出版の年代は違つても、之が內容は同じものに相違ないと思はれて來るのである。尤も私は、讀まなければ分らぬ本の多い今日、こんな馬鹿々々しい出鱈目から發足したマロックの著書などは、曾て讀む氣にはなれぬのであるが、簡單に目錄を一瞥すると、北君の論文に如何にも能く似て居るのである。

先づ第一に、富は勞働に依つてのみ生ずるものでは無い、といふ事が書いてある。勞働の外に、勞働を組織し指導する所の優等なる精神作用が、今日の産業には是非必要だ、と書いてあ

る。即ち勞働には二種類の區別があると書いてある。さうして其中、優等なる精神作用に本くものは、他の肉體的勞働と區別する爲に、姑くabilityと名けると書いてある北君も勞働に二種類あることを說かれ、其中で指導力を有する精神的勞働は、他と區別する爲に之を『能力』と名くべしとして、其能力なる文字へは特にアビリテーと振假名をされて居る。

次には、富は勞働に依つてのみ生ずるものに非ざることは、今日學問ある社會主義者の次第に認めて來た所である、と書いてある。(念の爲め繰り返し注意して置くが、其は最初からマルクスの明かに認めて居た所である)。さうして、其一例として、米國のヒルキツトが引き合ひに出されて居るが、北君も同じやうにヒルキツトを引き合ひに出される。マロツクは英國人に向つて議論して居るのであるから、米國の社會主義者たるヒルキツトには脚註を加へて、彼は英國の社會主義者ショウ君や、ウエブ君や、マクドナルド君と同じ地位にある人だと書いてある。北君も同じ注意を吾々に與へて居られる。なほマロツクが生きて居る同國人を呼ぶ爲に、ミスター・ショウ、ミスター・ウエブなど言つて居るからと云ふ譯でもあるまいが、北君の論文にも、ショウ君、ウエブ君、マクドナルド君などと、君を以て呼んである。――途中で思ひ出したが、北君の說に依れば、一切の富は勞働に依りて生ずと云ふマルクスの說は、マルクスがリカアドーから採つたものだと云ふことであるが、マロツクが同じ事を述べて居るのは勿論である。

ヒルキツトに次いでは、ウエブが評論されて居る。マロツクのにも、北君のにも。

次いでスペンサアが出る。マコウレイが出る。キツドが出る。北君の論文にも、亦順序善く此等の人々が出て來る。

ショウの脚本『人と超人』の印稅のことが、議論の實例に出されて來る。北君も日本の文豪夏目漱石氏を引く代りに、遠い倫敦から態々ショウ君を雇つて來られる。

終りに近づくと、マロツクは基督教社會主義を批評して居る。北君も其論文が終りに近づくと、基督教社會主義を批評される。愈々最後になると、マロツクは機會均等論を持ち出して來る。北君も矢張り最後に、同じやうな機會均等論を持ち出される。

此の如く、マロツクと北君と、殆ど全く其議論の構造を一にし、其取材の範圍を一にするといふ事は、マロツクも北君も明かに、マルクスの著書の同じ飜版を見て居ると云ふ證據である。

(三)

猶最後に一言して置くが、一切の富は勞働に依りて生産さるといふ主張は、マルクスこそ最初より之を否認して居るのだけれども、一部の社會主義者中には、此の如き主張を爲せるものが無いでも無い。今念の爲め其一例を擧ぐれば、一八七五年獨逸の社會主義者が、ゴータに於て催せし大會の際、採用したる綱領の冒頭には、

『勞働は一切の富及び文化の源である。而して有用の仕事は一般に社會によりてのみ可能であるから、從つて全體の生産物は、社會即ち社會各員の總てに、屬すべきものである。』

といふ文句が使つてある。乍併、更に念の爲に追記して置くが、マルクスは此宣言書を一讀するや、當時直ちに書を社會黨の一領袖に送り、其冒頭に件の一句を引きて、之に左の如き註釋を加へたと云ふことである。曰く

『勞働は一切の富の源ではない。自然も亦勞働と同じやうに——(勞働そのものも一の自然力即ち『人間の勞働力』の發揮であるが)——使用價値の源であり、而して國民の富は、即ち此使用價値より成るものである。』(ボーダン著『カアル・マルクスの理論的體系』英文原本一〇八頁に引く所。)

マルクスの意見は、前後を通じて、此の如くに明瞭である。

そこで私はいふ。若し北君の見られた資本論が一八九六年の出版になつて居り、而かも其中に、勞働は一切の富の源であると云ふ事が、果して思想の中心原理として述べてあるならば、其は恐らくマルクスの反對論者の惡戯に成る贋本であらう。私は夙から、マルクスを評論する二三の學者の繙きつゝある資本論は、或は僞版ではあるまい乎、と疑つて居たのである。然るに今北君の論文を一見して、其が一八九六年の出版になつて居ることを知り、愈々僞版が行はれて居るに相違あるまいと考へて來たのである。北君は其論文に附記して曰はるゝやう、『余は社會主義(者?)が此の一文に對して批評を加ふるを俟つて更に廣汎なる見地と嚴密なる考察とを以て、社會主義の長短得失を論評せんと欲する』と。思ふに日本の讀書生は、更に君の續論の出づるを俟つて、大に其蒙を啓くことであらう。併し私は、北君がこの次に筆を執らるゝ場合には、宜しく資本論の僞版を棄てゝ、先づ速に其眞本を一讀されんことを希望する。マルクスの死後、資本論續卷公刊の爲には、彼の親友エンゲルスが、其遺稿の整理だけにも、第二卷の爲に二ケ年、第三卷の爲には九ケ年も費したものである。假ひ資本論そのものを手に取らずとも、只此一事を以て、其理論的構造の決して尋常一樣のものに非ざるを知るに足る。竊に思ふに、若し北君にして一たび資本論の眞本を一讀されんか、議論の『餘りに單純なる』に驚かる

代りに、恐らくは其の「餘りに複雜なる」に閉口せらるゝであらう。さうして批評するよりも、先づ之を理解することの困難なるを發見せらるゝであらう。『中外』記者の言ふ所に依れば、『北聆吉氏の近世社會主義の檢討は、本誌獨特の論文であると信ずる。社會主義の宣傳は、政府の忌む所であるが爲めに、學者は動もすれば、嚴正なる社會主義の批評をも遠慮する。北氏はもとより社會主義者ではない。今其の學術的良心の發表に從ひ自己の哲學的見地から、近世社會主義を批評したものが、即ち本論文である。此の論をなし得るものは北氏、是れを載せ得るものは本誌』とのことである。私は今之に就て何と言ひて宜しきや、暫く考へざるを得ない。

（八月七日、京都帝國大學夏期講習會の科外講演として、マルクスの思想に就き、卑見を述べたる日の翌日。）

通貨收縮策と物價調節及び輸出貿易との關係

法學博士　堀江歸一

一　通貨と物價との關係

通貨と物價とは如何なる關係を保つものなりや。此問題は從來我國に於て屢々世論の中心點と爲りて已まず。五六年前高橋是清なる人、日本銀行總裁の職に居り、或る席上に於て、通貨の增減は物價の高低に關係なきことを放言して、痛く世人に其愚を指摘せられたることあれるが、近頃大藏省の官僚も一小冊子を發刊し、近年の物價騰貴は決して通貨の膨脹に基くに非ざること、通貨の膨脹に對しては、大藏省も種々の施設を講じて之を抑制するに勉めたること、急激に通貨を收縮するは、經濟社會の進步を害することの諸點を陳辯して、在來の財政策に辯護を試みたり。寺內內閣の倒壞す可きや、目睫の間に在り、又斯くまでに信望を失したる內閣を倒すは殆ど一擧手の勞に過ぎざるを以て、吾徒亦斯る內閣の財政策や通貨政策を目標として何等議論を試みるを好まず、唯通貨と物價との關係に就ては、種々の誤解の存するありて、健全なる通貨政策を施すの障害と爲れるの觀あるを以て、今日を機會として、卑見を敍述し、財政策を一新する他日の用に充てんとす。

通貨と物貨との關係は經濟學上、極めて簡單なる問題なるのみ。今日貨幣經濟の下に、貨幣が萬般の貨物に對して、價値の尺度と爲り、一方に貨幣其ものゝ價値は貨幣に對する需要と供給との關係に依て定まるものとすれば、假に貨幣の供給が增加して、一方に貨物の生産高が之に伴うだけ增加せず、又は生産高は增加したるも、市場に出でゝ、盛に取引せられざるが如き場合には、貨物に對する貨幣の價値は必ず低落して、一般物價の騰貴する勢を免かれざるなり。固より一個々々の貨物は其貨物に伴う特殊の事情に支配せられて、代價に變動を來すを以て、其變動の原因を貨幣價値の高低に歸する能はざれども、一般物價の騰落に至つては、其原因を貨幣の伸縮に求めざるを得ず。蓋し今日の貨幣經濟に於ては貨幣は交換媒介物として、人の之を有するや、一般貨物を購うの效果を生ずるものなるが故に、貨幣の供給增加して、人の貨幣を所有する分量多く、一方に供給の特に增加せざる貨物に對して、此增加したる貨幣を以て、需要を致さんか貨幣の價値は貨物の價値に對して自ら低く、斯くて一般的に諸物價を騰貴せしむるの道理なりとす。

貨幣と通貨とは之を同一視す可からず。交換媒介物たるものにして、何が貨幣にして、又何が通貨なるやと云ふ問題に就ては專門上の議論あれども、姑く之を略し、通貨と云ふときには總て流通界に於て、物貨を購ふ效果を有するものを總稱す。本位貨幣、補助貨幣、政府紙幣、銀行券は勿論小切手、手形の如きも、通貨と認むるを得べし。斯く通貨と貨幣とは其内容に於て異なるものあれども、一國に於て正貨が增加すれば、之を基礎として、多くの信用行はれ、隨て通貨の膨脹を來すの常にして一の正貨增加に對して、二又は三或は其以上の通貨膨脹を招き、貨幣供給の增加に依て、物價の騰貴する勢を通貨の膨脹に依て、更に大ならしむるに至る可きなり。

二　我國の實際問題

以上吾輩が抽象的に說明したるは、所謂貨幣數量說なるものゝ大意にして、貨幣數量の增減は物價の變動に反應することを以て、其主眼とす。今、之を我國の實際に徵するに、歐洲開戰以來我國の諸物價が漸次騰貴し、殊に此一兩年間に於ける騰貴の甚だしき程度に上れることは人の知る所の如し。個々の貨物に就て云へば、外國の供給杜絕したる爲めに、或は軍需品として、外國の需要激增したる爲めに、或は商工業好景氣の餘波を受け、內外市場に賣行の盛なるが爲めに、代價の騰貴したるものある可く、貨物の種類に依て、其代價の騰貴を來したる原因に異なる所あるは論を俟たずと雖も、如何なる種類に屬するを

問はず、一般貨物の代價が最近數年間に於て一齊に騰貴したるは、通貨の膨脹を以て、其原因とす可く、之を除いては、此一般的物價騰貴を說明する理由を見出す能はさるなり。然らば何故に最近數年間に於て、我國の通貨は斯く物價に急激の騰貴を來すまでに膨脹したるや。試に通貨に關する諸種の統計に就て大正三年末と同六年末とを比較して、其膨脹の勢の如何に急なりしやを示す可し。(單位一千圓)

	大正三年末	大正六年末
貨幣流通高	一七二、七二五	一九七、八四六
兌換券發行高	三八五、五八九	八三一、三七一

右表中、貨幣と稱するは、金貨、銀貨、銅貨にして、流通高と稱するは、三種貨幣現在高合計より日本銀行正貨準備に屬する金貨を控除したるものなり。

右の外、信用取引の中樞機關として、銀行業が發達し、殊に商工業繁榮の結果として、信用の旺盛なる近年に於ては、小切手が商其の貨幣又は兌換券と相並んで、社會に於て購買力を實現する方便と爲り、通貨膨脹の一原因と爲れるは論を俟たず。唯此數年間小切手の利用が如何に盛なれるかに就ては、統計の徵す可きものなしと雖も、京阪兩地に於ける組合銀行の預金に關する數字を掲ぐれば、大體の狀況を推察するを得べし。其數字左の如し。(單位一千圓)

	大正三年末	同六年末
東京組合銀行預金	四四八、二〇九	一、三三五、三九〇
大阪組合銀行預金	二五七、七〇四	八一三、〇八八

斯く急速の勢を以て、通貨の膨脹する間に於て、是等の通貨に對して交換せらる可き諸種の貨物も亦同一の程度に於て、其產出高に增加を告げたらんには、通貨と貨物との間に數量上の均衡維持せられて、物價に著しき變動を惹起さゞるを得たる道理なり。固より物價の騰貴が或る期間を通じて繼續し、一方に貨物の生產費が之に伴つて增加せざる間は、製造工業者、農業家其他生產に從事する者は貨物を產出して、之を賣却すれば賣却するに隨て、大なる利益を收め得べきを以て、此利益の大なるに刺戟せられて、貨物の生產高は自ら增加することゝ爲る可し斯く增加する貨物の量が通貨の膨脹する數量と均衡を保たんか通貨膨脹の爲めに、物價の騰貴を惹起さゞるを得るの道理なれども、貨物の生產高を增加するは、一朝夕の事に非ず。現に我國に於ても兩三年間を通じて、商工業の好景氣なるは、要するに物價の騰貴に刺戟せられて、商工業者又は農業者が生產上に多額の資本勞力を應用して以て貨物の生產高を增殖せんとする

の結果なれども、其目的を達することの容易ならざると共に、即時に效果を收むるに難く、一方に通貨の膨脹する勢著しきときには、玆に通貨と貨物との關係に於ける調節は全然打破せられざるを得ざるなり。試に大正三年並に同六年に於ける我國三四の産物に就て、其生産高を比較すれば、左の如きものあり。

	大正三年	大正六年
米	五七、〇〇六、二〇八石	五六、〇〇一、七六八石
麥	二一、二四四、九二五石	二四、一五二、一五〇石
綿絲	一、六六六、一八〇梱	一、九二三、八四一梱
銅	一一七、四三九、〇八一斤	一五一、六四三、八三五斤
石炭	二二、二九三、四一九佛噸	二二、六〇〇、一六二佛噸
石油	二、三〇七、四三五石	二、二二八、一一五石

右は物資産出の狀況を例證したるものに過ぎざるが、之に據るに米、石油の如き産額の減少したるものあり、其他の物資は産額增加したりと雖も、其增加率は一二割の程度に過ぎざるなり。而して上記諸物資は今日國際間に於ける通商上の關係の密接なる結果として、何れも輸出入貿易の目的物と爲り、或る内國の産物にして外國に輸出せらるゝものあると共に、外國より輸入を仰ぎ、内國産の貨物と相俟つて、内國の需要に應ずるものもあり。然るに開戰以來我國の産物は盛に外國に輸出せられて殆ど餘す所なき一面、戰亂ある一方に、外國の貨物は交戰諸國に於ける輸出の制限、船舶の不足、運賃保險料の昻騰等種々の事情に制せられて、其我國に輸入せらるゝこと、戰前の如く爲る能はざるもの少なからず。玆に於てか我國に於ては、第一貨物の産出高減少し、第二斯る産出高の減少したる貨物にして、尚ほ外國に輸出せられ、第三内國に於ける貨物産出高の不足を補ふ程度に外國の貨物輸入せられざるの事實、併發して、産出高の減少は勿論各種貨物の内國市場に於ける供給高を減少せしめたる際に、通貨に著しき膨脹を來したるものにして、物價の暴騰の今日に至れるが如き、毫も怪むに足らざるなり。

三　物價調節策

物價の騰貴にして、或る程度に止まり、且つ騰貴の勢の漸進的なる場合には、商工業の繁昌を促し、又人の生活に刺戟を與ふるの效果あることは、明白の事實にして、物價の騰貴亦一概に之を不可なりとす可からずと雖も、近年の我國に於ける物價騰貴の如き、其勢甚だ急激にして、兩三年間に生活必要品の代價を二倍三倍の高きに上らしめたるものに至つては、國民生活の安定を傷くるの弊害頗る大なりとせざる可からず。斯る物價の騰貴に對しては、夙に調節の方策を講じ、之を其甚だしきに

至らしめざるの工風を必要とするや、勿論にして、吾輩が從來新聞雜誌に於て屢々論述したる所なり。而して吾輩が調節策として、政府に實行を求めたるは

第一。我國に產出せらるゝ物資にして、國民生活上に緊切の關係を有し、而して其內國に於ける產出の豐富ならざるものゝ輸出は之を制限すること、

第二。我國の產出する必需品にして、外國に於て需要せらるゝものは、國家特許の下に、之を輸出し、輸出する代償として外國をして其產物の我國に對する輸出の禁止を解除せしむること、

第三。內國の產業殊に外國輸入の杜絕したる物資の供給不足を補充する目的を以て、計畫せらるゝ產業に對しては獎勵の方法を講ずること、

第四。以上の三策を以てして、尙ほ物資の我國市場に於ける供給增加せず（此事は已むを得ざる所に屬す）、供給の不足、依然たるものある以上は、通貨を縮少して以て貨物の供給と調節を保たしむること、

の四策に外ならざりき。然らば政府は以上の諸點に就て何事を爲したりやと云へば、今日に至るまで、一として施設の要を事に心もつかふたこ[illegible]物價騰貴時代に在ては、[illegible]少數の貨物に對して輸出を禁止し、其後多少の品目を追加したりと雖も、大體に於て輸出萬能の思想に左右せられ、內國に於ける供給の過不足の如きは、之を眼中に置かず、單に外國の需要に接するに隨て、物資を輸出し、何等顧みる所なかりき。而して交戰諸國が自國に於ける物資供給の狀況に顧慮して、重要物資の輸出を禁止し、制限することは頻繁に行はれ、爲めに我國に於ける物資の供給を不足せしめたるもの少なからず。然も合衆國に對し、鋼鐵交換の交涉を成立せしめたる以外に、我國の政府は外國に輸出禁止の擧に出でしめたることありや、吾輩の知らざる所なり。內地に於ける新事業の勃興する機運を釀成するの必要は世人の夙に認めたる所にして、若しも早く此事に成效せんか、所謂代用工業、國內に起り、外國の供給の杜絕したる物資に代つて、國內自給の道に就くを得たるの道理なるに、政府は製鐵業獎勵法、染料醫藥品製造業獎勵法を制定したる外に、何事をも爲さず、國民をして物資の供給不足に苦しましむるの傾は戰爭四年を經たる今日に於て愈々其甚だしきを告げんとするものあり。斯の如くして通貨の膨脹は貨物の供給との間に均衡を維持せしめんとするが如き、難中の難事にして、歷代の政府が經濟政策上の根本方針を誤まりて、今日に至れるの禍頗る大なりとせざる可からず。

四　通貨の膨脹

内國に於ける貨物供給の增加に依て、通貨の膨脹と均衡を保たしむること困難なりとして、他に通貨と貨物との關係を其正常の狀態に居らしめんとするには、一に通貨の收縮に重きを置かざる可からず。通貨膨脹に關する數字は曩に之を揭げたり。然らば何故に前記の如き急激なる程度に於て通貨の膨脹を來すに至れりやと云へば、時局の影響に依て、國際貸借に於ける我國の地位が從來と趣を異にし、我國に有利と爲るに至れるが故に外ならず。蓋し歐洲開戰以前我國の經濟社會が常に病弊として苦痛を感じたるは、貿易外の關係に於て、外國に債務を負うことの少なからざる上に、年々巨額の輸入超過に接して、之を決濟せざる可からざるの一事に存したり。然るに歐洲戰爭の起るや、其我國經濟社會に影響を及ぼすことの大なる、先づ年來輸入超過の勢に居ることを免かれざりし外國貿易をして輸出超過の方嚮に就かしめ、然も年を重ぬるに隨ひ、輸出超過は益々大ならんとす。即ち大正三年には前年來殊に同年上半季の惰勢として、四百六十三萬四千餘圓の入超を存したれども、翌年來貿易の趨勢は輸出超過と爲り、其金額は大正四年に一億七千五百八十五萬七千餘圓に、五年に三億七千一百四萬餘圓に、六年に五億六千[illegible]百十七萬二千餘圓に上り、此外に傭船料船舶費[illegible]代金運賃等の收入あり亦國際貸借上に於ける我國の權利に加はりて、我國の貸借上に於ける地位は大に有利と爲るに至れり。若しも我國にして斯く外國より受入る可き正貨を處分するに就て、早くより確乎たる政策を立てたらんには、受入る可き正貨を利用して、今日の如き程度に通貨の膨脹する勢を避け得たるの道理なるに、我國には輸出超過萬能の思想あると共に、正貨の增殖を絕對的利益とするの思想亦行はれ、正貨の增殖に對して、單に滿足の意を表し、一面に如何なる影響の到來するやに就て深き思慮を致さゞりき。

故に輸出超過の勢は彼の如く、貿易以外に、我國の債權と爲る可きもの亦少なからざりしに拘はらず、我國が今日に至るまで正貨處分又は正貨利用の爲めに講じたる所は聯合諸國債劵の引受（五億七千八百萬圓）聯合諸國の公債買入（一億三千四百萬圓）外債償還（二億九千二百萬圓）對支投資（一億一千八百萬圓）等に過ぎざるを以て、我國正貨の現在高は急速の勢を以て、增加したり。開戰前後の一斑を示せば左の如し。（單位一百萬圓）

	總高	所有別		所在別	
		政府	日本銀行	內地	外國
大正三年末	三四一	四九	二九二	一二八	二一三

同 四年末	五一二	一五二	三六〇	一三〇	三八二
同 五年末	七一四	二六二	四五〇	二二七	四八七
同 六年末	一、一二〇	三九六	七二四	四六二	六五八

斯の如く正貨が急速に增加し、而して事々物々秘密を事とする政府が手柄顏に正貨の總額、所有別、所在別等を發表するや世人亦之に對して滿足の意を表し、歐洲戰爭が我國の經濟社會に與へたる利益の最も大なるものなりとしたり。畢竟我國の財政當局者並に一部の國民に固陋なる重金主義の信念の存するものあればこそ、正貨の增殖を喜び、之を利用處分するの急なるを忘れりとせざる可からず。其今日に至りて、通貨膨脹の餘弊に苦むもの偶然に非ざるなり。右に掲げたる日本銀行所有の正貨は大部分日本銀行の發行する兌換券の正貨準備に充てらるゝものにして、正貨準備の增加したる爲めに、兌換券の增發せられたる事實は左表に於て明白なり。(單位一千圓)

	大正三年末	大正六年末
正貨準備發行高	二一八、二三七	六四九、六一八
保證準備發行高	一六七、三五二	一八一、七五三
合計	三八五、五八九	八三一、三七一

五 通貨收縮の方法

然らば如何なる方法を以て、通貨を收縮す可きや。過般大藏省の發表したる辯明書風の小冊子に於ては、財政當局者亦通貨の伸縮を等閑に付したるに非ず、或る程度まで其膨脹の勢を抑制す可き方法を講じたることを陳述したり。而して政府が抑制の方法として專ら依賴したるは、對外放資と内國債發行との二者なるが、元來是等の方法たる、果して有效にして、能く所期の目的を達するに値するや否や。對外放資は與國債券の引受、與國公債の買入、對支投資等種々の形態に於て行はれたりと雖も其金額は我國々際貸借上に於ける債權の三分の一内外に過ぎざるを以て、之に依て實質的に通貨を收縮するの效果を期する能はず。殊に合衆國が歐洲戰爭に參加して以來、聯合諸國は合衆國を財力同盟の盟主に仰ぎ、同國亦從つて、此任務に應ぜんとし、内國債と同一利率を以て、外國債の應募に從ひつゝあり。是れ聯合諸國が近來我國に財力の援助を求めざるに至れる所以なりと雖も、合衆國も亦其金融上の實力に限りあり、内外財政上の要求に應じて、餘裕の綽々たるを得るが如き、容易に望む可からざる所なるを以て、我國の方針如何に依ては、從來よりも大なる程度に於て聯合諸國財政上の要求に應じ、正貨を處分

するを得べき道理にして、此點に於ては吾人は、我國財政當局者の手腕に大なる疑を挾まざるを得ず。

政府が從來通貨收縮の方法として實行し、又將來に於て實行せんとしつゝあるものは內國債の發行にして、當局者の考案を以てすれば、此一事は通貨收縮に充分の效果を奏するやに認むるが如くなれども、吾輩は此點に就て、當局者の財政意見に大なる誤解の包藏せらるゝことを指摘するに躊躇せざるなり。若しも政府が戰時交戰諸國に於て發行せられつゝある貯蓄證券の如き、又は往年我國に於て發行せられたる貯蓄債券の如き、金融上の取引に關係なく、又中流以下の人民の日常の生活に消費す可き資金を吸收するを得る債券を發行し、而して此發行に依て國庫に吸收したる通貨は永く國庫に保藏するか、又は發行者をして之を銷却するの方法に出でしめんか、債券の發行は正に通貨收縮の方便たることを誤まらず。然るに政府の爲す所は之に反し、通貨收縮の手段として、單に普通の公債を發行するに過ぎず。其普通の公債たる以上は、必ずしも世人の貯蓄金を吸收するに非ず、之に應募する者は主として資本家の輩に外ならず、而して資本家にして資金の運用を必要なりとせんか、必ず其所有する公債を擔保に供して、銀行に就て貸出金を請求す可く、一方に政府は公債の發行に依て得たる應募金は經費として之を拂出す可きを以て、二者相重なりて、却て通貨の膨脹を招かざるを得ず。況や政府が金融市場に於ける一時の安全に着眼して、殊更に金利を低率に維持するの手段を取るが爲めに、資本家の公債を利用して、金融の便を謀るに好都合ならしむるに於てをや。吾輩が公債の發行を以て、通貨收縮の手段なりとする通說に對して、大なる疑惑を懷く所以なり。

試に之を歐洲交戰諸國に於ける戰時財政の經過に徵す可し。諸國が戰爭に從うこと永く、又戰時財政を營むこと久しきに及ぶや、通貨に大なる膨脹を招きて、其餘弊に苦しみつゝあるは著明の事實なり。而して斯く諸國に於て通貨の膨脹したる原因は中央銀行の兌換停止に乘じて、政府が銀行をして多額の銀行券を發行せしめ、之を軍事費の財源に充つる爲めに、借入れたるの一事に存すと雖も、通貨の膨脹が單に中央銀行の銀行券增發のみに止まらず、市中諸銀行の預金取引增加の形態に於て行はれたる事實より云はんか、他に深き原因の存することを推測せざるを得ず。而して其原因が中央銀行並に市中銀行等に於て戰時財政の經過を圓滑ならしむる爲め、軍事公債を擔保とする貸出に便宜を與ふるの一事に在るは、疑を容る可からざる所にして、殊に獨逸の如き、貸付金庫と稱する戰時金融機關を特設し、公債を擔保に提供する者に通貨の一種たる貸付金庫證券を

貸出す場合に、公債が通貨膨脹　助成する勢の大なるや論を俟たざるなり。英國が其戰時財政を處理するに就て、萬難を排して、租税の增徵に依る收入に依賴せんとするは、公債發行の通貨膨脹を惹起する弊ある故を以てなり。然も實際に於ては千九百十四年八月一日より本年六月二十二日に至る間の總軍事費七十六億二千一百六萬六千磅の內、公債に依るもの五十六億九千十一萬七千磅の多きに上れるに對し、租税收入に依るもの十九億三千九十四萬八千磅に止まり、公債增發の爲めに通貨膨脹の勢を促して已まず、此弊害を抑制する爲めに、近時「富の徵發」(Conscription of Wealth)なる名義を以て、大々的增税を必要とする意見の主張せらるゝに顧みるも、公債の發行に依て通貨を收縮するの不可能なるを知るに難からざるなり。

然らば通貨の膨脹を制し、更に進んで通貨の收縮を期するには如何なる手段を以て、可なりとするやと云へば、吾輩は金利引上の最良手段なることを主張せざるを得ず。金利は必ずしも低廉なるに非ず、近時上進の傾向なきに非ずと雖も、獨り日本銀行の金利歩合の格外に低廉なるが爲めに、市中の金利の上進す可き勢を妨げつゝあるの觀あり。日本銀行は昨年三月中旬割引日歩の最低歩合を一錢四厘乃至一錢五厘に引下げて以來今日に至るまで歩合を此程度に据置くと雖も、市中金融の狀況は日本銀行の金利歩合の示す所と隔絕し、預金利子の如き六分の高きに達し、社債の利廻は七分に近く、國庫證券亦六分二厘八毛を利廻とするの狀況なり。而して昨今の如く、獨逸媾和提議の電報は頻々として海外より來り、何時戰爭の終熄を見るや、測り知る可からざる爲めに、經濟社會の裏面に聊か不安の念の兆しつゝある以上は、市中銀行たるもの、金利を引上げて、前途を警戒するを要するに拘はらず、日本銀行が殊更に低步の金利を維持する今日の狀況は市中銀行の金利引上を妨げざるを得ず否寧に之を妨ぐるに止まらず、市中銀行は日本銀行の金利の低廉なるに安んじ、萬一の際には此低利なる資金に依賴するを得べきことを信じて、盛に取引先に資金を融通するに憚らず、斯くて通貨膨脹の勢を甚だしからしむるに至るものなり。日本銀行の貸出割引の極めて少額なるを見て、之を根據として日本銀行が金利を引上ぐるも、通貨收縮の效果を齎さゞることを論ずる者の如きは、通貨を以て一の日本銀行の金利の低廉なることが市中銀行の營業狀態に如何なる反應を及ぼすやを察せざる者の妄言とす可きのみ、深く顧みるに足らざるなり。

六　金利引上の難易

政府は日本銀行の金利歩合改正に對して、認可權を有すれど

も、一歩を進めて日本銀行に金利の引下を命じ、又は其引上を強ゆるの權能ありやと云へは、法律に據る可きの正文を認むる能はず。今日は大藏省も日本銀行も共に無力にして、何等威信の仰ぐ可きものなしと雖も、政府が日本銀行正副總裁任命の權を擁し、一方に大藏省の下僚が日本銀行監理官として、同銀行の營業を監督する以上は、如何に微力なる大藏省を以てしても、尚ほ日本銀行に金利引上の命令位は之を下すを得べく、又政府管轄の下に在る各種金利例へば郵便貯金の利子の如きは自由に之を引上げて、以て金利上進の先驅たらしむるを得るの道理なり。然るに政府の爲す所を見るに、毫も金利引上、通貨收縮の意を有せず、金利は成る可く之を低廉に維持し、而して通貨は之を其膨脹するに任せ、以て自然の赴く所に至らしめんとするものゝ如く、大藏省が辯明書に於て、通貨收縮に力を致したりと云へるが如きは、要するに世間を瞞着する詭辯にして、寧ろ通貨收縮を不可なりとするを以て、其本心を示したるものとす可し。

然らば政府が斯く通貨の收縮を喜ばざるは何故なりやと云ふに、要するに通貨の收縮が經濟社會殊に商工業好景氣の機運に及ぼす影響を恐るゝが故に外ならず。通貨收縮の最良法が金利の引上に存するは、既に述べたるが如くにして、財政當局者亦如何に官僚の通弊として、短見偏狹なりとするも、之を悟らさるに非ざる可し。今假に政府が通貨收縮の根本方針を樹立し、日本銀行と協力して、金利引上の擧に出でたりとすれば、固より通貨を收縮し、物價を低落せしむるの效果ある可しと雖も、斯る效果の生ずるに先だち、金利引上金融緊縮の影響として第一株式市場に於て諸株式の市價は自ら低落の傾向を生ず可く、第二商品市場に於ても、資金の融通漸く困難と爲り、投機取引の制限せらるゝ爲めに自ら人氣の沮喪を免かれざる可く、第三斯く前途に商品市價の低落す可き勢の明なる場合には商工業者は事業の規模、取引の範圍に制限を加ふるを以て、不景氣を誘致す可く、第四株式市價の低落に伴ひ、プレミヤム付にて株式を募集し、以て新事業を起すの風亦制限せらるゝが故に、一部階級に居る者をして射倖的利益を貪る能はざるに至らしむ可し。政府が金利引上に依て、通貨收縮を行ふの方針を決定する能はざるは斯る引上に伴ひ、上記の影響を經濟社會に及ぼして、一般の反抗を招くことを恐るゝが故に外ならず。寺内内閣は今や内治に外交に致命傷を負ひ、其運命風前の燈に異ならずと雖も其閣員たるものゝ立場より云はんか、一度び今日の地位を離るれば、將來如何なる時に政權に近づくや、測り知る可からざるを以て、局面を彌縫して、一日の安きを貪らんとするものに外な

らず。斯る内閣に向つて、經濟社會の一部に反感を招く可き金利引上、通貨收縮の政策を勸むるが如き、徒勞に過ぎず、唯吾儕が寺内内閣と云はず、後繼内閣と云はず、將た又政黨員、官僚と云はず、廣く社會に向つて一言せんと欲するは、通貨收縮の影響以上の如しと雖も、其收縮に依て、一般物價の低落を促し、國民生活の苦痛を緩和するの利益に比較すれば、一方の弊害の如き、大なる利益を得るが爲めに拂ふ可き小なる犧牲として、姑く甘受せざる可からざるものなりとす。吾儕の目前に希望する所は斯る利害の大小輕重を判斷するの知識ある政治家の局に當たることの一事なるのみ。此判斷正しきを得んか、通貨收縮の如き、易々たるの業なりとす。

金利引上の爲めに、株式市場は衰退して、新事業は悉く挫折す可しと稱せらるゝも、昨今事業界の狀態は少しく躊躇と爲り、投機的業者の計畫する不健實なる事業を排除して、資本を節約せんとする傾向の必然たる場合には、金利引上に依て、之に制限を加ふるの必要あるは論を俟たず。又金利を引上げ通貨を收縮するときには、輸出貿易に打撃を來たす可きことを恐るゝ者あり。輸出品を製造する當業者の内、其資力の薄弱なる者の如き、金利引上の爲めに、資金の融通に便宜を失ひ、事業の經營に困難を感ずるに至る可しとするも、一方に斯る當業者他の有力なる當業者に併合せられて、事業全體の基礎を強固ならしむることある可く、又今日の我國產物の輸出たる、外國に於ける特殊の需要に基くものなるを以て、金利の上進に基く些細なる生產費の增加の如き、輸出貿易の趨勢に大なる影響を及ぼすことを信ずる能はず。若し夫れ今日の如く種々の小策を講じて、政府自ら爲替資金融通の任に當り、無限に輸出貿易の增進する勢を助成せんとすることが、我國の全體に有利なるや否やの一點に對しては、輸出超過萬能の思想に拘束せられず、最も冷靜なる判斷の下されんことを希望せざるを得ず。吾儕は財政當局者并に其周圍の者が人爲的に金利を低廉にして何時まで經濟社會の繁昌を維持するを得べきやを知らず、又斯く人爲的に好景氣を釀成せられたる經濟社會に反動の恐る可きものあるを考へざる態度を目擊して、徒勞の無謀に擬す可からざるものあることを警告せざるを得ざるなり。

暴動事件の批判

八月暴動と「貧乏物語」

法學博士　渡邊鐵藏

折柄十六夜の月を肩にして書棚より河上法學博士の貧乏物語をとり出してあちこちと讀むで見ると、最初に眼に觸れた所に次の樣な文句がある「……今日の世の中には、いろ〳〵六ケしい社會上の問題が起つて居るけれども、其大部分は、吾々の眼から見ると、社會の多數の人が貧乏して居るが爲に起るのである。ホランダー氏は其貧乏根絶論の巻首に『社會的不安は二十世紀の生活の基調音である。此不安は色々の方面に明かに現はれて來て居る。産業上の諸階級間の不平、政黨各派の紛擾、輿論の神經過敏、經濟上の諸調査の專心に行はれつゝあること等は即ちそれである。……乍併其根本の原因は何所でも同じことなので、即ち貧乏の存在と其痛苦に外ならぬ。これが社會的騷擾の中心であり中核である』と述べて居るが余も亦全く同感である。」なほ少し讀み進むと「ダントンの言つた言葉に『パンの後には、教育が國民にとつて最も大切なものである』といふことがあるが……いくら教育を普及したからとて、先づパンを普及させなければ駄目である。」と記してある。更に讀むで行くと最金持の多い同時に最貧乏人の多い英國が一九〇六年に小學兒童の食事公給條例を制定した由來を述べて「……由來個人主義の本場として、自由放任を宗旨と爲し、國家は個人の私事に出來得るだけ立ち入らぬことを國風として居る英國に於いて、今此の如き法律の發布を見るに至りたる事は、一葉落ちて天下の秋を知るとや曰はん、實に驚くべき時勢の變である。」と說いてある。そして此種貧乏神退治の大戰爭は今度の世界戰爭以上の大戰爭で、縱ひ今日の世界戰爭は近く其終りを告ぐるとするも、共に引續き諸國に於いて盛に行はるべき大戰爭だと信じて居ると言ひ添えてある。その上英國にて一九〇八年に貧乏なる老人保護の爲に養老年金條例の設けられたことを紹介して其時の豫算編成の必要上土地增價稅其他の諸稅の新設增徴を企てた

時の大藏大臣ロイドジョージ氏が試みた大演說の末尾に『……之は一の戰爭豫算である。貧乏といふものに對して許し置くべからざる戰を起すに必要な資金を調達せんが爲の豫算である。私は吾々が生きて居る中に、社會が一大進歩を遂げて貧乏と不幸及び必ず之に伴うて生ずる所の人間の墮落といふことが曾て森に棲んで居た狼の如く、全く斯邦の人民から追ひ去られて仕舞ふといふが如き、悦ばしき時節を迎ふるに至らんことを望み且つ信ぜざらんとするも能はざるものである。』と叫むだのを援用して河上博士曰く

語を寄す、我國の政治家。歐洲の天地即今戰報の齎す以外、別に這個の大戰爭あるを看過されずんば、洪閣を開むるは諸卿の業、此貧乏物語の著者の如きは輙ち筆硯を焼き、退いて書癡に安んずるを得ん。

此貧乏物語が東京大阪朝日新聞に連載されたのは大正五年の秋から冬へかけてのことである。それから後二年の今日、日本國の上下、四方を驚かしたものは即ち今度の食糧大騷動である。世間には學者のことを迂遠であるとか、世間知らずであるとか、机上の空論者であるとか罵倒し去るものが多いようであるが、世間はその迂遠なる學者の口から屢々世を警醒し指導するに足る言葉の出てをることを見遁してはならぬ。

今回の騷動は第一に米から起つたことは明である。西洋で言へばパンを與へよといふ叫びから芽が出たのである。「人は麵麭のみにて生くるものにあらず、されど又麵麭なくして、人は生くるものに非ずといふが貧乏物語の全體を貫く著者の精神の一である」が此精神は又あらゆる人の心の眞中を貫いてをるのであつて、その外の精神は多くの人にとつては肝心の端の方を貫いてをるに過ぎないのである。獨逸のパン騷動は政府の管理と國民の節制によつて鎮壓し若くは未發に防止され、ペトログラードのパン騷動は忽轉大露國の革命の油田に導火を點じ、我日本國の米騷動は微妙なる推移をなして、或部分においては今やジゴマ騷動と化してをる。此三國の國民性と歷史と社會組織と經濟組織と政治とを比較して右の眞相を洞察すれば有識の士は自ら首肯する點が尠くないことであらう。今回の八月騷動原因の探究其經過の觀察將來の對策の研究は我國政治家、有識者、一般國民の沈思默考熟慮、努力して成就すべき重要事である。此騷動の誘因の米價の昂騰による生活の壓迫にあることは何人も爭ふまいが騷動の經過の示す事實ば其原因の由つて來ること遠く深く、且つ複雜なることを語つてをるのである。私の考へでは八月騷動――單に米騷動とのみ見ることが出來ぬ故かく名付ける――の原因は次のように解剖して見ることが適當で

あらうと思ふ。

一、物價騰貴就中米の急激なる騰貴に基く生活の壓迫
二、富豪に對する反感就中悪徳富豪に對する憎惡
三、各種の社會的不平
四、或種の日本人に特有なる白痴的彌次性の發作
五、秩序弛緩に乘ぜる悪性の發露
六、政治運動

此大戰爭以來物價が世界的に騰貴せることは言はずもがな、我國に於いても一般物價が最近に於いて戰爭前に比して九割七分即ち約二倍の騰貴を來してをることは大藏省自身が證明してをる所である。然るに如何に經濟界好景氣の時と雖直接間接に戰爭の好影響を受けつゝある事業以外の者は特に收入の增加する理由がない、殊に收入の一定せるもの就中其收入の大部分を生活費に當てざるべからざる者が物價騰貴によつて受くる壓迫の甚しきとは經濟學の入門の敎ふる所今更說明する迄もないことである。薄給の官公吏敎員其他に二割三割のケチ〳〵した增給をした所で到底追付くものでない、況や疾病、失職等の場合には救濟又は自助の途の備はらぬ日本では全く乾上るより外致方がない、それに最近の米價暴騰が見舞つたのであるから爆發性の瓦斯は既に充滿してをつたのである。過日私の乘つた車夫の述懷に「此頃のように諸式が高くつちや全くやり切れません、此節は又何んだつてこう急に米の値がゑらく上つて來たんでしよう、此奴がづい分こたえますよ……南京米では步けませんからね。私共のような激しい働をする者は鹽氣のものと脂肪氣のものとを喰べなきやなりませんが此節はせいぜい油揚か餅位しきや口に入りません、一時は一圓五十錢も稼ぎや子供にお土産も買へたんですが……」と。それでも此車夫君は私に平素の二倍の賃錢を請求する勇氣を持つて居なかつた。此樣な狀態は固より社會の各方面に存在してをつたに相違ない。

獨逸や英吉利や亞米利加などは戰爭が始まると直に又は漸次に食糧品日用品等の輸出を禁止し、關稅撤廢其他の方法を以つて輸入を奬勵し、食料品の徒費、濫費を禁じ、消費の節約方法を定め、最高價格を決定し、強制徵收を行ひ遂には政府の管理、專賣を斷行する等あらゆる手段を盡して休みなく、且つ之を助くるに船舶管理ありて以つて食料品、日用品等の價格の激騰を抑制し供給を圓滑にするの方策を取つたのである。あらゆる經濟狀態を攪亂せずんば已まない今度の樣な大戰爭に當つて其變態なる需要と供給の適合を自然に放任し價格の成立を自由に放任したならば如何なる結果に立至つたであらうかといふことは敢て識者を竢たずとも、又長き經驗を積まずとも之を察するこ

とが出來たのである。元來が貧富の懸隔の甚しい歐米諸國に於いて、更に其傾向を甚しからしめ、且つ貧乏人の痛苦を増加せしむる如き狀態の進展することを座視することを欲しなかつたことは、彼等が軍需品供給の阻害せらるゝことゝ、軍費の増大することとを欲しなかつたのと同一の強い理由があるのである。國民給養の維持と軍隊需要の充實との間に輕重の差がある筈はないのである。歐米の政治家、――否、官民が食料政策の完成と租税負擔の調節（戰時利得税の賦課）に畢生の腦漿を絞つた有樣は吾人の眼前にまざ／＼と見ゆるのである。

翻つて我國の有樣を見ればどうであらうか。僅少の範圍に於ける輸出禁止と米の取引に對する干渉の外は別段これぞといふ調節策の取られたのを氣付かない。從つて物價騰貴といふ爆發性の瓦斯は充滿するばかりであつて、多少の收入増加の途を開いて空氣の流通を圖つても之が充分に行屆かず又全く行屆かぬ部分がある。而して今や爆發を未然に防ぐためには、物價騰貴を抑壓して此上爆發性の瓦斯の發生することを豫防するの必要に迫つてをつたのである。然るに空氣の流通を圖る手段に於いても亦瓦斯の發生を防ぐ手段に於いても頗不充分であつたがために遂に今回の樣な大爆發を生ずるに至つたのである。勿論我國は交戰國の一に列してはをるが多數の出兵をなしてをるのでもなく、他の交戰國の樣な激烈な戰爭狀態にあるのではないから、あまり強い經濟上の干渉手段を取ることはよくないといふ者があるかも知れぬが、戰場に多くの血こそ流され、經濟上に於いては他の交戰國と全く同じ程度に於いて激しい戰時狀態の渦中に投はれて居るのである。否、寧ろ、從來近世的經濟組織の缺陷を補ふ制度、設備、機關が不備であつて且つ國民の自治能力及自制心の訓練の不充分である我國にとつては歐洲の國よりは一層危險なる試練の壇上に載せられてをつたものといはねばならぬ。そして今度不意に美事足元を掬はれて始めて我國民に從來立つて居つた壇上の頗る危險であつたこと、今まで我國が戰時の變態經濟狀態の大きな渦の端に居つたと思つた　は大きな間違であつて、實は其眞只中に吸込まれて居つたことに氣付いたのである。否、二十世紀の一般的經濟組織の中に正確に編入されて居つたことを悟つたのである。

右に述たる如く、八月暴動の一原因が物價の騰貴に基く生活の脅迫にあることは最初及其後の暴徒の叫喚目標を見れば疑ふの餘地がないが、尙ほ其叫喚目標によつて察せらるゝ、暴動の一原因は富豪就中成金富豪に對する反感であることは之亦何人も疑ふまい。貧乏物語の著者はパンの普及を論ずると共に富豪の奢侈を以て貧乏の一原因なりとして之を蛇蝎の如くに嫌つてを

る。曰く「金持は贅澤をするが爲に啻に己が身心を害するのみならず、同時に世間多數の人々の生活資料を奪ふのであるから其責任は重大である。自分が水に溺れて死ぬのみでは無く、自分が水に溺れて死ぬが爲に、天下の人を日射病に罹らすのであるから、其責任は實に重大である……。」前に揭げた述懐談をした車夫が自分の車の蹴込みに腰を掛けて新聞紙を膝の上に廣げて讀むでをる時に、或富豪が杜鵑の舌の澄汁に千金を投じたとか、一塊の古茶碗に數十萬金を擲つたとかいふ記事が眼に入つたならば果してどの様な感じを懷くであらうか。殊に此様な金持が朝飯に杜鵑の舌の澄汁で舌鼓を打ちながら新聞紙上に近來食料品、日用品の價格騰貴甚しく中流以下の生活危殆に瀕す何等か救濟の途を講ぜざるべからず……といふ記事のあるのを見て、救濟は政府や馬鹿正直な人達がすることで、自分は此好機を逸せず大ひに暴利を占めようと考へて早速米、麥其他食料品日用品の買占め買煽りを始めて數百萬圓の利益を得たといふことが世間に知れたならば、之を憤慨するものは恐らく車夫君のみではあるまい。今回の暴動中或地方の如きは明瞭に此悪徳富豪征伐の色彩を現はしてをるのである。

關西地方の暴動は今回の暴動中最も激烈なるものであつて著しく米價騰貴の壓迫に對する反抗及悪徳富豪に對する憎悪が原因となつてをることを示してをるが、なほ此地方の或方面に於いては特殊部落の不平の勃發したことが他の一の原因であることが窺はれるようである。此方面の不平が果して社會的の壓迫に對して生じたものであるか、或ひは經濟的の壓迫に對して生じたものであるかは私には判然しない。最近柳田法學士が經濟會叢誌上で救濟調査會に就て批評をせられた中に、其最先調査事項の一として穢多問題を加ふべきことを主張してをらるゝが其意見の論據は示して居られない、しかし、私は甚迂遠のようであるが、此言葉によつて特殊部落に於いて既に特に可成り迫つた狀態の存在することを察することが出來た。此様な方面に於ける不平の外・社會の各方面に於いては現在の社會に對して表面頗太平のようであつてもなほ大小種々の不平があり得るのであるから、他の原因によつて社會の秩序が亂れると、是等の不平が頭を出すことは豫想し得ることである。思想上に於ける極端主義者、即ち所謂危險思想の所有者と目せらるゝ人々が今回の暴動にどれほどの影響を與へたか、若くは之に參加したかといふことは私には分らぬ。しかし萬一今回の如き暴動が思想上に於ける或る一定の主義の下に統括せられ支配せられて一定の方針に向て繼續的に活躍するとなれば、それは既に革命の性質を帶ぶるものである。そうなれば大事件であるが今回

よりそんな根據のある組織立つたものではない。

第四に私が八月騒動の原因として掲げた白痴的彌次性の發作といふのは此機會に少々鄭重に取扱つて解説をなして置く必要がある。元來或種類の日本人の内には丁度一匹の馬が騒ぐと無意識に他の馬が騒いたり、一匹の鹿が走ると他の鹿が何の事なしに一緒に走つたりするのと、同じ樣に、或人間が騒いだり亂暴をすると自己を白痴にして之と行動を共にするものがある。之を重視して私は白痴的彌次といふのである。此種の人物は地方によつては其數が尠くないのであつて、其發作が甚しくなるといつの間にか惡性が現はれて來て反道德的又は犯罪的行爲をするようになる。私は之は輕々に看過すべきことではないと思ふのである。彼等は白痴的にはなるが眞の白痴ではないために一層危險な代物である。油斷をすれば折角築き上げた社會の秩序が彼等の白痴的行爲によつていつの間にか無殘[illegible]と破壞されるような虞れがある。殊に彼等の白痴狀態に於ける惡性の發揮は最も恐るべきものである。此樣な性質を强度に有する日本人が澤山居つては日本の人口が六千萬より一億に殖えても一向に有難くない。日本の社會は何時もグサ〳〵の埋立地に建てた粗末た建築物の樣な感がする。世人に問ふ、何の怨もなきに店頭の硝子を片端に破壞し、電車を襲撃し、病院を襲撃して消燈を餘儀なくせしむる如き代物と、貧に迫りて盜みをする人物がより惡人であり何れがより危險であらうか？私は此種の白痴的危險行爲を看過することが益々此の種の人物の跋扈と此種の白痴的行爲の頻發とを助長するものであることを甚しく怖れるのである。そして其程度は貧乏退治を怠つたことより生ずる社會的の悲慘、不安を怖れるのと全く同じ程度に於いて之を怖れるのである。從つて私は政府が從來の貧困と現在の物價騰貴とに基く國民生活の苦痛、不安を除去するために極力行政上、立法上の努力をなすと同時に、此白痴的危險行爲に對して、日本國民の名譽のために、又日本國家の安寧のために此日本國の有するあらゆる警察力と、最峻嚴なる司法權を以つて臨まむことを希望して止まないのである。

八月騒動は十五、六日頃より或地方に於いては漸次刑法學者の所謂惡性若くは反社會性を帶び來りて一般的掠盜、脅迫、放の犯罪行爲を演ずるに至つた。私は是等をジゴマ騒動と名付けるのである。初め關西地方に於いて燒打の始まるや其目的物を見て世人の中には己を得ぬ應報の如くに考へたり或ひは多少心地よく思つたりした人もあるようであるが、其後各地方に於いて單純なる金錢强請の目的を以つて盛んに脅迫、放火、强盜等が行はるゝに至つたことは頗る寒心すべきことである。其遣り方

は明朝八時迄に金一萬圓を彼所の木の根の下に埋置くべし然らされば汝の一家を燒殺すべしといふ如き所謂ジゴマ式の脅迫である。極端なる共產主義者と雖固より斯の如き一時的の金錢强請には與しないのである。彼等は騷擾のために社會の秩序の一時弛緩せるに乘じて現はれたる單純なる惡性を有する犯罪行爲者である。此空前の重要なる機會に際して國家が彼等に對して其毅然たる權力を示すことを怠らぬことは私の信じて疑はぬ所である。維新以來五十年の間に築き上げたる日本國の社會的秩序と國家的權威を一朝にして抛擲し去ることは國民中の何人も希はぬ所であらう。

政治運動が今回の大暴動の部分的煽動者となり指揮者となつたのではあるまいかといふことは間々人の想像に上る考へであるが、警視總監乃至警保局長ならぬ私にはそのようなことが明に分る筈はない。

要するに今回の八月暴動は日を追つて又地方によりて其性質を異にしたが、結局上述の五つの原因の內の幾つかゞ主動力となつて發生したものであることは之を認むるに難くない。そして其最普遍的で且つ最力强い主動力となつたものは最初の二つであることは固より明なことである。最初の三原因によつて起つた暴動につきては情狀酌量すべき點若くは同情すべき點があるが、次の第四、第五の二原因即ち獸性と惡性より起つた暴動につきては前者と儼然たる區別をなして將來のため社會秩序の破壞に對する强烈なる匡正手段を講ぜねばならぬ。

貧困は社會の安寧幸福を害ふものである。無暴なる暴動は社會の秩序を破るものである。貧困救ふべし、秩序維持すべしといふのが私の議論の要點である。

今回の暴動は日本國の社會的秩序に幾分の龜裂を生ぜしめ、日本國民の名聲に幾分の汚點を付したことは疑ひないが、一面に於いて生活の壓迫の恐るべきこと、我國の經濟組織に大なる缺陷のあること、從來其の匡正策があまり緩慢に過ぎたること、國民の社會生活的訓練の未不充分なること其の他種々の點に於いて貴き教訓を得たることは之れを認めねばならぬ。歐洲諸國に於いては國民の貧乏退治若くは其の社會的經濟的地位改善のため國家が種々の制度、施設をなし國民も亦其の經濟的生活の向上のために種々の設備をなすことを怠らない。工場法の制定、勞働保險の强制、共濟組合、職工組合の發達は一歩〱勞働者の健康、生活、地位の改善、向上を助け公益事業若くは必要品供給若くは販賣事業の國營又は市營販賣組織細民住宅及一般大都市住宅の改善等は徐々に生活費の低減と幸福の增進を來さしめ、兒童保護、老人保護、救貧制度、救濟

の準備は弱者の保護、救濟の途を開き、歐羅巴の貧しき者、弱き者は絶えず國家の力により又自己の參加せる團體の力によつて生活の保障改善を得るの途に進みつゝあるのである。此の如く二十世紀の國家は何れも十九世紀後半より起りたる産業革命資本集中の結果として生じたる經濟組織と社會生活の缺陷を補ふに汲々たる有樣である。此意味に於いて私は二十世紀の國家は一面に於いて社會主義を行ふ機關であると定義し得ると思ふ。我國が二十世紀の産業國の餘弊を正確に繼受してをつたことは此度の騷動によつて明に證明せられた。しかし識者は早くより既に其然ることを知悉し、改善の方針につきても種々の獻策をなしてをつたのであるが當局の逡巡と國民の覺醒せざることゝによつて其經濟組織と社會生活の改善は常に時期を失し歐洲諸國より遲ること多年であつたのである。然るに今回の歐洲大戰爭は我國の經濟狀態を或意味に於いては善き方向に或意味に於いては惡しき方向に激動せしめ從來の經濟組織の缺陷を極度に發現せしめたが故に此缺陷を補塡すべき何等見るべき施設を有せざりし我國に於いては只一揺りにて突如として今回の如き大騷動を激成せしめ當局と國民は始めて我國に根を下せる二十世紀の經濟組織の弊害の意外に大なりしことを悟り、若くは悟らんとするに至つたのである。我國の上下は維新の大業を終えてより後日清、日露の兩大戰役に遭遇して其東洋に於ける國際的地位、並びに世界に於ける國際的地位を確保することに殆ど其全力を盡してをつて未內を顧るの暇なき有樣であつたが、既に東洋に於ける地步を確保し、且つ今回の大戰爭によつて國勢漸く充實し、しかも同時に現時の經濟組織と社會生活の缺陷の匡正の必要なることに氣付き彼の救濟調査會を設け徐々に國家の內面的改善に進まむとする機運に達してをつたのであるが折しも戰時經濟の急激なる壓迫と政府の經濟政策の蹉跌なりしとは、一時に從來のあらゆる經濟組織の缺陷と國民性の缺點までを併せて暴露せしむることに立ち至つたのである。

今回の騷動によつて得たる各種の教訓を忘れずして我國の政府と國民が相率ひて我國の經濟組織の改善と社會生活の改良に向つて進まば蓋し禍を轉じて福となすことは容易である。

米騷動の社會的及び政治的考察

大山郁夫

(一) 弱り目に祟り目

富山縣の女房一揆より口火を切つた米騷動が、見る見る各地方に飛火して、多少の程度の相違こそあれ、殆んど全國に亘る紛亂を現出したのは、慥に昭代の不祥事には相違ない。殊に警官と民衆、若しくは軍隊と民衆との間に殺傷事件が少からず演出せられたのは、誰がその責任者であるにしても、正に血で血を洗ふ內亂狀態を呈したものとして、心ある國民をして痛歎措く所を知らざりしめたものであつた。

官僚政治を以てその成立の根本義として居る寺內內閣にしても、苟くも政治家の一團を以て自ら持してゐる以上は、最近に於ける全國的米騷動を見て、甚だしく痛心して居るには違ひあるまい。殊に此事件がその執政時代に於て勃發したものであるだけに、その閣僚の焦燥の程度は、直ちに之を推測することが出來るのである。彼等は無論此事件に對する彼等の責任が、彼等の地位を動搖せしむるに足る力を有する事を知つて居る筈である。是れ權勢維持慾が本能の樣になつてその腦裏にこびり附いて居る彼等に取つては、誠に容易ならざる一大事であらねばならぬ。けれども彼等の地位に關する斯の如き考察よりも、更に痛烈なる打擊を彼等に與へたものは、恐らく彼等の執政の初めより標榜し來りたる所謂善政主義の破綻を現前に目擊した一事であらう。彼等が今より約二年前、世論の劇烈なる反對を冒して內閣を組織した時には、外交に於ては對支政策の刷新を絶叫し、內政に於ては善政主義を行ふことを聲明して、傲然國民の上に臨んだものである。然るに對支政策に關しては、彼等の記錄は單純に失敗の連續に過ぎなかつたことは、如何に剛愎なる彼等と雖も、之を認めない譯には行かないであらう。されば彼等は責めては彼等の殘りの一枚看板なる內政上の善政主義に成功することを以て、彼等自身の閣臣としての存續のために必要だと思惟した筈である。更に最近の重要政治問題を顧みれば、政府が米國の提議を奇貨として斷行した浦潮及びそれ以外の方面への出兵は、決して國民が無條件の贊意を寄せて居るものではない。從つて之が斷行決定の前後に於ては、政府は國民及び政黨の詰責に逢つて、散々不面目なる態度を示した矢先であ

政府は無論出兵に關しては國論の一致を望んだには違ひないが、官製の國論一致が手際よく出來上る樣な時代は過ぎ去つた。——官僚政府の强き希望如何に拘らず、幸にもさう言つた時代は疾くの昔に過ぎ去つた。官僚政府の何よりも嫌ひな世界的事件の影響は、此程度に於て我國の社會にも押寄せて來たのである。

兎も角出兵問題を中心として、政府の地位が益す居心地の惡いものとなつたことは事實である。初めから餘り統一がよく取れて居なかつた政府の內部が、出兵問題以來益す不統一に傾いて來掛けた消息は、次第に明瞭に外間からも窺知せらるゝ樣になつた。當時後藤外相が一日怒氣を含んで閣議の席上より飛び出した樣な他愛もないことまでが、さも重大事件であるかの樣に世間に取沙汰せられたのは、全く時期が時期であつたからである。

斯の如く政府がする事なす事は行詰りに躓いて、その內部が何となくごたついて居た時に當つて、政府が戰々兢々薄氷を踏む思ひで、何處にも事勿かれと願つたのは、無理もない事と謂はねばならぬ。夫の出兵問題に關聯して政府が全國の新聞雜誌に對し、極端に辛辣なる鉗口令を布いたのは、表面非常に强硬なる態度の樣に見えたが、實は水鳥の羽音も聞くまいとする甚だしき臆病心より出でたものである。當時世論が盛に攻擊した通り、それは無論言論の自由に對する絕大なる暴虐には相違なかつたが、その暴虐は傷ける野猪の狂亂の如く、失意の弱者の絕望より來つたものである。古來專制政治家が行つた暴虐的行爲は、大抵は皆臆病心の變形と見て差支がないものと思ふ。

臆病の變形といへば、政府が出兵に關聯して臨時議會召集の希望が世論の上に可なり有力に現はれたにも拘らず、全然之を無視して出兵費を剩餘金支出金等に依つて辨ぜんと決したのも、是亦同類項に屬するものでなければならぬ。殊に第四十議會の閉會の間際に於て、寺內首相が何時臨時議會を召集しないとも限らないといふことを仄かしたことを考ふれば、今回の出兵は正にその場合に該當して居るものであると謂ふことが出來る。それにも拘はらず、寺內內閣が斯の如き臨時議會の召集が最も適當なる時期に於て、極力それを回避しやうと試みて居るのは、一は政友會が策略上それを非とした爲めとはいへ、その最大の原因は、その場合に於て必ず提起せらるべく豫想せらるる內閣不信任の聲を聞くことを怖れたからであらう。少くとも斯か推定するのが、最も肯綮に中れる見解でなければならぬ。斯の如く自家の地位安全のために立憲的精神を蹂躙して顧みざるは奇怪であると言つて、寺內內閣に向つて逆襲するのは、その精神

に於て諒とすべきものがあるにしても、それは野蠻の骨頂とも謂ふべきものである。權勢慾のためにあらゆる物を犧牲にして顧みざるは、獨り寺内内閣に止まらず、一般の官僚内閣の本質上、必然的に之に附隨する一の屬性である。斯の如き弊害を根本的に除去せんとせば、官僚内閣主義そのものに對して、最後の止めを刺すより外に策がないのである。

それは兎も角、寺内内閣がその成立以來の積もる失政に依つて、右の如き不安狀態に瀕して居る折も折、弱り目に祟り目といふ諺の通り、豫ねて暴騰に暴騰を重ねつつあつた米價の天井知らずの相場を示したことが直接の動機となつて、憲政開始以來未だ曾てその類例を見なかつた程の大規模に於ける騷動が、この大正の聖代に於て、而かも善政主義を標榜して居る寺内内閣の下に於て、全國の津々浦々に於て勃發し、殆んど内亂とも見らるる程の混亂狀態を現出し、甚だしきに至つては、流血の慘劇さへ所在に演出せられ、斯くてそれが皮肉にも、所謂善政主義の寺内内閣の記錄の恐らく末尾をば、餘り心持の良くない色である所の赤に塗り潰ぶしたのである。

（二）自由討議の必要

自分は前段に「寺内内閣の記錄の末尾」といふ文字を用ひたが、これは矢張自分の希望をその儘早く實現したものであるが、苟くも立憲政治が責任政治の一樣式である以上は、事實に於てもさうでなくてはならぬ。殊に現今に於ては、世論が寺内内閣の糺彈に一致して居る有樣は、その保姆の役目を務むる元老と雖も之を如何ともすることが出來ないのである。而して道路傳ふる所に據れば、流石の寺内内閣も、今度こそは自己の政治的責任を感じて早晩總辭職を決行せんとして居るが、一は現下の騷擾を鎭靜せしめてからと言ふ考へから、又は一は後繼内閣を適宜に定めてからと言ふ考へから、今の所直ちに之を決行しまいと言ふことである。右の考へは孰れも普通の場合に於ては適當なものであるに相違ないが、目下の場合に於ては兩方とも間違つて居ると思ふ。その理由は後に述ぶることとして、玆では先づ今度の騷擾を誘導するに至りたる社會的及び政治的原因に就いて、聊か考察して見やうと思ふ。

此問題に關して腹藏なき意見を開陳することは、我國の言論界の現狀の下に於ては、極めて危險なるわざであることは覺悟の前である。けれども今は内治外交上の多難の時である。即ち官僚や政黨政治家の好んで用ふる表現を借りて言へば、時局重大の場合である。斯の如き場合に於ては、苟くも國家の前途に關心する國民の各員は、時局問題解決の爲めに、その思ふ所に

従つて忌憚なく進言せねばならないし、又爲政者は誠心誠意より出でたる國民の進言に對しては、飽くまで之に傾聽の耳を借すだけの雅量を示さねばならぬ。危險を恐れて進言の必要なる時にも沈默を守るは、國民に取つては卑怯なる態度である。又國民の言論が自己の政策に不利なる故を以て、無法に之を抑壓するのは、爲政者に取つては暴虐なる處置である。且つまた過度の言論の抑壓は、國民の胸裡に於て訴ふること能はざる不平を鬱積せしむる所以であつて、而して斯の如く鬱積せられたる不平は、一定の程度に達する時は、必ず活火山の噴出の樣に爆發しないでは已まないものである。此考察は直ちに今回の米騷動の政治的原因の一に指を觸れるものとなる譯であるから、その細論は記述の順序上適當なる處に於て之を試むることゝし、茲では只現下の騷擾に關しては、他の一切の公共問題に關する場合と同じく、國民全般の自由討議及び自由批評を必要とする旨だけを述ぶるに止めて置くことゝする。

（三）　飢饉の現實感

今回の騷擾の直接の原因は、無論經濟上の原因である。即ち我國民の主要食料たる米穀の天井知らずの騰貴、及び之に伴ひたる一般物價の騰貴である。人間の一切の行爲の動機は、飢餓と戀愛とに歸するものであると言つた學者がある。如何にも方に依れば、飢餓は人間の自己保存の本能に對する反逆者であつて、戀愛はその自己傳播の本能の助成者である。素より人間の一切の行爲を支配する要素は、決して此二つのものに限つた譯ではあるまいが、併し此二つのものが極めて強烈に人間の行爲を刺戟する力であることだけは、誰しも拒むことが出來ない眞理である。その中にも普通一般の人に取つては、飢餓の與ふる現實感の方が、戀愛の與ふるそれよりは遙に緊切なものであるだけに、安價なる文藝上の作品に屢ば描かるる人生以外の實生活に於ては、人間の行爲の原動力としては、前者が後者よりも遙に多く、強く、且つ深く作用して居るのを見るのである。

弱きものゝ別名たる婦人が、現下の食料運動の劈頭に立てる戰士となつたことは、右の見地より考へて甚だ意味のあることである。臺所の番人たる婦人が、食料獲得の難易に對して最も敏感なるは言ふまでもないことである。けれども同時に自己の貧困の實情を最も甚だしく隱したがるものも亦、矢張り婦人である。けれども斯の樣な虛飾的感情も、飢餓の前には何等の權威を有せざることは、所謂女房一揆に依つて十分に證明せられた。此女房一揆のあつた當時、それに參加した婦人連の配偶者

が遠隔の地方に出漁して不在であつた事實は、却て右の關係を赤裸々に露出するに好都合なるものであつて、而かもそれは今後の社會問題解決の上に、極めて重要なるヒントを與へたものであらねばならぬ。彼等の喉頭より漏れ出でた所の「餓死せんよりは寧ろ監獄に行かん」との悲惨なる絶望の聲は、飽食美衣の中に生活しながら、大膽にも社會政策を行はうなどといふ抱負を持つて居る貴族的政治家の眼前に、一の新しき世界を開いたものに外ならなかつた。

斯の如く貴族的政治家の眼前に一の新しき世界が展開せられたに拘はらず、彼等はそれより何物をか學ばうとはしなかつた。否、彼等はそれより何物をも學び得なかつたといふ方が、更に正確であるかも知れぬ。蓋し彼等が平素より住み馴れて居る世界は、新たに彼等の眼前に展開せられたる此世界とは、餘りに懸け離れて居るものであるから、彼等は單純にそれを眺めて驚いただけに止つて、同情を以てそれを熟視する用意を有しなかつたために、それを有るが儘に正解することが出來なかつたのであらう。素より彼等の中には、役所の給仕より身を起した者もあれば、警官とか裁判所の書記とかの微職より今日の顯職にまで鰻登りに昇つて來た手合もあることは事實であるが、彼等が官海遊泳術の慣習のために費した永き「時」の經過は、彼等をして自己の出發點を全然忘却せしむるに十分であつたものと見える。左なくば、彼等が富山縣の女房一揆の意味を讀むことに對して示した驚くべき無能力を如何に說明すべきか。水野內相は彼が新聞雜誌に對して發したる米騷動に關する記事掲載禁止命令のために辯解する際に當つて、富山縣の女房一揆は只それだけに止まるものとして、之を輕々に看過したのが過ちの基であつたと白狀して居るが、是は獨り水野內相の場合に止まらなかつたのである。

(四)官僚式優越感

右の一事は貴族的政治家に社會問題解決の事業を一任することの誤謬を、最も明瞭に例證して居るものである。昔は諸國を微行して民情を察した明君も折々現はれたが、現代に於て見る様な複雜なる社會では、行脚式民情偵察では到底間に合はないのみならず、一般庶民には庶民意識なるものが明確に植え付けられ、而して斯の如き庶民意識は、政治家が自ら庶民に伍して生活するに非らざれば、到底それを理解することが出來ないものである。傳統的支配階級に列するものには、支配階級的意識が先きに立つて、民衆と共鳴し同感することは到底不可能となるのである。故に彼等が社會政策を行はんとすれば、直ちに

恩惠的善政主義の手に出づるより外に途がないのである。古明君氣取りの農相などが、その一顧眄に動く從者などを隨行させて、近隣の稻田に足を運んでその出來榮えを眺める樣なことは、唯その時代錯誤の行脚振りが滑稽畫の好材料を提供する以外には、爪の垢ほどの效能もないことであるが、併しその古明君氣取りは、的切り官僚意識の發露であり、從つて恩惠的善政主義の象徴であるといふ見方は正しいのである。

寺內內閣の閣僚は、當初より社會政策といふことを、殆んど稱名題目の樣に唱へ續けたものであるが、彼等とは異つた世界に住む我等草莽布衣の耳には、それが何となく衒氣の樣にも聞え、滑稽の樣にも聞え、チレツタンチズムの樣にも聞え、貴族趣味より出でたる贅澤三昧の樣にも聞え、且つ又彼等が社會政策を捏ね廻はして居るのを見ると、茶人の骨董いぢりくの風韻を聯想しないで居られなかつたのは事實である。殊に彼等が社會政策と善政主義とを結び附けて居たのは、その外的樣式より見れば噴飯の至りであつたが、更に深くそが齎らし來るべき結果に想到する時は、中々噴飯どころではなく、寧ろ寒心の至りに堪へなかつたのである。

蓋し官僚政治家の善政主義は、所謂賢明なる專制主義の埒外に出でないものである。彼等と雖も、政治の目的は國民といふ組織體の安寧幸福を增進するに在るものと考へて居るには相違ないが、唯此目的を實現する手段に就いては、彼等の見解と我等の見解との間には非常なる懸隔があるのである。彼等の見解に據れば、國民は自己の幸福が何であるかも、又その幸福を實現する手段が何であるかも知らない衆愚の集團であるが故に、彼等自身の樣な知識及び技能の優秀なる所謂練達堪能の士が國民に代つて政治を執つてやらなければ、國民は適從する所を失ふに至るであらうといふのである。普魯西の貴族(ユンカー)の一人が、「民の聲は家畜の聲なり」と言つたさうであるが、我國の官僚政治家の民衆や政黨に對する評價も亦、之と相距ること甚だ遠くはあるまいと思はれる。少くとも彼等は、彼等自身の全知全能を信ぜざるまでも、彼等自身が民衆や政黨に對して知識及び技能に於て非常に優越してゐることを內心自負して居るに相違ない。此官僚式知的優越感の、現內閣諸公の鼻先にぶら下つて居ることは、彼等の日頃の公生活上の言動に徵して、容易に之を卜知することが出來るが、それが殊に最も著しく目に附くのは、何と言つても現下の米騷動の最大責任者たる仲小路農相である。素より後藤外相にしても、田邊相にしても、若しくはその他の各相にしても、此點に關しては皆多少の程度に於て同一傾向を示して居るが、その中にも特に仲小路農相の場合に於て

最も際立つて現はれる一種の官僚式倨傲——而かも國民中の進歩したる部分に屬する人々の眼には可なり滑稽に映ずるその官僚式倨傲は、主として持前の官僚式優越感に基因するものであると謂ふことが出來る。

斯の如き官僚式優越感、並にその必然的產物たる官僚式倨傲が、どれだけ我國の民衆をして官僚政治家を、敵視せしめて居るかは、到底測り知られざるものがある。手近い一例を取つて言へば、仲小路農相が物價調節を目的とする暴利取締令や、外米管理令を楯に取つて、威丈高になつて天下に號令すればする程、之に對する反抗氣分が益す募つて來たことなどは、全くそれに外ならぬものである。後藤外相なども、此點に關する實例を製造することに於て無限の能力を示したものであつて、夫の先月に於ける對霞倶樂部記者衝突の如きは、その中の傑作に屬するものの一つである。けれども今一層大なる見地より觀望すれば、民衆の機關たることを以て生命とする新聞紙といふ新聞紙が、少數の所謂御用新聞なるものを除いては、殆んど皆官僚反對の聲を擧げて居ないものがないのは、それは無論主として官僚の權力の存續が我國の憲政の進步を阻害するといふ的確なる事實の考察に基くものであるけれども、同時に官僚政治家輩の習性となれるその倨傲尊大（如何に巧にその表面を粧うて居る場合でも）、並に彼等が常に餘りに露骨に示す所のその優越感に對する反抗氣分といふ感情的分子の混入して居るものであることを、誰れが否認し得やう。

(五)官僚式責任轉嫁

斯の如き狀態の下に於て、擧國一致とか官民一致とかが、官僚の虫の好い註文通りに實現せられないのも、決して怪むに足らぬのである。彼等の擧國一致といふものは、國民をして徹頭徹尾官僚の指導に隨從せしめやうとするものであり、彼等の官民一致といふものは、國民をしてどこまでも官吏の御無理を御尤と默認させやうとするものであることは、今更言ふだけが野暮の骨頂である。而して斯の如きものが皆、例の官僚式優越感より流れ出でて居るものであることも亦、直に首肯し得られるのである。此優越感が痼疾となれる官僚政治家輩が、常に自家の失敗の責任を他に轉嫁せんと努力して居る樣に見えるのは、恐らく彼等の意中では責任の轉嫁の積りではなくて、全く官僚が自己の失敗に對し責任が有り得ないと信じて居るため、換言すれば、官僚が政黨や新聞紙の如き邪魔物がなくて、單獨に國務を專斷したならば、決して失敗などをすることが有り得ないと信じて居るためでなければならぬ。孰れにしても、現今に

て官僚の責任轉嫁先の御用を最も頻繁に務めて居るものは、官僚の一敵國を成せる新聞紙であることは、是亦極めて自然の順序である。對支政策や對露政策に就いては、政黨も外交を「政爭の具に供す」といふ成句の曲解に依つて、可なり政府及びその御用論客の責任轉嫁處となり來つたが、特に新聞紙が此點に於て最も多く貧乏籤を引き來つたのは、世間周知の事實である。夫の新聞紙に取つては最も迷惑に感じられる――殊に當節の紙價暴騰の際に於て最も迷惑に感じられる發賣禁止の如きは、見方に依れば此責任轉嫁の一形式に外ならぬものである。西伯利出兵問題擾攘の際に、一日か二日の短時期の間に、全國に於ける五十幾種かの新聞紙が發賣禁止の厄に罹つたことの如きは此點に於ける官僚政府の新聞紙觀を最も適切に反映して居るものである。若しそれ今回の米騷動に關し、政府が少くともその收拾に就いて、新聞紙を以てその責任者の唯一と見做し、誰れの目にも無法千萬に見ゆる米騷動に關する記事掲載禁止命令を發したのは、政府が大狼狽のため極度にその理智を喪失した瞬間に於て、彼等が平素抱懷して居る新聞紙觀が無意識的に活躍して、その判斷を左右した結果に外ならぬものであらう。併し、此禁止命令が如何に非立憲的であり、また如何に拙策であつたかといふ事は、流石の政府も直ちに心附いたものと見え、春秋會の抗議及び全國各地方の新聞紙の蹶起に逢ふや、二日にして忽ち之を撤回し（尤もその撤回の方法の不眞面目さは話にならぬものであつたが）、そのために官僚に取つては何より大切なる威儼の失墜するのを顧みる遑がなかつたのは、官僚政治否認者の側より見れば、可なり痛快な事には相違なかつた。

官僚政治家が如何に强辯を弄して、各地に於ける米騷動に對する責任の一部を新聞紙に轉嫁しやうとしても、米騷動その物が政府の失政の結果であることは、到底之を如何ともすることが出來ないのである。例の滑稽的に倨傲なる仲小路農相も、流石にその本心の焦燥を蔽ふに由なかつたと見え、此際當局の態度に就て極力辯明したのは好いが、辯明すればする程、益す襤褸を出す始末であつたのは、こちらの方から氣の毒になる程であつた。農相は頻りに暴利取締令とか、買惜み及び買占めに對する取締とか、外米管理令とか、外米、鮮米、臺米移入とかの效能を述べ立てたけれども、眼前の活ける事實に、總べて是等の手段の失敗を語つて居るものであることを忘れて居たのに、人をしてその慌て方の餘りに極端なるを怪ましめた。倨傲無人といふ類稀の常習犯者が、急場の事情に度膽を拔かれて狼狽するのは、傍觀者の眼に甚だしき醜態として映ずるものであることは人の知る所であるが、今度の仲小路農相の態度は、丁度誰

へ向きにその型に飲つたものであつた。斯くて立派に悲喜劇の主人公となり了せたる農相は、七月一日頃の調査に據ると、我國内に於ける在米高は、千六百七十萬石の多きに上つて居るのだから、今更何も騒ぐには當らないと言つたが、若し此陳述が正しいのだとすると、それは益す的確に當局の從來の物價調節策の失敗を證明するものたるに過ぎなかつた。農相はまた、今後は通運會社や鐵道院と協議して、米穀の分配普及の便宜を謀るやうにすると言つたが、今となつてそれが出來る位ならば、何故にそれを事件の勃發前に行はなかつたのであるかといふ世人の至當なる疑問に至つては、彼は竟に之に對して滿足なる解答を與へなかつたのである。要するに彼が如何なることを口に任せて述べ立てても、結局現政府の平素の疎漫及び不明の罪を言ひ解くことが出來なかつたのであつた。

最近の米價の騰貴は、主として政府の失政に基くものであることは明瞭であるに拘らず、政府が飽くまで之を否認してその責任を回避せんとするのみならず、更に強辯を用ひて百方責任を他に轉嫁せんとするは、右に述べた通りであるが、殊に滑稽なのは、仲小路農相が米價騰貴の原因として、出兵騒ぎや、河内艦の爆沈を算へた外に、先般關西を襲つた低氣壓を擧げ、斯くて責任の一部を特に物の言へぬ天候に轉嫁したことである。

けれども農相に直ぐその跡から「天候は申分なき順調にて、今年の米作は大正三年以來の豐作と言はれて居る」と述べ、譯もなく前言を裏切つて居るのは、小兒欺しにもならぬ幼稚なる言ひ草である。併し、假りに農相が擧げた天災的事變が米價騰貴の原因の總てであると假定しても、米騒動そのものの原因は、單に米價騰貴の一事實のみならず、その他の種々の複雜なる構成分子を含んで居るものであつて、殊に善政主義の名の下に行はれたる寺内内閣の暴政に對する民衆の怨嗟の如きは、慥にその間に在つて主要部分を構成して居るものであるから、それだけでは寺内内閣の責任解除の理由とならないのである。更に傳ふる所に據れば、官僚閥内では今度の米騒動を以て天災同樣に考へて居るとの事であるが、此噂が若し眞なりとせば、それは飛んでもない謬見であることは、言ふを須たないのである。蓋し思的現象たる人間社會の事件を、自然現象たる天變地異と混同するが如きは、正氣の沙汰とは思はれない。而かも知つて之を言ふのならば、横着にも程があるものと謂ふべく、知らずして之を言ふのならば、その狂妄は度すべからざるものであらねばならぬ。孰れにしても我等は、官僚政治家輩が、斯の如き國家社會の重大事に際しても、尚ほ且つ不眞面至極なる言動を弄するのを見ては、益す官僚政治を呪詛する念を强めさるを

のである。

（六）引責無用の詭辯

官僚者流にして、今度の事件に關して全然自己の無責任なることを主張する徒輩は姑らく論外とするも、その責任を幾分理解して居る者共の中にも、尚ほ種々の詭辯を弄して、その引責辭職の無用なることを唱道するものがあるのは、慮外千萬の沙汰である。その中で最も月並的なるものは、寺内閣が辭職をするにしても、現下の騒擾が鎭靜に歸してから、之をなすべきものとする議論である。此意見は表面上最も無難なるものの樣であるが、併し如何なる場合を以て騒擾の鎭靜に歸したものと見るかが問題である。若し公安秩序維持のために警官及び軍隊を繰出すの必要の去つた場合を以てそれと見るならば、我等に於て毛頭異存のある筈なく、而して同時に今があらましその場合の到來したものと認めるのである。けれども若し他の騒擾の勃發の危險の全然除き去られた場合を以て、それと見るのならば、我等は絕對的に之を非とせざるを得ないのである。蓋し斯の如き解釋は、寺内内閣をして何時までもその椅子に噛り附く口實を得しむるものでもあり、又實際に於ても輿論の反抗の目標たり、民衆の怨恨の對象たる寺内内閣の存續する間は、何時まで經つてもその危險が除き去らるべき見込がないのみではなく、寺内内閣の存續が久しければ久しき程、その危險は益す增進するものと認むるが至當であるからである。尤もその場合には、寺内内閣は依然として警官と軍隊との力に由つて、斯る危險が表面に爆發するのを防止することも出來やうが、國民の不平がサーベルや銃劍の力で纔に抑塞せられる狀態の下に於ては、國民は恰も獨逸の壓制の下に於けるポーランド人と同樣の運命に陷り（現在に於ても多少之に類似の狀態が全然存在して居ないとは謂へないが）、果ては國家そのものの存在を詛ふ樣になるであらう。さうなれば帝國存立上の一大事である。此立場よりして、我等は極力寺内内閣が即時總辭職を決行することを必要とするのである。又同じ立場よりして、我等は昨今司法當局が決定したる騒擾關係者嚴罰方針、並にそれを推稱し謳歌する一派の曲學者及び御用論客の意見を以て、國家的道德を蹂躙する非現代的狂妄政策の主張及び遂行と見做すことを躊躇しないのである。

次にまた現内閣が引責辭職をするにしても、その後繼者を決定した上で之を行ふべきものと主張する議論がある。是も一應尤も千萬の樣に聞える。殊に立憲政治の完全圓滿に行はれる國に在つては、退かんとする内閣が、來らんとする内閣を推薦して去るのは、憲政の常道であるとも謂へる。けれども我國に於て

は、殊に現在の官僚內閣の下に於ては、此原則を適用することが極めて危險である。何となればそれは、寺內內閣をして後繼內閣難を唱へつつ何時までも現地位に噛り附くことを得る口實を持たしむることになるかも知れぬからである。縱し然らずとするも、寺內內閣が山縣公の指金などに依つて取り決めた新內閣は、どの樣な取合はせの獻立に出でるにしても、結極現內閣と同類の內閣に落付く必然性があるからである。如何にも我國の現狀の下に於ては、後繼內閣難の問題が儼存して居ることは、疑ふべからざる事實である。殊に曖昧なる態度を以て終始一貫する國民黨や、果報を寢て待つ政友會や、山縣公に參拜する黨員を寬假する憲政會のことなどを思へば、國民に取つては情なくて淚が出る程慘じめな事情がある。けれども此事情のために寺內內閣の存續を見逃がす譯には行かぬ。政黨者流の樣に政權に由緣なき單純なる官僚內閣否認者が、國家的立場を離れて考へる時には、寺內內閣をして更に永くその地位を守らしめ、此上その本然の性質に從つて失政に失政を重ね、遂に脚も腰も立たなくなつてから辭職せしむることが、永久に官僚內閣の羈絆を脫する捷徑である、といふ議論も立て得られないではないが、斯の如き事は國民としての國家的眼孔の到底忍容し得ざる所である。刻下の最重要問題は、先づ寺內內閣の倒壞に依つて人心を一新し、以てその積もる秕政の結果として生じたる民衆の不滿及び社會の不安を緩和することである。故に我等は此際、寺內內閣が後繼內閣難の口實に隱れて引責を躊躇することなく、潔く斷乎として處決することを必要と認めるのである。

若し夫れ貴族院に於ける研究會の連中が、「今回の如き騷擾に內閣が一々責を引いては、後日に惡例を貽す憂はなきか」と論じて居ると傳へらるる噂に根據があるものとすればそれは、近頃奇怪千萬の意見と謂はねばならぬ。現內閣の引責辭職を迫る論者は、單純に騷擾そのものに就いて引責を促して居るのではなく、騷擾の原因を作つた罪に對して引責を促して居るのである。研究會の連中は宜しく「今回の如き騷擾に對して內閣が責を引かなかつたら、後日に惡例を貽す憂はなきか」と問ふべきであつたが、彼等が此理路を逆行して居る所に、國家を重しとせずして官僚を重しとする彼等獨特の階級意識が、期せずして表はれ居るを見るのは、國民が最も注意して考慮すべき一要點である。

併し、惡例といへば寧ろ今回の如き不祥事をその事前に防止せずして、その一たび勃發するに及んで急遽狼狽し、一方に於ては陛下の赤子をサーベルや銃劍の下に置き、他方に於ては施米廉賣を實施した事がそれであらねばならぬ。施米や廉賣の實

策そのものは臨急手段として此際採用せねばならぬものであつたのだから、決してそれが悪いと言ふのではないが、その様な政策を事件勃發後に於て始めて實施したのが悪るいと言ふのである。尤も今度の騷擾事件が單純に風水害の様に全然豫見が出來なかつたものであつたのならば、それも仕方がないといふものであるが、今度の騷擾事件を以て天變地異と同様に見ることの謬理なることは、既に前に述べた通りである。只それが貴族的政治家に於て豫測が出來なかつたのは、一は彼等が平素國民の上に超然として高く留まつて居る爲めであり、一は官僚政治が極端なる形式政治であるよりして、中央及び地方に於ける官僚どもが、只形式的に政務を執れば能事畢ると心得て居たから、國民生活の眞相を知るに由がなかつた爲めであり、一は現内閣の辛辣なる言論抑壓政策の結果として、民衆の意思が爲政者に疏通しなかつた爲めである。孰れにしても此騷擾事件の結果として、民衆は言論若しくは公評の如き穏當なる手段を以てしては、到底身に迫る困窮を擁護することは出來ないものであるが、兩個的兇動を起す時には、幾分でもその要求を達することが出來るものである、との印象を受けた傾がないとは謂へないのである。斯の如き弊端を醸したる現内閣が、尙ほ依然としてその地位に止まるものとせば、我等は斯る場合には必ず斯る騷擾が起ることが悪例として貽るであらうとの危險を懐くものである。此點よりしても、寺内内閣は時を移さず引責辭職して、罪を闕下及び國民の前に陳謝することが必要なのである。

（七　米騷動の社會的諸原因

今回の米騷動の經濟的及び政治的諸原因に關しては、前數號の論述中に於てその大體に觸れて置いた。是等の諸原因は、無論廣義に於ける社會的諸原因の中にその地位を占めて居るものである。けれどもそれ等以外の社會的諸原因——換言すれば狹義に於ける社會的諸原因も亦、今回の米騷動の發生及び傳播に關して、相當に重要なる役目を務めて居ることは、該事件の性質上、直ちに想到し得られることである。素より是等のものは、事件が尙ほ全然完了するに至らざる今日に於ては、表面に浮び出てゝ居る樣々の局部的事象の影に隱れて居るものが多いのであるから、深く之を究明することは極めて困難であつて、之が遺漏なき論述は後日に讓らねばならぬのではあるが、今日既に明瞭となれるものゝ若干を玆に撰び出して、聊か私見を加へて見やうと思ふ。是れ蓋し斯の如き考察は、現狀救濟策の確立のために必要であると思ふからである。

內務當局に於ても今回の米騷動を以て明治以來未曾有の現象

と見做し、之が調査研究は今後の社會問題攻究上有力なる參考資料となるべきものと認めたるよりして、監察官を諸地方に特派して該事件の實況に關する視察報告を徴した。而して八月十八日に於て內相官邸で報告會を開催したが、其際に於ける特派監察官の愛知、京都、大阪、兵庫、岡山、廣島の各府縣の實況に關する視察報告、並に其他各府縣よりの報告を綜合すれば、官僚者流が今回の米騷動の諸原因を如何に解釋して居るかを窺ふことが出來る。今は當面の事業として、先づそれから調べて掛らうと思ふ。

右の諸般の報告を綜合すれば、今回の米騷動の原因は、第一は言ふまでもなく食料殊に米價の昂騰であるが、尙ほそれ以外に、第二富豪殊に成金輩に對する一般庶民の反感、及び第三米穀商の買占め及び賣惜み等が算へられて居る。尙ほその外別に是等の報告は該事件が危險思想者流の煽動に基くことの甚だ少きことを言ひ、且つまた全體に於て政治的色彩に乏しかつたことを附加へて居る。危險思想者流の煽動の有無は、未だ判明せざる事實問題として、我等はその眞否を後日の調査に保留して置くことゝするが、事件の全體に亘つて政治的色彩が乏しかつたと見るは、極めて皮想的見解に過ぎざるものであつて、事實の眞相を穿ちたる言ではない。この點は我等が前數段に於て試みた論述に於て、之を明かにして置いた積りである。

右の諸般の報告に揭げられた米騷動の諸原因中に於て、第一の米價昂騰に就いては、該事件の經濟的政治的及び諸原因に關聯して既にその一端を論じて置いたから、茲にはその論評を省略する。若し夫れその第二の富豪者流殊に成金輩の跋扈に對する一般庶民の反感に至つては、それは不幸にして實在の現象である。而して在來の富豪及び時局が產んだ成金輩が、自己の物質的幸福が社會的恩惠に負ふとの極めて多大なる事實を忘れ、我儘千萬にもその享樂本位の生活に於て自己中心主義を極度に發揮したことが、此現象に對する責任の大部分を負擔せねばならぬものであるが、それにしても一般庶民が之に對して甚だしき反抗氣分に襲はれるに至つたのは、人生の幸福を單純に交換價値を有する財貨の所有の多寡に依つて測定せんとする現代の惡風潮に基因するものであつて、斯の如きは徹頭徹尾近代的資本主義が齎らし來つた社會の經濟化の必然的結果である。若し經世家にして此風潮を根絕――若しくは矯正せんと欲せば、外的手段としては社會的立法の廣汎なる設定に依つて資本主義の產業に嚴重なる制限を加ふることであり、內的手段としては社會的奉仕の觀念を基調としたる新倫理の樹立を促進することである。此論點は第三の米穀商の奸手段の上にも之を濫用する

とが出來るものである。凡そ是等の諸問題に關しては、自分は既に屢々本誌上に於て私見を發表したことであるが、今後と雖も機を見て世に問ふ所があるであらう。

右の諸紙の報告に上らなかつたものでも、直接間接に今回の米騷動の重要原因となつたものは多々あるであらうが、その中第一に我等の念頭に浮ぶものは、我國に於ても各種の階級意識が次第に强調せらるゝ傾向を帶びて來たことである。是は今回の米騷動が進行するに從つて、次第に貧民の富豪に對する報復的暴動の形式を取つて來たことに依つて極めて朧げながらも暗示せらるゝのである。併し、此事を茲に詳論せんことは、自分が此際支配し得る時間と紙數との許さないことであるから、遺憾ながらも之を省略する。

併し貧民の富豪に對する攻擊的行爲は、その全部を單純に階級意識の見地より說明し去ることは出來ない。少くともその一部は、暴動に參加した連中の朦朧なる社會的公正の觀念に基因するもの——若しくは現行の社會的不公正に對する反抗心に基因するものと見なければならぬ。夫の政府若しくは政府者の寵商として常に新聞紙の攻擊を受け來つた二三の富豪が、暴動の焦點を最も猛烈に喰はされることの如きは、正しくその實例と見るべきものである。その外側は眞に高き見地より觀察すれば、寺內內閣は言ふに及ばず、それ以前の歷史の內閣の政策が、常に有產階級の利益を保護するに偏して居た樣に一般民衆の眼に映じた事實も、今度の米騷動に全然關係がないとは言へぬ。是は我國の選擧法の上に於ける選擧資格制限の當然の結果であるから、此點より來る弊害を杜絕せんとせば、勢ひ選擧法の改正より之に着手せねばならぬ。今此重要なる點を評論する暇を持たないことは、自分の衷心より遺憾に堪へさる所であるが、全然之を省略するにも忍びないから、二三の實例を舉げて問題の核心を暗示しやう。即ち例へば寺內內閣が、第四十議會に於て米價騰貴の根本的防止策たる關稅撤廢を斷行することが出來なかつたのは、地方農民の有福なる部分を以てその支柱と賴む我國の政黨——殊に政友會の反對を恐れた爲めと言はれて居る。又米價及び一般物價調節策として、通貨收縮を唱道する輿論が非常に喧がしかつたにも拘らず、產業階級の意向を偏重せざるべからざる地位に在る現內閣は、久しく逡巡して之に聽從することを敢てしなかつた。その他寺內內閣の善政主義の標榜が甚だケバ〱しかつたにも拘らず、第四十議會に提出せられたる所謂社會政策案なるものが極めて微温的なものであつて、それさへ議會に於ける多數黨の一蹴に遇つて木葉微塵にケシ飛ばされ、殊に一般國民に依つて最も至當なる種類の稅目と思はれた戰時

利得稅の如きも、その課稅率が餘りに輕微であつたことなども、國民の多數者の間に非常に大なる不滿を流布したものである。言ふまでもなく、直接に米騷動に參加したもの丶多數は、主として無教育者であつたらしいから、自ら右の如き理屈を考へ出した譯ではなく、殊に暴動當時は全く群衆心理の衝動に驅られ、その樣なことを考へる餘裕も持たなかつたに相違ないが、唯彼等が平素右に擧げた樣な國民的不滿の空氣に浸潤して居た事實が、暴動に至るまでの過程に於て重大なる影響を彼等の思想及行動の上に及ぼしたものでなければならぬと思ふのである。

最後に我等は、今回の米騷動の背後に於て、我國民性の一の特徴たる躁狂性が著しく活躍したことを忘れてはならぬ。我國民の躁狂性は、常に彼等の團體的示威運動を化して群衆的暴動とならしむる危險の甚だ多きものである。此點に於て我國民を拉丁系諸民族に比較するものがある。自分は無論この比較がどの點まで當を得て居るものであるかを知らないが、兎も角我國民が此缺點を多大に有して居ることは、從來屡ば市民大會などの各機會に於て的確に證明せられたものであつて、今回の米騷動は更に又その一新例を加へたものである。

今回の食料運動に參加したる民衆が、忽ち群衆心理の俘となつて、多くの場合に於て單なる示威運動の程度を越えて、亂雜極まる掠奪的暴動となつたのは、遺憾の極である。我國民の前途及び我國の憲政の進運に關心するものは、此點に於て我國民性を矯正する工夫を講ずることを忘れてはならぬ。而して此目的を達するために、我々が最も熱烈に主張せざるべからざるものは、公民教育の普及並にその發達でなければならぬ。

けれども我國の民衆に對し、先づ立憲的に行動する素地を與へずして、直に立憲的に行動せよと命ずるのは、無謀も亦甚だしきものである。彼等の最大多數は國民としては所謂「國家的公民」(シュターツビュルガー)の根本條件たる選擧權を有せざるが故に代議士をして彼等の利害を顧慮せしむる手段をさへ有せざるものであり、又地方の自治體の公民として選擧權を有する場合と雖も、その選擧權は等級選擧制の支配を受けて居るがため、その效果の甚だ輕微なるものである。斯る狀態の下に置かれたる彼等は、立憲的行動に依つては得る所毫もなく、寧ろ團體的暴動に依つて何物かを得る見込を有する境遇に在るのである。無論何物をか得る見込があるからと言つて、彼等に常に暴動を起された日には、社會の秩序が維持される筈なく、從つて社會の平和が常に攪亂せられる譯で、到底堪まつたものでないが、さればとて彼等に立憲的に行動する權利を與へずして、只立憲的に行動する義務のみを課するは、國家的不道德と謂ふべきものである。現行の選

法は、選擧資格を與ふるに際して、人を見ずして唯財産のみを見て居るのである。故に選擧權を有せざる徒が、或る場合に於て人らしく行動せずして、猛獸らしく狂亂しても、唯之に對して法律上の制裁を加へ得るのみであつて、國家的道德上より之を責罰することが出來ないのである。斯の如きは正に是れ、國家生活上の一大不備と謂はねばならぬ。故に我等は將來の社會的不安を除く手段の一としても公民教育の普及並に發達を謀るべきことを主張し、而して公民教育の第一歩として選擧法の改正を絶叫せざるを得ないのである。觀來れば社會問題は、或る點に於て政治問題と密接なる關係に至つて居るものである。

今回の米騷動は、多くの點に於て我國の政治的及び社會的缺陷を暴露したものである。而して之に對する救濟策としては、應急的のものと根本的のものとを並び行はなければならぬことは、今更取立てゝ言ふまでもない。政府が現在應急策として用ひて居る穀類收用令や、施米及び寄附の如きものに關しても、論評して見たいとは山々あるが、今は其の暇を有しないのを遺憾とする。けれども其の根本的救濟策は更に重要なるものと思ふに依り、その基礎に關して粗雜ながらも、上に聊か私見を提供した次第である。思ふに我國の社會的不安は、警察や軍隊の威力を以て其表面の爆發を阻止することが出來るにしても、之をその根本より除き去るためには、更に徹底的方策に出づるに非れば、到底不可能たることを免れないのである。而も此所謂徹底的方策は戰後に於て直ちに現出すべく豫期せらるゝ産業沈滯期に發生すべき可能性ある或る種の事件に想到する時は、一日もその講究を忽せにすべからざるものである。斯る考慮より出發して、自分は現狀の下に於ける我國の言論の自由の範圍の許す限りに於て比較的率直に今回の米騷動に關する自分の解釋を上に掲げた譯である。唯文中自分にも氣の附く程の粗漏の個所の多いのは、一は時日の切迫のためであり、一は本文の主題の出兵問題に對する關係とか、又は右の事件中に在つて殊に京阪地方に於て猛烈なる活動をなした或る特殊の階級とかの如きものに就いて論述することを憚る理由があつた爲めである。此點は特に茲で斷つて置かねばならぬ必要がある。(七—八—一二)

暴動に對する當局の態度

——極衞權の實行と認めて處置すべきのみ——

法學博士　福田德三

中央公論社の問は恐らく此數日各地に起つた米價騷動に對す

る政府の處置を此非な非難した答を求める爲めに我々に與へられたものと想像する、仍て其積りで御答をする。

何事か平常に異つた事件が起ると直ぐ當局者を非難すると云ふのが當今の流行である。殊に政黨者流は奇貨措く可しとして政府攻擊の材料とする。乍併米價問題に就ては今日まで政友會も憲政會も何の積極的意見を公けにして居らず否却つて財產權の神聖だの營業の自由だのと云つて奸商共の喜びさうな事を言つて居たものが多い之に比すれば拙劣は拙劣でも農商務大臣が一生懸命に各種の施設をして居た事は少くとも其誠意は買つてやらねばならぬ。（本誌掲載拙文「現政府の社會的施設」及「奸商取締の手を緩めるな」を見られたし）然るに今となつて自分達の過去の態度はサラリと忘れたかの如く、米價調節の急要だの政府を鞭韃するのだと云つて居るのは局外者たる我々から見れば片腹ドコロか兩腹共痛くなる位の馬鹿らしさである。是れ今日の政黨なるものは何れも資本黨、富豪黨、財權黨たる眞相を自ら暴露しつゝあるものである。政黨間にも具眼の士は元よりあつて個人としては卓れた意見を抱いて居るやうであるが黨議とかに束縛せられて、不徹底千萬な事を言つて居る。學者らしい人も居るが其米價調節論は何れも曖昧模糊たるものである。之に比ぶれば、御粗末乍ら仲小路氏は兎に角一定の信念（迷信も大分混つて居るが）を持して之を元として着々色々な事をやつて居た。然るにも拘らず米價は益々騰貴遂に空前の騷擾を惹起した。元より當局者としては責任を免れぬわけではあるが、此度の騷擾に就て最も公平に考ふれば「だから言はない事ではない」と云ひ得る權利を持つて居るものは、日本に於て仲小路氏僅かに其一人たりと言はねばならぬ。反之仲小路氏の施設を頭ごなしに難じて居た政黨者流は坊主にでもなつて謝罪す可きである。殊に自己選擧區の地盤擁護の爲めに米屋町連の手先となつて妄動した東京市選出の某々代議士共は今や戰々競々として自家の安全を案じつゝあるものと思ふ。思へば笑止千萬な話である。

此度の騷擾は必竟するに極窮權の實行（ライト・ヲブ・エキストリーム・ニード）Right of extreme need に外ならぬのである。政治家共が政權の爭奪を以て政治の一切萬事なりとして、有頂天になつて、政治とは必竟民の生存を保障し安全にするを第一とすることを全然忘却したに對する人民自衞權の發現と曰す可きものである。舊幕時代にも屢々あつた、歐洲にも其先例はイクラもある。必竟人民は大抵な惡政治には我慢もし辛抱もするが、其が國民生存權の尊重を餘りに閑却するときは、極窮權の實行てふ變態を取つて現はれて來るのである。官僚政治の民本主義のと空なる文字を列べて政治の能事としつゝある間

に、我國民の生存は極端に脅かされた。而して最も多く苦痛を感じるものは、河上博士の所謂貧乏線の近所に彷徨して居る人々である。其が米價の奔騰の爲めにポイント・ヲブ・エキストリーム、ユード極端點に押し落された。此處まで落れば窮て而して通ずで、今迄は金持樣は金持樣、自分等貧民は貧民で其々別天地に住つてゞも居るやうな扱を受けても、大して不平を鳴らさず其が當然な事の如くに考へて居た連中も到底堪まらなくなつて、生存權の主張者となつて現はれるが、其主張は通常一樣では駄目であるから、ソコデ一の變態たる極端權の實行を以て先づ着手するのでコレハ殆んど一の自然法則の働きと云つても言ひ位當り前の事である。

自然法則的の當り前を以つて起つて來ることは人爲を以て無暗に鎭壓す可きではない、暴民頭腦の持有力は闘たる當存其者も一私人として極端權の要求を深く胸中に藏して居る。此を驅つて投刀までさせて彼を暴逞せしめるのは不得止事とは云ひ作ら、人世の一大皮肉事と云はねばならぬ。故に中央公論求むる所の政府非難に我黨は與する事が出來ぬ。治安維持の爲め若てゝ附けない以上は仕方がないが、問題は極端權を認めるか否かにある。財產權を以て生存權よりも重しとする英米流の法律觀政治觀に盲從するか、其れとも我邦は我邦で財產權尊重一點張りならず。國民生活の安全保障を政治の第一義とするかゞ大問題であつて、今の政治屋連は政府を非難する資格は寸毫も之を有して居らぬのである。乍併當局の態度は今後の處置を見て批評す可きである。乍併批評の權利は政黨者流には斷じて存しない。是れが我黨の答である。其以上の事は他日機を見て詳述しよう。

（七、八、十四、旅行出立に際して）

米騷動に對する一考察

法學博士　吉野作造

米が一升二十五錢を突破したと云つてさへ非常な騷ぎな事がある。如何に戰亂の餘波として物價の暴騰が普通の現象であるとは云へ、又如何に下層階級の懷工合が好いとは云へ、一升五十錢の聲を聞く迄生活の脅威を受けて默つて居られないのも無理はない。八月十六日內務大臣官邸に開ける各府縣內務部長會議に於て、仲小路農相の訓示の如きは白々しく事實を揑造するの甚だしいものであつて、之を讀んで予輩は言ふべからざる不快を感じた。民衆も恐らく却て反感を激成したかも知れない。何故なれば農相は例年五月より八月に至る間は、米價の最も騰貴

する時だから豫め備を爲して置かざるべからずと考へ、外米輸入其他いろ／＼の注意を加へて遺憾なきを期した爲め「幸にして一時は漸次下落の傾向を現はし、一般をして稍々愁眉を開かしむるの狀態を見たりしは社會の爲めに深く喜ぶ所なりしに」其後出兵問題や其他各種の風說の爲めに再び昂騰の徵候を表はしたから、極力種々の手配りをなし「漸く八月に至りて玆に轉換の機も近からんとするのみならず、幸にして本年の天候極めて順調にして、先づ全國豐穰の見据も付き、將來漸く安堵の思を爲さんとせし時に際して、地方に於ける不穩の狀況を耳にするに至りたるは、本官の呉々も遺憾とする所なり」と云つた事である。「親爺がいろ／＼心配してやつと無事に納り懸けた時に、心無き若い者が輕擧盲動して飛んでも無い事になつたといふ態度であるが、我々は斯う云ふ親爺に萬事を任して、果して一升五十錢の米を四十錢三十錢に下ることを期待し得たであつたらうか。現に米價暴騰の原因の大半は在米の不足にあらず、一部奸商の買占めにあらず、全く政府の措置宜しきを得ざるに在りとの有力なる說もある（八月廿日時事新報所載若崎清七氏談）米價の騰貴を防がんとする誠意は之を諒とするも、遣り損つたら遣り損つたと事實を明白にした方が寧ろ國民を安心せしむる所以である。何にしろ昨今の如き不自然なる暴騰を抑へ切れずして、民衆の生活を斯くまで脅迫するに任かして居つては、天下多少の事あるも亦已むを得ないではないか。と云つて決して暴動其事を辯護するの意は毛頭ない。

生活の壓迫に反抗して民衆運動の起るのは世界普通の現象である。前世紀の初め以來民衆は其要求を貫徹する爲めの最後の手段として動もすれば團體的行動に訴ふると云ふ方法を執る事頻繁となつたが、其初めは多く政治問題に就いてゞあつた。最近でも選擧權の擴張とか又は選擧權の公平なる分配とか云ふ問題で民衆運動の起る例は少くない。今より十一年ばかり前の伊太利の選擧法改正の如きは全く此運動の結果である。白耳義などでは戰前まで此意味の運動は頻繁にあつた。然し二十世紀に於ける民衆運動の普通の標目は政治問題よりは寧しろ經濟問題となつた。中には社會黨の運動の如く主義の主張を貫かうと云ふ者もあるけれども、それよりも一層適切に民衆を動かすものは此物價の騰貴をどうして呉れると云ふ問題である。運動の主催者は社會黨たる事を常とするが、然し社會主義の直接の主張ではない。予輩も歐米留學中民衆運動を見たる一再ならずあるが、多くは皆食料品暴騰と云ふ問題に就いてゞあつた。人生に執つて何よりの實際的の問題であるから壓迫が強く來ればどうしても默つては居られない。

此等の運動が一方に於ては政府に反抗し、他方に於ては貴族富豪に反抗するの形を執る事も亦世界普通の現象である。社會主義者の主張するが如く、今日の政府は即ち資本家の政府であり、資本家は法律と權力とを擁して自家の利益の爲めに下層階級を犠牲にして顧みないと云ふ彼の亂暴な說明であるとしても、兎に角今日の政治法律が貴族富豪の階級を偏愛し、下層階級の利益と發達の爲めに考ふる所比較的に薄いと云ふ非難は決して免るゝことは出來ない。殊に下層階級の生活の問題に就いては政府に決して怠慢の罪無いではない。政府が怠慢にして何等爲す所ないからこそ彼等は最後の手段として自分の力に訴へんとするのである。民衆の要求する所の者其事が假に正當なりや否やは姑く問題として、政府が民衆の要求に耳傾くる事比較的冷なりと云ふ非難の事實が、民衆運動の主たる原因をなす事は先づ事實として之を認めなければならない。西洋でも一般民衆の利益と發達に關する政府の施設は、民衆の側より來る此種の事實上の強要の結果として表はれたものが多い。政府當局者が進んで民衆の爲めに計つたと功名顏して誇る所のものも其根を洗はば多くは民衆の要求の結果である。

然るに迫られたる民衆の要求は案外に強いと云ふ事實と此事實に對する民衆彼自身の自覺とは又民衆運動の頻々として行はるゝ形勢を馴致した事も亦見逃してはならない。

斯く考ふれば、物價特に主要食品の價格騰貴を問題として民衆の騷ぐのは西洋特有の現象ではない。今頃我國で斯んな運動が初まつても之を西洋思想の餘毒と思ふのは誤りである。禍の源は西洋思想其物に非らずして寧ろ民衆を度外視した短見なる爲政者にある。

口では何と云つても我國歷代の當局者が國民一般の生活問題に對して如何に無神經であつたかは我國の生活品の物價の高い事が世界無比なる事實を見ても明白である。日本の食物の代價と西洋の食物の代價と其儘比較しても日本の方が頗る高いが、若し之を西洋が一般に物價が高いと云ふ事實を念頭に置いて考ふれば、日本の食品が案外法外に高い事に驚ろかされる。ステーションに手荷物の一時預りを二錢で出來る日本で、一夕の簡單なる食事に五六拾錢を要するのに、一時預りの料金が四十錢もする米國でも同じ程度の夕食を五六十錢で出來ない事はない。歐羅巴大陸に行けば倘一層安く食へる。之れ皆爲政家の心を用ひた結果である。而して斯くするには爲政家に可なりの苦心があつた。何故なれば斯くするが爲に取り易い民衆の懐に租税を免じて、取り難（にく）い少數富豪の懐に重き負擔を轉嫁したからである。日本では租税を取るにも一番抵抗力の弱い所のみを漁（あさ）る。

斯くして民心の曖昧に乘じて少數富家の氣に入るやうな政治をする事が敏腕なる政治家の仕事となつて居つた。其外彼等がいろいろ施設經營をなすに當つても彼等の專ら意とする所は、如何にして民衆の幸福と發達とを計る可きかに非らずして、如何にして元老の擁護を得るか、如何にして樞密院や貴族院の反對を切り抜けるかと言ふ事である。我々は先づ之れ丈けの事實を承認した上で今日の米價暴動と云ふ現象に對して見たい。國家の責任を双肩に荷つて西伯利に出征した某將軍の放言せる如く、民心の最緊張を要する今日の場合徒らに輕擧盲動して譏を外に招ぐのは誠に慨嘆に堪えないと云ふ丈けでは餘りに時勢と懸け離れた物の見方である。

我々の今度の暴動に於て更に一層深く感ずる事は一旦激發した民衆の力の非常に怖るべきものたる事である。場所によつては劍戟も銃砲も之を奈何ともする事が出來なかつた所すらある。こんな事が再々あつては我國の將來が氣遣はれると云ふ人もあるが、其心配には誠に同情に堪へない。併しながら民衆と云ふものは一遍やつたからと云つて之に味を占めて翌日も明後日もやると云ふ風にさう輕々しく動くものではない。或意味に於て民衆は非常に激し易い一面があると共に又存外激せしめ難い一面もあるものである。そこで騷動が長くて一週間も續けば又元のやうに歸るを例とするではないか。さればと云つて又民衆の騷動は何時でも龍頭蛇尾に終る一時的の根抵のない空騷であると云ふ風に見るのも亦大いなる誤りである。永くは續かないが然し龍頭蛇尾に終る根抵のない空騷丈けではない。畢竟するに之を憂ふ可きものと見ねばならぬ事になるか、或は空騷として輕蔑して可なるものとなるかは民衆夫れ自身に非ずして當局者の施設如何にかゝるものである。後の遣方が良ければ此の運動が龍頭蛇尾の空騷ぎに終るならんも、後の遣方が惡るければ時を隔てゝ二度も三度も繰返さるゝ。爲めに國家は之が爲めに非常な不利益を蒙る事になる。只今度の暴動に就いて一つ遺憾に堪へないのは一旦起り出すと動もすれば暴動の形を執り常軌を逸して自他を損ずるを顧みざる事である。予等は民衆運動の起るに至つた理由に就いては飽くまでも同情する。又かゝる運動にでも據らなければ達せられない至當の要求を彼等が有つて居ることをも承認する。けれども此要求をいよ〳〵事實に表はすとなると彼等のなす所は丸で當初の要求とは何等の關係もない滅茶苦茶な運動になる。之が實に識者の痛嘆して措かざる所である。そこで政府でも力を盡して之が鎭壓を試るのであるが之が又十分に其效を奏するものでもない。何故なれば暴動の鎭壓は又其已むを得ざる餘弊として正當なる要求其物を

壓するの形を執るからである。故に民衆運動は處理に非常に困難な所がある。故に於て我々は應急的方策は別として根本の解決としては宗教教育の社會的勢力の振興を念はざるを得ない。蓋し民衆の要求は之を抑ふる事が出來ない。而して之を強いて抑ふ可からずとすれば、出來る丈け合理的方法に據つて之を訴へしむる途を開かなければならない。西洋に於て民衆運動が、殊に昨今正々堂々極めて猛烈に而かも極めて着實に行はるゝ所以のものは一に宗教々育の力が隱然として一般民衆を支配して居るからである。宗教家と教育家の最も尊敬せらるゝ國程民衆の運動は常に規律と節制とに富んで居る事は爭はれない。根本の培はれて居る國は何事が起つても危氣がない。

「米」と「其代用食物」の研究

米の節約法と其代用食物の研究

醫學博士　佐伯矩

▽食物の營養價を左右する澱粉質

營養上に貢獻する食物の中に含有せらるゝ成分の主要なるものを大別して蛋白質、抱水炭素即ち澱粉質、脂肪等とする。何れも皆夫れ〳〵用途こそ異なれ、共に缺く可からざるものなれども、一旦之を分量的に觀察する時は、抱水炭素即ち澱粉質が實際其主位を占むるものである。邦國の中堅が中流階級に在るが如く食物の中堅は澱粉質に在る。蛋白質に富むと稱せらるゝ西洋料理に於ても、脂肪を含むこと大なりといふ支那料理に於ても、將た又學術上最も合理的なりと認められる保健食に於ても、澱粉質は他の諸成分に比して遙かに多量に臨楳含有せらるゝを以て通則とするのである。卽ち今例へば保健食に於て、其總重量の約七分の五は澱粉質である。又之を溫量(カロリー)より計算する、——體內に於て榮養分が使用せらるゝ時發散せらるゝ熱の量を溫量にて表示するものにて、從て榮養の價値大なる食物は大なる溫量を供給す——保健食中に含む全溫量の三分の二は實に澱粉質に歸す可きであるのである。從て澱粉質が如何に食物諸成分中其緊要なる位置を占むるかを伺ふ事が出來る。斯の如くにして澱粉質は從來西洋人に於ては一日約五百瓦(グラム)を用ひ、日本人に於ては約四百瓦を與ふるを以て、中等度の勞働に從事する者の適量とせられ、若し其勞作の劇甚の度を增す時は、一層此澱粉質食を要求するのである。

▽營養價より觀たる米と雜穀と藷類と豆類と

米は吾人主食品中に最たるものであつて、殊に近來は其精白したるものを用ゆるが故に、日本食に於ける米は澱粉質の代表者と觀る可きものである。

成分＼種別	加賀米	武藏米	肥後米
蛋白質	百分中 6,56	8,14	5,77
脂肪	0,34	0,20	0,32
澱粉質	72,26	71,13	72,46
植物纎維質	0,40	0,48	0.45
無機質	0,30	0,36	0,44
水	20,14	19,69	20,56

従て榮養上の米問題は、其澱粉質食問題と觀て差支へが無いのである。

今米の代用品を求めんとするならば之を同じく澱粉質を主成分とする食品中に於てせざる可からざるは之れが故である。かの僅少の澱粉質を含むに過ぎざる豆類、豆粕類の如きは、決して適當なる米の代用品とはなり得ない。之に反して稗、黍、粟の如き雜穀類、藷類の如きは澱粉質を主成分とするが故に、以て米の窮乏を代償せしむ可く、之に次いで豆類の中小豆類、隱元豆、綠豆、豌豆、蠶豆等亦用ゆるに足る。今試みに其澱粉質の含量及び滋養の計算上から、米と前に述べたる代用品の夫れを比較すれば、米一升の時價を五十錢と假定し、米一升に相當する榮養價を得るが爲めに稗を以てすれば、一升十錢の稗を十五錢、一貫目二十錢の薩摩芋二十二錢、一升二十六錢の麥二十六錢、一升二十錢の黍二十二錢、一升二十七錢の粟三十錢、一升二十錢の小麥粉三十四錢、一升三十錢の蕎麥三十三錢、一升十四錢の馬鈴薯五十六錢に相當する。――世間馬鈴薯を以て非常に安價なる澱粉質食と考ふるものあり、それは誤である。

▽米の缺乏は米を榮養品より嗜好品に移さむ

右は大略の計算であるが、玆に注意すべき事は、米を論ずるに唯之を其榮養價のみよりする事は、識者の嘉納する能はざる一事である。蓋し米は榮養品であると同時に、米食人種に對する一種の嗜好品である。卽ち米食の習慣を有する者は、之が風味を賞玩する事に慣れて、一日も之を廢絶する事能はざるのみならず、歐米人の如きも亦已に近來米の美味を覺り、之を食して嗜しなむ者日に多きを加へんとする傾向がある位である。斯かる理由の下に我國に於て若し米の市價の停止する所無き昂騰を見ば、人は漸次雜穀を米に加へて食し、卽ち稗飯となり、藷飯となり、麥飯となり、小豆飯となり、雜炊飯となつても尚且つ能ふ限りの分量に於て米を其飯盆中に保存する事に努力するに違ひない。卽ち榮養品と嗜好品との兩用を兼ねたる米は米の缺乏の度に應じて、その榮養品としての意味よりも、漸次嗜好品としての意味に重きを置かれつゝも、尚且つ其聲價を保留す可き運命にあるのである。之れ米の問題を論ずるに方り徒らに其榮養價を論じて之が代用品を求め、以て安心を得んとする者の大に警戒すべき點である。

▽對米策の四大方針

以上の叙說に由つて（一）米は徹頭徹尾米である事、（二）米食人種たる日本人は米の食用を急劇に廢止する事到底不可能である事を知る。故に吾人は此二大事實を根據として、米問題に對する方策を講ぜねばならぬのである。即ち此目的の爲めには（一）米の產額を增さなければならぬ。（二）米の供給を圓滑にせねばならぬ。（三）米の濫費を防がねばならぬ。（四）米の節約を行はなければならぬ。斯くの如き四大方針の下に對米策を講ずるならば、恐らくは以て大過なきを得ると信ずる。

米の產額を增す事は不斷日常に官民共に留意すべき點であつて、或は耕作方法の改良とか、或は未開墾地の整理等凡て米の產額を增加するあらゆる經綸を行はなければならぬ。又米の供給を圓滑ならしめ、以て需要者に些の不安なからしめんが爲めには、貯藏並びに運輸の事に平素の用意を要する。古來行はれて居つた備荒米の制度であるとか、又現今主唱せらるる米の官營論の如きは此趣意に外ならぬのである。當局が外國米輸入の途を講じたるが如きは、此理由より觀て最も當を得たる處置である。唯憾むらくは、當局嚮きには外米税關の撤廢を斷ずる事能はず、後には米の需給の調節を圓滑に按配するの策を怠り、今に至つて周章狼狽を極むるの悲境に陷つたことである。必竟平常より兎角榮養問題を等閑視するの致すところである。

▽外國米は其榮養價に於て決して內地米に劣らず

我が國に於ける米不足の對應策として外米の輸入を見るは每年の事にして、外米輸入は決して之を新事實として驚異するには足らざる處である。但し吾人の此際特に留意しなければならぬ事は、其榮養上の價値に於て外國米の決して內地米に劣らざる事之れである。從來動もすれば米の外觀、風味、嗜好等による批判より、外國米を以て榮養上に於ても亦著るしく劣等視するの嫌ひなきに非ざりしも、之が含有成分及び榮養價より觀察する時は、其の大なる誤謬である事は明白である。今外米の成分を表示すれば

品名＼成分	蘭貢米 西貢米	朝鮮米
蛋白質	8,00	7,6
脂肪	0,42	0,5
澱粉質	75,40	72,7

にして、もし之を前揭內地米の成分表に比較考察すると自から明なるが如く、要するに榮養價に於て內地米、外國米、朝鮮米の間に於て大なる差等を見す事能はざるものなるが故に、安價を以て榮養を完うせんとするには此處に着目するの要がある。

▽禁酒令を斷行せよ

米の消費中最大なるものは酒類の醸造である。我が國に於ける約四百萬石に上る酒醸造用の米の消費は、全然有害にして無益である。斯の如き數量は我が米産額の約一割に相當し、以て優に全國民一ケ月間の消費を支へて餘りあるものである。殊に諸外國に於ては今や禁酒令斷行せられ、何れも非常の好成績を擧ぐるを見るに際し、我國亦此美事に倣ふの一日も速ならん事を要する秋である。今日程禁酒を斷行するに恰好の時機は無いのである。尙ほ永久の策とする事は不可能ならんも、救急の策として米穀を以て菓子其他の食用品を造るの料に供する事を禁止若くは制限せねばならない。特に飯米として用ゆるに足る完全なる米穀を、麥、藷、其他の雜穀を以て便ずるに足る食品の製造原料とする事を制止せねばならない。

▽雜穀の混用と節食と及人造米の不廉と

米の節約は甚だ難事であるが如くにして、而かも之が全般に比ぶれば比較的容易に實行する事が可能である。即ち前に述べたが如き雜穀、甘藷の如き廉價の澱粉食を以て米の大部分を補ひ、以て米の實際消費高を節減するにある。

個人的には又米の小食法を行ふが良い。學術上の實驗では中等度に勞作する體重七十餘基瓦(キログラム)の男子が一日量約三千温量(カロリー)内外の食物を以て健康を保持するに適すとせられたのである。併し何處(ドコ)の邦でも其國民が習慣的に食べて居る食量は、この學術上からいふ食量に比しては遙に多いのを常とする、即ち人は實際の必要以上に大食して居るのである。然るに食物制限令の行はれたる獨乙國で切符制度の下に昨年來伯林市民が得るところの食物は實に一人一日一千三百八十温量に過ぎないのである。それで中等度の勞作に從事するものが生活を續けて行くに結構間に合ふた。但だ戰線に在るものや劇務に從ふものには適用されないが、一般人はこの學術上の保健食の二分の一、習慣的食量の恐らくは三分の一に相當する分量で行つて居る。そこで日本人は平均體重十三貫目半として五十二基瓦(キログラム)に當る故、七十四基瓦の獨逸人が一千三百八十温量(カロリー)にて可なれば、九百七十温量で日本人には可なる理である、即ち米を以てすれば一合七勺で所要の温量に不足無きを得る事になる。今假りに充分過量に例へば倍量に見積つて一日量二千温量もあれば少しも憂ふるところは無い。

一體榮養作用の運營は同一人體にありても高低種々の度合ですることが出來るものである。成分を多く攝取して多く排泄し、或は成分を少なく攝取して少なく排泄する。其生理的範圍内に於てする間は、何れの行り方でも、以て健康を維持し能率を保

全して些の支障をも生活上に來さぬのである。併しこの大食を以ての新陳代謝上の平均は浪費多くして而も有害の結果を齎し易く、反之小食を以ての新陳代謝上の平均は經濟的にして而も優秀の健康が贏ち得らるゝ。習慣的に一般人は榮養學者の指示するところよりも稍多量の食を攝つて居る、卽ち日常必要以上の大食を行ふて居るのである。榮養學泰斗恩師チツテンデン先生は已に永年熱心なる小食の主唱者で且實行者であつた。これを先生の所謂『榮養上の生理的經濟論』と云ふて有名なものである。今回の世界大戰に際し聯合國側では英、米、佛、伊差遣の特別委員によりて食糧會議が巴里に開かれた。チツテンデン先生は米國特派の委員の首席であつた。先生有るが爲めに世界が計り知られざる利益を得たことは察するに餘りがある。

之を要するに米を一日量二合半位に節約することは副食物なり主食物への配合物なりに多少注意することによつて何等の危險を見ずして之を實行することが出來るのである。又大食から小食に移る初めに當り多少滿腹を得ざるやの感を覺えたり、腹持ちが悪いやに感じたりすることありとするも、そは一時の現象で二三日もすれば早くも習慣が改まり、かゝる障害は比較的容易に打勝たるものである。又勇を鼓して米の斷食法を行ふ事一兩日なる事を得ば、其後は米の僅かに少量を以て尙且つ米に對する食慾を滿足せしめる事を得るものである。

尙ほ米節約の目的に種々なる人造米の製出せらるゝものがある。例へば之を馬鈴薯より製し、例へば又之を玉蜀黍より造ると雖も、其製品多くは味美ならずして、且つ比較的高價である。卽ち獨立して米となり米の位置を代理することの難いものである。唯僅かに之を一定量の米に混へて用ゆるに足るに過ぎざるが故に、徒らに其原料より人造米に製出する加工費を失ふの憾みを貽すので、更に一層安價に之を得るの法を講ぜねばならぬ。

以上述べ來りたる吾人の所謂四大方針なるものは、徒らに高遠にして而かも空疎實現し難き底のものではない。皆何れも直ちに實行し得られる卑近の方策で、而かも其效果の著しいものである。官民心を一にして其實行に努力したならば、斯くは困難なる米問題も容易に解決されて、國民の生活をして壓迫不安の軛の下より自由にし得るものと信ずる。

米價問題と其對策

法學博士　神戸正雄

（一）

此八月に起りたる米價騷動は實に我國の社會運動史には重大なる出來事であつた。其が從來の同種のものの如く一地方に局限されずして、廣く全國各地方に亘つて行はれ、警察の手によつて鎭壓することが出來ずして、漸く軍隊の力を借て平定するといふが如きことは先づ我邦では近頃珍しき出來事であり、外國に類例を求めても多くはない。特に其が平時とはいひ條、大軍を用ゐては居らず殆と平時同然の時であり、特に昔時の如く交通不便のときとは異つて殆ど自由に米穀の配給が出來得るのときである、目下外國よりの移入は多少困難にせよ、其も對策宜しきを得れば相當に行はれ得るし、國内の配給に至つては餘程の程度まで自由に行はれ得る。其も凶作續きの後を受けてでも居るならばであるが、豐作續きの後を受けて居て、それで米穀の配給が甘く行はれず、諸多の地方特に消費地に其の缺乏が甚しく感ぜられ、隨つて米價の異常なる高騰を來たし、爲めに人々の生活不安を惹起して由々敷き大騷動を引起すに至らしめた。洵に珍なる出來事であつて、十分玩味する價値ある出來事と思ふ。

（二）

此騷動は何といつても經濟原因に基く社會の出來事である。米價騰貴による生活不安、其と共に成金及富豪に對する反感といふ原因に基く出來事である。併し其れだけの意味しかない出來事かといふと、然うではなくて、確かに政治的の原因をも持つて居る。予輩の立場として此點を多く語るの自由を稱たぬが、確かに國民の各方面に現當局者が甚しく不人望であるといふことの結果である、其には從來が此米價政策を過つたといふこともあるが、其以外にても色々の點に於て種々の方面から嫌はれて居るといふこととの結果である。此政治上の原因が手傳はなければ、到底彼れ程までに大騷動とはならない。一體に日本人は厭き易き人間であるから政治家も其を呑込んで進退せぬと徐々立場を失ふことになる。又失敗のあつたときには失敗を失敗として陳謝して掛ると、案外簡單に濟むものを、強ゐて辯解を努め其も矛盾不徹底を極むるに於ては、日本人の氣性としては愈々之に反感を懷くことになる。今の當局者は一向に此民衆の心理を理解しないで、益々民衆と離れて政治を爲さうとして居る。

惜しむべきことで、當局者の自滅は自業自得であるから、何うでも良いとして、爲めに累を國家に及ぼすに至ては實に困つたことである。今は日本も世界的事業に參加して、國際的危機に在るのに、內部の此有様では國家の不幸は此上もない。

（三）

此度の騷動では原因が政治上にもあつたから、宥恕もしなければならぬが、其民衆が採つた所の方法は甚だ亂暴であり、全く自殺的方法で、又非文明的である。政治上の不平を漏らし、當局者の反省を促すのには、此方法に依るより仕方がないといふやうなことが言ひ得ないでもないが、當局者の民衆超越と同様に、民衆の非文明的行動をも非難しなければならぬ。苟くも日本の國民が一大國民として世界に重きを成さうとするならば、今少しく合理的の方法に依り正々堂々の手段を採らなければならぬ。今は日本が國の外部に對しても、內部に在つても公明正大なる行動を爲さなければならぬ時機である。反省を乞はなければならぬ。一體日本人は英人などの如く冷靜な性質ではなくて、熱血的の人間である。恰かも歐羅巴では佛伊人と似て居る、隨つて社會運動が穩健に發展せずして、動もすれば狂暴となり、社會の不利も、自己の損失も顧みずして狂ひ廻はることになり易い。今日迄日本の社會運動は微々たるものであつたが、時世の進歩は到底其の益々盛んになることを防止することは出來ない。が其の之に對して國家社會が指導の任に當ることは決して容易のことではない。今度の騷動を見るに就けても益々其感を深くせざるを得ぬ。當局者は斯かる國民に對してはむしろ專制的でなく、最親切に彼等の利益を進捗するの心掛を要する。民衆の訓練も望ましいが、同時に當局者の訓練も大事である。

（四）

一體米價が異常に高いのには、一般物價に共通なる原因と、米に關する特殊の原因とがある。其の前者としては特に通貨の膨脹を擧ることが出來る。之に對しては大藏當局者從來の見解として物價騰貴の原因としての通貨膨脹を輕視し、且つ通貨膨脹を抑制するは產業の發達を阻止するといふので、彼等は此れ迄一向緊縮方針をとらず、むしろ通貨を放漫に膨脹せしめた。併し此あるが故に米の買占めも、賣惜もが猖り商人の間に於てのみならず、廣く消費者の間にも農民地主の間にも行はれて米價騰貴を進めたのである。一般物價に於てと同じやうに米價にも影響した。此原因に對する方策を怠つたことは今日の物價騰て社會問題の解決上不滿足なるのみならず、將來に於ける我邦の對外生產政策上にも不利である。次ぎには一般的原因と、

運輸交通上の原因を擧ることが出來る。併し此點は、近頃は鐵道が少くとも米の輸送の爲めには餘程便利を與ふることになつて居るから、前者に比すれば重きを成すに足らぬ。

（五）

特殊原因としては政府當局、むしろ農商務當局者が採つた米價政策の適切ならざりしことを擧げなければならぬ。暴利取締令、定期取引の抑壓、正白米標準値段の禁止、米輸出の制限、外米鮮米の買附輸入、外米地方移出禁止、十石以上持米調等、すべて立案の趣旨は洵に結構で、米價の抑壓を期するものであり、又其が多少目的を達したと見るべきものもある。併し大局からいふと却つて徒らに煩雜なる仕事を行つて得る所が少く又むしろ結局反對の結果に終つたといふ誹を免れぬ。元來政策以外の米價騰貴の特殊原因としては特に國內消費の大增加を擧げなければならぬ。戰爭による我國內の好景氣の爲めに從來米を消費せざりし者までが之を消費することとなり、從來より消費したる者は一層多く消費することとなり、其に酒の消費の增加により米消費の增加も加はつて、消費の著しく增加したることが在米の缺乏を大ならしめたる重大原因である。豐年續きとはいへ、此大消費に對しては到底十分に應ずることは出來ない。其れに此戰爭の結果、米の如き生活必要品の輸出は容易であるが、輸入は困難といふことがあり、尙更ら缺乏を感ぜさを得ぬ。政府が後れ馳せながら輸出制限や、外米鮮米の輸入を計つたのはまだ良いが、消費制限につきての注意を全く怠つたのは今日あらしめた最大の過失である。其に外米鮮米の輸入といつても其額や極めて少く、米輸出制限には例外許可が可なり多くあつて餘り有功に行はれて居らず、而も此等につき二三の商を特別に利益しつつあつたといふことが民衆の反感を買つて居る。

（六）

暴利取締令、定期取引抑壓は能く一時米價を抑壓することが出來たにしても　其は間もなく反動を生ずる。人爲的に抑えたるものは所謂自然納まるべき處に納まらなければならぬ。特に定期市場で抑壓さるれば、定期の相場が正米相場と餘りに掛け離るることになり、一向に消費者の利益にならぬ。加之餘り政府の抑壓が加はると、商人の中には自然廢業者も生じ、殘れる者にても產地に買付けて政府に睨まれてはといつて買付を躊躇し、外米の地方移出禁止も產地より都市の出穀を妨げ、爲めに消費地たる都市に米の大缺乏を生ずることになつた。斯の如くにして政府の米價を低下しやうといふ政策が反對の結果に陷らなければならなくなつた。其に政府が折角米の存在量の豐富に

つき民心を安堵せしめ且つ米價を低下しやうとして、在米調を爲しながら、之が發表を爲さなかつた爲めに、却つて商人をして適つ切り其の非常に少きことを想像せしめて米價釣上に利用せしむることになり、他方農民の賣惜をも助長し、加之偶々出兵決定もが米價の騰貴を促し、特に暴利取締令や定期抑壓で困らされたる商人等の反感報復も手傳つて愈々異常に高い米價を生じた。正白米標準値段の廢止も商人の自由競爭にて米價を低下せしむるよりは、之を惡用して事實上益々米價を引上げ消費者を困むるの結果に終つた。

（七）

一體政府の爲した跡を見ると、餘りに米價につき賣買取引の方面に重きを置き過ぎて居る。が此方は抑々末で、先づ米其ものの存在量を充實する方に力を用ゐるのが一層肝要である。其が本である。特に賣買取引の方では、一時價格が非常に高くなつても、米の實在量さへ豐富なれば自然間もく反對利害關係者が立つて市價を低下すべく運動することになる。其を導くことを忘れて買方虐めのみしたのでは到底本當に低價を齎らすことを得ぬ。此の現在の自由賣買制の下には賣買に對する干渉はむしろ有利でない。先づ此米の存在量を大に増加するのと相待つて、其を更らに市場に於ける供給量の増加とならしむる爲めに通貨の緊縮を行ひ且つ交通運輸を一層便利にすることが肝要である。政府が自由營業制の下に爲すべきものは、むしろ當さに斯の如きものでなければならぬ。

（八）

併し今や米價騷動となつた以上は、之に對して人心を落着ける爲めに救濟的事業も必要ではあるが、今日行はれつゝあるが如く富豪よりの醵金を集めて廉價販賣を行ふことは果して適當なる政策なりや。富豪が暴動に恐氣を懷きて巨萬の金を提出したのは彼等の自衛上已むを得ざる處置であらうが、之を以て中等階級に屬し自立自存すべき筈の人々への米の廉價賣却の資に充つるに至ては、我邦の中等階級の地位を窮民の地位に落したるもので、洵に惜しむべきことである。予輩は我國の中等階級の苦しき地位には同情するも、彼等か此救濟に浴して窮民の地位に落ることを拒絶するの意氣を有せんことを望む。廉價なる飯に飽かんよりは高價なる粥を以て其腹を充たさんことを選ぶの意氣地を持つて欲しい。又實に之によつて自然米の消費を節して米價の昂騰を抑制することにもなるのである。若夫れ今日の如くに米の廉賣を行ふと、遂に折角の米を濫費することになる。米の供給を豐にせずして益々缺乏せしむることになる。或程他方に政府の強制買收の行はるる途も開けたが、斯の如

費の行はるることは決して全體上策の得たるものではない。

（九）

今回政府は米の强制買收の途を開いたが、固より其は任意買收の行はれざりし場合にのみ適用するのであり、特に買收價格も必ずしも一定さるるのでなく、其時々の宜しきに定めらるるといふから、賣却者の間に不公平が起ることを免れぬ。彼等が納得した場合は其が區々の價になつても良いやうなものの、國家として一大公益上の仕事を行ふとしては穩當でない。一歩を進めて凡べて一定の標準に從て行ふ强制買收とするが良い。又此に最高價格を定めて居らぬのは有の如き制度にては、政府が時に之を定めて置いて、其時の事情により相手の如何により其よりも一層安い値で買取るの餘裕を見出すを得、而か　相手が最高價格以上を主張するときは、直ちに其最高價格を持出して强制買收することが出來、又價格の自然低落の機會を促すことにもなる。で、此は大に便利なることであるとしても、たゞ別に消費制限上の施設をせぬのが缺點である。此がないと折角の米の濫費を生じて到底やり切れなくなるの心配がある。予は政府が此機會に米の國家專賣制を確立して、農民地主の自家用量を超過する米は凡べて國家にて一定標準價を以て買收し、之に實費を加えて公衆に賣却し、之に外米の管理をも併せ行ふことゝすることを勸むる。此制度には幾多の困難はあらうが、其全然排除の出來ぬといふことはない。今日は農民地主が之に反對しやうが、明日は彼等の歡迎せざるべからざるときとなる。米價を生産者消費者双方に取り適當の處に定め、生産者及消費者の經濟に確實安定を與ふることは決して不都合でないのみならず、大に必要有益である米價の公益主義に依る專賣の確立、是は予が夙に唱ふる所であり、今年の新春の二三の雜誌及新聞にも一言した所である。予は政府が百尺竿頭一歩を進めて此政策を確立すべき今日の此好機會を逸しつつあることを最遺憾とする。若夫れ米專賣制其ものに關しては後日之を評論するの時機もあらう。

麵麭食奬勵論

陸軍糧秣本廠囑託　田邊玄平

▽麵麭食普及の急務

米價が暴騰した結果國民が自制力を失つて、全國各地に騷動

を起し、遂に帝都まで其餘波を蒙つたといふ事は、實に一大痛恨事であると思ふ。事の此處に至つたには種々の原因もある事であらう、或る人は爲政者が策を過つた爲めであると云ひ、或る人は日本國民の自制力が弱いからだと說く。然し私は其最大原因は他に存するのでなく、實に日本の食制が不完全なる處に在ると信ずる者である。例へば歐米に於て小麥は我が國の米と均しく主食品である。所が戰爭の結果供給が不足して、と云ふよりも寧ろ需要が增加して、其消費を制限しなければならなくなつた。仍で所謂 wheatless day などを制定して小麥の節約を圖るが些しも支障なく行はれる。之れは平時米の飯とか玉蜀黍の粥とか或は馬鈴薯とかを、蒸したり油にしたりして食する習慣があるので、朝食に馬鈴薯の茹でたのを食つたら、夜食には又玉蜀黍を食ふといふ風にして一向差支が起らない。米も無く麥も無しで生活が出來る。畢り歐米人は平生から何にでも生きて行かれる習慣があるから、wheatless day でも riceless day でも事を缺かない。小麥に缺乏を生ずれば米で生きて行き、米も小麥も無くなれば玉蜀黍に移り馬鈴薯に移つて、「變通自在」に生きて行かれる。從つて價格に暴騰暴落はないのである。

所が本邦人のやうに米といふ唯一の主食品の上にのみ執着して生きて行かなければならぬ有樣では、riceless day を施行すれば生活不可能といふ不都合な狀態に陷つて了ふ。從つて米價が騰貴すれば今回のやうに忽ち騷亂を起し、又二三年前のやうに米價が低落すると、農民は其所藏米の買入れを政府に請願しなければならなくなる。今日の如く國民が唯一の米食にのみ執着して生きて行くのでは、米價が高低常無き變調を來たすのは寧ろ當然で、如何に偉大な政治家が出で、如何に經世の才を揮つても、米價の調節は到底行はれない。蠶は桑のみを食ふ。從つて桑が不足すると忽ち一貫目五十錢の高値を呼び、過剩の時には十錢でも買手が無く、其高低は全く亂調子である。何うしても主食品の價格を緩和するには、米の外に他の食品を鼓吹しなければならない。即ち食品を複本位（ダブル、スタンダード）にする必要がある。而して私の考では最も此趣意に適せるものは麵麭食であると思ふ。折柄米問題の矢釜しいのを機として、主食品の價格を調節する爲めには、是非其麵麭食の普及を計らねばならぬと私は主張する。

▽麵麭食と米飯との利害長短

先づ第一に麵麭食は米飯よりも安價生活である。蓋し米は一定の氣温と平坦なる地面とを要する。即ち其生産地に制限される。加之に米を作るには灌漑とか草除とかの手數を要して、餅

作の方法が大農的でない。之れ生産費の高まる所以である。小麥の耕作は生産地の制限を全然受けない上に、生産費の點から云つても米よりずつと低廉である。之れは理論のみでなく實際に徵すれば直ぐ分かる事で、十年間の平均に據れば、小麥は米の三分の二で買へる。本年は食品の價格が亂調子で正確な統計が取れないが、一昨年から昨年に懸けては、竹印の小麥一貫目約四十錢内外を往來し、之に對して米（三等米を標準として）は一貫目約六十錢であつた。之れに觀ても小麥が米より安價である事が分る。

第二に米食は軍國の用に適しない。それは保存と携帶に不便だからである。近來矢釜しい西伯利出兵問題にした處が、懸軍長驅西伯利の奥深く行つた時、米食では冬なら兵卒の手に渡る頃には石のやうに凍り、夏は叉酸敗して了ふであらう。其心配のないやうにするには、少くとも三時間乃至五時間内に炊いで兵卒の手に渡るやうにせねばならぬ。然かもさういふ短時間に兵卒の手に食糧を供給するには、戰線から遠距離の地點では不便である。戰線に近く炊事をすれば、炊煙の爲めに容易に敵に味方の陣地を知らせるといふ戰略上の不便を伴ふ。麵麭は之に反して冬凍り夏酸敗する虞れ無き上に、二十哩も後方製して自働車で三日分位づつ運搬すればよいのである。更に「敵に糧を借る」といふ軍略上の秘訣も、西伯利のやうな白米の無い處では行ふ事が出來ず、已むなく後方勤務の延長といふ不便な事も忍ばねばならなくなる。

第三は麵麭食にすると日常生活に於て無益の時間を節減する事が非常に大である。一家の主婦に取つては、臺所的の手數を省いて無用の過勞を防ぎ、其勞力と時間とを子女の教育方面に用ひて、家庭育兒の能率を高める事が出來る。叉麵麭は米飯と異り箸も茶碗もなしに食する事が出來るから、携帶口糧即ち辨當としては甚だ重寶で、忙がしき時は一方食事をしつゝ一方事務を執る事も出來るので有る。

第四に米飯は共同炊爨が出來ないのに反し、麵麭食にありてはそれが容易に實行される。米飯だと各自の家庭が皆一つ／＼の臺所を有たなければならぬ。臺所が有れば下水を多く使ふ。その下水が多くの場合完全に行き屆かず、遂には野蠻病たる虎列剌の如き惡疫を招來する虞れがある。

第五に熱量の上から見ても小麥の方が米よりも高い。即ち米百二十目の熱量が一六三〇に對して、等量の小麥は一六七五の熱量を有する。叉水分の點に於ては白米飯の六〇パーセントに對して麵麭は四十パーセントしか含有して居ない。本邦に胃腸病患者の多いのは白米飯を食する爲めだと云はれて居る。加之、

麵麭は其質輕鬆で、よく之を咀嚼しないと嚥下に困難であるから、從て唾液の分泌を盛にし、吸收作用を完全に行はしめる。胃腸病者に米食を廢さしめ、麵麭食によつて治癒の功を收めた事は專門家の屢々說く所である。

▽日本製麵麭の改善を要す

然らば何故斯くの如き優良なる食品が日本に普及しないのであるか。畢竟日本現在の製麵麭術に不備の處があり、之を製す者は科學的の智識がないからである。元來麵麭を製するには飯を炊くのと異り、細菌學の力を要する。處が日本現在の製麵麭業者には其教養のある者が少く、又其下にあつて麵麭を製る者も此邊の智識が皆無である。故に平氣で酸味ある麵麭を製し、異樣の臭氣ある麵麭を賣るのである。斯かる粗惡な風味のない麵麭を食して、之れが卽ち麵麭の本來の味と心得へるから、日本人は麵麭を主食品と考へる事が出來ないのである。故に麵麭食普及の第一手段は、先づ製麵麭術を改善するに在る。之れには歐米の進歩した製麵麭術を十分に研究しなければならない。麵麭を製する主要なものは醱酵母である。歐米では此酵母製造に多大の資金を投ぜる大會社が、精巧の機械と、專門の智識を有する學者とに依りて純良なるものを製造し、製麵麭業者や各家庭に供給して居る。然るに我國では、細菌と溫度の關係さへ知知らぬ製麵麭職工が、不完全な方法で各自に酵母を養成するので有るから、本邦の麵麭が世界に類例なき劣惡品となれる。元より其處である、故に本邦の製麵麭法を改善し、且つ現今最も進んだ方法とされてゐる自働製麵麭器を用ひて製造するやうにすれば、目下製麵麭業者が原料たる小麥の粉を手に入れる價格でより以上な純良なる麵麭を製する事が出來やう。而して之を朝夕時を定めて豆腐屋のやうに市中を賣り步く招にしたら、必ず米飯食よりは安價に生活し得る事が出來るから、麵麭食の氣運を促進する事は甚だ容易であると思ふ。又地方には共同製麵麭所を設けて、其地方の需要を充たす樣にする事は甚だ便宜の事である。然し先づ麵麭食普及の一手段として、一家の主婦をして各家庭に於て麵麭を燒くやうにさせたい。歐米の家庭では多くの主婦が自家で麵麭を製造する。元來麵麭の製造は科學的のものであるから、相當教育ある婦人には誰にでも容易に出來るのである。且つ麵麭の製造は料理術中甚だ趣味ある作業で有るから、自分は其內機を見て、學理的家庭製パン法と云ふ樣なものを書いて見たいと思ふて居る。兎に角昨今世人の注意が少しは麵麭に向いて來たから、近き將來に於て麵麭食の普及が出來主食品の價格は之に依つて調節する事が出來やうと思ふ。

米問題の現在及び將來

早大教授 ドクトル　服部文四郎

（一）

米價は今や暴騰に暴騰を重ね、一般國民生活を壓迫する事益す大となり、遂に先づ關西地方に於ては良民暴徒と化し、軍隊の力を以て之を鎭壓しなければならぬ狀態に陷り、家を燒き血を流し、我が帝都亦其餘波を蒙つて同樣の狀況を呈すに至つた。之れ寔に悲しむべき事で、歐米の交戰國に於ても一般に物價著るしく騰貴せるは勿論、食糧の制限を行ひ種々なる苦痛を嘗めつゝあるにも拘はらず、未だ之が爲めに暴動の起れるを聞かざるに、我が國獨り米價大いに騰貴したりとの理由を以て、一方に於ては愈よ出兵の擧あるに際し、國內食糧騷動を見るに至つたのは、益す以て痛嘆すべき事柄なりと言はざるを得ない。

如何にも米價は一般窮民をして一種不安の念に襲はれしむる丈け大に暴騰したには相違ない。一升米の價格五十錢とあつては、日に僅かに七八十錢の賃銀を得るに止まる勞働者は、獨身者に非ざる限り到底其家族を支ふる事能はず、其日の生計に大に苦しむや勿論である。然し騰貴したのは獨り米價に止まるものではない。假りに日本銀行調査の指數に據つて之を觀るも、本年七月中に於ては明治三十三年平均一〇〇を以て標準としたるもの二五六となり、戰前即ち大正三年七月の一二七に比するも倍以上となつて居る。米價の如きも明治三十三年を一〇〇とすれば本年七月に於ては已に二五八となり、一般物價の騰貴と同じ割合で騰貴して居る。併し米價は最近特に迅速なる勢を以て上騰したもので、大正六年七月の一八六に對して本年七月は二五八の數字を示して居る。それ丈け米價は著るしく俄かに騰貴したのである。然れど米價以外尙ほ一層著るしく騰貴したものが少くない。即ち大麥は米の二五八に對して三四二、裸麥は三二〇、砂糖は三〇〇、棉絲は三八五、藍が四三五、硝子板が三三九、石炭三八六等の數字を示し、洋鐵の五五九、洋紙の五〇〇、味噌の五一三が物價騰貴中の旗頭である。

斯く如く騰貴せるもの獨り米價に止まるものではなく、米價以上に騰貴したもの少からず、之が爲め大いに國民生活を壓迫するのである。今現在各地に蜂起しつゝある騷動に在りても、其騷擾は米價騰貴に由つて惹き起されたる如くに傳へられしも、吾人を以て之を觀れば、此騷擾は獨り米價のみに由りて爆發したものではないと思はれる。一般物價の騰貴愈々甚だしく

して、窮民は遂に其生活困難に陥り大に苦悩しつゝある折柄、端なく米價が迅速なる勢を以て暴騰したるが爲め、茲に其端緒を得て、他の原因と相待ちて騷亂を招くに至りしものと考へられる。

（二）

惟ふに米價を始め諸物價現在の如く昂騰し、國民の生活を壓迫するに於いては、玆に何等かの救濟策を講じなければならない。之に就いては吾人已に本年の初めより斯かる事有るを信じ、種々なる救濟策の方法を講じ、當局にも獻言したる事があつた。其第一は公設市場の設置である。都市住民の生活困難を想ふるに於ては、公設市場を設置し、此處に品質優良にして價格の低廉なるものを販賣するの方法を施すのが、都市生活の最も必要なる條件である。之を以て我東京市にも公設市場の設立を唱道したるものなれど、未だ其實現を見ない。若し東京市に於て夙に公設市場を設立し置きたらんには、米價騰貴の場合に於ても、迅速に外米朝鮮米並びに內地米の廉賣を行ふ事を得べく、其上生活必需品の價格を成るべく低廉ならしめ得るものなれば、都市住民をして其生活の苦痛を輕減する事尠くは無かつたのである。

第二に吾人は取引所を壓迫するの不可なるを唱へた。之れ當局者が或は取引所に對して定期米の立合ひを禁止し、或は仲買人に警告若しくは戒告を發し、取引に干渉する時は、そが先づ自由なる取引を迫害するは言ふまでも無い。更に政府の取引壓迫は之に對する反抗心を抱かしむると同時に、政府が徒に米價を調節せんと欲して種々なる干渉を試むるは、結局我國に米が缺乏しつゝあるのである。當局者が斯くの如く苦心して迄も尙ほ米價下落せざるは、之れ益す其騰貴を見るに相違なしとの觀念を抱かしめ、米を所有する者は之を賣り惜しみ、米の市場に於ける事實上に供給を增加する能はずして、却て所期の目的と反對の結果が生ずる事になるのである。當局者の調節策種々試みられたるにも拘はらず、尙ほ其低落を見る事能はざりしは之が爲めである。取引を壓迫すれば物價が直ちに下落すると思ふのは間違である。殊に我國に於ける米の現在高は、暴動を破裂せしむる程に缺乏しつゝありやと云ふに、食料品として多少海外に輸出せられたるも、尙ほ國民の食料に不足する程減少して居る譯は無い。昨年一昨年は相當に米の豐收穫を得たのである。其消費又實際に於て增加しつゝあるも、未だ米の供給をして非常に缺乏せしむる程ではないのである。故に現在米は相當に貯へられつゝありと觀るのが正當の解釋のやうである。然るに人

間の經濟心理は價格の愈々騰貴せんとするに方つて、之を賣り放ち得るものではない。從て凡て之を賣り惜しみ、米の市場に於ける事實上の供給を增加せしめないのである。之に反して物の價格にして下落の趨勢を辿るに至らんか、人は我れ先きにと其有する所の物を賣り放つの擧に出で、其價格をして愈々暴落せしむるものである。我が米價も已に相當の在米ある以上、遂には下落の時機至るものと見なければならない。勿論農商務省最近の十石以上の在米調査は、豫想程の在米額を示さぬやうにも思はれる。之れ唯米所有者が政府の調査に一種の恐れを抱き、十石所有せる者は其內二石を他に預け、二十石所有する者は他の親戚朋友に分割したるに出るのである。

第三は事實上市場に於ける米の供給增加の方法を講ずる事である。米價は需要供給の一般的原則に由りて定まるものなるが故に、其騰貴は供給を潤澤ならしむるに非ざれば、之を抑へて下落せしむるの途が無い。然るに內地米は現在著しく缺乏せるに非ざるも、將其騰貴を豫期して之を賣り放たない。從て供給增加とはならない。內地米の市場に於ける供給を增加する事能はざれば、外米の輸入に待つの外は無い。當局者は幸に外米輸入の方法を講ずるに至り、米の供給を增加せしが、唯其增加が十分ではなかつた。我が內地米少なくとも千七百萬石に對して三百萬石の輸入を計りしも、其三百萬石は全部未だ我が市場に供給せられて居るのではない。本日(八月十四日)まで輸入せられしもの僅かに百七十萬石で、殘り百三十萬石は今後に於て輸入せらるべきものである。之れでは大なる供給の增加といふ事が出來ず、米價を下落せしむるの勢力としては稍微弱である。又外米は我が國民の一般の嗜好に適せざるものなるが故に、之が販賣には多少の考慮を必要としたるにも拘はらず、其方法が十分適切なりといふ事は出來なかつた。

第四には米價調節の調査會を組織する事である。米價は獨り農商務省の問題では無い。其關係する所甚だ廣きが故に、各方面より代表的意見を徵し、我が國に於て執るべき方針を定むるのが至當である。然るに此事また行はれずして今日に至り、今日に至つて初めて調査會設立の議無きに非ざるも、最早時機を失して居る。急場の間には合はぬのである。

(三)

斯くの如き狀態に於て進みたるが故に、米價は彌やが上にも騰貴に騰貴を重ねたのである。而して今や各地に於て動亂を見るに至つた以上、已に單純なる經濟問題の領域を脫して、重大なる社會問題となるに至つた。且つ已に動亂起る以上は、先づ之

が應急の策を講じ、當面の騷擾を鎭壓しなければならない。之れには先づ米の廉賣を行ふの外は無い。即ち米價高しとの理由を以て突發したる騷擾なる以上は、米價を下落せしむるの外は無い。但し米の一般的下落は人爲を以て遽りに之を左右する事能はざれば、一方に強制買收を行ふても米を買入れ、損失を顧ずして他方に之を廉賣するの方法に據るの外は無い。已に政府は一千萬圓の資金を支出する事に定め、我が皇室又内帑三百萬圓なる莫大の恩賜金を下賜さるゝ優渥なる御諚を下され、各地の特產者又競つて大に資金を提供して廉賣を扶くる以上、思ひ切つて之が實行を圖るべきである。政府も一千萬圓までの支出といふ事でなしに、初めより一千萬圓全部を放り出して、以て救濟の費に充つるが可い。

併し乍ら廉賣は一時の應急策に過ぎない。恰かも腸胃の疾患あるが故に發熱し、之に對して解熱藥を投ずるが如きものである。藥の效能に由りて熱は下がるべきも、其疾患の根本を癒さされば何時復た發熱するかも知れない。之れが爲めには關税をも撤廢し、尙一層有效なる外米の輸入を計り、米の市場に於ける事實上の供給を增加し、或は運搬其他の便宜を計り內地米の配給宜しきを得るに努力しなければならぬ。一方に於て米價を下落せしめんとして、他方に於て同じ政府が運賃を引上げるが如き不統一の政策は不可である。統一を要する。而して之等の方法を講じなければ、一時米價は下落するも復た再び昂騰するの恐れがある。

(四)

故に於て乎、米の最高價格の制限說が有る。最高價格は唯之を制限するのみにては之に應ぜざる者も有るべく、又密かに其價格以外の時價を以て取引する者も有るべければ、最高價格の制限は必ず米の管理を行はざれば、其效果を奏する事が出來ない。即ち政府に於て米の專賣を行ふ事となるのである。然るに米の管理は米のみの管理を爲す理由十分なりや否やを考へなければならない。既に述べたるが如く、騰貴したるものは獨り米のみには限らない。麥や味噌を初め其他の食料品一般に騰貴して居る。從て米の管理を爲す以上は、やがては食料品の管理といふ事にならなければならないない。然るに食料品以外にも我々の生活に必要なるものが甚だ多い。鐵といひ石炭といひ紙といひ藥品といひ、皆米以上に騰貴し而かも必要なもの許である。故に米と同樣之等も亦管理すべしといふ理由も立つ。其境界を定むる事が甚だ困難である。

又米の最高價格の制限は之を時價以下に定むれば、米を

する者はそれ丈け損失を蒙る。米所有者にのみ特別に其負擔を課するは、必ずしも公平なりと云ふ事は出來ない。之に反して其價格を時價を以て定むれば、米價下落するに於ては何等の效果をも生じないのみか、却て其妨害となる。故に其價格を定むるは甚だ容易ではない。殊に最高價格を制限して政府が米を買入れんとするに方り、米所有者にして之に應ぜざる者ある時は、政府は之を強制しなければならぬ。之れ亦種々なる問題を誘致する因となる恐れがある。

（五）

斯の如き狀況なるを以て米價問題は、今や眼界を廣くして之を觀察しなければならぬ時機である。殊に今回の騷動が單に米價のみの騰貴に由らず、一般物價の騰貴に由つて生活を壓迫せらるゝに由り發生したるものなるに於ては、米所有者にのみ特別に不公平なる負擔を課するは不可である、左すれば米を商ふ者がなくなり、終には米の供給者を得ること能はざるに至る恐がある。其負擔を一般に於て負ふ事とするのが至當なりと考へられる。余輩は之を一般物價を調節する時機に到來したるものと觀るのである。言ひ換ふれば一般物價を調節して其騰貴を抑へ、成るべく低廉ならしむる方法を講じ、一般的に其影響を及ぼすべき時代に到着したのである。

然らば一般物價の調節は何に據つて之を圖るべきか。吾人は通貨の收縮に待つの外は無いと思ふ。此處には貨幣定量說の是非を論ずる遑が無けれど、通貨收縮は一般物價調節の最も有力なる方法である事は疑を容れない。其方法は或は日本銀行若しくは預金部所有の公債の賣却、或は事業公債臨時事件費の公債募集、或は國庫證券若しくは勸業債券の發行募集等、何れを取るも若しくは何れを併用するも差支はない。斯かる方法に據れば通貨は收縮せらるゝに相違ない。但、通貨の收縮を行へば或は金利の騰貴を促し、或は物價を下落せしめて財界を不景氣ならしむる副作用がある。之等の副作用は急劇に發生せしむる事は甚だ危險なるが、漸次に之を行はゞ所期の目的を達する事敢て甚だしき難事では無い。今や我が財界は空景氣でなく、其健全なる發達を計るが爲め、多少緊縮方針を取るの時機に達したるものと思はれる。

（六）

米價問題に關する吾人の感想は以上叙述した如くである。併し乍ら今日の米の騷動に由つて之を鑑みれば、我が國民が一般に内地米に固執するは將來重大なる食料問題を惹起すべき原因

とたるものと考へられる。之は今より大に注意しなければならぬ事で、內地米不足の時は外米を輸入し、外米を混入せざる米は一切賣らぬと云ふ事にするも一策である。又米價騰貴に由つて苦痛を感ずる者は、獨り窮民に止まるものではない。五六十圓以下の俸給によりて生活する者は、其苦痛最も甚大である。之等の階級の者は勞働者階級の者と同樣の生活は出來ない。多少世間體も張らなければならぬ。そが爲に聲を大にして生活難を愬へもしない。併し乍ら斯くの如き階級の苦痛は、之れ大いに社會の平和を害する所以のものなれば、米價及び其他の諸物價の調節策を行ふと共に、先づ俸給賃銀を引上ぐるの方法をも講ずるを忘れてはならぬ。多くの月給取り賃銀收得者を有する政府或は民間の資本家は大いに時勢に鑑みて、今やケチな考を捨てゝ斷然たる處置に出でなければならないのである。且つ社會の上流に立つものは一般國民を指導するの覺悟を要する。目下の如き場合は進んで上流のものが外米食用同盟會を造りて範を國民に示すもよし、又、今回の暴動は急激なる貧富の懸隔を生じたるにより下層民の不平が破裂したるものとも見らるれば、社會一般華美淫逸の弊は斷然と全く中止しなければならぬ。花柳社會の繁昌するが如きは實以て怪しからぬことである。(七、八、一七)

雜穀混用の利益

農商務省農務課長　伊藤悌藏

本邦內地に於ける現時の米の需要供給の大勢を述べれば、最近五ヶ年間の內地の產米額は一年平均約五千四百三十七萬石、外國からの輸入が約百四十萬石、朝鮮からの輸入が約百二十萬石、臺灣からの輸入が約八十四萬石で、海外への輸出は約五十二萬石、臺灣、朝鮮への輸出高は約七萬石である。以上の數字を基礎として、之に對して內地に於ける消費額を算出すると、五ヶ年間平均に於て約五千七百二十萬石である。然るに最近米作の狀態を觀れば、大正三年より大正五年に至る三ヶ年間は、大豐作が連續したる爲め、內地米產額が比較的多くして、外國米の輸入は僅かに百四十萬石にしか上らぬ狀態にある。故に以上の現象は最近數年間に於て大農作の連續した結果であつて、日本に於ける需給の大勢としては、必ずしも常態と云ふ事は出來ない。即ち普通の年に於ては先づ外國米の輸入は、前年に於ける米の豐凶により一樣ならずと雖も、大體に於て一ヶ年二百萬石乃至二百五十萬石なるを普通とする。

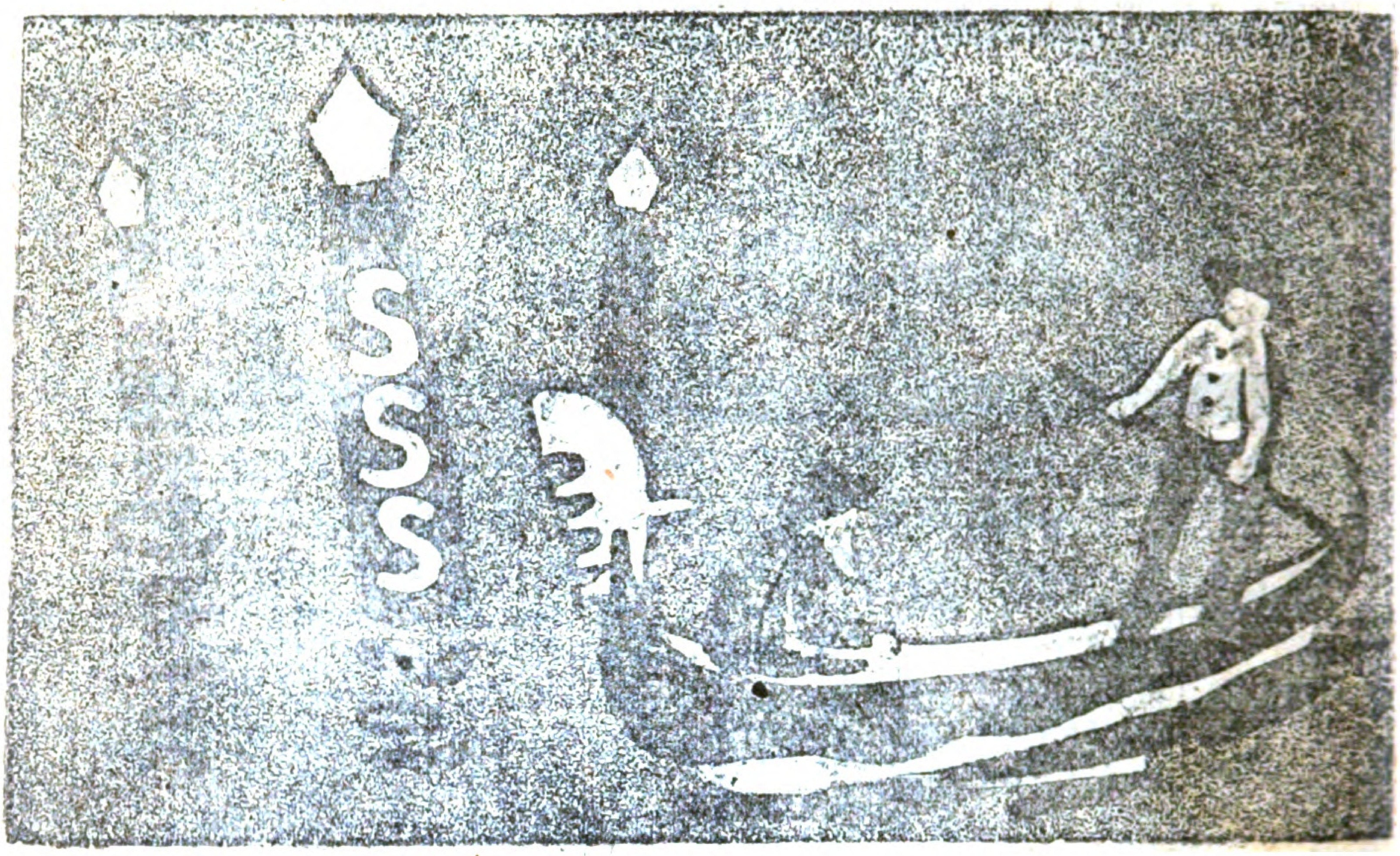
右は最近數年間の平均について述べたのであるが、本年の米の需給關係としては、昨年の米作は五千四百五十萬石にして、之を平年作に比すれば百二十萬石程の增收である。此五千四百五十萬石の生産額は、作柄として良好なりしと云ふを得ざりしも、大正九年より遡つて三ケ年間豐作が連續した結果として、相當に古米の持ち越しもありしが故に、現在に於ける日本の在米は底を見る事が無いと萬々信じて疑はない。

然れ共內地に於ける在米をして、出來得る限り潤澤ならしめるは一般の思惑を除去し、取引を圓滑ならしめ、米價の調節上少からざる便益を得るべきを以て、現に行はれつゝある米價調節に關する政策と共に、國民協力して相當消費の節減を行ふは必要であると思ふ。則ち消費の節約は內地在米を一層潤澤ならしめ、米價を安定ならしめる上に於て、多大の貢獻あるべきは疑を容れない。爰を以て一般國民が國家の安寧と國民の福利とを增進するの公共心の發動により、成るべく內地米を單用する事を避て、三割內外の外國米、麥、其他の雜穀を混食する事を切望して已まない。殊に麥類は收穫後間も無い事であるから、日本に十分なる供給力がある。之れを混食するに於ては、農村に取りては農家の米販賣力を增加せしめ、市街地住民に取りては其生計費を低廉ならしめるから、其效果少からざるを信ずる。

殊に裸麥の如きは、米と同時に炊る事を得て、其味頗る佳良なるを以て、市街地の住民に對しては甚だ便利である。（終）



次號小說豫告



工作に於て
品質に於て
産額に於て
常に第一位を占むる

サンエス萬年筆

山村水邊に涼を趁ふ人々よ
寸時も離されぬサンエスを忘れ給ふな
全國到處の文具店にあり
價一圓五拾錢以上種々あり

本舗　東京馬喰町　細沼淺四郎

筆壇上の權威者

大正名著文庫

◎四六判特製美裝◎　定價各金壹圓六拾錢　◎郵送料各金八錢◎

和田垣法學博士著
第一編 **兎糞録**
博士一流の機智諧謔縱横自在、一讀呵々再讀絶倒
大町桂月先生著

第二編 **人の運**
運が無いなど諦むる勿れ開運招福の鍵茲に在り
杉村楚人冠先生著

第三編 **へちまのかは**
著者半生の波瀾多き生活を叙す精新の文事實の奇相俟て他の追隨を許さず
浪六先生著

第四編 **罵倒録**
獨特の筆鋒にて片端から小氣味よくやつけたる社會觀きびきびして痛快
和田垣法學博士著

第五編 **吐雲録**
兎糞録の姉妹篇奇警飄逸ユーモアの裡教訓を含む

浪六先生著
第六七編 **元禄四十七士** 上下
精確の史實痛快の筆義士不朽の生命新光彩を帶ぶ
幸田露伴博士著

第八編 **洗心録**
評傳史論感想皆情高の趣味風懐に滿ちて天下一品
竹越三叉先生著

第九編 **三叉文存**
卓拔の識見流麗の筆致篇々得易からざる大文字政壇時勢を論じ風月を品す
前田慧雲博士著

第十編 **活修養**
深奥なる佛教の知識該博なる先賢の事蹟を日常生活に應用せる通俗道德書
加藤咄堂先生著

第十一編 **人の心**
材料を史實傳説及實際に採り人心の體と用を闡く

大内青巒先生著
第十二編 **破木舟**
平明の言裏哲理深遠眞個醍醐味を掬すべき靈杓子
長谷川如是閑先生著

第十三編 **搦手から**
人生に對する犀利の觀察辛辣の諷刺匕首胸に迫る
森鷗外博士著

第十四編 **妄人妄語**
藝術倫理宗教其他一切の精神文明に亙る名論卓説を收む造詣深邃思想高遠
前田慧雲博士著

第十五編 **樂しい人生**
諄々として説き懇々として訓ふ大道に徹底して滋味津々眞に處世の羅針盤
幸田露伴博士著

第十六編 **悅樂**
高遠の識見金玉の文立意深邃諄乎として學を勸む

（中付一の四）

發兌　東京市本石町　**玉誠堂**　電話本局二六六六番　振替東京一七四四番

舉つて茲に集まる

大正名著文庫

四六判特製美裝　定價各金壹圓六拾錢　郵送料各金八錢

拾七編　旅から旅　加藤咄堂先生著
名山水を探り風土人情を觀口碑を收む旅行家の友

拾八編　幽芳集　菊池幽芳先生著
佛國滯在中の印象及最近の作品皆情趣掬すべき也

拾九編　放言錄　浪六先生著
人の言はんとして云得ざる所云ふを憚りて口にせざる所を大膽に放言せり

貳拾編　西遊スケッチ　和田垣法學博士著
博士外遊の感想錄也各國の趣味藝術風習を品して興趣横溢機智亦縱横自在

廿一編　うき世 壹　柳川春葉先生著
春葉先生一代の傑作華族の令孃の波瀾多き一代記

廿二編　金剛草　夏目漱石先生著
先生の代表的傑作の選集小說講演評論皆一讀三嘆

廿三編　うき世 貳　柳川春葉先生著
義理人情紛糾して解き難く令孃の苦心同情すべし

廿四編　迷信と宗教　井上圓了博士著
古今東西の迷信を列記して宗教に論及し修養に說き及ぶ博士獨特の新研究

廿五編　うき世 參　柳川春葉先生著
悲絕慘絕の光景一轉して歡喜光明の場面となる枯木再花開き大團圓を結ぶ

廿六編　弱者の爲に　杉村楚人冠先生著
筆端の走る所皆是同情の淚強者を懲して痛快琳瑯

廿七編　聲　村井知至先生著
これ直感の叫也心靈の響也時代革新の第一聲なり

廿八編　杖の跡　大町桂月先生著
滑稽飄逸の紀行文大正の膝栗毛とも稱すべき珍書

廿九編　世界を家として　大庭柯公先生著
先生足跡五大洲に遍く眞に東西南北の人世界の名山水人情風俗茲に集る

參拾編　小生の手紙　大町桂月先生著
最近數年間實際に贈答せる手紙を集む至誠流露先生の面目紙上に躍如せり

卅一編　婦人の爲に　高嶋平三郎先生著
著者平生の蘊蓄を披瀝し婦人の行くべき道を示す

(中付一の五)

發兌　東京市本石町　**至誠堂**　電話本局三六六番　振替東京一七四四番

オノト・デイ！

夏の休みを終つて新らしく活動する第一日を以てオノト・デイとせよ！

諸君は此日を以て新らしきオノトを用意して生活の戰ひに赴けよ。

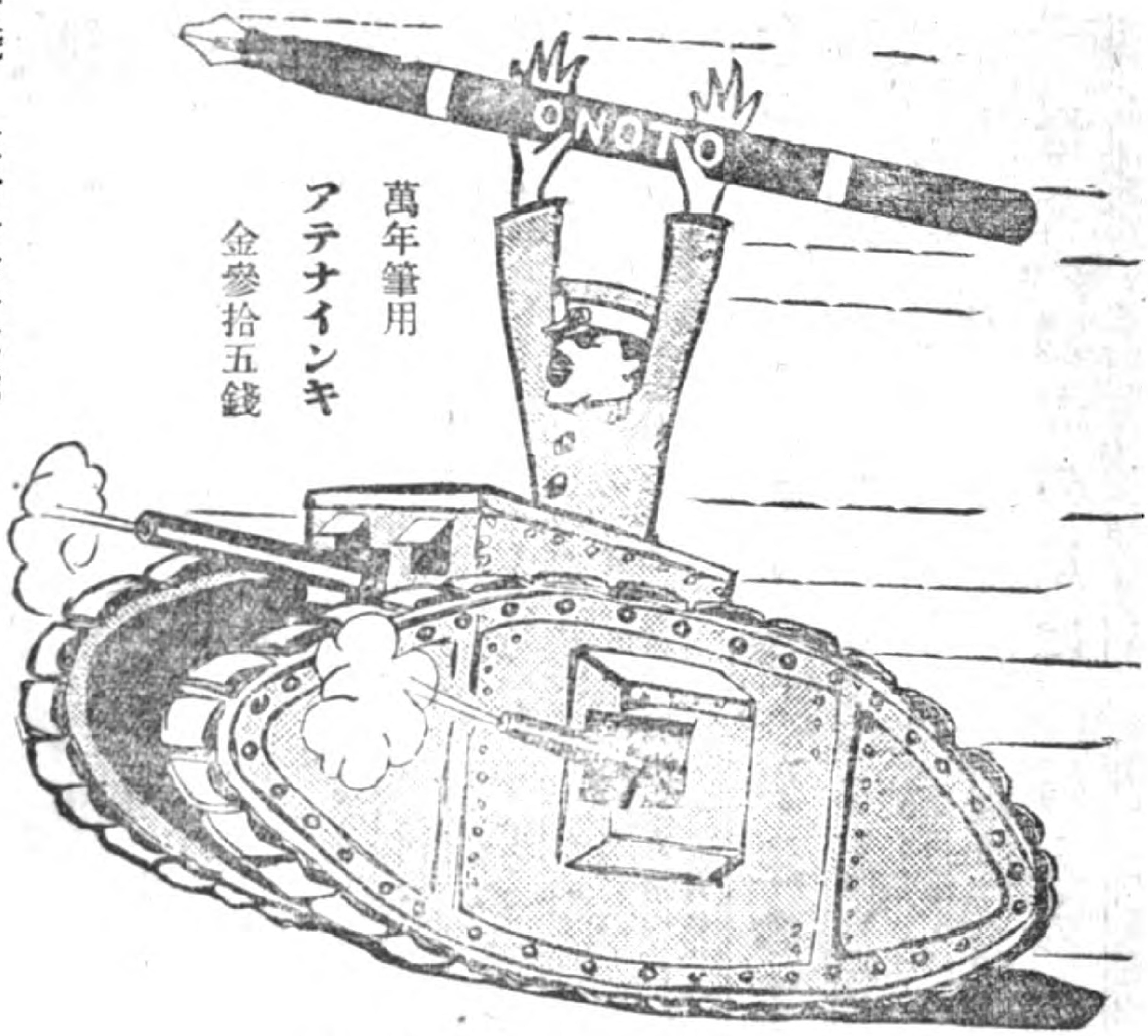
オノトの威力はタンクの向ふ處敵なきが如くならん

オノト萬年筆
無飾金七圓、飾付金八圓以上

オリオン萬年筆
無飾金貳圓八拾錢

アルビオン萬年筆 飾付金五圓五拾錢

送料各金拾貳錢



萬年筆用 **アテナインキ** 金參拾五錢

東京日本橋通

丸善株式會社

大阪心齋橋筋　京都三條通　福岡上西町　仙台國分町

（中付一の六）



秋の夜長物語

田中貢太郎

旅僧の路伴れ

旅僧は歩きながら路件の横顔を窃むやうに見た。それは頰骨の出た髭を剃つた痕の青い顔の長い男で、黒羅紗の襟の付いた淺葱御納戸の半合羽を著て、手荷物を兩掛けにしてゐた。合羽の間からは脇差の柄も見えてゐた。

尖りの見える頰骨のまはりに、感じの能くない所はあるが、その他には護摩の灰など云ふ惡人と思はれるやうな所はなかつた。さう定めてみると、旅僧の心は輕くなつて行つたが、その心の底から何時となく又不安の影がチラチラとさして來た。旅僧の心には、品川の宿はづれから一所になつた路件の擧動が浮んで來た。

『和尙さんは、何處まで、』と、半里ばかり後になり前になりしてゐた町人らしい旅人が、ふと口を利いた。

『私かな、私は京まで……』と云つて、旅僧は後悔した。

『それは願ふてもない事じや、私も京の粟田口にゐる叔父を尋ねて行く所じやが、初めての旅ではあるし、それに一人旅で困つてゐた所じや。どうか和尙さんの衣の袖にすがらしておくんなさい。』

旅僧の腹卷には、京の本山に收める金が這入つてゐた。彼は路件を好まなかつた。『私は其所此所を參詣して行かうと思つてゐるから。とても路件にはならない。誰れか他に好い伴がある

だらう、」

『なに、私も叔父の所へ行くと云ふのも、見物を片がけて行く所じやで、別に急ぐには及ばない。和尚さんが其所此所へ參詣するなら、私も一所に參詣しよう、」と、旅人は如才なく云つた。

旅僧は仕方なくその男と一所になつて歩いた、そして歩いてゐる中に聞いてみた。『お前さんの家は何處だ。』

『私は神田の連雀町だ。』

『商賈は何んだね、』

『瀬戸物をやつて居ります』

二人は神奈川に一泊してゐた。路伴の男は、十年も昔からの知人のやうに馴々しく口を利いた。旅僧はそれが薄氣味惡かつた。彼は路伴の擧動も見落すまいとして注意してゐた。そして不安になつて來ると、口の裏で南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と念佛を唱へた。

並木の松に黄いろな夕陽が射して、後の方から來る馬の嘶く聲がしてゐた。路の左側には黑みがかつた碧海が、直ぐ足許から擴つたやうに見えてゐた。其所は國府津の入口であつた。

『和尚さん此所で泊るとしましようかね、』と伴の男は云つた。

『小田原まで行けないだらうか、』と旅僧は路伴の氣を引いてみろ積りで云つだ。

『どうでせうね、私は初めてだから分らないが、』と、伴の男は澄まして云つた。

二人は喧がしく呼び立てる客引の聲に吸ひ込まれるやうにして、一軒の旅籠に這入つた。室にはもう行燈が點いてゐた。二人はその前に疲れた體を置いてゐた。

下婢が來て風呂の加減が好いと云つた。旅僧は懷の金が心配であらう、動かなかつた。『お前さんが這入つたらどうだね』

『それぢや一つ風呂這入つて來ませうか』と、伴の男は氣さくに云つて出て行つた。

冷々する秋の夜であつた。旅僧は一人つくねんと坐つてゐた。彼は『和尚さん何處まで』と聲をかけて、『私かな私は京まで』と云はせてから、直ぐと路伴になつて來た伴の男の遣り口を心に浮めた。と、どうしても眞面目な町人と思はれない男の擧動が、怪しい陰影を引いて來た。鼠色の法衣を着てゐる彼は、耳の眼立つて大きく立ちあがつた頭をかしげて考へ込んだ。

下婢が二人の膳部を運んで來た。伴の男はまだ風呂から上つて來なかつたので、旅僧はそれまでに便所へ行つて置かうと思つて、二階を降りた。そして敎へられた通りに廊下を歩いて行く

と、湯殿の口のやうな所があつて、其所の薄暗い所で、二人の男が密々と話してゐた。旅僧がその傍を通り抜けやうとすると、二人の者は驚いたやうに左右に立ち別れた。『和尚さんぢやありませんか』と、その一人は聲をかけた。

『おゝ私じや』と、旅僧は足を停めた。

それは伴の男であつた。戰慄が旅僧の脊筋を走つた。伴の男はいよいよ海道を横行してゐる盗賊で、仲間と一所に自分の懐を狙つてゐるに定まつたと思つた。旅僧は言葉が出なかつた。

『つい長湯をしたので、お待ちどほでしたね。飯はどうしました。』と伴の男は笑ひ聲で云つた。

『今來た所じや、私は一寸小用をして來るから、一所にやらう』と云つて、旅僧は向ふの方へ行つた。そして廊下の行詰の便所で、用を足しながら、このまゝに愚圖愚圖してゐては、金ぐるみ生命までも亡くするから、どうかして逃げ出さなければ不可ないと思つた。彼は用が終つた後でも、そのあたりを迂路迂路してゐた。裏庭の暗い所には、糠星の二つ三つ光つてゐる物置の屋根などが見えてゐた。

二階の室では伴の男が待ちかねたと見えて、膳先の酒を喫んでゐた。『毒見をやつてる た所じやが、お熱い所を一杯どうです。』『有難いが、私は一杯も喫めない。』と、旅僧は手を振りながら精進料理をつけた自分の膳の前に坐つた。

『葷酒山門に入るを許さずか、さすがに和尚さんは違つたもんだ、なア姉さん。』と、伴の男は前にゐる下婢の顔を見て笑つた。

旅僧は腹の中を見透されないやうに、調子を合はせやうとしたが、どうしても輕い言葉が出なかつた。彼はそれを混らす爲に念佛を唱へてその後で飯の茶碗を取つた。

伴の男は下婢を相手に冗談云ひ云ひ二本の銚子を開けて飯にした。旅僧はとうに飯を濟ませて眼をつぶつてゐた。

給仕をしてゐた下婢が膳を下げて行くと、入り違つて他の下婢が來て蒲團を敷いた。旅僧は法衣を脱いで床の上に載せてゐる檜笠の傍に置いて、横になつた。伴の男はそのまゝ蒲團にもぐり込んでゐたが、もう寢息が聞えて來た。旅僧は耳を立てゝその寢息を聞いてゐた。

夜はもう八つを過ぎて、枕頭に据えた有明の行燈の火が微めつてゐた。旅僧はむつくり頭を擡げて、伴の男の寢顔を覗いてゐたが、やがて微つと身を起した。そして床の法衣を着、脚絆の手荷物と檜笠とを手にすると、するすると障子を開けて外へ出たが、それから二階を降りて、宵に要心を見て置いた便所の傍の雨戸を開けて出た。庭には蒼白い月の光がさしてゐた。

僧はその光で、割竹の垣根の破れを見付けて、その間から這ふて出た。

　旅僧はやつと悪人から離れる事が出來た。併しそれでも、直ぐ氣取られて追つかけられる恐れがあるので、彼は裸足の足の痛いのも構はずに、小田原の方を向けて走るやうに歩いた。

　小田原を過ぎて風祭まで行くと、夜が明け放れて、小荷駄の鈴の音や、馬子唄が聞え出した。其所は箱根の登り口で、爪先あがりの石高路となつて來た。旅僧は茶店に這入つて草鞋を買つて穿いた。

　湯本からは、路はきつい山坂となつた。旅僧は湯本で朝飯を喫つて、畑宿、樫の木茶屋など云ふ所を後にして登ると、峠に近い、双子山の下になつた所に甘酒茶屋と云ふ甘酒が名物の茶店に來た。旅僧は其所で一休みする積りで、店先へ這入つて行つた。

『和尚さん遅いぢやねえか』と云つて笑ふ者があつた。

　國府津の旅籠屋へ棄て、來た伴の男が腰をかけてゐた。旅僧は其所へ立ち縮むやうになつた。

『和尚さんも隨分人が惡いよ、眠るのを待つてゐて逃げ出すんだもの、』と、伴の男は冗談のやうに云つて笑つた。

『いや、さう云ふ事もないが、少し急ぎの用を思ひ出したから、―と、旅僧は仕方なく云つて、恐る恐るその傍に腰をかけた。

『まア好いや、懐に二百兩も金を持つてゐりや、人に用心するのも無理はないさ。』と云つて、彼は一寸旅僧の顔を覗き込むやうにして『……が、和尚さん、今度は幾等すつぽかさうとしたつて、すつぽかされませんぜ。』

　旅僧の腹巻の中には、二百兩の金が這入つてゐた。持つてゐる金の數まで知られてゐる上は、とても逃れる事は出來ない。この上は死ぬも生きるも、佛の御心に從ふより他に途はないと思つた。彼は茶店の爺仁の汲んで來た甘酒の茶碗を手にしたなりで、又念佛をはじめた。

『和尚さん、そろそろ出かけませうかな、』と伴の男が促した。

　旅僧は腰をあげた。彼の心は不思議に明くなつてゐた。彼は伴の男の云ふがまゝになつて、峠を越へて行つた。そして山を降りて、二人で三島へ泊つたが、彼はもう伴の男から逃れやうとはしなかつた。

　金谷へ泊つた晩は、旅僧は伴の男の云ふなりになつて、二三杯の酒を喫んで、耳朶を頭赤に染めて寝た。

　その夜じつ近くなつて、旅僧の肩を揺り動かす者があつた。

『和尚さん、和尚さん、』

　旅僧が眼を開けてみると、旅装束をした伴の男が枕頭に蹲んでゐた。

『なんだね。』と、旅僧が聞いた。

『急用が出來たから、私と一所に出ておくんなさい。』

旅僧は起きあがつた。伴の男は、旅僧の法衣やら檜笠を自分の手に持つた。『お前さんの物は、私が持つて行くから、早く私と一所にお出でなさい。』

伴の男は先に立つて室を出て行つた。旅僧もその後からとぼとぼと縋いて行つた。雨戸が半分ばかり開いて、冷たい風の這入つてゐる所があつた。二人は其所から降りて行つた。其所は旅籠屋の裏庭であつた。伴の男は星の光に透かし透かしして裏門を開けた。裏門の先は眞黒い竹籔であつた。二人はその中を潜つて、小さな草路に出て歩いた。弱々した蟲の音がしてゐた。

五六町ばかりも歩いた時、後から來てゐた伴の男が何か云ふので、旅僧はふと背後を向いた。今潜つて來た竹籔の向ふに火事があつて、燃えあがつた眞赤な火の光に照らされて、竹籔の竹は黒く繪のやうに見えてゐた。

『今の家らしいぞ。』と、伴の男が云つた。

旅僧の心に蛇のやうに閃きのぼつた物があつた。彼はその形の明瞭になるのを恐れるやうに南無阿彌陀佛を口にした。

火が小さくなつた。旅僧は思ひ出して法衣や檜笠を受取つて仕度をした。そして本通へ出て西へ西へと行つた。旅僧は伴の男の云ふまゝになつて、決して反對はしなかつた。

岡崎へ辿り付いた時は、陽が入つてゐたが、伴の男は『もう少し、もう少し。』と云つて、宿を取らうとしなかつた。旅僧は念佛を唱へ唱へ縋いて行つた。何時の間にか矢矧橋になつて、驛の家並は後になつた。

橋を渡つて松並木の下を歩いてゐると、眞黒に暮れて了つた。空にも薄雲が流れてゐるので、星も飛々にしてか光つてゐなかつた。

向ふの方で馬の鈴の音がして、提燈の光が一つぽつかりと見え出した。

『和尙さん少し用事が出來た、お前さん此方へ來て待つてゐておくんなさい。』と、伴の男が暗い中から云つた。

旅僧は聲のする方に寄つて行つた。伴の男の黑い影が右側の畑の方へ動いて行くので、旅僧もその方へ縋いて行つた。二三本の松の木らしい立木があつて、その下に藁ぐろがあつた。

『私が呼びに來るまで、お前さんは此所にゐておくんなさい。』と伴の男は命令するやうに云つた。

旅僧は默つて其所へ蹲んだ。伴の男は引つ返して行つた。旅僧は恐る恐る顏をあげて松並木の方を見た。

遠くに見えてゐた提燈の火は、直ぐ眼の前に來て、馬の足音も聞えてゐた。と今まで點いてゐる提燈の火が不意に消えて、人の叫ぶ聲に交つて何か烈しい物音がしたが、間もなく靜になつた。旅僧は眼をつむつて又念佛をはじめた。

「和尚さん、さア行かう。」と云ふ聲が旅僧の頭の上でした。伴の男が傍へ來てゐた。旅僧は默々として起きあがつた。

その夜遲く二人は池鯉鮒の入口に行つて泊つた。

朝になつて二人が飯を喫つてゐると、隣の室で、松原で金飛脚と馬子が殺されたと云つて話してゐる者があつた。

「なに金飛脚が殺された。そいつは可哀想じやー」と、伴の男は何の感じもないやうな聲で云つた。

旅僧は默つて箸を動かしてゐた。

二人はやがて其所を出發した。そして數日の後には、目差す京に着いて、三條通の旅籠へ這入つた。

その夜、飯が濟むと、伴の男は旅僧に向つて言ひ出した。「和尚さんもうお分りになつてゐるでせうが、私は盗人です。和尚さんに路伴となつたばかしに、大きな仕事を二つやつて、しこたま金をもうけました。」と、彼は懐から百兩包を二つ出して、「これはお禮のしるしです。」

旅僧は不淨の金には手を觸れなかつた。「私は佛につかへる身じやー」

伴の男は、旅僧が金を收めないと見ると、「それではこれも戴いて行きます。長い間御厄介になりました。」と云つて、金を懐に仕舞つたかと思ふと、もう室の外へ出て行つた。

旅僧はその後で、靜に念佛をはじめた。行燈の光は、耳の大きな旅僧の穏かな顔を浮きあがらせてゐた。

俳諧修業

初夏の日は暮れて、遠く地平線に擴がつてゐた水田の上も暗くなつた。透かしてみると、小溝の水が鼠色に光つてゐるのが見える。今の先森靄と一所になつたばかりのぼやけた空では、義理一片に燈したやうな星の光を其所此所に見せた。蛙の聲が何時の間にか高まつて來た。若い俳諧師は、とぼとぼと歩きながら人家を注意してゐた。

俳諧師は備中の吉備津宮に參詣しようとしてゐる者であつた。小さな青い光が一つ眼の前をツラツラと流れたので、螢だなと思ふて、見るともなしに四方に注意してみると、青い光は水田の上にも、路ぶちの草の中にもあつた。と、路から少し右に這入つた所に、細々とした火の光が漏れてゐた。

俳諧師は肩にした手荷物を揺り直して、人家の方へ折れて行

つた。水田に包まれた二三軒の百姓家があつて、その一軒の籔垣のある取付の家では、年とつた男と息子らしい若い男とが、松を焼いて緣側で繩を綯ふてゐた。俳諧師は庭先へ這入つて行つた。『吉備津宮へ參詣に行く者ですが、お宿をお願ひする事は出來ないでせうか。』

『泊めてあげたいが、一人旅は法度が嚴しい。それよりか、こゝから二町ばかり先に行くと、川がある。その川も吉備津樣へ御參詣する者だと云へば渡してくれる。その渡を越へて向ふにあがると、右の方に大けな立派な屋敷が在る。其所へ行て頼めば、誰れでも泊めてくれるから、其所へ行きなさるが好え。』と、年とつた男は、藁を持つた手を控へて云つた。

俳諧師は其所を出て、敎へられた通り、元の路を向ふへ向ふへと行つた。河原石のごろごろした草原が來たかと思ふと、微白い一筋の河の流が見えた。土手の上に渡小屋らしい墓の蹲つたやうな小屋あつて、中から火が射してゐた。覗いてみると老人が圍爐裏の前で肱枕をして鼾をかいてゐた。

『もし、もし、』と云つて聲をかけると、老人は頭をあげた。『吉備津樣へ參詣に來た者だが、渡してくれませんか。』

老人は起きて來て、小屋に立てかけてあつた水棹を持つて水際の方へ行つた。俳諧師もその後からおりて行くと、一艘の小舟が岸の蛇籠へ添うて繫いであつた。老人は俳諧師を乘せると、とも綱を解いて水棹を張つた。小舟は蘆の葉を舟緣にからめながら、するすると水の中に出た。

『お客さんは何處かな、』

『江戸だ。』

『ほウ、それは好え所じや、上方見物に來たと見えるな。』

『見物でもないが、まア、かうして、ぶらぶら歩いてゐる所だ。』

『好え身分じや、何が商賣かな、』

『商賣と云ふて何もないが、私は俳諧の修業に歩いてゐる。』

『歌俳諧の俳諧か、それは面白い事じやらう、……時にお客さんは、野宿でもなるまいが、今晩は何處で泊らつしやる積りじや、』

『それは今聞かうて思るてゐた。この川を越へると大きな立派な屋敷が在ると云ふが、本當だらうか、』

『もう誰れぞに聞いて見えるな、在るとも在るとも、大きな屋敷が在つて泊めてくれるから、其所へ行かつしやれ。』

舟が著くと俳諧師は老人に禮を云ふて、上手の方へあがつて行つた。矢張り河原石のでろごろした路が草原の中に續いてゐた。俳諧師は土手の上に立つて右の方に眼をやつた。家の[illegible]

らしい物が星の光る空の背景にして薄すらと見えて來た。

草の中を歩いたり、麥畑の裾を曲つたりしてゐると、小さな路があつて、その行詰めが大きな屋敷の本門になつてゐた。俳諧師は本門の脇の潜戸の所に行つて、そつと押してみると、まだ締めてないので、其所から這入つて行つた。長屋らしい室がその左側にあつて、行燈の火が點いてゐた。

『私は江戸の者でございますが、吉備津様へ參詣に行く道で宿を取りはぐれて、困つて居ります。こちらで一晩御厄介になる事は出來ないでせうか。』と、俳諧師は聲をかけた。

『それはさぞお困りでございませう、……では一寸伺つて來ますから、此所で待つてお出でなされ。』と、行燈の横手に坐つてゐたらしい女が起つて來て、庭から出て行つた。

俳諧師は緣先に腰をかけて、懐の手拭で、襟元に滲み出た汗を拭いてゐた。

女が戻つて來て、主人が承知したから此方へ來いと云つた。俳諧師は肩の荷物をおろして片手に提げ、女の後から從いて行つた。そして內玄關の口に行つてみると、足盥に水を入れて、紙燭を持つた下婢が立つてゐた。俳諧師は其所で草鞋を脫つてあがると、その下婢が先に立つて、案內してくれた。

青々した備後表の疊を敷いた室を二つ三つ通ると、書院風な淸らかな室が來た。其所が俳諧師に與へられた室であつた。彼は鼠色の十德を拔き、手甲脚半などを解いてゐると、はじめの下婢が茶を汲んで來た。

『今こちらの主人が御挨拶にあがります。』と、云つて、その下婢は出て行つた。

俳諧師は茶を啜りながら、思ふてゐたよりも立派な室の様をヂロヂロ見廻はして、江戸の大名屋敷にしても、十萬石以上でないと、こんな住居は出來ないなどと云ふやうな事を考へながら、腰の煙草入を拔いて煙草を喫んでゐると、黑い頭髮を總髮にした、色の白い、中年の男が這入つて來た。

『私が當家の主人でございますが、ようこそお立ち寄り下さりました。』と、總髮の男はしとやかに云つた。

『……飛んだ御厄介をかけまして、有難うございます。』と、俳諧師は云つた。

『いや、私の方は、少し心願がありまして、旅の方のお宿を致して居りますから、御遠慮なさらないやうに、それにお宮まではもう三里餘りしかないから、明日も御ゆつくりなさつて、御參詣なさるが宜しうございませう、主人は又思ひ出したやうに「お江戸の方からお出でなされたと申す事でございますが、

何を御商賣になされて居ります。』
『私は俳諧の修業をして居る者でして、』
『ほう、俳諧の、それは御奇特な事でございます。それでは貴君は、江戸坐の方でございますか、』
『いや、私は雪中菴の方で、蓼太先生が私の師匠でございます。』
『ほウ、それでは蓼太先生の御内の方でございますか、——五月雨やある夜ひそかに松の月——蓼太先生にはこんな秀逸があると聞いて居りますが、』と云つて、主人はまだ一つ二つ俳諧の話をしてゐたが、『私の家へ來る者にも、俳諧の好きな者もございますから、明日は一席催しませう、今晩は御ゆつくりお休みになつて下さいませ、今、直ぐ御膳をさしあげます。』

主人が出て行くと、入り違つて初めの下婢と異つた下婢が來て、風呂に這入れと云つた。俳諧師は手荷物の中にある著換の古い浴衣を持つて、下婢の後から室の前の縁側を傳ふて行くと、一曲りした所に湯殿があつて、檜の新らしい湯桶に湯が溢いてゐた。

湯からあがつて來ると、案内して來た下婢が綺麗な浴衣を持つて來た。俳諧師は無理にそれを斷つて、自分の古浴衣を著て室に歸つた。室の中にはもう膳が來て、年とつた品のある女が給仕に來てゐた。膳には鹽燒にした尾頭つきの魚などをつけてあつた。給仕の老女は、色の白い、瘦ぎすな、若い俳諧師に心を置かないやうに食事をさした。『お若いから、面白い事もございませう、』などと云つて相手になつた。

飯が濟むと、老女は下婢を呼んで、二人で俳諧師の床をとつてくれた。上も下も眞新らしい絹夜具であつた。俳諧師はその中へ這入つて寢たが、總てのもてなしから、坐敷のかゝり、夜具の好みに至るまで、あまり完備しすぎてゐるから、若しや狐にでもつままれてゐるのではないかと云ふやうに思はれて來て、薄氣味が惡くて直ぐには眠られない。じつと氣を沈めて、宵からの事を考へ合せたりした。

夜が明けて俳諧師が起きると、宵の老女が朝飯の膳部を持つて來た。その膳にも宵と同じやうな御馳走をならべてあつた。老女が膳をさげて行くと、主人が出て來た。『おつつけお相手をする者も參りませうから、今日はどうか御ゆつくりなさつて下さいませ。』と云つてゐる中に、年とつた脊の高い男が這入つて來た。腮に疎髯を生やした翁の面のやうな顔をした人であつた。

『蓼太先生のお内の方でございますさうなが、蓼太先生は

い御人物のやうに承はつて居ります。明和九年の江戸大火の時でしたか、藥鑵に白湯を入れて、それと文臺を持つて、深川の六間堀にある要津寺の中の庵へ這入つて、――緋櫻を別れて青き柳かな――と云ふ發句を作つて、火事羽織を著て見舞に來た人を呼び上げて、百韻をなされたとか申しますが、かう云ふ方でないと好い句は出來ますまい。』と、年をとつた男は蓼太の逸事を云ひ出した。

それは俳諧師にも懷かしい思ひ出の一つであつた。彼はそれに釣り込まれて、それからそれと俳諧の事を話してゐる中に、蓼太の――灯火を見れば風有り夜の雪――の句を立句にして、年とつた男が脇を付け、俳諧師が第三句をやつて、とうとう百韻をはじめた。その中に何時の間にか夕方になつた。參詣にはもう遲いので、俳諧師はもう一晩其所で泊めて貰ふ事にして、夕飯が濟むと、一人で横になつて延々としてゐた。

蒸せ暑い夜であつた。緣側の障子を開けてあるので、火を入れた庭の石燈籠が暗い中にほつかり見えて、青葉の匂が靜に室の中に漂うて來た。俳諧師は昨夜の夜道で見た螢の事を思ひ出して、螢の句を考へはじめた。――追はれては月にかくるゝ螢哉――と云ふ師匠の蓼太の句が頭の何處かにこびり付いてゐて、ともすると、追はれてはとか、月にかくるゝとか云ふ型が、螢火や……里川渡る……夜路する……と云ふやうに考へて來彼の短想をその中に入れやうとする。彼は無意識の間に、その中に引き込まれまいとして、努力を續けてゐた。と、琴の音が何處からともなく聞えて來た。彼は句を片寄せて、その響に耳を傾けた。

老女が茶を入れて這入つて來た。「お一人でお淋しうございませう。」

「これが又私の修業の一つでございますから、」と、俳諧師は居ずまゐを直しながら云つた。

老女は腰を落ちつけて世間話をはじめた。俳諧師も道中に見聞した事を話して聞かした。關ケ原から不破の關の址を見物に行つた時、持病の胸痛が起つて、路のふちに在つた辻堂に休んでゐると、日が暮れて、夕月が射した。それでも胸の痛みが收まらないので、其所で野宿する積りでゐると、裸體になつた若い女の狂女が來て、ゲラゲラと笑つた事があつた。彼はそんな話もした。

「時に貴君はお幾歳にお成りなさいます。」と、老女が聞いた。

「四になります。」

「あゝ、二十四、それはお若うございます。お國の方には奥様も……」

『いや、まだ一分が立ちませんから、女房所ではありません。』

『なに、今に御立身なさいますよ、それでも本當に奥樣はお作りになりませんか、』

『あるもんですか、』

『では一つ、お持ちになつては如何でございます。』と云つて、老女は眞面目な顔をして、『こんな事をだしぬけに申しましては、貴君は不思議に思召すかも知れませんが、當家の主人に、今年十八歳になるそれはそれは綺麗なお娘御が一人でございまして、その婿になる人を探して居りますが、どうも思はしい人もありません。で、この頃は、旅人までお泊めして探して居る次第でございますが、はからず貴君がお出で下さいましたから、主人は貴君の御技倆なり御人品なりに感心致しまして、私からお願ひせよとの事でございます。どうか當家の婿になつて下さいませ。若し御承知なすつて下さいますなれば、今からお娘御の許へお連れ申します。』

俳諧師は不審でたまらなかつた。老女の云ふやうに綺麗な娘で、それでかうした屋敷に住む身分の者が、何の酔興に選りに選つて、こんな小僧を婿にと云ふだらう、これには何か譯があるだらう、その娘は顔は綺麗でも手足の片輪になつた者か、それとも開帳の見世物にする轆轤首か、癩病などの血のある者だらうと思つた。

『婿になつて下されても、この土地に居なければならんと云ふやうな事は申しません。京でも大阪でも、お國の方の江戸でも、貴君がお好きな所でお暮しなさるが宜しうございます。お金などは年に何千兩お使ひになつても宜しうございます。』と云つて、老女はどうかして俳諧師の心を動かさうとしてゐる。

俳諧師は何か娘に缺點があるだらうと思つたが、莫大な富に對する誘惑は、彼の心を犇と捉つた。――見ず知らずの旅人を婿にすると云ふ事は、娘に缺點がある爲めと限つた事もあるまい。そんな例は好くある事だと、彼の欲望は又誘惑に同意した。併し老女の誘ひにそのまゝ盲從する事は、皮肉な彼の良心が許さなかつた。『こんな青二才をそんなにまでおつしやつて下さいますなら、なんとか考へてみませうが、吉備津樣にまだ參詣が濟んで居りませんから、それを濟まして、歸りに立ち寄つた上で、御返辭を致しませう。』

老女はこの言葉を聞くと、喜んで出て行つた。俳諧師はその夜よつぴて疑惑と誘惑とに惱まされた。

俳諧師は玄關口まで主人と老女とに送られて出發したが、どうしても不審が晴れないので、誰れか人を見付けたなら聞いて

みやうと思ひながら歩いた。

明るい陽に照らされた水田や森が見えてゐた。五六町ばかり行つた所で、數十軒の人家のある所があつた。小さな茶店もあつて、頭髪の眞白い老婆がゐた。俳諧師は其所へ這入つて行つた。

「お婆さん、この後の川の傍にある立派な屋敷は、どうした所だらう。」と、俳諧師は老婆の汲んでくれた缺茶碗の茶を啜りながら聞いた。

黄色なでぶでぶした老婆の頬に笑ひが見えた。「さてはお客さんは、昨夜あすこへお泊りになりましたらう。」

「泊つてどうも不思議に思つたから聞いてゐるが、どうした所だらうね。」

「別にどうした所でもありません、たゞお金持ちの家でございますよ。」と云つて、老婆は又笑つた。

この笑ひの中に何か意味のあるやうに思はれたので、俳諧師は重ねて聞いたが、老婆はそれ以上何も云はなかつた。

其所を出て又少し行くと、又一つの村落が來た。五六人の職人がゐて、楢や椿の類をこしらへて居る店があつた。俳諧師は其所へ寄つて、煙草の火を貰つた。そして煙草を喫みながら又彼の屋敷の事を聞いてみた。

職人どもは顔を見合はせて、口元で笑ひ合つた。この職人に指圖をしてゐた亭主らしい男が返辭をした。「あすこへお泊りになつたと見えますね、別にかはつた事もありませんよ。たゞお金のある人ですよ。」

俳諧師は又一つ疑惑を增しながら歩いた。そして吉備津宮のある眞金(まがね)の本村へ着いて、其所で早い晝仕度をしながら、社に參詣したが、どうも落付いた氣分になれなかつた。規模の宏大な神殿は、往古の遺風を存して神々しかつた。拜殿の西には長さ百八十間の回廊があつた。回廊の中央から西に折れて、小さな廊に沿うて行くと、御釜御殿と云ふ末社があつた。

其所には竈があつて、古い釜がかけてある。阿曾女と云ふ柿色の袴を穿いた二人の老婆が、その傍に松葉の束にしたのを置いて坐つてゐた。吉凶禍福を占つて貰ひたい者は、供米料を出すと、阿曾女の老婆が竈の下に松葉を焼き、供米を甑に入れて、御釜の蒸氣にかけてくれる。さうなると釜の湯は音を立てゝ沸騰する。その音が雷のやうに大きいと、吉で、小さいと凶であると云はれてゐる。俳諧師は何んだか怖いやうで、占をさせる氣にはなれなかつた。併し社の背後の砂丘に登つた時には、彼の大きな屋敷の婿になるとして、それが吉であるか、凶であるかを占はせてみて、吉だとするなれば、どんな素性の家で

でも好いから、婿にならうかとも思つたが、その思ふ下から氣味悪い得態の知れぬ者が頭をあげて來て、その心をにぶらしてしまつた。その砂丘は、有名な吉備の中山で、小松が飛々に生えてゐた。小松の間から見ると、兒島灣が直ぐ眼の下に展けてゐた。砂丘の麓の小さな流は、細谷川であつた。俳諧師は松の根に腰を下ろして、默々と考へ込んでゐた。

夕方になつて俳諧師は、煙草の火を借りた家の前まで歸つて來た。其所にはもう職人も居なくなつて、亭主一人、仕事場の隣になつた見付の坐敷で、煙草を喫んでゐた。俳諧師は這入つて行つた。

『今朝煙草の火を拜借した時に、この先の川の傍にある立派な屋敷の事をお尋ねしたけれど、どうもはつきりおつしやつて下さらないやうでしたが、どうか本當の事をおつしやつて下さらないですか。』

『ではお客さんは、あすこへお泊りになつた時、婿になれつて云はれましたな。』

『その事ですよ。どうも私のやうな見ず知らずの者を婿にすると云ふに就ては、何か深い仔細がなくてはならないが、どうした家でせう、どうか教へて下さい。』

『それ程までに云はるるなら、お知らせしませうか、あれはこの國の穢多の頭ですよ。金銀は數の知れない程持つて居りましても、穢多の仲間をはずれる事が出來ないから、せめて娘だけは、穢多でない者に添はしてやらうと思ふて、あゝして旅人なんぞを泊めて、婿になる人を探して居る所ですよ。併し穢多とは申せ、あゝした身代の上に、娘も綺麗な好え女でありますから、何事も縁だと思つて、婿になつてやつたらどうでございます。』と、亭主は云つた。

『他の事なら又諦めやうもありますが、穢多と縁組などは思ひもよらない事です。が、これも貴君のお蔭で、素性が分つて安心いたしました。』と云つて、俳諧師は悦んだ。彼は頭の上に押つかぶさつてゐた黒い雲がとれたやうに氣が晴々とした。

『貴君はあすこを出る時、何んと云ふて出て來ました。』

『私のやうな者でも、そんなに云つて下さるなら、何とか考へて見ませうが、兎に角、吉備津樣に參詣をしてから、歸りに寄つて更めて御返辭をしますと云つてありますが、もう二度と行くもんですか。』と、俳諧師は笑顔をした。

亭主は頭を振つた。『貴君が幾等行かないと思ふても、承知したからには、もう人を出口出口に置いて、逃げて行かないやうな手配がしてあります。とても逃げられる物じやありませ

い御人物のやうに承はつて居ります。明和九年の江戸大火の時でしたか、藥罐に白湯を入れて、それと文臺を持つて、深川の六間堀にある要津寺の中の菴へ這入つて、――緋櫻を別れて青き柳かな――と云ふ發句を作つて、火事羽織を着て見舞に來た人を呼び上げて、百韻をなされたとか申しますが、かう云ふ方でないと好い句は出來ますまい。』と、年をとつた男は蕪太の逸事を云ひ出した。

それは俳諧師にも懐かしい思ひ出の一つであつた。彼はそれに釣り込まれて、それからそれと俳諧の事を話してゐる中に、蕪太の――灯火を見れば風有り夜の雪――の句を立句にして、年をとつた男が脇を付け、俳諧師が第三句をやつて、とうとう百韻をはじめた。その中に何時の間にか夕方になつた。參詣にはもう遲いので、俳諧師はもう一晩其所で泊めて貰ふ事にして、夕飯が濟むと、一人で横になつて延々としてゐた。

噎せ暑い夜であつた。緣側の障子を開けてあるので、火を入れた庭の石燈籠が暗い中にほつかり見えて、青葉の匂が靜に室の中に漂うて來た。俳諧師は昨夜の夜道で見た螢の事を思ひ出して、螢の句を考へはじめた。――追はれては月にかくるゝ螢哉――と云ふ師匠の蕪太の句が頭の何處かにこびり付いてゐて、ともすると、追はれてはとか、月にかくるゝとか云ふ型が、螢火や……里川渡る……夜路する……と云ふやうに考へて來る彼の詩想をその中に入れやうとする。彼は無意識の間に、その中に引き込まれまいとして、努力を續けてゐた。と、琴の音が何處からともなく聞えて來た。彼は句を片寄せて、その響に耳を傾けた。

老女が茶を入れて這入つて來た。『お一人でお淋しうございませう。』

『これが又私の修業の一つでございますから、』と、俳諧師は居ずまゐを直しながら云つた。

老女は腰を落ちつけて世間話をはじめた。俳諧師も道中に見聞した事を話して聞かした。關ケ原から不破の關の址を見物に行つた時、持病の胸痛が起つて、路のふちに在つた辻堂に休んでゐると、日が暮れて、夕月が射した。それでも胸の痛みが收まらないので、其所で野宿する積りでゐると、裸體になつた若い女の狂女が來て、ゲラゲラと笑つた事があつた。彼はそんな話もした。

『時に貴君はお幾歳にお成りなさいます。』と、老女が聞いた。

『四になります。』

『あゝ、二十四、それはお若うございます。お國の方には奥様も……』

『いや、まだ一分が立ちませんから、女房所ではありません。』
『なに、今に御立身なさいますよ、それでも本當に奥様はお作りになりませんか、』
『あるもんですか、』
『では一つ、お持ちになつては如何でございます。』と云つて、老女は眞面目な顏をして、『こんな事をだしぬけに申しましては、貴君は不思議に思召すかも知れませんが、當家の主人に、今年十八歳になるそれはそれは綺麗なお娘御が一人でございまして、その婿になる人を探して居りますが、どうも思はしい人もありません。で、この頃は、旅人までお泊めして探して居る次第でございますが、はからず貴君がお出で下さいましたから、主人は貴君の御技倆なり御人品なりに感心致しまして、私からお願ひせよとの事でございます。どうか當家の婿になつて下さいませ。若し御承知なすつて下さいますなれば、今からお娘御の許へお連れ申します。』
俳諧師は不審でたまらなかつた。老女の云ふやうに綺麗な娘で、それでかうした屋敷に住む身分の者が、何の酔興に選りに選つて、こんな小僧を婿にと云ふだらう、これには何か譯があるだらう、その娘は顏は綺麗でも手足の片輪になつた者か、それとも開帳の見世物にする轆轤首か、癩病などの血のある者だらうと思つた。
『婿になつて下されても、この土地に居なければならんと云ふやうな事は申しません。京でも大阪でも、お國の方の江戸でも、貴君がお好きな所でお暮しなさるが宜しうございます。お金などは年に何千兩お使ひになつても宜しうございます。』と云つて、老女はどうかして俳諧師の心を動かさうとしてゐる。
俳諧師は何か娘に缺點があるだらうと思つたが、莫大な富に對する誘惑は、彼の心を犇と握つた。――見ず知らずの旅人を婿にすると云ふ事は、娘に缺點がある爲めと限つた事もあるまい。そんな例は好くある事だと、彼の慾望は又誘惑に同意した。併し老女の誘ひにそのまゝ盲從する事は、皮肉な彼の良心が許さなかつた。『こんな青二才をそんなにまでおつしやつて下さいますなら、なんとか考へてみませうが、吉備津樣にまだ參詣が濟んで居りませんから、それを濟まして、歸りに立ち寄つた上で、御返辭を致しませう。』
老女はこの言葉を聞くと、喜んで出て行つた。俳諧師はその夜よつぴて疑惑と誘惑とに惱まされた。
俳諧師は玄關口まで主人と老女とに送られて出發したが、どうしても不審が晴れないので、誰れか人を見付けたなら聞いて

みやうと思ひながら歩いた。
明るい陽に照らされた水田や森が見えてゐた。五六町ばかり行つた所で、數十軒の人家のある所があつた。小さな茶店もあつて、頭髪の眞白い老婆がゐた。俳諧師は其所へ這入つて行つた。

『お婆さん、この後の川の傍にある立派な屋敷は、どうした所だらう。』と、俳諧師は老婆の汲んでくれた缺茶碗の茶を啜りながら聞いた。

黄色なでぶでぶした老婆の頬に笑ひが見えた。『さてはお客さんは、昨夜あすこへお泊りになりましたらう。』

『泊つてどうも不思議に思つたから聞いてゐるが、どうした所だらうね。』

『別にどうした所でもありません、たゞお金持ちの家でございますよ。』と云つて、老婆は又笑つた。

この笑ひの中に何か意味のあるやうに思はれたので、俳諧師は重ねて聞いたが、老婆はそれ以上何も云はなかつた。

其所を出て又少し行くと、又一つの村落が來た。五六人の職人がゐて、箱や棒の類をこしらへて居る店があつた。俳諧師は其所へ寄つて、烟草の火を貰つた。そして烟草を喫みながら又彼の屋敷の事を聞いてみた。

職人どもは顔を見合はせて、口元で笑ひ合つた。この職人に指圖をしてゐた亭主らしい男が返辭をした。『あすこへお泊りになつたと見えますね、別にかはつた事もありませんよ。たゞお金のある人ですよ。』

俳諧師は又一つ疑惑を增しながら歩いた。そして吉備津宮の大華表のある眞金(まがね)の本村へ着いて、其所で早い晝仕度をしながら、社に參詣したが、どうも落付いた氣分になれなかつた。規模の宏大な神殿は、往古の遺風を存して神々しかつた。拜殿の西には長さ百八十間の回廊があつた。回廊の中央から西に折れて、小さな廊に沿うて行くと、御釜御殿と云ふ末社があつた。其所には神竈があつて、古い釜がかけてある。阿曾女と云ふ緋色の袴を穿いた二人の老婆が、その傍に松葉の束にしたのを置いて坐つてゐた。吉凶禍福を占つて貰ひたい者は、供米料を出すと、阿曾女の老婆が竈の下に松葉を焼き、供米を甑に入れて、御釜の蒸氣にかけてくれる。さうなると釜の湯は音を立てゝ沸騰する。その音が雷のやうに大きいと、吉で、小さいと凶であると云はれてゐる。俳諧師は何んだか怖いやうで、占をさせる氣にはなれなかつた。併し社の背後の砂丘に登つた時には、彼の大きな屋敷の婿になるとして、それが吉であるか、凶であるかを占はせてみて、吉だとするなれば、どんな素性の家で

でも好いから、婿にならうかとも思つたが、その思ふ下から氣味悪い得態の知れぬ者が頭をあげて來て、その心をにぶらしてしまつた。その砂丘は、有名な吉備の中山で、小松が飛々に生えてゐた。小松の間から見ると、兒島灣が直ぐ眼の下に展けてゐた。砂丘の麓の小さな流は、細谷川であつた。俳諧師は松の根に腰を下ろして、默々と考へ込んでゐた。

　夕方になつて俳諧師は、煙草の火を借りた家の前まで歸つて來た。其所にはもう職人も居なくなつて、亭主一人、仕事場の隣になつた見付の坐敷で、煙草を喫んでゐた。俳諧師は這入つて行つた。

『今朝煙草の火を拜借した時に、この先の川の傍にある立派な屋敷の事をお尋ねしたけれど、どうもはつきりおつしやつて下さらないやうでしたが、どうか本當の事をおつしやつて下さらないですか。』

『ではお客さんは、あすこへお泊りになつた時、婿になれつて云はれましたな。』

『その事ですよ。どうも私のやうな見ず知らずの者を婿にすると云ふに就ては、何か深い仔細がなくてはならないが、どうしたものでせう、どうか敎へて下さい。』

『それ程までに云はるるなら、お知らせしませうか、あれはこの國の穢多の頭ですよ。金銀は數の知れない程持つて居りましても、穢多の仲間をはずれる事が出來ないから、せめて娘だけは、穢多でない者に添はしてやらうと思ふて、あゝして旅人なんぞを泊めて、婿になる人を探して居る所ですよ。併し穢多とは申せ、あゝした身代の上に、娘も綺麗な好え女でありますから、何事も緣だと思つて、婿になつてやつたらどうでございます。』と、亭主は云つた。

『他の事なら又諦めやうもありますが、穢多と緣組などは思ひもよらない事です。が、これも貴君のお蔭で、素性が分つて安心いたしました。』と云つて、俳諧師は悦んだ。彼は頭の上に抑つかぶさつてゐた黑い雲がとれたやうに氣が晴々とした。

『貴君はあすこを出る時、何んと云ふて出て來ました。』

『私のやうな者でも、そんなに云つて下さるなら、何とか考へて見ませうが、兎に角、吉備津樣に參詣をしてから、歸りに寄つて更めて御返辭をしますと云つてありますが、もう二度と行くもんですか。』と、俳諧師は笑顏をした。

　亭主は頭を振つた。『貴君が幾等行かないと思ふても、承知したからには、もう人を出口出口に置いて、逃げて行かないやうな手配がしてありますよ。とても逃げられる物ぢやありませ

よ、』

俳諧師は當惑した。『どうかして逃げられないでせうか、』

『とても駄目でせう。』と、亭主も心配さうな顏をして云つた。家の内はもう薄暗くなつてゐた。

『――』と、內から年とつた女の聲で、亭主を呼んで、『善根になる事じや、どうかして援うてあげなさいよ、』

亭主は默つて考へてゐたが、何か好い考へが出たやうに、『ぢや、仕方がない。やつて見ませう。私の云ふ通りになつて、私がお呼ぶまで隱れて居りなされ、』

俳諧師は亭主の云ふまゝになつて、土足のまゝで坐敷にあがつて、橫手の戶棚の中にかくれた。

亭主はその後で、仕事場へ行つて行燈を點けて、箱にする板に鉋をかけてゐた。と、二三人の男がやつて來て、『こゝへ色の白い、若い男が來て泊つてゐやしないか、』と聞いた。

俳諧師は戶棚の中で苦しい呼吸をしながら、耳を澄まして戶外の物音を聞いてゐた。時折り級鳴るやうな人聲がしたり、路を驅けて行く足音がしたりしてゐたが、夜が更けて來ると寂然となつてしまつた。と、亭主が何か云つて戶を開けた。俳諧師が這ひ出て行くと、亭主は手にしてゐる女の着物をその上に着せて、手拭を姉樣冠りにさした『貴君は私の娘になりますよ』――

亭主は片手に棒を持ち、片手に提行燈を持つて、畑の中の小径を歩いて行つた。俳諧師はその後から縋いて行つた。十町あまりも行つた所で、二人の男が棒を突いて路のふちに立つてゐた。

『何處へ行く。』と、棒を持つた男の一人が云つた。

『母の妹が急病ぢやと云ふて來たから、行く所じや。』と、亭主は云ひ云ひして、その前を通つた。俳諧師は一寸頭をさげてから通つた。

又暫く行くと、又棒を持つた男が三人ばかり暗い中に立つてゐた。亭主は又母の妹の所へ行くと云つて、その前を通つた。家から一里ばかりも行つた所で、川の水が見えて、それに架けてある板橋もあつた。亭主は其所で足を止めた。『これが貴君の渡つて來た川の上じや、これからもう邪魔をする者がないから、安心して、お出でなされ。』

俳諧師は暗い橋の上を淋しさうに渡つて行つた。

海賊

朝起ると共に平生のやうに念佛を唱へてゐた喜八は、小いつ時もかゝつて勤めが終つたので、南無阿彌陀佛の軸を掛けた床の前を放れて、狭い勝手の長火鉢の傍へと寄つて來た。

火鉢には鐵瓶の湯が沸いてゐた。喜八はその鐵瓶をおろして、傍にある丹塗の煙草盆を引き寄せて、一服吸はうとしたが、何だか厭な氣持がするので、煙草を詰めたまゝの煙管を疊の上に投り出した。そして兩手を火の上にかざしてゐたが、體が苦しいので左の肱を猫板の上に乘せて、曇つたやうな顔をしながら何か考へ込んだ。

藝妓をしてゐる妾のお瀧と、若い抱え子とは、奥の室で寢てゐて、遲くでないと起きて來ない事になつてゐるので、喜八は下働の婆さんに飯を搆へて貰つて、一人で淋しい朝飯を濟す事になつてゐるが、その婆さんも、今朝は寢すごしたと見えて、味噌汁の味噌を播鉢でガラガラと磨り潰す音を臺所の方でさしてゐた。

厭な鈍痛を胸のまはりに感じて來たので、喜八は考へ事をそのまゝにして、又遣つて來たなと執念深い毒蛇のやうに思はれる鈍痛に憎惡の眼を向けて、片手を黃八丈の褞袍を着た胸の上にやつて、じつとそれを押へるやうにした。それは昨年の秋の末頃から時を定めずにチョイチョイ起つて來る疾患であつた。それが爲めであらうか、好きで毎日飯の度に一合位づつ飲んでゐた酒が妙に飲みたくなくなつて、その頃はもう忘れたやうに盃を持たなかつた。煙草はまだ折々喫んでみる氣になるが、それさへ吐き氣が來るので、餘り手にしなかつた。その土地に住む醫師に診てもらうと、胃痙の症だらうと云つて、藥を盛つてくれたが、飲んでみても變つた事もないので、その頃は口にしなかつた。

枠の大きな眼鏡をかけた醫師が、冷たい瀬戸物のやうな手で、胸から腹のまはりを撫で廻はした後で、『この症は直ぐ生命に係はると云ふやうな事はないが、大事な病氣だから、草津か熱海かへ行つて、溫泉に這入つて養生なさるが好い。』と云つた言葉を思ひ出した。引手茶屋の女中や藝妓などの女の患者にでれでれして、物笑ひの種になつてゐる太鼓醫師などの言葉は、その當座は馬鹿にして聞いてゐたが、その頃はなる程こんな得態の知れぬ病氣は、溫泉へでも行つて養生したら、能くなるかも分らないと思ふ事があつた。彼は又溫泉の事が浮んで來ると、よし、今晩の仕事が旨く行つたなら、その金を以て早速行かう、それは熱海の方が溫くて魚が新らしいから、熱海の方にしよう、さうして、こんな浮雲い事は、もう好い加減に切りあげやう、餘り調子に乘つてゐると、又どんな躓きが來ないとも限らないと思つた。

薄暗くなつてから磯の巖陰に寄せて行つた一艘の和船からは、二十人ばかりの者がおりた。人と一所に一挺の鶴嘴も船の中

からおろされた。誰れも聲を立てる者がなかつた。皆默々として微白い砂濱の砂をさくさくと踏んで、松原の方へあがつて行つた。そして松の下の暗い所へ行くと、一團になつて何を囁きかはしたが、やがて二つの提灯に火を燈して、行列を組み、駕籠を中にして陸の方へと行つた。

稻を刈つた跡の淋しい田圃の間を通つて、人家の中に這入り、門口に立つてゐた村の人を一人案内にして、人家の背後になつた丘の麓にある豪家の門口へ行つた。

一行の案内をして來た村の人は、門の中へ這入つて、「海賊攻め方のお役人が、一夜のお宿を頼みたいとの事でございます。」と云つた。家内の者は周章てゝ閉めてあつた木門を開け、客間の燭臺に火を入れるなど、大騒ぎをして一行を迎へた。駕籠の中にゐた相馬半左衛門と云ふ小柄な色の白い改め役は、玄關口に出迎へた主人夫婦に輕く會釋して、客間へ通つた。

半左衛門の傍には、二人の下役がゐるだけで、供廻りの者は、他の室に通されてゐた。一時ばかりもすると、御馳走の用意が出來て、酒肴を運んで來ると共に、綺麗に裝飾つた姉妹の娘が母親と一所に給仕に來た。

半左衛門をはじめ下役の者は、好い氣持になつて盃を重ねてゐた。女だちは皆伏目になつてゐて、正面に客を見なかつた。

半左衛門の右側にゐた頬一面に鬚を剃つた痕の見える眼のギロりとした下役は、平生のたしなみを忘れたやうに、片手を延べて己れの横手にゐる娘の手首を握つて、「こちらへ寄るがよい。」と云つて、引き寄せやうとした。

娘は恐れて身を縮めた。と、見た半左衛門は、そつと指を出して下役の股のあたりをつねつた。下役は不意に笑ひ出しながら娘にかけた手を放した。

半左衛門は滿々と注がれた酒を飲み下して、靜に盃を伏せながら、「もう、これでおつもりにせう、」と云つた。二人の下役も續いて盃を伏せた。

女房は二人の娘を指圖して、酒の膳部をさげて行つた。家内の者が居なくなると、半左衛門は右側の下役の方を向いて小聲で云つた。「おい、海坊主、しつかりしろよ、」海坊主と云はれた下役は、にやにや笑つて半左衛門の顏を見返した。

間もなく飯の膳部が運ばれて、それが終ると主人が出て來て、下婢を相手に次の室へ寢床を敷きはじめた。三人は客間で何か小聲で相談してゐた。

法螺貝の音が戸外の方に起つた。三人の者は眼を見合はせた。主人と下婢は寢床を敷きかけて姿を消した。と、遠くの座敷の中が騷がしくなつた。半左衛門は起ちあがつて、床の間に

置いた刀を取らうとしたが、それはもう遲かつた。七八人の捕方が次の室から飛び込んで來た。

半左衛門は脇差を拔いて、自分の方に向つて來た一人の捕方の肩先に斬りつけ、その隙に緣側の障子を蹴開いて庭におりた。二人の捕方が追つかけて來た。半左衛門は築山の背後から石塀の上へ掻きあがつて、外に出やうとしたが、屋敷の前から人家の方にかけて、其所にも此所にも松明が燃えて、人の罵り騷ぐ聲がしてゐる。

躊躇してゐると、二人の捕方が續いて塀の上へあがつて來た。半左衛門は手にした脇差で一人を斬り落としてから、塀の外へ飛びおりた。棒を突いて立つてゐた二三人の村の者は、驚いて逃げた。半左衛門はその隙に、背後の丘へ逃げあがつて、路の無い林の中を足にまかせて走つた。――喜八は海の仲間と共に、海賊改め役に化けて、赤間關の豪家を劫掠しようとした已れの姿をまじまじと見せられた。

それは、その一二年間、海の惡事に幸があつた爲に、調子に乘り過ぎての躓きであつた。それから江戸に逃げて來て七年になるが、餘り大きな仕事はしないものゝ、七年間一度も躓かずに來たと云ふのは、注意の上にも注意してやつてゐるからであるが、併し、こんな事が何時までも露はれずにゐるものでない。それに夢が惡いから、今晩の仕事を折目にして、いよいよ足を洗つて、熱海へ直ぐと出かけやうと云ふやうな事をそれからそれと考へてゐた。

『親方遲くなつて濟みません。直ぐお膳を拵へませうか、』と、婆さんが飯鉢を持つて這入つて來た。

鈍痛がまだ幾等か殘つてゐた。『少しいけないから、後にせう、』

『親方のやうに信心なさる人が、そんな病になるたア、どうしたもんですかなア、』と、婆さんは氣の毒さうに云つた。

喜八が新吉原の揚屋町の裏店へ這入つて、大坂屋と云ふ藝妓屋を始めてから、もう足かけ四年になるが、著物にも食物にも贅澤をせず、出入の者には眼をかけてやり、其所へ一泊した朝は、きつと小いつ時も念佛を唱へると云ふ所から、善人としてとり扱はれてゐた。

喜八はこの藝妓屋と、本郷の春木町にある本宅との間を往來して、秘密な仕事をやつてゐた。本宅は煙草店をやつてゐた。若し金が手に入つて女房に渡す時には、お屋敷の仲間部屋で賭博をやつて勝つたと云つた。女房も妾も、江戸へ來てから持つたもので、誰れも喜八の秘密を知らなかつた。世間に暗い二人

の女は、喜八が左の二の腕に三分幅で二條入れた黥を見て驚き切つてあるのも知らなかつた。

　喜八は大阪の惡少年として育つた者であつた。黥せられたのは、梶木町の尾崎屋藤兵衛と云ふ唐物店へ强盗が這つて、亭主の藤兵衛に傷を負はした事があつてからであつた。その嫌疑で捕へられた喜八は、肉が敗れても白狀しなかつた爲に、黥の上で大阪を重追放になつたので、播州あたりを荒してゐたが、身邊が危險になると、仲間と一所に海へ這入つたものであつた。

　瀨戸內海に碁石のやうに散ばつた島々の陰には、役人の眼がなかつた。彼等は米船、唐物船、掛取船の見さかひなく、片つ端から襲つた。大名の御用船を襲ふ時には、風のある夕暮を選んで、三四艘の小船に別れて乘つた。一艘の小船が先づ島陰を出て、御用船の艫に漕ぎつけて、水夫を相手に爭鬪を始めると、道中警固の武士が馳けつける。その時一艘の小船は、又舳に漕ぎつけて、舳の水夫を相手にして爭鬪をはじめる。すると艫に集まつてゐた武士は、又舳になだれを打つて行く。その隙に二艘の小船は左右から胴の間に漕ぎつけて、胴の間にある金箱を奪つた。御用船でそれを知つて、傳馬をおろして追つて來ると、ふいと橫帆をあげて、西に東に逃げ走つた。

　喜八はまだ火鉢に凭れてゐた。お瀧が艶かしい寢衣の上に黑繻子の半襟のかゝつた格子縞の半纏を引つかけて起きて來て、その前に向き合つて坐つた。

『御飯はもう濟んで、』

『まだだ。』

『體の具合が惡いんですか、』

『今朝は少しいけなかつたが、もう能くなつた。』

『矢張痛むんですか、』

『痛むと云ふ程でもないが、何んだか重つくるしい。』

『ぢや一つ、芝の方に胸の病に好いお地藏樣があると云ふから、行かうぢやありませんか、』

『お地藏樣も好いが、乃公の病は毎日信心してゐて起る病だから、少し體の養生もしなくちやいけないだらう、熱海あたりへ行かうと思つてゐる。』

『それは好いんですね、何時頃です、』

『二三日の中に行きたいなア、』

『本當に行くんですか、』

『本當とも、お前も一所に行くか、』

『えゝ』、お瀧は嬉しさうな顏をしたが、『妾は江の島へも行つた事もあるし、今度はお神さんを連れてつてお遣りなさい。』

『お前はどうだ。厭か……』と、喜八は、女の顏を見て笑つた。

『厭ぢやありません、』

『厭だからお神さんを連れて行けとか何んとか云ふんだらう……好いお樂みがあるでせうよ、』

『馬鹿、馬鹿、』と云つて、お瀧は喜八の右の手甲に兩手をかけて强く握つた。

お瀧は神田鎌倉町に住んでゐた浪人の娘であつた。母親と二人の生活に困ると云ふ所から、淺間しい土妓の群に落ちてゐた。ある夜、秘密の仕事に行つてゐた喜八は、かへり路で、白い手拭を冠つた若い女に袖を引かれた。それは寒い吐く息の凍つて白く見える夜であつた。路次の中の狹い我が家に客を連れ込んだ女は、行燈の陰で顏を赤くして小さくなつてゐた。喜八はその夜から女を可愛がると共に、其所を秘密の仕事の中宿にしてゐた。

『痛い、痛い、もう申しません、』と、喜八は笑つて手をひつ込めた。

『ぢや私が行きますよ、』と、お瀧が云つた。

『ぢや、あの子はどうする、』

『米八さんは、松葉家さんへ賴んでおきますよ、』

次の室で著物を著かへてゐた抱え子の米八が、あまつたれるやうに云つた『姉さん、ひどいわ、私も一所に連れて行つておくんなさいよ。』

神田佐柄木町の兩替屋村田七右衛門の家では、ある夜、賊が這入つて、家人の知らない間に、大吉小判、小吉小判、逆桐小判など云ふ家の寶として貯へてあつた小判を盜まれた。

奉行所では訴へによつて、町々の質屋兩替屋へ布告を出して、右の小判を持つて來る者があつたら、その名所を聞いた上で、早速訴へるやうにと命じた。

この時は文化四年の春であつたが、六月になつて新吉原揚屋町の質屋から大吉小判二枚を持つて來た者があると云つて、訴へ出た。

小判の出所は、揚屋町裏店の藝妓者大阪屋であつた。其所で先づ大阪屋の亭主の喜八を吉原の自身番へ呼び出して吟味する事になつた。

喜八はその日も、夜明けから胸のまはりに鈍痛を覺えるので、床の中で俯向になつて寢てゐた。自身番からの呼び出しを聞くと、靜に起きて、著物を著かへて出て行つた。お瀧と米八とが心配さうな顏をして、御神燈の下を潜つて出て行くその姿を見送つてゐた。

からおろされた。誰れも聲を立てる者がなかつた。皆默々として微白い砂濱の砂をさくさくと踏んで、松原の方へあがつて行つた。そして松の下の暗い所へ行くと、一團になつて何を囁きかはしたが、やがて二つの提灯に火を點して、行列を組み、駕籠を中にして陸の方へと行つた。

稻を刈つた跡の淋しい田圃の間を通つて、人家の中に這入り、門口に立つてゐた村の人を一人案內にして、人家の背後になつた丘の麓にある農家の門口へ行つた。

一行の案內をして來た村の人は、門の中へ這入つて、「海賊攻め方のお役人が、一夜のお宿を賴みたいとの事でございます。」と云つた。家內の者は周章てゝ閉めてあつた木門を開け、客間の燭臺に火を入れるなど、大騷ぎをして一行を迎へた。駕籠の中にゐた相馬半左衞門と云ふ小柄な色の白い改め役は、玄關口に出迎へた主人夫婦に輕く會釋して、客間へ通つた。

半左衞門の傍には、二人の下役がゐるだけで、供廻りの者は、他の室に通されてゐた。一時ばかりもすると、御馳走の用意が出來て、酒肴を運んで來ると共に、綺麗に着飾つた姉妹の娘が母親と一所に給仕に來た。

半左衞門をはじめ下役の者は、好い氣持になつて盃を重ねてゐた。女だちは皆伏目になつてゐて、正面に客を視なかつた。

半左衞門の右側にゐた頰一面に髭を剃つた痕の見える眼のギョロリとした下役は、平生のたしなみを忘れたやうに、片手を延べて己れの横手にゐる娘の手首を握つて、「こちらへ寄るがよい。」と云つて、引き寄せやうとした。

娘は恐れて身を縮めた。と、見た半左衞門は、そつと指を出して下役の股のあたりをつねつた。下役は不意に笑ひ出しながら娘にかけた手を放した。

半左衞門は滿々と注がれた酒を飲み下して、靜に盃を伏せながら、「もう、これでおつもりにせう、」と云つた。二人の下役も續いて盃を伏せた。

女房は二人の娘を指圖して、酒の膳部をさげて行つた。家內の者が居なくなると、半左衞門は右側の下役の方を向いて小聲で云つた。「おい、海坊主、しつかりしろよ、」海坊主と云はれた下役は、にやにや笑つて半左衞門の顏を見返した。

間もなく飯の膳部が運ばれて、それが終ると主人が出て來て、下婢を相手に次の室へ寢床を敷きはじめた。三人は客間で何か小聲で相談してゐた。

法螺貝の音が戸外の方に起つた。三人の者は眼を見合はせた。主人と下婢は寢床を敷きかけて姿を消した。と、遠くの座敷の中が騷がしくなつた。半左衞門は起ちあがつて、床の間に

置いた刀を取らうとしたが、それはもう遲かつた。七八人の捕方が次の室から飛び込んで來た。

半左衞門は脇差を拔いて、自分の方に向つて來た一人の捕方の肩先に斬りつけ、その隙に椽側の障子を蹴開いて庭におりた。二人の捕方が追つかけて來た。半左衞門は築山の背後から石塀の上へ搔きあがつて、外に出やうとしたが、屋敷の前から人家の方にかけて、其所にも此所にも松明が燃えて、人の罵り騷ぐ聲がしてゐる。

躊躇してゐると、二人の捕方が續いて塀の上へあがつて來た。半左衞門は手にした脇差で一人を斬り落としてから、塀の外へ飛びおりた。棒を突いて立つてゐた二三人の村の者は、驚いて逃げた。半左衞門はその隙に、背後の丘へ逃げあがつて、路の無い林の中を足にまかせて走つた。——喜八は海の仲間と共に、海賊改め役に化けて、赤間關の豪家を劫掠しようとした已れの姿をまじまじと見せられた。

それは、その一二年間、海の惡事に幸があつた爲に、調子に乘り過ぎての躓きであつた。それから江戸に逃げて來て七年になるが、餘り大きな仕事はしないものゝ、七年間一度も躓かずに來たと云ふのは、注意の上にも注意してやつてゐるからであるが、併し、こんな事が何時までも露はれずにゐるものでない。それに體が惡いから、今晩の仕事を折目にして、いよいよ足を洗つて、熱海へ直ぐと出かけやうと云ふやうな事をそれからそれと考へてゐた。

『親方遲くなつて濟みません。直ぐお膳を搆へませうか、』と、婆さんが飯鉢を持つて這入つて來た。

鈍痛がまだ幾等か殘つてゐた。『少しいけないから、後にせう、』

『親方のやうに信心なさる人が、そんな病になるたア、どうしたもんですかなア、』と、婆さんは氣の毒さうに云つた。

喜八が新吉原の揚屋町の裏店へ這入つて、大坂屋と云ふ藝妓屋を始めてから、もう足かけ四年になるが、著物にも食物にも贅澤をせず、出入の者には眼をかけてやり、其所へ一泊した朝は、きつと小いつ時も念佛を唱へると云ふ所から、善人としてとり扱はれてゐた。

喜八はこの藝妓屋と、本郷の春木町にある本宅との間を往來して、秘密な仕事をやつてゐた。本宅は煙草店をやつてゐた。若し金が手に入つて女房に渡す時には、お屋敷の仲間部屋で賭博をやつて勝つたと云つた。女房も妾も、江戸へ來てから持つたもので、誰れも喜八の秘密を知らなかつた。世間に暗い二

の女は、喜八が左の二の腕に三分幅で一條入れた黥を鏝で焼き切つてあるのも知らなかつた。

喜八は大阪の惡少年として育つた者であつた。黥せられたのは、梶木町の尾崎屋藤兵衛と云ふ唐物店へ强盗が這入つて、亭主の藤兵衛に傷を負はした事があつてからであつた。その嫌疑で捕へられた喜八は、肉が敗れても白狀しなかつた爲に、黥の上で大阪を重追放になつたので、播州あたりを荒してゐたが、身邊が危險になると、仲間と一所に海へ這入つたものであつた。

瀨戸内海に棊石のやうに散ばつた島々の陰には、役人の眼がなかつた。彼等は米船、唐物船、掛取船の見さかひなく、片つ端から襲つた。大名の御用船を襲ふ時には、風のある夕暮を選んで、三四艘の小船に別れて乘つた。一艘の小船が先づ島陰を出て、御用船の艫に漕ぎつけて、水夫を相手に爭論を始めると、道中警固の武士が馳けつける。その時一艘の小船は、又舳に漕ぎつけて、舳の水夫を相手にして爭論をはじめる。すると艫に集まつてゐた武士は、又舳になだれを打つて行く。その隙に二艘の小船は左右から胴の間に漕ぎつけて、胴の間にある金箱を奪つた。御用船でそれを知つて、傳馬をおろして追つて來ると、ふいと横帆をあげて、西に東に逃げ走つた。

喜八はまだ火鉢に凭れてゐた。お瀧が艶かしい寢衣の上に黒繻子の半襟のかゝつた格子縞の半纏を引つかけて起きて來て、その前に向き合つて坐つた。

「御飯はもう濟んで、」

「まだだ。」

『體の具合が惡いんですか、』

『今朝は少しいけなかつたが、もう能くなつた。』

『矢張痛むんですか、』

『痛むと云ふ程でもないが、何んだか重つくるしい。』

『ぢや一つ、芝の方に胸の病に好いお地藏様があると云ふから、行かうぢやありませんか、』

『お地藏様も好いが、乃公の病は毎日信心してゐて起る病だから、少し體の養生もしなくちやいけないだらう、熱海あたりへ行かうと思つてゐる。』

『それは好いんですね、何時頃です、』

『二三日の中に行きたいなア、』

『本當に行くんですか、』

『本當とも、お前も一所に行くか、』

『えゝ、』お瀧は嬉しさうな顔をしたが、『妾は江の島へも行つた事もあるし、今度はお神さんを連れてつてお遣りなさい。』

『お前はどうだ。厭か……』と、喜八は、女の顔を見て笑つた。

『厭ぢやありません、』

『厭だからお神さんを連れて行けとか何んとか云ふんだらう……好いお楽みがあるでせうよ、』

『馬鹿、馬鹿、』と云つて、お瀧は喜八の右の手甲に両手をかけて強く握つた。

お瀧は神田鎌倉町に住んでゐた浪人の娘であつた。母親と二人の生活に困ると云ふ所から、淺間しい土妓の群に落ちてゐた。ある夜、秘密の仕事に行つてゐた喜八は、かへり路で、白い手拭を冠つた若い女に袖を引かれた。それは寒い吐く息の凍つて白く見える夜であつた。路次の中の狹い我が家に客を連れ込んだ女は、行燈の陰で顔を赤くして小さくなつてゐた。喜八はその夜から女を可愛がると共に、其所を秘密の仕事の中宿にしてゐた。

『痛い、痛い、もう申しません、』と、喜八は笑つて手をひつ込めた。

『ぢや私が行きますよ、』と、お瀧が云つた。

『ぢや、あの子はどうする、』

『米八さんは、松葉家さんへ頼んでおきますよ、』

次の室で著物を著かへてゐた抱え子の米八が、あまつたれるやうに云つた『姉さん、ひどいわ、私も一所に連れて行つておくんなさいよ。』

神田佐柄木町の両替屋村田七右衛門の家では、ある夜、賊が這入つて、家人の知らない間に、大吉小判、小吉小判、逆桐小判など云ふ家の寶として貯へてあつた小判を盗まれた。

奉行所では訴へによつて、町々の質屋両替屋へ布告を出して、右の小判を持つて來る者があつたら、その名所を聞いた上で、早速訴へるやうにと命じた。

この時は文化四年の春であつたが、六月になつて新吉原揚屋町の質屋から大吉小判二枚を持つて來た者があると云つて、訴へ出た。

小判の出所は、揚屋町裏店の藝妓者大阪屋であつた。其所で先づ大阪屋の亭主の喜八を吉原の自身番へ呼び出して吟味する事になつた。

喜八はその日も、夜明けから胸のまはりに鈍痛を覺えるので、床の中で俯向になつて寢てゐた。自身番からの呼び出しを聞くと、靜に起きて、著物を著かへて出て行つた。お瀧と米八とが心配さうな顔をして、御神燈の下を潜つて出て行くその姿を見送つてゐた。

喜八が自身番にての答辯には、曖昧な所があつたので、その場で召捕となつて、吟味與力仁杉八右衛門の係りで詮義を受ける事になつた。

『確に私が盗みました。昔であつたら如何な拷問に逢ふても、白狀は致しませんが、私は昨年から膈噎の症で、とても長い生命と思はれませんから、綺麗にぶちまけませう、』と云つて、喜八は大阪からの罪惡を潔く白狀して了つて、『江戸へ來ては、一人の仲間もこしらへずに、皆一人でやりましたから、女房も妾も私を正直な男と思ふて居りません。』

其所で喜八は、入牢を仰せ付けられたが、八月十六日となつて、引廻はしの上、獄門に梟けられた。

『街談文集要』の著者は、喜八死刑の布告を左の如く掲げてある。

新吉原揚屋町小職田たき後見
大阪入墨　晩星右衛門事喜八
四十九歳

右の者遂吟味候所致盗候依而於大阪入墨重追放御仕置に相成候所御仕置を不相用入墨を消和泉國加相御大阪並播州人家へ此者頭取押込又は盗に入右の内大阪南本町尾崎屋勝兵衛宅へ脇差を以て勝兵衛へ疵付其後御當地へ罷越候ても盗不相止町家八ヶ所メリを故鄙放或は錠前捻切這入部合十餘其外銀錢古金甲州金等盗取遣捨又は所持致し殊に右體不屆の始末を押隱たき後見に相成罷在候始末不屆至極に付引廻しの上於淺草獄門申付候

右の通牧野備後守殿御差圖

盲人突きの話

「盲人突きの話』をする前に、私の知つてゐる盲人の事を話しみやう。併し話してみると云つても、別に順序のある纏つた話しでも何んでもない。只、私の師匠になる人が小石川雜司ケ谷町の盲人學校の傍にゐる爲めに、其所へ三日おきに出かけて行く私は、盲學生に就いて感じた事と見た事とが一つ二つあると云ふに過ぎない。

私が盲人學校の附近で逢ふ盲生徒は、男でも女でも、容貌のすなほな、あれで眼さへ開いてゐれば、美人であり、美少年であると云ふやうに思はれる者は一人もない。皆癩の格好から不具者に出來てゐる。これは一方から云へば、さう云ふ不具に生れて來た爲めに、盲目となつたでもあらうが、これが爲めに、視る人の眼に、醜悪な藝術品となつて映るのは否まれない。この醜悪な容貌こそ第一に盲人を不幸に導くものであると私は思

ふ。何時であつたか、何んでも初夏の明るい日であつたやうに思はれる。私は平生のやうに師匠の許へ行く路であつた。護國寺の前を通つて、雜司ケ谷の方へ歩いてゐると、路が二つに岐れて、一つは雜司ケ谷の墓地の方へ行き、一つは小さな泥溝に架けた橋を渡つて交番のある方へと行つてゐる路の岐れ目に近くなつた所で、不意に大聲で、『助けてくれ、』と叫んだ者があつた。私は殺人事件でも起つたのではあるまいかと、心をふるはしながら見ると、その附近の家からも、その聲に驚かされて出たらしい人が五六人出て來て、泥溝の中を覗きに行たつが、覗いた者は皆笑顏になつた。何事であらうかと、私も急ぎ足で行つてみると、一人の盲學生が泥塗れとなつて溝の中に突立つてゐた。

『按摩さんか、吃驚さすぢやねえか、』と、傍の豆腐屋から出て來たらしい若衆が嘲けるやうに云ふと、『それでも可哀さうだ、誰れか梯子を持つて來ておやりよ、』と菓子屋のお神さんが笑いながら云つた。

間もなく誰れかゞ梯子を持つて來てかけると、盲學生は泥溝の中に落ちてゐる自分の帽子と、杖とを手探りに探つて、それを持つて梯子を昇つて來た。

梯子を持つて來さした菓子屋のお神さんが、それを井戸の傍へ連れて行つて、着物を拔がしはじめたので、私も傍へ行つて、お神さんに手を借して、ポンプを押して水を汲んだり、盲學生の足から泥まみれの靴を脫いでやつたり、袴の泥を洗つてやつたりしたが、何んだか滑稽味を感じて悲慘なその災厄に對して、眞面目に同情してやる事が出來なかつた。これは私の性格の如何にもよるだらうが、盲人の容貌から來てゐるのは確だ。古から美人薄命と云ふ諺はあるが、薄命者は矢張り醜惡な姿の持ち主である。その盲學生は白い蠣殼のやうな眼珠が白く飛び出てゐた。

話は別になるが、盲人學校の前の通り、私は「めくら橫町」と呼んでゐるが、その通りでは、眼開きに對して驚異を感ずる事がある。それは盲人に路を讓つてやる習慣から來てゐるだらうが、向ふから來た人が、兩眼の正しい顏をあげると、「や、この人には眼があるぞ、」と思ふ。それだけ、その通りでは、盲人の勢力が強い。杖をトントンと云はして、向ふの方から二三人の盲學生が連れ立つて來るので、路のふちへ寄つてやり過さうとしてゐる、盲學生の方で路を歪めてやつて來て、『少し寄つて下さい、』と云つて、寄つてゐる上にまだ寄せやうとする。眼開き同士であつたら一喧嘩起る所だ。

ある冬の雨催の日であつた。めくら橫町に近い所を步いてゐ

ゐると、急に大粒の雨が降つて來た。私は用心の爲めに持つてゐた洋傘をさした。その時向ふから、黑い學生マントを着た盲學生が來てゐたが、みるまに、そのマントを拔いて、顏の前後もなく頭からすつぽり冠りながら、杖で路の上を叩き立てゝ走つた。私はすんでの事に、その杖で足を叩かれる所であつた。かうなると、眼明は甚以て危險千萬である。

盲人學校の附近を歩いてゐて、私が一番悲慘に思つた事は、二人の盲學生が學校から歸りに、活動寫眞へ行かうと云ふの相談を聞いた時であつた。その當時は、まだ淺草の活動が五錢で見える時であつた。『五錢だ。あの辯士は面白いぞ。』と、一人が云ふと、『たつた五錢か、行かう、かう。』と、一人が嬉しさうに云つた。二人は活動の映畫を見に行くのでなくて、辯士の話を聞きに行かうとしてゐるのであつた。

本文よりも私の話しが長くなりさうだから、私の話しは好い加減に切り上げて、いよいよ盲人の突き殺しの話しにかゝらう。

それは德川時代の話しで、文化三年から四年にかけての事である。その時分、江戸の市中では、夜になると、錐の兇器で、通りを歩いてゐる哀れな盲人を突き殺す者があつた。中には盲人ばかりでなしに、仲間、商人、乞食、僕のたぐひがあり、又近く兇器にも適でない物もあつた。

文化三年四月二十六日の夜であつた。牛込水道町の與兵衛橋の傍に小屋がけをして、按摩をやつて母を養つてゐる十七歳になる盲人があつた。その盲人は、その前月、芝の車町から出て高田畝まで延燒した火事に燒け出されて、其所へ移つて來てゐる者であつた。その晩になつて母親が急に病氣になつたので、醫師の所へ藥を買いに行つて、やつと小屋の傍まで歸つて來た所を突かれて即死した。朝になつて見ると、脇から介にかけて新らしい出刄庖丁を突き通されたまゝで倒れてゐた。その庖丁の柄の小口に百三十二文と書いた文字と、庖丁をこしらへた合の燒印とがあつた。

これと同じ晩に、牛込神樂坂上の横寺のまはりで二人ほど突かれた者があつた。隨筆「我衣」の著者曳尾庵の隣家にゐた島屋喜兵衛と云ふ商人は、翌日牛込へ用達しに行くと、横寺の横手に人だかりがしてゐるので、傍へ行つてみると、菰を張つて中へ何か圍つてあつた。傍の者に聞くと、一昨夜突かれた者だと云つた。見てゐる内に、名主と町役人が來て、菰を捲つて中を改めにかゝつた。二十四五歳の月代の延びた男が俯向になつて寢てゐたが、まだ生きてゐるのか、肩のあたりをびくびく動かしてゐた。なんでも前日入牢になつて追放せられた者だと、町

役人と一所に來てゐた厭な眼付をした男が、小聲で云つてゐるのが耳に入つた。

隨筆『街談文文集要』の著者豐芥子は、この時分、八つか九つの少年であつた。ある日、母親に伴られて神田須田町邊にあつた親類へ行つたが、昌平橋内にある伊賀屋敷の前を通つてみると、その屋敷の前の辻番の先で、昨夜突かれたらしい按摩風の若い色の白い盲人が斃れてゐた。人通りの多い場所であるから、澤山の人がそれを圍んで見てゐた。

惡人の出はじめたのは、文化三年の正月の末からであつた。正月中に突かれた者で記錄に殘つてゐる者をあげてみやう。

▲正月廿一日晩七ツ半時淺草成田町横町往還にて突れ　無宿いざり名前不知(四十歳位)

▲同廿三日夜四ツ頃湯島切通しにて突れ相果てる
下谷山崎町二丁目
盲目道心　善心　(六十一歳)

▲同日五ツ時過海賊橋上にて突疵受る
宣順　(六十八歳)

▲同廿五日夜五ツ時比淺草仁王門前馬道往還にて突れ果てる
非人體(三十八九歳)

▲同晦日夜五ツ時比同所雷門際堀外にて突れ相果てる物貰ひ
盲目人(四十歳位)

惡人は初め追剝辻强盜のやうに考へられたが、狙ふ者が主に盲人で、金などの有りさうな者でないから、別に盜みが目的でないと云ふ事が分つた。ある者は、何か心願のある者が、盲人の種を絶さうとしてゐるではないかと云つた。何しろ奇怪千萬であるから、按摩乞食はもとより、市民も恐怖にかられた。それに芝から出火した大火もあつたので、市中では自身番を明けて棒つきを出した。そして惡人の出沒するのは、闇の夜にかぎられてゐるので、室町邊では高提灯を出して、夜々張り番をした。

四月十八日になつて、鮫ヶ橋の岡つ引の手で、盲人突きの犯人と云ふ者が捕まつた。何んでもその惡人は、數日前、四谷天王の社内の普請場へ來て、別當の座敷にあつた頭巾と衣とを盜んで逃げやうとしたが、居合はせた鳶の者や石屋などの爲めに捕へられて、盜品を取りかへされた上で、許して貰つた者だと噂する者があつた。

惡人は根岸肥前守の役宅で詮義を受けた。それは傳右衛門と云ふ男で、武家屋敷を渡り歩いてゐる内に、鎗を覺えたので、生きた人間を突いてみたくなつて、夜々出て突いたと白状したが、十四人突いた内で、七人は手答へがあつたと云つた。

喜八が自身番にての答辯には、曖昧な所があつたので、その場で召捕となつて、吟味與力仁杉八右衛門の係りで詮義を受ける事になつた。

『確に私が盗みました　昔であつたら如何な拷問に逢ふても、白狀は致しませんが、私は昨年から腦膜の症で、とても長い生命と思はれませんから、綺麗にぶちまけませう、』と云つて、喜八は大阪からの罪惡を盡く白狀して了つて、『江戸へ來ては、一人の仲間もこしらへずに、皆一人でやりましたから、女房も妾も私を正直な男と思ふて居りません。』

其所で喜八は、入牢を仰せ付けられたが、八月十六日となつて、引廻はしの上、獄門に梟けられた。

『御咎文文集要』の著者は、喜八死刑の布告を左の如く掲げてある。

新吉原揚屋町平藏店たき後見

大阪入墨　晩星右衛門事喜八

四十九歳

右の者儀吟味候所致盗候依科於大阪入墨重追放御仕置に相成候所御仕置を不相用入墨を消紛同国相借大阪並播州人家へ此者頭取押込又は盗に入右の内大阪本町尼崎屋藤兵衛宅へ脇差を以て藤兵衛へ疵付其後御當地へ罷越候ても盗不相止町家八ヶ所メリを故辭放或は錠前捻切這入都合餘其外銀錢古金甲州金等盗取遣捨又は所持致し殊に右體不屆の始末を押隱たき後見に相成罷在候始末不屆至極に付引廻しの上於淺草獄門申付候

右の通牧野備後守殿御差圖

盲人突きの話

『盲人突きの話』をする前に、私の知つてゐる盲人の事を話しみやう。併し話してみると云つても、別に順序のある纏つた話しでも何んでもない。只、私の師匠になる人が小石川雜司ケ谷町の盲人學校の傍にゐる爲めに、其所へ三日おきに出かけて行く私は、盲學生に就いて感じた事と見た事とが一つ二つあると云ふに過ぎない。

私が盲人學校の附近で逢ふ盲生徒は、男でも女でも、容貌のすなほな、あれで眼さへ開いてゐれば、美人であり、美少年であると云ふやうに思はれる者は一人もない。皆顔の格好から不具者に出來てゐる。これは一方から云へば、さう云ふ不具に生れて來た爲めに、盲目となつたでもあらうが、これが爲めに、視る人の眼に、醜惡な藝術品となつて映るのは否まれない。この醜惡な容貌こそ第一に盲人を不幸に導くものであると私は思

ふ。何時であつたか、何んでも初夏の明るい日であつたやうに思はれる。私は平生のやうに師匠の許へ行く路であつた。護國寺の前を通つて、雜司ケ谷の方へ歩いてゐると、路が二つに岐れて、一つは雜司ケ谷の墓地の方へ行き、一つは小さな泥溝に架けた橋を渡つて交番のある方へと行つてゐる路の岐れ目に近くなつた所で、不意に大聲で『助けてくれ、』と叫んだ者があつた。私は殺人事件でも起つたのではあるまいかと、心をふるはしながら見ると、その附近の家からも、その聲に驚かされて出たらしい人が五六人出て來て、泥溝の中を覗きに行たつが、覗いた者は皆笑顔になつた。何事であらうかと、私も急ぎ足で行つてみると、一人の盲學生が泥塗れとなつて溝の中に突立つてゐた。

『按摩さんか、吃驚さすぢやねえか、』と、傍の豆腐屋から出て來たらしい若衆が嘲けるやうに云ふと、『それでも可哀さうだ、誰れか階子を持つて來ておやりよ、』と菓子屋のお神さんが笑いながら云つた。

間もなく誰れかゞ階子を持つて來てかけると、盲學生は泥溝の中に落ちてゐる自分の帽子と、杖とを手探りに探つて、それを持つて階子を昇つて來た。

階子を持つて來さした菓子屋のお神さんが、それを井戸の傍へ連れて行つて、着物を技がしはじめたので、私も傍へ行つて、お神さんに手を借して、ポンプを押して水を汲んだり、盲學生の足から泥まみれの靴を脫いでやつたり、袴の泥を洗つてやつたりしたが、何んだか滑稽味を感じて悲慘なその災厄に對して、眞面目に同情してやる事が出來なかつた。これは私の性情の如何にもよるだらうが、盲人の容貌から來てゐるのは確だ。古から美人薄命と云ふ語はあるが、薄命者は矢張り醜惡な姿の持ち主である。その盲學生は白い蠣殼のやうな眼珠が白く飛び出てゐた。

話は別になるが、盲人學校の前の通り、私は『めくら横町』と呼んでゐるが、その通りでは、眼開きに對して驚異を感ずる事がある。それは盲人に路を讓つてやる習慣から來てゐるだらうが、向ふから來た人が、兩眼の正しい顏をあげると、『や、この人には眼があるぞ、』と思ふ。それだけ、その通りでは、盲人の勢力が强い。杖をトントンと云はして、向ふの方から二三人の盲學生が連れ立つて來るので、路のふちへ寄つてやり過さうとしてゐる、盲學生の方で路を歪めてやつて來て、『少し寄つて下さい。』と云つて、寄つてゐる上にまた寄せやうとする。眼開き同士であつたら一喧嘩起る所だ。

ある冬の雨催の日であつた。めくら横町に近い所を歩い

ると、急に大粒の雨が降つて來た。私は用心の爲めに持つてゐた洋傘をさした。その時向ふから、黒い學生マントを著た盲學生が來てゐたが、みるまに、そのマントを拔いて、額の前後もなく頭からすつぽり冠りながら、杖で路の上を叩き立てゝ走つた 私はすんでの事に、その杖で足を叩かれる所であつた。かうなると、眼開は甚以て危險千萬である。

盲人學校の附近を歩いてゐて、私が一番悲慘に思つた事は、二人の盲學生が學校から歸りに、活動寫眞へ行かうと云ふの相談を聞いた時であつた。その當時は、まだ淺草の活動が五錢で見える時であつた。『五錢だ。あの辯士は面白いぞ、』と、一人が云ふと、『たつた五錢か、行かう、かう、』と、一人が嬉しさうに云つた。二人は活動の映畫を見に行くのでなくて、辯士の話を聞きに行かうとしてゐるのであつた。

本文よりも私の話しが長くなりさうだから、私の話しは好い加減に切り上げて、いよいよ盲人の突き殺しの話しにかゝらう。

それは舊幕時代の話しで、文化三年から四年にかけての事である。その時分、江戸の市中では、夜になると、節の兇器で、通りを歩いてゐる哀れな盲人を突き殺す者があつた。中には盲人ばかりでなしに、仲間、商人、乞食、僧のたぐひがあり、又突く兇器にも節でない物もあつた。

文化三年四月二十六日の夜であつた。牛込水道町の隆慶橋の傍に小屋がけをして、按摩をやつて母を養つてゐる十七歳になる盲人があつた。その盲人は、その前月、芝の車町から出て淺草田畝まで延燒した火事に燒け出されて、其所へ移つて來てゐる者であつた。その晩になつて母親が急に病氣になつたので、醫師の所へ藥を買いに行つて、やつと小屋の傍まで歸つて來た所を突かれて即死した。朝になつて見ると、脇から脊にかけて新らしい出刃庖丁を突き通されたまゝで倒れてゐた。その庖丁の柄の小口に百三十二文と書いた文字と、庖丁をこしらへた合の燒印とがあつた。

これと同じ晩に、牛込神樂坂上の猿寺のまはりで三人ほど突かれた者があつた。隨筆『我衣』の著者曳尾庵の隣家にゐた島屋喜兵衛と云ふ商人は、翌日牛込へ用達しに行くと、猿寺の横手に人だかりがしてゐるので、傍へ行つてみると、莚を張つて中へ何か圍つてあつた。傍の者に聞くと一昨夜突かれた者だと云つた。見てゐる内に、名主と町役人が來て、莚を捲つて中を改めにかゝつた。二十四五歳の月代の延びた男が俯向になつて寢てゐたが、まだ生きてゐるのか、肩のあたりをびくびく動かしてゐた。なんでも前日入墨になつて追放せられた者だと、町

役人と一所に來てゐた厭な眼付をした男が、小聲で云つてゐるのが耳に入つた。

隨筆『街談文文集要』の著者豐芥子は、この時分、八つか九つの少年であつた。ある日、母親に伴られて神田須田町邊にあつた親類へ行つたが、昌平橋内にある伊賀屋敷の前を通つてみると、その屋敷の前の辻番の先で、昨夜突かれたらしい按摩風の若い色の白い盲人が斃れてゐた。人通りの多い場所であるから、澤山の人がそれを圍んで見てゐた。

惡人の出はじめたのは、文化三年の正月の末からであつた。正月中に突かれた者で記錄に殘つてゐる者をあげてみやう。

▲正月廿一日晩七ツ半時淺草成田町横町往還にて突れ　無宿いざり名前不知(四十歳位)

▲同廿三日夜四ツ頃湯島切通しにて突れ相果てる

下谷山崎町二丁目

盲目道心　善心　(六十一歳)

▲同日五ツ時過海賊橋上にて突疵受る

宣順　(六十八歳)

▲同廿五日夜五ツ時比淺草仁王門前馬道往還にて突れ果てる

非人體(三十八九歳)

▲同晦日夜五ツ時比同所雷門際堀外にて突れ相果てる物貰ひ盲目人(四十歳位)

惡人は初め追剝辻强盜のやうに考へられたが、狙ふ者が主に盲人で、金などの有りさうな者でないから、別に盜みが目的でないと云ふ事が分つた。ある者は、何か心願のある者が、盲人の種を絕さうとしてゐるではないかと云つた。何しろ奇怪千萬であるから、按摩乞食はもとより、市民も恐怖にかられた。それに芝から出火した大火もあつたので、市中では自身番を明けて棒つきを出した。そして惡人の出沒するのは、闇の夜にかぎられてゐるので、室町邊では高提灯を出して、夜々張り番をした。

四月十八日になつて、鮫ヶ橋の岡つ引の手で、盲人突きの犯人と云ふ者が捕まつた。何んでもその惡人は、數日前、四谷大王の社内の普請場へ來て、別當の座敷にあつた頭巾と衣とを盜んで逃げやうとしたが、居合はせた鳶の者や石屋などの爲めに捕へられて、盜品を取りかへされた上で、許して貰つた者だと噂する者があつた。

惡人は根岸肥前守の役宅で詮議を受けた。それは[illegible]衞門と云ふ男で、武家屋敷を渡り歩いてゐる内に、鎗を覺えたので、生きた人間を突いてみたくなつて、夜々出て突いたと白状したが、十四人突いた内で、七人は手答へがあつたと云つた。

不屆者は江戸市中引廻はしの上、二十三日、品川で獄門に梟けたので、もはや亂暴な惡人も出ないだらうと思つてゐると、その夜、淺草西福寺の門前で、商人の按摩を突いた者があつた。その按摩は、旨く急所をよけてゐたので、死ぬるまでには行かなかつた。

　こんな事で一度安心した市民も、又恐怖をはじめた。それからはじめに云つた十七歳になる盲人の按摩などが突かれたが、血なまぐさい噂は年を越へてもやまなかつた。そして翌年の九月になつて、牛込の中里町の暗がりを鎗を持つて歩いてゐた五十歳餘りの男を捕へた。これは四方變祐甫と云ふ劍術の師匠あがりで、上野の常行堂の椽下に二年餘も隱れてゐた者であつた。今から思ふとその男は精神病にでもかゝつてゐた者であらう。その男は二十二ケ所で突いたと白狀した。この者は引廻はしにならない中に牢死した。

　この前後から惡人の噂も消えてしまつた。その當時の狂歌にこんなのがある。

　ー春の夜のやみはあぶなしやり梅のさきこそみへぬ人はつかるゝ

　ー月よしといへど月にはつかぬなりやみとはいへどやまぬやり沙汰

　ーやみにつき月夜につきの出ざるはやりはなしたるうなりけり

谷文晁の話（近世名人名工叢話第四）

――附 蹄齋北馬の事――

故 前田健次郎

一

谷文晁は、御承知の如く親戚も澤山御座いますし、また門人も實に一時は江戸市中に百を以て數へる程御座いましたから、それ等の人の聞き傳へ話し傳へて居ることとは、定めて今日に殘つて居るものも澤山御座いませうと存じますから、私が珍しい積りで御話致すことが、世間に疾く知られて居るといふやうな事も無いとも斷言は出來ません、その段は豫め御斷り申上げて置きます。

さて、本文に入る前に一通り私の感想を述べたいと思ひます。私は常に人から徳川三百年間に現はれた畫家の大家は誰であるかと聽かれると、古きは探幽齋、後の處で文晁、この二人が徳川家三百年間に於ける畫家の大家であると、かう答へる。何故それが大家であるかと押返して聽く人が若し有つたれば、探幽齋は實に畫家の天下を一統したと言つても宜い位で、探幽前に狩野家も數代御座いまして、永徳・山樂などの名人も出ましたが、探幽以後は是れに續く人もなく、狩野派では無くて全く探幽派になつて了つて、誰一人探幽の範圍外に出る者は無い。諸藩の畫人は假令自分は不服でも主命で、是非とも狩野家の弟子になることとであつた。またこの探幽時代は申すに及ばず、その以後とても諸家の畫人は悉く狩野家に壓されて了つた。それ位勢力を得て居つたのである。勿論探幽といふ人は實に天才の偉い人であつて、林鵞峯の選んだ碑文を見ますると、二歳の時から筆を持たせれば啼き止む、三歳位では殆んど教はつたやうに畫を描いたといふやうな事が書いて御座いますのです。

それで其の當時は永徳、山樂などゝいふ偉い人が亡くなりまして、チヨツと優れた畫人が御座いませぬ頃であつた。土佐家では、光元が将軍義輝の松永久秀に弑された時に、御小姓で討死して了つた。其跡といふものは京都に住居(すまゐ)もならなくて、て

州堺へ落ちて行つて、一代は堺で世を送り、後に土佐家中興と稱せらるゝ光起も、半生は堺に居つて修行をし、それから出掛けて來て、あの通り世間に行はれました。さういふやうに甚だ畫家が缺乏して居る時代に、かの天才と云はれた探幽が出たから、その勢力といふものは實に非常なものであつた。殊にはその時代の形勢も大に助けて偉くさせたものであると思はれる。

前にも言ふ如く、探幽は實に天才の偉い人であつて、十三歳の時に初めて家康公に駿府で御目見をし、それから江戸へ出て秀忠公に御目見をした。その時に御殿で畫を描かしめたが、牡丹花下睡猫の圖を描いた、所が山樂そつくりであると言つて、大變御賞美になりました。さう云ふ腕前を示す所から、御城中の紅葉山に東照宮の御社が出來た時に、この御社の格天井に蟠龍を描かせられた。その時が十六歳であつた。かやうに早くからして大變な才氣を現はし、技倆を人に知られたのである。だから成程一世を風靡して及ぶ者の無いやうな勢力を得たのも尤もな事である。

それから三百年近くを經まして、文晁の時代は如何かと申しますれば、京都には、位階を持つた從五位下とか從五位上とか云ふ土佐家の畫人が澤山居る。その土佐家から分れて土佐風の住吉、板屋と云ふ二家が關東に居る。狩野家は代々法印法眼の家の宗家が三軒御座いまして、それから分れた者も幾軒かありました。それで探幽の餘勢で以て、殆んど天下の畫權を掌握して居る時代で御座いました。

加之、當時長崎へは盛んに支那畫が輸入せられ、また彼地の畫家も段々參るといふ有樣でしたから、それが爲め長崎の通詞の中に鑑畫者と言つて畫の鑑定をする役人が出來ました。さういふ譯で御座いますから、態々長崎へ漢畫の修行に行く人が幾らもありました。かの坊さんの逸然などが先きで、それから河村若元などゝ云ふ漢畫風を描く人が長崎に多く居て、そのまた流派を承けた人も彼方此方に澤山居ました。その外に南畫風を創めた彭百川、柳里恭などゝ云ふ先輩が御座いました。また京都では、應擧とか吳春とか云ふ人々が出て、四條圓山の一派を開きました。

それで、元祿以後泰平が打ち續いて文化は益々隆盛に向ひ、特に畫界は前述の如く、各流派が一時に蹶起してその旗幟を顯へし、所謂群雄割據とも云ふべき時代に當りまして、奮戰力鬪の結果、アレ丈けの大名を成し、またそれ丈けの作物を世の中に遺したといふ所の文晁の苦心忍耐、その邊の事は探幽よりモウ一段偉かつたらうと私は考へます。

二

その修行時代の事を申しますとナカ〳〵多く御座いませうが、第一に文晁と云ふ人は氣分が餘程確乎として居て、業を執ることの上に於て如何にも堅實であつた。是は畢竟學問の力が幾分か加はつて居るためで、それは何が基になつたかと申しますると、文晁の祖父に當る人が偉い人だ、多くは此人の感化を受けて居ると思ひます。是は江州大津の代官手代といふ役を勤めた者で、舊幕府の小役人の一向身分の無いものでありますけれども、代々代官所に勤めて居つたのである。その人は谷傳右衛門文教と云つて、御勘定奉行の下に在つては、誰もこの傳右衛門を知らない者は無い位の通り者であつて、ナカ〳〵學問が出來た。

それでこの谷傳右衛門は、悉く民政の事に通じて居つて、江州の御代官はいふに及ばず、畿內近國の代官に任命せられて行く人は、誰れも先づ大津へ行つて傳右衛門の處を訪ひ、その說を聽いて參考にするといふ有樣でありました。この傳右衛門の著述に『田園類說』と題して、地方の事を色々調査して書いた本が二冊、それに附錄が四卷ある。また代官といふ者は訴訟を聽かなければならぬが、殊に大津の代官は大津の町に役所があつて、大津の町奉行を兼帶して居ります。それ故、さういふ必要があつたのでせうか、『公事便知』と云つて訟を聽くに必ず知らなければならぬ廉々を書いた本が二冊あります。それから『地方一樣記』といふ本があつて、都合十何冊かある。さういふ著述は皆寫本で傳はつて居るので、江戸の譜代屋敷には悉く謄寫して備へてありました。傳右衛門は、かやうな優れた斯道の大才の人であるゆゑ、地方の事に就ては功績が御座いまして、その都度々々褒美を貰つたことが三度程あります。

所で、御三家の一なる田安家では、その以前から大變御勝手向が惡くて大に困つた。そこで御館の方で借財をする。それから內々勘定奉行の方へ厄介になつて、『どうも御館も御困難の時である、どうか是が仕法を立てたい、取直しをしたいが、さういふ人物が迚も御館中に見渡した處が無い、何か御考があつて然るべき人を御附け下さるといふ事になつたら誠に幸ひである』といふ御話が出た。そこで色々上でも評議があつた結果、『谷傳右衛門をやるより外に仕方はあるまい』、かう云ふ事で、身分は輕いが谷傳右衛門は御目見以上の格で、百俵といふ高を貰ふて田安家の人となつた。然るに今日までこの傳右衛門といふ人が、さう云ふ偉い人であつて、文晁がその孫に當るといふ事を誰一人言つた者が無いとは實に不思議の事と思ひます。

傳右衛門の悴を麓谷と申します、この人の事は少しは世

知つて居る人がある。籠谷といふのは下谷の二長町に住つて居ましたから、即ち上野の籠の下谷といふことで、籠谷といふ名を附けた。この人は山本北山などの友人で、學問は漢學に能く出來て、詩人でありました。それで親の好んで研究した筋とはスッカリ違つて居た所から、錢穀の事に與かることは甚だ嫌ひで、今まで親の勤めた勝手方の勘定奉行筋の事はまるで無頓着で、話を聞くのも嫌だといふ位の人である。それがために、唯々親の祿を貰つて家を繼いで居る丈けに止つて、この籠谷は殆んど不勤の者も同樣で、一向何んとも上の方の役には立たなかつた。唯々民間で詩人といふのを以て人に用ゐられて、隨分詩を賴み、書を賴み、物を書いて貰ふ人は澤山あつた、この籠谷の悴が即ち文晁であります。

三

文晁は幼少から父籠谷の住つて居た下谷の二長町で成長ました。直き近邊のことで御座いますから、加藤文麗の門に入つて畫を描き始めたのが十一二歳頃の事である。文麗と云ふのは狩野派の畫家であつて、大洲加藤の次男と云ひ六男とも申します。兎に角大名の子であるが、同姓の別家へ養子に行つた人であります。その人の弟子となつて文朝と云つた。されど後にアヽなる人の事でありますから、かの素人離れのしない狩野家、殊に御大名藝の文麗の下に長く居る氣遣ひはない。初めから彼れ是れと始終心配をして、世間の評判も聞き、また自分で見て幾らか信ずる所のある畫家の所へは、何處でも構はずに出掛けて行つて、色々畫論を聞き、また門人同樣になつて描方の指南をも受けた。

就中一番能く人の知つて居ることは、木芙蓉即ち鈴木芙蓉の處へ弟子に入つて、專ら山水を稽古した事である。世間の人は事に依ると、芙蓉を文晁の門人だといふ風に見て居る人もある。が全くさうで無い、芙蓉の處へ行つたのである。その時分に芙蓉といふ者はナカナカ盛んで、會日には門人が各々淨書を持つて來て直しを乞ふことである。然るに一生懸命になつて、誰も一枚やつとこさと提供する位だのに、文晁ばかりは三枚も五枚も一度に描いて持つて來る。それで門人達は何れも、『到底あの人の根氣には叶はぬ、我々は餘程骨を折つて稽古する積りだけれども、アヽは迚も及ばない事である、文晁は行々は大家になるだらう、我々はどうしてもあの根氣には及ばない』と言つたといふ事であるが、果して後にあの通りの大家になつた。

それからまた不思議な話は、その頃櫻井山興と云ふ雪舟派の畫家があつた。是れが餘程變り者で、水戸出の人で御座いました。江戸橋の橋側にお堂のやうなものを建てゝゐて、そこで繪

書に關する講釋をする。天氣さへ好ければ毎日出掛けてやる。假令自分の門人で無くとも、誰でも來て討論をしたいと思ふ者は討論をするが宜しい、また揮毫をするならば批評もしてやらうといふ風である。一段高い處へ座を構へて、紫の道服を着け、袴のやうな腰衣を穿いて、講釋をするのが常である。

その娘の櫻井秋山、これが極めて醜婦であつたが、常にかいどり姿で出る。ある時『己の亭主にする者は日本中には無い』といふことを廣言した。さうしたら、後の方で『お前を女房にするやうな男は何處を捜しても無い』と言つた者があるといふ位、餘程の醜婦であつた。然し是れもナカ／＼偉い奴で、相當に畫も描き、また親の畫論を書いて出版したことがあります。今日では至つて少い本では御座いますが、偶には見受けることがあります。

この櫻井山興と云ふ人は、號を雪館と申しました。伊勢の寂照寺の月僊といふ高名な僧も、增上寺の學寮に居つた時に、雪館に就いて頻りに畫を學んだ。それで雪館の門人中で名の顯はれて居るのは、今の伊勢の月僊、それから淺草の誓願寺の住職となつた鸞山といふ僧がある。この鸞山は誓願寺の方は僅の間で亡くなりましたが、畫は熱心に學んだもので、增上寺に全紙に描いた龍の圖がある、能く雪舟の筆意をあらはしてあります。それが世の中に現はれて居る門人である。此の如く一時はその名を鳴した者で、チヨツと江戸市中に二百人も門人があつた。

ある時に、文晁が雪館の處へ、その說を聽きに行つた。その際半截に竹を描いて持參し、『どうか御覧下さいまし、御批評を願ひたうございます』といふた。さうした所が、其處へ掛けて、それを熟々視て、『どうも誠に感服です、どうしても梅道人とか、東坡とか立派な支那の畫人の法を能く習ひなすつて描かれたものと見へる、感服だ、まだ御齒も御若い事であるから、撓まず修行をなさつたら、立派な畫人になれませう』と、大變に褒めた。その時に『此處へ御出でなさる方で、貴所のやうに褒められた方は御座いませぬ、誠にどうも御名譽な事で御座います』と言つて、例の娘が文晁に挨拶をした。餘り嬉しくも無かつたらうけれども、そんな事を言はれたこともある。それは文晁が親しくその事實を或人に語つたといふ事が書物に載つて居る。その位にそこら中を叩き廻して、何んな處へでも首を突込んで修行をしたといふのは、ナカ／＼一通りならぬ勉强であつたらうと想はれます。この一例を見ても文晁が他日大名を成すに至つたのは、たゞに天才のみでなく、奮勵苦學の結果成效をしたのであるといふ事が分ります。

四

文晁の住つて居た二長町の家といふのは、今の生駒の金刀比羅の門前であつて、元と小さかつた家を改築して、長屋門の總二階といふ立派な構造であつた。その家を改築することになつた時分には、實に大きく云へば門前市を成すといふやうな事で、朝から人が詰め掛けて、臺所は殆んど料理茶屋の臺所のやうに、始終料理人が這入つて居つた。朝から來る人に酒を出すといふやうな事でごた〳〵して居る。また出入の藝者などがあつて、種々の人間が來るので、朝からその人々の笑聲がする。近所でも大變な御客だといふ事が知れる程であつた。

文晁の宅から一軒置いて隣りの、同じ側で、小藤堂と稱へる伊勢の津の藤堂の分家、即ち久井の藤堂の家來の次男で、その姓名は中島雋太郎、號を一凰と稱する畫人がありましたが、描いたものは一寸見られない事もないが、餘りに世間に聞えない人であります。所がその一凰の女房が或時、『どうも不思議な事があるもので、お隣の先生の處は始終御客の絶える間が無い、御客が絶えたかと思ふと、先生は何處かの御邸へ聘ばれるとかいふので外へ行く、家にさへ居られゝば、朝から晩まで御客が引續きである、どうも大變に盛んな事であるが、ソレ程畫が上手なんでせうか。また宅へは何時がいつでも門を潜つて畫を頼みに來た人が無い、貴所はその中に田舍へ御出掛になる、宅の門を出這入る者はとう〳〵私より外に無いといふ位、どうも情けない話で、同じ畫人でもかうも違ふものでせうか』と怨みがましく夫の一凰に話をした。

さうしたら、一凰が言ふには、『イヤそんな氣を落すものぢや無い、生きて居る內にあんなにどん〳〵盛んな者は死んで見ろ、それはパツタリ火の消へたやうなものだ。皆んな何もその實、畫を賞玩する者でも無ければ何んでも無い、忘れられて了ふものだ。死んで了はなければ本當の價値と云ふものは分るもので無い。生きて居る內にどんなに賑かだつて、そんな事を氣にして彼れ是れいふ奴があるものか。』から言つた。さうしたらその女房が『貴所は何時頃御亡りになりますか』と言つたといふ話がある。それ位に文晁はナカ〳〵盛んであつた。

また偉いことは、御承知の如く文晁には『名山圖會』『畫學大全』、などゝいふ著書がある。それから『本朝畫纂』といふは、薄い物ながら彼れ是れ三十冊もあります。その他珍しいと思つたものは、自ら買つてそれを版にし、或ひは人に遣つた。かの實例の十六羅漢の刷物は、今以て稀に殘つて居ります。その他古い佛像佛畫のやうな筋の物は何んでも集めて、それが皆畫の材料になる。さう云ふ心掛の篤い人であつたのに、今の通り大

變な繁昌でありますから、實は他から見ると殆んど畫を描く間は無からうと思はれる位であつた。それで文晁の精力といふものは實に絕倫であつたといふ事が窺ひ知らるゝのであります。

五

それで前申しました如く、江戶には百を以て數へる程の門弟もありますけれども、助手として本當に幾らか文晁の手助けになるものがない。悴などはありますが、銘々に自分の研究もあるから、是れはまだ助手などには使はない。そこで見る所があつたものと見えて、當時浮世繪畫家として知られたる葛飾北齋の門人蹄齋北馬と云ふ者を自宅へ招いて、『さてお前さんを御招きしたのは外の事でもない、私の手助をして御貰ひ申したい、片腕になつて御貰ひ申したい。それで今まで北齋先生の描かれた畫本、草双紙、その他の物を熟々視る所が、ナカ〳〵どうも着物の模樣、景色、風俗等の事は行渡つて最好く出來て居る、聞けばその細かなる處は大概お前さんが御描きなさるのだといふが、實際さうですか』と尋ねると、『さうです、實はモウ大概地本や何かは、私も好きですから能く存じて居ります、先生が怠けて急に出版の間が缺けさうな時にはやつて呉れといふやうな事で、まるつ切り私が描いたこともあります。けれども、それで宜いと師匠が申しますから、それで濟み來つて居ります。全く細かな模樣や景色の微細な處は、私が大概受持つてやつて居るのであります』。『それはどうも感服至極な事だ、私はお前さんがア、云ふ精密なるものを描くといふ事には誠に感服をした。それに付て急に御賴み申したい事があるが、どうだ私の處へ來て、打込んで私の片腕になつて少し助けて貰ひたいと思ふがどうです。』

文晁は更に言葉を更めて、『殊に私がさう御賴み申すからには、打明けて申すけれども、北齋先生といふ人も偉い人だ、ナカ〳〵どうも腕前に於ては偉い所がある。けれでもア、云ふ境涯で、積まり浮世繪師といふ中以下の人を相手にするやうな仕事をして居た日には、迚も名を高く揚げるとは出來ない。私などはどうせ好くも出來ないけれども諸大名へも出入をし、今日幸ひに是れまで漕ぎ付けて居る。兎に角畫と云ふものは高尚な仕事だから、成るべく身分の高い人に知られるに如くはない。アレ丈けの腕を持つて居ながら、北齋先生が大名に呼ばれたといふ事もなければ、大名から依賴を受けたといふ事も無いといふのは如何にも殘念な事である。お前さんも一つ私の片腕になつて遣つて呉れゝば、私がどんなにも骨を折るから、一つ私の方の仕事を受持つて遣つて呉れないか、さうすれば、お前さん

の名前も高い所まで弘まるやうな趣向にして上げやうと思ふがどうだ』と段々と說いた。

すると北馬はつく〴〵其言を聞いて居つたが、『私は山手の同心の子で、有阪五郎八と申すのが通名であります。同心の勤めが嫌であります から、弟に早く世を讓つて只今は隱居の身であります。然しながら弟に喰して貰ふといふことは殘念でありますから、弟の世話にならず、早くその厄介を逭れて、幾らか弟を助けてやるといふ事になりたいと思ひますが、それに就て私は嗜きで畫を少しばかり習つて居ります、それは繪本や何かを見て寫したりして覺へて置いた處より、その道からして少しも早く錢の取れるのは浮世繪に限ると考へましたから、北齋先生の處へ參りました。所が幸ひにそんなに何も多年の勉强といふ譯では御座いませぬけれども、見出しに預つて色々懇ろに敎へて下さつた恩師であります。それで今日では御承知の如く北齋先生の片腕になつて、幾らか助けて居ります。が、あの方も面白い人で、自分は本當に着る物も喰べる物も不十分であつても、私には段々と報酬や何か呉れます。他から畫料を持つて來ると封目も切らないで『これを持つて行きな』と言つて私に呉れます。さう云ふ譯で、私は弟の家政を助け、また一身の上にも何不足ない事に今日はなつて居ります。是れは全く師匠の御蔭であります。先生の御說は誠に御尤で、有難い譯で御座いますが、私が北齋の處へ行つたのは右の通りの次第ですから、今日北齋を捨るといふ事はどうしても出來ませぬから、私の了簡で貴所の仰やるやうになつて、御用を助けることは出來兼ねます。然し御尤な事ではあり、私も先生の御高名は承知して居りますから、貴所から、師匠へ御賴みになつて、師匠が許すといふ事で御座いましたら。御手助を致しませう』と答へた。文晁、『イヤそれは容易な事である、マア承知されるか承知されないか知らないが、私が十分に賴んで上げやうから、若し師匠が承知されたら來て下さい』。かう約束をして別れた。

六

それから北齋の所へ文晁から、今度蹄齋北馬を貸して貰ひたい、實は貴所の用を缺いて來いとは云はない、貴所の方の用は今まで通りして、その餘暇を以て私の方の手助をして貰ひたい、どうぞ聽屆けて呉れるやうにと丁寧に北齋の處へ賴みにやつた。

さうした處が、北齋が北馬に向ひ『私へかう云ふ手紙が來たが、お前へ依賴の話があつたか』と申しますと、『それは御座いましたが、私は先生の御許しが無ければ行くことは出來ませぬと斷はりました』。『それは感心なことだ、イヤそんなに何も二

百六十日、私の婆に用が有る譯では無いから、此方の用さへやつて貰へば、その他は文晁先生の處へ行つても宜しい、私の方から承諾の返事をやるから、お前も其氣になつて先生の處へ行つて手助をして上げるが宜しい」から北齋が許したから、『それならば彼方へも參る事に致しませう』と言つて、それからして文晁の處へも始終出這入ることになつた。

さうした處が、文晁が言ふには、『お前は四谷からして小梅まで通ふ、(當時北齋は小梅に住つて居た。)時々向ふへ泊り込んで歸るにしても、この遠い處を通ふのは大儀な話である、宅の近所で家を捜して上げやう、さうすれば私の方でも朝に晩に何か差圖するに都合が好い、お前もまた小梅へ通ふに半分は道が近くなるから……』といふので、同じ二長町の裏屋といふやうな處ではあるけれども、一軒延の家に北馬を入れて、臺所道具から何から萬端文晁の方でスツカリ買調へ、女中一人附けて呉れた。その好意に感じて北馬も一生懸命に文晁の用を達さうと云ふ氣に成つた。

その時分に月切りで來年の何時とか、御大名の御婚禮の御用を吩付かつた。それは極めて緻密な源氏繪で、本間の大屛風に源氏五十四帖を悉く描くといふ譯なんです。ナカ〱緻密な大作である。『この忙しい中で遣り切れないから、大概私は圖の考もあるし下繪は如何出來る、大略は私が描くが、この衣裳から裝束の模樣さう云ふやうなものは私が指圖をするから一つ遣つて貰ひたい、何しろ大物であるのと、先きの日が迫つて居るから、是非とも身向き遣つて貰ひたい』。『宜しう御座います』と受合ひまして、それからその模樣裝束から几帳の模樣などに嘘があつちや不可いから悉く形を描きまして、どう致しませうと云ふ事を朝に晩に文晁の處へ相談に來る、その時に粉本を貸してやつて、『此處は是れにして呉れ、其處は是れにして呉れ』といふやうに指圖して賴んで置きました。

ある夕方文晁が、同町で裏隣位になつて居る宗對馬守の邸へ席畫で聘ばれた。その歸りに近所ではあり、存外早く用が濟んだものだから、迎への人も呼ばず一人でポツ〱對州侯の邸から三味線堀に出で、それから二長町へ曲つて來る。一つ北馬は何をして居るか、どんな有樣であるか行つて見やうと、から云うので、夏の夕方であつたが、案內もせずに突然北馬の宅へ這入り込んだ。

すると云ふと、北馬は大肌脫ぎて蠟燭を使つて、左の手でせつせと描いて居る。それを見て『ヤアお前は左利か』と文晁が言つた。『ヘエ』と言つて北馬は酷く恐縮したやうな體で、早々に肌を入れ、『さて、どうも唐突に御出でが御座いましたので、飛

んだ處を御覽に入れて甚だ相濟みませぬ』。『イヤそんなに何も謝るには及ばない、一體お前本當に左利なのかい』と文晁が聞くと、『イエ左利ぢや御座いませぬ、先頃も御話致しました通り、私は大變に困窮の中に北齋の處へ參りまして、どうやらかうやう困らない迄に今日になりましたので御座いますから、實は右の手は北齋に賣つて了つたやうなものであります。所が先頃懇々と御賴みがあり、師匠も承知致して、私は先生の御厄介になる事になりました。そこで左の手は先生に捧げる覺悟、かう云ふ事情で、先生の御用は實は左手で描いて居ります。始の內は大變やり惡うございましたが、この頃は一向不自由を感じませぬで描けるやうになりました。只今は飛んだ處を御覽に入れて甚だ相濟みませぬ』。

文晁はこれを聞いて大變感服した。『ア、奇特な志である、私の用は決して右の手で描くには及ばない十分左の手で澤山だ。私は今まで長い間お前の描いた物を見たけれども、左の手で描いたらうとは少しも思はぬ、實にどうも器用なものである、能くも熟練したものだ、是れで初めて事が解つた。然しながら第一その志が誠に感服である、これから先も決して右の手を使ふには及ばぬ、私の爲めには左を使ひなさい』と言つて別れてから、一層北馬に目を掛けて大切に扱つた。

七

それから今一つ感服な事には右述べたやうな事が大層文晁の頭に浸み込んだものと見へて、ある日北馬の來た時に、二尺幅の絹に手厚い謝物を添へて『何時でも宜い決して私は急ぎはしないから、之れを北齋先生の處へ持つて行つて全身龍を描いて貰ひたい、これは甚だ輕微だけれども是れ丈けの御挨拶をするから、御氣に向いた時に御揮毫を賴んでお呉れ』と言つて、北馬に持たしてやつた。すると『誠に御鄭重な御挨拶で恐れ入ります、氣分の好い時に認めますから、暫時御猶豫を願ひます』といふ返答があつた。その中に龍の畫が出來て來る、早速出入の經師屋へやつて立派に表裝させ、箱も拵へ、それを京都へ行く時分に持つて出掛けて行つた。

さて宿屋へ着くと、自分の部屋の床に前から掛かつて居る掛物を取外づして了つて、右の北齋の描いた龍の掛物を掛けて、さうして頻りに視て居る。さうすると訪問の來客が必らず『是れは誰の畫で御座います』と聞く。そこで文晁が『是れは江戸で今ま有名な葛飾北齋と云ふ人の描いたものだ。一體この先生は浮世繪といふもので店を出して居らるゝから、一向人が何んとも言はないけれども、是れ程の腕といふものはナカ〳〵容易なもので無い、實に感服なものであるから、私は特に賴んで描いて貰

つたゞから云ふやうに見て求める物を描く人は滅多に居ない、ユツクリ、視やうと思つて今度の道中に持つて來た、お前さん達もよく覺て置きなさい』と、何處へ行つても、行つた先き／＼で、さう云ふ具合にやつて行つたのです。

さうすると、『文晁先生とも有るべき人がそれ程感服するものなれば』と云ふやうな譯で、今まで繪本や北齋漫畫や何かで僅にその名前丈けを知つて居る人が、俄に北齋を尋ねて來るといふ次第で、その龍の畫で以て北齋の偉い腕前であるといふ事を世間の人に知らしめたのは、全く文晁の好意に出たものである。後年北齋が名古屋へ行つて大達磨を描いたとか、京都で何うだとか云はれたのも、文晁が先觸れをしてあつた結果、大變に人の用ゐが宜しく、多くの人が大層信じたといふ譯で、是れは北齋の氣が寛くて北馬を心持よく讓つて呉れたのに、暗に報ゆる爲めの文晁の仕事だと見へる、誠に畫壇の佳話として千歳に傳ふべき事實であると思ひます。

この蹄齋北馬も、文晁歿してから後三年程遲れて二長町の家に歿しました。文晁が死んでから初て書畫會や何かへ出て、頻に左手で描いて人を驚かしたが、それ迄は決して左の手で描くことは人前ではやらない。それで右左どちらも行くからと云ふので曲書をした、達者な人だから紙を兩方に置いて、右と左と兩方一時に描くといふやうなことをして一寸世人を驚かしたことがあります。それが文晁歿後の事であるといふのが、また一つの感服すべきことであります。さう云ふやうな事は、ナカ／＼普通の人の出來ぬ處であつて、畫家の操行として最も賞賛すべき事であらうと存じます。

八

これから文晁と樂翁侯との關係に就て少しくお話致しませう。文晁と云ふ人は、たゞに繪畫のみならず、書文詩共に兼ね能くし、兎に角學問の人であり、殊に田安家に取つては、その先代の傳右衞門の御蔭で、大に御家の身上を立直した所の大功ある家である。その孫で優れて物の能く出來たと云ふ處から、樂翁侯が引立てられたのであつて、決して一个の浪人たる畫人を物好きで引上げたといふ次第ではありません。それに田安家の方では、文晁を樂翁侯へ御附けになつて、御手當も田安家から下されて居つた。それで樂翁侯が御隱居なされ、御役御免になるといふ時に、モウさう／＼は御用も無いと云ふ事で、田安家へ文晁を御返しになつたが、矢張り元と／＼通り身分も變らず、奧ノ番頭といふもので、百五十俵といふ高で、別に御手當が有るといふ事で終つたのであります。

それで樂翁侯の御内意は有つたらうけれども、表向き田安の

お館からして附人になつて行つたのである、だから樂翁侯が單に物好きで引寄せたと云ふ意味でも無い。これ等はその頃の事情を知らない後の人の考からして、唯々其處らに轉がつて居る畫人を引上げて大變に世話をしたものと、かうばかり臆斷して居たものと見へる。現に重野博士の選に成れる文晁の碑文にも、文晁と田安家との關係に就ては何等敍述する事もなく、矢張り樂翁侯が緣故なき一畫人たる文晁を特に拔擢したやうに書かれてあるのは、實に遺憾千萬である。

その當時の田安公は、從一位宗武卿といふ大變な學者であつて、荷田春滿などを御使ひになり、後に加茂眞淵をも御用ゐになつて、講釋なども御聽きになつたといふやうな優れた御方である。この御方の御子が卽ち樂翁侯。さう云ふ次第であるから、この樂翁侯は公方樣――將軍家にもなられる御身分であつたのだけれども、無理にア、云ふ低い處へ養子にやられて了つたのは、何んでもその時分の老中の政略と見へます。然しながら、さう云ふ御人物であつたから、若い頃からナカ〳〵政治上には著しき功を顯はされたこともある。

松平家には樂翁公一代の事を書いた『感德錄』といふものが十六冊もあります、色々の事が書いてある。御役中海防に就て房總地方を步かれた時分にも、文晁を供に連れて海岸の見取圖や何かを書かせられたものが、『公餘探勝』といふものであります。また築地に樂翁侯の下屋敷がありました。潮入の大層廣い池があつて良い庭であつた。是は記文を樂翁侯が書かれて『浴恩園記』といふものがある、その御庭の景色を文晁が描いて居る。それからまた白河へ御下りになる時にも文晁を供に御連れになつて、奧州街道の名所々々を寫したものも文晁の筆で、是れは今ま久松家に在ります。誠に感服することは、『公餘探勝』といふ房總地方の見取圖を見ますると、洋畫を描く人が、鉛筆で眞景の見取圖(スケッチ)を描いたやうな行方であります、山の陰日向なども描分けてある、極くザツとした墨畫一とほりの物でありますけれども、非常に好く描いてあります。

それから石山寺の緣起といふものが、元祿の頃、一卷缺けて居つたのを飛鳥井雅章卿が詞書丈け書いて、畫は補ふつもりであつて、出來ないで了つたのを、樂翁侯が文晁に御命じになつた。この畫の一部分は『新選畫鑑』に載つて居ります。それは明治二十年の繪畫共進會に、參考品として石山寺から出品になつたのを複製したものでありますが、チョツと見た處ではどうしても古土佐の光長といふやうな風であります。さうかと云つて、之が眞似をしたのでは無い、人物の格好でも面貌でも皆持前の筆意で描いてあります。それで古人の偉い有名な人の描い

てある巻物の中へ交つて寸毫も見劣りがしないのみならず、決して木に竹を繼いだものと見へないやうに描いてある。その力は偉いものであります。

それでこの圖を描く時も、原圖は大切な品であるが爲めに、此方へ持つて參るといふ事は六ツかしい、文晁は原畫と見較べる爲めに態々石山に逗留して居つて描いた。追々寒い時節になるからと云つて、夜具蒲團を拵へて樂翁侯から御送りになつたやうな事もあります。こんな御世話をなさつた事も一通りならぬのでありますが、これに酬ゆる筆先の力と云ふものもナカ〳〵能く現はれたものであの通りの物を殘して居る。

既に二十年の共進會の時にも、その補缺の卷が東京に參つた時に唯一人之を文晁の筆と見る者は無かつたが、只一人、文晁の門人で、上野の山下車坂町邊に野村文紹といふ人が居りましたが、その人ばかりは、是れは師匠の描いた物に違ひございませぬと申したと云ふ事でございます。なほ揮毫の事に就て色々聞き及んだことも澤山ありますが、そんなことを一々御話した日には果しが御座いませんから、先づ此等で切上げて置きませう。

九

それから最後に、鑑定上に關係の有る事で御座いますから申しますが、色々の書物に文晁が死んだのは、天保十二年丑とこなつて居るのが普通である、偶には本當の通りに天保十一年十二月の十四日といふ事に書いてあるのもありますけれども、どちらかといふと十二年になつて居るのが多い、然し實際は十一年の十二月十四日に死んで居る。それは初め部屋住から勤に出る時に一つ先きを越して居る、即ち十四歳の時に十五歳と云つて部屋住番入りをした、から云ふ事であります。

それから家督相續は、御承知の通り悴が先きに死んで了ふといふと、後に彼れ是れ紛擾も御座いました、旁々で、死んだ年ではなくて、年を越して表向にしたものであります。それは田安家へ出した勤仕書付といふものがあつて、是れは舊幕時代には家督を願はうと云ふ前に、親の勤勞といふものが多ければ、それに隨つて祿をその儘に家督相續が出來る譯であります、それが少ければ祿を減らされることもある。そこで勤仕書付といふものを出した。その書付に八十歳と書いてありまして、その名は谷樂山といふ事になつた居る。この樂山の名に就て御話致しますが、樂山といふ名前は文晁存生中の名前では無い。何の書籍を御覽になつても、その別號は無二齋、踸叟、畫學齋、寫山樓、文阿彌と云ふやうに樣々な名前は有るが、樂山といふ名は一つも無い。殊に是れが通稱になつて居る、谷樂山本年八十

歳。本當は七十八で亡くなつて居りますが、それを八十歳とした。それで中はスッカリその年代に合せて、「本年まで六十五年相勤申候、右之通り御座候」といふので、谷樂山とある。

元來文晁と云ふのは雅名であるけれども、それを通稱にして居つた。その通稱を何故また樂山と改めたかと云ふと、文晁歿してから六十幾日目に家齊公が薨去になつて、その諡を文恭院となされた。これに依つて、文の字を避けなければならぬので樂山とした、無論當人は知らない事に相違ない。隨つて當人親ら樂山と書いた物は一つも無い。若し生前樂山と云つた事があれば、マア手紙や何か極く打解けた人の處へやる物などに樂山と書いた物が有りさうに思ひますけれども、實際決して樂山といふことは書かぬ、また書籍にも樂山と書いたものは無い。然るにある人の話に、近來文晁の晩年の作品と稱するものに往々樂山の印を捺したものが目に觸れる、中には樂山叟といふ立派な印のあるのも見へるさうだが、これ等は無論鑑定上何等の價値もない、贋作物であつて、その書の善惡を評議立する迄もない事で、樂山の名の由來を知らぬ者が、文晁晩年の別號とでも誤認して、かかる贋作を思ひ立つた事であらう、實に一笑に附すべき事である。

葡萄棚

永井荷風

淺草公園の矢場銘酒屋のたぐひ近頃にいたりて大方取拂はれし由聞きつたへて誰なりしか好事の人の仔細らしく言ひけるは、かゝるいぶせき處のさまこそ忘れやらぬ中書にも文にもなして寫し置くべきなれ。後に至らば天明時代の崑場本とも相並びて風俗研究家の好資料ともなるべきにと。この言或は然らん。かの唐人孫棨が北里志また崔令欽が敎坊記の如きいづれか才人一時の戯著ならざらんや。然るに長く傳へて今日猶風流詞歌をよろこぶもの必一讀せざるはなし。余さきに大窪多與里と題せし文中いさゝか淺草のことを記せり。曰く

楊弓場の軒先に御神燈出すこと未だ御法度ならざりし頃に

は家名小さく書きたる店口の障子に時雨の夕なぞ櫻の落葉する風情捨てがたきものにて候ひき。その頃この邊の矢場の奥座敷に書遊びせし時肱掛窓の側に置きたる盃洗の水にいかなるはづみにや屋根を蔽ふ老樹の梢越し、夕日に染みたる空の色映りたるを、いと不思議に打眺め候事今だに記憶致居候。その頃まではこの邊の風俗も若きは天神髷三ツ輪又つぶしに結綿なぞかけ年増はおさふねお盥なぞにゆふもあり絆纒のほか羽織なぞは着ず傳坊なる好みにて中には半元服の凄き手取りもありと聞きしが今は鼻唄の代りに唱歌唄ふ田舎の女多くなりて唯わけもなく勤めすますを第一と心得候故遊びが楽になりて深く迷込むおそれもなく誠に無事なる世となり申候

後藤宙外子が作中たしか松葉かんざしと題せし一篇あり、淺草の風俗を描破すること猶一葉女史が濁江の柳町に於けるが如きものとおぼへたり。天外子が揚弓場の一時間は好箇の寫生文なり。今戸心中と淺瀬の波に明治時代の二遊里を寫せし柳浪先生の妙文會て一度も淺草に及びたる事なきは寧奇といふべし。湯島詣の著者また淺草を描きたること無きが如し。

巷に秋立ちそめて水菓子屋の店先に葡萄の房涼しき火影に照さるゝを見る時わが身にはいつも可笑しき思出ぞ浮び來る。およそ看る物同じと雖看る心異なれば其の思ひや同じからず。一茶が句には

一番の富士見どころやぶどう棚

といふがあり。葡萄の棚より露重げに垂れさがる葡萄を見上れば小暗き葉越しの光にその房の一粒一粒は切子硝子の珠にも似たるを、秋風の梢ともすればゆら〳〵とゆり動すさま、風前の牡丹花にもまさりて危くいたましく又やさしき限りなり。

島崎藤村子が古き著作中にも葡萄棚のこと記されしもありしやに覺ゆ。

今わが胸に浮び出る葡萄棚のことはかの淺間しき淺草にぞある。二十の頃なりけり。どんよりと曇りて風なく、雨にもならぬ秋の一日、淺草傳法院の裏手なる土塀に添ふ小路を通り過ぎんとして忽とある銘酒屋の小娘に袂引かれつ。大きなる潰島田に紫色の結綿かけまだ肩揚つけし浴衣の撫肩ほつそりとして小づくりなれば十四五にも見えたり。氣の拔けし麥酒一杯のみて後娘はやがてわれを誘ひ公園の人込みの中をば先に立ちて歩む。其の行く先はいづこぞと思へば、今區役所の建てる通の中程にて町家の間なる小さき寺の門なりけり。門の内に入るまで娘は絶えず身のまはりに氣をくばりしが始めて心おちつきたるさまになりて犇と己が身に寄添ひて手をとり、そのまゝ寺には案内

も乞はず勝手口を廻りて庫裡の裏手に出づるに、と見れば葡萄棚ありてあたり薄暗し、娘は奥まりたる離座敷とも覺しき一間の障子外より押開きてづかづかと内に上り破れし袖より夜のもの取出して煤けたる疊の上に敷きのべたり。

あまりといへば事の意外なるにわれはこの精舍のいかなる譯ありてかゝる淺間しき女の隱家とはなれるにや、問はまく思ふ心ありながら、又寸時も早く逃出でんと胸のみ轟かす程に、やがて女はわが身を送出でゝ再び葡萄棚のかげを過ぐる折熟りし一房の取分けて低く垂れたるを見、栗鼠の如き爪立てゝわが袖を捉へ忽がわ背に攀づ。片腕あらはに高くさしのべ力にまかせて葡萄の房を引けば棚おそろしくゆれ動きて、虻あまた飛出る葉越しの秋の空、薄く曇りたれば早やたそがるゝかとも思はれき。本堂の方に木魚叩く音いとも物うし。

われその頃より友に敎へられてかのモオパサンが短篇小說を讀み始むるほどに、曇りし日の葡萄棚のさま何となく彼の文章を好んでものする巴里の好事の中にもあり氣なる心地せられて、今に忘れぬことの一つとはなりけり。怪しきかの寺侍ありやいなや。

饑えたる人々の對話

生方敏郎

年代　慶應の頃の夏

場所　江戸本所の裏町、隱居の涼臺

人物　浪人
浪人の御新造
浪人の子供と居候
紺屋の隱居
大工の手間取熊さん
仕事師の八さん
熊さんの女房お松
見知らぬ男

八さん　御隱居さん今日は、ひどい暑さでございましたな。

隱居　まつたく今日の暑さは格別だつたね。私が覺えて、まあこの二十八年前にこの位暑い年があつたが、今年は實にそれ以上の酷暑だね。

八さん　へエまた御隱居さんの二十八年振が始まりましたね。昔の話を何と話されたつて、此方黨等は御隱居さんより後で生れたんだから、どうも仕樣がねへ。

隱居　ハヽハヽこればつかりは、幾ら神田淨水で產湯を使つても、年の功には叶はないな。昔のことで分らないことがあつたら、何でも聞きなさい。

八さん　ぢや早速伺ひますが、いま御隱居さんの仰しやられたコクショと云ふのは、鯉のコクショのことですか。なんのコクショですか。我々共には薩張り分りませんが……

隱居　さうぢやらう、あれは酉扁に告げると書いてコクと云ふのは、ひどいと云ふこと、ショは暑中の暑で、即ち暑さのことだ。兩方でひどい暑さだと云ふのだ。だからひどいことをする役人を酷吏ともいふのだ。

八さん　成程、して見ると、因業な大屋は即ち酷家主、因業な米屋は即ち酷米屋といふ所でせうな。どうです。一を聞いて十を知るといふのは、何と、この八さんの事でせうがな。

隱居　馬鹿をお云ひなさい。酷大家の酷米屋のといふ文字は、玉篇にもないことだ。

八さん　玉篇にや無くつても、私の家の近所にや見本があります。

隱居　まあ〳〵そんなに人を譏りなさんな。何處へ行つたとて、さう親切な人ばかりはないものだ。

八さん　でもね、全たくそんじよそこらの大屋の凸凹は、餘まり因業が過ぎますからね。

隱居　何だ、八さん、また家賃でも溜らせたな。嚴しい催促をされたのだらう。それとも店立でも喰つたかい。

八さん　溜らせてることは溜らせてるし、嚴しい催促は喰つて居ますがね、私は自分のことで何もさう、腹を立てるんぢやないんです。けれど、まあ御隱居さんお聽きなさい。米が高い、諸式が皆高い、だから家賃を上げると云ふんでせう、そんな理窟がありますか、米が高い、諸式が皆高い、だからお前達もさぞ困るだらう。これから當分の間家賃を負けてやらう、と云ふなら聞えてますが、そのあべこべなことを吐かしてやアがるんですからね。それも一割や二割方上げやうてんぢやねえんです。流しが損まうと、柱が曲らうと、壁が落ちやうと何年に

も手入といふものはしない癖に、人の困るのを見て、急に四五割も店賃を上げやうと云ふのですからね、あんまり聞えないと私は思ひますよ。その上それで嫌なら、何所へでも越して行くがいゝと云ふ權幕です。

隱居　八さん、近頃はまことに貸家がないさうだね。

八さん　その事です、癪に觸るから何處へでも越しつちまへと思つて、空家を搜して廻つても、まあ殆んど見當りませんね。それで大屋の鼻息がますます荒いわけなんでせうよ。御隱居さん、一體どうしてこんなに空家が無くなつたもんでせうね。

隱居　さうさ、まさか安政の地震以來潰れた家が建たないと云ふぢやなし、家の數が俄かに減つたと云ふぢやなし、尙ほ私の若い時分から見ると、よつぽど殖えて居るやうだがの、淺草でも神田でも、私が子供の時分原ツぱだつた所に、いまは澤山普請が出來てゐる。

八さん　矢ッ張り人間の數が殖えたからでせうか、人間も熊の野郎見たやうに、製造が上手だと、忽ち七人や十人は出來ますからね。あゝなると一層、慘めですね

隱居　人間が殖えた爲めぢやない。景氣のいゝ人達が店と住居を別々にしたり、同居して居たものが一戶持つやうになつたり、景氣のいゝ人が子供に店を讓つて隱居したり、そんなこんなで家が足りなくなつたんだ。それに材木の騰貴で新築するものがないからな。だがまあそんなに熊さんのことを惡態に言ひなさんな。日本の人間は皆な、京にござる禁裡様の子だ。一人でも多く子供を産むことは、禁裡様の御家來を一人、殖やす譯なのだから、朝廷へも忠義に當るのだ。それに子供は神樣のお授け物で、熊さんのやうに律義にして居なくつては、出來るものではない。白玉も黃金の玉も何かせむ、子にまさる寶世にあらめやも、と古歌にもある通り、子は子寶というて、家の寶、また天下の寶だ。だから八さん、お前さんのやうに、不身持にして居ちや、生涯子供は授かりこはありやしないよ。

八さん　へエ、さうですか、寶か何か知らないが、私はあんな熊のガキのやうな、汚ねへ子供が欲しくはありませんよ。いつ見ても靑ン洟を鼻の下に胡座をかゝせて、靑ン膨れの汚え面をして居やがる。食ふ物もろくろく食はせねえと見えて、蒼い顏をして此間も、掃溜を搜して居ましたつけ。あゝなると全く子も子地獄だ。御隱居さん、この八なんざあ、まあ喰はずに餓えて死んだからつて、肌を脫げば、くりからもんもんの綺麗な乾物が出來上りまさあ（と下つ腹に力のない笑ひ方をする）

隱居　刺靑の乾物が出來たら、太平の御代にはいゝ見世物の種だが、今年邊りは、刺靑の乾物も珍らしくはあるまい。

八さん　さうですとも、だから何でも生きてる内に、勝手な眞似をすることですよ。吉原の方角も知らねえ内に、餓死しちや詰りませんからね。大きい聲ぢや云はれませんが、このお向ふのお武家様を御覧なさい。あんなに義理を堅くして、身を愼しみ、武藝も學問も、中々立派なもんだが、あの通り貧乏して居りやア御新造の身裝だつて、お坊ちやんだつて、可哀想なものでさ。

隱居　八さんお前にもそれが分るかえ。あのお武家は、勤王家なんだ。勤王家といつても、八さんなどには分るまいが、公方様の御政道が宜しくない、幕府の役人共は、新しい世の中が分つて居ない。人民の赴く所が分つて居ない、と云ふのを嘆いて、禁裡様の新しい天下にさせたいと、日夜苦心して居られるんだ。安政の大獄に吉田松陰、頼三樹三郎、梅田源次郎、などいふ勤王家が、小塚ツ原でお所刑になつた評判は、其頃、江戸中は愚か、日本全國へ聞えたもんだ。それでお向ふのお武家も、公方様の家來に推擧しやうといふ人はあるのだが、あゝやつて浪人を張り通して、徳川の祿を食まないと云つて居るのだ。

八さん　つまり少しばかり變人なんだね。

隱居　變人ではない。志士なんだ。お前などには、私が講釋をして聞かせても、志士の心は一朝一夕には分るまい。

八さん　しゝと熊がこの長屋に居ると、何だか梁山泊に住んでるやうな氣がすらあ（また下ッ腹に力のない聲で笑ふ）だが、ね、屋の凸凹はあのお武家を追ひ立てやうと云ふんですぜ。二月や三月溜つたからつて、あんまりひどい仕打だ。何でもその勤王家だとか云ふんで、それで邪魔にして居るらしいよ。

隱居　さうさ。大屋なんかは、金を溜めさへすれば宜いといふ主義だから、時勢に阿ねる事だけしか考へては居ない。勤王家の有難さなどが、彼奴等に分るものか。

八さん　それも宜いが、人が喰ふや喰はずの中で、大屋は家中で箱根へ行つて此間まで湯治をして來やアがつた。

隱居　いつの世でも、金持は皆な勝手な眞似をして居るよ。だから此頃のやうに物騷な世の中になつたんだ。上方の方でも、海道筋でも、中仙道でも、一揆が矢鱈に起るさうぢやないか。公方様の御政道も、もう末になつたんだな。

（此時下手より熊さんの內儀さん、赤ン坊を抱いて、涼臺に近寄る、其後から大小の子供數人ゾロゾロと附いて出る）

內儀さん　（後ろを振返つて子供たちに）お前たちは來るんぢやないよ。内に寢てお出で、動くとお腹が減つて困るからさ。御隱居さん、今晩は、大層蒸暑うございます。オヤ八さんも油を賣つて居るの。

隠居　今晩は。

八さん　今お前さん所を覗いて見たんだけれど、熊さんが見えないから、此處で遊んで居たのさ。でも熊さんは仕事があつて宜いね。

内儀さん　オヤ先刻から話聲がするから、内の人も此處に居るのかと思つてたんですよ。仕事はあるけれど、さうお金にもならないもんだから、此頃は餘り精を出さないやうで困るのさ。不平を云つて内にゴロ〳〵して居ることが多いのだよ。御隠居さん、その中にミツチリ意見してやつて下さいませんか。

隠居　全くお前さん所でも人數が多いから、熊さんが幾ら稼いでも追つ付くまい。

内儀さん　本當に、此頃のやうにお米が高いんぢや、とてもどうにもやり切れないのですよ。稼ぎ人の熊さんには、まさかお粥も喰べさせられないから、私達が詰めるだけ詰めて、かゝらないやうにするのですけれど、味噌も高けりや、炭も高し、醤油も高し、それにつれて魚から八百屋物まで去年の何倍といふんでせう。給金が少しくらゐ宜くなつたつて、とても熊さんの働きぢや、私達も仕舞ひには干乾になるかと思ふのですよ。そいで此間中から面白くもないお米の心配からの喧嘩ばかりして居るのですよ。今朝は私も少し云ひ過ぎたんですけれど、熊さんはプイと家を出てしまつて、見れば道具箱はそのまゝ放り出してあるんでせう。それに出て行く時の捨白（すてぜりふ）に、「いくら働いたつて追つ付かない、こんな娑婆に、いつまで生きて居たつて仕方がない。」なんて云つて行つたから、また氣の弱い熊さんだから、どうかしやしないかと思つて歸りの遲いのを心配して居るんですよ。

隠居　それや御心配だ。何しろあんなに眞面目に働いて居るんだから、内儀さんも餘りやかましく云はないが宜い。

内儀さん　でも全體お前が餘り子供をひり出すから困るんだ。罰當りめなんて云ひますから、私一人でこしらへた子供ぢやなし、私もつひ腹が立つて、熊さん、餘りなことを云ひますまい。江戸へ來れば花見をさせるの、芝居を見せるのと、人をさんざ旨い口車に乘せて、連れて來て置きながら、花見はおろか朝晩の御飯さへ十分には頂けない、こんな餓鬼道のやうな江戸へは來るんぢやなかつた。私は騙されて來たんだ。なんて云つてしまつたんです。本當にさうですから。

八さん　まあ大丈夫だよ。そのうちに歸つて來らア。可愛い女房子供を置いて何處へ行かれるものか。死んでも魂になつて歸つて來るよ。

内儀さん　縁起でもない。死んで歸つて來たつてどうするもの

かね。何だか此頃は熊さんの話に、江戸の中もなか〳〵物騒だ
さうだから、私は本氣で心配してるんですよ。江戸でもお米騷動が始まるだらうなんて、熊さんは云つてましたが、本當にさうでせうか御隱居さん。

隱居　始まるかも知れないよ。地方では方々に一揆が起つたやうだから、いつもこんな時は江戸が魁なんだが、今度はどういふ譯か後へ廻つた。昔、天明時代に、饑饉の爲めにえらい騷動が起つたことがある。何でも賣惜みをして居る米屋や、味噌屋、油屋へ押掛けて、町民が亂暴を働いたんだ。金持の家も隨分ひどくやられたやうだ。それから近い所ぢや天保の末に、大阪で大鹽平八郎の亂があつた。あれも米から起つた騷動さ。

內儀さん　まつたくね。これで人間は何ぼなんでも喰べるものを喰べないぢや居られませんからねえ。

隱居　さうさ。大鹽平八郎といへば、決して彌次馬や亂暴人ではない。天下に聞えた陽明學者だ。それが采配を取つてやらうと云ふのだから、まあよく〳〵の事と思はなけりやならない。富豪や大名の米倉を乘ッ取つて、それで窮民を賑はせたんだ。今でも大阪の人間は、大鹽の恩を忘れやしない。

內儀さん　何てえらい方でせう。江戸にもそんな立派なお武家はないものでせうか。

隱居　ない〳〵。當節の武士に至つてなると、上役におべつかを使ふことの外は何も知らないんだ。それでもまだ天保の時には、飢饉だつた。然るに今年は飢饉でも何でもない。今年ばかりぢやなく、去年も一昨年も一昨々年も、豐年續きぢやないか。米は何處にもドッサリあるんだ。それだのに商人が高い相場を立て、買占やら賣惜みやらをして、無理に米の値を高くしたんだ。米が高くなりや、それにつれて諸物價が皆高くなる。それでこんなに此方黨等（こつちとら）は困つて居るんだ。江戸の內にだつて、米は十分にあるんだ。それだのに每日のやうに行倒れがある。お米が口へ入らなくて困つて居る人間が、どの位あるか分らない。實に馬鹿々々しい話だ。

內儀さん　本當にね。何とかしやうがないもんですかね。私達ばかり苦しめなくも宜さゝうなものですね。

八さん　ナーニ內儀さん、お前さん所なざアまだ宜い方なんだ。お向ふのお武家を見なさい。近所中でまあどうして生きて居るだらうつて、問題にして居るんだぜ。商賣があるぢやなし、扶持離れのした浪人だし、此通りの世の中では、寺子の子供も來ないやうだし、まあ實に何を喰べて生きてるんだらうて、皆な云つて居るんだ。其上に、居候まで居るやうだし。

隱居　それだのに幕府の役人は、奸商を取締ることも知らな

い。諸から溢れるやうな小泥棒を捕へるには大騒ぎをする癖に、江戸の町中を干乾にしやうとする白晝の强盜に等しき奸商共には、高々御老中の說諭ぐらゐのものだ。そんなことで何の商人がびくつくものか。町奉行は米の代りに豆の粉を喰へなんて云ふが、誰もそんなものを喰ふものはあるまい。

内儀さん　大きい聲ぢや云はれませんが、お向ふの浪人さんの所では、早くから豆の粉ばかり裏口から御新造が買ひに出るやうでした。宅でも眞似をして、やつて見たんですが、胸が燒けるし、熊さんには豆の粉ぢや、迚も仕事は出來ませんとさ。

隱居　さうさ。凶年で食物がないとなりや、人は藥でも草でも喰べるよ。けれども江戸中に米はドツサリあつて、金持はさんざツ飯喰べて居るときに、誰が豆の粉なんか喰べられるものか。幕府の役人の遣口はまるで子供騙しだ。あゝ天明の時のやうな騷動が起らなければ宜いが。

八さん　御隱居さん、一寸靜かに、何だかワア／＼云ふ聲が聞えるぢやありませんか。

内儀さん　アラ本當に、何でせう。火事か知ら。

（みな伸び上つて遠くを見る、物音ます／＼烈しくなる、見知らぬ男、肩に一人の男を負つて出て來る）

見知らぬ男　モシ／＼一寸お尋ねしますが、大工の熊さんのお宅は此邊でせうか。

隱居　内儀さん　八さん（三人一緒に）此處ですよ。貴方はどなたです。

見知らぬ男　私は本所の者ですが、いま兩國に暴動が起つて、その最中に怪我人が出來たから、介抱して見ると、それが熊さんです、兎も角も負ぶつて來て上げました。

内儀さん　マア熊さんかね、しつかりおし。

隱居　若い衆さん、どうも御苦勞さんでした。

八さん　内儀さん、まあ飛んだことで。熊兄イ、しつかりしろよ。八公だ／＼、若い衆さん、まあお掛けなさい。

（見知らぬ男、熊さんを床几の上に寢せ、自分も端へ腰を掛ける）

内儀さん　熊さん／＼、

熊さん（微かな聲にて）ウン

内儀さん　氣が付いたの、苦しいかい。

熊さん　氣は先刻から付いてる。面倒臭いから返事しないんだ。うるさく物を云はないで吳れ。

見知らぬ男　何しろ兩國から向ふは大變な騷ぎなんで、何千人といふ人が方々の米屋、醬油屋、味噌屋を襲つて、片ツ端から打ち毀して居るんです。火を掛けたり、家財道具を壞したりし

て、手も着けられねえ始末、その中で熊さんは、倒れて來る處かなんかに當てられたんでせう。ウン〲云つてましたが、別に大怪我と云ふんでもないから、このまゝ寢かして置いたら癒りませうよ。

内儀さん　まあどうも色々お世話樣になりました。

見知らぬ男　禮を云ふには及ばねえ、こんなことはお互ひだ。それよか早く内儀さん、内へ連れて行つて蒲團の上へ寢かしたが宜いだらう。一寸私が負ぶつてつて上げませう。

八さん　ナニそれには及びません。私が負ぶつて行きませう。私に任せて下さい。

（八さんが熊さんを負ぶつてゆく、後から内儀さんも從いてゆく）

隱居　餘程騷ぎは擴がりさうですか。

見知らぬ男　何ですかお晝頃、兩國で見世物を見て居た群集が、どうかした機みで騷ぎ立つて、こんなことになつたんです。初めはそんなに多人數でもなかつたんですが、行く先々でだん〲人數が殖えて、手もない火事か何か擴がるやうな鹽梅です。日本橋から神田、京橋、芝、淺草、何處も此處も半鐘をジヤン〲鳴らして、戰さのやうな騷ぎです。

隱居　まるで天明の時のやうな騷ぎだな。

見知らぬ男　天明の時にゃどんなだつたか知らないが、奉行所の役人なんか、馬に乘つて出て來るが、手も着けられずに見て居ましたよ。群集の中の人數が少しは捕まへられたやうですが、さうすると大勢が雪崩を打つて追ひ駈けて行つて、直にじしん番から取戻して來ましたよ。往來は米屋から擔ぎ出した米が打ち撒けられて、夏だといふに雪が降つたやうでした。

隱居　不斷はあんなに大人しい江戸の町人でも、食ふ物を充てがはなけりや、暴れ出す、こりや無理もない話だ。もうモツと早く始まりさうなもんだと私は思つて居たんだ。表の方はだん〲えらい騷ぎだが、本所でも亦始まつたと見える。

（八さん熊さんの家から出て來て涼臺に腰掛ける）

隱居　八さん御苦勞だつたね。

見知らぬ男　そりやもう斯らいふものは何所までだつて擴がつてゆきますよ。誰だつて日本人は、米がなくつちや生きて居られませんからね。

八さん　外がます〲騷がしい。どりや俺も一つ働いてやらうか。食はずに生きて居たつて仕樣がねえ。太く短かく送るのも一生は一生だ。これから一つ賣惜みをする米問屋でも荒して來やうよ。序に大家の凸凹の家の棟も、叩き壞して遣らざあなるめえ。くりからもん〲の兄さんだ。かう見えても命の賣惜み

はしねえんだ。

(肌脱ぎになり、鉢巻をし、尻を端折つて八さんが駈け出す、邊りが益々騒々しくなる)

二

(前幕の翌々日の夜、浪人の家の座敷、床に近く棺が二ツ並んで居る。線香を立て蠟燭を上げ、すべてお通夜の體にて、近所の人大勢並んでゐる)

隠居　サア〳〵熊さん、此方へお入んなさい。お前さんはたゞの體ぢやないから、無理に顔出ししなくも宜い所なのに。よく來て下すつた。もう身體はしつかりしましたかね。

熊さん　えゝ有難うございます。もう大丈夫です。御安心なすつて下さい。

隠居　さうかね、それは宜かつた。まあお前さんが、今夜の佛とは御懇意にして居たやうだつたから、佛もさぞかし喜ぶだらう。さあズッと此方へお入り。南無アミダブ。〳〵。

内儀さん　御隠居さん、今晩は、此方様でも、どうも飛んだことで。

隠居　イヤ内儀さんも御一緒か、さあ〳〵此方へお入んなさい。そこは餘まり端近だ。

内儀さん　此間は熊さんが大變お世話様になりました。お陰様でもうしつかりしたやうです。熊さんや、此間は大變皆様のお世話になつたのだよ。

隠居　まあ〳〵丈夫になつて何よりだ。さあ八さん、もつと此方へお詰めなさい。皆さん順にこつちへ詰めて下さい。本當にな、此方でも飛んだことで、もう何とも氣の毒でお話にならない。

(近所の人、下駄屋の番頭佐平が入つて來る)

佐平　今晩は、御隠居さん、どうも此方でも飛んだことで

隠居　佐平さんかい。さあ〳〵此方へ。南無アミダブ。〳〵。

佐平　もつと早く上る所でしたが、今日は生憎と主人が留守をしまして抜けられなかつた所を、先刻の夕立で又店が暫くごたついたものですから、遅れてどうも申譯がございません。

隠居　成程、下駄屋に傘屋、夕立の時には忙しい譯だな。時に佐平さん、私共も先刻聞いて初めて知つて吃驚したやうな譯でね、近所中一度に驚いて大騒ぎさ。檢死も濟んだし、先刻坊さんが來て、短かいお經を上げて歸つた。生殘つたのは何しろ坊ちやんと、此の居候さんだらうぢやないか。

佐平　はゝあ、どんな懺悔にお亡くなりなすつたんです。

隠居　どんな懺悔ッてお前、この居候さんに坊ちやんを預けて、使に出した後で、御夫婦で御自害だ。この居候さんが歸つ

て來るまで近所の者は誰もそれを知らずに居たんだ。

佐平　驚きましたなあ。こんなことは滅多にありませんぜ。

隱居　滅多にあられて堪るもんか。まつたく醉狂に出來ることぢやないからな。

八さん　皆な大屋の凸凹のお蔭だ。皆なから揃つて居ても、あいつばかりは顔が出せねえ。

隱居　八さん、まあそんなに云ひなさんな、遺言狀も立派に殘つて居る。たゞそれだけの譯でお武士が一人死にもしない。大屋さんは生憎病氣で、自分では來られないんだ。これには色々込み入つた譯もあるだらうから。

八さん　込み入つた譯も何もない。米が食はれないから死んだに違ひないんだ。第一今まで生きて居たのが不思議なくらゐだ。そりや此方黨等だつてさうだ。よく今日までこの諸式の高い中に、高い米を食つて、暮し難い思をして生きて來られたもんだ。

佐平　さうですな。さう申しちや失禮ですけれど、寺子屋師匠の上り(あが)ぢや、とても今日の御飯は頂いてゆかれませんからね、しかし惜しい事をしましたね。もう今日まで生き延びれば、米はどん／＼安くなるばかりですのに。もう昨日から相場はガラツと下りましたぜ。それに方々の辻々で、白米の廉賣もやれば、寺々の門前では施米をやつて居るやうです。

内儀さん　今朝がたこの先のお寺の前を通つたら、門前は大變な人でしたよ。大方その施米を貰ひに行つた人達なんでせうね。

八さん（小さい聲で獨言のやうに）大方が聞いて呆れる。自分も施米を貰ひに行つて來た仲間の癖に。

隱居　ところが佐平さん、それが貰ひに行けるくらゐなら誰し命を捨てやしないよ。二本差したことのあるものが、假令死ねばとても、施米を受けにゆかれるもんかね。施米を受けるといへば、詰り乞食だもの。お菰(こも)のやる事だもの、痩せても枯れてもお武士にそれが出來るものかね。そんな事をする前に腹を切つて死ぬのさ。

八さん　さうともさ。施米なんてえらさうな事をいつても、つまり米を高くして人が食へないやうにして置いて、それから施米を呉れるなんて、有難くも何ともねえ。此方は手もねえ、お慰みに乞食にされるやうなものだ。本當に人に施すつもりなら、初ツ(はな)からそんなに米の値を上げない内に、何とかするが宜いぢやないか。人民が困らないやうにさ。武士ではねえが、この八さんも施米なんかは貰はないね。

内儀さん　そりや八さんのやうに獨身者ならどんな強い熱でも

吹いて居られるけれど、私達のやうに大勢子供を持つちやア、どんな惨めな眞似をしても、御飯を頂かないぢや居られないよ。ねえ熊さん

熊さん　それでも到底暮し切れやしない。佐平さん、お米は餘ッ程安くなりましたか

佐平　ナーニ幾らも下がりやしませんよ。たゞ米屋もあまり亂暴な事をされるのが困るものだから、少し下げた丈けで、これで又二百十日に風でも吹けば、直ぐまた逆戻りをすることでせう。

内儀さん　米の値だけが上るのなら苦しいには違ひないけれど、それだけなら又どうにしかして行かれるのだけれど、米が高くなるとお醬油も高くなり、野菜もお魚も、薪類から炭薪まで皆な上るんだから仕様がない。今度だつて、米の値段だけ下がつても、外のものが居据りぢや、どう仕様もありませんねえ。

八さん　その時はその時で、また暴動でも起すのさ。

内儀さん　でもまた熊さんのやうに、怪我でもされると私は心配だし、本當にこの先どうすりや宜いんだか分らない。

隱居　この先のことを云やア殘された此處の家の坊ちやんはどうするか。皆なで何とかして盛り立てゝ行かなけりやアなるまい、と私は思ふが、皆さんもお困りの中だが、何とかして下さいますか。それともお寺へやつて親御さん達の菩提を弔ふやうにしますか。或は職人にするなり、商人にするなり、何とかしなけりやなりますまい。そりや又後から考へるとして、兎に角皆さんの御助力を仰ぎたいものです。

熊さん　それはどうか御隱居さんに、よく考へて置いて頂きます。皆さん如何ですか。

佐平　それが宜うございませう。

隱居　承知しました。だがどうです皆さん、今のやうに米が高いので自殺する人があつたり、毎日の暴動が續いたりする時代があるかと思へば、また昔は大食を自慢にして、大食の會などを催した例もありますよ。

佐平　ハヽアそんな洒落れたことがありましたがな、何しろ昔は物價が安かつたし、物價が安ければ自然人の心も暢びりして居ますから、何をするにも樂しみでしたな。

隱居　それは文化十四年の彌生の二十三日に、兩國橋萬屋方で大酒大食の會を開いたことがありました。そして優勝者には色々と賞與があつたやうです。

熊さん　その大食の人はどのくらゐ食べたものでせう。

隱居　それは私も一寸忘れたが、何でも淺草の和泉屋吉藏とい

ふ七十三歳になる老人が飯を五十四杯喰べたと云ふことだ。それからエヽト誰か私共へ行つて佛壇の側の本棚にある私の覺帳を持つて來て下さいませんか。

（小僧が一人立つてゆく）

佐平　成程、これは驚いたな。

熊さん　私は實は生れ付大食で、今年のやうな年には、實際困つて居るんです。そんな大食の會でもあれば、御褒美は頂けるでせうが、まつたく幾ら稼いでも、皆な喰べることで無くなつてしまひます。かういふ時代には胃袋が大きいほど不仕合せなことはないと思ひますよ。

（小僧帳面を持つて來る）

隱居　イヤ有難う。ドレ〱。菓子を澤山食つた人がありますよ。それは神田の丸屋勘右衛門といふ五ん六歳の老人で、饅頭五十、羊羹七棹、薄皮餅三十、茶を十九杯といふのだ。また蕎麥を澤山食つたのは、新吉原の桐屋五左衛門といふ人で、二八蕎麥五十七杯を平げて居ます。

八さん　御隱居さん、左利の仲間はありませんかね。

隱居　あるとも〱、猩々も跣足といふのがある。金杉の伊勢屋傳兵衛四十七歳は、三合入の盃で二十七杯、後で飯を三杯、茶を九杯飲んで、甚句を踊つたといふのだ。それから芝口の鯉屋利兵衛三十歳は、三升入の盃で六杯半といふのだ。どうだ驚いたらう。

八さん　成程、私より少し强さうですな。

隱居（帳面を下に置き）八さん、佛に線香を立てゝやつて下さい。線香を絶やさずにお通夜ですよ。南無アミダブ〱。大變涼しくなつて來た。

内儀さん　晝間の夕立でこんなに涼しくなつたんでせう。そりやさうと、また今頃は川向ふでは騷動が起つて居ることでせうね。

隱居　このお濕りで餘程熱を冷ましたら、向ふの方で稻妻が光つて居る。

佐平　それでも御隱居さん、あの雲の切目に三日月が見えますよ。

隱居　どれ〱、三日月樣を拜みませうか。（片手上げて拜むやうにして月の方を見て）もうやがて沈む所だ、ウムこりやまだ〱米は下がりませんぞよ。

内儀さん　何故でございますね。

隱居　でも三日月樣があの通り立つて居るからの。古老の言葉に、三日月が立つと白い物の値段が騰貴すると云ひますわい。白い物といへば、紙と鹽と、絲と米などいふ所だらう。あゝ雨

つたものだ。
熊さん　このくらゐの騒動ではまだ下がりませんかな。
八さん　下がらたけりや又やるさ。

隠居　徳川の御代も末かなあ。こんなことで何時までもゴタゴタして居るやうでは。南無アミダブ。〳〵。
（皆々三日月の空を見る）幕

美術期節前記

―今秋美術展覧會批評の筆を執るに方つて―

小杉未醒

中央公論社は私に、秋の展覧會の批評の豫約を求める、人間は批評と云ふ事の廢められぬ動物であるから、私も展覧會を見たら何か是非の疑問が起る事であらう、多分批評の豫約はしても宜いだらう、私の注意して居る諸友人は、此の一年にどんな歩みをつゞけたか、怖いやうな速力もあらうし、又は安心するやうな停滯もあるだらう、第一私は殊に今年はいろ〳〵考へなくてはならぬ問題を持つて居る、何實は、自分の解決さへつけば人の藝術などを問題にせなくてもいゝのだ、批評はつまり自分に向つての批評、人の仕事を研究する事は自分の考を纏める手段である、院展、文展、二科、創作協會それ等に在る少數の人々は、各々自己の境界を開きつゝ行つて居る、その進展の結果の製作を見る事は、ともかく樂しい事にちがひない、尤も目の眩むほどな大飛躍を遂げた人が突然現れて、自身の無價値が得心の行くやうに證據立てられたら、それは少くとも「樂い」事とも申されまい、かるが故に製作中に古人の名作を見るのは危險だと云ふ事になる、ともかく、私の批評は水平以上を目標としたい、世にはあるべからざる地位にあるものが多い、不平は是を取拂はんが爲に生ずる、しかし、しばらく私の批評は彈劾的でありたくない、善いものを解釋したい、その中の不十分さを研究したい

印度の自然と文物

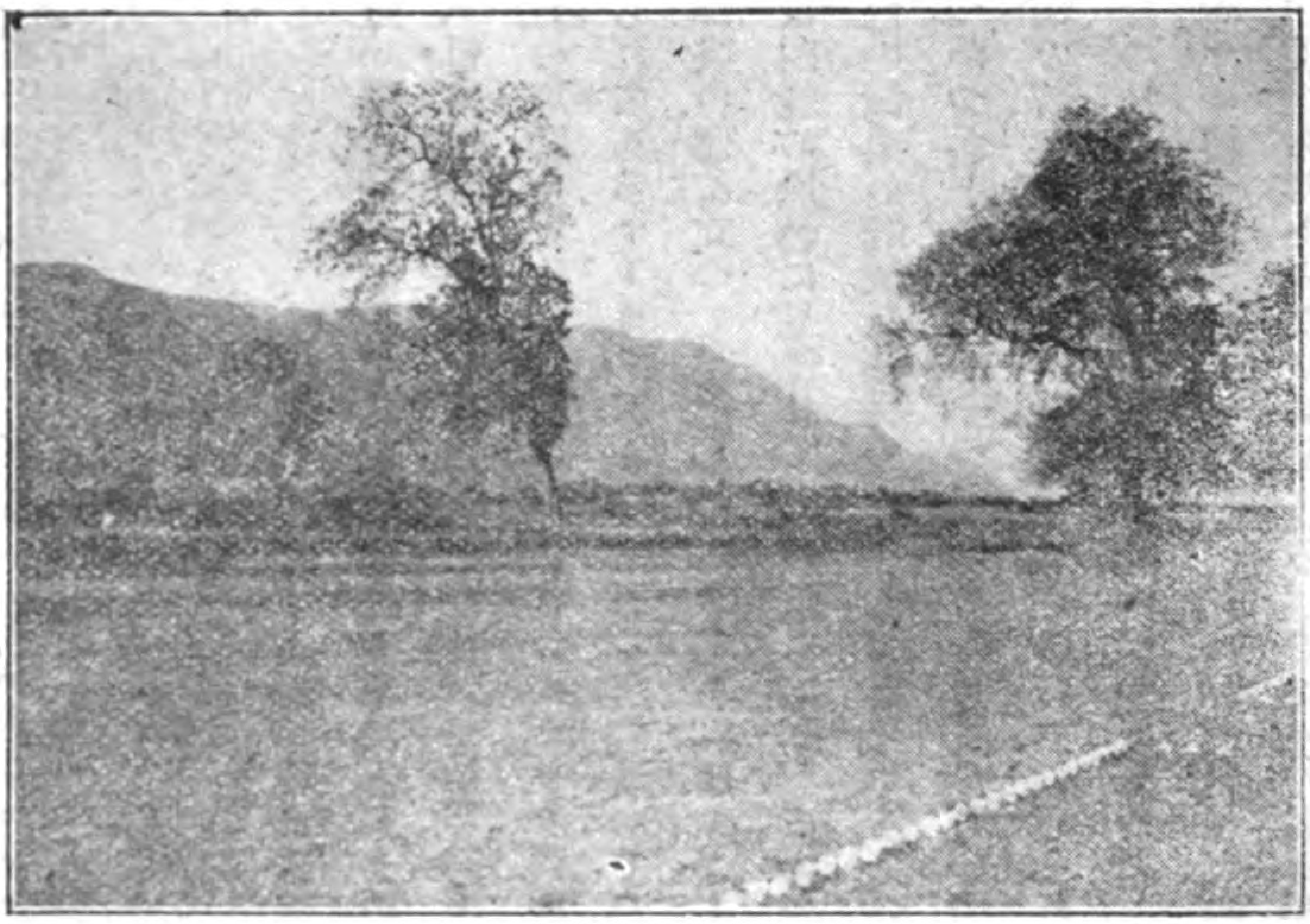
澤村胡夷

一

私が印度の西北境、てふど阿富汗(アフガン)に近い健駄邏(ガンダーラ)の故地を訪ねて、其舊都ペシャワトルに旅行した歸途、咀叉始羅(タキシラ)の舊蹟を見る爲めにサライカラ驛に下車して、其附近の遺跡を見物した時のとである。希臘殖民地の舊市街と認められてゐるサーカツプと云ふ廢墟から程近い丘陵上の荒廢した佛塔の側(かたはら)に立つて、熱しきつた巖角を背(そびら)にしながら、私は異常な四邊の風趣に見惚れてゐた。すると、廢塔の蔭から丈の高い色の淺黑い鋭敏な顏付の一印度人が若々しい笑を含みながら、つかつかと私の側へやつて來た。私は一見して其男がベンガル種の若者なる事を知つたが――彼はその眞白な歯に聊か感傷的な心情を讀ませながら、可成練達した英語を以て、自分がマーシャル博士に依つて、特に私の一行の爲めに、案内の勞を取るべく送られた者なる事を私に云つて聞かせた。聞けば彼は此遺跡に於ける廢塔や佛古像――その多くは石彫と塑像とですべて健駄邏式のものであつした――の修理と研究とをやつてゐる者で、カルカツタ出身の少壯美術家だと云ふのである。私は博士の好意と彼れの勞とを謝した後、彼と雜多な談話を交換してみた。會話の一端は圖らずも彼がカルカツタの印度畫家ムクール・チヤンドラ・デー君の友人である事に及んで、私は其奇遇を喜ばずにはゐられなかつた。ムクール君はタゴール翁と日本に來た事もあるし、私が亞仁多(アジャンタ)窟院に滯在してゐた時、其處へやつて來て、暫らく私の室に同居してゐた事もある。のみならず私は彼と西印度內地の旅行を續けた事もあるので、同君の噂から始まつて、初見の美術家と私との談話は、それから夫れへと飛火して、話頭には一しきり花が咲いて來た。

話の末、彼は私の旅程を訊いたので、私は自分の是れから巡るべき土地の名を擧げたが、その或物は彼れの知らないものであつたので、說明を加へなどした。彼は說明を聞き終つて暫らく考へ込んでゐたが、急に思出したやうに『貴方は何故か

ラバツーの遺跡へ行かないのですか、ニパールは釋尊の生れた土地ではありませぬか』と云ひ出した。私は問はれる迄もなくニパールに行きたく思つてゐたが、それは全く私等の一行には不可能の事であつた。ニパールの國境には極めて嚴重な關門があつて、其通過は外國人には最も困難な事になつてゐる。世界戰亂の影響が印度に於ける僻遠の山國にも高く渦捲いて、此佛教聖地の關門を堅く閉ざして了つてゐるのである。わが日蓮宗の留學僧岡師の如きは、最近その地に至らん事に最も苦心した一人であるが、師の種々なる苦心も全く水泡に歸してゐる。今や聖地の關門は愈々嚴重に閉鎖せられ、若し外國人が之を突破して、私かにニパール國内に入つた事が發覺でもした時は、銃殺せられる事となつてゐると云ふのである。何故かやうな嚴重な處置が必要であるのかは、私の知つた事では無いが、私にはかやうな嚴重な關所を破る程まで、彼地に行く必要を感じないと彼れに應へた。彼は然うですか然うですかと輕く首を左右に振りながら——吾々の肯定を表示する時の如くに首を上下に動かさずに、彼は印度人の習慣の儘、首を左右に輕く動かしながら——さうですかと言ひ續けてゐた。暫らく二人の談話は止斷(とぎ)れてゐたが、彼はまた思出したやうに、私の行程に於て少くとも一つの大きな遺漏がある事を發見したと云ひ放つた。而して彼は急に得意の面持で、例のベンガル仕込の燕のやうな輕快な身振(ゼスチユアー)を示しながら『……とんでも無い……貴方がカシミールに行かうとしないのは、全く大きな粗漏ではありませんか、印度の自然に於ける無限の變化と偉大さはカシミールを觀なければ斷じて語られません！』兩手を左右に擴げて腕に力を入れ、指先でポキリと鳴音を立てさせ、而して此彈指の音に調子を合せて彼は強く言つて



舊王舍城の郊外ラトナギリの景

退けたのであつた。中央亞細亞の探檢家として有名なスタイン博士も現にカシミールの山地に閑居してゐる事を私はマーシャル氏から聞いてゐたので、多少私の心が動かぬでも無かつた。況して複雜な動物模樣の線と花鳥の濃厚な色彩とに輝やいてゐるカシミールの刺繡や、此山地に產する白と黃と赤と黑との紛亂葛藤せる不可思議な密陀塗の器物などを、ペシャワールの市場で觀た時、私の好奇心は既に充分動いてゐたのであるから、彼れがもう一度私の心を動かす爲に、カシミールに於ける彼れ自身の或冬の生活を語つた時には、私の背は巖角を離れて、火のやうな太陽に照つけられながら、私は私の身體を乘出してゐた。

けれども私は遂にカシミールの旅に上る時日を有たなかつた。私の日程は何うしても私が行手を急がねばならなく出來て了つてゐたのである。私が彼れに此事を語ると、彼は私に繰返し繰返し殘念な事だと言つてゐた。私は雜嚢――之れには拓本の要具や材料が詰込まれてゐたが――その中から二枚の狐の毛皮を取出して彼れに見せた。それは彼れがカシミールの雜話のなかで雜多な毛皮の產地なる事を漏らしてゐたので、私が友人に賴まれてペシャワールで買求めたカシミール產と云ふ狐の毛皮を想起したからである。而して同時に唐の玄奘が西域記に『宜二稼穡一。多二花果一。出二龍種馬及鬱金香大珠藥草一。氣序寒勁。多レ雪少レ風。服毛褐。衣白氎』と云つてゐる事や、慧超が往五天竺國傳に『土地出二銅鐵氎布毛毯牛羊一。有二象少馬粳米蒲桃之類一』と記してゐる事などを想出さずには居られなかつた。彼は私の毛皮を見るや、是は無論カシミールのものだと、無雜作に言つて退けてゐたけれど、私には固より確かな事の分らう筈も無い。

私が彼と堅い握手をして別れたのは、此丘陵の裾であつた。彼は此夏にも亦カシミールへ行くと言つてゐた。もう山國の生活に飽々しくて、狐の毛皮でも提げて山を下つて來る頃であらう。彼は私の毛皮と同じものを、歐洲に出かけてゐる彼れの友人に送らねばならぬと言つてゐたから。

二

私が亞仁多窟院に越年してゐた時、私は友人から大雪山の寫眞を是非持つて歸つて吳れと云ふ依賴狀を受取つた。が、私はダージリンへもシムラへも往かなかつたから、之を獲る事は出來ずに了つた。けれどもペシャワールに向ふ途上、ゼラム河畔に建つてゐるゼラムの町の郊外から、遙かに銀雪を戴けるヒマラヤ大連峰の雄姿を望んだ時の印度は、明るく強く私の眼底に殘つて今に滅しない。

てふど私の眼界は渺々たる平原に展開せられてゐた。縱横に起伏する連丘も、坦々たる沃野の頃波と化して、一望の裡に收まつて了つたゐた。たゞ青麥の上に燃えそゝぐ太陽の光のみが、一面に强く鋭く野の上にたゆたつてゐるのであつた。ゼラムの流は此平野の面に大膽極まる屈曲を畫いて、原頭の東から來り、私の脚下に扁舟を含んで悠々西に去らうとし、河畔に屏立する都城の裾を廻つて、棗樹屋樓を碧玉の水に浸してゐた。野の面には脈のやうに路が走つてゐたが、白衣と紅衣とに半裸を裹んだ土人の群の幾つかは、牛車と共に、動いては消え、消えては現はれ、やがて其影は點々細粒となり微粒と化して、滅して行くのが見えてゐた。すべてが淡緑の沈靜な旋律のなかに浮沈してゐるのに、特り此旋律を裹ぎるやうに、桃の花が路傍に咲誇つてゐたのを、私はどうしても忘れる事が出來ない。私は牛車に續いて駱駝の群が黄塵をあげつゝラワルピンデイの方へ急いで行くのを見た。彼等の二三は其背上に黑光のする大きな革嚢を擔ひながら、駱駝飼の鞭に逐はれて行つた。革嚢には溢出すほど飲料水が滿たされてゐたのである。

かやうな野が力の限り伸はだかつた東北の限界に、銀冠を戴いた幾つかの峰の長く連つてゐるのが望まれた。是れが大雪山の雄姿である。鋸歯狀の線と反曲線とを連結反複した雄大な此連峰は、一點の雲影をすら停めない貪婪な藍靑の空と、沈靜な旋律を微動させてゐる大平野との接觸線を破つて、熱國には寧ろ不可思議な銀色の姿を露はしてゐたのである。私は未だ曾てかやうな威嚴ある純淨な姿を見た事はない。此威力と純淨とは、印度文明の滅びたものと、生きてゐるものと、而して將に生れんとするものとの一切に亘つて、不滅の光明として仰がるべきものであらう。私は亞歷山大王が紀元前第四世紀の昔希臘の大兵を率ゐて、此平原に立つた時の奇異な光景を想浮ばずには居られなかつた。彼は希臘文明を印度に輸入する道路を開拓しながら、此處までやつて來たのである。が、彼は此雪山の不可思議な威力を何と見たであらう。世界文明の代表者として希臘の光輝を發揚する爲に、遙々やつて來た奇異なる旅行者の群と、大雪山の秘めてゐる偉大な光輝とを對照すると、彼等の道中は一場の喜劇とも見られ、悲劇とも見られる。然し彼れと彼れの後繼者とが蒔いて置いた種は、異國の土に生育するだけの力を有つてゐた事も亦否まれない事實である。私は呾叉始羅の故地に於けるサーカツプの希臘廢市から發掘せられた希臘式の陶壺を始め、デオニソスの銀像を見た時、かの武裝せる旅行者等の殘して行つた不可思議な結果を今更らしく考へねばならなかつた。彼等の蒔いた種は北方印度、殊にペシヤワール

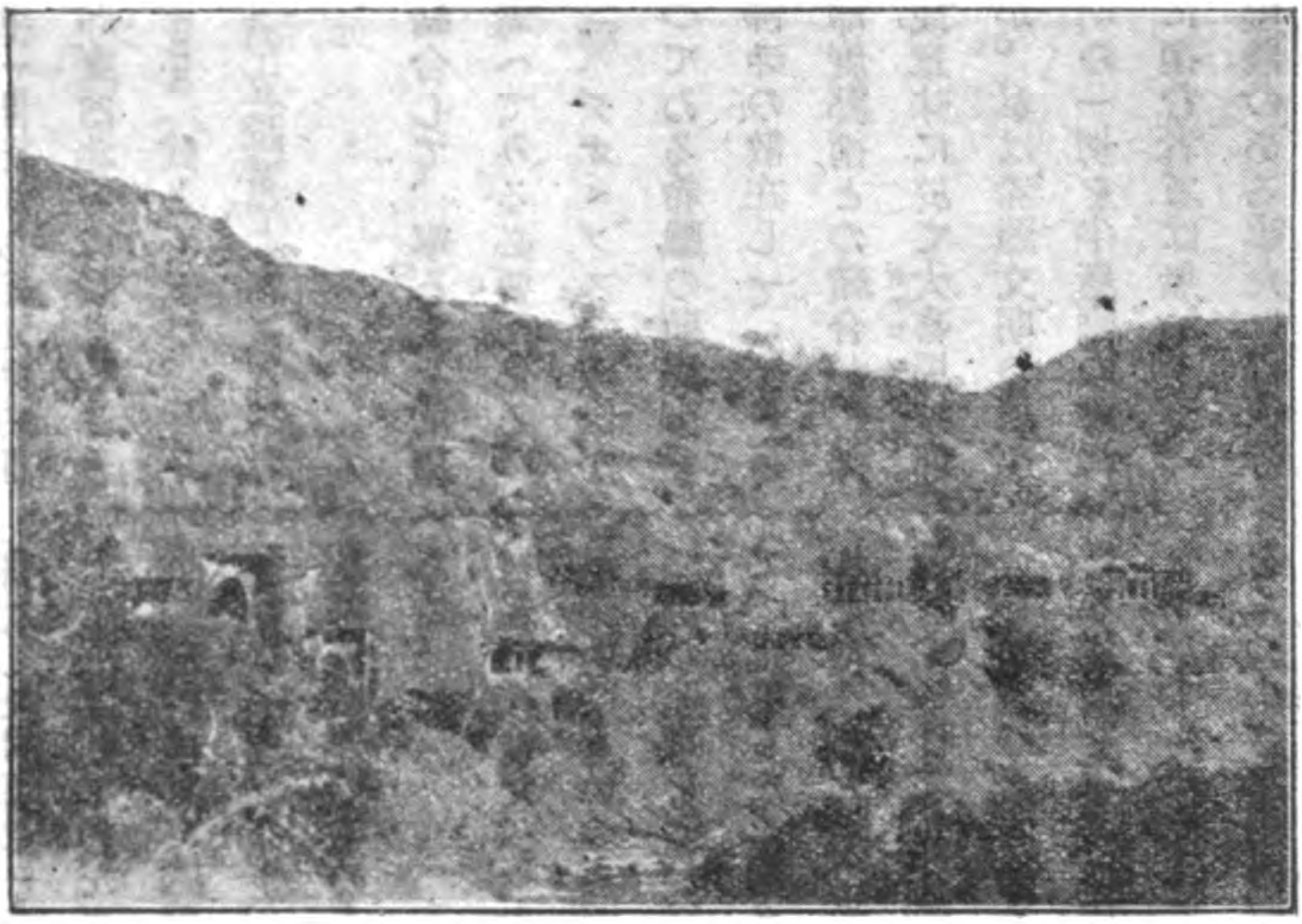
を中心とした古への健駄邏國と其附近とに於て花を咲かせ實を結んだのである。てふどかの旅行者の群が、嵐の如く過ぎ去つた時から凡そ二百五十年程後れた紀元前第一世紀から紀元第六世紀の末葉まで、この希臘感化の藝術は印度西北方に榮えるやうになつた。健駄邏式と云ひ、Indo-Hellenic 式とも云ひ、greco-India 式とも云ふ彫刻の遺物が、その立證者であるのは、私の云ふ迄もない事である。

然しながらこの外來藝術に內面から結合して、寧ろ之を活用し驅使してゐた勢力の何であつたかを考へてみる必要がある。それは佛敎ではなかつたか。私は希臘の神、デオニソスの銀像が掘出され、ヘレニツク式の梁壁法を有つてゐる希臘の殖民市サーカツプの死都にも、なほ且つ多數の佛寺の散在してゐる事に、無限の興味を覺える。希臘藝術と印度藝術との結合が、佛敎の光明に浴してなされてゐる事は、或意味に於て大喜馬拉耶の有する不依立の力量的表示ではないか。私は希臘文明の恩惠に浴し來つた歐洲の學者達が、世界文明の一切を半島國のそれに關係せしめやうとする努力を、むげに拒む者では無い。が、その出立點と考察の態度とに、大きな困難のある事だけは彼等の自覺せねばならぬ事柄だと信ずる。佛敎藝術史に於ける健駄邏派の勢力は、固より之を輕視する譯には行かぬ。けれども此一派の運動のみを以て、佛敎藝術史の基礎を說明しやうとする事は、今やあだなる望となつて來て了つた。それは健駄邏派に併行した別個の一大勢力の、中央印度に於て殆んど時を同じくして展開してゐた事實が、ムツトラを始めとして、近時各地の遺跡發掘に於て顯著にせられ來つたからである。而してまた此運動はバルフート、サンチ等に於ける遺跡の系統に屬して、健駄邏派以外のものとなさるべき事が明かにせられ來つたからである。

私の續けたペシヤワールの旅に於ては、大喜馬拉耶の連峰が、いつもいつも標的のやうに私の眼に落ちて來てゐた。而してかの連峰を望む每に、私の頭にには種々な想像が點火せられて、止度もなく雜多な感想が燃えあがつて來たのである。燒爛れたやうな太陽の光が一切の强度をあげて、かの銀色の雪嶺に投射する日暮の壯觀に至つては、私の印度に於ける經驗の最も大きな且つ最も强きものゝ一であると云ふを妨げない。此威嚴ある光景を車窓に貪りながら、或日の薄暮、私は北へ北へとペシヤワールに向つて急いでゐたのである。鐵路に沿つて、銃眼をもつ小さな土壘が、茫漠たる草原のたゞなかに、ぽつり、ぽつりと、立つてゐたのが、私の眼には殊に寂しく映つてゐた。

三

私は印度山國の生活には全く經驗を有つてゐない。けれども屢々西印度の原野を往來する機會だけは捉へる事が出來た。かやうな平野旅行には馬車を用ひて、坦々たる道路に砂塵を揚げながら、エムリー樹の間を縫つて際限もなく走りつゞけた事もある。或場合には駱駝車に身を橫へて、一時間僅かに二哩の速力を賴みとせねばならなかつたこともある。けれども險惡な道路を辿つて、車輪に火を發する許りの氣勢を持續する事に於ては牛車に如くものはない。私の旅行には此牛車を用ひねばならぬ場合が多かつた。それは私の行先が常に山間荒僻の地にあつたので、馬車の無い事や、それの通ひ得ない事が少くなかつたからである。牛車は一時間に四哩の道程を進むと云ふが、險惡な路では夫れすら當てにならぬ。土人州政府の官吏のうちには、官制上此牛車を持つて居らねばならぬ事になつてゐる者もある。彼等の交通機關として、馬と牛とは何うしても缺く事の出來ないものである。



アヂアンダーの窟院の繼列

私が西印度の僻邑ハルダプルから毎日アヂャンター窟院に三哩半の道程を通つてゐた時、いつも一つの白い目標が途中の岡の上に閃めいてゐた。それは土人州政府の役人起臥してゐた天幕である。私は朝いつも此天幕に立寄つて、窟院の鍵を役人から受取つて行く事になつてゐた。てふど正月の午後であつたが、私は例日より早く窟院を引揚げて、ひとりぶらぶら天幕の小山の裾を廻つて、私の宿つてゐた官設宿舍の方へ降つて行かうとした。すると突如に、山上から私を喚ぶ聲が聞えた。ふと瞻上げると、例のアーマード君——窟院の管理官——が頻りに手招をしてゐるのである。私は阪道に立ちはだかつた儘、全く疲勞した足を休すめてゐたが、それを見るやイスマイルと呼ぶ從童が、

例の通り丘を辷るやうに降りて來た。彼はア君の命を受けて、私に是非天幕で休息して行けと勸める爲めに來たのである。私がイスマイルにニザムウデイン君もゐるのかと尋ねると、二君のほかにもう一人來客もあると云ふ。見れば、幾つかの天幕の間に、見馴れぬ馬が一頭乘捨てられてゐるのであつた。

私がパンヂヤブ生れのカハン君に初めて會つたのは、此時である。彼は此處から拾餘哩程西方にあるガトートカッチ病院の修理係をやつてゐるのだが、てふど此天幕(テント)の土木技師ニザムウデイン君に會ふ爲にやつて來たのである。私がニ君と豫てガトートカッチ病院を訪ふ計畫をしてゐたものだから、カハン君に紹介する爲めに、ア君は特に私を呼込んだものらしい。ア君とニ君とカ君と私とは天幕に車座となつて雜談を續けてゐた。ア君は私に今日最も面白いものを聞かせるんだと云つて、何事かイスマイルに命じた。吾々の車座の中央には、銀製の大きな喫煙臺(ホッカ)が置かれてあつた。砂糖と煙草とを混ぜたホッカ煙草は、臺上の大きな茶椀形の煙草盛に詰込まれ、其上に炭火(すみび)が山のやうに積上げられてあつた。而して其下部の導管を通して、甘い煙がブクブクと音を立て、水に洗滌せられながら出て來る。てふど醫者が聽診器を耳に當てる代りに口にあてがつてゐる樣である。之を取圍んで私等は談笑してゐた。私と一座してゐる印度人は何れも回教徒(マハメダン)であつた。若し彼等が印度教徒(ヒンヅー)であつたならば、異教徒の私と共に、一椀の紅茶を啜る事すら肯んじなかつたであらう。印度教徒(ヒンヅー)は異教徒の手に觸れたものは決して口にしない、のみならず同じ教徒間ですら、階級の上下に依つて、萬事を嚴肅に區別する。私のやうな旅人には、回教徒(マハメダン)の開放的な習慣の方が殊に喜ばしく思はれる。が、彼等は印度教徒(ヒンヅー)よりも粗暴な點が無いでもない。此覇氣のあり稍々粗放な氣分のある所に、劍と聖典(コラン)とを以て世界統一の夢を結んでゐた彼等の古聖の面影を留めてゐる。印度教徒(ヒンヅー)が若し一度び國外に旅行したならば、彼等は自己の從者にあらずんば、彼自身の手で食物の調理をなす外はない。內地に於ては彼等の巡拜する聖地とか必要な都會には、彼等教徒間専用の旅泊所が設けられてゐるが、無論他教徒の宿泊を許さない。若し他教徒が印度教徒の主人をもつカフエーへ飛込みでもしたら、それこそ一言にして拒絶せられて了ふ。回教徒は固よりかやうな墻壁を設けてゐない。印度教徒ばかりの僻村で、土人の家に宿を取らねばならぬ場合の如きは、殆ど困惑の極に陷る事がある。彼等は往々一椀の水をすら與ふる事を拒む場合があるからである。ア君もニ君もカ君も、紅茶を啜り喫煙臺(ホッカ)を廻はし喫(の)みなどして、赤や青や黄や紺の糸で織出した大きな厚い一枚の敷物の上に座して印度教の話

などしてゐた。其處へイスマイルは、一人の牧童を何處からか伴れて來たのである。

ア君は此牧童に印度唄を歌はせて、私に聞かせる積であつた。牧童は跣足の儘、敷物の上ににぢり上つて小さく端座した。而してア君に促がされて、細く打顫ふ咽喉から寂びた哀調を含んだ響を、絞るやうに高めて行つた。私は此時、孟買の土人街の夜、かやうな小童が古英雄傳の詩篇を誦ひながら、群集に耳を傾けさせてゐた事を想ひ出だした。あれはヒンヅースタニーであつたが、此牧童の歌はマラチー語のそれとウルヅー語のそれとの二種であつた。ア君は是等の唄の意味を一々私に說明して與れた。それは情人を想ふよほど野趣のあるものだつたと覺えてゐる。私は此牧童をねぎらつて、彼に何處から來たのかと尋ねたら、彼は此丘をを降つて三哩程彼方の村だと云つてゐた。天幕の口から瞰下ろすと、丘の裾には山羊の一群が彼れの歸りを待詫びてゐるのが見えてゐた。ア君はちよつと右手を伸べて、側にあつた蜜蜂の巣の絡附いた枯枝の幾本かを取つて、其一本を彼れに與へた。それはカ君がガトートカツチ窟院の雜木林から獲て來たものであるが、枝には飴色に光つた蜂蜜が滴つてゐるのであつた。

私のガトートカツチ窟院への旅行に關する萬端の準備は、カ君とニ君と私との相談に依つて、此時に決定せられた。ニ君の牛車のほかに、私は一臺の牛車をファルダプルに於て調へる事となつて、私の從者ジョギは官設宿舍に殘して置くことと決まつた。私は罐詰、茶、米の類をすべて雜嚢の中に收めて、その他の雜多な要具、殊に寢具などは牛車に積込むやうにすべて之を束ねて置くことゝした。かくて兩三日の後に、私はガトートカツチ窟院に向つて、アヂャンター窟院の丘陵の裾に沿ひ、イースト、ガンヂスの平野を進んで行くことになつたのである。

四

前日からハルダプルの里司に交涉して、朝早く私の官設宿舍まで一臺の牛車を送屆けて與れるやうに決めて置いた。けれども朝になつても牛車は影だに見せない。私は數時間空しく待たされてゐたが、正午少しく前になつて牛車が獲られないから一二時間待つて與れと云つて來た。印度のかやうな人々には約束と云ふものは殆んど反古同樣である。時間の如きは無論眼中にあらうやうも無い。が、私の場合は左樣には云つて居られないのであつた。既にカ君もア君もニ君も旅裝を整へ、私の宿舍の前廊に立つて、私の牛車を待つてゐたからである。

カヘン君は例の馬に乘つて里司に再び交涉すべく出かけて與れた。漸くにして無蓋の牛車が一臺、枯すがれた雜草を分けてや

つて來た。旅行用の牛車にはすべてアーチ形の日除が作られてゐるので、無蓋車は到底私どもの堪え切れるものでは無い。私はア君とニ君との勸めに從つて、此兩君が乘つて來た有蓋車の方に雜居する事とした。他の一臺には食糧雜具が滿載せらたて、之を護りながら一行の從者數名がその上積となつてゐたのである――その一人にイスマイルも加はつてゐた。一行は道を西方に取つて進んで行つたが、二三哩程進んだ頃には、路は全く險惡となつて了つた。車輪は左右の岩にがたりがたりと衝突しながら、進むかと思へば忽ち土壤に喰入つて少しも進まなくなる。路の見當らない時は、棉畑と云はず、穀物畑と云はず、車輪の向ふ儘に橫斷して行くのであつた。左方には高き丘陵が連り、右方にはカンデスの原野が遠く開けてゐるが、其間に起伏する小丘は殆どすべて巖骨を露はし、柳を見るやうなエムリト樹も、圓い輪廓をもつマンゴー樹も、その影をすら留めない。唯荒蕪の儘に委ねられて、遠く濶くひらけてゐるのである。穀物畑と棉畑とが眼に映る頃になると、ぽつりと村落が現はれるけれど、何れも名ばかりのものである。唯是等の村落のうちに、タンダと呼ぶ部落があつた。是は私の見た西印度の部落のうちで、注意を惹き起した一つである。殊にこの部落の婦人達の服裝が、他の部落のそれとは、餘程異つてゐる事が、私の好奇心を著しく高めたのである。彼等は腕と頸と足と耳とに多數の輪飾を持つてゐる許でなく、戶外に出でる時には、刺繡の美はしい赤地の袈で、てふど立烏帽子のやうな恰好に頭部を裹んで、長く身體をも被ふてゐるが、殊にその耳飾には幾つも銀鈴を垂下げてゐるのである。是等の服裝はアチヤンター窟院の壁畫に於ける婦人を想起せしめるやうな古典的氣分を湛へてゐた。この種族はバンヂヤラーと云つて、此地方に於て最も古い風俗習慣を傳へてゐるもの〻一だと云ふ。此種族はこの部落のほか、尙二三此附近にもあるとアーマード君は云つてゐた。

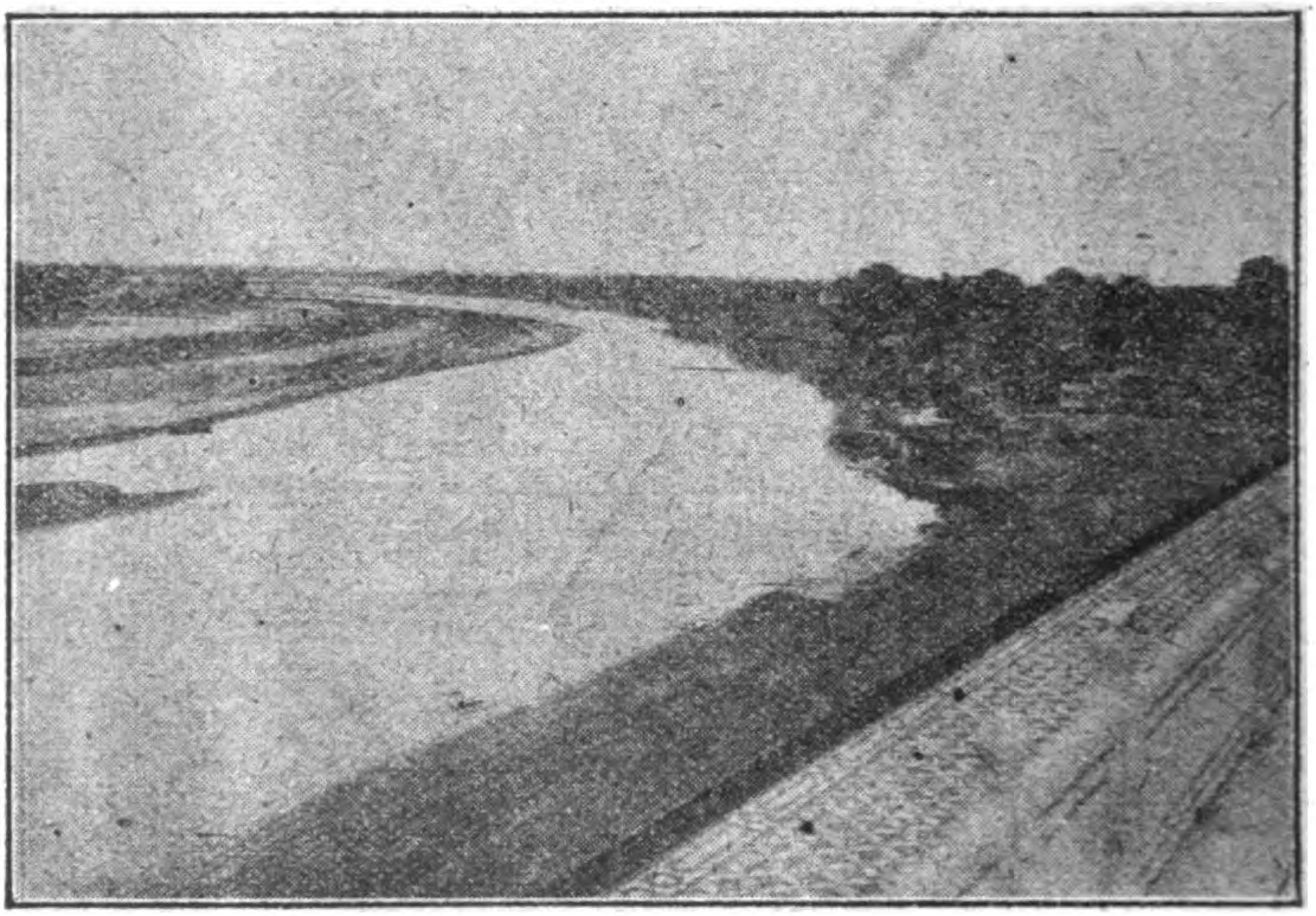
私はデツカン高原の麓のところを進んでゐるのであつた。この地方の原野旅行は、すべて原始的な氣持を起させるが、殊にかやうな僻地の旅に於て私の心を愈々原始的興味に導いたのは、一行の食糧採集法である。吾々の一行の行李には二挺の獵銃が積込まれてゐた。この銃を以てニ君とカ君とは手あたり次第に、鳥を擊ち獸を擊つた。この獲物がすべて一行の食糧となつたのである。無論印度に於ては、地方によつて獵銃の携帶を土人に許さない所もある。けれどもハイデラバツト土人州政府の治下では獵銃の携帶はすべて自由となつてゐる。而してこの獵銃が旅人を害する猛獸の防禦に供せられる事のあるのは云

迄もない。吾々の牛車の軋りに驚いて、鳩や鶴や孔雀などは勿論、兎、鹿の類までが原頭を飛ぶがやうに驅け出だす。すると殊に射撃に巧みなカハン君は、馬を飛ばして之を逐つて行くのである。彼は馬をひたと樹蔭に寄せるや否や、高く馬背にあつて銃を構へ、直ちに引金に指を送るのであるが、殆んど百發百中である。獲物はかのイスマイルガ小刀を提げ、飛ぶが如くに馳け寄つて曳摺つて來るのだが、牛車の上では二君の料理人が、牛車に揺られ揺られ、片端から之を調理してゆくのである。かやうな肉類の獲られる限り、私の旅行では村落に入つて里司に肉類の供給を求める必要がない譯である。ア君が私に罐詰の肉を携帶するには及ばないと、呉々も云つてゐたのが、漸く私に會得せられて來た。

この旅行で私が最初に困難を感じたのは、飲料水であつた。私の肩から下げてゐた、魔法瓶ほど私を悩ましたものは無かつた。熱國の旅行――殊に荒僻の野を行くのには、殆どかやうなものは要をなさない。その破損し易いことは云ふに及ばず、殊に水の分量が普通の大きさのものでは少量だから、直ちに盡きて了ふ。無論孟買やカルカツタなどには大形のもので、之が革嚢に裹まれたものも賣られてゐるから、是等の點を別としても、更に根本的に、困難を感ずる事がある。もと熱國では殆んど湯を要しないから、冷水を之に貯へる必要がある。けれどもかやうな旅先では一度煮た湯が冷却する迄待つてゐる事は出來るものでない。止むを得ず、此熱湯に近いものを瓶に充たして進んで行く事となる。かうして燒くが如き苦熱に渇した咽喉を潤する爲めに、此瓶を開くことになると、熱湯は冷却せずに依然として燒爛らすやうな熱度を保つてゐる。印度人は金屬製の壺を幾つも旅行に携へてゐるが、是等は手を洗ひ口を漱ぎ、また水を飲むことに用ひてゐる。素燒の壺の大きなのが、印度の町々に鬻がれてゐるのを見て、その調度の粗野な事を笑つてはならぬ。この壺に滿たされた水が、壺の四周から滲み出でゝ、之れが熱氣を吸取つて消え去る毎に、壺中の水は冷たくなり增さるのである。熱國には一帶にかやうな自然的冷却法が講ぜられてゐるのだが、素燒は之れに最も必要な條件である。が、旅行にはかやうな燒物の要をなさない事は云ふ迄もなからう。私の魔法瓶の水は、この時忽ち飲盡されて了つた。バイタル邑を過ぎた頃には、日がとつぷり暮れて了つたけれど、左方の山上に於ける回教式の古城址が、星の光に沈默してゐるのを望みたから、牛車は倦まず撓まず、西方へ軋つて行くのであつた。

てふど半哩ほど進んだ頃、路傍に一軒の農家があつた。家族が何か唄ひながら焚火をしてゐた。吾々は牛車を此處に見捨て

ゝ、この農家から數人の苦力を雇つて貰ふことゝしたが、一時間程經て、がやがやと彼等が集まつて來た。吾々は彼等に一行の荷物を運ばせながら、是から一哩程の山道に進み入る事となつたのである。苦力等は一等をなして、先づ山中に分入ることなつゝたので、吾吾は一團となつて徐々と雜木の立はだかつた山徑を進み初めた。日の暮れて了つた山道を、私は探足で一歩一步攀上つて行つたが、私の四周には虎の襲撃を恐れて、カ君とニ君とは左右に銃を擬しながら進んで行つた。丈の高いア君のみは提洋燈を點じて、喘ぎ喘ぎ先頭に立つてゐたのである。闇黑のなかに時々提洋燈に照かへされては、可笑しい程眞面目な顏が露はれて來るが、こんな事を思ふ途端には、必ず岩角に靴を辷らしてひやりとさせられる。枯木が矗々と立はだかつてゐる間を、すがりすがり上つて行くと、山岩が忽ち前程を閉いで了つた。一行は之を周つて更に上つて行く。私はたゞ默しては進み、進んでは喘ぎ、更にまた默々として進んで行くのみであつた。堆かくなつた落葉が私の靴に絡らんで、瀧の如き汗は、いつの間にか私の心身を浸してゐるのであつた。が、此事すら知らずに、私は上る事に焦慮らねばならなかつた。私は殆んど渇死するかと思ふ程、咽喉の渇きを覺えてゐた。

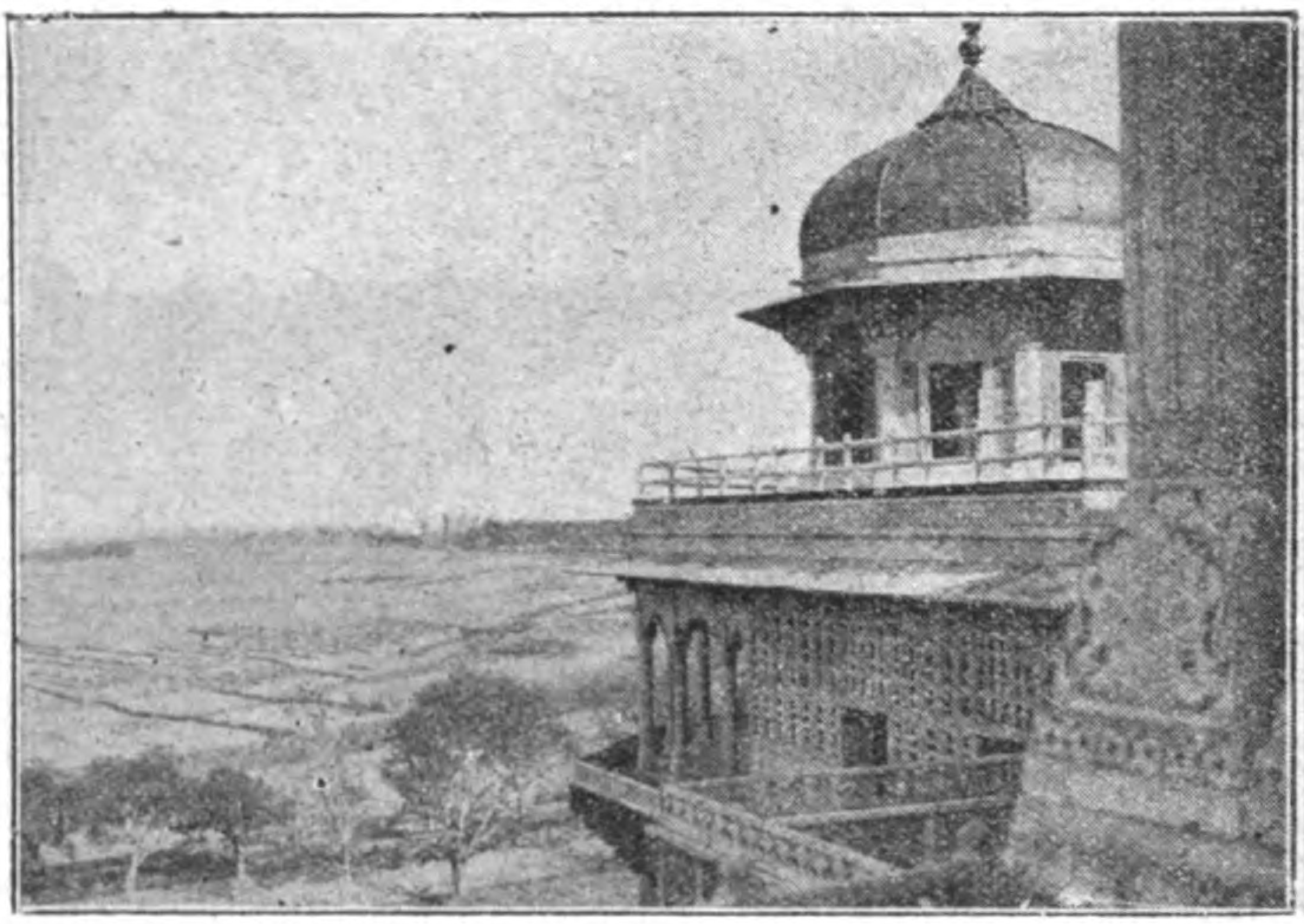


アグラ附近のヂャムナ河

　私が頂上に達した時、ア君はまだ目的地まで一哩半あると云つてゐた。けれどもデッカン高原に立つて、更に茫漠たる原野が展開してゐるのを見て、私の疲勞は半以上醫せられた。てふど月は、海洋の水平線を離れる時のやうに、この高原の一端から上り初めてゐたのである。吾吾は再び平坦な路を進んでジヤンジヤーラの村端に着いた。而して一軒の茅屋に案内せられた。之れが此村のチヤウデイである。此土人州政府の治下では、か

る僻村にもチャウディと呼ぶ公設宿舍の設がある。それは甚だ小さなものであるが、此附近に於ける唯一つの宿舍である。此宿舍の入口には四尺程の棒がぶら下げられてゐる。之はラチーと云つて、盗賊の來襲した時には之を以て打据へるのだと云ふ。私の一行は、とにかくこの土間で起臥する事となつた。苦力や從者は既にこの附近に天幕(テント)張を了へて、其處から出入してゐた。

私が食事を始めた頃から、村の彼方此方に太鼓の音や人の叫聲が高まつて來た。私は最初何の氣もつかなかつたが、それが一頻烈しくなつて來たので、ア君を顧みて『何事が起つたのか』と訊いて見た。ア君は唯にやりにやりと笑つてゐるのみであつた。食事を了へる頃には村の騒はひたりと止んで、再び森閑となつて了つた。カハン君は銃に彈藥をこめて其側に置き、入口の所で就寢した。ニ君は紅茶啜りながら、今の騒は虎の襲撃であつて、一頭の山羊がその犠牲となつたと云ふ事をも聞かせて呉れた。



アグラ宮城よりタヂマハールを望む

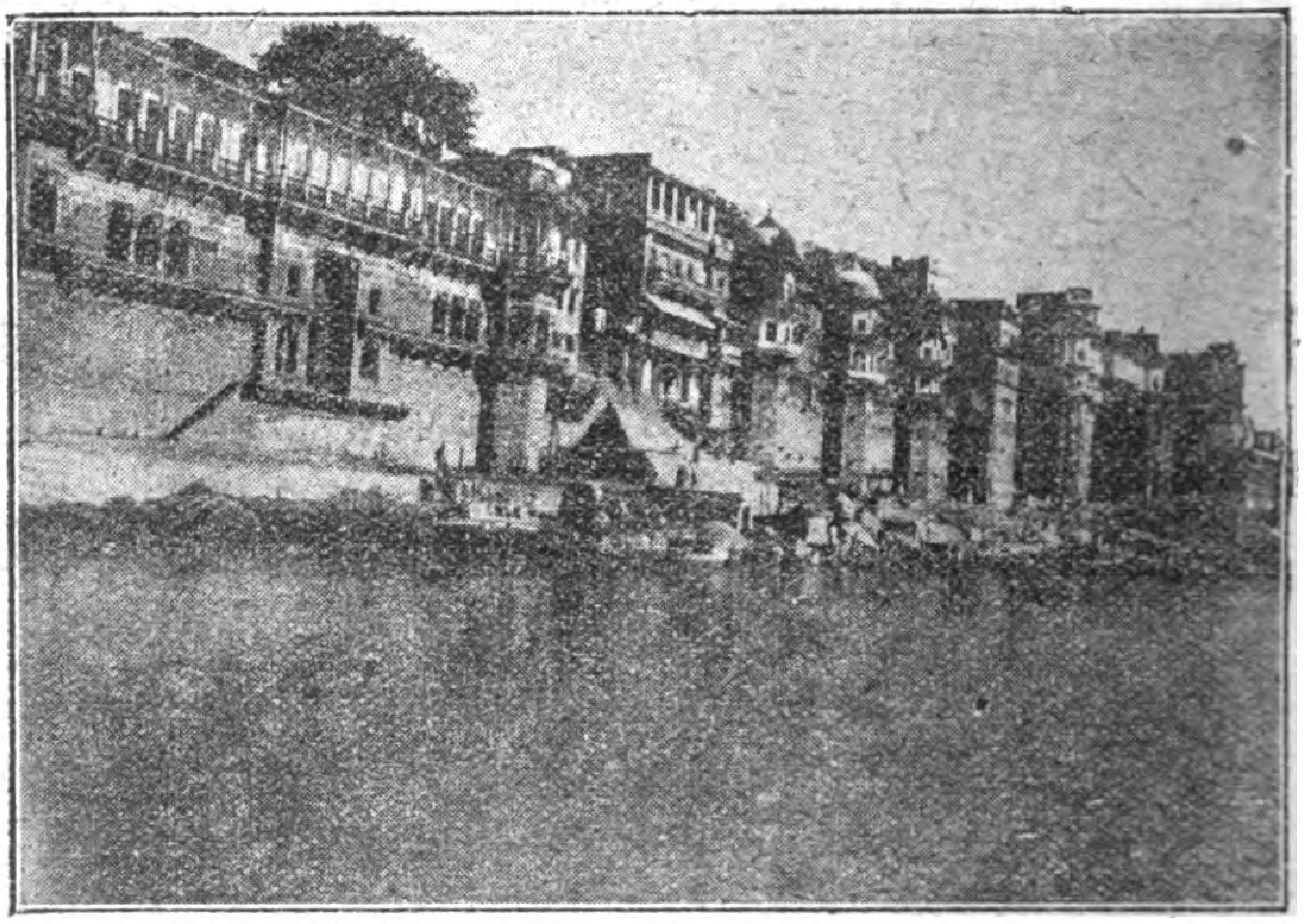
私は此處に數日間滯在した。ガトートカッチ窟院は此處から半哩程であつた。アヂャンター窟院と同じく此の窟院の一郡も亦幽谷の間にあつた。此谷は南方に窮まつて北方に開てゐたが、その東方傾斜の中腹に數個の窟院が掘開せられてゐたのである。その中著しいものは二個に過ぎない。別にまた西方傾斜に三個の窟院が望まれるけれども、之は雜樹繁茂してゐる爲に近づく事が出來なかつた。が、私は此窟院のことに就いては、別に一層詳しく説く機會があらうと思ふので、すべて此時に讓つて置きたいと思ふ。

五

私のガトートカッチ旅行のやうな短時日のものですら、水の恩惠の忘るべからざる事を、私は浸々感じた。熱國に於ける水

ほど、生あるものゝ一切に亘つて、最も痛切に且つ最も嚴肅に生存上の意義を表示するものはあるまい。私が亞仁多(アジャンター)窟院に通つてゐた頃、例の目標の天幕の少し手前の岡に、二頭の鹿が出沒するのを見た。私等が窟院から歸り來る頃、必ず此二頭が岡の上を南の窪地の方へ事つて行つた。彼等は屢々土人に脅かされてゐたけれど、其道を變ずる事なく、時を更める事なく窪地へ走つて行つた。其處にはアヂヤンター谿とワグール谿とが合した淸流が淀んでゐたからである。

印度都市の發展が水と極めて關係深い事は、カルカツタ、アグラ、デリー、ベナーレス其他の大小都市が何れも大河に臨み、或は水の潤澤な地點に在る事に依つても想像が出來る。が、然し水流が文明と密接の關係ある事は、固より印度に限つた事でないと云へないでもない。けれども熱國に於ける水流の恩惠は、他のそれとは格段に痛切である事を考へなければならぬ。印度に於ける大小殆んどすべての都市が、大小無數の河流に沿うて營

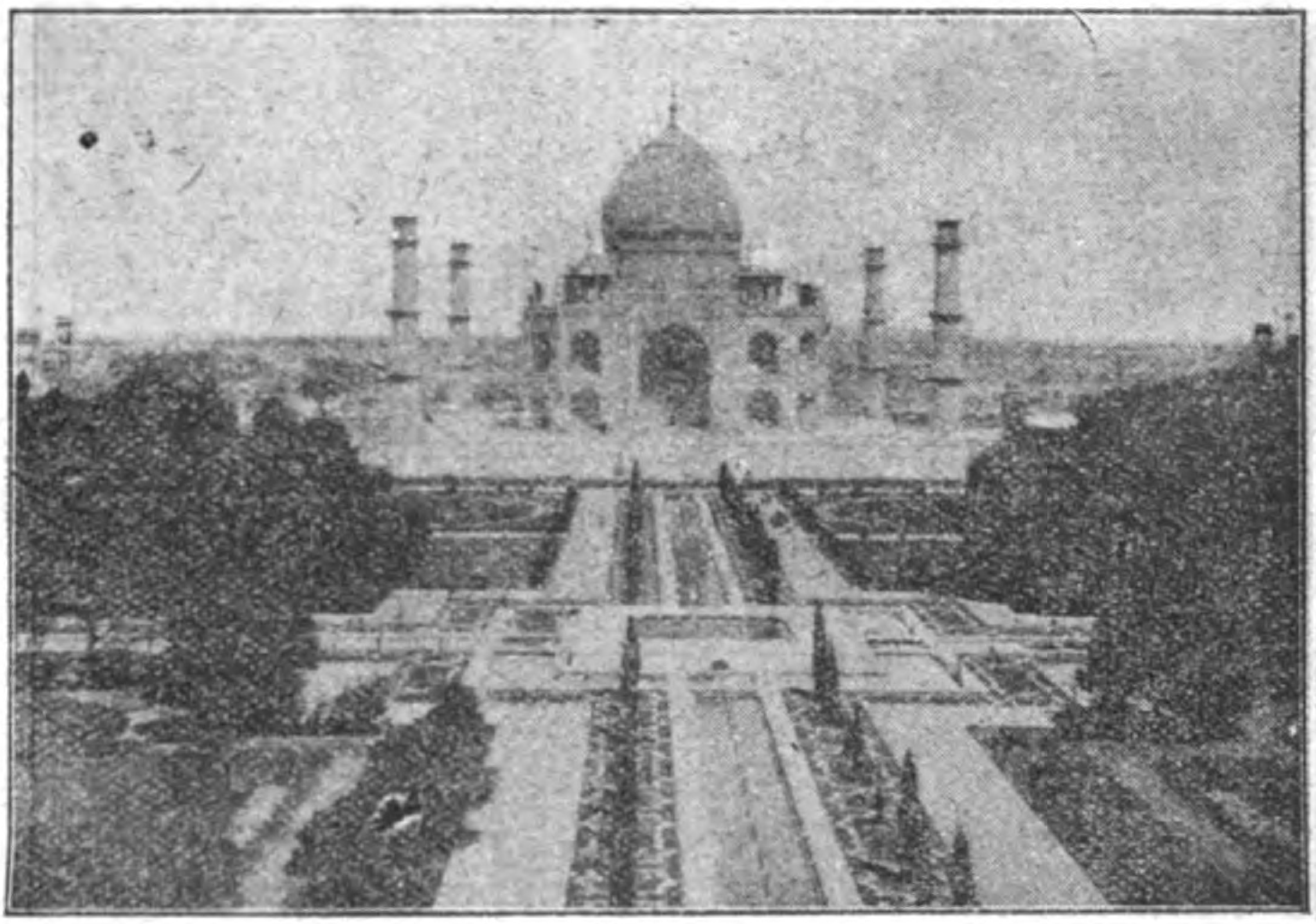


ベナーレス市のガンヂス河畔

まれてゐる事は、溫帶國の事情とは頗るその趣を異にしてゐる。假令小川にせよ、絶えず走流してゐる水は、印度人の喜んで口にするところであるが、彼等は走流せない水は口にする事を禁じてゐる。河水は彼等の飲料水であり、沐浴場であり、娯樂場である。ベナーレスの裾を流れるガンヂスに印度教(ヒンヅー)の善男善女が浴禱するのや、ゴダヷリーに沐浴するナーシツクの女達、さてはヂヤムナ河に身を淨めてゐるムツトラの苦行者の群の如き、固より宗教的意味に於て、河水を神聖視してゐる結果には相異ないが、然し更に一歩をすゝめて、神聖視するに至つた事情自體に就いて考へると、河水の功德そのものに對する感謝の感情に基いてゐるのでは無いか。否河水に浴する行事は、一面に於て水の恩惠を直ちに受けてゐる事では無いか。大都市に限らず、僻地の一小村落でさへ水流との關係を決して疎かにして居らない。此事は殊に古くから印度人の考へてゐた事であり、又考へざるを得なかつた所である。印度古代の典籍中

には、村落建設地の選擇に就いて、明かに水流に近かるべき事を、必要條件として指摘してゐるものもある位である。

とにかくも印度の都市と河水との分離し難い關係は、やがて建築その物の美的價値と、河水の自然美的要素との結合を促がすやうな結果に到達してゐる。殊に近代に於て著しく發展した所謂印度回教式(インド・モハメダン)の建築の如きは、此種の實例の甚だ多數を遺してゐるのである。アグラ、デリー等の諸々の宮城(フォート)の如き、又かのタヂマヘルの如き、殊にその適例として擧げらるべきものである。是等は何れも大河を背景とし、又は之れに伴隨する平野を背景として建築的效果を收めんと期してゐる點が多々認められる。單に印度回教式を云はなくとも、更に廣く近代印度の大建築物を最も多く有し、且つそれ等のすべてをガンヂス河に捧げつゝあるものとして、ベナーレスの都は逸する事の出來ないものである。一たび船を賃してガンヂスの流に泛ぶと、是等無數の寺宮(テムプル・パレース)が、或は高く或は低く河水に面して、一波動がない水上に其影を倒置しながら、河に沿つて遠く遠く連つてゐる光景を見るであらう。固より個々の建築に就いては、種々な意味の缺陷あるを免れないけれど、之を全體として見る時は、實に偉大な力の表示が、人を魅了せねば止まない概がある。



アグラのタヂマハール

然しながら熱國に於ける水に對する要求は、一變して水を娛樂的に用ひる風潮を喚起するもので ある。王者(ラジャー)の如き權力者は水の要求を轉じて、毎に之を娛樂方面に導びくやうになり、築池、噴水、飛泉を始めとして、水に就いての雜多な娛樂的意匠の發達が促されてくる。此事實は固より近代ばかりではない。印度古代からこの種の術が發展してゐるが、その結果として建築の配置上にも種々な工夫が凝らされてゐるのである。近代に於てはかの諸々の回教徒的宮城に於ては勿論、殊にアグラのタヂマハールの如き、オウランガバットのアピヤ・デウラニのモスレムの如きは、その廣壯なものとして數へらるべきものである。

新時代流行の象徴として觀たる「自動車」と「活動寫眞」と「カフェー」の印象

拜啓時下益々御清榮奉賀候御多忙中御迷惑の段恐入り候へ共九月一日發行の「中央公論」誌上に新時代流行の象徴として觀たる「自動車」と「活動寫眞」と「カフェー」の印象と題し、近代生活に對して深き興味と觀察とを有せらるゝ新らしき人々十數氏の回答を蒐錄いたしたき計畫に有之候へば來る廿日までに何卒御感想御洩らし下され度伏して懇願仕り候

右の如き趣意の言に對し左の如き回答を賜はりたる諸彥に深く御禮申上候（編者しるす）

○ 柳澤健

自働車

私は大體に於て近代生活の讃美者である。それにも拘はらず、その重なる産物の一つである自働車に付ては、かなりに強い反感を持つてゐる。それは、自働車がよく人を轢くとか、また、雨降りの時に泥をかけられるとかいふやうな意味ではない。そんなことは、全ての近代的産物の屬性(アトリビュ)と言つてもいいので、ひとり自働車に限つたわけではない。例へば、工場にしても、汽車にしても、電車にしても、みんなかうした加害性は一樣に持つてゐる。

私が自働車を好かない理由は、餘りにそれが『實用』むきだしな點にある。その姿態にしろ、その速度にしろ、どこにその『實用』を離れた好ましい味(あぢはひ)があるか。先づその姿態について見るのに、機關部と運轉士席と乘席との三つが子供でも考へ出せさうな無比な原始さを以て、過度な實用的考案をもつて、

まゝに竝列してゐる以外、何等の趣もなければ味もない。そこへ行くと、例へば汽車にしても（この汽車は、もうすでに畫家ターナーがいちはやく捉へてゐる）電車にしても、自働車よりは遙かに姿態の美をもつてゐる。殊に近代的産物のうちでも殊に重要な軍艦や汽船（汽船のことを言へば、直ぐ私はあのC・P・R の所屬船エムプルス・ラシアやエムプルス・エシアのあの見事な壯麗な胴態を想ひ出す）やの姿態の美くしさは、全く近代文明の製作にかゝる偶然の傑作である。それ等と比べると、自働車といふものは、何といふ貧しい、玩具じみた、卑俗な恰好をしてゐるのであらう。　殊に、亞米利加人が Street Lice（街の虱）と稱んでゐるかのタクシーにいたつては、全ての部分が最も惡い意味の『近代的』である。

姿態と同時にその速度にも、すこしの面白味や、味がない點で、私は自働車を好まない。そこへ行くと、やはりあの古風な綺麗な馬車だ。私が住んでゐるこの横濱にも、偶々その馬車を見る。馬の跗音、車輪の軌音、それから靭やかな鞭聲、――たちまち私等は、その車窓を通して花のやうな顏が靜かに搖れてゐるのを見るのである。しばらくの間見るのである。やがて、快いアンダンテの速度で、まるで音樂のやうに馬車は行つて了ふ。ワツトーの繪を見るやうである。それなのに、自働車で私等が見るものは何だ。恐ろしい喇叭。臭いガソリン。ひどい埃。おやと言ふうちに、もう遙かの方に馳せ去つてしまつてゐるのだ。その車室のなかに花のやうな顏があつたのか、または、紙屑のやうな顏があつたのか、すこしも我等に見せては呉れない。方またその速度は、自働車に乘ることをも決して愉快にはして呉れない。東京から箱根まで自働車を飛ばした經驗のある人のなかで、車から下りた時、蹌めいて直立できない醜さを示さない人が一人でもあらうか。

私は、自働車を嫌ふ。たゞいつのことであつたかそれに打ち乘つて、車室の燈を消したまゝ、暗い街道を二三里疾驅させたときは、探偵小説を實地に行つてゐるやうな氣がして面白かつた。併し、それは二三年まへのことで、特にその頃は自分が子供じみてゐたからだつたのかも知れない。

活動寫眞

芝居を盛んに見て廻つてゐた時代があつた。その頃は、活動寫眞なんぞといふと、頭から低級な卑俗なものだとして、輕蔑し切つてゐた。所が、いまは恰度その反對だ。歌舞伎座邊で歌右衞門や羽左衞門やを眺めてゐるよりも、オデオン邊でペバリー・ペーンとかフレデリック・ワーデなんぞを眺める方が、ずつと激しい興味を感じる。從つて假令ば、横濱の横濱座といふ芝

居小屋に所謂東京の名優の一行が見えるときに殆んど揃掛けたことのない自分も、いゝ映畫が來たといふ噂がある時には、『萬障を排して』も屹度出掛ける。)東京の名優たちがたかゞ船着場の舞臺ぢやないかと言つた心持から觀客を甘く見て、すつかり調子を落して了ふのに拘らず、映畫の役者はそうした『惡徳』をしないだけでもいゝ氣持である)

昔は芝居に行つても、黎明のシャギリ一つで、また、あの賑やかな下座の囃し一つで、すつかり芝居的情調に醉はされて了つたものだ。所が、そうした柔かな心を失くしたせいか、今では、最初の一幕二幕邊は、寧ろ苦痛をさへ感じて見るやうになつた。殊に、太陽の光線がまだチラ〳〵場内に動いてゐる際などに、脚燈のまへで白く塗り立てた役者が態とらしい調子を張り上げて怒鳴つてゐるのを眺めると、全く、哀感をさへ感じる。從つて、すつかり芝居の空氣に飽和するまでには、準備の努力と時間とが大分要る。Time is Money!

そこへ行くと、わが Movie は、映寫と同時に殆んど瞬間の差すらなく誘惑の火花を散らす。明るい外光のみなぎつてゐる街上から、急に薄暗い建物のなかにはいりこむ。そして手探りで座席に坐り込むか込まぬうち、もう、ベバリー・ベーンの悧巧な眼が、エラ・ホールの悲しんだ眼が、または、ミンタ・の可憐な眼が、私の心をむざんに[illegible]くる。醉と、私は、いかなる名酒からも得ることが能きたい。

また芝居の惡口になるが、松井須磨子のノラをいく度も拜見してゐた私は、最近に映畫でドロシー・フイリップのノラを見て、誇張(していへば)涙が滴れる程ど感動した。矢張り活動寫眞の方が、いゝ――いや、少くも外國の土地に渡るまでは、何と言つても活動寫眞の方が遙かにいゝ。

上に書いたやうな單純な私一個の好みから言つても、私は Movie Fan であるが、更に、一般社會の人心に與へる文化的影響を立場として考へれば、この活動寫眞の流行は、假令ばかのウイルソンの自由と人類とに關する堂々たる宣言よりも、またかのサー・グレーの國際聯盟に關する些か空想的なる熱情的宣言よりも、更にトルストイの激しく熾んなる平和論よりも、はるかに強く深く廣く行き亙つて、人心を蕩揺し、革正し、眼覺めしむるものがあるやうに思ふ。映畫にあらはれたる陰謀、戀慕、惡徳、美徳、それ等の限りない場面が、秀れたる顔と肉體との表情に於て演出される。そこには、表面の『西洋』がある計りでなく、裏面の『西洋』がある。それに對して、ある時は愛を、あるときは憎しみを、あるときは恐れを感じる。結局一般の民衆は笑い乍ら、顫へながら、『西洋』といふものを實によく理解し

得る。この意味で活動寫眞こそ、日本文化史に於ける寫眞の開港』でなくて何であらうか。

私は、兎に角、活動寫眞を好む。

カッフェ

佛蘭西邊でカッフェと言へば、ほんの珈琲一杯か、リクールの一杯も吸つて出る所なのださうである。所が、この日本では、あの植民地的なパウリスタ邊を除いては、さうした飲料一杯位で快く解放して呉れさうな所は一つも見當らない。どうしてもライスカレー一皿か、トンカツ一皿位は註文しなければいけないらしい。

人間は、二千五百熱量(カロリー)だけの熱を與へる食物を採つてゐるのが理想的であるといふ。それ以下でもいけないし、それ以上でもいけない。所が、日本人は、かうした標準を超えて、素ばらしく大食してゐるさうである。斯うした大食的民族性が、矢張り、この和製カッフェを生むだものと思へば、決してその罪がカッフェ經營者の營利上の貪欲(どんよく)にあるのではないことが判る。從つて、本來のカッフェらしいものを日本で創(はじ)めるとして問題は甚だ簡單でない。即ち、それは、大食的民族性の改革といふことになるからである。

所が、恰度差當りこの民族性の改革には、この物價暴騰の時期を利用するがいい。即ち、減食(といふよりも標準量に復歸すると言つた方がいい)を勵行して、時でもないのに珈琲をのみながらライスカレーを食ふといふやうなことを廢止するのである。さうして、純粋のカッフェが創(うま)れるやうにするのである。

併し、よく考へると、物價暴騰を利用して減食を勵行しやうといふやうな人は、珈琲を飲むかはりに、水道の水で我慢しやうといふ側の階級者があらう。さうすると、上に書いた改革案は、結局、目的に到達できないことになる。――

結局、日本ではカッフェは、中産階級以上の人達の爲めといふことになつてゐる。從つて、白粉を塗つたウエトレスを配しライスカレーを勸めるのけ、當然の行爲だといふことになる。そのかはり、一方に下級階級者のためには、居酒屋なるものが隨所に存在する。そして、早朝から開店して、下級階級者の金錢と體力とを費消させるに努めてゐる。

斯うしたカッフェや居酒屋が無數の客を送迎してゐるのに、どうして本氣の食糧暴動が起る筈があらう。肉無日(ミートレスデイ)でもやつて來ない限りは、永久に和製カッフェは存續して、客に滿足と滿足の悲哀とを與へて行くことであらう。

――八・二〇

○ 小杉未醒

日本のカフフエの女共はまだ定型を作すに到らないやうだ、女優まがいから子守まがいまである、巴里のカフエの男衆(ギャルソン)のしやんとした昧は格別です、久しく行かないがプランタンにはともかく一種の風格を認める、それと淺草の神谷バーが好い方だ。

私共の職業には自働車で飛ばすほどの急用がない、欧米最新型の自働車も、狭い不完全な東京の街路では單に憎まれ者になるばかりだ、それより東京には小さい一頭立のタキシー馬車が欲しいと思ふ、東京の道路は何日になつたら都市らしい道路になるだらうか、秋雨のジメジメする頃などは殊に此の都の下水と道路の未開蒙昧さを呪ふ、大阪で人と同乘して行人を轢いた事があつたが、股らしいもの丶上を、タイヤが通り越した、その時の股に傳はつた觸覺は今以て氣味が悪い、當世見たくないものを擧ぐれば、日本人の西洋劇と並んで和製のシネマはその最たるものである、餘りに西洋出來のヒルムと段が違ひすぎる、舶來ヒルムで、西洋人の佳く發達した體格と巧みな表情の出來る端正な容貌とを眺める事は悪くない慰みだ、同時に是を日本人と比べる時に諦めのつかぬ悲觀を持ちます。

要するに此の三つのものが、果して「新時代流行の象徴」であるならば、日本は西洋文物の殖民地に過ぎない、然んなものか

も知れない、願くは中央公論に次の機會に於て「[illegible]」と「茶道」と「下駄」の印象でも求められたい、日本にだつて褒める種の無いと云ふ事は無いらう。

○ 柴田勝衞

燕の如く輕快に、隼の如く敏捷に——と云つたところで、此の道路の不完全さとと、此の速力の鈍さとでは、これも結局、名ばかりに過ぎないかも知れないが——疾走する自働車は、決して世人の考へて居るやうな贅澤な乘物ではありません。成る程自働車も乘手や乘り樣によつては、隨分贅澤なものになるかも知れませんが、然かしそれは乘手の罪で自働車の罪ではないのです。こゝの差別を能く辨へて頂きたい。如何にも自働車は、車輛の價だけ引離して考へると、決して安い品物ではありません。けれども其れから生じるところの利得を勘定の中に入れてみたならば、決して高價な買物ではありますまい。隱れた利益は別として、一番早い話がタクシイです。この寄待自働車が、距離と人數次第で、却つて普通の人力車より安く上る事は、世人の屢々經驗して居るところでせう。それにも拘はらず依然として自働車が貴族的な乘物、人力車が平民的な乘物と見做されて居るのは何の爲めでせう。斯うなると僕は、凡ての事物に對する

世人の理解力を疑はずに居られません。品物の正札だけを見て取つて、其の品物の本質的の價値を見拔く事の出來ない、考察力の淺果かなさを悲しみます。翻つて考へて御覽なさい。あの砂埃の中をえい、えいと掛け聲をしながら、汗みどろになつて曳いて行く人力車夫は、謂はゞ態の好い現代の奴隷ではありませんか。それを平氣で乘り廻して居る紳士や淑女や軍人や官吏があるのだから驚くのです。乘つて居る人は勿論平氣でせう、曳いて居る人も亦存外平氣かも知れません。然かし乍ら僕等の愛する同胞が、恰かも彼のロオマのネロ皇帝時代に於ける奴隷の如く、大きな鐵の鎖で肢體を縛り上げられ、一日一杯、精かぎり根かぎり石臼を曳くのを見たならば、何うして冷然と傍觀して居られませう。それも誰の爲めに、皆な僕等の爲めに。僕はそれを思ふ度毎に、總身の血が一時に頭に逆上して來るのを覺えます。自分が乘手の場合には、此の上も無い羞恥を感じます。乘手が外國人の場合には、之に人種的の感情さへ加はつて、謂ひ難ない侮辱を感じます。それで居ながら自働車が貴族的で、人力車が平民的だとは何うした事でせう。僕は寧ろ其の反對に考へます。何は兎もあれ、世界屈指の大都會たる東京が、二百萬の人口に對して千四百八十餘臺の自働車では、餘りに比率が少な過ぎます。今に乘合自働車が出來たなら、其の時こそ初めて自働車の價値が幾何か市民に諒解されるでせうか少く共「リキシヤ」の文明だけは、餘り國の名譽ではありますまい。

○

戰爭でもデパアトメント・ストアでも活動寫眞でも、一番甘い汁を吸つて居るのは、亞米利加のキヤピタリズムです。大資本の下に大規模の仕事を計畫されたら、之に向ふ敵はありません。殊に活動寫眞などに至つては、大統領ウイルソン初め、氣分の轉換と稱して毎日見物に出懸け、必要があれば夫に自らフイルムの裡に入る(「國の光」の如き)と言つた調子で、直接間接に奬勵して居るものだから、今では佛蘭西のパテイも伊太利のミラノも米國の一ユニヴアサルに殆んど併合されさうな有様、恐る可きは此の亞米利加のキヤピタリズムです。然し乍ら活動寫眞が今日のやうな流行を來した所以のものは、單にキヤピタリズムの力だけではありますまい。其の背後には時代の民心に投ずる、もつと本質的な何物かゞ潜んで居た筈です。第一が安價な娯樂機關として、第二が時間の經濟から、第三が趣味ある教育機關として、其の他擧げれば幾何もあるでせう。第一の安價な娯樂機關としての活動寫眞は、今更説明する迄もなく、スリリングな探偵物やセンセエシヨナルな人情物が民衆に喜ば

れる事は、何時の時代でも變りがありますまい。第二の時間の經濟は、終日時間に束縛されて居る勞働者に取つては勿論のこと、比較的時間に餘裕のある人々に取つても亦必要な事で、苟くも活動的な近代の人間で時間を惜しまない人間は一人も無いからです。第三の趣味ある教育機關は、色々に解釋されるでせうが、先づ第一に僕等が因襲的に持つて居る「教育」と云ふ概念を排除して考へなければなりません。活動寫眞はそんな堅困しい教育を施す機關ではないのです。美しい情操の中に、殆んど無意識の見物を啓發するのが、活動寫眞の好いところで、此の意味ではクラシックの翻案や、時事問題の寫眞などが適例です。就中、後者に至つては、見物の一人一人を其の事件に對する「目撃者」とするだけに、恐らく新聞以上に有效な教化の役目を勤めるものとも見做す事が出來ます。それだけに之を惡用された日には、何んな事になるか解りません。丁度開戰以前に、米國に於ける獨逸系の新聞が仕組んで遣つた排日目的の寫眞のやうなもので、文化の破壞に對しては格好な兇器となる譯です。其の他に外國の婦人に取つては、以上の三つの理由を總括したよりも、より以上に大切な理由があるのです。それは活動寫眞を通して流行の服裝を知る事なのですが、これは現代の日本の婦人に取つては未だ少し縁が遠過ぎるやうに思ひます。と云ふのは日本の婦人が服裝に對して趣味を持つて居ない譯ではなく、布地や縞柄にのみ重きを置く今の和服は、フィルムに取つて形態上の變化が少しも無いからです。日本の活動寫眞の發達は、輸入フィルムでも何でもまだ本當にこれから先の事です。

○

一杯の珈琲が何れだけ僕等の活動力を助けて呉れることか、それは角砂糖入りの珈琲などを嘗めて珍重がつて居た人達に取つては、恐らく理解の出來ないところでせう。然し眞に僕等の活動力を助けて呉れるものは、珈琲そのものでは無くして、カフェーに於ける氣分それ自身なのです。珈琲はモオカであらうが、ジャヴアであらうが、乃至はブラジルであらうが、そんな事は一向かまひません。唯だ半日の或は一日の勞働の疲れを癒すに足る、手近かな休憩場が欲しいのです。假りにほんの一時の遁れ場が欲しいのです。小綺麗な室とさつぱりした卓、先づこれ丈あれば申分ありません。何うせ珈琲は一種のレフレシュメントに過ぎないのですから。室は混んで居やうが空いて居やうがそれも平氣です。慾には混合つたより靜かな方が好いと思ふが、之は望む方が少し無理かも知れません。混んだら混んだなりに一種の氣分が出、靜かなれば靜かなりに一種の氣分を味ふ事の出來るのも亦、カフェーの特長です。それから又此方の、

の持ちやう一つで、何んな喧騒な人混の中へ割込んでも、丁度雑踏のカフェーの一隅を占領したイプセンのやうに、イゴテステツクな態度を構へて、傲然と獨り讀書や思索に耽ける事が出來ます。之も嚴格な意味でのレストオランでは出來ない藝當で、カフェーに限られた特權だと思ひます。友達があれば腹藏なく盛んに談じ合ふのも一興でせう。其の他用談を濟ます事も、戀を打明ける事も、賴みを訴へる事も、凡て其の當人の勝手です。此等の事がすべて一杯の珈琲で辨じられるのだから、カフェー程便利なそして安上りな場所はありません。カフェーは忙しい者に取つては頗る輕便な倶樂部です。怠け者に取つては頗る手頃な暇潰しの場所です。唯一つ僕に理解の出來ない事は、カフェーへ來てあのまづい料理を鱈腹食つて行く人の多い事です。僕は左様いふ人々を見懸ける度毎に、料理を召上る目的ならカフェーは損ですと敎へて上げたい氣がします。大體がカフェーは食事の時間を節約する爲めに、極く簡單に濟まさうと云ふ目的を以て這入る場所なのですから、謂はゞ一種の公民食堂とも見られるでせう。然し乍らカフェーの最も主要な目的は、矢張り精神や肉體の疲勞を癒す爲めの休憩場に在るのでは無いでせうか。一杯の珈琲、詩人は其の中から「彼岸に立つ人」の聲を聽くでせう。哲學者は其の中から解き得ない謎を解くでせう。畫家は其の中から天使の姿を見出すでせう。商人は其の中から神策を摑出すでせう。近代人の經濟的生活から生れたカフェーも、斯くの如くして初めて意味が生じるのです。貪婪の蔭にも誠實があり、淫蕩の裏にも眞の愛が宿るのです。若し夫れ單に珈琲を啜る丈でなく、冬の燃料を節約する爲めにも、人々がカフェーのストオプを圍んで、そして體を十分溫めて歸るやうになれば、其の時は本當にカフェーの生活の始まつた時なのです。

○　佐藤春夫

○これらの三つのうちでは、(いや、もつと外のものを澤山に加へて見ても)、私は活動寫眞が一番好きです。私はあれを考へる時、今の時代に生きて居ることの恩澤を、初めて少々感じます。あれは人間の物質的發明のなかのごく少數な最も永遠的なものの一つだと、私には思へます。原始的なユトピアが出來上つても活動寫眞だけは、是非舊文明のなかのいい遺産として殘して置いたらいいだらうと考へます。あれのいいのを見て居ると、見恍れて居ると、私は Transcendental な氣持ちになります。あれはこれからさきも、もつといろいろな工夫を經た上では、立派な藝術上の一様式になる資格をもつて居ます。今のま

まのやうなセンセイショナルなものもあつていいが、あれはあれで發達してもいいが、外にももつといろいろな試があつていいと思ふ。それにはもつと才能のある作者や、技師が必要です。さうして活動寫眞は、一卷のフィルムを作るために天才を傾けるだけの價値があります。これは決して物ずきからばかりではありません。私は活動寫眞の作者になつて見たいやうな氣持がします。尤も日本では駄目です。

○ただ筋の珍奇をばかり求めないでも、場面のとり方や、物の見方などに依つてでも、全然新らしいものが出來るだらうと思ひます。今でも、フィルムの上にその苦心がないではありませんが、もつとこの方面を工夫することが肝要でせう。さうすれば繪畫的の向上は勿論、活動寫眞で心理描寫も出來れば、或る音樂的な效果を觀客に與へることも出來るでせう。今のところ、活動寫眞の作者達は少々千篇一律です。以上のことを工夫すれば活動寫眞は今よりももつと有意義なものになり得る筈だと思ひます。

○さうなつた上では、今までの文藝上の傑作なども、一つ殘らず、且つ完全に、フィルムにすることが出來るでせう。尤も、それには、それに從事する者に藝術家としての非常な天分を要することは勿論です。今でも手輕に出來さうなものを言へば、アンデルゼンの「即興詩人」だの、スイフトの「ガリバア旅行記」だのを活動寫眞で見られたら、さぞ愉快でせう。外國ではもうありさうにも思ひます。それからお伽噺風の作品などに立派なものが出來て居てもいい筈です。活動寫眞位、空想を實現させるに都合のいい世界は外にはないのですから。

○文藝上の傑作が活動寫眞になるならば、同時に文藝的の創作も活動寫眞で出來るでせう。それは文字よりも遙に有機的な、直接な記號――即ち、人間そのものやその他それぞれの實際のものの幻影を、それぞれの必要に應じて直ぐに見せることが出來るだけに、もつと端的だとも考へられます。もつともこれは少し一面的の考察かも知れませんが。が、何にせよ、芝居などが、今のままでただ背景や衣裳の寫實的要素ばかりを重じて居る以上は、活動寫眞の方が遙に、藝術的にも面白いと思ひます。作者としても、又、觀客としてもです。芝居か、活動寫眞と對立する積ならば、それ自身の性質を自覺して、もつと單純化され樣式化されてこそ、初めてそれの意義が生れませう。芝居に寫實的な一面のあつてもよかつたのは、活動寫眞のなかつた以前の要求です。同時に、活動寫眞では、私には成可く生活そのままの藝を見ることを要求します。この意味で、日本の舊劇などが活動寫眞になつて居るのは、今更ながら馬鹿馬

さの極です。さうして、活動寫眞がもつと進歩した曉には、寫實的すぎるやうな舞臺の上の芝居なども、同樣馬鹿馬鹿しいものになりませう。

○私自身に就て言へば、私はあの人ごみのなかで、併し、孤獨な心持ちを失はずに、別世界のやうな世界で自分と同じやうな人間が、溌溂として動いて居るのを見ることが最も愉快でなりません。屢々見なれて居る役者が畫面のなかへ現はれる時には、私はごく親しい人に逢ふやうな心持もします。汽車や汽船の發明が世界を狹くしたと同じやうに、活動寫眞は、時間と空間との上に或る革命を與へたとも言へませう。少くともそれの萠芽を現して居ます。

○活動寫眞の辯士といふものは、その巧拙にかかわらず實に不愉快な、不必要なものです。それとも一般の見物には、やはりなくてはかなはないものでせうか。活動寫眞本來の興味から言つても、話し聲も足音もない世界なのだから、さうしてそれが一種の味と感じとを起させるものなのだから、成程澤山の見物が押合ひながら、併し聲を喰んで何の音もなく、聲もなく、ひつそりとして見物して居るのが一番いいのです。少くとも自分一人だけはその心持で居なければなりません。それでなければ活動寫眞の味がわかる理由はないのです。ただ騒々しいだけの辯士などといふものは一刻も早くやめたがよろしい。外國ではあんなものは一つもないさうです、然るべき事です。人の說明がなくとも、フキルムだけでちやんと筋が通るではありませんか。

○今度は自動車のことを言つて見ませう。私はごく稀に自動車へ乘ることがありますが、乘つて居ると何だか犯罪的の衝動を感じます。一度、T君とK君と三人で、昨年あの大暴風雨の翌日に、自働車で夜更けに大森へ行つた事がありますが、(これは別に遊蕩でも何でもありません、ただ物好きにです。疑ふ者には恥あれ!)まだ十分に恢復しない道や空模樣で、それに空には片破れ月か懸つて居ました。その風物が仲々愉快でしたが、その時には、何だか後から追跡されて居るやうな心持もしました。活動寫眞でよく惡漢などが自働車で逃げるからでせう。して見ると、この心持もやはり「藝術の模倣としての人生」の例でせう。

○私は二三年前極くの山の中の田舍に住んで居て、犬を二疋養つたことがあります。東京へ出て來た時に、犬もつれて來ましたが、當座、二疋の犬の最も怖ろしがるものは自動車でした。一疋は鬪犬の秋田犬でしたが、あれなどは自動車を見ると必死の攻勢を示しました。一疋はポインタアの極く優しい奴でした

が、耳を後にひきつけて逃げまどひました。奴等には自動車が、えたいの知れない猛獸に見えたのでせう。

○私はその時さう思ひました――物質文明が極度に發達した時には、市街は二十層三十層の連なる建物のために、恰も大森林のやうになり、その町のなかを無數の自動車的の乘物が、ちようど太古のさまざまな形の猛獸のやうに疾走するだらう。さうしてその時には徒歩で歩いて居る人間が最もよわい獸になる。人間は人間の力でほんとうの猛獸や大森林を征伏したが、その代りに、今度は自分自身の智惠でそれを創造した、と。今度の戰爭で裝甲自動車タンクを製造した英國人は、別に何も新奇な愕くべきものを案出したわけではありません。タンク位のものは、自動車を見たことのある人間で、少し空想力のある人間になら誰にでも直ぐ思ひつく事です。

○妙なことを言うやうですが、私は自動車のガソリンの匂がちよつと好きです。で、街で自動車とすれちがうと、ちよつとあの匂を嗅ぐために立ちとまります。併し私の趣味は自動車よりもより多く馬車です。

○カフヱーのことは今別に何も考へません。ただ日本の風俗がだんだん歐化する一現象の象徵と見る外には。さうして、これも一時的のものではなささうです。私の入つたことのあるカフエーでは、カフエーピアンナが一番落付があつていいやうに思ひます。何も廣告をたのまれたわけではありません。又、常連だといふわけでもありません。ただ通りがかりにほんの時々寄るだけですが。

○これでお答へになつたでせうか。

○　正宗得三郎

○自働車は乘つてゐる人は壯快かも知れないが、自働車に逐われ、惡臭をあびせられ、砂塵を蹴上げ、泥濘を跳ね飛す道路の狂れ、惡と狹隘の國では、一般の人に不快を與へる事は確かだ。これは自働車そのものが惡いのでない、自働車を運轉する道路がそれに伴なはないからだ。外國の道路でも未だこの感じがある。日本の道路なそでは無理だと想ふ。

○活動寫眞位實際の風物を目前に浮ばすものはない。どんな錯より文より、活動寫眞を見た時は外國の有樣を顧想する事が多い。

○思想を表現したものより、事件の推移する事に興味のあるジゴマ風の千變萬化するものゝ方が適してゐる。

○一杯の「カフェ」に半日も一夜も過せる樣な習慣の出來てゐる巴里の「カフェ」から見れば、日本の「カフェ」は、「カフェ」の感じ

がしない。「カフェ」は小さな會合や人を待つのに便利であるが、日本の様に急がるゝ様な處では落ついて話しも出來ない、又、外國にあるほんの一杯のみの渇を濕する立飲み「カフェ」に比しては這入るに不便である。

○

科學的悅樂の原理と實際

田中純

断片生活と断片文學とは、吾々の時代の特殊的な表現である。それが良いか悪いかに拘らず、それを吾々が好むと好まないとに拘らず、吾々の生活がいよ〳〵断片化され、吾々の文學がいよ〳〵断片化されて行く事實に對しては、吾々は故意に無知を装ふことが出來ない。吾々の生活が更に科學化され、吾々の生活が、その精神に於ても形式に於ても、更に都會化されつゝある現代に於て、吾々の生活や文學が、ます〳〵断片化されて行くと云ふ事は、殆んど運命的な事實である。科學的生活のユートピアに到達する途上に於ては、吾々の生活は未だ未だ専門化され分裂させられる運命を持つて居るからである。

既に吾々の生活が断片化され、吾々の文學が断片化されることが必然である限り、その中に生れる吾々の享樂が断片化されない筈はない。近代都市生活の唯一の慰樂機關である自働車、活動寫眞、カフエーの類が、凡て皆断片的享樂を都市居住者に與へることに於て、その最も大きな特質を持つて居る所以である。

凡ての人が悅樂を求める。悅樂を罪なりとしたストイックの徒でさへも、正當に言へば、悅樂を求めないのではなかつた。彼等は、彼等の生活から隔離されたり、彼等の生活力を弱めたりする悅樂をこそ拒斥したが、悅樂そのものを拒斥しようとはしなかつた。むしろ、彼等の生活そのものをして直ちに彼等の悅樂たらしめやうとする處に、彼等の本願があつたのである。

私はあのストイックの徒が、生活と悅樂とを合一させやうとした努力に深い興味を感ずると共に、その合一境を求めた彼等が、結局あらゆる肉體的欲望を禁厭するやうになつた事實に對して、一種の微笑を禁じ得ないのである。科學の世界が築いて與れるユートピアに對して、何等の信仰をも持つことの出來なかつたあの時代に於ては、生活は當然悅樂を阻止するものとなり、悅樂は當然生活の障害となつたことが明かだからである。

私は曾てオスカア・ワイルドの書いた科學的ユートピアに關する精細な論文を讀んで讃歎したことがある。人間の生活して行くのに必要ではあるが、しかし人間に取つて不快であるところの一切の仕事は、凡て皆機械の驅使によつて爲し果されなけ

ればならない。寒い冬の朝に、がた〳〵震へながらアスフワルト道に積んだ塀を掻き除けて居る老爺の姿は、人間そのものを侮辱する烙印である。これらの不快な仕事は、當然、機械の驅使によつて果されねばならないものだからである。

　ワイルドの描き出した科學世界のユートピアが、果して實現される時があるか何うかは解らない。しかし、吾々の生活と吾々の悅樂との距離が、大體に於て、漸次に狹められつゝあると云ふことは、科學のもたらした今日までの成果から計量して、容易に認容して可い事實だと思ふ。

　古代人の悅樂は、凡て或る種の人々や、或る種の動物の苦痛多き勤勞や殺戮の報償として、購はれたものである。吾々はその實例を、奴隷と奴隷とを闘はせて、その流血を樂んだローマ人の悅樂に取らなくても、現にまだ世界の各地に殘つて居る――而して遠からす根絕せられるべき運命を持つて居る――各種の闘牛戲や闘鷄戲によつて、逝に古代人の悅樂を想見することが出來るではないか？

　しかし、吾々にはもう他人の流血や痛苦を樂しむことが出來なくなつて居る。古代人をあれほど樂しませたこれらの流血や痛苦は、吾々に取つてはもはや、悅樂ではなくて不快である。不快ではなくて痛苦である。此處にも亦、「生活」と「悅樂」との距離の、著しく狹められた姿が見えるではないか？　而も、近代科學の著しい進歩は、或る種の人々の生活を破ることによつて、吾々の悅樂を樂しむことの損失を吾々に敎へて居るではないか？

　その例を活動寫眞に取つて見る。娯樂物としての活動寫眞は、俳優の費す過重な勞力を節約することを一面の目的として――たとひ全部の目的ではないにしても――生れて來たものである。舞臺一面の埃を浴びて、土用のさなかに厚ひ縫ひぐるみを着たり、嚴冬の寒中に浴衣一枚で六つかしい科白を述べ立てたりする俳優の勞力は、少しくセンシブルな心を持つて居る人間には、もはや完全な悅樂を與へることが出來ない程に、悲慘な勞働である。たとひこれを完全に享樂し得るとしても、二十日も三十日も毎日同じ樂を繰返さなければならない俳優のあの無興味な勤勞には、到底現代の悅樂資料となり得ないものがある。これも亦他人の痛苦によつて購ひ得られる悅樂であり、科學の力によつて除去されねばならない人間の勤勞を多分に含んで居るからである。而して、俳優のこの無用な勤勞に代るべく、或ひはその勤勞を節約すべく生れて來た器械は、言ふまでもなく活動寫眞である。

　或る人は、活動寫眞も亦活動俳優の勤勞と苦痛との賜である

から、その普通の芝居との差は、僅かに五十歩百歩であると言ふかも知れない。無論、現狀に於ては、それは五十歩百歩である。堂々たる人の親が、白粉を塗つたり紅を差したりして、草深い山の中を走り廻つたり、高い斷崖から落ちる眞似をしたり、進行中の汽車の前に立ちはだかつたり、底知れぬ海に飛び込んだりして、可なりな冒險の後に初めて得られる今日の活動寫眞は、それが吾々の科學的悅樂の原理から遠く距つて居る點に於て、全く實演劇と五十歩百歩であるに違ひない。しかしこの五十歩百歩は、永久の五十歩百歩ではない。活動寫眞に應用せらるべき科學力は未だ未だ無限に殘つて居る。今日に於てさへ、既に精巧な燒付寫眞が見られるではないか。俳優なくして、而も今日よりは遙かに精巧な藝術的なフィルムが作られる時代が來ないと、誰が言ひ得るであらう? 畫家の頭に描かれた影像(イメイヂ)がカンヴスに寫し出されるやう、小說家の頭に描かれた人間關係が原稿紙に寫し出されるやうに、フイルム製作者の頭に描かれた樣々な影像(イメイヂ)や場面が、俳優を介在しないでフイルムの上に燒き付けられる時代が、何うして來ないと言へるだらう? 恐らくは吾々は、さうした時代が餘りに早く來た事に驚く時があるだらう。その時こそは、吾々の科學的悅樂の原理が、その一部の完全な實現を見せる時である。

自働車が吾々の生活の便利とその悅樂とを密接に結び附けて居ると云ふ事實は、此處に說明するまでもなく明かである。人一人を運ぶ爲めに人一人の汗と勤勞とが必要とせられる人力車や、牛や馬の汗と勤勞とが必要とせられ、煤煙にまみれた火夫の勤勞が必要とせられるやうな運送機關や悅樂機關は、到底生活と悅樂とを合一させることは出來ない。その點に於て、私は自働車に表現された現代の科學的悅樂の精神を讃歎せずに居られないと共に、自働車其他の近代的悅樂機關に對する呪咀の聲を、比較的多く現代の社會問題に興味を持つて居る人達、殊に世間から人道主義者と稱されて居るやうな藝術家達の口から聞くことを怪しく思ふのである。

彼等がもし、人一人の汗によつて、辛うじて吾々の悅樂或ひは便徒を購ひ得る人力車を非難して、その後に自働車を非難するのならばそれも可い。さうした心の傾向の可否は別として、自働車を非難する事その事の一應の理由は、それで立つ譯(わけ)である。しかし、彼等は曾てさうした理由から人力車を非難しないばかりでなく、人力車にならば、彼等自身平氣で乘廻すことをさへ敢てする。それでは彼等の無知を暴露するばかりで、何等言論の意味を成さないものになる。もし亦彼等が、多くの通行人を引倒したり、街道を亂雜にしたりすることの理由を以て自

電車を非難するならば、吾々はたゞ歩く事でも考へて置くばかりである。自動車の疾走に堪へる舗装せる街路が、彼等の呪咀する科學そのもの、力によつて、やがて遠からず備へられるであらう。既に自動車の出生やその利用が、科學的悦事の原理から見て　人力車夫の汗を無用にした點からだけでも　人道的である限り、それを呪咀する代りに讃歎し、それを厄介視する代りに感謝する心性を、作り作らしむることが必要であり正當である。新時代の藝術は、かくの如き心性を作り出さうとするものでなければならない。

私は此の意味に於て、あの未來派の畫家達の言つた、我等はあらゆる動けるものを讃美す。動ける汽車、電車、自働車、大工場の煙突、大都市の雜踏。吾等はこれらのものを讃美すると云ふ意味に於て、新時代の人道主義的氣概を認めずに居られない。

新時代の藝術は、新時代の讃歎歌であり、讃歎でなければならない。

新時代の教育は、新時代の科學的施設と科學的悦事とに興味ある心性を作り上げることに、その全力を濺がなければならない。若葉休暇の兒童を林間學校に導くよりも、先づ銀座街頭の夕涼みを如何に享樂すべきかを教へるか必要である。吾々の心身は、林間に於てよりもより多く街頭に於て、その活動を伴ふされな機會を持つて居るからである。

○ 菊池寛

自分は自働車に就いて多少の反感を持つて居る。殊に曲り角などで不用意に自働車と出會した時などに受くる不快なショックなどは、可なり嫌である。が、それだと云つて東京の街路から、自働車がスッカリ影を潜めたとなると可なり淋しい。タクシにも、餘り乘らない自分は、自働車の利便を受けたことは甚だ少いが、それでも新しい型の自働車が快速力を以て疾驅して居るのを見るのは可なり愉快である。宏壯な大建築を見る事が快感を催すごとく、快速力の自働車を見ることも可なり愉快である、少し子供らしくはあるが。

自働車の美觀を、特に自分は深夜に於いて感ずる。十二時を過ぎてから、二重橋の前から和田倉門を經て一つ橋迄內濠に沿ふて、障害物のない平坦な道を、自働車が制限外の快速力を出して、疾驅して居るのを見るのは可なり愉快である。あの邊は一帶の闇であるから、一條のヘッドライトの光が闇を劈いて飛んで行くのは、可なり愉快である。

一活動寫眞はつまらないなどと云ふ人の話を……聞い……

居ると、大抵は「尤も此四五年見たことはないのだが」などと云ひ出す。活動寫眞の如く寸時も止まらず進歩して居る物を、四五年前に見た印象で貶して居る人は、餘程物の判らない頑固な人である。普通の劇場は入場して二、三時間も見て居ると、きつと不快なものだとか、癪に觸るものに打衝るが、活動寫眞は四五時間も見續けても快く見續けることが出來る。(尤も之は西洋物に就いての話で、自分は日本物の映畫には宥和しがたき嫌惡を感ずる)。西洋物の映畫なれば筋が下らなくても、自分は不平なく見て居られる。景色(シーナリイ)が好きだし、男女俳優の肉體美を見て居てもよし、快い室内の裝飾を見て居ることも愉快だ。自分は西洋物なれば殆ど何でもいゝ。たゞ喜劇の内には、あまり見たくないものがある。やつぱり一番氣持のいゝのは、名優のやる人情劇だ。役者の中で好きなのは女優のポーリン・フレデリック、ルス・ローランド、メリー・マクラレンなど。まだ見ないが見たいと思つて居る女優は毒婦物專門のスイダ・バラ。露西亞俳優のペトロワ、及びピツクフオードなど。

自分は甘黨であるから、甘黨的カフエーが好きだ。從つて美しいウエイトレスが居たり、定連が居たり、醉つぱらひが居たりするところは、大嫌ひだ。殊に美しきウエイトレスがカフエーの缺くべからざる要素になつてゐる所などは、大嫌だ。英國のグランヴイル・バアカーの「マドラス・ハウス」と云ふ芝居の中に世間が餘りに性的になつて、凡ての商賣が女性が男性を吸引する力を利用する事になる傾向を描いて居る所があるが、日本で一番その著しい例はカフエーだが、自分はカフエーの美しいウエイトレスなどが、凡てのお客樣は自分の容色に引かされて來たものだと獨ぎめをして居るやうな樣子をし居るのが一番嫌だ。從つて自分は、靜で食物のうまい所が好きだ。此頃なれば、アイスクリームとソーダ水が好くて菓子と水菓子とのうまい所がいゝ。アイスクリームソーダなどと云ふ飲み物は、何時頃の發明かは知らぬが、確に人類が爲した最も快き發明の一つに數へてもいゝ。アイスクリームソーダが飲める丈でも、夏の都會人は幸福だ。またランチをうまく喰はして吳れる所も有難い。そしてウエイトレスが親切で氣がついて、浮ついた所のないのが好きだ。此意味で、自分は新橋の千疋屋の階上と、日比谷の東京ランチルームとが好きだ。殊に、ランチルームの五十錢のランチは、その純アメリカ式のうまい味と廉いことに依つて、自分の知る限りでは東京第一である。

○　石井柏亭

自働車

日本は馬車の時代を經過することなしに一足飛びに自働車の時代に入つてしまつた。馬車から自働車に移つたものよりも人力から自働車に移つたもの〻遙かに多數であることは察するに難くない。そこには馬匹に關する問題もあるかは知らないが、大體に於て新らし物好きの邦人の性質が此機運を促したと見てよからうと思ふ。

自働車は如何にも現代生活と密接なる關係をもつて居る。あの魔的な外容（特に夜間に於ける）と快速とは現代生活の象徴として肯はれる。自働車の横暴に對する咀ひの聲を聞くが、それは日本だけに限られたものである。日本ではすべてのものが新舊ちぐはぐであつて、泥濘の惡路を走つて泥の飛沫を店頭行人に投げかけたりする處からさう云ふ咀ひも起る。何しろ日本の道路がまだ自働車の走り得るやうに出來て居ないには相違ない。高足駄を穿いて歩く人と自働車との對照はたしかに時代錯誤である。

自働車の速力に待たねばならぬ程の忙しさはビジネス社會の一部に在るかも知れぬが、まだ西洋に比しては左程の事もあるまい。日本車自働車の或ものは榮耀のために用ひられる。或物は田舍客をギツシリ載せて大都の市中見物に用ひられる。又或物客とは妓とを載せて夜更けの花柳の巷を出入する。

馬車のドライヴ趣味を知らぬ日本人は自働車のドライヴにも充分の趣味をもつまい。ボアド、ブーローニユへ向けて薄暮シヤンゼリゼーの大路に自働車を走らせると云ふやうなエレガントな趣味は日本人の知らぬ所である。

近く東京に乘合自働車の一會社が出來ると聞く。これが出來れば吊皮にぶら下がつて電車に乘るの不愉快を多少減ずることにならう。タクシの如きも少しばかり停車場前に居る位では役に立たない。辻々に居て人力同樣に容易く人を乘せるのでなければ實用にならない。

活動寫眞

活動寫眞は單なる流行ではなくして旣に實用の觀がある。西洋のフイルムが次第に歡迎されるやうになるのはい〻。松之助の立廻りや拍子木や聲色や、活辯など〻云ふものが早く一掃さる〻に至ることを望んで止まない。すべて活辯の說明に待つた所を映畫の間に挿まれる說明的文句に代らせて了ふがよい。字の讀めぬものはそれ丈損といふことにして了へばい〻。

日本でももう少しい〻フイルムが出來そうなものである。芝居をやるもい〻が、野外でやる以上は自然的に演じなければ不調和で見るに堪へない。滑稽ものは皆にわか式になるし、實に困つたものである。それから「パテー週報」と云ふやうな[illegible]

断片を寫したものも仲々に興趣がある。東洋方面の時事フィルムを日本の會社で作つたらよさゝうなものであるにさう云ふ事は一向にない。尤も日比谷の國民大會と云ふやうなものは警視廳側の干渉があつて寫させないと云ふことである。今度の米騒動の如きも、新聞記事さへ差止める位だから活動は以ての外なのであらう。

西洋の都會には日本の淺草式にデコ〳〵なのもあるが、又一方には囃しも何も使はず極めて地味に小さな小屋でノベツにやつて居るのがあつた。あんなのも若しあれば都合がいゝ。

カフェー

カフェーが出來てから何年にもなるが、日本ではそれが一向に發達しない。それは男がみな家庭に引込んでしまうからであらう。

日本のカフェーの印象は大體に於て甚不愉快なものである。小綺麗な給仕女の居るやうなカフェーには變な常連が出來てゐるし、又パウリスタのやうなのはあまりに書生式で騒がしくて落着きを缺いて居る。カフェーにゆつくり構へ込んで居るやうな客もなし、又店でもさう云ふ客を好まないかのやうに見える。パウリスタのボーイの如き實にガサツを極めてゐる。あれが若しせめて急行列車のボーイ位に客扱ひの術を知つて居たらばと思ふ。

若しこれが西洋であつたなら、夏日銀座通のやうな大路の所々に歩道へ椅子を持出した賑やかなカフェーの幾軒を數へるであらうに、さう云ふことのない日本は淋しい。上野公園の入口三橋の兩側あたりは、さう云ふカフェーの無くてならぬ所である。尤も日本の道路は惡くて汚塵が立つし、それに日本人其ものが習慣上人に見られながら飲食することを好まぬから、これは仲々行へぬことであらう。

○ 江口渙

二三年前までは自働車は最高の贅澤物の一種とされてゐた。だから自働車に乘つてゐる者からは歩いてゐる者が莫迦に見え歩いてゐる者からは乘つてゐる者が莫迦に見えると云はれてゐた。然し今日では自働車を見て羨しがる者も時代遲れであれば、又自働車に乘つて得意になる者もそれ以上に時代遲れである。それほどに自働車は普通の交通機關になつて終つた。今日では特殊の場合には是非とも無くてはならない交通機關である。唯體裁のため、見榮のために自働車を買つたり借りたりする者だけは、お話にならない程の大莫迦である。然るに近頃ではこの大莫迦が大分殖えて來たやうであるからかなはない。

東京の自働車數も早や二千臺に近かうとしてゐると驚いてゐる人がある。然しこの大都市で僅か二千位の車數ではまだまだ情ない位である。それはとにかく、東京の自働車は大部分箱自働車であるのには不贊成だ。あれよりも例へば陸軍省や參謀本部で使用してゐる小ざつぱりした輕快な幌自働車のやうなのを一般の人がもつと使用したら如何だらう。何も强いて息苦しい箱の中へ入つて狹い窓から往來を窺かなくつても好ささうなものだ。それよりも稍々小型で輕快で幌の掛け外しの出來る方が好い。殊に夏などは麥藁帽子の飛ぶ危險は多少あるにしても、蒸し暑い中で頭のつかへるやうな思をするよりはずつと好い。この意味において私は例の星章のついた黑い陸軍省などの自働車が好きである。

一體日本人が無闇に箱自働車にばかり乘りたがるのは餘りほめた趣味ではない。恐らくそれは王朝時代に公卿の牛車を有難がつたり、德川時代に將軍樣の輿を崇拜したり、降つては明治に入つて華族の箱馬車を羨しがつたりした、形式的貴族生活崇拜のあはれな趣味の遺傳であらう。

自働車の塗り色は矢張り黑か黑を混ぜた綠か乃至は薄い水色が好い。カーキー色は乘用車としては面白くない。但し運送用自働車の赤塗りはあれで好い。

活動寫眞は無論日本の新派劇や歌舞伎ものは大嫌ひである。滑稽物と云へども日本の物は嫌である。第一役者もまづいし筋もまづい。その上フィルムを儉約するので映畫が好くない。西洋物でも人情物は嫌ひである。嫌ひと云ふよりもむしろ倦き倦きした。役者も大抵同じであるし、筋も大概似通つてゐる。然し西洋の歴史物は流石に大仕懸けで好い。無論活動寫眞式の見せ場を特にこしらへてはゐるが、それでも企模の大きいのと變化に富んでゐるので終りまで飽かずに見られる。探偵ものにも面白いのがある。然しどうかすると無理にも筋を絡ませては山を造り又絡ませては山を造るので、仕舞にはあきる事がある。然し中には嘘とは知りながらも、心のはらはらするやうな冒險的興味に思はず釣り込まれて終ふものもある。何時見ても相當に面白いのは乙種フィルムにある猛獸狩とか外國の風景風俗などである。殊に野蠻人の風俗などを知る事が出來て好い。チャツプリンはもう少々あきて來た。

一體私は芝居を見てさへ役者の名前をあまり覺えない人間である。だから活動寫眞などでは尙更覺えた事がない。役者の名や會社の名は無論の事、フィルムの名さへ忘れて終ふ事が多い。だから此處で一つ一つのフィルムに就いての感想は止めにする。日本のものでは連鎖劇だけはもつと何とか改良すれば好

断片を寫したものも仲々に興趣がある。東洋方面の時事フィルムを日本の會社で作つたらよささうなものであるにさう云ふ事は一向にない。尤も日比谷の國民大會と云ふやうなものは警視廳側の干渉があつて寫させないと云ふことである。今度の米騒動の如きも、新聞記事さへ差止める位だから活動は以ての外なのであらう。

西洋の都會には日本の淺草式にデコ〱なのもあるが、又一方には囃しも何も使はず極めて地味に小さな小屋でノベツにやつて居るのがあつた。あんなのも若しあれば都合がいゝ。

カフェー

カフェーが出來てから何年にもなるが、日本ではそれが一向に發達しない。それは男がみな家庭に引込んでしまうからであらう。

日本のカフェーの印象は大體に於て甚不愉快なものである。小綺麗な給仕女の居るやうなカフェーには變な常連が出來てゐるし、又パウリスタのやうなのはあまりに書生式で騒がしくて落着きを缺いて居る。カフェーにゆつくり構へ込んで居るやうな客もなし、又店でもさう云ふ客を好まないかのやうに見える。パウリスタのボーイの如き實にガサツを極めてゐる。あれが若しせめて急行列車のボーイ位に客扱ひの術を知つて居たらばと思ふ。

若しこれが西洋であつたなら、夏日銀座通のやうな大路の所々に歩道へ椅子を持出した賑やかなカフェーの幾軒を數へるであらうに、さう云ふことのない日本は淋しい。上野公園の入口三橋の兩側あたりは、さう云ふカフェーの無くてならぬ所である。尤も日本の道路は惡くて汚塵が立つし、それに日本人其ものが習慣上人に見られながら飲食することを好まぬから、これは仲々行へぬことであらう。

○　江口渙

二三年前までは自働車は最高の贅澤物の一種とされてゐた。だから自働車に乗つてゐる者からは歩いてゐる者が莫迦に見え歩いてゐる者からは乗つてゐる者が莫迦に見えると云はれてゐた。然し今日では自働車を見て羨しがる者も時代遅れであれば又自働車に乗つて得意になる者もそれ以上に時代遅れである。それほどに自働車は普通の交通機關になつて終つた。今日では特殊の場合には是非とも無くてはならない交通機關である。唯體裁のため、見榮のために自働車を買つたり借りたりする者だけは、お話にならない程の大莫迦である。然るに近頃ではこの大莫迦が大分殖えて來たやうであるからかなはない。

東京の自働車數も早や二千臺に近からうとしてゐると驚いてゐる人がある。然しこの大都市で僅か二千位の車數ではまだまだ情ない位である。それはとにかく、東京の自動車は大部分箱自働車であるのには不贊成だ。あれよりも例へば陸軍省や參謀本部で使用してゐる小ざつぱりした輕快な幌自働車のやうなのを一般の人がもつと使用したら如何だらう。何も強いて息苦しい箱の中へ入つて狹い窓から往來を覗かなくつても好ささうなものだ。それよりも稍々小型で輕快で幌の掛け外しの出來る方が好い。殊に夏などは麥藁帽子の飛ぶ危險は多少あるにしても、蒸し暑い中で頭のつかへるやうな思をするよりはずつと好い。この意味に於いて私は例の星章のついた黑い陸軍省などの自働車が好きである。

一體日本人が無闇に箱自働車にばかり乘りたがるのは餘りほめた趣味ではない。恐らくそれは王朝時代に公卿の牛車を有難がつたり、德川時代に將軍樣の輿を崇拜したり、降つては明治に入つて華族の箱馬車を羨しがつたりした、形式的貴族生活崇拜のあはれな趣味の遺傳であらう。

自働車の塗り色は矢張り黑か黑を混ぜた綠か乃至は薄い水色が好い。カーキー色は乘用車としては面白くない。但し運送用自働車の赤塗りはあれで好い。

活動寫眞は無論日本の新派劇や歌舞伎ものは大嫌ひである。滑稽物と云へども日本の物は嫌である。第一役者もまづいし筋もまづい。その上フィルムを儉約するので映畫が好くない。西洋物でも人情物は嫌ひである。嫌ひと云ふよりもむしろ倦き倦きした。役者も大抵同じであるし、筋も大概似通つてゐる。然し西洋の歷史物は流石に大仕懸けで好い。無論活動寫眞式の見せ場を特にこしらへてはゐるが、それでも企模の大きいのと變化に富んでゐるので終りまで飽かずに見られる。探偵ものにも面白いのがある。然しどうかすると無理にも筋を絡ませては山を造り又絡ませては山を造るので、仕舞にはあきる事がある。然し中には嘘とは知りながらも、心のはらはらするやうな冒險的興味に思はず釣り込まれて終ふものもある。何時見ても相當に面白いのは乙種フィルムにある猛獸狩とか外國の風景風俗などである。殊に野蠻人の風俗などを知る事が出來て好い。チャップリンはもう少々あきて來た。

一體私は芝居を見てさへ役者の名前をあまり覺えない人間である。だから活動寫眞などでは尚更覺えた事がない。役者の名や會社の名は無論の事、フィルムの名さへ忘れて終ふ事が多い。だから此處で一つ一つのフィルムに就いての感想は止めにする。日本のものでは連鎖劇だけはもつと何とか改良すれば

い方面へ發達する事が出來るやうに思ふ。

活動寫眞の勃興に連れてみじめに壓倒されたのは、寄席と娘義太夫である。然しあれは當然もう衰退しなければならない運命にあつたのである。第一に何時聞いても千遍一律である。次に出演者の半分以上は我慢の出來ない位に下手である。その上眞打ちと稱するものが一番後でなければ出ないので、肝心なのを聞かうと思へば各はそれまでぢつと我慢しなければならない。餘計な時間潰しである。それよりも何時入つて何時出て來ても相當好いものを見られる活動寫眞の方がずつと好い。實際歌舞伎座へ新富座へ行つても、午後の一時から夜の九時過ぎまでも到底座つてゐる氣になれない。あれではわざわざ苦しい思ひをしに行くやうなものである。

一體日本の見物は慾が深かすぎる。觀劇料の高いせいもあらうが、一度に七八時間も費してあきあきするほど見なければ承知しないのは少々氣の毒な氣がする。それよりも晝夜二回の別興業とし、料金を下げて時間を短くしたら如何だらう。晝間だけであき足りない連中は夜まで居殘れば好い。帝劇ではまあそれに近い事をしてゐるが、それでも夜の開幕は六時で澤山である。淺草邊でオペレットが流行し出したのも、料金の低廉以外に矢張りこの時間の經濟と云ふ關係が大いにあるだらうと思ふ。

近頃市内のカッフェは非常な勢で殖え初めた。これは一般の食料、飲料に對する嗜好の變化以外に、その簡易な事が大きな原因である。第一カッフェは入り易く出て來易く、凡てが簡便で自由で氣樂である。次に吾々は小學校以來椅子に掛け慣れて來た結果、今では疊へ座るよりも椅子へ掛ける方が樂な位である。各自があまり強く自覺しないこんな生活上の變化も、尙更カッフェへ行き易くさせたに違ひない。その上、市内のカッフェの大部分はウエーターよりはウエートレスを使つてゐるが、近頃カッフェが急激に増加した結果素人から直ぐにウエートレスになつた女が多いためか、割合にすれつからしが少ない。勿論中には某々カッフェの如き海山千年のいとも怪しき連中を揃へてあるが、そんなのは論外である。ウエートレスの多くが割にすれてゐないから相手をしてゐても氣持が好い。

今はカッフェの隆興時代、ウエートレスの隆興時代であると同時に一方では矢張藝者の全盛期である。然しその藝者も今では職業の内容が全然變化して終つた結果、所謂藝者らしい藝者が段々ゐなくなつた處ではなく、謂はゞ藝者の大部分は低能である。藝も出來ず座持も惡く、話頭も低級である以上、もはや隱れた職業以外、今の若い人の心を繋ぐ事は出來ない。

一體明治の晩年から藝者全盛期が來るとともに、藝者は全く一般化したものになつて終つた。然し一般化すると同時に客の要求と相互間の生存競爭の必要上、藝者と云ふ職業の內容は全く變じた。そして女でありさへすれば誰でも藝者になれるやうになつたと共に惡貨は良貨を驅逐して藝者は全く低能化して終つた。こんな事も若い人々をカッフエのウエートレスに追ひやる原因の一つであらう。

然し日本のカッフエもまだ今の處では企模が小さい。銀座あたりへ大企模のものを造つて、專屬のオペラ女でも於いて一寸としたダンスを見せたり、又は好い音樂でも聞かすやうになつて欲しい。さうなれば日本のカッフエももつと面白くなるだらう。今あるカッフエパウリスタの安つぽい自働ピヤノでは閉口である。但しカッフエの全盛とともにウエートレスの職業の內容が藝者同樣變つて行くと云ふ一つの問題があるが、これは今は論及しない事にする。

○

長田幹彥

自働車、活動寫眞、カッフエ、この三のものを見たゞけでも私には近代の都市生活の恐ろしい推移の跡が眼に見えるやうな氣がする。このなかで活動寫眞が最も早く市民の生活に親しまれ、その次がカッフエ、自働車といふ順序になつて來てゐる。カッフエはまだ市民の生活とぴつたり適合するところがない爲めか、最近に於ては又少し衰へかけて來た氣味がある。

自働車は既に實用の域に入つて來てゐるから、どう云ふものか一般の市民にはさほどに親しみを持たれてゐない。東京市中にもう千八百臺からあるといふのに、何故さういふ現象を呈してゐるか、私は人を運び、物資を運ぶ上に於て、自働車ほど合理的な、便利なものはないと思ふが、それでも一般にはまだそれほど重用されてゐないのである。夜の銀座通りに立つてみてゐると、警笛の音ものものしく、砂塵を蹴立てゝ疾驅してゆく車上には大方花柳的な空氣を漂はせた男女が乘つてゐるばかりで、眞面目な急用を抱へた忙がしさうな人間は殆んど見懸けないと云つていゝ。貴族か、富豪が乘用する他には、大部分の車が遊びの爲めの交通機關になつてゐるのである。

かうした現象は單に自働車そのものゝ買價が高いとか、乘るのに多くの賃金を要するとかいふやうな原因から來てゐるばかりではないと思ふ。まだ日本では自働車が贅澤品視されてゐるのである。つまり日本の社會狀態はまだ自働車を要求するほど而く切迫塞つてはゐないのである。

又一方から見ると、東京なぞは到底自働車を縱橫に利用する

たけの要素を備へてゐない。頻々として起る殺傷事件の如きは無論運轉手の過失に依る場合も多いであらうが、併しかゝる不整頓極まる都市にあつては當然免るべからざる現象である。歐米のやうに市街そのものが根本的に發達して來なければ到底自働車などゝいふ輕快な利器を完全に驅使することは出來ないのである。東京の市街はとりもなほさず日本の現在の社會狀態の縮圖である。近代的な諸種の利器や、設備を輸入して來てもこの都市では或程度までしか發達しないのは無理もない話である。のんびりとした太古の顔をして平氣で車道を漫歩してゐる市民と、砂塵と、そしてちぐはぐな陋屋との間を馳驅してゐる自働車は實に辛辣な皮肉である。

此間も米の暴徒が起つた時に銀座で見てゐると、大部分の暴衆は自働車といふものに對して非常な反感を示してゐた。その原因は何かといふと、決して不愉快なガソリンの匂ひを散布してゆくとか、或は泥濘を浴びせかけて平然としてゐるとかいふやうな單純なことばかりではない。自働車といふものを前に置いてじいつと見てゐると、我々でもあの醜い、非美術的な形貌に對して何かしら不快な感じを覺える。正に近代の科學が生んだモンスターといふ感じがする。眞黑な巨大な蟹のやうにも見えれば、又雙眼から閃光を發する怪獸のやうにも見える。それが吠えるやうな警笛で往來の人を威嚇しながら眞に傍若無人に傲然と疾驅してゆくのであるから誰れでも不知不識の間に反感を蓄へずにはゐられないのかも知れない。成金と自働車といふものを結びつけて考へるのも至極尤もなことで自働車はたしかに近代人のエゴイスティックな實利的な一面を露骨に現はしてゐると思ふ。併しその自働車も腹を開いて、シリンダーやギアの構造をみると、あの醜い獸の恰好にも人間の無邪氣な發明心と工風が現はれてゐて面白いのだが、作業の心がそこまでいかなければ自働車などゝいふものは永久に呪はれてゐなくてはなるまいと思はれる。科學がもう少し纖細（デリケート）といふことを眼中に置くやうになつたら、また別な意味に於て自働車などを野蠻視するやうになつて來るであらう。

さういふ私は元來自働車が非常に好きなのである。市街を走り廻はして歩くことは餘り好まないが、併し箱根の山道を往復する自働車のごときは私の何よりの樂しみの一つである。九十九折になつた山路を危うげな調子で巧みに驅つてゆく自働車は確かに一種の神經的な魅惑をもつてゐる。歩きながら眺める場合には思ひも及ばぬやうな風光の變化が、酒の醉ひを買ふよりも一層技巧的な快味を與へる。私は速力の早いといふことに一種の現代人の神經的な快感を刺激する意味がありはしまいかと

思ふ。

活動寫眞は忙がしい近代人の趣味性と鑑賞性とを最も露骨に皮肉に提示してゐるものである。彼等はもうまどろこしい、傳統の多い演劇などは見ておられないのである。それよりももつと手ツ取り早い、擊擇された或人生の縮圖を樂しむことを要求する。一擧にして首尾の通觀し得る藝術の刺激を望んでゐる。であるから活動寫眞劇をみてゐると、長篇小說を書かうなどゝ企てゝゐる時なぞは心細くなつて來ることがある。巧みに段取られた、最も發達した劇をみてゐると、不完全な文字を驅使して克明に事象を描かうとしてゐる時々の頭や手の努力が馬鹿々々しく見えてくる場合がある。近代人の特性として現實といふものに非常な興味を持つが故に、如實といふことを要求する。それには寫眞より現實に近いものはない。しかもその寫眞から時間といふものゝ約束を絞り取つてしまふのであるから、從つて筋は極めて不自然なものになつて來る。それを行詰めると暗黑裡の光の戯れのなかに何かしら現實を基礎とした幻怪不思議な事實が欲しくなつてくる。そこからも近代人の不健康な妄想を釀す芽が萌えてくるのである。活動寫眞が不良少年をつくるなどゝ云ふことは確かに近代社會の研究者にとつて見遁す可らざる問題である。活動寫眞が若い人間の頭腦に媚びるのはその如實といふことから幻怪な妄想に移つてゆく過程の興味である。寫眞といふやうな科學的なものを利用してゐながら、猶ほ且つ人生を技巧化し現實の暗黑面を誇張して弄ぶところに興味があるのである。自動車を斷崖から落したり、大汽船を爆破させたりしてゐる興味はやがて、その昔演戯場に於て羅馬の市民がやつたやうな眞の人間殺戮の場面の映寫まで進んでいかなければ止まないかも知れぬ。

カツフヱといふものもそれと同じ意味で榮えてゆくべき性質をもつてゐる。近代の都市生活は例の手ツ取早さの要求から、現在の花柳界のやうな傳統の多い、多分の金の要る娛樂機關から離れてゆく。明るい燈火の輝く美々しい建物のなかで、強い酒を呷りながら妖艶な粉飾を凝らした女給に戯れ、短時間の間に生活の勞苦を忘れ、或種の飢ゑを滿たす。その點からいふと女給といふものゝ實質がもつと徹底的になつて、歐羅巴のカツフヱ女のやうになつて來て初めてカツフヱの意義が完成するのではあるまいか。現在の日本のやうに一廓をなして公娼制度や痛切でない三味線などを彈いて僅かに酒興を助ける藝妓遊びなどは當然近き將來に亡びてしまふ運命をもつてゐると思ふ。否最早既に事實に於てそれ等の內容は日に月に變形しつゝあるのである。

人々はもう一宵五十金百金を投じて、優婉な歌聲や舞ひの袖にもつれる情趣を購ふ遊びには倦きてきた。と云つて、唯のバーゲインばかりの遊びでは猶更面白くない。何よりも早く日本の社會制度がこの中途半端な域を脱して、もつと徹底的な、それでゐて精練された近代趣味のうへに立脚して娯樂機關を生んで與れる日が待遠しい。ミルクバッスもよからう、カッフエの女にもつともつと男を蠱惑する媚態を許すのもよからう。カッフエなどゝいふものはその點でもつとどしどし發達していつていゝと思ふ。問題は唯その社會自身がどれほど多くの健全性を自發的に保持していけるかといふ一點に歸する。

○　坪内士行

拜復　旅行中とて御貴問への御返事遲延致しメ切の御間に合はぬ事と存じ候まゝわざと委しくは申上げず候、たゞ私はつね〳〵自働車は牛車、活動寫眞は影陰と聲色、カフエーは茶店、の時勢につれて多少忙しい氣分を増したのみにてそれに乘り、見、味ふ人の心持は昔と同じかと存じをり候、殊にロンドン、紐育邊でのノロ〳〵と煉つて行く自働車や、ギックリバッタリをスクリーン上に演じてゐる日本活動俳優や、ビールやウヰスキーの味は更らに分らずに、おかめづらばかりギヨロ〳〵見てゐるカフエー客を見候ては、外形の變化のみにて、氣分の相違はさらに生じてゐぬやうに感じ申候、然しそこが新時代の要求にて、例へば女色にしても、昔は遊女屋が一種の社交場となり、今は待合、これがやがて一歩進んで人の奥さん相手の夜會や舞踊會に移り候べく、同じ事をも形式を變へて喜ぶ所が所謂進歩人間の淺間しさと存じ候、世迷言のみ申上げ恐入り候匆々。

八月廿日

於寶塚

○　久保田万太郎

自働車、活動寫眞、カフエエ。——三題噺が出來さうだ。

だが、自働車といふもの、惡いものぢやあない。私は好きだ。何にしても早いのがいゝ。——私のやうな氣の短いものにはほんとに用のあるときなんか、とても焦れつたくて、俥だの電車だのには乘つてゐられない。俥はまだいゝ。斷えず動いてゐるからいゝ。電車と來ると、用もないところに一々コクメイにとまる。前の車のうごかないかぎりはいつまでゞも動かない。——大てい腹の立つ事ちやあない。

電車に乘るくらゐなら歩いたはうがいゝ。私はさう思つてゐ

る。——時間がかゝつてもそのはうが斷念がつく。

それに、電車といふもの、遠慮のない、イタハりのない人間の寄合だ。運轉手といふもの、車掌といふもの、客といふもの、すべてが皆さうだ。——運轉手が線路を突つ切る奴を怒鳴るとき、車掌が何とかして乘替切符のダメを出さうとするとき、子供を連れた年寄だの女だのが、どうにかなるだらう位で鮨詰のやうになつてゐるなかを無理から割込んで來るとき、人間の——人間の世の中の、さもしさ、あたじけなさ、便りなさを、まざ〳〵とそこにみせられる。

しかく私は電車がきらひだ。——さうして自働車が好きだ。(だが斷つて置く、今度出來るといふ乘合自働車のことは私は知らない。出來てみなければ分らないが、多分には、電車なみの prosaic なものだらう。)

で、早いのをいゝとする外に、自働車は、二人でも三人でもの人間の一しよのとき、そのまゝ、その二人でも三人でもを一しよにどこへでも運んで與れるからいゝ。——喫みかけの煙草と話のつゞきとを、そのまゝ、そのなかに持ちこむことが出來るからいゝ。——といふことは、われ〳〵のやうな人間は、始終、そのとき〴〵の心もちに生きなければならないから。

一人のとき——頭から連れのないときでも、連れにわかれてからのときでも、一人のときには、ただ、一人のときで、寂寞がある。默つて、一人、燈火を消して、闇のなかに自分のすべてをまかしたとき、そこに、孤獨が返つて來る、それがほんたうの——人間の——孤獨が自分にかへつて來る。——ときにいはれない泪ぐましさに迫られることがある。

けだし自働車は夜のものである。

二三年まへまで、私は、活動寫眞といふものをまるでみなかつた。——みても、私は面白いと思へなかつた。

と、去年の夏、あついさかりに、さそはれて二三度みに行く機會があつた。公園のキネマ倶樂部で「まもるかげ」大會といふものをやつてゐたときだ。——その私をさそつた友だちは、私のあんまり活動寫眞といふものを好きでないといふことをはじめは、知らなかつたらしい。ところが、話をしてみると、活動寫眞について何にも知らない。知らなすぎるほど知らない——いゝかげん反感を持つたらしく、それからといふもの、暇にかけて私を引張り出した。

人が一年ぐらゐかゝつてする修行を半月ばかりの間にした。口惜しいから、私は、公園の活動寫眞を片つぱしからみてあるいた。かたはら、活動寫眞に關する雜誌だの何だのを手あ

次第に讀んだ。さうして一つぱし通になつた。

だが、活動寫眞といふもの、何としても私の性に合はないとみえた。——それほど骨を折つて研鑽するところがあつても、たゞ、ときに喜劇を面白いと思へるやうになつたばかり、いふところの活劇だの人情悲劇だのといふやうなものについては、何としても、義理にも、私は、好意を持ちかねた。

それには活動寫眞のなかの空氣に私は親しめなかつた。——主として、それは、フロツクコオトに扇をパテつかせる辯士といふものとメリンスの着つけに大袈裟な油やさんをかけた女給仕といふものが醸し出すところのもの。——あざとくつて取つてつけたやうでしら〴〵しくつて、とてもつきあひ切れたものぢやあない。——そこに、寄席でみいだすことの出來るやうな安住を微塵みいだすことが出來ないといつたら、そんなことをいふはうが間違つてゐるといはれうかも知れない。だが、私はさう思ふ。

活動寫眞といふもの、所詮は、娯樂である。幾ら工夫をしたところで、趣向をしたところで、藝術の名を許すことは出來ない。——今にして、私は、「月の世界の旅行」だの「英國倫敦の大火」だの、私のおもひでのなかに、夢のやうにぼやけた、チカ〳〵星の光る寫眞が可懷しい。

カフエエといふもの、私には、人を待合せるためと、中途半端な時間をつぶすためとばかりに存在してゐる。

カフエエで、私は、食事をしやうとは思はない。人とユツクリ逢はうとは思はない。仕事の疲れをやすめようとは思はない——食事をしたり、人と逢つたり、疲れをやすめたりするにはカフエエといふもの、あまりに、落ちつきのない、締りのない、さうして寛ぎのないものである。

だが、食事をしようとは思はないといつても、カフエエといふものは——この國のカフエエといふものは、何か食べさせることを大事にしてゐる。佛蘭西にも、それは Café Restaurant があつて、時分どきには仕度の出來るやうになつてゐるところもあると聞いたが、日本のやうに、あけくれなしに、ノベタラに何でも出來るところはないだらう。——銀座あたりの、いふところのカフエエに行つて、何にも食べず、飲むものだけでボンヤリしてゐると、何だか肩身の狭いやうに、顔をみられるやうに思ふのは、繁々さういふところに私が出かけないから惡いのだらうか。

あざとくつて、取つてつけたやうでしら〴〵しくつてと活動寫眞のうへにいつたことを、私は、カフエエのうへにまたいふこ

とが出來る。――かくて活動寫眞の辯士といふものと、カフエエの女といふものとは、この國の文明が産んだふたごである。

とりとめのないことを書くことは書いた。――だが、さて、あと二十年と三十年とたつたとき、その時代のわれ〳〵ぐらゐな年齒のものがこれを讀んだとしたらどうだらう。――さう思ふとなんだか擽つたいやうな氣がする。

○

小山内薫

○

走らぬ自働車。

電氣を消して、窓の帷をおろした自働車が一臺、或劇場の樂屋口を少し離れたところの暗闇に待つてゐた。運轉手も車を降りて、そつと車の蔭に蹲んでゐた。

乘つてゐるのは勿論女である。やがて來るのは勿論男であらう。女は果して藝者であらうか。男は果して役者であらうか。それは俄に斷定する事が出來ない。

走らぬ自働車は暗闇の中にぢつとしてゐる。まるで死んだもののやうにぢつとしてゐる。しかも、一瞬間の後には生き生きと赤く燃えた命が二つ、それに盛られて、疾風のやうに夜の街を、行方も知らず走り去るのである……

○

動かぬ活動寫眞。

私は赤坂に住んでゐた頃、葵館の人に貰つた、伊太利の名優ノエルリのフイルムの一小間を、今だに珍藏してゐる。

その外にまだアンナ・パウロワのも貰つて持つてゐる。「笑ひの面」や「シヰリゼエシヨン」や、さういつた物のも、時々銀座の夜店や繪端書屋で買つて來る。

普通の芝居の寫眞は、どんなに表情や動きが撮つてあつても、それはその寫眞の爲に特に一瞬間見せた表情や動きである。

活動寫眞のフイルムの一小間こそは、眞に「動」の一節である。前に「動」があり後に「動」がある「動」である。

その故に、私は限りなくフイルムの一小間を珍重する。動かぬ活動寫眞――そこに無限の動きを見て樂しむ……

○

沈默のカフエエ。

友達と話をするのに、音樂は邪魔である。ライプチツヒの或カフエエで見たやうに、總ての客が靜粛に音樂を聽くのなら、格別であるが。尤も、それ程の音樂は、日本のカフエエにはまだ絶無である。

カフヱーでは大いに話すか、さもなくば絶對に沈默を守りたい。

私は遠慮のない友達とカフヱーに這入るのも好きだが、たつた一人で見知らぬ客ばかりゐるカフヱーの眞ん中に坐るのも好きである。

一杯のマチニ、カクテルに、三十分の沈默を續ける。いろ／＼な詞が聞えて來る。いろ／＼な思想が流れて來る。いろ／＼な事件が起つて來る。その中で、たつた一人、ぢつと默つてゐるのが、私には何とも言へぬ愉快な休息になる。

この意味で、私は日本人の殆どゐない、瑞典や諾威や丁抹のカフヱーの一夜を忘れる事が出來ない……

○ 谷崎潤一郎

活動寫眞にカフヱーに自働車、さう聞くと僕は直ぐに淺草公園を想ひ出す。實際僕等の娯樂と云へば、今の所淺草公園に行くより外に仕方が無い。僕は鵠沼に住んで居ても、十日に一遍はどうしても東京へ出て來たくなる。東京へ出て來て淺草公園を見て歸らなければ、氣が濟まない。その位僕は熱心なる淺草黨の一人である。

淺草公園を褒める爲めには、勢ひ外の娯樂機關、藝者趣味、待合趣味、舊劇趣味、新派劇趣味、それからあらゆる通人趣味に對して、惡口を云はなければならぬ。

藝者の惡口と新派の惡口は、「中外」の七月號にもちよいと書いたが、僕はあれだけでは未だ云ひ足りないやうな氣がする。藝者といふものは、電車や汽車の中で乘合せた時や、避暑地や溫泉地の旅館の廊下で擦れ違つた時や、夏の夕方街頭を歩いて居る浴衣掛けの姿を見た時や、そんな場合にちよいと心を惹かれるだけで、お座敷で會つて見ると、とんと面白くも何ともない。彼等の内には、美人と呼ばれてゐる女も居る。しかしその美しさは髮を綺麗に結つて、白粉をこつてり塗つて、ぞろりとした衣裳を着込んで、いろいろに苦心慘憺して一生懸命につツかひ棒で持たせてあるやうな美しさである。きちんと据つてぢつと澄まして居なければ、直ぐにも壞れて終ひさうな美しさである。鼻の周りの皺一本でもウッカリ寄せたら大變で、實際觀て居ても危つかしくつて、氣が揉める事夥しい。僕はあゝいふ美人を見ると、倒まにひつくり反して、尻の穴が有るか何うか檢べてやりたくなる。尤も、美人の嫌ひなお客には、お座敷の面白い、氣取らない藝者といふのもある。所がそれが又厄介な代物で、お客を馬鹿か白痴のやうに心得て、のべつまくなしに頓狂な聲を擧げて、愚にも付かない滑稽を云ふ。さうして客が笑は

ないでも一向平氣で、一人でから〳〵と雞が啼くやうに笑つて見せる。こんな藝者に懸つたら、實際溜つたものではない。お客同士で何か話しをしようと思つても、其奴に邪魔をされて話の腰を折られてしまふ。その癖彼等は一向滑稽の趣味を解しては居ず、今日では田舍出の書生の方が、まだしも彼等よりは氣の利いた洒落を云ふ。あゝいふ奴等は、客の機嫌を取つて居る積りで、實はお客に機嫌を取られて居るのである。その外文學藝者と稱して、いろいろ齒の浮くやうな文學談をする藝者、それから又、濕つぽい内輪話やお金の話ばかりする藝者、まだ隨分變つたものもあるが、孰れ一つとして、潑溂とした愛嬌や、快活や、怜悧さを有つて居るものが無い。彼等は悉く馬鹿の癖に嘘吐きで、鐵面皮の癖に弱虫で、慾張りの癖に上品振つて居る。其等はまア可いとしても、さういふものに高い金を拂ふかと思ふと、つく〴〵腹が立つて來る。

次には新派の芝居である。凡そ世の中に何が腹立たしいと云つて、自ら藝術に携つて居ながら、その藝術について無知であり、厚顔であり、低能である程腹立たしい事は無い。一般に低能といふものは、憎む可きものではなくて、憫れむ可きものであるが、藝術の上の低能だけは何だか許し難いやうな氣がする。低能の藝術を低能らしく發表するなら、それでも可いが、低能の藝術を以て一流の藝術らしく振り翳さうとするのは慥かに厚顏である。かう云つたからといつて、僕は決して通俗藝術が惡いと云ふのではない。通俗藝術といふ事と、低能といふ事とは別問題である。偉大なる藝術は通俗であつて、而かも高級なものでなければなるまい。然し低能な藝術は、通俗藝術としても決して流行する筈はない。今の新派の芝居の馬鹿々々しさは、正に藝者の馬鹿々々しさと同程度のものである。而もそれが假りにも藝術の仲間に伍して居るだけに、僕には藝者よりも餘計に癪に觸る。

舊派の芝居は、前の二つのものとは違つて、確かに立派な完成された藝術ではあるが、然しそれは何と云つても既に過去の藝術であつて、おまけにその有力なる後援者が、僕の嫌ひな花柳界の人々であるとすると、さうしてその俳優達の頭の程度が、藝者の頭と同じ位なものだとすると、僕は矢張一種の反感を抱かずには居られない。將來舊劇は、能樂が保存されるやうな意味で、命脈を保つには違ひないが、その勢力は今よりぐつと衰微するものと見て差支へなかう。

僕が淺草を好む譯は、其處には全く舊習を脫した、若々しい新しい娛樂機關が、雜然として、ウヨ〳〵と無茶苦茶に發生して居るからである。亞米利加合衆國が世界の諸種の文明のメ

ング・ポットであるといふやうな意味に於て、淺草はいろいろの新時代の藝術や娛樂機關のメルチング・ポットであるやうな氣がする。今日舊派や新派の一流の俳優達が、淺草といふ所を卑しめて、自ら高しとして居るのは、僕に云はせると、チャンチャラ可笑しい次第である。曾て久米正雄君が、今日の劇場の見物の內では、淺草のお客が一番頭が進步して居ると云つたが僕も此說には同感である。曾て近代劇協會でやつた「ファウスト」や「マクベス」や「ヴェニスの商人」や、或はメーテルリンクの「ブリュー・バアド」のやうなものを、之れからなどは淺草でやつた方がいいと思ふ。それで立派に見物が來る位、淺草のお客は進步して居ると思ふ。

さていよいよ本題に入る譯であるが、大分脫線してしまつたから、簡單に書く事にしよう。活動寫眞については、昨年五月の「新小說」に、自分の考を委しく述べて置いたから、重複を避けて玆には唯大體の趣旨を述べて置く。僕の考へでは、演劇は勿論、音樂、文學、繪畫、彫刻、凡ての藝術に比べて、活動寫眞は優るとも劣らない、將來最も發達の望のある、眞個の藝術であると思ふ。一面には非常に寫實的であつて、一面には非常に夢幻的である活動寫眞は、その領域の廣さに於て、他の如何なる藝術にも優つて居る。

藝者と料理屋とが附き物になつて絡つて居る今日では、極く少數の「うまい物屋」を除いて、藝者を揚げずに料理を食ふといふ事が出來ない。而も藝者の這入る茶屋に限つて、料理のうまい家はめつたに無い。たまに食ひに行つても、見る許りで食ふ事の出來ないお頭付きや口取が出て來るので、僕のやうに片つぱしからムシャムシャと食はなければ承知の出來ない野蠻な人間は、何かお行儀の稽古でもして居るやうで、食ひたいものが一向腹に沁みない。從つてつひ支那料理や西洋料理を食ひに行く事になるから、カッフェの御厄介になる事が多い。然し慾には、カッフェの洋食をも少し美味いものにして貰ひたいものである。さうして中に舞臺を拵らへて、女の友達と一緒に酒を飲みながら、活動寫眞やオペレットを見物するやうな設備には出來ないものか。僕はさういふカッフェが五六軒も、淺草に出來る事を望んで居る。

自働車についても云ひたい事は無いでもないが、大分氣焰を上げたから、先づ此の位にして置かう。

人物評論（九十七）

事實問題として及び純理と希望とより觀たる

後繼内閣の組織者

▽準備時代・妥協時代の首相候補者

文學博士　三宅雪嶺

寺内内閣は少くとも四十一議會の終了するまで地位の安全なるを信じて居つた。外交調査會に、政友會が出兵問題について威嚇したかに噂されるが、内閣は特別に痛手を感ぜず、兎も角も出兵した以上、何が何でも當分内閣の維持を必要とし、兩院議員の多數が反抗を敢てせぬと考へた。政友會に取つても、此處で政權に與かれば、二年目に次ぎの總選擧の間に合ふので、其方が都合好からうと思はれた。其幹部に急激派もあるけれども、それは何うにかならうと云ふのであつた。

所が困難を豫期した外交問題は別段の事無く、意外にも米價暴騰で、全國各市町に亙りて騷擾事件が起つた。初めの程農商務省に於て、それ見たかとの調子が無かつたとせぬ。幾程警告をしても何をしても、奸商どもが受付けぬ結果、遂に群衆が力盡くで米商を襲ふ事になつたといふ調子である。所が火の手が上り過ぎ、取締りに困るやうになつた。警察で押へ切

ず、軍隊の出動を乞はねばならなくなつた。實に事が大きく成り過ぎた。こんな筈でなかつたと思ふが、最早取返しが付かぬ。外國との關係ならば、我一國のみで事を處し難く、突發の事變が起つても仕方が無い。內地で群衆の間 突發の事變が起つては、平素安寧秩序を維持するの職務を果さなんだといふ事になる。騷擾事件について、內相及び農相が責を引き、職を辭すべきは言ふまでもなく、閣員を董督する首相も、責を負はねばならぬ。燒討事件が起つて、大騷ぎで米を安賣りするなど、政府の手緩りも甚だしい。從來の例に徵すれば、遠からず總辭職するの已むを得ぬ事になる。

人によつて責任を強く感ずるのと、さほど感ぜぬものとある。現內閣員は何れであらうか。寺內首相は正直の評判があつて、乃木大將の遺書を變改して發表した程であつて、責任を強く感じさうで、さうでないかも知れぬ。假りに首相が辭職に意ありとしても、他に居据りのやつき連中がある。何とかして踏み留まるの計畫をするであらう。それで辭職しさうで、せぬやうな事もあらうが、それとて「時」の問題で、餘り長くないに極つて居る。强いて踏み留まれぬと限らぬけれど、かゝる場合、責を負ふて去る方が、何かに付け都合が好い。善意に解して、辭職するものと認めて妨げない。

それで何うなるかと云へば、英國の內閣更迭の如く、單純な譯に行かぬ。英國でも戰時中、普通と變つて居る。日本では何と云ふても元老の取計ひがある。元老會議が開けるか、山縣又は山縣松方で事を取計ふことになるか、時の事情による。首相も決定は大命に屬するが、何人か責を負はねばならぬ。現首相が辭職する時、後繼者を奏上するか、元老の優旨を蒙る者が、見込みを奏上するか、いよ〳〵の場合に、責を負ふ所無くてはならぬ。元老會議が開かれるとすれば、伊藤井上等が生存して居つた時と違ひ、水入らずに相談する譯に行かぬ。伊藤と山縣とは何程爭つても、根が親密の間柄であり、纏まる時に纏まる。從來の元老筋で、今は山縣及び松方が殘つて居り、松方は異論を唱へる方でない。先づ山縣の言ふ通りになる。けれども、何にしても薩派で頭梁と推されて居る者、心から服して居る者でない。別に考へる所が無いではない。

新に元老の優旨を蒙つた者に西園寺があり、次いで大隈がある。大隈は准元老格といふが、數の少い元老の間で、さう區別するのも如何なものである。會議となつては、四人顏を揃へるであらう。西園寺は冷々淡々、當らず觸はらずであるが、山縣と意見を異にする所がある。大隈に至つては、是か、非か、出鱈目か、其場限りで說を立てるやうでも、山縣に屈するもので

ない。體の好い事を云ふても、政治に關し我れ一日の長ありと云ふ面影がありありと見える。他人の寄合で、所謂他人行儀、或は伊藤山縣が議論した程の事も無からう。眞赤になつて議論する事は憚かる。そこで次の內閣を何うするかといふ時、或る程度までお世辭の混つたやうな言葉で、山縣公に擧國一致內閣を造られては何うであるかと云ふ案も出やう。山縣は健康が許さず、松方侯は何うであらうかといふ案も出やう。松方も謙遜する。何うしても此處は西園寺侯の番といふ事にもならう。或は大隈侯に、今一度やつて見ては何うであるかといふのもあらう。皆各謙遜して避けやうとするが、大隈はヒョツトすれば受けるかも知れぬとの懸念がある。山縣はそれが心配である。大隈の受けぬやうな事にする。松方は今一度山本伯を首相にしたい氣がある。けれども山縣は、絕對に之を好まぬ。自分に弓を引いたのは、實に彼れ山本であるといふ事を忘れぬ。シーメンス事件で之を葬つたのも、山縣の關係者である。松方はそれを心得て居つても、之を口に出しはせぬ。殘る所は西園寺であるが、他の元老はまア仕方がないといふ位の所、特別に好意を以て居るのではない。政友會の幹部に好加減に仕て遣られるであらうとの心配がある。西園寺も餘り面倒な事を好まぬ。君國の困難に身を挺して盡力するにしても、今はそれ程で無いといふ

やうな所で自ら認めて居る。誰れ言ふとなく內閣寄合は協議會といふやうな事になつて居り、此處彼れ一人の了簡次第である。出れば出るで政友會を基礎とするであらうし、出ねばそれまでゞある。

出ぬとなつて誰れを奏命するか、若し日本の政黨が今一層整備し、且つ力あれば、其首領を奏上し、或は直ちに大命が下るであらう。けれども現在の政黨は、殆ど全く衆議院に限られて居り、其衆議院でさへ、席を有する者の數は、選擧取締の如何で違ふ。自黨が政權に與かれば、員數增加し、政權に離れゝば、員數を減ずる。従つて反對黨として、總選擧を怖れる事最も甚だしい。絕對多數黨と云つても、知れたものである。政友會も憲政會も、反對黨として絕對多數黨が殆ど半分に減じた。かゝる薄弱なる政黨が、何事を爲し得るか。且つ現に各政黨皆多數を制せず、必ず他の團體と結ばねばならぬ、原氏を指命しても、貴族院と如何なる關係かの疑はしいのみならず。如何に衆議院で多數を制するかも疑はしい。憲政會の加藤子に至つては、尚更らである。二人各大政黨を率ゐて居るとて、大命の下らぬのを怪しむ事が出來ぬ。如何にして內閣を組織し、議會を切り抜けるかゞ明白を缺く。山縣はそこで強味を有つてゐる。政黨內閣と云ふが、貴衆兩院同權である所で、如何に政黨

内閣を組織するかと云ふのである。

されば大政黨の首領の力が弱いとて、誰れを首相に推すべきかといふ事になる。曾て平田子が候補者となつた。清浦子は大命まで拜つて、內閣を組織する事が出來なんだ。今後再び平田を推すか何うか。山縣は清浦をして一度內閣を組織し、顏を立てさせたいとの意ありとの事であるが、平田清浦は山縣との關係で貴族院を纏めるに便利であるといふに過ぎぬ。衆議院に對して或る團體と結托する外はない。平田ならば憲政會と結び、更に或る小團體を加へるであらうし、清浦ならば政友會と共に、或る一團體を加へるであらう。けれどもそれが、原又は加藤に對して何程力が優つて居るか。貴族院に都合好からうが、衆議院で全く無力である。貴族院に根據を置いて衆議院の多數と結托するか、衆議院の多數に根據を置いて貴族院と結托するか、何れかに居るべきである。清浦又は平田か、原又は加藤か、清浦原の聯合か、平田加藤の聯合か。何にしても黨首なる原又は加藤を以て、兩院に對するに困難なりとし、清浦又は平田を以て、之れに優るとする譯に行かぬ。原加藤に不足を感ずれば、清浦平田にも不足を感ぜねばならぬ。清浦平田を推す位ならば、原加藤を推すが好からうといふ事になる。

そこで何方も思はしくなく、根本的に政黨を改造したならば、何うであるかと云ふ事になる。伊東子は政友會に關係があり、後藤男は憲政會に關係がある。犬養氏は國民黨を率ゐて居る。後藤は現に憲政會と相敵視し、寧しろ政友會に近づいて居るけれども、元と共畠に育ち、知り合が少くない。政權と金權とを以て攪亂し得ぬと限らぬ。三菱の富に敵すべくもなければ、加藤の流用し得る運動費位ならば、便じ得られぬでもなからうと云ふ所がある。伊東は伊藤公の關係からして、政友會と淺からぬ關係がある。原の地位を取つて代る事が出來まいかとも云はれる。三政黨を捏ね合はせ、反對する者は反對するで除き、之に他の小團體を加へ、一大新政黨を造り得ぬかと考へ得ぬではない。けれども後藤及び伊東に、それ程の手腕が有りさうにない。伊東のやうに自己本位で、損失を怖れる以上、政友會に寄り付く事も出來ぬ。彼は人の參謀になつて大膽、己れ自らとして卑怯である。後藤伊東によつての政黨改造は覺束ない。然し政黨改造は全く不可能でない。政友會と憲政會と、地方に於て不俱戴天の仇となつて居るので、双方から午蒡拔きにして、一緖にするのが困難であるけれども、何時までも今日の儘になつて居るとは云はれぬ。何時か變化の起るに定まつて居る。早いか晩いかの問題になる。自ら手腕を恃む者は、之を試みるも面白からう。けれども急場には間に合はぬ。後繼內閣の爲めに役

に立たぬ。後繼内閣は元老に於て、先づ西園寺に話があり、其返答次第で別の話に移るであらう。西園寺ならば政友會は大贊成、國民黨も贊成、貴族院も餘り不贊成であるまいと云ふ事であるが、其處は原氏の了簡一通り二通りでない。西園寺が政友會總裁を辭し、再び總裁とならうとせぬのは、全く其一了簡であるか、他に與つて居る者がありはせぬか。清浦が首相で原が何になるか。水野氏が内相となつて居るのに、今更ら内相でもなからうぢやないか。原は其邊に考へて居る。自分で首相に成らうなど、噯にも出さぬ。其處は加藤よりも甲を經て居る。然し表面平穩で、暗鬪を免かれぬ處がある。

誰が首相として適任であるかと云ふに、其時によつて決するの外は無い。能力及び手腕から云へば、一得一失。曾つて清浦が首相とならうとした所から見れば、之れに匹敵する者は幾人もある。原でも、加藤でも、犬養でも、相應の事は出來る。唯其時の地位が大命を以て内閣を組織し、兩院に對する事が出來るか何うかと云ふにある。今は何人も十分でない。十分になるには、政黨が整備し、地方官の手加減で選擧が左右せられぬやうにならねばならぬ、さうなるまでは準備時代の首相であつて、常に妥協を念とするを要する。今の所首相たる者は、妥協を以て政務を施行する外無い。貴族院の内でいろ／＼妥協を要し、衆議院に於て若干團體と妥協するの必要がある。大政黨の首領が首相となつても、衆議院で他の團體と妥協するを要し、殊に貴族院の團體と妥協するに骨折らねばならぬ。元老の手を借りたりいろ／＼な事をするやうになる。政黨の整はぬ間致し方無い。絶對多數黨となつて、選擧干渉に援されず、黨員が地方で私利を貪らぬやうになれば、黨首たる者は、首相として大に力を揮ふ事が出來る。今のやうに政黨が築港鐵道等の利益爭ひ、貴族院に政黨有害説を唱へしむる間、貴族院に牽制せらるゝを免れぬ。

政治家は個人として、大抵知れたものである。何十年に一人、何百年に一人、傑出したのが出るにせよ、普通一般に團栗(どんぐり)の背比べと諦めねばならぬ。不足を言へば際限が無い。不足勝ちで辛抱せねばならぬ。不足勝ちの人物が、國政の衝に當つて力を揮ひ得るのは、國民に根據ある團體の力によつての事である。歐洲大戰亂でナポレオン程の名將無くても、軍隊が整備して、ナポレオン以上の戰をして居る。政治家もさうである。人を當にするは大抵にすべきである。それよりも其立脚地たるき團體の組織を整へるに努むべきである。急の間に合はぬけれど、所謂「急かば廻れ」と云ふ所である。準備時代はいろ／＼の人物が現はれるのも可からう。思ひ切つて少壯者を首相によ

れば、機運を早める事もあらう。然し今の状態で、かゝる事は甚だ六つかしい。當分は準備時代、妥協時代、てきぱきせぬ時代である。之れを不快に思ふ者は、自ら進んで其勢を變ずるに努むべきである。

▽勿論！原内閣

前田蓮山

一

閣臣の任命は天皇の大權に屬し、天皇は何人に對しても、自由に内閣の組織を命じ給ふが故に、大命を拜したる者が政黨を有せず、又た政黨と提携しないとしても、并は其の人の自由で、外間から之れを強ふるの權利はない。是れ夏は暑く冬は寒く、親は子よりも年が上と云ふのと同じく、議論の餘地はないのである。官僚輩は常に此の大權論を振りかざして、政黨主義者に向ふけれども、政黨主義者とて決して大權に容喙するのではない。事實に於て超然内閣は政治を圓滑に行ひ得ないと言ふのである。

官僚輩は善政主義を其の幟印として得々然たる様子であるけれども、誰れが惡政主義を標榜するか、政治家として善政主義でない者は一人も居ない筈である。唯だ超然内閣では善政を行ふに不便であると云ふのだ。官僚者は善政をさへ行へば、政黨を基礎としなくとも、國民は之れを謳歌し、議會は之れを協贊すべき筈であると思つて居るであらうが、文明國の民衆は自我の觀念が強くなつて、自ら治めると云ふ意志が發達して居る。政府は自己の政府であると云ふ了解がなければ、彼等は安心して政府の施設に服しないのである。現今は專制時代ではない、立憲時代である。立憲時代になるべき理由があつて憲立時代となつたのである。此の立憲時代に於て、如何に善政と言つても、民衆に理解されない善政が何うして行はれやうぞ。

官僚輩は政黨と云ふ政權爭奪者があつて、吾々の善政を妨害し阻止すると誤解し、政黨の發達を忌み、或は之れを撲滅せんとし、或は之れを小黨分立の狀態に置いて、其の勢力を殺がんと欲して居る。是れ愚にして解せざる者にあらずんば、自己の權勢を先きにして、國家國民を思はざるの輩である。

超然内閣を維持するのには、政黨勢力の微弱なるを便とするが如きも、是れ皮相の見であつて、眞に善政を行はんとする超然内閣は健全なる政黨の存在を必要とするのである。假りに政黨なき政界を想像せよ、如何に紛亂混雜すべきか。選擧は盲目

的に行はれ、議會は決議を行ふ事が出來ないであらう。

政黨の職分は積極的に組織的に其の主義政見を國民に鼓吹し、國民を指導して以て其の嚮ふ所を誤まらざらしむるに在る。文明國の民衆は自我の觀念が强く、自ら治めるの意志が發達して居るけれども、悉く自ら治める智識を有するとは言はれない。一般民衆は彼の尨大なる豫算案や、浩汎なる法律案を、一々精讀する暇もなく、又た之れに對して是非の判斷を下し得る者は少ないのである。若し政黨があつて民衆を指導しなけば種々雜多の人が選擧せられて、急拵への政見を主張し、議會には共同の研究熟慮なく、一個の議案を決定するのにも數日數十日を費すであらう。實に政黨は議會の決議をして賢明ならしめ且つ簡明ならしむるものである。

今假りに政黨を有せざる超然內閣組織せられ、政友會も憲政會も國民黨も、皆な解黨して政界から手を引いたとしたら何うなる？其の超然內閣は自ら政黨を組織しなければ國務の進行に不便を感ずるであらう。斯くの如く考へ來れば、政黨內閣でなければ立憲政治は殆んど行ふに術なき所以を知る事が出來るであらう。哲學的見地からして政治が民主的でなければならぬと云ふ事は既に多數の承認して動かざる所、實際的見地からしても、政黨內閣でなければ到底政治を圓滑に行ふ事は出來ないのである。若し夫れ民衆が自ら治めると云ふ事と、皇室中心主義と決して衝突するものではないと云ふ事は論ずるまでもない。

二

政黨內閣でなければ政治は圓滑に行はれない。然らば後繼內閣は誰れに組織せしむるを以て最も適當なりとするか。吾輩は原內閣を希望するものである。原內閣の下に犬養氏が入閣を承諾するなら甚だ結構であるが、若し入閣しないとしても、衆議院を通過する事は決して困難ではない。貴族院も理不盡な反對はしないだらう。そして原內閣が失敗した曉には加藤子を起すべしである。

所が政界の一部には擧國一致內閣を主張する者がある。識者階級にも此の論が頗る流行して居る。彼等の計畫に依れば、西園寺侯を首相として、原、加藤、犬養、或は平田、諸氏までも收容しやうと云ふのであるが、彼等は顏さへ揃へれば仕事が出來ると思つて居るだらうか。斯んな內閣は內部を取纏めるために其の勢力の一部分を費消し、仕事は却つて進まないと云ふことは、多くの前例があるのである。

實際に於て、西園寺侯が斯んな混合內閣の首相たることを肯んずるであらうか、吾輩は大に疑問として居るのであるが、擧國一致論者は西園寺侯は必ず出馬すると言つて居る。所が此

擧國一致論者の中には、既に其れを最善の内閣と信じて居る者もあり、又た自己本位の政略から割り出して居る者もある。

犬養氏は原内閣を出現する位ならば、寧ろ此のまゝ寺内々閣を存續せしめたいと思つて居るであらうが、今日となつてはモウ到底寺内々閣を支持して行くわけに行かないだらう。そこで擧國一致の名に依りて次の内閣に割り込むのが一番得策であると思つて居るであらう。

官僚一派は擧國一致の名目の下に其の勢力を保存したいと思つて居る。そして西園寺侯が辭退したなら、平田子か清浦子かを擔ぎ出さうと云ふ計畫だらうが、平田子や清浦子の下に、原氏や加藤子を羅致しやうと思ふのは身の程を知らぬもので、原氏や加藤子に對して無禮千萬の野心である。併し彼等は擧國一致を名として諸子に大命の下るを待ち、内閣組織に着手したとで、原氏や加藤子を羅致する事が出來なかつたなら、寺内伯が擧國一致を名として超然内閣を組織した例に倣ふ積りかも知れぬ。

政友會は原内閣では聊か不安の念がある。彼等は憲政會が貴族院の官僚派と呼應して、原内閣を挾撃するだらうことを恐れて居るのである。其れで西園寺侯の下に擧國一致内閣を組織し、成るべく長く、政黨に大臣の椅子に坐はつて居たいと思つて居るのである。故に此の擧國一致内閣の主張は該内閣に入閣の出來ると信じて居る者が最も熱心で、原内閣が短命で倒れた後に加藤内閣でも出來て、議會を解散されては一大事と恐れて居る連中が其れに和し、然らざれば俗論者が之れに呼應して居る有樣である。而して別に又た若し政友會が原内閣を主張した爲で、大命は原氏には降らず、却つて平田子とか清浦子とかに行きさうであるから、寧ろ機先を制して西園寺内閣を主張すれば、山縣公とても之れに反對する事は出來まいと思つて居る者もある。

憲政會の幹部中には原内閣を出現せしめやうと思つて居る者もあるやうであるが、之れは政友會一部の恐るゝ如く、加藤内閣の出現を速かならしめんとする策に外ならない。併し其れは憲政會として當然の希望であつて、且つ正論である。然れども愈々西園寺侯が出馬して擧國一致内閣を組織すると云ふ場合に、加藤子が入閣を拒絶し得るか否かは疑問である。恐らく入閣を承諾するであらう。

擧國一致と云ふ題目は俗人の耳に入り易いために、甚だ人氣があるやうに思れる。然れば西園寺侯が出馬するに於ては、多くの困難を見ずして成立するであらう。若し西園寺侯が出馬しなければ、寧ろ原内閣より外に方法はあるまい。若し無理に他の内

單が出現するとも、其れは來るべき議會までの生命であらう。政友會の擧國一致論者とても、西園寺侯を首相とした擧國一致内閣で、官僚の老骨を推戴しても擧國一致内閣が可いと云ふのではないのである。

要するに實際に於ては西園寺内閣原内閣かと云ふ形勢であるが、吾輩は原内閣を希望するのである。世人の西園寺侯に囑望する所は、侯ならば擧國一致を實現し得る。否な政黨、官僚の首領を内閣に羅致し得ると云ふのが主なる理由で、經綸手腕、此の人の上に出づる者はないと信ずるのではあるまい。然らは原氏と加藤子と犬養氏と平田子と集まれば、四倍の智慧が出ると思ふのであるか、數は集むれば增加するけれども、人間の智慧は然うは行かない。古人は三人寄れば文珠の智慧と言つたが、實際に於ては三人寄れば一人よりも馬鹿な智慧になる事が少なくない。妥協の弊害は此處にもあるのである。吾輩は徹頭徹尾原内閣を主張する。

併し大政黨の領袖、而かも反對黨の領袖が山縣公を訪問したり、又た其の黨の代表者が樞密顧問官を歷訪して、時局に對する意見を開陳するやうな時節であるから、吾輩が原内閣を希望するのは無理かも知れぬ。彼等は何故に國民に訴ふる所なくして、先づ半死人の元老や樞密顧問官に訴へたのであるか、且つ官制から云ふも事實から云ふも元老は政府に關係すべきものでないのである。

元老が政府に容喙するのは不都合だと責めながら、元老に向つて寺内々閣の罪を訴へるとは何たる矛盾か、彼等は事に依つては山縣公の門に走つて、加藤子を推薦して呉れと泣き付くことを辭せない心底であらう。大隈内閣組織の時に元老に運動した味が忘れられないのであらう。此の調子ならば、政友會が憲政會を疑ふのも無理はない。加藤子は「吾黨には今更官僚と結托するやうな腰拔けは居らぬ」と原氏に言つてやつたさうであるが、加藤子一人は其の積りでも、なか〳〵其れは當てにならぬ。桂、西園寺時代に、政友會が妥協を打ち切り得なかつたのは、憲政會の前身たる憲政本黨が常に政友會の後を覗つて、政友會が桂を捨てたなら直ちに其れを拾はうと構へて居たからである。憲政本黨は政友會に對して「桂を捨てよ、自分が拾ふから」と云ふ態度であつた。政友會も亦た憲政會が官僚と手を切つたら、直ぐに官僚と握手した。此んな調子では何時まで待つても憲政は進歩せぬ。吾輩は憲政會の領袖や代表者が、元老や樞密顧問を歷訪したのを聞いて、憲政の前途を悲觀せざるを得ない。

▽次の內閣組織者

石川半山

寺內內閣が果して近い內に辭職するや否やも分らない內に、後繼內閣の詮議立ては、或は少しく早計で有るかも知れない、後藤外相の如きは西比利亞出兵に關して、臨時議會を開き、種々協贊を求む可き必要の件が有ると言つて居ると云ふ說さへも有る位だから、なかなか辭職しさうにも思はれない所も有る。然かしながら寺內首相が政黨の操縱に倦憊して居る事は事實らしい、第四十一議會に臨んで、再び第四十議會の苦がい經驗を繰り返へすことを望まないのは事實らしい、憲政會は正面の敵として、無遠慮に攻擊の鋒先きを向け、政友會は又意地惡るく、姑が嫁をイヂめるが如き態度で、內閣を苦しめる、之が爲めに寺內首相の苦痛は甚しい者だ、元帥として傲然として居れば、多くの人から尊敬されて、氣樂に暮らせる者を、首相の地位に立てるが爲めに、此の如き苦境に陷るは、恐らくは彼れの永く堪へ得ざる所で有らう、彼れの心事を察したなら、一日も早く其の地位を去りたいに違ひない、又山縣公に於ても、閥族に取て大切なる寺內伯を永く首相の地位に置いて、之に深い手傷を負はせたくないで有らう、兎に角二年間も首相を務めたから、此の際辭任せしめるなら、元老として待遇されることも出來る、若しグズグズして居る內に、ドンな事件が起て、元老の列に入れることの出來ない樣になるかも知れない、今の內に早く切り上げさせたいとは山縣公の腹である

寺內伯既に退任を望み、山縣公亦之を望む以上、寺內內閣の前途は、決して永いとは思はれない、早晩必ず辭任を決行すべき者と見て宜しい、然る上は今日に於て後繼內閣の組織者に付て考へて置くのも、或は早計でないかも知れぬ

候補者少からず

大正の今日、人材は濟々として多い、內閣總理の重任を承る可き者、決して其人に乏しくない、先づ世間の噂に上ぼつて居る候補者を列擧して見ても、直ぐに四五名は數へられる

第一は西園寺侯爵だ、山縣公も今春京都に於て之を勸めた、山本達雄氏などは隨分熱心に西園寺內閣說を擔き廻はつた、侯爵自身に於ても、必ずしも色氣の無いことは無い、何しろ遺勅問題で遁世して、それ切り此の世を終る樣では、侯爵の歷史を全うする所以で無いから、第三次西園寺內閣を作て、何か一ト花咲かして後、眞の隱居になりたいに違いない、我輩共も實は

侯爵の總理の下に擧國一致內閣の成立も宜しからうと考へて居るが、玆に困まつた事には、原敬氏が之を望まない、原氏にして之を勸めない除りは、侯爵が如何に內心に之を希望して居ても、成立する望みは無い、而して原氏が眞面目に之を勸めないのは、自ら內閣を組織したい希望が有るのと、中橋總務の如き熱心なる原內閣論者が、政友會內に勢力が有るからで有る

第二は德川家達公で有る、山本內閣の辭任後、一度大命の降下した程で、擧國一致內閣の組織者としては、此の公爵は最大最良の人物で有る。然かしながら公爵は大正三年の春に於て大命を拜辭したるが如く、決して之を受けないで有らう、彼れの希望は終生貴族院議長たり、華族會館長たるを以て滿足する者で、此の以上の希望は持たず、又舊幕臣等も彼れを首相に推して、毀譽褒貶の激烈なる巷に立たしめることを望まないから、德川內閣の成立は、先づ困難と見なくてはならぬ

第三は淸浦奎吾子で有る、彼れは一度鰻の香ばかりを嗅いで引下がつた所の所謂鰻香子爵で有る、山縣公の忠僕で有つて、松方侯にも良く、閥族の間の人材としては、屈指の人物で有る、彼れが寺內內閣の次に鰻の一片を味はいたいと希望して居るのは事實で、山縣公も一度は彼れを首相の地位に坐せしめたいと望んで居るのだ、然かしながら彼れに對しては政友會も憲政會も同意しない樣で有る、若し大命の降下することが有るも、或は又鰻香を嗅くばかりでは有るまい乎

第四は伊東巳代治子で有る、國民黨は馬鹿に此の人を擔ぎ廻はつて居る、伊藤公の懷刀と稱せられたる巳代治子と大隈侯の懷刀で有つた木堂先生が合乘りなら、知慧の點に於ては此上は有るまい、或は之を評して狐と狸の合乘りと云ふが、それは餘りにヒドい、然かし兎に角目と目と見合はしたら、互ひに其の心は分り合ふで有らうから、話は早く運ぶに違ひないが、或は機略縱橫の衝突を見るかも知れぬ、特に之れでは德望が缺けて居る、伊東子も伊藤公や山縣公の蔭に隱くれて、仕事をして居れば、切れることは天下一品で有るが、苟くも表面の立役者にならうとすると、忽ち古疵が邪魔になる、世間は彼れが明治三十一年伊藤內閣の農相たりし時の堂島事件を忘れては居らぬ、昔一個の龍が有つた、未だ小さい蛇で小川の草の蔭で遊んで居た頃、小供が石を投て、其の頭に疵を附けた、それから海に千年、山に千年、いよ／＼龍となつて雲を得て昇天せんとする時に、其の小供の時に受けた疵が邪魔になつて、ドウしても昇天が出來なかつたと云ふ話が有る、巳代治先生も氣の毒ながら疵が有る、世間から隱くれて居る間は何でも無い、九重雲深くして邇暱しい樞密院あたりに巢を構えて、半老半死の禿頭共を

中に翻弄して居るのは、先生特得の技倆で、天下敢て一人の逆れに及ぶ者は無いが、さて表看板の内閣總理大臣としては何分にも世間に通用が悪るい

第五は平田東助子で有る、此の人も亦山縣公が一度は内閣を組織させてやりたいと望む所の人で有る、而して本人も窃かに之を任じて居られる様だ、特に最近に於ては、一派の策士の間に、平田、加藤、原の聯合内閣説が、擔ぎ廻はされて居る、それは先日の外交調査會に於て、平田子の發言が、原氏の所見と一致したからで有る、實は原氏が外交調査會に於て、アンなに強硬に出でようとは意外で有つたが、それには二個の理由が有つた、其の一は平田子が政府案に反對した爲めで、其の二は加藤子が原氏に十分に戰ふべしと通告した爲めで有る、平田子は必ずしも政府を苦しめる積りで發言したのでは有るまいが、然かし其の論旨は原氏等の所見と殆んど一致すべき方向を取つた、之を見て原氏は非常に強くなつた、寺内内閣案に反對する事は、山縣公の感情を害し、他日内閣に立つ時に、復讐される虞れが有るので、若しも閥族官僚の一團に、何等の間隙が無いならば、如何に攻撃したくても、之を隱忍するものは原氏が從來の筆法で有る、然るに今や閥族の代表たる平田子が、政府案に反對したる以上、彼れが如何に強く出ても、山縣公へ通すべき逆路が決して閉塞することは無いと見たことは、彼れが強くなつた第一の理由で有る、それから彼れの恐れた所は、寺内内閣が御用黨の乘り換へをなすことで有つた、政友會が憲政擁護で桂公と對戰した時、桂公は忽ち之を捨てゝ大石正己君を筆頭としたる五領袖に乘り換へた、今若し政友會が強硬に出でると、政府が之を振り捨てゝ憲政會に乘り換へないとも限らぬ、是れ彼れが最も恐るゝ所で有る、そこで彼れは外交調査會に臨むの前床次總務を加藤子の所へ派して、其の意向を確かめた所が、加藤子の出兵問題に關する所見は、殆んど原氏と一致して居たので、加藤子は床次氏に向て『原氏が外交調査會に於て十分に奮鬪せんことを望む、此の爲めに政友會と政府と反目するに至ても、我が憲政會が寺内内閣と握手するが如きことは斷じて行はないから、其の點は安心して奮鬪し玉へと原氏へ傳へて呉れ』と言つた、此の加藤子の保證と平田子の發言は原氏をして強硬ならしめた所以で有る、而して此の事ありて以來、政界の一部には早くも平田、加藤、原の聯立内閣を夢みて居る者が有る、平田内閣の中に、加藤、原兩黨を網羅すべしと云ふのだ、若し兩黨首にして平田内閣の中に列することを望まないならば、兩黨の代表者と見るべき者、憲政會から若槻、濱口、下岡諸君、政友會から高橋、床次、中橋諸君を入れて、平田内閣を作

るべしと云ふのだ、然かしながら之れは恐らくは實際には行はれない事で有らう

原内閣なる可し

今日の所で、我輩の見る所を以てすれば、寺内内閣の後繼者は、原敬氏に落つるの外は有るまい、山縣公も今日では之に異議が無い樣で有る

唯原内閣が成立するに當て、原氏から貴族院、樞密院の兩難關に向て、援助を要求するに違ひない、而して外交調査會は之を廢止し、無任所大臣を置くに違ひない、平田子、伊東子などは、必ず此の無任所大臣たらんことを要求さるるで有らう、無任所大臣に平田、伊東兩子等を入れた原内閣が出現するで有らう、而して此の原内閣の中堅には、必ず中橋徳五郎氏が坐するで有らう

犬養氏の去就

原内閣が成立したとすると、犬養毅氏に對しては、成るべく承諾しない樣な形式に於て、入閣を勸誘するで有らう、第一次西園寺内閣が加藤子に外務大臣を提供したのは、彼れが之を受けないと豫定で有つた、それは豫ねて加藤子が戰後自ら財政の任に當りたいと言て居たから、原、松田兩氏の考案で、彼れに外務大臣を提供したら必ず之を辭退すると豫期して居たので有る、然るに意外にも加藤子が之を受けたから、内閣成立後頻りに之を虐待し、遂に彼れをして鐵道國有問題に於て反對して辭任せざるを得ざらしめたので有る、寺内内閣が加藤子に外交調査會の一員なることを勸誘したのも、同じ筆法で有て、成るべく承諾しない樣な形式を取て勸誘したので有る、原内閣が成立する時、原氏は犬養氏に對して、之れと同じ樣な形式を取るに違ひない、毒蛇を其の懷中に抱くは、何人も望まない所だ、犬養氏は勿論伴食大臣たるには、餘りに機鋒鋭利で有る、之を閣中に收めて置くなら、何時寢首を掻くやら分らない、餘程の大人物でなくては、彼れを包容することは出來ない、松田正久氏が内閣を作つたなら、平氣で犬養氏を包容し得たで有らうが、原氏位では兎ても犬養氏を飲み込んで、之を消化し得る力は無い、さりとて從來の行懸り上から考へれば、一應は之を誘引しなくてはならぬ、されば原氏は多分犬養氏が之を受け得ない樣な方法で、之を誘引するで有らう、其の時に犬養氏は知らぬ顏をして、ヌーとして之を受けるかも知れぬ、然る時には原氏も定めし氣味の惡い事で有らう

理想的内閣

若しも我輩に向て今日理想の内閣如何と問ふ者が有るなら、全く新らしい人の内閣に在りと答へるの外は無い、世間で今日候補者に數へて居らない樣な、新人の内閣が望ましい者だ

政友會内閣を作るにしても、西園寺内閣や原内閣では面白くない、床次内閣か中橋内閣か、更らに思ひ切て松田源治内閣、横田千之助内閣、江藤哲藏内閣が出來ると、少くも原内閣よりは良い内閣が出來る、憲政會にしても加藤内閣を作るよりも、濱口内閣、安達内閣の方が遙かに有力かも知れぬ、關和知氏あたりが内閣組織の候補者になる樣にならなくては、新らしい政治は望まれない

薩派に於ても松方侯に尚色氣が有り、山本權兵衞伯も前回の失敗の爲めに怨嗟が殘り、是非モウ一度内閣を作て、立派に何事かをしてからで無くては、死んでも往生が出來ないさうだが、それは惡るい量見で有る、三島彌太郎子あたりを推し立て、新らしい三島内閣を作らせる方が、薩派の興隆の爲めには遙かに良いと考へる、米國ではウヰルソン、英國でも既にロイド、ジョーヂの世の中だ、新らしい階級から、新らしい人物が現はれて、大手腕を揮はなくては、日本の發展は望まれない、古い疵の斑々たる古い政治家は、國民も既に飽いて居る、理想的内閣は必ず新らしい階級から、新人物が出でゝ之を作らなくてはならぬ

▽後繼内閣の組織者

鵜崎鷺城

上

寺内内閣も此の邊が丁度見切時だらうと思ふ。假りに穀物騷動の責任を餘所に見て此のまゝ喰附いた所で、冬の議會を如何にして切拔けるかといふ問題になれば、寺内首相以下何人も確たる自信が無い。居据りなどは大隈のやうに再び天下を取る見との出來ないものがすることで、寺内にせよ後藤にせよ是れ限りで政治生命を棒に振らない氣ならば、何處までも避くべきである。同じく内閣を投出すにしても、行詰つて不名譽な討死をするよりも、雪隱詰めにならぬ中に退却する方が男らしい。寺内同情者中には縱令ひ今度のやうな騷動が突發しなくとも、議會までに罷めさせて傷を附け無いようにしたいと思ふものが尠くなかつた。況んや斯ういふ當面の責任問題が起つて見れば、

猶更認めるに越したことは無い。又た認めなければならぬ道理である。今日此の內閣が總辭職をしたからとて、誰も惜むものは無いが、無理に噛附ひて見苦しい最後を遂げるよりも、出處進退に意味がある。

孰れにしても今日となつて見れば、寺內內閣の進退は時の問題となつてゐる。そこで當然起るべき問題は、如何にして後繼內閣が組織せらるるかといふ事であるが、是れはなか／＼難かしい問題で、何人にも確乎たる見極めが附かぬ。希望を言へば夫々方面に依つて違ふ。官僚には官僚の思惑があるし、政黨には政黨の希望がある。內閣を倒すことには一所に騷いでも、倒れて仕舞へば同じで無い。純理論から斯ういふ內閣を造れと言つても、希望と理論と一致するもので無く、假に希望と理論と一致しても、實際の上から、可能性を缺くことになる。而して後繼內閣の困難といふことは畢竟人の問題からで、首相の野心あるものはあつても帶に短く襷に長く、此の大變局の國政を双肩に擔つて行かうといふ大物が居ない。然し物窮まれば通ずといふから、寺內內閣が倒れたならば、結局は誰か彼ふ出て組織することになるが、誰でも好いと言ふのでは更迭の意味は成さぬ。

いよ／＼後繼內閣の相談になれば、元老の沒交渉で事を定めることは出來ない。元老の存在が今猶許されてゐる限り、實權を奪ふことが出來ぬ事情がある。尤も元老といつた所で、事實は山縣一人であるが、少くも山縣の意圖を勘定に入れなければならぬ。而して公は何人を意中に置いてゐるかと言ふに、官僚系を中心とする狹い範圍の事情から、自然公一味のものに傾く道理で、少くも清浦子と平田子には今でも煩悩を掛けてゐるらしい。前年清浦が內閣組織に着手して出來損つたのを公は氣の毒だと思ふ情があるし、清浦も折角手に入つた鳥を逃したのを殘念に思つて、機會あらば是非一度出直して見たいといふ腹が不言不語の中にある。現に今度も政變を見越して擧國一致內閣を說て廻つてゐるさうであるが、是れはアワ好くば乃公自ら首相にならうといふ了見ではあるまいか。

假りに清浦が擧國一致內閣の首班になるとした所で、何でも構はぬ機會さへあれば大臣になりたいといふ二三流のものなら入て援けるかも知れぬが、相當の見識あるものは彼と共に仕事をすることを欲し無い。若しまた前年のように立憲的超然內閣といふ看板で內閣を造らうとしても、ソンナ時代錯誤の政治は事實に於て行へるもので無い。尤も山縣などの頭は我々の考へと違ふから、或は清浦を玉手函から出さうとするかも知れぬが、清浦などで此の重大なる時局に順應して行けるもので

し、第一國民が承知しない。如何に山縣でも頑いて自分の考へを押通せまいから、今度も清浦は蒲焼の匂ひを嗅ぐだけで、問題にならぬ。

次に平田であるが此の人は今迄屢々候補者に擬せられ、特に山縣の目代であるから、是非一度出したいといふ腹が公の頭にある。子は山縣との關係が關係であるから、案外官僚系の間に勢力があるし、貴族院の通りも好いし、清浦よりも幾らか勝つてゐる。然し根が多智の人だけに極めて臆病であるから、進んで難局に立つ氣があるか何うか疑問である。特にアノ健康では第一體が持てぬ。萬一子が出るとしても衆議院との關係が隨分面倒になりはせぬか。子は何方かと言へば政友會嫌ひで、現に寺内内閣組織の際、政友會よりも憲政會と結ぶの得策なるを說いたが、寺内が聽入れなかつたので手を引いたのである。さういふ關係から憲政會内には平田加藤聯立内閣の夢を見てゐるものもあるし、平田子も若し自分が乘出すとなれば、或は憲政會と手を組むかも知れぬ。憲政會の今日の境遇は誰の内閣でも魚心あれば水心で行く方だから、必ずしも其の平田たると清浦たるとを問はぬ。唯一の在野黨にして内閣破壞の急先鋒を以て任ずる憲政會が、現内閣の後援者、官僚宗の大本山たる山縣を訪問して御高見拜聽と出るのも、其の間に一つの黨略があるからだ。然し萬一平田なり清浦なりが憲政會と結んで政局に立ち、政友會其他の黨派が反對すれば勢ひ議會を解散することになるが、此の騷擾に次ぐに議會を解散して政界を騷がすといふことは果して出來ることだらうか。

特に平田にせよ清浦にせよ、出て見た所で面目を一新した政治を行へさうに無く、却て寺内内閣よりも粗惡なものが出來るに止まる。是れを純理論から言へば、今日は官僚主義を代表する平田、清浦を擔出す時代では無い、希望及び實際の上から言ふも、平田、清浦では納りが附かぬ。

今一つ官僚側で殘つてゐるのは伊東巳代治子である。伊東が外交調査會に入て以來、世間には子に政治上の大野心あるを云々したが、縱令ひ子に内閣組織の野心があつても、實際に於て困難なる事情がある。それは山縣が彼を信用しないことである。

政友會組織以來子は漸次伊藤を離れて山縣に接近し、樞密院に入てからは益々山縣に近いたやうであるが、山縣の方では子が法制の才と事務的の材とを認めて役に立つ男だとは思つても、一國の大政を託するまでに重きを置いてゐない。既に山縣が好まぬとすれば、如何にジタバタしても物にならぬ。特に農商務大臣時代の暗い影があつて、宰相としての人格を疑はれてゐるから、伊東では世間に容れぬ。子も世間で言ふように野心

が無いといふが事實である。

下

普通から言へば政友會にお鉢が廻る順序であり、已に政友會が第一黨の位置を占むる限り、之れを無視されぬ道理である。又た政友會の方でも當然此方のものと思つてゐる。政友會が初めから、例の是々非々の旗印を掲げて、好意を表して來たのも望を他日に嘱したからである。然るに政友會には西園寺侯を首相に押立てようとするものと原敬氏に意を嘱するものとの二元論に分れてゐる。而して當の原氏は如何なる腹でゐるかと言ふに、自分が名實共に政友會の首領である以上、政友會を基礎とした内閣の首班になるのは當然で、今更政友會を逃げた西園寺を引ツ張り出す必要が無い。然るに自分を差措いて西園寺でなければならぬと言ふは、一種の侮辱であるといふ頭がある。それ故に今日の原は西園寺に對して一種の敵愾心を有し、現に西園寺を主張するものに對して、君達は二言目には西園寺を口にするが、然らば乃公を什麼する積りだと氣色ばんで言つたさうである。そこで西園寺は絶對に再起の意志が無い譯でないけれども、一は山縣に氣兼してゐるのと、一つは原が自分で遣りたい腹でゐるのを知つてゐるから、容易に再起の色を見せないのである。

從來政友會には急進論と穩和論の二潮流があつたが、最近に至つて殆んど舉黨足並をなし、政府に對して威嚇的態度を示すようになつた。西伯利出兵問題のイキサツの如きは確に其の間の消息を語つてゐる。政友會では原氏が外調で大規模出兵計畫に反對した爲めに、小規模のものになつたと威張つたが、外調で決した全部が最初からの政府の原案で、原は譯もなく同意したのである。我輩は多少共の間の眞相を知つてゐるけれども、今之れを公にすることは差扣へるが、實際は政府が勝つて原氏が負けた形である。それを何故アノ様に跡方も無い大法螺を吹いて手柄顔しようとしたかと言ふに、最初最高幹部に一つの計畫があつたのが外調で原が盲從した爲めに出來損つた結果である。而して此の計畫といふのも究竟する所早く政府を取つて代りたい爲めの權略に過ぎない。曩に出兵問題が決定したとき、臨時議會召集を主張したものもあつたが、原氏が頻りに不同意を唱へた譯は、議會召集の場合、原の力では政友會の空氣を抑へ切れないと心配したからではあるまいか。

斯くの如く多數は焦り切つてゐるが、少くも原氏は利害の勘算に敏であるから、是れから先の事を考へてゐる。若し政友會が腕づくで政府に取つて政るといふ露骨な態度を示すときは、之れが爲めに元老、軍閥及び貴族院の反感を招き、後來政

維持する上に邪魔が入る。又た場合に依ては山縣得意の夷を以て夷を制するの筆法に出で、常然來るべきお鉢が政友會に來ずして或は反對黨に行くかも知れぬ。是れが原氏に取つて憂慮に堪へぬ點である。そこで氏は喉から手が出る許りになつてゐても、空腹じや無いような千松顏をして隱忍自重し、自然に果報の落ちて來るのを俟つてゐるのが歴々と見える。現に東北大會を中止したのも此の寸法からである。

原氏は自分に來るものと期待してゐるし、原派もソンナ夢を見てゐる。是非原に内閣を組織させたいと言ふものは、若し西園寺が出れば中物の入閣は思ひもよらぬが、中物が大臣になるには原内閣が手頃であるといふ考も交つてゐるらしい。所で問題は果して原氏にお鉢が來るか什麽かである。理論上原内閣も通用し、全然可能性が無いとは言はぬが、實際に於て氏では第一軍閥の抑へが利かぬし、貴族院方面の納りが附き難い。原氏は上に一枚大物が控へて居れば立派な大臣だが、首相としては少し貫目と人氣を缺く。

斯の如く看來れば皆な夫々何等かの曰くが附く。そこで擧國一致内閣であるが、是れは後繼内閣として最も多く唱へられる議論であらうと思ふ。理論と希望は別として實際から言へば、寺内内閣に代るべきものは世界的時局に鑑みて、國の大仕事に堪へ得るものでなければならぬ。少くも寺内内閣と同等以上のもので無ければならぬ。それには或る程度まで各勢力を網羅した内閣が理論、希望、實際と一致するのであるが、扨て擧國一致内閣も問題は首腦如何である。一部には山縣の奮發を説くものがあるけれども、山縣は出さうに無い。是れまでも山縣が政治向に對して何か面倒な事を言出す場合、ソンナラ閣下が出てお遣りなされと言ふと、直ぐヘコタレるさうだから、山縣云々は先づ出來ない相談と見るべきである。と言つて誰でもと言ふ譯に行かぬ。少くも一般が肯定する丈けの大物でなければならぬ。是に於て勢ひ西園寺といふ問題が起つて來る。

西園寺では軍閥の首相に適せぬと言ふものもあるが、第一閲歴貫祿に不足は無いし、幾分か内外の大勢にも通じてゐるし、人格も立派である。西園寺ならば犬養氏と兩立することが出來るし、加藤子も不服を云はぬに定つてゐる。貴族院及び樞密院との折合ひも附く。所謂擧國一致内閣の首班としては先づ此の人が役に立つてゐるが、唯だ問題は本人が起つか起たぬかである。元々執着心の無い人だから、現在のまゝでは足を揚げぬかも知れぬが、第一原が西園寺を推す氣になり、三黨首が暫く感情行掛を去つて國といふ大見地から骨を折る精神になり、元老が援助の保證を與へ、軍閥が内閣と協調を保つて行くことにな

れば、無論起つに定つてゐる。幾度五十歩百歩の貧弱な內閣を造つて見ても、實際の仕事は出來ぬのであるから、此の際斯うでもして第一流の內閣を造る必要がある。是れならば品も好いし世間の通りも好いし、又た實力を持ことが出來るのであるが、さて實際になると之れを體現するには種々困難な事情がある。此の最善の內閣が出來ぬとすれば次善は何かといふと容易に見當が附かぬ。孰れにしても西園寺は必ず問題に上る一人だらうと思ふ。

▽予の後繼內閣觀

松井柏軒

最近一道三府三十餘縣に起れる騷擾は、明治卅八年、大正二年乃至三年に勃發せる暴動と異なり、純たる社會問題にして、政治的色彩を帶びず、隨て政府覿面の責任とす可らずと雖も、尙ほ民心を不安ならしめたる責任に至ては、遁れんと欲するも得べからず、

且つ政府從來の施設にして、機宜を失するもの少からず、その威信殆んど地に墜ちたることは、政府に大なる好意を有するものと雖も否定し能はさる事實とす、現に政友會すら今や政府反對の氣勢に掩はれて、到底永くその味方たらさるや明白也。

故に政府にして假令騷擾事件に責任を負はさるも、而して輿論また必らずしも之を窮追せさるも、政府が現地位を持續し行かんことは至難也、若し臨時議會を召集せば、其の時必らず運命を決すべく、通常議會に於ては特に然り、蓋し議會に於て、憲政會が正面より政府に敵するは勿論、政友會と雖も、最早政府を支持せさるや必然なれば也、而して政府假令議會を解散せんとするも、苟くも此の兩政黨の反對を受くる以上、竟に奈何ともすること能はざれば也

乃ち現政府の撤退するや必然にして、問題は唯だ時日にのみ存す、早きは九月中といひ、遲きも明春二月を出でずとすることは世間の齊しく認めて疑はざる所とす。

然れども玆に重要なるは後繼問題也、大隈內閣の居据りしも、實は後繼者なかりし結果に外ならざりしと稱せらる、後繼者の有無適否は、實に政府更迭の前に横はる至難の大問題也

思ふに今の政府の後繼者は原敬氏ならざることは、猶ほ加藤高明子の大隈內閣の後を承くるを得ざりしが如し、純理よりすれば、寺內內閣と當然多くの責任を分擔すべき政友會が寺內內閣に代る可らざるや論なし、假令此の純理を措つるも、將た

伯その人と、原氏とのアンダアスタンヂンダが如何に親密なるも、元老會議は到底原氏を奏薦せざるべし、元老會議は嚢に大隈內閣を奏薦したりしが加藤子を排するに、軍國の事重大なる今日、事權を一黨に偏するを非とするの理由を以てしたれば也、今は軍國の事の重大なる、大正三年の秋よりも痛切にして、而して原氏の政友會は、當時の憲政會よりも少數なれば也、原氏を後任として政權を一黨に偏す可らずと做すの理由は、當時よりも今日を殊に然りとすれば也、元老會議にして、苟くも理據を二三にして至尊を紿むき國民を愚にせざる限り、到底原氏を奏薦せざるや必せり。

好むも好きたるも、將た合理なるも非合理なるも、政府更迭毎に元老會議に御諮問あるは不動の先例にして、隨つて元老會議の結果の重大なるは、奈何ともす可らざる事實たり、然らば則ち元老會議は寺內伯の後任として何人を推薦すべき乎。

元老會議が原氏を推薦せざる如く、又加藤子をも推薦せざるや的確也、或は西園寺侯乎、平田子乎、伊東子乎、牧野男乎。

今の元老等は擧國一致の必要を口にして、曾て之を變ずることなし、故に寺內伯の後任を撰ぶに方りても、また之を原則とするや言なし、西園寺侯聲望最も高しと雖も、貴族院方面の侯に對する氣分尙ほ險惡なるのみならず、侯その人も、七十餘の老齡を以て、今更此の難局を擔當することなかるべし、侯は山縣公より推薦する如きあらば、寧ろ逆まに山縣公を推擧すべし、山縣公出でたりとも、別に大に爲すあるに足らずと雖も、伊藤公の哈爾賓に倒れしに較して、公や此の際一身を犧牲として難局に當るの勇なかる可からずと做す議論も出でん、然れども公の起たさるは猶ほ西園寺侯の出でさるが如きのみ。

平田子は健康堪えずして固辭すべく、其の事情は誰よりも山縣公之を知悉せり、伊東子また然り、伊東子の機智を以てせば、全力時局に當ること頗ぶる妙ならさるに非ずと雖も、子は本來智計の人にして、首相たる器にあらず、何ぞ況んや首相たる可らさる事情ありといふをや、牧野男は松方侯の極力推薦する所なるべく、殊に薩派は、男を起して原氏と聯立內閣を作らしむること、猶ほ大正二年の山本內閣の如くすべしと希望せん、然れども是れ薩派と政友會とに偏するに於て、元老等の所謂擧國一致の原則に吻合せさるを奈何せん。

然れども政友會をして、永く寺內內閣の味方たらしめたる報酬として、之を得意の地位に据ゑんには、牧野原の聯立に、幾分他の分子を加味して、以て擧國一致の口實を造るも妙ならさるに非ず、即ち實現すべき可能性を有することは、之を以て首とすべき乎。

唯だ問題は、政友會が薩派と提携して以て此の難局を擔當することを甘んずるや否やに在り、政友會は今の如き軍國時に起つも、黨本來の經綸を行ふ能はざるのみならず、黨としての利害より判ずるも、其の權勢掌握中に總選擧を行ふの便宜を得ず、却つて媾和期に入らば、中外に多くの不得意有るを理由として、寧ろ進んで薩派との聯立を欲せざるが如きことなきや如何。

玆に於て吾人は思ふ、元老會議は例の御鉢の持廻りを爲すことを罷めて、寺內伯を依然現地位に据置き、根本的に政府を改造するに非ざるなき乎と、即ち寺內內閣更迭を大趣旨とし、新たに寺內伯を起し、玆に曲りなりにも擧國一致內閣を造らんとするに非ざるなき乎と、例せば現在の大藏、內務、外務、陸軍、農商務等の諸大臣を罷め、外交調查會は勿論、新たに政友會憲政會よりも三人乃至二人の閣僚を選び、更に貴族院及び實業界方面よりも有力家を入れ、以て擧國一致の內閣を出現すとなすに非ざるなき乎、蓋し騷擾事件を以て端的に政府の責任と爲さゞる以上、單に人心を新たにする便宜上より、此の姑息手段に出づるにはあらざるなき乎、是れまた參考として記し置くも無要ならじ

若し理想的にいはば、山縣、松方、西園寺の三元老は勿論、大隈侯も、[illegible]男も、原氏も加藤子も、犬養氏も伊東子も、將た山本伯も、大浦翁も、總ての老人連を持出して、名實共に擧國一致內閣を造らしむべし、是れ彼等をして 先帝陛下の知遇に奉答せしむる所以にして、之を最期に彼等をして政局より隱退せしむべし、然かする間には、自からロイド・ヂョルヂの如き少壯敢爲の政治家も出でゝ、眞に局面の一新を看るべきのみ、新人未だ現はれずして、老物のみ問題となり、然かも多くは是れ閥渠の背競して、我が政治を沈滯せしむるの弊は、玆に掃蕩せらるゝに非ずや、否、國民の多數は今日の時局に當りて、是れ以上の政府を造る能はずと觀念し、而して後に來るべき新人の起るに依て始めて救はるべきのみ。

▽後繼內閣の首相は誰か

川尻東馬

(上)

▲失政百出、橫暴到らざるなかりし寺內內閣も、今や將さに其斷末魔に瀕して居る。憲法治下に於ける政府當局者としての責任觀念、政治家としての道德觀念杯、左樣な立派な筋の

た問題は、勿論寺内內閣に期待すべく、夫れは餘りに高尚過ぎる話であるから、吾人は今更彼是論議する愚劣を學ばない。二年間爲政の跡を瞥見し來りて、獨り吾人のみならず、國民一般に同様の意見を有するの止むなきに至つたことは、最早疑問を挿むべき餘地のない事實である。一言にして盡せば、國民全體から既に業に愛想を盡かされて居るのである。

▲只彼等の無責任無感覺なる。世間の攻撃非難に逢へば、之れ悉く反對黨策士の教唆煽動する處となし、糺問叱責に遭へば、之れ又反對黨論者の强ゐて奸計惡策を弄する結果に出づるとなし。其間些少の反省、輕微の顧慮だに拂ふの誠心誠意なく、國民我れに信頼せよ、依倚せよ、國家の權力、擧げて我が掌中に在りと、傲岸不遜、横恣壓制、宛として封建時代の藩主にも比敵するの權柄を振り廻し來つたのである。此間國民一般の內情如何と顧れば、不平不安の空氣日一日に醞釀せられ、怨嗟の聲、呪咀の念、到る處に充ち滿つと雖も、只管權力の危害、其身に及び來らさらん事を慮りて、唯々此不安不自由の境遇より、一日も早く脫出し得るの機會到來を、心中深く念ずるのみであつた。

▲最近全國各地に渉りて爆發したる不祥事件は、國民の此不平不安が、終ひに天意の導火により、米價狂騰を動機として、計らず期せざるに、一致外間に發したる現象に外ならんのである。社會組織の缺陷、經濟狀態の偏重偏輕、要するに國民實生活の不安壓迫。加ふるに思想上私權の極端なる放埒不取締あるかと思へば、一方に殆んど絕對的の壓制侵害を被るものありて、是等各般の怨嗟反感、窮乏苦痛は、計らずも國民を驅りて、終いに暴動掠奪を敢てする程の不秩序狂亂狀態を實演せしめたのである。切言すれば、政府秕政の影響する處、結局照似に此不祥事を實現するの誘因、原動力を醞釀せしめたものに外ならぬのである。

▲只夫れ今回の暴動騷擾は、云ふ迄もなく一時的の現象で、謂はゞ國民の發作的狂態に外ならんのだから、無論國民思想の一般的傾向が實際斯く迄に險惡に深刻に誘かれ、又不穩の狀態に陷りつゝある事が認めることが出來ぬ。國民の方にも自制的態度を缺き、合理着實の常軌を逸した缺點非難は、勿論之を免るゝことは出來まいが、併し實際日常生活に窮乏を告げ、生活狀態の不安に堪へ切れざる場合に臨んで、着實なれ、合理的なれ、而して飽迄自制的態度を持せよと要望することは寧ろ之れ苛酷に失し、嚴正に過ぎるの注文要求ではあるまいか。活きるに窮して、平素心にもなき亂に陷るは、之れ人間社會敢て珍らしきの現象にもあらさるべく、吾人は寧ろ或る意味に於て、一

片同情の涙なき能はずである。

▲斯く觀じ來りて、其全部の責任は、政府當局者の當然負擔せねばならぬてふ結論を得る次第だが、由來横暴にして無感覺に終始し治者の權力を振り廻すことのみを知りて、政治上國民に對するの責任思想、道德觀念を缺くの現內閣諸公は、罪科の全部は亂暴者にありて、一切當局者の責任にあらずと爲すもの丶如く、其間の責任觀念は、宛も已れ被告の位置に立ちながら、自ら原告の權利を確信し、更らに之を强行せんと欲するが如き態度意氣込みである。世俗横車を押し通すの諺も、斯く迄厚顏無恥、常識を逸し常道を距ると、餘りに違隔の思想態度を以て臨まれては、最早微温的譬喩諺言にして、到底之を適切恰當の譬とは云ふことが出來ぬ。

▲當局者は、今以つて責任を負ふの必要なし、從つて挂冠の意志は、毫頭之れあるべき筈なしと揚言し、心理にも內閣居据りの意氣込みを示して居るが、若し果して眞實斯樣の決心を有し居るならば、今後の社會狀態は、夫れこそ眞に寒心深憂に堪へぬものが勃發し來るに相違ない。深刻痛烈、當局者の所謂危險性を有するものが、或ひは眞に爆發せぬとも限られぬのである。實に國家國民として、之れ程恐ろしき由々しき大事はあらうか。兵力を用ひて鎭壓し、權力を以て極端に壓迫すれば、如何に不平な國民でも、終ひには泣く子と地頭に勝たれぬの譬を其儘、泣き寢入りに終るべしと測斷するのは、之れ大なる過誤である。不平不穩の氣は益々其間に濃厚となり、又激成せられて、其波及影響する程度範圍は、實に測り知るべからざるものがある。之れ深く考へ慮からねばならぬ重大問題にして、是れ呉れも現內閣諸公の反省熟慮を煩はすべき緊急事、大事件であることを、確認し信念として貰ひたい。

▲併し吾人は、表面如何に鬼面を被り、傲語を吐くと雖も、少くも寺內首相は、心中深く其責任觀念に打たれて居ることを信ずる一人である。從つて早晩何等かの形式に依り、其實現を見るに至るべきことを信ずるものである。現に水野內相の如きは、事件の一團落と共に、自らは其責任に任ずべしとの決心を有し居る一人と傳へられて居る。前途ある水野君としては、又苟くも法學博士の肩書に對しても、當然斯くあるべきは、最早疑問の餘地のない處である。愈々斯くなりても、他の閣僚は恬然其位置に嚙りつき居らんと欲するか。其僞りなき政權慾の眞情を云へば、或ひは之れが實行强行を慾望し居らんも、事實問題としては、到底之れが敢行を許さゞるに至るべき運命に陷るであらう、否な當然辭職のお相伴を餘儀なくせられねばならぬ。

（中）

▲斯くて吾人は、早晩後繼内閣問題の實際事件として現れ來るべきを確信するものがあるが、只其時期に就ては、今の處全く無見當無算當と云はねばならぬ。寺内首相に親しく面會して來た大岡議長が、北後ジャパン、タイムス記者に語つた處によると、自分の見込では、政變來の時期を大體九月中旬頃と云つて居る。如何なる根據から立てた見込みか、又單なる想像に過ぎぬか、夫れは終ひに聞くを得なんだが、吾人は必ずや相當の根據あり、又理由ありての觀測談と信ずるものである。從來執り來つた諸種政務の跡始末、着手中途にある各般の施設事業の引繼ぎ等、如何に辭職を決心しても、所謂其引渡し順序を整理する丈けにでも、相當の時間と手數と準備を要するのは當然であるから、半月や三週間位、或ひは餘日を置く必要があるかも知れぬ。殊に外には講和を控へて、浦潮、滿洲里等に出兵しつゝある重大時局であるから、旁々以て引渡し準備にも、平素の時代よりは、時日を多少餘分に費す必要に迫られて居るかも知れぬ。夫れや是れやの理由推定からして、吾人は現内閣辭職の決心を確信し、更らに其時期見當に就ても、大岡議長の言を大體標準とするの、當らざるも遠からざることを信ずるものである。

▲果して然らば、後繼内閣は誰れに依りて組織さるべきが當然の順序か。其處には自ら理論問題と、事實問題の二通りが出て來るのだある。理論問題としては、吾人年來の主義主張たる政黨内閣の見地から、當然衆議院の比較的多數黨たる、政友會の原敬君に依りて組織されねばならぬのである。斯て政友、憲政の兩黨が、交互責任の位置になつて、國家の重責に任ずるの、立憲政治の常道に立つを得べく、今回の騷擾事件を機會とし、元老も官僚も又貴族院も樞密院も、眞に民意の奈邊に存するかを認識し、又之れを容れるの公心を示すべきが、勿論當然の結果であらねばならぬ。

▲元老連動もすれば、時局重大なるが故に、一黨一派に偏するの内閣組織は、此際國家國民の爲めに好ましからず、宜しく擧國一致内閣ならざるべからずと確信し、又公言するのである。現に山縣公が前大隈首相の奏請せる後任首相候補者加藤子を排斥せる理由として、當時親しく加藤子を自邸に招致し、君は總理大臣たり得る人物にあらず、又其重任に堪へ得る力量才能抱負經綸なしとして排斥したるにはあらず、要は政黨の首領なるが故に、此時局重大の際には、不適任と認めたるに外ならずと、辯疏したるに徵するも、其眞意の果して奈邊にあるかは、自ら明瞭に判斷が出來るぢやないか。

▲併し其擧國一致内閣として、元老が聯帶責任を以つて奏請したる寺内内閣が、果して其宣言通り、秉公持平の態度を持し得たかどうか、一黨一派に偏せずに、飽迄も超然主義に終始し來たかどうか。選擧干渉を手初めに、する事爲す事、悉く一黨一派に偏倚し、果ては反對黨苛めに惡辣深刻到らざるなかつた事は、今更ら彼是云はずと、世間公知公認の事實である。否な寧ろ從來あつた如何なる内閣よりも、更らにヨリ強く、ヨリ多く偏頗不公平であつた事は、國民一般に認知するは勿論、恐らく元老連自身さへ、實は呆れて居るに相違ない。實に吾人は斯く想像し推定すべき、幾多の理由を有し居るのである。

▲憲法治下に存立して、帝國議會と共に國務の衝に當らねばならぬ内閣大臣が、秉公持平の、超然主義の、一黨一派に偏せずのと、實は云ふべくして行はれん相談である。一方に與黨あれば、他方に反對黨あるは自然の成行で、政黨なるもの丶存在する以上は、是れ當然の結果であらねばならぬ。斯て寺内内閣は、其當初の宣言を反古にし、政友會と國民黨に倚り、憲政會を向ふに廻して戰ひつ丶來たのは、自然の結果止むなき事情であらう。心中之を希望せなかつたかも知らぬが、斯くせざれば國務一日も進行せしむる能はなかつた、實際問題の必要に迫られた爲めで、吾人も此心中及び態度に就ては、敢て夫れ程非難攻撃を加へ様とは思はぬ。只夫れ其遣方が如何にも惡辣深刻を極め、而も強て反對黨を陷穽に導き、故意に窮境に壓迫せんと試みた、各種各般の施設手段に就ては、飽迄其暴戻不法を詰責糺弾せんとするものである。

▲元老連も、最早寺内内閣の實績實情に顧みて、政黨排斥の頑固不靈なる舊思想より脱却し、政黨無視の事實不可能なる所以を諒得して、飜然立憲思想に復活せねばならぬ好個の機會である。吾人も決して今日の政黨に對しては、全然信任を拂ふものではない、否な寧ろ其素質の劣惡、分子の醜情を確認するものである。併し既成政黨夫れ自身が劣惡なり、醜態百出なりとの理由のみを以て、一概に政黨内閣其物迄も絶對に排斥する理由は、毫末も認められぬのである。常に攻撃し刺撃し、更らに其改善と反省を需め、歩一歩、公黨として國民も信頼し、自らも滿足に近き素質と體面を有し、誠心國家の重きに任ずるの、言議行動を採らしむるに力むべきは、之れ畢竟するに國民全體の義務であり、又要望の範圍である。單に元老連の不安と私心によりて、政權の移動を支配し、又内閣の存廢權を掌握すべきものではない。

▲故に吾人は、飽迄も政黨内閣の基礎確立を絶叫し、此際速かに之れが組織を要望し渴望するものである。既成政黨、殊に憲

の最も古き政友會の悪事醜行に至りては、今や幾多實例の枚擧に遑あらざる處、國民亦均しく之を認識すと雖ども、愈々責任の位置に立ち、政黨内閣制の基礎確立さるゝの曉に於ては、彼等と雖ども自然に反省するに至るべきは、吾人の信じて疑はぬ處である。若し萬一些の反省なく改善なくして、從來の態度其儘を持續し、眼中國利民福なくして、只自黨自家の利害のみを念とせんか、何人の手を待つ迄もなく、國民は直ちに彼等に極刑を宣告するのである。

▲國民一般の政治智識、或ひは幼稚なりとの所以を以て、此理論を一笑に附するものあらんも、教育指導更らに訓練理解、之を力むれば、覺醒扶掖の事、發達普及の業、また左程の長時日と困難を感ぜないのである。要するに今日國民の政治思想幼稚にして、權力阿附に傾き居るのは、元老官僚の政權壟斷、政黨政治家の腐敗墮落、終ひには教へず覺らしめず、欺き倚らしむるの悪計秕政、果ては國民を驅りて玆に至らしめたと斷言して憚らぬのである。

（下）

▲併し之れは全くの理想論である、現在の事實事情から離れての主義主張である、要するに吾人の希望と正理、終ひに斯くせねば國治まらず、民安んぜずと警告し要求したのに外ならぬ。實際問題としては、今直ちに之れが實現を見得べしとは、遺憾ながら吾人斯く確信し認識する程、左様に正直にして、又主義主張の爲めに忠實なる能はぬのである。其故如何となれば、政治界四周の内情經過が、餘りに複雜錯綜して、ソウ單純に理想を實現するには、色々不便不可能なる事情行懸りの、幾多其前途に蟠り居ることである。斯て吾人は遺憾不平を忍耐し、止むなく實際問題としては、自ら別種の見解を下さゞるを得ない事になる。

▲第一、山縣公が加藤子に明言したといふ、戰局終結に至らざる間は、幾多政變來ると雖とも、政黨首領に天下を渡さぬとは、元老一致の申合せである。洵に不都合千萬な申合せ、國家の大事、大權に屬する此重大問題を、二三老人間に私議決定する杯は、不埒とも我儘とも、何とも云ひ様のない話ではあるが、事實は之を如何ともすることが出來ぬ。實際問題として、元老が内閣の製造者たり、又産婆たる以上は、如何に議論して見ても、結局無效な我國政界の現在である、又實情であるから止むを得ない。果して然らば吾人當初の主張たる、原内閣の出現は、此申合せに依りて既に成立不可能の實情となつて居るのである。

▲夫れも原君に勇氣あり確信ありて、無理にも實力で押し通

し、腕力と勢力を以て其政權慾を充たさうとの決心さへ立てば、案外無力な元老、卑屈臆病な樞密院其他の長老連であり、反對黨の憲政會さへ、多少手傳へば此際敢へて辭せずとの意氣込みであるのだから、現內閣に代りて政權の位置に据はられぬ事もないが、如何せん原君は極めて悧巧主義の人物である。喧嘩は損、老人連の機嫌は飽迄も損ぜぬ事、敵は作るべからず、急がば廻れといふ、隱忍主義、自屈方針の極端なる信仰者である。平素白紙と稱し、是々非々主義と公言するのも、要するに此心から出發する言明で、世間に熟柿の落るのを何時迄も待つて居ると云ふのは、如何にも適切に其心事を穿つた言である。

▲斯て今は官僚系に極端なる反政友熱昂騰し居る內情を熟知し、加ふるに元老連の申合せが斯くある時代に於て、悧巧と隱忍を唯一無二の信條とする原君が、如何に黨內の四五躁起連が結束して動き又氣勢を煽りたりとて、直ちに之を承知して起つ樣な猪突勇邁心は起さぬのである。加ふるに外交調査會に參列する原君は、現內閣外交失敗の責任に對しては、確かに其一部を當擔せねばならぬ行懸りもあり、殊に現內閣の外米輸入關稅撤廢意見に反對し、終ひに米價騰貴の氣勢を早きに防遏するの妨碍を爲せるは、其責任寧ろ政府よりも重きものありて、此內情を知悉する輩に、苟しくも政友會が手に、責任を云々し居る場合にもあれば、單に實際問題としてのみならず、理論上よりしても、政友會に後繼內閣組織の資格なしと論ずるもの、貴族院、實業界方面に相當傾聽に値する議論として傳へられて居る折柄、旁々以て此際原君の手に天下の大勢は歸すべくもあらぬのである。

▲加藤子の後繼說は、其率ひる憲政會が餘りに微力なりとして問題にするものは至つて少ない。平田子に就ては、世間で大分呼び聲は高いが、恐らく本人自身は出る野心があるまい。山縣公も寺內伯の後に平田子と、ソウ餘りに自家の直系許り出すことの不利反感を招く基たる位は、平素用意周到なる老人丈けに、十分承知し居るべく、加ふるに勇氣なく體力又其任を完うする能はざる子は、旁々以て此際出で來るべしとは思はれぬのである。伊東子に至りては、本人自身の野心、必ずや滿々たるものあるべく、犬養君の如きは、自黨の立場よりしても、熱心之を希望し、又劃策し居るに相違ないが、少なくも宮中に於ける子の信任程度、樞密院、貴族院方面の空氣を理解し諒得するものは、到底之れが實現を期待するものはない。

▲淸浦子の呼び聲も亦相當に高い、而して本人は一には名聲回復、二には一生一代の宰相、其野心の滿々たる、何人よりも

かに高熱高速度に相違ないが、果して政友會の後援を得る見込が立つかどうか、如何に政友會永年の歴史が、權兵衞公に終始し來つたとはいへ、此際更らに淸浦子に迄、忠勤を擢んで樣とは、吾人到底想像されぬ處である。果して然らば之れ又單に本人の野心、希望、周圍の運動奔走位が關の山で、終ひには暗から暗に葬り去らるべき運命と測斷するが至當であらう。其他德川公、芳川伯、牧野男等、夫々呼び聲もあるが、何れにしてもお鉢は到底玆迄回らずに、時局は終ひに解決さるべきことゝ思ふ。若し愈々玆迄回る樣の事があつては、夫れこそ政界混亂、時局紛糾、國家としては、實に由々しき場合と云はねばならぬ。

▲斯て吾人は結局西園寺侯の起立を餘儀なくさるゝことと推定するが、其玆に至る迄には、無論相當の迂餘曲折は免れぬ話で、先づ第一に山縣公との間に、今以て未解決な交渉案件の樞密顧問問題から形つけて行く必要がある。第二は軍備問題に對する山縣公の誠意ある證言、後援の約束、第三は侯の反對意見を有する外交調査會の存廢問題、第四は之れも侯の賛同せざる出兵問題に就ての陸軍との折合約束、第五は內閣組織後に於ける官僚系、殊に山縣公の無理な注文要求を封ずる事、其他諸種の證言確約を得た後でなければ、無論侯の應諾を得べしとは思はれぬのであるが、事今日となりては、山縣公も終ひに七重の膝を八重に屈して、侯の起立を承諾せしめねばならぬ重大責任がある。是を以てか苦痛と我慢は背に腹は代へられざる今日此際一切を拋棄して只管侯に懇請するに相違ないことゝ信ずるのである。斯て會見數度、交渉幾回、其間或ひは餘人にお鉢の廻る事等ありとしても、結局は侯に依りて後繼內閣が組織されるより、外に道があるまいと推測し、而して信ずるものである。

▲最後に吾人の希望を最も露骨に云はしむれば、眞に元老連にして時局重大、擧國一致內閣ならざれば、國家國民の損害莫大なり、國歩の前途困難不安なりとの強き信念あらば、宜しく山縣公自ら起つて內閣を組織し、其抱負經綸を行ふべき責任と義務があるのである。併し事實問題としては、第一頽齡其任に堪へざるべく、又其勇氣も確信もあるべしとは、勿論想像だにすることが出來ぬ。從つて吾人は今更ら斯樣な野暮極まる責任義務呼ばりをせぬが、其代り年寄りの冷水も、モウ大概にして斷念し諦めて貰ふことを、此際特に要望し切望し渴望して置く。

評論

西伯利出兵に關する日米兩國の宣言

法學博士　吉野作造

(一)

チエツク・スロヴアツク救援の目的を以て浦潮方面に出兵せる日米兩國は、八月初旬各々其宣言書を發表した。双方共出兵の目的に就いては、相當に委しく說明して居るが、其由來に就いては隔靴搔痒の感なきを得ない。然し日本から言へば、今度の出兵が米國の提議に促された事だけは明白である。只我國に於ては米國の最初の提議より出兵の決行に至る迄の一切の經過を秘密に附し、其顚末の公表を禁じて居るので我々國民には分らない。此點は米國の方でも餘り詳密を明白にして居ないやうである。只米國の宣言は我國のより比較的此點を委しく說いて居るが、中に就き特に彼の宣言に新らしい點は、米國の浦鹽出兵の提議が聯合國間の共同軍事行動の一部分としてなされたものであつて、他の英佛二國と關係なく米國が出し拔けに申し出したものでないと云ふ事である。彼の宣言書に據れば、米は浦鹽・ムルマン・アルカンゼル方面に於て軍事行動を執るの必要を認め、而して後二所に於ては英佛と提携するを要し、前所に於ては日本と結ぶを要し、斯くして「日本に對し兩國各々數千の兵を浦鹽に派し、兩者一體の軍容を整へて浦鹽を占領し目下西進中のチエツク・スロヴアツク軍の後方警備に任ぜん事を提議したる所、日本は此提議に對して承認の意を通じ來れり」とある。只其所謂日本の承認なるものが全然無條件なりや、或は何等かの留保ありやは今日明かでない。否世間には彼の出兵の目的と我の出兵の目的と必ずしも同一でないとか、又同一たるを要せずとか說いて居る者もある。けれども米國から見れば、日本にどれ丈け自主的行動の餘地ありやは一個の問題とならざるを得な

い。此等の點は事極めて重大であるけれども、交渉顛末を秘密にして居る以上之が闡明は永久に我々に封ぜられて居る。

（二）

所謂米國の宣言なるものは八月四日國務卿代理の口を通して發表せられた。全體を通じて最も熱心に力說して居る點は、我日本のそれと同じく露國の主權を侵犯するの意志がないとか、其内政に干渉するの考がないとか、況んや領土の保全を傷けんとするが如き事は毫頭ないと言つたやうな點である。尙之に關聯して彼が一般に露國に對する軍事干渉の否認を原則として居る點は特に我々の注目を要する。彼は所謂軍事干渉は從來屢々東方より獨逸を牽制せんとするの目的を以て企てられたけれども、之は却て露國を救助する所以にならない。否目下の悲む可き混亂を鎭むるよりは寧ろ之を傷ふの怖あるのみならず、西部戰爭に全力を注ぐ可き今日の場合徒らに東方に兵力を割くは得策にあらずと說いて居る。之に依つて之を觀れば、露國救援を名として一般に軍事干渉を行ふのは露國の爲めでもなければ、又聯合國の實際の利益でもないと言ふのが米國の立場である。此點に米國以外の他の與國はどれ丈けの諒解を有つて居るかは吾々の特に注意を要する點である。

併しながら米國は次の二つの場合を限り例外として聯合與國の出兵を是認して居る。第一は武裝せる俘虜に對してチェツク・スロヴアツクに出來る限りの保護と援助とを與へんとする場合、第二露國民が其自治と自衞との爲めにする努力に對して吾人の援助を甘受する場合の二つである。此二つの場合に限り例外として出兵はするが、併し根本に於て軍事干渉否認の原則が此間に承認せられん事を要求するは言ふ迄もない。

然らば以上の例外の場合として現實に出兵を必要とする方面は何處かと言ふに差當り三ケ所に限られて居る。即ち浦鹽とムルマンとアルカンゼルである。チェツク・スロヴアツクの援助を主たる任務とする方面は言ふ迄もなく浦鹽で、露國民の援助を任務とする者はムルマンとアルカンゼルである。併し浦鹽方面の出兵も露國民自身の行動を援助せざるに非らざるが如く、ムルマン、アルカンゼルの出兵が又露西亞の内部に進むと共にチェツク・スロヴアツクを援助しないとも限らない、チェツク・スロヴアツクが露國の所謂愛國的穩健派と何程丈け深く提携して居るかは姑く別問題として、彼と此とは同時に援け又同一の方向に活動せしめ得るとするのが米國宣言の主として着眼する例外的出兵の目的である。そして彼は此見解の下にムルマン、アンカンゼル兩地方に於ては英佛兩國政府と提携して一臂の力を效しつゝあると共に、浦鹽に對しては日本を促して我々の目前

に展開して居るが如き新形勢を起さしめたのである。

一體聯合國の力に依り出來るならば露國の愛國的穩健派を守り立て、一つには內部の秩序を恢復し、一つには外獨逸に對抗する一勢力の復興を計らんとするのが英佛側の初めからの希望である。其爲めに彼等は一度ケーレンスキーを援けたのであるが、其失敗に歸するや遂に意を決して白國の兵を送り以て愛國的穩健派に擡頭の機會を與へんとした。而して此企ては露西亞に於ける獨逸勢力の侵入と共に益々其必要を認められた。此爲めに何處から兵を入れるかと云ふ問題に對して先づ選ばれたのが浦鹽とムルマンとアルカンゼルである。故に此等の三地方に對する出兵と云ふ考の發頭人は米國ではない。而して今や米國が卒先して此提議をなしたと云ふのであるが、外形が同じでも米國の腹と英佛側の腹とが全然同一であるかどうかは決して不問に附し得る問題ではない。我國の出兵宣言は英佛も已に浦鹽に出兵した。而して其後米國から勸誘を受けたので喜んで之に應じ以て履信の實を全うしたと漫然說いて居るけれども、國民としては英佛の腹と米國の腹と同じで有つたかどうかを見極めたか否やを詰問するの必要があるのである。何となれば何を以て所謂露國民と觀るかに就いては双方の見解もと必ずして全然吻合して居なかつたからである。

（三）

翻つて帝國政府の發表せる出兵宣言を見よう。然し之に依つて我國政府の出兵目的を測定するには、も一つ同時に發表せられた寺內首相の演說なるものを參考するの必要がある。何故なれば首相の演說は宣言の解說たるに止らず更にもう一步進めて新らしき意味を附け加へて居るかの感あるからである。蓋し此双方に顯れた趣旨を以て政府の執つて以て出兵の目的となす所なりと見るのが穩當の見解であらう。第一の目的は所謂獨禍防遏といふ事である。宣言に曰く「露國の政情著しく混亂に陷り叉外迫を干禦するの力無きに乘じ」中歐諸國の威壓いよ〳〵加はり遠く極東露領に波及し現にチエツク・スロヴアツク軍の東進を阻礙せる軍隊の如きは獨墺俘虜の指揮する所である。第二はチエツク・スロヴアツク救援と云ふ事である。「チエツク・スロヴアツクは終始聯合列國と共同對敵し……其安危の繫る所延いて與國に影響する事少しとせず……彼等が西伯利方面に於て獨墺俘虜の爲め著しく迫害を蒙る事」は我々の拱手傍觀し能はざるところである。以上の二つは宣言の中にある。寺內伯の演說は更に第三として過激派壓迫を宣明して居る。「露領西伯利の秩序恢復を容易ならしむる一手段」としてもチエツク・スロヴアツクの援助は必要であるといふのである。

米國の宣言は獨墺の俘虜が跋扈して居ると云つて居る。我國の宣言の如く之が直ちに必らずしも中歐諸國の勢力の東漸を意味するとまでは云つてない。又彼はチェック、スロヴアックを出來る丈け保護し援助したいと云つて居る。我日本の宣言の如く其安危の繫る所延いて與國に影響する事尠しとせずと云ふが如きとんでもない誇張の言を弄してゐない。彼は露國民の自主的努力を援助するとは云ふて居るけれども、如何にも過激派を押し除けることが秩序を恢復する所以であると云ふやうな露骨の言を弄してゐない。從つて我の誠意を披瀝し相手方の反感を厭はないと云ふ宣言發表の目的から云へば、我國のは少くとも米國のに比し拙劣を極めたものである。然し何れにせよ事を露骨に云へば、今度の出兵の目的は一つにはチェック、スロヴアックの望を達せしめ、又一つには露西亞を過激派の手から奪つて獨墺をして乘ずるの隙なからしめんとするにあることは疑を容れない。

（四）

さうするとこゝにもう一つ問題になるのは日本兵活動の範圍如何といふ問題である。之れ丈けの目的を達するに活動地域に於て制限を受け兵數に制限を受けては何事も出來ない。此事は我國の論壇に於ても已に屢々問題となつた。政府は此點に關して如何なる考を有するやは例によつて之を秘密に附して居る。我々としては此問題に關しては只次の諸點に注意する事を忘れてはならない。

（第一）は日本の活動區域を出來る丈け狹く限らんとする思想の存する事と、其半面には又之に反抗して出來る丈け廣く伸びしめんとずる考の存する事である。例へば米國邊の一部の論壇には所謂日本の野心を疑つて日本の活動を出來る丈け狹く限らうとする考があれば、之に對して我々の間には兵數を限られてはいけないとか活動舞臺にも制限があつてはいけないと主張するものがある。所謂浦鹽出兵に對して自主的出兵を說くものがあつたのは此考のあらはれである。現に寺內首相も其演說の中に「混沌たる西伯利の狀態尙久しく繼續するに於ては帝國政府は東亞の平和を保障する爲め更に考慮を費さゞるを得ず」と云つて場合によつてはもつと先へ伸びるぞといふ氣勢を示して居る。現に八月央ば發表せる滿州北邊の所謂日支共同派兵の如きは假令表向の形式は聯合軍の西伯利出兵とは全然其性質を異にするとか又は單に滿州守備軍の移動に過ぎないと云うて居るけれども畢竟は日本政府の必要と認むる範圍に對しては誰に遠慮もなく活動區域を擴張するといふ豫定の方針に出でたものと見なければならない。それならば帝國政府は何處までも活動區域

を形勢の必要に應じて擴張し止る所を知らざるものであるかといふに必らずしもさうではない。是に於て

（第二）に一方には日本軍の無限の活動を希望するものあるに對して又其處迄は行かないといふ考のある事をも認めなければならない。八月初め露國民及びチエツタ・スロヴアツク民族の名に於て吾人の救援を求むるを書を送つたものがある。彼等は云ふ我々は全力を擧げて努力して居るけれども獨力で目的を遂行する事は困難である。然るに目下聯合軍の活動の範圍は僅かに沿海州一圓に限らるゝものゝ如く之では西方にある同類は十分に救はるゝ事を得ない。聯合軍の援助は少くも後貝加爾迄向けられなければならないと云つてをる。此等は比較的穩健な要求であるが更に極端なものになると西伯利並びに東露の秩序の回復は一に日本の援助にかゝるなどゝ煽動てもつと先きまで誘ひ出さんとして居るのであるが、之に應するのがいゝか惡いかは姑く別問題として之に對しては極力留保的消極的態度に出でんとする考があることを見逃す事は出來ない。畢竟するに帝國政府は必要の限り活動範圍を擴張するといふが、其必要とは形勢に促さるゝ必要か、或は日本軍部自身の必要か、又日本政府自身の必要を決定する根本の目的が日本獨自のものか、又聯合國と共同のものか、此等の點を明かにし得ざるは我々の甚だ遺憾とする所である。

露西亞に對する聯合國と獨墺との活動

法學博士　吉野作造

（一）

八月初めの西電は英佛米並びにムルマン地方議會との間に一協約の締結を見たといふ事を報じた。同協約は他日統一的大露西亞の建設を見るまで聯合國の助力により其領土を保全し、露國勢力の復興を促すを目的とするもので、專ら軍事上經濟上の援助關係を定めて居る。例へば聯合國は同地方の武裝せる露軍を教練して之を露人司令官の麾下に置き必要に應じては尙資質上の援助をも與へ、而かも同地方の内政には一切干渉せざる旨を規定せるが如き、又は同地方の住民に對し食物其他の主要なる物資を供給するのみならず、必要とあれば技術上財政上の援助をも與ふるといふが如き之れである。之れに對してムルマン地方會は極力獨探の排除に勉むべきを約して居る。其後同地

は聯合國と協力する露人の所謂穩健派の勢力が大いに伸びつゝあることは、昨今頻りに西電の報ずる所である。委しい報道は無いけれども、同じやうな狀態は昨今又アルカンゼル地方にも現はれて居る。英佛米の援助の下に此等北邊の地方に昨今所謂反過激派の勢力の勃興は誠に目覺ましきものがある。若し夫れ我々日本の直接に關係して居る所の浦鹽方面の狀境に至つては、今更ら諄々しく說くの必要を認めない。而して此方面よりする援助が獨り軍事上のみに止らずして更に他の方面にも及ばんとしつゝあることは、月の末頃經濟援助委員會の新設せらるゝの報あるに徵しても明かである。

去年の十一月過激派の天下を取つて以來、露西亞以外の國に於て殊に我國に於て、一つには過激派に對する同情の勘い爲めでもあらう。過激派は今にも倒れる、反過激派が段々盛んになりつゝあるといふ報道は頻りに傳へられた。併しながら此等の報道は直ちに爾後の事實によつて裏切られ、寧ろ過激派は勢力を增す一方であるといふべき有樣であつた。而して反過激派が頭を擡げ來つたといふ報道のいよ／＼本當らしく思はるゝのは昨今を以て始まると云はなければならない。

此時に當つて過激派の頭目レーニンとトロツキーが獨逸の爲めに都を逐はれた、委しく云へば莫斯科に居たゝまらず、クロンスタツトに政府を遷したといふ報道は頗る耳寄りの話である。誰に逐はれたにしろ、レーニン、トツキローの沒落は恐く過激派の沒落であり、從つて露國の政界に更に一轉進を與ふるものであるからである。

（二）

レーニン政府は今や非常な難境に居る。彼が初めから英佛側と好くなかつた事は言ふを俟たない。之れ獨り彼が英佛の援助の下にあつたケーレンスキー一派を表面の敵として立つたが爲め許りではない。英佛が長く露國に期待せる所のもの、即ち露國をして獨逸に對抗する一勢力たらしめんとする考と根本的に相容れざるものであつたが爲めである。英佛も亦正面からレーニン一派を敵視する事を避けたけれども、併し彼等の露國に對して爲す所のすべての施設は、過激派の手より露國を奪はんとする事にあつた。故に表向の口實は何であれ、英佛の積極的活動は當然レーニンを敵とする事にならざるを得ない。只僅かに米國の此間に於て稍や過激派に好意を表する者があつたが、併し之とても今度の共同出兵の決行に就いては餘程其從來の態度を維持し難くなつた。米國も亦漸々過激派を見捨てたといふ報道の果して事實なりや否やは多少の疑なきに非らされ共、八月上旬レーニン政府の宣言せる所謂戰爭狀態の相手の中に米國も含ま

れて居る事は疑ない。只米國が何時迄で過激派に楯を突くか、又將來此方針で押し進むかは多少の疑なきに非ざれども、兎に角レーニン政府の外交的孤立の關係が今日最も鮮明になつて居る事丈けは明かである。若し夫れ獨逸との關係に至つては、レーニン、トロツキー政莫斯科撤退の說が之を最も雄辯に語つて居る。獨逸は初め過激派政府を利用した。併し彼等は本來如何なる國とも到底歩調を一にする事の出來ないものである。彼等の一本調子なる、殊に其主義に忠なる、到底自ら節を屈するものではない。之れ獨逸が最初に操縱に成功して結局彼等を奈何ともする能はざるに至つた所以である。斯くして獨逸も亦レーニン政府を敵とするに至つた。世間では今尙過激派を以て獨探なりとし、又聯合國より彼を責むる事餘りに激しければ遂に彼等を驅つて獨逸に接近せしむるの怖れありなど丶云ふものあるけれども、恐らく一片の杞憂に過ぎない。西伯利亞に於ける獨逸俘虜の活動を以て獨墺の本國其物と過激派との提携と見るに至つては其誤りなる事一目瞭然であらう。

斯く外憂の多い所へ内部から又種々(いろいろ)の反對勢力が頭を擡げる。斯くしてレーニン政府の何時迄も永く繼續すると言ふ事は想像し得られない。畢竟早晩沒落すべき運命にあるものたるは言ふを俟たない。が然しレーニン政府沒落の機が目前に迫つて居るとか、レーニン政府の人氣が今や全然地に墜ちたと考ふるならば之れ亦大いなる誤りであらう。革命後のロシアが社會主義の支配する所たるは何人も異論があるまい。レーニンは其最も極端なる代表者である丈け社會主義者が實際經營の衝に當つて幾多失敗の經驗を重ねない以上は容易に之を疎外するものではない。且つ社會主義者の言ふ處に假令どんな理論上の缺陷があつても、彼等が多數國民の感情を支配して居る事は又實に偉大なるものがある。例へば社會主義者は資本の合理的存在を否認する。少くとも社會の富に對する資本勞働間の分配を不公平なりとする。併し資本と勞働との取分の間に實際上どういふ割合を立てるのが公平なりやは理論上更に分つて居ない。公平の標準點が分らない以上は現在の制度に於ける分配が公平だの不公平など丶言ふ根據がない。併し之は理論上の事で若し實際に感情論からいけば今日の分配關係が不公平である。上のものは下のものを犧牲にして過分の分配に與つて居ると云ふ感情は何人も抱懷して疑はざる所である。レーニン、トロツキーは巧みに此弱點を捕へて民衆の信賴する所となつた。それ丈け彼等の勢力はなか〳〵侮る可からざるものがある。理論上の正否は必ずしも街頭民衆の間に於ける勢力の强弱に正比例しない。

併し社會主義の主張が如何に分配の不公平と言ふ普遍的感情

を捉へて居るとは云へ無限に勢力を維持し得るものとは思はれない。何故なれば彼等は常に有産階級の壓迫に苦しんで居つた民衆の不平に投じ得るけれども、更に進んで其不平を癒す力は案外に少いからである。何と云つても不平を癒す實際の力は富である。社會主義は今日の經濟社會の分配制度を批評するに熱中して、富の生産の問題は比較的閑却して居る、世の中の無限の進歩に適應し、又世の中の進歩に伴ふ人類に無限の慾望を充たす爲めに必要なる富を如何にして生産し得るかの問題になると彼等は何時でも行き詰る。茲に實際上の方針として彼等の弱點がある。現にレーニン政府も有産階級の富を沒收して之を民衆に頒つまでは素晴らしい勢を以て進んで居るけれども、斯くして得たる富を處分する段取りになるとなか〳〵思ふ通りには行かない。況して富の生産と云ふ事になると早くも有産階級の智識と技能とを藉らうなど〻云ふ說も起つたではないか。結局彼等は一時の勢を逞るに成功しても永く民衆の救世主たるを得るやは一個の疑問である。從つてレーニン政府の沒落は何れ早晩内部の思想上の缺點に根據して沒落する運命にあるものと言はなければならない。而して此不幸なる運命が彼等がマルクス流の社會主義の主張に忠實なれば忠實なる程確實である。而して昨今彼等の作つた外交的孤立の形勢は此内部の原因に基く沒落の運命をして益々促進せしむるものであるかも知れない。

只併しながら理屈通り過激派政府がさう急に沒落すると信ずるならば之れ亦決して正當の見解ではなからう。殊に人爲的に其沒落を早めんとすれば其反動として却つて民衆と政府とを再び堅く結びつけると云ふ事にならぬとも限らない。

（三）

何れにしても過激派政府は聯合國側からも敵視せられ、獨逸側からも敵視せられて居る事は明白である。而して過激派政府沒落後の露國の形勢は奈何と云へば、恐らく暫らくは英佛側と獨墺側との角逐、否な親英佛派と親獨墺派の抗爭といふ現象を見るであらう。而して之れさながら歐洲戰爭の小縮圖たるが故に、全體の戰爭の勢力の消長は、自ら露西亞に於ける兩勢力の消長でなければならない。此秋に方つて革命勃發後久しく對露政策の誤りを叫ばれ、殆ど獨墺の一人舞臺の感あつたのに最近に至り聯合國側の活躍漸く盛んとなり、今や東西兩面より彼を壓倒し去らんとするの形勢にあるのは、我々の最も喜ぶ所である。

此際我々の一つ見逃してならぬ點は、今日迄の聯合國側の對露政策は果して失敗であつたかどうかと云ふ點である。聯合國

側を失敗と論ずる者は、其半面に於て獨逸側を成功と呼ぶ。獨逸側は逸早くレーニン一派を利用して獨逸勢力の急造的樹立を計つた。先づ以て一歩を踏み込め、其後の事がどうにかなるといふのが獨逸の遣り方である。指を啣へて之を傍觀して居つた英佛側の餘りに緩漫であつた事は言ふを俟たない。併し乍ら功を急ぐものは常に若干の無理をする。一つの無理は二つ以上の無理によつて支へらるゝを常とするが如く、獨逸は段々露西亞の內部に喰ひ入るに從つて無理に無理を重ねた。而して結局得る所のものは民心の離反である。獨逸大使の暗殺、ウクライナ駐在將軍の暗殺の如きは、其最も明かなる表徵である。斯くして砂の上に築かれたる高閣の崩れんとするに方つて、緩漫ながら隱忍勉めて已まざりし聯合國側の努力は、今や著々其功を顯はさんとして居る。露國に於ける聯合國と獨逸との勢力の最近の消長は、我國の識者に向つて何等か一種の警告を與ふるものなるかの感がある。朝鮮臺灣の事は今姑く云はない。西伯利の問題について、又滿洲の問題について、我々は獨逸の謬りを繰返してはならない。

時事慨言四則

法學博士　吉野作造

●**政治の實質に着眼せよ**　前淸時代の末年に新らしい役所の創設を命ぜられた役人の最も苦心する所は、與へられた仕事を一番安い金で一番立派さうに見えるやうに經營し、少しでも私腹を肥さうと云ふ事であつた。其結果役所の建物は表からは宏壯を極めたもので、裏の方はお粗末千萬なものであつた。屋根の上の裝飾的時計なぞは殆ど例外なく板にペンキで書いたものであつた。つまり寫眞を撮つて上長官の眼を喜ばし得れば良いと云ふ丈けのものである。支那の長官は容易に下々の役所を檢分に來ないと云ふ都合のいゝ慣例は此弊風を當り前として了つた。其の利益と發達を計る事によつて民衆の信賴を博すると云ふよりも、少數權力者のお氣に召す事に依つて、其地位を保つことが出來ると云ふ政治狀態の下に於ては、政治の形式に流れて國家社會の幸福と發達と云ふ實質に觸れないで行くのは怪むに足らない。

斯う考へて見ると日本今日の政治は餘り前淸時代の支那と同

去る事違いものではない。今更何故かと聞く丈け已に野暮の至りである。

現政府が從來の内閣に比しいろ〳〵の方面に活動して居る事は疑を容れない。殊に各種の調査に鋭意して事功を擧げんことに熱中して居る樣は如何にも内閣組織當時の一枚看板たりし所謂善政主義に適應するものあるかの如く見える。併しながら彼等が調査員に民生の幸福と國家の發達との爲めに本當の仕事をなす積りであるか否かは大いに疑がある。折角調査會を設けても委員を仰せ附かる者は勅任級の階級の者に限るなどゝ云ふ規則に拘泥して居つては適材を適所に用ひて最高の能率を擧げしなることは出來ないではないか。總て自信なきものは責任を在り來りの規則に嫁して圓滿に進みさへすればいゝと云ふ事になる。間違つたら自分獨りで責任を負ふと云ふ決心がなければ破天荒の仕事は出來ない。此因循姑息を打破せずしては日本の政治もまだ〳〵社會國家の實質問題に觸るゝ事は出來ないであらう。

米騷動なども斯う云ふ形式的政治の産んだ畸形兒に外ならない。

◉**國家の大局に醒めよ** 先頃ある新聞に表はれた西伯利通信に、同地に於けるチェック・スロヴアック軍全部の總指揮官はデッドリックス少將で、其上に世界全體に於ける同族を支配する人にマサリック博士とベニソン教授とがある、と云ふ記事があつた。事の眞僞の詮索は予の問題とする所ではない。どんな人か知らんが、大兵を擁する陸軍の將官が甘んじて一學究の指揮に服すると云ふ所に彼等が同胞民族の大局に目醒めて居る點に感嘆せざるを得ないのである、日本には文官たる内閣の閣僚が軍事に容喙したと云つて駄々を捏ねた大將がある。陛下の諮詢に奉答するを任務とする一最高機關が、出征兵數に干涉したとて陸軍の體面を名として國家多難の際に辭職を叫んだ大將がある。口癖のやうに國家〳〵を叫ぶ陸海軍の閣下諸公ほど自分の狹き領域を人に犯されざらん事のみに傷心して國家の大局を誤るものはない。

腹の据り所が悪いと右足が出る爲めに左足の引込むのを餘計なお世話だと憤慨する。擧國一致とは誰も彼も自分の思ふ通りに行れと云ふ事ではない。大局に目醒めて共同一致するに虚心坦懷の雅量を示す事が出來なければ堂々たる日本帝國の大臣大將も支那の將軍諸君以上に評價さるゝの資格がない。

◎**偏狹なる危險思想** 自分の狹い領域を固守して他と事を共にするを知らざる陋習は外國關係の事件に殊に多い。何か外國で日本若くは日本人に不利益なる事件が起ると、裏面に某國の運

動ありと云ふやうな記事は毎度新聞に表はれるではないか。此點に於て西伯利に於ける米國最近の活動は、支那に於ける英國多年の經營と共に、殊に日本を傷けんが爲めになされて居る仕事なるかの如くに說かれて居る。去る七月央ばの上海に於ける騷動の如きも、其根本に於て必ずしも日本人が無害（インノーセント）であるとは思はないのに、時の新聞紙は殆ど異口同音に日本の裏を搔き、對日反感を挑發する某國の陰謀を說かないものはなかつた。門を出れば七人の敵ありと云ふ封建思想からやつと免れた我々は、事外國に關する問題になると矢張り人を見れば泥棒と思へと云ふ陋習から脫して居ない。國際意識の盛になり、殊に國際意識涵養の必要が高調せられて居る今日に於て、斯くの如き陋習を默過する事、否識者階級が知つて若しは知らずして此風潮を流行せしむるのは之れ日本の將來にとつて最も怖るべき危險なる思想ではないか。

●政黨の發達を阻礙する現選擧法　我國の選擧法が大選擧區單記と云ふとんでもない不都合な制度を執つて居る事はいろ〳〵の機會に於て余輩の屢々述べた所である。最近新聞の傳ふる所に據れば、埼玉縣に於て補缺選擧の近く行はるゝに當り、政友會出身の現代議士五人は、揃へも揃つて今度の補缺選に有力なる自黨候補者の出でんことを心中欲しないと云ふ事である。何故かと聞けば、其爲め將來彼等銘々の地盤が此新候補者によつて切り取らるゝ怖があるからである。して見れば現選擧法は、或政黨をして自黨の膨脹を欲せしめないやうに出來て居る制度である。補缺選擧で今度當選した人が此次の選擧に又出ると云ふ事になると、彼は勢ひ政友と同志擊ちをしなければならない。斯の如き例は毎度の選擧に各政黨の皆苦き經驗を甞めた事である。要するに現行選擧法は政黨の發達を阻礙し、政黨の勢力膨脹を抑ふるを主眼とし、而して其手段として同志擊其他忌むべき政界の不德を增長するを顧みざる非倫理的制度である。之れ程明白なる惡制に對して識者は何故に斯くまで、寛大なる態度を執つて居るのであらうか。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新早稲田叢書(第參)

法學博士 浮田和民 譯並評 上卷發行

（脊皮上製函入七百餘頁 正價貳圓五拾錢郵稅拾貳錢）

軍國主義政治學

獨逸 トライチケ 原著

本書は獨逸の根本的政經なり。獨逸の剛强も疾患も悉く本書に淵源せり。獨逸の眞相を解釋せんとして近時出版せられたる幾多の圖書は概ね本書の糟粕のみ。獨逸の眞相を知らんとせば溯つて本書に求めざるべからず。著者はビスマルクを輔けて獨逸の統一に勠力獻替せる經世學者なれば空理空論を事とする學究的政學者と遙に選を異にす。其理想は文化的國家を形成するに在りて不拔の根柢と不朽の眞理とを有するを以て吾人は深く之を尊重し且つ之を學ばざるべからず。然るに其手段として力說せる軍國主義は一方に於て獨逸の剛强を致せるに拘らず遂に獨逸人を誤り大亂を挑發して世界に殃し自ら害ふに至りし者なれば吾人は其手段と爲せる軍國主義を排斥し其覆轍を履まざらん事を期せざるべからず。故に本書には吾人の學ぶべきもの鑑戒と爲すべきもの隨處に溢ると謂ふも不可なき也。譯者は特に本書に趣味を有し洗錬の譯筆を振ふもの多年、欄外に周匝の批評を下し議論の當否を斷じて復た餘蘊なし。本書は實に世界的名著なり一時の際物的出版物と同視すべからず。

新早稲田叢書第一、二編

米國大統領ウィルソン著

法學博士 高田早苗譯

訂正增補 政治汎論

脊皮製全二冊千五百餘頁

正價各金貳圓參拾錢

郵稅各金拾貳錢

（中付二の二）

發行所 東京牛込早稲田 振替東京一一二三 早稲田大學出版部

（賣捌）神田東京堂 日本橋至誠堂 京橋北隆館 京橋東海堂 大阪盛文館 名古屋星野（其他）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

中央大學廣告

神田錦町校舍建築落成に付來る九月一日を以て神田橋内假校舍を引拂ひ新校舍に移轉し例年の通り同十一日より新學年の授業を開始す

▼學生募集▲

○法科（英法科・獨法科）○經濟科○商科

○各科專門部○大學豫科（英語・獨逸語）

右學生を募集す受驗者は試驗前日迄に無試驗入學者は始業前日迄に申出らるべし○九月三日及同九日入學并編入試驗を擧行す

貸費生募集 例年の通り法科、經濟科及商科の貸費生を募集す希望者は八月卅一日迄に願書を差出さるべし詳細は貸費規則にあり

○改正學則及貸費規則は貳錢郵券添附申込あり次第送付す

東京市神田橋内元衞町

中央大學

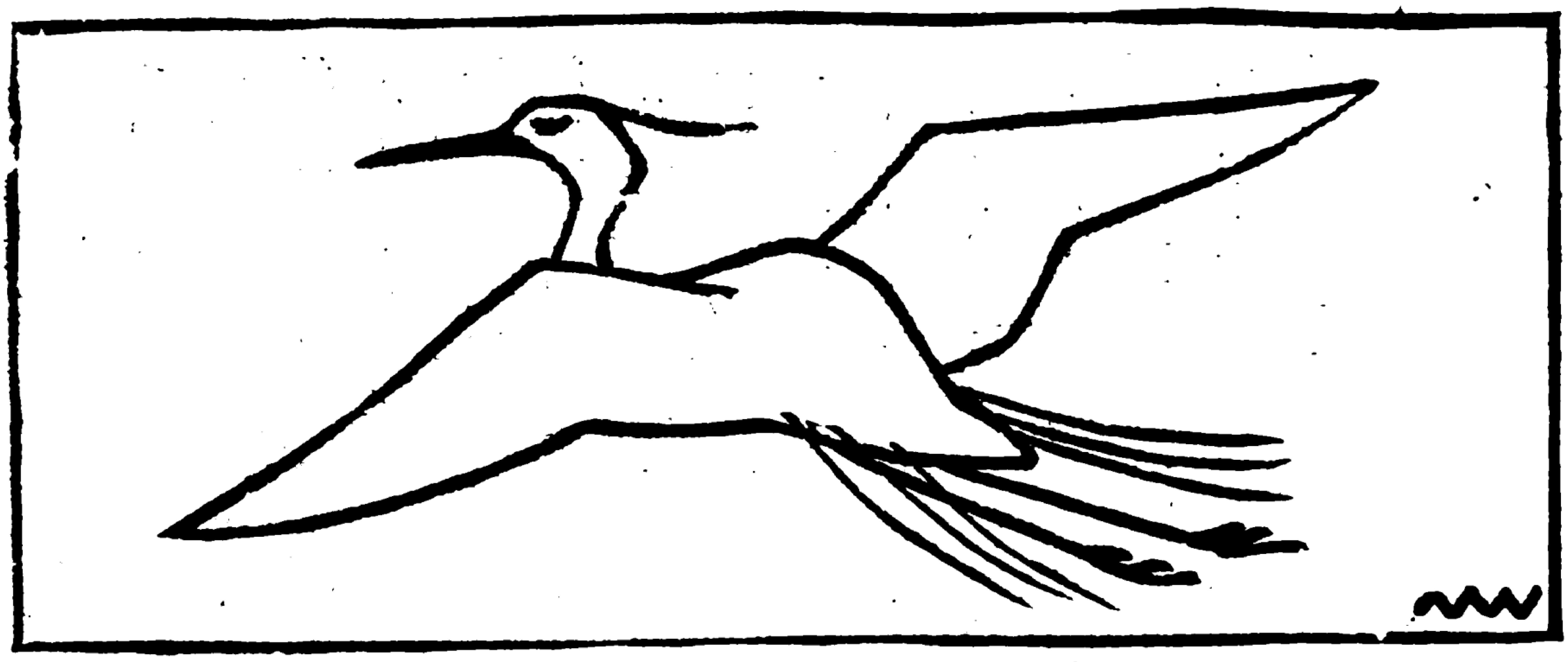
中央高等豫備校 生徒募集

本校は高等學校、高等商業學校、高等工業學校、專門學校入學受驗者の爲めに準備教育を施すを目的とす○中學校卒業者及同資格者は無試驗にて入學を許す○新學期は九月十一日より授業を開始す入學志望者はなるべく始業前日迄に申出らるべし○學則は貳錢郵券添附申込あり次第送付す

中央大學内

中央高等豫備校

中央公論秋期附録小説



忠直卿行狀記

菊池寛

一

家康の本陣へ呼び付けられた忠直卿の家老達は、家康から一溜りもなく叱り飛ばされて散々の首尾であつた。

「今日井伊藤堂の勢が苦戰したを、越前の家中の者は晝寢でもして、知らず過したか、兩陣の後を詰めて城に迫らば大阪の落城は目前であつたに、大將は若年なり、汝等は日本一の臆病人ゆゑ、あたら戰を仕損じてしまふたわ」と苦り切つて罵つたまゝ、家康はつと坐を立つてしまつた。

國老の本多富正は、今日の合戰の手に合はなかつた事に就ては、多少の云ひ譯は持ち合はして行つたのだが、から家康から高飛車に出られては口を出す機會さへなかつた。で、仕方がないと云ふよりも、ほう／＼の體で本陣を退つて、越前勢の陣所へ歸つて來たもの丶、主君の忠直卿に何う切り出してよいか、悉く當惑した。

越前少將忠直卿は、廿一になつたばかりの大將であつた。父君の秀康卿が慶長十二年閏四月に薨ぜられた時、僅十三才で、六十七萬石の大封を繼がれて以來、今迄此世の中に、自分の意志よりも、もつと強力な意志が存在して居る事を全く知らない大將

であつた。

生れたまゝの自分の意志――と云ふよりも我意を、高山の頂に生ひたつた杉の樹のやうに矗々と沖らして居る大將であつた。今度の出陣の布令が越前家に達した時も、家老達は腫れ物に觸るやうに恐る〳〵御前にまかり出でゝ、「御所樣から、大阪表へ御出陣あるやう御懇篤な御依賴の書狀が着到致しました」と、言上した。家老達は、今迄にその幼主の意志を絕對のものにする癖が付いて居た。

夫が、今日は家康の叱責を是非とも忠直卿の耳に入れねばならない、生れて以來人から叱られるなど云ふ感情を、夢にも經驗した事のない主君に對して、大御所の烈しい叱責がどんな效果を及すかを、彼等は悄々として考へねばならなかつた。

彼等が歸つて來たと聞くと、忠直卿は直ぐ彼等を呼び出した。

「お祖父樣は何と仰せられた。定めし、所勞のお言葉をでも賜はつたであらう」と、忠直卿は機嫌よく微笑をさへ含んで訊いた。そう訊かれると、家老達は今更の如く狼狽した。が、漸く覺悟の臍を決めたと見えて、その中の一人は恐る〳〵、「いかいお思召違ひに御座ります。大御所樣には、今日越前勢が合戰の手に合はさつたを、お怒に御座ります」と、云つたまゝ、色を易へて平伏した。

人から非難され叱責されると云ふ感情を、少しも經驗した事のない忠直卿は、その感情に對して何等の抵抗力も、節制力も持つて居なかつた。

「えい！ 何と云ふ仰せだ。此忠直が御先を所望してあつたを、お許るされもせいで、左樣な無體を仰せらるゝ。所詮は、忠直に死ね！ と云ふお祖父樣の謎ぢや。其方達も死ね！ 我も死ぬ！ 明日の戰には、主從擧つて鋒鋩に血を注ぎ、城下に尸を晒すばかりぢや。軍兵にも、そう傳へて覺悟致させよ」と、叫んだ忠直卿は膝に置いて居た兩手をぶる〳〵と顫はせたかと思ふと、何うにも堪らないやうに小姓の持つて居た、長光の佩刀を拔き放つて、家老達の面前へ突き付けながら、

「見い！　此長光で秀賴公のお首をいたゞいて、お祖父樣の顙に突き付けて見せるぞ」と、云ふかと思ふと、その大刀を二三度、坐りながら打ち振つた。まだ廿を出たばかりの忠直卿は時々かうした狂的に近い發作に囚はれるのであつた。

家老達も、御父君秀康卿以來の癎癖を知つて居る爲に、たゞ疾風の過ぎるのを待つやうに耳を塞いで、俯伏して居るばかりであつた。

元和元年五月七日の朝は、數日來の陰天名殘なく晴れて、天色殊の外和淸であつた。

大阪の落城は、もう時間の問題であつた。後藤又兵衞、木村長門、薄田隼人正等の名ある大將は、六日の戰に多くは覺悟の討死を遂げてしまつて、たゞ眞田左衞門や長曾我部盛親や、毛利豐前守などが、最後の一戰を待つて居るばかりであつた。

將軍秀忠は、此日寅の刻に出馬、松平筑前守利常、加藤左馬助嘉明、黑田甲斐守長政を第一の先手として、旗を岡山の方へと進めた。

家康は卯の刻、輿にて進發した。藤堂高虎が來合はせて、「今日は御具足を召さるべきに」と、云ふと家康は例の狡そうな微笑を洩しながら、「大阪の小忰を討つに、具足は不用ぢやわ」と云つて、白給に茶色の羽織を着、下結りの袴を穿いて、手には拂子を持つて絕えず群がつて來る飛蠅を拂つた。內藤掃部頭正成、植村出羽守家政、板倉內膳正重正等近臣三十人ばかり輿に從つて進んだ。

本多佐渡守正純は、家康と寸も違はぬ服裝で、山輿に乘つて家康の後に、直ぐ引き添ふた。

見ると、岡山口から天王寺口にかけて、十五萬に餘る惣軍は、旗差物を初夏の風に飜し、兜の前立物を日に輝し、隊伍を整へ陣を堅めて、攻擊の令の下るのを今や遲しと待つて居た。

が、攻擊の令は容易に下らないのみか、御所の使番が三騎、白馬を飛ばして、諸陣の間を馳け廻りながら、「義直賴宣の兩卿を、とりかはせ給ふに依り、先手軍を始める事暫く延引し、馬をば一二町も退け、人々馬より下

鑓を手にし重ねての命を待つべし」と、布令渡つた。

家康も、今日を最後の手合せと見て、愛子の義直頼宣の二卿に兜首の一つでも、取らせてやりたいと云ふ心があつたのだらう。が、此布令を聞いた氣早の水野勝成は、使番を尻目にかけながら、

「はや巳の刻に及び候、茶臼山の敵陣次第にかさみ見えて候、速に戰を取結びて然るべしと大御所に傳へよ」と怒鳴つた。が、此二人の使番が引取つたかと思ふと、再び四騎の使番が惣軍の間を縦横に飛び違つて、

「方々、合戰をとりかくべからず、閑に重ねての令を待つべし」と、ふれ渡つた。

併し、昨夜の昂奮を持ち續けて、殆ど不眠の有樣で、今日の手合せを待つて居たわが越前少將忠直卿は、かゝる布令を聞かればこそ、家老吉田修理に眞先かけさせ、國老の兩本多を初、三萬に近き大軍を、十六段に分け、加賀勢の備へたる眞中を馳け拔け、加賀勢の怒り止むるに答へず、無二無三に天王寺の方、茶臼山の前迄おし詰め、此地の先手本多出雲守忠朝の備より少し左に、鶴翼に陣を張つた。

此時初て、將軍から、

「城兵は寄手を引き寄せて、夜を待つ樣に見え候、早く戰ひを合すべし」と、云ふ軍令が諸陣の間にふれ渡された。が、忠直卿はそうした軍令の出づるのを待つて居なかつた。本多忠朝の先手が二三發敵にさぐりの鐵砲を放つと等しく越前勢忽ち七八百挺の鐵砲を一度に打ち掛け、立ち籠めた烟の中を潜つて、十六段の軍勢林の動くが如く一同に茶臼山に打つてかゝつた。

青屋口から茶臼山にかけての軍勢は、眞田左衛門尉幸村父子、少し南に伊木七郎右衛門遠雄、渡邊内藏助糺、大谷大學吉胤等が堅めて、惣勢六千を僅かに出て居るに過ぎなかつた。

殊に越前勢は目に餘る大軍なり、大將忠直卿は今日を必死の覺悟と見えて、馬上に軍配を捨てゝ大身の鎗を拔きながら、家臣の止むるを聞かず、先へ〳〵と馬を進められた。

大將が、此有樣であるから、軍兵悉く奮ひ立つて火水になれと戰つたから、越前勢の向ふ所、敵勢草木の如く靡き伏

して、本多伊豫守忠昌が、城中にて擊劍の名を得たる念流左太夫を討つて取つたを初とし、青木新兵衞、乙部九郎兵衞、荻田主馬、豐島主膳等功名する者數多にて、茶臼山より庚申堂に備へたる眞田勢を一氣に斬り崩し、左衞門幸村をば、西尾仁左衞門討つて取り、御宿越前をば野本右近討取り、逃ぐる城兵の後を慕ふて、仙波口より黑門へ押入り旗を立て、城內所々に火を放つた。

敵の首を取る三千六百五十二級、此日の功名忠直卿の右に出づるはなかつた。

忠直卿は茶臼山に駒を立てゝ居たが、越前勢の旗差物が潮のやうに濠を塞ぎ、曲輪に溢れ、寄手の軍勢から一際鋭角を作つて大阪城の中へ楔の如く喰ひ入つて行くのを見ると、多愛もない兒童(こども)のやうに鞍壺に躍り上つて欣んだ。

先手の者が馳せ歸つて、

「青木新兵衞大阪城の一番乘仕つて候」と、注進に及ぶと、忠直卿は相好を崩されながら、

「新兵衞の武功第一ぢや——五千石の加增ぢやと早々傳へよ」と、勇み立たうとする乘馬を、乘り靜めながら狂氣の如くに叫んだ。

武將として何と云ふ光榮であらう。寄せ手をあれ程に馳け惱ました左衞門尉の首を揚ぐるさへあるに、諸家の軍勢に先だつて一番乘りの大功を我軍中に收むるとは、何と云ふ光榮であらう。

忠直卿は家臣等の奇蹟のやうな働きを思ふと、夫が凡て自分の力、自分の意志の反映であるやうに思はれた。昨日祖父の家康に依つて彼の自尊心に蒙らされた傷が、拭ひ去られた如く消失したばかりでなく、忠直卿の自尊心は前よりも數倍の烈しさを加へた。

大阪城の寄手に加つて居る百に近い大名の中、功名自分に及ぶ者は一人もないと思ふと、忠直卿は自分の身體が輝くかと思ふばかりに、豐滿な心持になつて居た。が、夫も決して無理ではない、驍勇無双の秀康卿の子と生れ、德川の家には嫡々の自分であると、今日の武勳の如きは當然過ぎる程、當然のやうに思はれて、忠直卿は得々たる感情が心の裡に淘湧するのを制し兼ねた。

「お祖父様は此忠直を見損ふて、おはしたのぢや。御本陣に見參して何と仰せられるか聽かう」と、思ひ付くと、忠直卿は岡山口に本陣を進めて居た家康の膝下に急いだのである。

家康は牀几に倚つて、諸大名の祝儀を受けて居たが、忠直卿が着到すると、わざ〳〵牀几を離れ、手を取つて引き寄せながら、

「天晴仕出かした、今日一番功ありてこそ誠にわが孫ぢや、御身の武勇唐の樊噲にも右わ勝りに見ゆるぞ、まことに日本樊噲とは御身の事ぢや」と向ふ様に賞め立てた。

一本氣な忠直卿は、かう賞められると、涙が出るほど嬉しかつた。彼は同じ人から、昨日叱責された恨みなどは、もう微塵も殘つて居なかつた。

彼はその夜、自分の陣所へ歸つて來ると、家臣を蒐めて大酒宴を催した。自分が何者よりも強く、誰人よりも勝つて、祖父家康の賞め言葉の「日本樊噲」と云ふ言葉が、まだ物足りぬやうにさへ思はれ出した。

彼は大阪城が全く暮れてしまつた空に、まだ所々眞紅に燃え盛つて居るのを見ながら、夫を今日の自分の大功の表章として、享樂しながら、頻に大杯を重ねるのであつた。

得意な上づつた感情の外には、忠直卿の心には何物も殘つて居なかつた。

超えて翌月の五日に城攻めに加つた諸侯が、京の二條城に群參した時に家康は忠直卿の手を取りながら、

「御身が父秀康世にありしほどはよく、我に忠孝を盡して吳れたるわ、汝は又此度諸軍に秀れし軍忠を現したること、滿足の至りじや、之に依つて感狀を授けんと思へど、家門の中なれば夫にも及ぶまひ、わが本統のあらん限り越前の家また磐石の如く安泰ぢや」と云ひながら、秘藏の初花の茶入を忠直卿に與へた。忠直卿は此上なき面目を施して、諸大名の列座の中に自分の身の燦として光を放つ如く覺えた。彼は天下に缺ぐる物もないやうな足り充ちた感情が、胸の裡にふツ〳〵と溢れて來るのを覺えた。元より彼の意志が何等の制限を蒙らず、彼の感情が常に豐滿して居る事は、決して今に始まつた事ではなかつた。幼年時代からも彼の意志と感情とは、外部からは何等の抑制も被らず、思ふ儘に伸び思ふ儘に

溢れて居たのであつた。彼は今迄如何なる事に與はつても人に劣り、人に負けたと云ふ記憶を持つて居なかつた。幼年時代に破魔弓の的を競へば勝利者は必ず彼であつた。福井の城下へも京の公卿が蹴鞠の戯れを傳へて、夫が城中にも屢々行はれた時、最も巧みに蹴る者は彼であつた。圍棋將棋雙六と云ふもてあそびものに於ても、彼は大抵の場合勝者であつた。

元より弓馬鎗劍と云つたやうな、武士に必須な技術に於いては彼の伎倆は忽ちに上達して、最初同格であつた近習達をグン〳〵追ひ越して、家中に於いて其道に名譽の若武士達にも忽ちに打ち勝つ程の上達を示すのを常とした。かうして、周圍の者に對する彼の優越感情は年と共に培はれて來た。そして、自分は家臣共からは、全く質の違つた優良な人格者であると云ふ確信を、心の奥深く養つてしまつたのである。

が、忠直卿の心には、家中の人間の誰よりも立ち勝つて居ると云ふ確信はあるものゝ、今度大阪に出陣して以來は、功名を競ふ相手は、自分と同格な諸大名であるので、若しや自分が彼等の何人かに劣つては居はしまいか、殊に武將としては最も本質的な職務たる戰爭に於て、思はざる不覺を取りはしまいかと、少しの憂慮を懷かぬ譯には行かなかつた。果して五月六日の手合せには、遂に出陣の時刻を遲らせた爲に、思はぬ不覺を取つて、今迄懷いて居つた強い自信を危く搖がせやうとしたのであつたが、同じ七日の城攻めの功名に依つて傷ついた自信は名殘りなく償はれたばかりでなく、一番乘りの功を收めて、越前勢の武名惣軍を壓するに至つたのであるから、自分の家臣の誰人よりも秀れて居ると云ふ忠直卿の自信が、今ではもつと擴大して、自分は城攻めに備はつた六十諸侯の何人よりも秀れて居ると云ふ自信に移りかけて居た。大阪陣を通じて三千七百五十級の首級を擧げ、然も城將左衞門尉幸村の首級を擧げたものは忠直卿の軍勢に相違なかつた。

忠直卿は初花の茶入と、日本樊噲と云ふ美稱とを、自分が何人よりも秀れたる人間であると云ふ、證券として心の裡に銘じた。

晴々とした心持であつた。そこに並んで居る大名小名百二十名は、悉く忠直卿に讃美の眸を向けて居る樣に思はれた。

彼は、今迄自分の臣下の何人よりも、自分が優秀な人間であることを誇りとして居た。が、比べて居る相手は悉く自分の臣下であることが物足らなかつた。然るに、今は天下の諸侯の何人よりも眞先に、大御所から手を取つての欵待を受けて居る。

自分には伯父に當る義直卿も賴宣卿も、何の功名をも擧げて居ない。まして同じく伯父に當る、越後侍從忠輝卿は七日の合戰の手に合はず散々の不首尾である。伊達、前田、黑田と云ふ聞えた大藩の勳功も越前家の功名の前には、月の前の螢火よりもまだ弱い。

かう考へると、忠直卿は昨日一旦傷けられやうとした自分の他人に對する優越感が、見事に恢復されたばかりでなく、一旦傷けられた丈にその反動として、恢復された夫は以前のものよりももつと輝やかしい力強いものであつた。

かうして越前少將忠直卿は、天下第一人と云つたやうな誇を持しながら、その年八月都を辭して、揚々とした心持で、居城越前の福井へと下つた。

二

越前北の庄の城の大廣間に、今銀燭は眩ゆいばかりに數限りもなく燃え旺つて居る。その白蠟が解けて流れて、蠟受けの上にうづ高く溜つて居るのを見れば、餘程酒宴の刻が移つて居るのであらう。

忠直卿は國に就かれて以來、晝間は家中の若武士を蒐めて弓馬鎗劍と云つたやうな武術の大仕合を催し、夜は彼等をその儘に引き止めて、一大無禮講の酒宴を開くのを常とした。

忠直卿は、祖父の家康から日本樊噲と媚びられた名が、心を溶かすやうに嬉しくて堪らなかつた。彼は家中の若武士と鎗を合はし、劍を交じへ、彼等を散々に打ち負すことに依つて、自分の誇を養ふ日々の糧として居たのであつた。

今も、忠直卿を上座として一段下つた廣間に大きい圓形を描いて居る若武士は、數多い家中の若者の中から選ばれた

武藝の達者であつた。まだ前髮のある少年も打ち交じつて居たが、孰も筋骨逞ましく溌溂たる眸を持つて居る。が、城主の忠直卿の風貌は、彼等よりも一段秀れて颯爽たるものであつた。稍肉落ちて瀟洒たる姿ではあるが、その炯々たる眸は殆ど怪しき迄に鋭い力を放つて、精悍の氣眉宇の間に溢れて見えた。

忠直卿は、今微醉の廻りかけて居る眼を開いて、一座をズーッと見廻はされた。其處に居並んで居る百に餘る青年は、皆自分の意志に依つては水火をも辭さない人々であることを思ふと、彼は心の内からこみ上げて來る權力者に特有な誇を感ぜずには居なかつた。が、彼の今宵の誇は夫丈には止まつて居なかつた。彼は武士としての實力に於ても、玆に蒐つて居る凡ての青年に打ち勝つたと云ふことが、彼の誇を二重のものにしてしまつた。

彼は今日も亦、家臣を集めて鎗術の大仕合を催した。夫は家中から鎗術に秀れた青年を蒐めて、夫を二組に別けた紅白の大仕合であつた。

そして彼自ら紅軍の大將として出場したのである。仕合の形勢は始終紅軍の方が不利であつた。出る者も、出る者も、敵の爲にバタ／＼と倒されて、紅軍の副將が倒れた時には、白軍には尙五人の不戰者があつた。

其時に紅軍の大將たる忠直卿は自ら三間柄の大身の鎗をリユウ／＼と扱ひて勇氣凛然と出場した。洵に山の動くが如き勢であつた。白軍の戰士は見る／＼裡に威壓された。最初に出た小姓頭の男は、兼々忠直卿の猛勇を怖れて居る丈に、鎗を合はすか合はさぬかに、早くも持つて居た槍を捲き落されて、脾腹の邊を突かれると、悶絶せんばかりに平たばつてしまつた。續く馬廻りの男と、お納戸役の男も一溜もなく突き伏せられてしまつた。が、白軍の副將の大島左太夫と云ふ男は、指南番大島左膳の嫡子であつて、鎗を取つては家中無双の名譽を持つて居た。「殿のお勢も、左太夫にはちと難しからう」と云ふ呟きか何處ともなく起つた。が、烈しく七八合槍を合はせたかと見ると、左太夫はしたゝかに、腰の邊を一突き突かれて、よろめく所をつけ入つた忠直卿の爲に、再び眞正面から胸の急所を突かれて居た。見物席に居た家中一統は、思ふ存分に喝采した。忠直卿は、稍息のはづまれるのを制しながら靜か

に、相手の大將の出るを待つた。心の裡は何時ものやうに、得意の絶頂であつた。

白軍の大將は小野田右近と云つた。十二の年から、京に於ける槍術の名人權藤左門の門に入つて二十の年には、師の左門にさへ突き勝つ程の修練を得て居た。が忠直卿は何物をも怖れない。「えい！」と鋭く聲を掛けられると、猛然として突き掛つた。たゞ技術の力と云ふよりも、そこには六十七萬石の國主の勢さへ加はる如く見えた。二十合にも近い烈しい戰が續いたかと思ふと、右近は右の肩先に忠直卿の烈しい一突きを受けて、一間ばかり退くと、

「參りました」と、平伏してしまつた。

見物席の人々は、北の庄の城の崩づるゝばかりに喝采した。忠直卿は得意の絶頂にあつた。上席に歸ると、彼は聲を揚げて、

「皆の者大儀ぢや、いで之から慰勞の酒宴を開くと致さうぞ」と、叫んだのであつた。

彼は近頃にない上機嫌であつた。酒宴の進むに連れ、寵臣は代る〴〵彼の前に進んだ。

「殿！大阪陣で矢石の間を往來せられまして以來は、また一段と御上達遊ばされましたな。我等如きはもはや殿のお相手は仕り兼ます」と申し上げた。大阪陣の話をさへすれば、忠直卿は多愛もなく機嫌がよかつた。

が、忠直卿もいたく醉つてしまつた。一座を見ると、正體もなく醉ひ潰れて居る者が、大分多くなつて居る。管を捲く者もある、小聲で隆達節を唄つて居る者もある。酒宴の興は殆ど、盡きかけて居る。

忠直卿はふと奥殿に殘つて居る異性の事を思ひ出すと、男ばかりの酒宴が殺風景に思はれて來た。彼はつと立つて、

「皆の者許せ！」と云ひ捨てたまゝ坐を立つた。追に醉ひ潰れて居た者も居住ひを正して平伏した。今迄眠りかけて居た小姓達は、ハツと目を覺して主君の後を追つた。

忠直卿が、奥殿へ續く長廊下へ出ると、冷い初秋の風が頬に快かつた。見ると、外は十日ばかりの薄月夜で、萩の花がほの白く咲きこぼれて居る邊から、蟲の聲さへ聞えて來る。

忠直卿は、庭へ下りて見たくなつた。奥殿からの迎ひの侍女達を歸して、小姓を一人連れたまゝ、庭に下り立つた。

庭の面には、夜露がしつとりと降りて居る。微かな月光が城下の街を、玲瓏と澄み渡る夜の大氣の裡に、墨繪の如く浮ばせて居る。

忠直卿は久し振に、かうした靜寂の境に身を置くことを欣んだ。天地は寂然として靜である。たゞ彼が見捨てゝ來た城中の大廣間からは、雜然なる饗宴の叫びが洩れて來る。夫も彼が坐を立つてからは、一段と酒席が擾れたと見え、吾妻拳を打つ掛聲迄が交じつて聞える。が、夫も餘程の間隔があるので、さう五月蠅くは耳に響いて來ない。

忠直卿は萩の中の小徑を傳ひ、泉水の緣を廻つて小高い丘に在る四阿へと、は入つた。其處からは、信越の山々が、微かな月の光を含んで居る空氣の中に、朧ろに浮いて見える。忠直卿は、今迄の大名生活に於いて、未だ經驗した事のないやうな、感傷的な心持に囚はれて、思はず其處に小半刻を過した。

すると、ふと人聲が聞える。今迄寂然として、蟲の聲のみが淋しかつた庭に、人聲が聞え出した。聲の樣子で見ると、二人の人間が話しながら、四阿の方へ近よつて來るらしい。

忠直卿は、今自分が享受して居る靜寂な心持が、不意の侵入者に依つて掻き擾されるのが、嫌であつた。が、小姓をして、近寄つて來る人間を追はしむる程、今宵の彼の心は荒んでは居なかつた。二人は話しながら、段々近づいて來る。四阿の裡へは、月の光が射さぬので、其處に彼等の主君が居やうとは、夢にも氣付いては居ないらしい。

忠直卿は、その二人が誰であるか、見極めやうとも思つては居なかつた。が、二人の聲が段々近づいて來ると、夫が誰と誰とであるかゞ自然と判つて來た。稍潰れたやうな聲の方は、今日の大仕合に白軍の大將を勤めた小野田右近である。疳高い上づつた聲の方は、今日忠直卿に一氣に突き伏せられた白軍の副將大島左太夫である。二人は先刻から、何でも今日の紅白仕合に就いて話して居るらしい。

忠直卿は、大名として生れて初、立聞きをすると云ふ不思議な興味を覺えて、思はず注意を、その方へ集注させた。二人は、四阿からは三間とは離れない泉水の汀で、立ち止まつて居るらしい。左太夫は、心持聲を潜めたらしく、

「時に殿の御腕前を何う思ふ？」と、訊いた。

右近が、苦笑をしたらしい氣勢がした。

「殿のお噂か！　聞えたら、切腹物ぢやのう」

「蔭では公方のお噂もする。何うぢや、殿の御腕前は？眞實の御力量は？」と、左太夫は、可なり眞劍に訊いて、ぢつと息を凝して、右近の評價を待つて居るやうであつた。

「さればぢやのう！　いかい御上達ぢや」と、云つたまゝ右近は、言葉を切つた。忠直卿は、初て臣下の僞らざる賞讃を聞いたやうに覺えた。が、右近はもつと言葉を續けた。

「以前ほど、勝をお讓り致すのに、骨が折れなくなつたわ」

二人の若武士は、其處で顏を見合はせて會心の苦笑をしたらしい氣勢がした。

右近の言葉を聞いた忠直卿の心の中に、そこに突如として感情の大渦卷が聲を立てゝ流れ始めたのは無論である。忠直卿は、生れて初、土足で以て頭上から蹂み躙られたやうな心持がした。彼の唇は、ブル〳〵と顫へ、惣身の血潮が煮えくり返つて、グン〳〵頭へ逆上するやうに思つた。

右近の一言に依つて、彼は今迄自分が立つて居た人間として最高の脚台から、引きづり下ろされて地上へ投げ出されたやうな名狀し難い衝動を受けた。

夫は確に激怒に近い感情であつた。が、心の中の有り餘つた力が、外にハミ出したやうな激怒とは、全く違つたものであつた。その激怒は外面は、旺んに燃え狂つて居るものゝ、中核の所には癒しがたい淋しさの空虛が、忽然と作られて居る激怒であつた。彼は世の中が、急に頼りなくなつたやうな、今迄の凡ての生活、自分の持つて居た凡ての誇が、悉く僞の土臺の上に立つて居た事に、氣が付いたやうな淋びしさにひし〳〵と襲はれて居た。

彼は小姓の持つて居る、佩刀を取つて、卽座に兩人を切つて捨てやうかと、息込んだが、そうした烈しい意志を遂行する強い力は、此時の彼の心の裡には少しも殘つては居なかつた。

其上、主君として臣下から僞りの勝利を媚びられて得意になつて居た自分の淺ましいと同時に、今兩人を手込して、その淺ましい事實を自分が知つて居ると云ふ事を、家中の者に知らせるのも、彼に取つては可なりの苦痛であつた。忠直卿は、胸の内に湧き返る感情をぢつと抑へて、如何なる行動に出づるのが一番適當であるかを考へた。餘りに不用意にかうした經驗に出會した爲、たゞさへ昂奮し易い忠直卿の感情は收拾の付かぬほど混亂した。

忠直卿の傍に、先刻から置物のやうにぢつとして、蹲まつて居た聰明な小姓は、遉に此危機を充分に知つて居た。二人の男に、茲に彼等の主君が居ることを教へねば、何んな大事が起るかも知れぬと思つた。彼は、主君の慘ましい顏色を窺ひながら、二三度小さい咳をした。

小姓の小さい咳は、此場合甚だ有效であつた。右近と左太夫とは、附近に人が居るのを知ると、ハツとしてその冒瀆な口を緘んだ。

二人は云ひ合はしたやうに足早く大廣間の方へと去つてしまつた。

忠直卿の眸は、怒に燃えて居た。が、その頰は凄じい迄に蒼ざめて居る。

彼の少年時代からの感情生活は、右近の一言に依つて物の見事に破産してしまつて居た。彼が幼にして、遊戯をすれば近習の誰よりも巧みであつた事や、破魔弓の的を競へば近習の何人よりも多く命中矢を出した事や、習字の稽古の筆を取れば、祐筆の老人が膝頭を叩いて、彼の手蹟を賞讃した事が、皆不快な記憶として彼の頭に一時に蘇つて來た。武術の方面に於いても、そうであつた。劍を取つても、鎗を取つても、忽ち相手をする若武士に打ち勝つ程の腕に瞬く間に上達した。彼は今迄自分を信じて來た。自分の實力を飽く迄信じて來た。今右近等の冒瀆な蔭口を耳にしても、夫が彼等の負け惜しみであるとさへ、ともすれば思ふ程である。

が、今日の右近の言葉は、その言葉が發せられた時と場合とを考へれば、決して冗談でもなければ僞でもなかつた。自信に充ち滿ちて居た忠直卿の耳にも正眞の事實として、聞えぬ譯には行かなかつた。

右近の言葉は、彼の耳朶の裡に彫り付けられたやうに、殘つて居る。

考へて見ると、忠直卿は今日の華々しい勝利の中で、何處迄が本當で何處からが僞だか判らなくなつた。否今日のみではない、生れて以來幾度も試みた遊戯や仕合で、自分が占めた數限りのない勝利や優越の中で、何れ丈が本當の物で何れ丈が僞のものだか、判らなくなつた。さう考へると、彼は心の中を掻きむしられるやうな烈しい焦燥を感じた。彼とても、臣下の凡てから僞の勝利を奪つて居るのではない、否その中の多くの者には正當に勝つて居るのだ。それだのに右近や左太夫などの不埒者の居る爲に、自分の勝利が凡て不純な色彩を帶びるに至つたのだと思ふと、彼は今右近と左太夫とに對し旺然たる憎惡を感じ始めたのである。

が、夫ばかりではなかつた。かうなると、つい三月ばかり前に大阪の戰場に立てた偉勳さへ、何んだか怪しげな正體の判らぬもののやうに、忠直卿の心の中に思はれた。彼が、今迄誇として居た日本樊噲と云ふ稱呼さへ、何だか人を馬鹿にしたやうな誇張を伴ふて居るやうにさへ思ひ出した。家臣どもから、いゝ加減に扱はれて居た自分は、お祖父樣からも手輕に、操られて居たのではないかと思ふと、忠直卿の眸には初、不覺の涙が滲じみ始めた。

三

無禮講の酒宴にグタ〳〵に醉つてしまつた若武士達は、九つのお土圭が鳴るのを合圖に總立になつて退出しやうとすると、急にお傍用人が奧殿から馳け付けて來た。

「各々方、靜まられい！　殿の仰せらるゝには、明日は犬追物のお催しがあるべき筈の所、急に御變改があつて、明日も今日同樣槍術の大仕合ひを催せらるゝ、時刻と番組とは凡て今日に變らぬとの仰せぢや」と、雙手を揚げて大聲に布令廻つた。

若武士の中には「やれ〳〵明日もか」と思ふ者もあつた。今日の勝利を、もう一度繰返すのかと、北叟笑む者もあつた。が、多くの者は、酒を呑んだ後の勇ましい元氣で、

「毎日續かうとも結構ぢや。明日もまたお振舞酒に思ひ切り醉ふ事が出る」と、勇み立つた。

その翌日は、昨日と等しく城中の兵法座敷は美しく掃き淨められて、紅白の幔幕が張り渡され、上座には忠直卿が昨日と同樣に坐を占めたが、始終下唇を嚙むばかりでなく、眸が爛々として燃えて居た。

勝負は、昨日と殆ど同樣な情勢で進展した。が、昨日の勝敗が皆の心にマザ〱と殘つて居るので、組合せの多くは一方に取つて雪辱戰であつたから、掛け聲は昨日にも勝して烈しかつた。

紅軍は、昨日よりも更に旗色が惡かつた。大將の忠直卿が出られた時には、白軍には大將副將を初め六人の不戰者があつた。

見物の家中の者共が、不思議に思ふ程、忠直卿は興奮して居た。タンポの附いた大身の槍を、熱に浮かされた男のやうに妄に打ち振つた。最初の二人は腫れ物にでも觸るやうに恟々として立ち向つた。が、主君の烈しい槍先に忽ちに突き竦められて平伏してしまふ。次の二人も、主君の凄じい氣勢に恐ぢ怖れて、たゞ型ばかりに槍を振つた丈であつた。

五人目に現はれたのは、大島左太夫であつた。彼は今日の忠直卿の常軌を逸したとも思はれる振舞に就いて、微かながら杞憂を懷く一人であつた。無論、彼は自分の主君が、自分達の昨夜の立話を立聞きした當の本人であらうとは、夢にも思つて居なかつたが、昨夜夜更けの庭に耳にした咳拂ひの主が、主君に自分達を譏したのではあるまいかと云ふ微かな懸念は持つて居た。彼は常よりも更に肅然として主君の前に頭を下げた。

「左太夫か!」と、忠直卿はある落着きを示さうと努めたらしいが、その聲は妙に上づつて居た。

「左太夫! 鎗と云ひ劍と云ひ、正眞の腕前は眞鎗眞劍でなければ判らない! タンポの附いた稽古鎗の仕合は、所詮は僞の仕合ぢや、負けても傷が付かぬとなれば、仕宜に依つては、負けても差支へがない譯となる! 忠直は僞の仕合にはもう飽いて居る。大阪表に於て手馴れた眞鎗を以て、立ち向ふ程に其方も眞鎗を以て來い! 主と思ふに及ばぬ、隙があらば遠慮致さずに突け!」

忠直卿の眼は上づつて、言葉の末が顫へた。左太夫は色を更へた。左太夫の後に控へて居る小野田右近も、左太夫と同じく色を易へた。

が、見物席に居る家中の者は、忠直卿の心の裡を解するに苦しんだ。殿御狂氣と怖氣を顫ふものが多かつた。

忠直卿は、之迄は癇癖にこそあつたが、平常至極活達で稍粗暴の嫌こそあつたが、非道無殘な振舞は寸毫もなかつたので、今日の忠直卿の振舞ひを見て家中の者が、色を變じたのも無理ではなかつた。

が、忠直卿が、今日眞鎗を手にしたのは、左太夫右近に對する消し難い憎しみから出たとは云へ、一つには自分の正眞の腕前を知りたいと云ふ希望もあつた。眞鎗で立ち向ふならば、彼等も無下に負けはしまい、秘術を盡くして立ち向ふに違ひない、さすれば自分の眞の力量も判る。若しその爲に、自分が手を負ふ事があつても、僞りの勝利に狂氣して居るよりも、何れ程氣持がよいか知れぬと心の裡で思つた。

「それ！眞鎗の用意致せ！」と、忠直卿が命ずると、兼て用意がしてあつたのだらう、小姓が二人各々一本の大身の鎗を重たさうにもたげて、忠直卿主從の間に持ち出した。

「それ！左太夫用意せい！」と、云ひながら、忠直卿は手馴れた三間柄の長鎗の穗鞘を拂つた。鎗鍛冶の名手備後貞包の鍛えた七寸に近い鋒先から迸る殺氣が、一座の人々の心を冷めたく壓した。

今迄、ぢつとして主君忠直の振舞を看過して居た國老の本多土佐は、主君が鋒先を拂はれるや否や、突如として忠直卿の御前に出でた。

「殿！お氣が狂はせられたか、大切の御身を以て、妄に劍戟を弄ばれ家臣の者を傷けられては、公儀に聞えても容易ならぬ儀で御座る。平にお止り下されい」と、老眼をしばたゝきながら、必死になつて申し上げた。

「爺か！止めだて無用ぢや。今日の眞鎗の仕合は、忠直六十七萬の家國に易へてもと思ひ立つた一儀ぢや。止め立て一切無用ぢや」と、忠直卿は凛然と云ひ放つた。其處には秋霜の如く犯し難き威嚴が伴つた。かうした場合、之迄も忠直卿の意志は絕對のものであつた。土佐は口を緘んだ儘、悄然として引き退いた。

左太夫は、もう先刻から充分に覺悟をして居た。昨夜の立話が殿のお耳に入つた爲の御成敗かと思へば、彼には何とも文句の云ひやうはなかつた。夫は家來として當然受くるべき成敗であつた。夫をかゝる眞鎗仕合に假托けての成敗か

と思へば、彼は其處に忠直卿の好意をさへ感ずるやうに思つた。彼は主君の眞鎗に貫かれて、潔く死にたいと思つた。

「左太夫如何にも眞鎗を以て、お相手を致しまする」と、思ひ切つて云つた。見物席に左太夫の不遜に對する叱責の聲が洩れた。忠直卿は苦笑をした。

「夫でこそ忠直の家臣ぢや。主と思ふな、隙があれば、遠慮致さず突け！」

かう云ひながら、忠直卿は鎗を扱いて二三間後へ退りながら、位を取られた。

左太夫も、眞鎗の鞘を拂ひながら、

「御免！」と、叫びながら主君に立ち向つた。

一座の者は、凄じい殺氣に閉ぢられて、身の氣をよだち、息を詰めてたゞ茫然と、主從の決鬪を見守るばかりであつた。

忠直卿は、自分の本當の力量を、如實にさへ知ることが出來れば、思ひ殘すことはないとさへ思込んで居た。從つて國主と云ふ自覺もなく、對手が臣下であると云ふ考もなく、たゞ勇氣凜然として立向はれた。

が、左太夫は、最初から覺悟を極めて居た。三合ばかり鎗を合すと、彼は忠直卿の鎗を左の高股に受けて、どうと地響打たせて、のけ樣に倒れた。

見物席の人々は一齊に深い溜息を洩した。左太夫の傷ついた身體は同僚の誰彼に依つて、忽ち運び去られた。

が、忠直卿の心には、勝利の快感は少しもなかつた。左太夫の負が、昨日と同じく意識しての負であることが、マザ〳〵と判つたので、忠直卿の心は昨夜にも勝して淋しかつた。左太夫奴は、命を賭して迄、僞りの勝利を主君に喫はせて居るのだと思ふと、忠直卿の心の焦燥と淋しさと賴りなさは、更に底深く植え付けられた。忠直卿は、自分の身を危險に置いても、臣下の身體を犧牲にしても、尙本當の事が知りがたい自分の身を恨んだ。

左太夫が倒れると、右近は少しも怯れた樣子もなく、蒼白な顏に覺悟の眸を輝しながら、左太夫の取り落した鎗を携げて其處に立つた。

忠直卿は、右近奴は、昨夜あのやうに思ひ切つた言葉を吐いた男であるから、必死の手向ひをするに相違ないと、消えかゝろうとする勇氣を鼓して立ち向つた。

が、此男も左太夫と同じく、自分の罪を深く心の裡に感じて居た。そして、潔く主君の長鎗に貫かれて、自分の罪を謝さうとして居た。

忠直卿は、五六合立ち合つて居る裡に、相手の右近が、急所と云ふべき胸の邊へ、幾度も隙きを作るのを見た。此男も、自分の命を捨てゝ迄主君を欺き終ろうとして居るのだと思ふと、忠直卿は不快な淋しさに襲はれて來た。そして、相手にうま〳〵と乘せられて、勝利を得るのが、馬鹿〳〵しくなつて來た。

が、右近は一刻も早く、主君の鎗先に貫かれたいと思つたらしく、忠直卿が突き出す鎗先に故意に身を當てるやうにして、右の肩口を、グサと貫かれてしまつた。

忠直卿は、見事に昨夜の鬱憤を晴した。が、夫は彼の心に、新しい淋びしさを植え付けたに過ぎなかつた。左太夫も右近も、自分の命を堵して迄、彼等の僞を守つてしまつた事である。

忠直卿は、その夜遲く、傷のまゝ自分の屋敷に運ばれた右近と左太夫との二人が、時刻を前後して、負傷のまゝ腹を割いて死んだと云ふ報知を聽いて、暗然たる心持にならずには居られなかつた。

忠直卿は、つく〴〵考へた。自分と彼等との間には、虚僞の膜が、かゝつて居る。その膜を、その僞の膜を彼等は必死になつて支へて居るのだ。その僞は、浮ついた僞でなく、必死の懸命の僞である。忠直卿は、今日眞鎗を以て、その僞の膜を必死になつて、突き破ろうとしたのだが、その破れは彼等の血に依つて忽ち修繕されてしまつた、自分と家來との間には、依然としてその膜がかゝつて居る。その膜の向ふでは、人間が人間らしく本當に交際て居る。が、彼等が一旦自分に向ふとなると、皆その膜を頭から被ぶつて居る。忠直卿は自分一人膜の此方に、取殘されて居ることを思ひ出すと、焦々した淋びしさが、猛然として自分の身心を襲つて來るのを覺えた。

四

眞鎗の仕合があつて以來、殿の御癇癖が募つたと云ふ警報が、一城の人心をして、忠直卿に對して惴々たらしめた。殿の御前だと云ふと小姓達は、眸を据え息を凝して微動さへ、おろそかにはしなかつた。近習の者も一足進み一足退くにも、儀禮を正しうして徴瑕だに犯さぬ事を念とした。君臣の間に多少は存在して居た心易さが跡を滅して、君前には肅殺たる氣が漂ふた。家臣達は君前から退くと今迄にない心身の疲勞を覺えた。

が、君臣の間がかうして荒み始めやうとするのに氣が付いたのは、決して家來の方ばかりではなかつた。忠直卿は、ある日近習の一人が、自分に家老達からの書狀を捧げるとて、四五段の彼方からいざり寄ろうとざるのを見て、「ずつと遠慮致さず前へ出よ！ さやうな禮儀には及ばぬぞ」と、云つた。が、夫は好意から出た注意と云ふよりも、焦燥から出た叱責に近かつた。侍臣は、主君の言葉に依つて元の心易さに歸ろうとした。が、そうした意識を伴つた心易さの奥には、ゴツ〳〵とした骨があつた。

眞鎗の仕合以來、忠直卿は忘れたかのやうに武術の稽古から身を遠ざけた。毎日の日課のやうに、續けて居た武術仕合を中止したばかりでなく、木刀を取り稽古鎗を手にする事さへ無くなつた。

武張つては居たが寛潤で、亂暴ではあつたが無邪氣な青年君主であつた忠直卿は、ふつつりと木刀や半弓を、手にしなくなつた代りに、酒杯を手にする日が多くなつた。少年時代から、豪酒の素質を持つては居たが、酒に淫することなどは、決してなかつたのが、今では大盃を頻りに傾けて、亂酒の萠が漸く現はれた。

ある夜の酒宴の席であつた。忠直卿の機嫌が、何時になく晴々しかつた。すると、彼にとつては、第一の寵臣である増田勘之介と云ふ小姓が、彼の大杯になみなみと酌をしながら、「殿には、何故此頃兵法座敷には渡らされませぬか、先頃のお手柄にちと御慢心遊ばしての御怠慢とお見受け申しまする」と、云つた。彼は、かう云ふ事に依つて、主君に對する親しみを、充分見せた積であつた。

すると、思ひがけもなく、忠直卿の顏は急に色を變じた。つと、傍にあつた杯盤を、取るより早く勘之介の面上を目がけて、發矢とばかりに投げ付けた。主君から、豫期せざる暴行を受けて、勘之介はハツと色を變じたが、忠義一途の彼は、決して身體をかはさなかつた。彼はその杯盤を、眞向に受けて、白い面から血を流しながら、其場に平伏した。

忠直卿は、物をも云はず、つと立ち上ると、其儘奥殿へは入つてしまつた。同僚の誰彼が、馳け寄つて慰めながら、勘之介を引き起した。

勘之介は、その日病氣と稱して、宿へ下つたが、その夜の明くるを待たず切腹した。

忠直卿は、夫を聞くと、たゞ淋しく苦笑したばかりであつた。

その事があつてから、十日ばかりも經つた頃だつた。忠直卿は、老家老の小山丹後と碁を圍んで居た。老人と忠直卿とは相碁であつた。が、二三年來老人は段々負越すことが多かつた。その日も、丹後は忠直卿の爲に三回ばかり續けさまに敗られた。すると、老人は人の好ささうな微笑を示しながら、

「殿は近頃、いかい御上達ぢや、老人ではとてもお相手がなり申さぬわ」と云つた。

と、今迄晴やかに續けざまの快勝を享樂して居たらしい忠直卿の面を、暗欝な陰影が掠めたかと思ふと、彼はいきなり立ち上つて、二人の間に置かれて居る碁盤を足蹴にした。盤上に並んで居た黑白の色は跳び散つて、その二三は丹後の顏を打つた。

丹後は、勝負に勝ちながら、怒り出した主君の心を解するに苦しんだ。彼は突差に立ち去ろうとする忠直卿の袴の裾を捕へながら、

「如何遊ばされた！殿には御亂心か、何樣の御趣意あつて、丹後奴に斯樣な耻辱を與へらるゝ？」と、狂氣の如くに叫んだ。一轍な老人の心には、忠直卿の不當な仕打に對する怒が、炎の如く燃えた。

が、忠直卿は、老人の怒りを少しも介意もず「えい！」と、袴を捕へた手を振り放ちながら、つゝと奥へ去つてしまつた。

老人は、幼年時代から手塩にかけて守り育てた主君から、理不盡な恥しめをうけて、老の目に涙を流しながら、口惜しがつた。彼は、故中納言秀康卿が在りし世の寛仁大度な行蹟を想ひ起しながら、永らへて恥を得た身を悔いた。正直な丹後は、盤面に向つて追從負けをするやうな卑劣な心は、毫頭持つて居なかつた。が、もう忠直卿の心には、家臣の一擧一動は凡て一色にしか映らなくなつて居た。老人は、その日家へ歸ると、式服を着て、禮を正し、皺腹をかき切つて、惜しからぬ身を捨てゝしまつた。

忠直卿御亂行と云ふ噂が、漸く封境の內外に傳はるやうになつた。

勝氣の忠直卿は、之迄は、他人に對する優越感を享受する爲に、よく勝負事を試みたが、此の事があつて以來は、その方面にもふつつりと手を出さなくなつた。

かうなると、忠直卿の生活が段々荒んで行くのも無理はなかつた。城中に在つては、爲す事のない儘に酒食に耽り、色を漁つた。そして、城外に出ては、狩獵にのみ日を暮した。野に鳥を追ひ、山に獸を狩り立てた。遂に鳥獸は國主の出獵であるが爲に、忠直卿の矢面に好んで飛び出すものはなかつた。人間の世界から離れ、かうした自然界に對する時、忠直卿は自分を圍ふ僞の膜から、身を脫出し得たやうに、すが／＼しい心持がした。

五

之迄の忠直卿は、國老達の云ふ事は、何かにつけてよく聽かれた。まだ長吉丸と云つて居た十三才の昔、父秀康卿の臨終の床に呼ばれて「父の亡からん後は、國老共の申すことを父が申す事と心得て、よく聽かれよ」と、諭された事を大事に守つて居た。

が、此頃の彼は、國政を聽く時にも、凡てを僻んで解釋した。家老達が、ある男を推薦して賞め立てると、彼はその男が喰はせ者のやうに思はれて、その男を用ふる事を、意地にかゝつて拒んだ。國老達が、ある男の行蹟の非難を申上げて、閉門の至當である事を主張すると、忠直卿は、その男が硬直な士であるやうに思はれて、いつかな閉門を命ずる

事を許さなかつた。

越前領一帶、その年は近年稀な凶作で、百姓の困苦一方ではなかつた。家老達は、袖を連ねて忠直卿の御前に出で、年貢米の一部免除を願ひ出でた。が、忠直卿は、家老達が、口を酸くして說けば說くほど、家老達の建言を採用するのが、嫌になつた。彼自身心の裡では、百姓に相當な同情を懷きながら、家老達の云ふ儘になるのが不快であつた。そして、家老達が、くど／＼と說くのを聽き流しながら、

「ならぬ！ならぬと申せば、しかと相ならぬぞ」と、怒鳴り付けた。何の爲に拒んだのか、彼自身にさへ分らなかつた。かうした感情の喰違ひが、主從の間に深くなるに連れ、國政日に荒んで、越前侯亂行の噂は、江戸の柳營にさへ達した。

が、忠直卿のかゝる心持は、彼のもつと根本的な生活の方へも、段々喰ひ入つて行つた。

ある夜の事であつた。彼は宵から、奥殿にたて籠つて、愛妾達を前にしながら、頻りに大杯を重ねて居た。京からはる／＼と、召し下した絹野と云ふ美女が、此頃の忠直卿の寵幸を身一つに蒐めて居た。

忠直卿は、その夜は暮れて間もない六つ半刻から九つに近い深更迄、酒を飲み續けて居る。が、酒を飲まぬ愛妾達は、彼の盃に酒を注ぐと云ふ單調な仕事を、幾回となく繰返して居る丈である。

忠直卿は、ふと醉眼を刮いて彼に侍坐して居る愛妾の絹野を見た。所が、その女は連夜の酒宴に疲れはてたのだろう、主君の御前と云ふ事も、つい失念してしまつたと見え、その二重瞼の美し眼を半眼に閉ぢながら、うつら／＼と假睡に落ちやうとして居る。

ぢつとその面を見て居ると、忠直卿は又更に、新らしい疑惑に囚はれてしまつた。たゞ、主君と云ふ絕大な權力者の爲に、身を委して朝暮自分の意志を、少しも働かさず、たゞ傀儡のやうに扱はれて居る女の淋びしさが、その不覺な假睡の裡にまざ／＼と現はれて居るやうに思はれた。

忠直卿は思つた、此女も自分に愛があると云ふ譯では、少しもないのだ。此女の媚態たる姿態や、妖艶な韻は皆上部ばかりの技巧なのだ。たゞ、大金で退引ならず身を購はれ、國主と云ふ大權力者の前に引き据えられて是非もなく、出來る丈その權力者の歡心を得やうと云ふ、切破詰まつた最後の逃げ路に過ぎないのだ。

が、此女が自分を愛して居ないばかりでなく、今迄自分を心から愛した女が一人でもあつたゞろうかと、忠直卿は考へた。

彼は今迄、人間同志の人情を少しも味はずに來た事に、此頃漸く氣が付き始めた。

彼は、友人同志の情を、味つた事さへなかつた。幼年時代から、同年輩の小姓を、自分の周圍に幾人となく見出した。が、彼等は忠直卿と友人として、交はつたのではない。たゞ服從をした丈である。忠直卿は、彼等を愛した。が、彼等は決してその主君を愛し返しはなかつた。たゞ義務感情から服從した丈である。

友情は、兎も角、異性との愛は、何うであつたゞろう。彼は、少年時代から美しい女性を、幾人となく自分の周圍に支配した。忠直卿は、彼等を愛した。が、彼等の中の何人が、彼を愛し返したゞろう。忠直卿が愛しても、彼等は愛し返さなかつた。たゞ、唯々として服從を提供した丈である。彼は今も自分の周圍に多くの人間を支配して居る、が、彼等は忠直卿に對して、人間としての人情の代りに、服從を、提供して居る丈である。

考へて見ると、忠直卿は戀愛の代用としても、服從を受け、友情の代りにも服從を受け、親切の代りにも服從を受けて居た。無論、その中には人情から動いて居る本當の戀愛もあり、友情もあり、純な親切もあつたかも知れなかつた。が、忠直卿の今の心持から見れば、夫が混沌として一樣に、服從の二字によつて掩はれて見える。

人情の世界から一段高い所に、放り上げられ、大勢の臣下の中央に在りながら、索莫たる孤獨を感じて居るのが、わが忠直卿であつた。

かうした意識が嵩ずるに連れ、彼の奥殿に於ける生活は、砂を噛むやうに落莫たるものになつて來た。

彼は、今迄自分の愛した女の愛が、不純であつた事が、もう見え透くやうに思はれた。

自分が、心を掛けると何の女も、唯々諾々として自分の心のまゝに從つた。が、夫は自分を愛して居るのではない、たゞ臣下として君主の前に義務を盡くして居るのに過ぎなかつた。彼は、戀愛の代りに、義務や服從を喫するのに、飽き果てゝしまつて居た。

彼の生活が荒むに從つて、彼は單なる傀儡であるやうな異性の代りに、もつと彈力のある女性を愛したいと思つた。彼を、心から愛し返さなくてもいゝから、せめては人間らしく反抗を示すやうな異性を愛したいと思つた。

其爲に、彼は家中の高祿の士の娘を、後房へ連れて來させた。が、彼等も忠直卿の云ふ事を、殿の仰せとばかり、唯不可抗力の命令のやうに、何の反抗を示さずに忍從した。彼等は靈驗あらたかな神の前に捧げられた人身御供のやうに、純な犧牲的な感情を以て忠直卿に對して居た。忠直卿は、その女達と相對して居ても、少しも淫蕩な心持にはなれなかつた。

彼の物足りなさは、尙續いた。彼は夫の定まつて居る女なら、少しは反抗もするだろうと思つた。彼は、命じて許婚の夫ある娘を物色した。が、そうした女も、忠直卿の豫期とは反して、主君の意志を絕對のものにして、忠直卿を人間以上のものに祭り上げてしまつた。

もう此頃から、忠直卿の放埒を非難する聲が、家中の士の間にさへ起つた。

が、忠直卿の亂行は、尙止まなかつた。許婚の夫ある娘を得て、少しも慰まなかつた彼は、更に非道な所業を犯した。夫は、家中の女房で艶名のあるものを、私に探らしめて、その中の三名を、不時に城中に召し寄せたまゝ、歸さなかつた事である。

主君の御亂行玆に極まるとさへ、嘆くものがあつた。

夫からの數度の嘆願に拘はらず、女房は返されなかつた。重臣は、人倫の道に悖る所業として忠直卿を强諫した。が、忠直卿は重臣が諫むれば諫むる程、自分の所業に興味を覺ゆるに至つた。

女房を奪はれた三人の家臣の中、二人迄忠直卿の非道な企の眞相を知ると、君臣の義も之迄と思つたと見え、云ひ合

せた如く、相續いて割腹した。

横目付から、その屆出があると、忠直卿は手にして居た杯を、グッと飲み干されてから、微かな苦笑を洩されたまゝ、何とも言葉はなかつた。家中一同の同情は、欣然として死んだ二人の武士の上に注がれた。「道は武士ぢや、見事な最後ぢや」と、賞めそやす者さへあつた。が、人々は此二人を死せしめた原因を、只不可抗力な天災だと考へて居た。一種の避くべからざる運命のやうに思つて居た。

二人が前後して死んで見ると、家中の人々の興味は、妻を奪はれながら只一人生き殘つて居る淺水與四郎の身に蒐つて居た。

そして、妻を奪はれながら、腹を得切らぬその男を、臆病者として非難するものさへあつた。

が、四五日してから、その男は飄然として登城した。そして、忠直卿にお目通を願ひたいと、目付まで申し出でた。

が、目付は淺水與四郎を色々に宥め賺さうとした。

「何と申しても、相手は主君ぢや。お身が今、お目通に出たら必定お手打ぢや。殿の御非道は、我人共によく判つて居る、が何と申しても相手は主君ぢや」

が、與四郎は斷然として云ひ放つた。

「縱令如何ならうとも、お目通を願ふのぢや。縱令身は八劈きにされようとも、念ない事ぢや。是非お取次ぎ下されい」と、必死の色を示した。

目付は、仕方なく白書院に詰めて居る、家老の一人へ其嘆願を傳へた。夫を聞いた老年の家老は、

「與四郎奴は、血迷ふたと見えるな。主君の御無理は判つて居る事ぢやが、此場合腹をかつ切つて死諫を進めるのが、臣下としての本分ぢや。他の二人は、よう心得えて居るに與四郎奴は、女房を取られたので血迷ふたと見える。か程の不覺人とは思はなかつたに」と、呟いだ。

家老は、尙ブツ〳〵と口小言を云ひながら、小姓を呼んでその事を澁々ながら、忠直卿の耳に傳へしめた。

自分が、心を掛けると何の女も、唯々諾々として自分の心のまゝに從つた。が、夫は自分を愛して居るのではない、たゞ臣下として君主の前に義務を盡くして居るのに過ぎなかつた。彼は、義務や服從を喫するのに、飽き果てゝしまつて居た。

彼の生活が荒むに從つて、彼は單なる傀儡であるやうな異性の代りに、もつと彈力のある女性を愛したいと思つた。彼を、心から愛し返さなくてもいゝから、せめては人間らしく反抗を示すやうな異性を愛したいと思つた。

其爲に、彼は家中の高祿の士の娘を、後房へ連れて來させた。が、彼等も忠直卿の云ふ事を、殿の仰せとばかり、唯不可抗力の命令のやうに、何の反抗を示さずに忍從した。彼等は靈驗あらたかな神の前に捧げられた人身御供のやうに、純な犧牲的な感情を以て忠直卿に對して居た。忠直卿は、その女達と相對して居ても、少しも淫蕩な心持にはなれなかつた。

彼の物足りなさは、尙續いた。彼は夫の定まつて居る女なら、少しは反抗もするだろうと思つた。彼は、命じて許婚の夫ある娘を物色した。が、そうした女も、忠直卿の豫期とは反して、主君の意志を絶對のものにして、忠直卿を人間以上のものに祭り上げてしまつた。

もう此頃から、忠直卿の放埒を非難する聲が、家中の士の間にさへ起つた。

が、忠直卿の亂行は、尙止まなかつた。許婚の夫ある娘を得て、少しも慰まなかつた彼は、更に非道な所業を犯した。夫は、家中の女房で艶名のあるものを、私に探らしめて、その中の三名を、不時に城中に召し寄せたまゝ、歸さなかつた事である。

主君の御亂行玆に極まるとさへ、嘆くものがあつた。

夫からの數度の嘆願に拘はらず、女房は返されなかつた。重臣は、人倫の道に悖る所業として忠直卿を強諫した。が、忠直卿は重臣が諫むれば諫むる程、自分の所業に興味を覺ゆるに至つた。

女房を奪はれた三人の家臣の中、二人迄忠直卿の非道な企の眞相を知ると、君臣の義も之迄と思つたと見え、云ひ合

せた如く、相續いて割腹した。

横目付から、その屆出があると、忠直卿は手にして居た杯を、グッと飮み干されてから、微かな苦笑を洩されたまゝ、何とも言葉はなかつた。家中一同の同情は、粛然として死んだ二人の武士の上に注がれた。「逍は武士ぢや、見事な最後ぢや」と、賞めそやす者さへあつた。が、人々は此二人を死せしめた原因を、只不可抗力な天災だと考へて居た。一種の避くべからざる運命のやうに思つて居た。

二人が前後して死んで見ると、家中の人々の興味は、妻を奪はれながら只一人生き殘つて居る淺水與四郎の身に蒐つて居た。

そして、妻を奪はれながら、腹を得切らぬその男を、臆病者として非難するものさへあつた。

が、四五日してから、その男は飄然として登城した。そして、忠直卿にお目通を願ひたいと、目付まで申し出でた。

が、目付は淺水與四郎を色々に宥め賺さうとした。

「何と申しても、相手は主君ぢや。お身が今、お目通に出たら必定お手打ぢや。殿の御非道は、我人共によく判つて居る、が何と申しても相手は主君ぢや」

が、與四郎は斷然として云ひ放つた。

「縱令如何ならうとも、お目通を願ふのぢや。縱令身は八劈きにされようとも、念ない事ぢや。是非お取次ぎ下されい」と、必死の色を示した。

目付は、仕方なく白書院に詰めて居る、家老の一人へ其嘆願を傳へた。夫を聞いた老年の家老は、

「與四郎奴は、血迷ふたと見えるな。主君の御無理は判つて居る事ぢやが、此場合腹をかつ切つて死諫を進めるのが、臣下としての本分ぢや。他の二人は、よう心得えて居るに與四郎奴は、女房を取られたので血迷ふたと見える。か程の不覺人とは思はなかつたに」と、呻いだ。

家老は、倘ブツ〳〵と口小言を云ひながら、小姓を呼んでその事を澁々ながら、忠直卿の耳に傳へしめた。

すると、忠直卿は、思の外に機嫌斜ならずであつた。

「ハ……與四郎奴が、參つたか。よくぞ參り居つた。直ぐ通せ！目通り許すぞ」と、叫ばれたが、此の頃絶えて見えなかつた、晴がましい微笑が、頬の邊に漂ふた。

暫くすると、忠直卿の目の前に、病犬のやうに呆けた與四郎の姿が現はれた。數日來の心勞に疲れたと見え、色が蒼ざめて、顏中に何處となく殺氣が漂つて居る。そして、その眸の中には、二筋も三筋も血を引いて居る。

忠直卿は生來初て、自分の目の前に、自分の家臣が本當の感情を隱さず、顏に現はして居るのを見た。

「與四郎か！近う進め！」と、忠直卿は溫顏を以てかう云はれた。何だか、自分が人間として他の人間に對して居るやうに思つて、與四郎に對して、一種の懷しさをさへ覺えた。主從の境を隔つる膜が除れて、たゞ人間同志として、向ひ合つて居るやうに思はれた。

●與四郎は、疊の上を三反ばかり滑り寄ると、地獄の底からでも、洩れるやうな呻き聲を出した。

「殿！主從の道も人倫の大道よりは、小事で御座るぞ。妻を奪はれましたお恨み、かくの如く申上げまするぞ」と、云ふかと思ふと、與四郎は飛燕の如く身を躍らせて、忠直卿に飛びかゝつた。その右の手には、早くも匕首が光つて居た。が、與四郎は輕捷な忠直卿に譯もなく、利腕を取られて、其處に捻ぢ伏せられてしまつた。近習の一人は、氣を利かした積で、小姓の持つて居た忠直卿の佩刀を、彼に手渡さうとした。が、忠直卿は却つて其男を斥けた。

「與四郎！眞に其方は武士ぢやのう」と、云ひながら、忠直卿は取つて居た與四郎の手を放した。與四郎は、匕首を持つたまゝ、面をも揚げず、其處に平伏した。

「其方の女房も、眞に命を召さるゝとも、余が言葉に從はぬと申し居つた。余の家來には珍らしい者共ぢや」と、云つたまゝ、忠直卿は心からいと快げに哄笑した。

忠直卿は、與四郎の反抗に依つて、二重の欣びを得て居た。一つは、一個の人間として、他人から恨まれ殺されんとすることに依つて、初て自分も人間の世界へ、一足踏み入れる事が、許されたやうに覺えた事である。もう一つは、家中

に於いて打物取つては、俊捷第一の噂ある與四郎が、必死の匕首を物の見事に、取押へた事であつたこの勝負に、或や僞があらうとは思へなかつた。彼は、久し振に勝利の快感を、何等の疑惑なしに、樂しむ事が出來た。忠直卿は、此頃から胸の裡に腐り付いて居る欝懷の一端が解け始めて、朗かな光明を見たやうに思はれた。「たゞ此儘にお手打を」と、嘆願する與四郎は何のお咎もなく下げられたばかりでなく、與四郎の妻も、即刻お暇を賜つた。

が、忠直卿の此の欣びも、決して長くは續かなかつた。與四郎夫婦は、城中から下げられると、その夜、枕を並べて覺悟の自殺を遂げてしまつた。何の爲に死んだのか、確には分らなかつたが、恐らく相傳の主君に刄を向けたのを、恥ぢたのと、かつは彼等の命を救つた忠直卿の寛仁大度に、感激した爲であらう。

が、二人の死を聽いた忠直卿は、少しも欣ばなかつた。與四郎が覺悟の自殺をした所から考へると、彼が匕首を以て忠直卿に迫つたのも、何うやら怪しくなつて來た。忠直卿に潔く、手刄されん爲の手段に過ぎなかつたやうにも思はれた。若しそうだとすると、忠直卿が見事にその利腕を取つて捻じ倒したのも、紅白仕合に敵の大將を見事に敗つて居たのと、餘り違つた譯のものではなかつた。そう考へると、忠直卿は再び暗澹たる絶望的な氣持に、陷つてしまつた。

忠直卿の亂行が、其後益々進んだ事は、歷史にある通である。最後には、家臣を擅に手刄するばかりでなく、無辜の良民を捕へて、之に兇刄を加へるに至つた。殊に口碑に殘る「石の俎」の云ひ傳は、百世の後人に面を背けさせるものである。が、忠直卿が、かゝる殘虐を敢てしたのは、多分臣下が忠直卿を人間扱ひにしないので、忠直卿の方でも、おしまひに臣下を人間扱ひしなくなつたのかも知れない。

六

併し、忠直卿の亂行も無限には續かなかつた。放埒が、度重るに連れて、幕府の執政たる土居大炊頭利勝、本多上野

守正純は、私に越前侯廢絶の策を廻らした。が、剛强無双の上に、徳川家には嫡々たる忠直卿に正面から事を計つては、如何なる大變を、惹き起すかも分らぬので、遂には忠直卿の御生母なる清凉尼を、越前へ送つて將軍家の意を夫となく忠直卿に傳へる事にした。

忠直卿は、母君との絶えて久しき對面を欣ばれたが、改易の沙汰を思ひの外に容易く聽き入れられ、六十七萬石の封域を、弊履の如く捨てられ、配所たる豐後國府内に赴かれた。途中敦賀にて入道され法名を一伯と付けられた。時に元和九年五月の事で、忠直卿は三十の年を越したばかりであつた。後に豐後府内から同國津守に移されて臺所料として、幕府から一萬石を給され、晩年を事もなく過し、慶安三年九月十日に薨じた。時に五十六歳であつた。

忠直卿の晩年の生活に就いては、何等の史實も傳はつて居ない。たゞ、忠直卿啐護の任に當つて居た府内の城主竹中采女正重次が、その家臣をして忠直卿の行狀を錄せしめて、幕府の執政たる土居大炊頭利勝に送つた「忠直卿行狀記」の一冊があるばかりである。その一節に、

「忠直卿當國津守に移らせ給ふて後は、些の荒々しきお振舞もなく安けく暮され申候。兼々仰せられ候には六十七萬石の家國を失ひつる折は、惡夢より覺めたらんが如く、たゞすが〳〵しうこそ思ひ候へ。生々世々國主大名などに再びとは生れまじきぞ、多勢の中に交じりながら、孤獨地獄にも陷ちたらんが如き苦艱を受くる事屢々なりなど仰せられ、御改易の事に就いては、些の御後悔だに見えさせられず候。…………徒然の折には、村年寄僧侶などさへお手近く召し寄せられ、圍棋のお遊びなどあり、打ち興ぜさせ給ふ有様、殷の紂王にも勝れる暴君よなど、噂せられ給ひし面影更に見え給はず、殊に津守の淨建寺の洸山老衲とは、いと入懇に渡らせられ、老衲が、「六十七萬石も持たせ給へば、誰も紂王の眞似なども致したくなるものぞ。殿の惡しきに非ず」など、聞え上げけるに、お怒りの樣もなく笑はせ給ふ。末には百姓町人の賤しきをさへお目通に引き給ひ、無體(なめげ)に飾なく申し上ぐる事を、いと興がらせ給へり。御身はよろづ、お愼しみ深く、近侍の者を憫み、領民を愛撫し給ふ有様、六十七萬石の家國を失ひたる無法人とも見えずと人々不審しく思ふ事今に止まず候」と、あつた。(完)



助教授Bの幸福

野上彌生子

九月下旬の或る金曜日の午後。助教授Bは文科大學第十番教室に於ける彼の『十八世紀英文學』の講義を、定刻の振鈴より約五分早目に切り上げた。彼は講義中に起つた或る一つの出來事のために、明かに興奮して、怒つてゐた。學生にはそれがよく分つた。彼等は寧ろ面白がつてゐるのであつた。彼自身にも、學生が自分の怒や興奮を見透かしてゐる事が分つてゐた。双方ともすべてを承知し合つてゐながら、表面靜肅に取りすましてゐただけそれだけ、其處には一層根強い反抗と敵對があつた。彼は落着かなければならない事を知つてゐた。その場合自分の感情の露骨な發表は、學生をしてます〳〵勇氣づかせ、はしやがせ、大膽にならせるのみだと知つてゐながら、矢張り震えた。彼は何かゞ突つかゝつて來るのを防がうとするかのやうに、身體を硬くし、兩足に勢一杯の力を入れて教壇を踏みつけてゐた。

『都合でセミナリの方は當分休みます。』

教室を去る時彼は斯う云つた。これは豫定の計畫であつた。學期の初めであり、まだ十分準備の整はぬ講義の手入れや、參考書の通讀、その他暑中休暇から持ち越した繁雜な調べ物などに、彼はまだ毎日追はれてゐたので、セミナリだけは暫く休みにする決心をしてゐた。而して今日その事を彼等に云ひ渡す積りであつた。——教室に於

ける權威者として、彼はその教壇から平氣に、且つ飽くまで高慢にそれを宣言し得る筈であつた。が、場合が斯んな風に變化したところでは、その言葉は如何にも當てつけがましい、貧弱な、皮肉としか響かなかつた。と同時に目の前に擴がつてゐた數十の學生の顏が笑つた。而して申し合せたやうな、意味ある視線が、彼の上に集まつて來た。様々な青年の、様々な顏、眼と口の特殊な表情、悉くが助教授B彼自身に對する嘲笑と輕侮でないものはなかつた。

教室を出て銀杏の長い並木の下を通りながら、彼はその時の光景を思ひ浮べた。彼はポープに就いて論じてゐた。當然の比較として、今はもう故人となつたが、十年前に同じ英文學の講座を受け持つて、同じ英國十八世紀の文學を講じたことのある著名の一先輩の上に彼は云ひ及んだ。

『Y氏(その先輩)は主として散文の方面に力を注がれたやうですから、僕は詩の方をやります。つまり散文と詩と、兩者相竢つて初めて完全な十八世紀の文學史が出來上る筈です。』

これを聞いた時學生の間には大いなる動搖が引き起された。Y先生は彼等の最も尊敬する先輩であつた。造詣の深い專門的學問と共に、明治から大正に亘つて日本文學史上の特殊な、強い光であつた彼の藝術のために、又卓越したその人格のために。彼等は彼が決してよい感情を以つて大學を去つたのでない事情を知つてゐた。野に下つて筆を取つたと云ふ事は、寧ろ彼等の母校なる大學に取つては反逆であり、裏切りであり、固陋な老教授達の目からは怖ろしい外道であつたにも拘はらず、學生なる彼等——少くとも知識を愛し、藝術を尊び、人生に對して眞面目な考察をして行かうとして居る青年——に取つては、彼は唯一の權威ある先達でなければならなかつた。彼が名聲ある大學の講座を一管の筆のために未練なく抛つたと云ふ事さへ、彼等の若い心には寧ろ英雄的な行動として受け取られるのであつた。斯うして彼とB助教授とを同一の標準に置いて考へたり、話したりする事は、彼等には思ひも寄らぬ事であつた。若しそんな不遜を犯すものがあれば、それは怖るべき冒瀆であるべき筈であつた。それ位彼等は彼に引きつけられてゐたのである。ところへB自身がその冒瀆者として現はれた。彼は自分の講義の上で折々その先輩を引き合ひに出した。彼が故人となつてからは殊に頻繁に、大びらに、誇りがな態度で彼の世に公にした講義中の或る意見や引例などに對して非難を加へ

た。而してそれがまた先輩が彼一流の獨創的の見地から、何人の追隨をも許さないやうな、奇拔な比喩や一家の批評を述べたものに限られてゐた。彼はY氏の獨創の代りに、聞き慣れない學者の名前を幾つも擧げた。悉く海の向ふの敎授X、文藝批評家Z……に外ならなかつた。學生は初めは驚いた。それから腹を立てた。やがてつまらなくなつた。而して今では笑ふやうになつた。わけてもY氏の十八世紀英文學史の講義は、日本人のなしたる外國の文藝批評として、同種族の者の陷りがちな傳習的迷信と價値の過重から脫した貴重な研究として知られてゐたものだけに、Bが彼自身の切拔帳的の講義をそれと同列に置いて論じようとする態度が既に非常に滑稽に感じられたのであつた。Y氏の散文方面の研究と彼自身の詩の方面の研究と、それに依つて十八世紀英國文學史の完全な講義が出來上ると云つた今日の彼の思ひ上つた口吻は殊に學生を笑はした。全く彼等はその時思ひきつて笑つたのであつた。

『何がおかしいのです。諸君はどうも不眞面目でいかん。』

彼は上ずつた聲で叫んだが、同時に怒とも、又耻かしさとも知れない或る奇妙な塊まりが、身體ぢうを熱くするのを感じた。

『――Y氏の事は餘り云はない方がおれのためにいゝか知ら。……』

彼は並木の下でひそかに、臆病らしく自分自身に相談して見た。而して何となしにおど〳〵した、赤い顏をして四邊を見廻はした。向ふの圖書館の方の植込の間を、地方の高等學校を卒業して東京に出たばかりと思はれる數人の學生が、まだ暑いのを我慢して、揃ひの新しい四角な帽子を冠つて物珍しそうに散步してゐる外には、人らしい影もないのを見定めると、彼は安心した。

『――併しY氏が何程著名な藝術家であつたにもしろ、彼の大學に於ける地位は單なる一講師に過ぎなかつた。自分は助敎授だ。運よく行けば二三年のうちには博士にも敎授にもなり得る身である。而して同じく英文學を講じてゐる。研究の當然の順序として、たま〳〵Y氏の名前に云ひ及んだとしても、何の憚るところがあるだらう。……』

この結論はたしかに彼を元氣づかした。今まで何處となしに悄げ込んでゐたその顏も生々となり、歩きぶりまでが、變つて見えた。彼は大跨に、わざと氣取つた風で細いステッキをふりながら正門の方へゆつくり歩いて行つた。銀杏の並木は黄金色の尖塔形の樹頭を澄みきつた秋の空の下に揃へて、將軍を迎へる閱兵式の兵士の如く彼の左右に並列した。その他、手入れの行き屆いた美しい校庭。多くの樹木、その間に隱見してゐるゴシック建築。その簡明な直線の集合と、よき程に古びた煉瓦の褪紅色と、急斜面の屋根の灰色との錯綜。この一廓の光景は常に強く彼を引きつけた。――美的な趣味からよりは、寧ろ人事的の意味に於て、すべてが若い、未來ある助教授としての彼自身の登場に似合はしい、魅力ある背景でないものはなかつた。よくブラシのかゝつた、きちんとした洋服。磨き立てた新しい靴、帽子、ステッキ、講義のノートの這入つたキッドのポートフォリオを小脇に挾んで、正門からその一廓をさして這入つて行く自分自身を想像するだけでも、彼は一種の興奮を感じた。そのお誂へ向きの舞臺のまん中に彼は今立つてゐるのである。それだけでも彼の自負心は十分滿足してよい筈であつた。殊に圖書館の前にゐた例の田舍者らしい學生の群れが、横路から彼と同じ大通りに現はれて來て、或る囁きと敬畏するやうな目送を以つて通り過ぎたのに氣がつくと、彼は思はずにやりと笑つた。

『おれの事を知つてゐると見える。銀時計で一番で出て、出るとすぐに留學を命ぜられて、歸ると多くの先輩を追ひ越して助教授になつた此のおのれの噂を聞いてゐるに相違ない。而して彼等の田舍の友達にやる手紙には、今日大學の庭で若い、有名な文科大學の助教授を見た事を、一番に書いてやるに違ひない。』

彼の滿足は頂上に達した。自己稱讃と惠まれた運命の肯定と、更に光輝ある未來への期待とは、恰かも自動車の前面燈の如く彼の目を眩惑さした。彼はその强烈な光の驟雨の底に、押し包まれ、打ちひしがれて、殆んどぼんやりなつてしまつてゐた。が、その時一つの聲が彼を呼びさました。

『――併し彼等は、お前のあの苦しみは知らない。』

この聲が彼に取つてどんなに怖ろしいものであつたかは、それと共に彼が丁度生理的の苦痛を感じたもの丶如く、眞

つ青になつて、震え出しそうになつたのを見ても分つた。今までの得意らしい顔付は一變して、眉根には險しい竪皺が寄り、唇は固く閉ぢられた。一體に滑らかな、よい血色をした皮膚と共に、まだ圓味の失せない頬を有つてゐる彼の顔は、鼻の下のぽつちりした髭でも、短目に刈り上げた濃い髮の毛でも、皆年よりは若々しく、初心らしく、呑氣らしく彼を見せてゐるので、その僅かな著しい表情の變化は、普通ではとても同一の顔面に乘りきれそうもない位、異常な、陰鬱さに見えた。彼は左のポケットを探つてハンカチフを取り出すと、何だか、その忌々しい、苦しいものが、物質かなにかであつて、それを額の上から拂ひ除けようとでもするかの如く、帽子まで脫いで丁寧に顔ぢうを拭き廻はした。

『小說の二つ三つも書けば、彼等はさもえらい事でもしたやうに思ふのだ。小說がなんだ。下らない。』

先刻の敎室での不快な腹立たしい光景がまた彼を襲うたのである。彼はこれ等の分らずやの、生意氣な學生等を腹の中で思ふ樣罵ると共に、Y氏の藝術をも散々にくさし、墮しめる事に依つて、その不安な、怖ろしいものから遁れやうと骨折つた。が、それは無駄な努力であつた。何故といふに、彼の苦痛と恐怖は學生にも、またY氏の藝術にも、全然關係のないものであつたから。それは謂はゞ簡單な、明白な、たつた一つの理由、同時に誰にも、何事にも、またどんな辭令形式を用ひても、自分以外のものには責任の轉嫁しようのない、重大な、運命的の理由、――彼の頭の問題に外ならなかつたのであつた。彼は書齋に於て、セミナリに於て、又圖書館に於て、至るところに自分を待ち受けてゐる苦しい仕事――全く、定見も自信もない、苦しいばかりの仕事を思う、悄れた。嚴密に云へば、彼は明日の講義さへ何をどう云ふ風にやつたものか、少しも見當がつかないのであつた。彼の唇からは知らず〱重い溜息が洩れた。

Bは、世間からは近年の文科に現はれた珍しい秀才と信ぜられ、彼の同級生や交友の間には、旨くやつた、運のよい、幸福な男とせられてゐる一人であつた。數年前彼が恩賜賞を戴いて大學を出た時には、彼等は寧ろ彼を侮蔑の目で迎えてゐた。彼の實力は彼等にはよく分つてゐたから。併し間もなく英國へやられる。歸ると直ぐ助敎授に任命される。春のボート・レースとか、秋の運動會とか云ふ大學的祝祭の度毎に、若い娘を有つた所謂婿狩りの夫人達から、競爭してちやほやされてゐるのを見出した時には、彼等の侮蔑はいつとなしに羨望に變つて行つた。

『奴さん、何かなしとみを當てたやうなものだね。』
『全くとん／＼拍子に行つたね。來年あたりは博士になるんだつて云ふぢやないか。』
『うまくやつてやがらあ。あんなブロック・ヘッドに講座が受け持てりやおめでたい話だ。』

この嘲罵は仲間の同意ある高笑を引き起さないではゐなかつた。併しこんな連中が彼の惡口を云ひながら、私立學校の時間制度の、一時間一圓何十錢と云ふやうな、みじめな講義料を稼いだり、中學校の英語の先生になつたり、また僅かな手當てで、主義も主張もない興味中心の雜誌の編輯に携はつたりしてゐる間に、彼は大學と云ふ尨大な眠れる巨人――大した能もないが、横たはつてゐるところを見ると如何にも偉大で、立派で、どれ程の力を有つてゐるか分らないらしく見える巨人――を背景として、社會的生存の最もよき條件をぐん／＼堅めて行くやうに思はれた。

『あいつは全くいゝ機會を捕へたのだ。』

古い仲間の斯んな嘆息も、もう直接彼の耳には達しない位、彼等の間は隔たつてしまつた。彼は眞つ先に、たゞ一人花々しく進んだ。併し『機會』は運命の産んだ子供に相違ないとは云つても、すべてが正統な子供ばかりではなかつた。彼の捕へた機會の如きは女神の庶子の一人で、殊に手に負へない、いたづら小僧であつたのかも知れなかつた。而して若し些かのパラドックスが許されるならば、彼がそれを捕へたと云ふよりは、却つて彼自身の方がその何とも知れない、小さな、奇妙な魔物の生贄になつたやうなものであつた。――それも、今になつて考へれば。

彼が英文科二學年の學生であつた時は、倫敦のL大學で古典學を講じてゐたS教授といふ年取つたウェールス生れの老博士が、彼等の教師として來任すると共に、それと前後して、Y氏が專念文筆の人となるために大學を辭すると云ふ事件が持ち上つた。これは學生に取つては大なる驚きであつた。丁度その頃は、Y氏の藝術が最もきらびやかな社會的出立をした折で、美しきもの、よきものに對する青年の驚嘆や讃美、または私意のない憧憬から、Y氏と彼等との間には、單なる教師と學生と云ふ冷やかな關係以外の、特殊な感情が醸されてゐた場合であつただけに、その講座からY氏を失ふと云ふ事は、實質以上の打撃として學生には受け取られたのであつた。彼等の深い失望には、何處へも持つて行

きやうもないが、併しどうにかしないではゐられないやうな、憤懣の情さへ交つてゐた。其處へ、何んにも知らない、人のよい老人が現はれて、英國の古代文學と沙翁研究と言語學とを講じ始めた。Y氏の十八世紀文學史とケルト文學とに比べて、それは何と云ふ著しい對照であつたらう。一句の科白、一行の詩の解釋にも、飽くまで獨創的な藝術批判を怠るまいとしたY氏のやり方に對して、S老教授の講義はすべてがたゞ考證であり、引用であり、註解であつた。而して講義が親切で精密であればあるだけ、學生の期待はます／＼反したものになつて行つた。學生は彼の善良と博識を認めた。言葉の優れた選擇と、デリケートな音樂的調子を有つた彼の『よき英語』にも感心させられてはゐたが、それにも拘はらず、その講義を滿足して受け取る事が出來なかつた。古代英語學に於けるitやthatの使用法の研究に數時間を費すやうな講義を聞く位なら、いつそ純粹な言語學科に轉ずべきであるとさへ彼等は思つた。そんな事が、我等がこれから進まうとする人生と藝術に何の交渉があるだらう。――斯うして、飽くまで倦怠な老人の好古癖的の講義に悩まされた學生達が、せめて今一つの講義の方へ遁れようとすると、其處には又、奇妙な不具の沙翁が立つてゐた。彼はマクベスを講じてゐたが、サー・シドニー・リーとコレリッヂの引用を主とした、馬鹿々々しく長い序論が第一に學生を驚かした。次ぎに梗概を話してしまふと、老教授は一人いゝ心持ちそうに身振りや聲色まじりで朗讀を始める。これはよい英語を聞くために必要でもあれば、アマチユア・クラブの芝居を見る位の面白味は十分あつた。併しその間に時々パラフレーズをやらされたり、平凡な、分りきつた説明が添うたりするので、學生は可なりがつかりさせられた末に、やつと本論に這入る。

『――マクベスはヘンリイ五世とかジユリアス・シイザーとかの如く史劇ではなくして、悲劇である。運命悲劇である。その點から、また希臘的である。――』

お爺さんがおもしろい事を云ひ始めたと思つて熱心に耳傾けてゐると、それはProf. Bakerの引用であつた。それからその教授のマクベスに應用された盲目的運命説が説かれてゐるかと思ふと、今度はProf.Bradleyの説を引いて、マクベスには少しも盲目的運命は見出されない、と云ふ駁論を持ち出す。斯うして二つの反對意見を並べて置いたまゝ、彼

クベスの講義は終りを告げる。

『彼自身の意見は？』

すべての學生の耳はそれを聞かうとした。がそれは無駄であつた。自分の意見などは、彼の古い襯衣と一緒に倫敦からてんで持つて來なかつたのであらうから。學生の心はその度に失はれたＹ氏に對する絶望的の思慕を新たにした。

上品で善良で且つ少しの日本語をも解しない老教授には、學生達のその込み入つた感情が理解され得る筈はなかつた。が、たゞ一つ彼等が自分の講義を悅ばないらしいと云ふ事だけは明白に分つた。その事が彼を非常に狼狽させた。彼はどうしてよいか分らなかつたので、たゞますます熱心に、眞劍に講議する事に依つて學生を引きつけようとした。併し彼が熱心になればなるだけ、學生の方は溜らなくなつて逃げ出した。斯うして彼の時間に於ける聽講者は、極めてあはれな人數をしか殘さないやうになつてしまつた。年取つてから生れた國を見捨て、愛する家庭や親しい友人に離れて、たつた一人で東洋の果まで來たその孤獨な老教授に取つては、これ程ミゼラブルな事はなかつたであらう。彼は途方に暮れた餘り彼の受け持ちの科に限つて一定の試驗を行はうとした。これは彼の講義から失はれて行く聽講生を防がうとする極めて簡單な手段に過ぎなかつたのであつたが、意外にもそれが又學生の烈しい反感を買ふ事となつた。彼の計畫は、單位制度に依つて聽講の自由選擇を許されてゐる文科學生の特權を無視したものだと云ふ理由から、學生等は今度は眞劍に正面から攻擊したのである。この出來事は氣の毒な外國人のお爺さんをますます狼狽させた。而して彼の計畫を撤回する事に依つて、學生との間が圓滿に片付いた後までも、彼等に對する一種恐怖に似た警戒を失ふ事が出來なかつた。彼は始終おどおどして、非常に神經過敏になつた。而して一寸とした事にもおかしい程逆上して、あわてたり、せき込んだりした。斯んな場合になると彼は幾らか訥つて、ふだんよりずつと口早になつて來るので、それがまだ少しも日本化されてゐない彼の英語をますます難解なものにした。學生が飲み込めないらしい顏付をしてゐるのを見ると、彼は一層せき込んで、訥つて、どうにかして自分のよき意志を傳へようとして骨折つた。而して最後にがつかりして、汗を拭いて、敎壇を下りるのが常であつた。年は取つても、どことなく古風な、ウェールス人らしい鋭さを

失はないでゐる彼の大きな立派な身體や手足も、その時は著しく老い疲れて見え、その高雅な額の上半面に並んでゐる特色ある一双の碧色の目は、この外國の學生の非社交的な粗野と、取りつきばのない卒氣なさと、同時に殆んど神秘的な氣六つかしさを、驚き、悲しんでゐるかの如くであつた。

　この便りない、孤獨な老教授が、意外な手近に彼の講義に忠實に耳傾け、好意ある同情を以つて自分に接近しようと努めてゐる一人の學生を見出した時の悦びは想像されるのであらう。Bは斯うして容易に、また極めて自然に、彼に近づく事が出來たのであつた。事實を云ふと、藝術の本質に關して多くの理解を有ち得ない彼に取つては、Y氏を失つた事を他の同級生程大げさに考へる事は出來なかつた。Y氏にしろ、又S教授にしろ、彼の目に映ずる相違は單なる名前の頭文字だけに過ぎないと云つてもよかつた。三年間何かを講義して呉れて、無事に自分を大學から出して呉れる人であるならば、要するに誰でも構はなかつたのであつた。この簡單な、飽くまで徹底した實利主義は、今その老人の信任を得て置く事が、將來の自分にどれ程有益であるかと云ふ事を考へさせないでは置かなかつた。彼は以前より一層忠實にその講義を聽く事に努めた。而して質問と云ふ口實の下に示された遺漏なく、根氣よく寫されたそのノートは、教授をして、Bに於て初めて忠實な一人の弟子を探し得たかのやうに思はせるに十分であつた。教授はBがどの程度に彼の講義を理解してゐるか本統はよくは分らなかつたのである。併しB自身と並べて比較して見るほどに彼に接近して來た學生はゐなかつたし、殊に高等學校時代を英國人の牧師の家に暮してゐたと云ふBの英語は、少くとも話すことだけでは他の學生に擢んでゝ見えた爲めに、そんな事がいよ／＼老人の目にBを優秀な、才能ある學生の如く思ひ込ませたのである。事實、その場合の老教授に取つては、Bの頭よりも舌の方が大事な見つけものであつたのかも知れなかつた。何故なれば、言葉が通じないで、途方に暮れてゐる外國人に取つては、カントの理智よりも、通りすがりのメッセンジャー・ボーイのちよとした通辨の方が、有難く感じられることが多いから。併しこの老人の正直な、何處までも善良な心には、自分がそんな怖ろしい價値顚倒を犯してゐようとは夢にも思はなかつた。彼はたゞ頭と舌の區別を知らなかつたまでゞあつた。——外國語を學ぶ時の日本の學生に於て殊に著しいその區別——沙翁を容易に解するものが、日常の挨拶もろ

くに出來ないやうな奇妙な矛盾——それが彼には飲み込めなかつたのである。彼はBの舌を信ずると同程度にその頭をも信じたのであつた。斯うして彼が特別の興味と熱心を以つて新たな弟子を指導しようとし始めた時、内心少からず驚いたのは、本人のBであつた。それは彼自身の期待以上であつたから。例へば、何かのついでに、英國の古代の詩に就いて幾らか研究して見度いと云ふやうな事を云つたとする。——古文學研究を專門にしてゐる老教授の學究的虚榮心に媚びるだけの、ほんの一寸した座談の積りで。——すると忽ち驚くべき古文書の蒐集の中に彼は封じ込まれなければならなくなる。教授は大得意で、にこ〲して、彼の爲めに該博な考證をして見せる。古風な用語と文法から組み立てられた、難解な古めかしい詩や文章が引用される。それから又それに對する教授某々氏等の精細な、長々しい註釋が現はれる。彼はその一つを記憶するだけでも容易ではなかつた上に、老教授の飽くまで人のよい熱心を滿足せしめる爲めには、彼はその詩、又は文章の幾つかを暗誦しなければならないのである。理解も共鳴もない、空疎な死語の果てしない連續。——時によると流石の彼もうんざりしてしまふ。すべてを投げ出してしまつて、その何ともえたいの知れない、外國の死文字の幽靈から放たれる事が出來たなら、どんなにせい〲するだらうと思はれる。初めから老教授の講義に敬遠主義を取つてゐる他の學生の自由が羨ましくなる。併し卒業はあと一年たらずのうちに迫まつて來た。論文にもおひ〲取りかゝらなければならない。彼の頭はそれに對する計畫と、いろ〲なずるい打算で一杯に充たされた。

『今になつてあのお爺さんの信用をなくしてたまるものか。』

彼の怖ろしいことはたゞこの事一つであつた。

『今少しの辛抱だ。』

彼はたゞそればかりを思つた。彼は溜息を吐いたり、大きな欠伸をしたりしながら、尚根氣よく師の後に續いた。それは丁度約束された割のよい賃銀を目あてに、遠い路を歩いて行く荷かつぎの溜息や欠伸によく似たものであつて、勤勉な學生の、學問に對する純な研究的苦悶とは非常に違つた種類のものであつた事は勿論である。事實、彼の選んだ路にはそんなものは不必要であつた。彼はたゞ默つて、忠實に隨いて行きさへすればよかつたのである。——老教授の指

定した或る書物を、彼の指定した研究と註釋書に依つて、その儘無批判に受け入れ、記憶し、或る箇所を暗誦し、又はそれを手際よくノートの上に拔萃したり、排列したりすれば、それだけで才能ある、卓越した學生としての彼の信用を落す心配はなかつたのである。獨創的と云ふ事だけが、その際一番忌むべき事であつた。それは老教授を震え上らせる。――何故なれば、それは學問上の古い權威に對する暴徒的反逆に外ならなかつたから。Bはすべてを旨く飲み込んでゐた。斯うして彼の『セリダンの戯曲』を論じた卒業論文は、容易に彼に首席優等卒業生の名を贏ち得させたのであつた。のみならず、恩賜の名に依つて最高の光榮を表彰した一箇の銀時計までがその手の中に落ちて來た時、Bは幾らかどぎまぎした。物事が餘り思ふ壺にはまり過ぎるのに氣咎めがしたのであつた。

『少し運がよすぎはしないか知ら。』

彼は人目を憚るやうにそつと首をもたげておづ／＼とあたりを見廻した。先づ第一に老教授の些かも疑惑のない、滿足しきつた顔が目に入る。その他模範的學生としての彼の勉强法を聞きに來た新聞雜誌記者。保證人。下宿屋のかみさん。又は馴染の床屋の亭主。周圍のものはすべてが彼の受けた最高の名譽のために、世にも稀な秀才としての彼を疑ふものはなかつた。而して彼等の賞讃や尊敬は、催眠術に於ける暗示のやうな作用を彼の心理の上に働きかけた。他人からえらいと思はれたり云はれたりしてゐるうちに、B自身でも確かに自分自身をえらいものと信ずるやうになつた。而して現在の成功に對しても、最初の何となしに臆した、不安な怖れの如きは、もう二度と彼をおびやかさなかつた。すべてが彼の力に屬するものであり、望みのまゝ望み、取り度いだけ取つてよいものゝ如く思はれた。彼は別人のやうに大膽になつた。而して遠く自分へ笑ひかけてゐる未來の方へ、大手をひろげて歩いた。

中學校時代の事である。或る漢學の先生の塾で十八史略の講義を聽いてゐた時、後漢の章で、得官執金吾、娶妻陰麗華と云ふ若い劉秀の夢を歌つた句が彼の氣に入つた。彼はこの句が好きでたまらなかつた。

『執金吾と云ふ男は、その頃幅を利かしてゐた役人ぢや。』

と云つて說明した老先生の聲までがはつきり耳の底に殘つてゐる。その後は彼の若い空想が職業とか妻とかの問題に觸

れる度に、いつでもこの句が思ひ出されずにはゐなかつた。執金吾と云ひ、陰麗華と云ふ文字は、取りも直さず、彼の未來の夢の表象となつたのであつた。現在の成功の中から勝算に充ちた、かゞやかしい前途を望んだ時、彼はその古馴染の、なつかしい句を高く心の中で歌つた。執金吾の代りに、博士であり、大學教授である事を夢見ると共に、今どの家かの窓の下で、ピヤノでも彈いてゐるか、又は縫取り臺にでも向つてゐるに相違ない彼の陰麗華を思ひやつた。——勿論彼女は美しくなければならない。聰明で、愛嬌があつて、亭主思ひでなければならない。家の外では少し位威張つてゐても、內では靴足袋を脫がせて吳れる程度の媚態を持たなければならない。最後に今一つ、彼女は門地はなくとも金持ちでなければならない。——彼自身は貧乏であつたから。——彼女の持參金は彼に手廣な庭園の附屬した立派な家を與ふる事であらう。當世風の美しい客間、何處までも學者らしく、大學教授らしい、理想的な裝飾を有つた書齋。眠り心地のよい贅澤な寢室。其處から一足門の外に出れば、すべての人が若くて著名なその大學教授に敬意を表する事を怠らないやうにと心配する。學生の評判は素破らしくよい。彼の講義には聽講生がいつも一杯になる。その內に彼の大著述が讀書子を驚嘆させる。——どんな著述をするか、それは今のところちよつと自分にもよく分らないが、兎に角何かやる事にきめてある。——それは思想界、文藝界の新人達を共鳴させると共に、文部省の方へも氣受けのよいものでなければならない。同時に彼の有する正×位高等官×等の官位等級は、彼を研究室や書齋ばかりには閉ぢこめておかない。宮廷並びに諸大臣の主催する晴れがましい儀式、祝宴に際しても、彼は公人としての光榮と歡樂に十分醉ふ事が出來る。卽ち學者の名譽と官吏の勢力と、二重の、割のよい役德を有するわけであつた。何と云ふ幸福な社會的地位であるだらう。同時に又その便利な地位を利用しようとする樣々の人が彼の足下に蝟集して來る。學校屋、教科書屋、講義錄屋、出版屋。——彼は飽くまで尊大な、高ぶつた態度で、そのいづれかに彼の名前のほんの少しの使用を許すだけで、夥しい收入が持ち來たされる。富と名と權勢の完全な一生！フィルムの上の遠景の如く、鮮やかではあるが極めて遙かに、彼の目に映じてゐたこれ等のものが、今でも非常な速度で自分の方へ近づいて來るのを彼は感じた。手を出しさへすればいつでも、又場面のどれをでも確實に摑まれそうであつた。否三年の海外留學——（世間は彼が大學院の年限を終る

か終らないに、早くもその好運を荷つた事に目を見張つた。彼等はそれをまたB自身の才能のすぐれた事に歸して、大學と文部省が、殆んどB教授一人のみになつた英文科を救ふために、その際、曲りなりにでも、急拵へに一人の教授を造り上げなければならなかつた苦心をば知らなかつた）——を終つて、助教授に任命された時には、彼はもう單なる見物人ではなしに、そのフィルムの上に動きつゝある主人公であると堅く信じ込んだ。

彼は西片町十番地に小さい家を借りて、住んでゐた。借家をするなら家賃の幾らか高いのや、家の古い、狹い位は我慢して、必ずこの一廓の土地に住まはなければならない、と彼はきめてゐたのである。本郷區西片町十番地に住まふと云ふ事は、それだけでもう學者らしい事であつたから。併し大學から歸つて來て、召使のばあやの拵へたまづい夕飯をすました後で、書齋の中にたゞ一人ぽつつりしてゐると、何となしに四邊が見廻はされる。天井の低い、古びた八疊の一間、赤い疊、いつ張り代へたとも知れない唐紙、粗末な障子、黑い、すゝけた壁、これが彼のえらび求めた家、助教授の俸給の八十圓のうちから、四割近くの苦しい家賃を割いて漸く住む事の出來た住居であつた。その他その中に並んでゐる家具は、机でも椅子でも本箱でも、又は小簞笥、火鉢、座布團の類まで、すべて乏しい財布と相談しながら、なるたけ安そうな店からかき集めて來たものでないものはなかつた。彼は不滿な、もの佗しい心持ちで、順ぐりに部屋の中の物品を檢査した後、現在の生活と彼自身の描いてゐる夢の間に、まだ非常な距離のあることを、今更のやうに氣がついた。同時に彼はその中から彼を救ひ出して與れる最も手近な、唯一のものとして、彼の陰麗華をひたすらに待ち設けたのであつた。勿論彼のところへはもう樣々な條件を有つた緣談が持ち込まれてあつた。而してその數の夥しさは、最初日本ぢうの若い娘達が皆んな彼のところへ來たがつてゐるかのやうに彼を有頂天にさせた。併しだん／＼落着くに從つて、彼は以前よりずつと慾が深くなつた。この際夢中になりすぎて、下手な取引をしてはならない、と云ふ惡黨じみた打算が何より第一に彼を支配し始めたのである。

『若くて、健康で、且つ何等の係累をも有たない大學助教授は、いつでも結婚のチャンピオンであり得る筈だ。』

おそくまで待てば待つほど、條件の揃つた花嫁が手に入るだらう。彼は根氣よく辛抱する決心をした。それと共に彼

の陰麗華は、最初はまだ前から身につけてゐたそのロマンチックな着物をすつかり剝ぎ取られてしまつた。今彼女は裸體で、昨日の面影もなく荒廢しきつて、露骨な實利主義の一幻影として殘されてゐるに過ぎなかつた。併し彼の心は尙ほ始終彼女のところへ行つた。彼女の醜さを蔽はない、墮落しきつたその姿の方が、先よりも近づき安いやうにさへ思はれた。彼は淋しくなると仲介者達から渡されてある娘達の寫眞を取り出して來て、机の上に並べて見る。彼女等は皆美しかつた。而してある願望と期待を有つて彼を見詰めてゐるかのやうであつた。彼女が自分で承知してその一枚を仲介者の手に渡した以上、彼女はもう彼に許してゐるものと見てさし支へないと彼は信じたのである。彼はその中から取りわけ氣に入つてゐる數枚をえらんで、一枚々々念入りに檢査して見る。それ〳〵の技巧を凝らして結ひあげた、美しい髮、目、鼻、口、可愛らしい耳朶、圓い頰、すべてが今彼の手に委ねられてあつた。彼はキスしても、撫ぜても、輕く打つてからかつてもよかつた。彼はまた彼女等の盛裝の下に隱されてゐる眞白い肩、さし出た高い乳房、腰、しなやかな、すばしつこい、長い手足を探り出す事が出來た。それ以上の事さへも出來た。彼はたしかに彼女等の體溫を感じる。熱い、柔らかい觸覺を感じる。熟れ滿ちた果物のやうな、處女の若い肉體の匂ひを感じる。彼は最後に全身を震はして寫眞を手から離すと、落ちつきなく部屋の中を行つたり、來たりし始める。一つの激しい、狂暴な力が、暴風雨のやうに彼の全身を駈け廻つた。數年前の或る一と夜の印象がはつきり彼の頭に浮んで來る。暗い路と燦然たる灯に飾られた家がちら〳〵する。彼はその光りを避けやうとするかの如く、目ばたきをして、壁の方へ向きかはると、荒い溜息を吐いた。その時既に童貞を失つてしまつた彼に取つては、その力の襲擊は別に珍らしいものでなかつたのは勿論であつた。併し今の彼はそれに打ち負けまいとしただけ、ぢつとしてその力をやり過さうとしただけ、これまで知らぬ苦痛を味つたのであつた。

『大事の前の小事!』

――一つは金のないせゐもあつたが、――大體はこの格言を守るための辛抱であつた。これまでになつて妙な女にでも引つかゝつてはたまらない。病氣も怖ろしい。それ以上に怖ろしいのは、それから生ずる不利益な不評判であつた。

斯うしてその哀れな改宗した清教徒が、飢えの滿たされない獸のやうな怒と悲しみに呻めき悶えてゐる身體を、なるたけ淫蕩な、金のかゝらない空想に依つて僅かに麻痺させながら、どうにか無事に自分の寢床で眠らせる事が出來ると、仲介者達は寫眞の娘の母親達に誇り顏に斷言する――彼の品行の正しい事に就いて。今の若さで夜遊び一つしない純潔に就いて。彼の冠つた假面は、斯うしていづれも大成功であつた。直面でないだけに幾分の窮屈さは免かれなかつたものゝ、それさへ我慢してゐれば、唯一人それに心づくものはなかつた。彼は何處までも、優秀な智能と共に稀な德操を有つた靑年學者として、どんな幸福をも待ち設ける事が出來たのである。併し最後に唯一つ運命の陷穽が現はれた。それは野や山に於ける落し穴が、芝草や枯木や又は藥屑などに蔽はれて獸の目を欺くやうに拵へられてあると同じく、初めは彼自身にすら分らなかつた。漸く心づいた時には、最早その穴から遁げ出す事の出來ない程に、彼は餘りに深く這入り過ぎてゐた。――彼は自分の頭の能力に就いて、初めて眞面目な絶望を經驗したのであつた。

彼の大學に於ての處女講義は文學概論であつた。丁度留學から歸つて來たばかりの時で、いろ／＼と花々しい前觸れで値打ちづけられてあつただけに、景氣は中々よかつた。學生達は皆大なる期待を以つて彼に耳傾けようとしてゐたのであつた。併し序論のほんの少しばかりを聞いただけで、彼等はその如何にも六つかしさうな講義であるのに驚かされた。彼等はお互ひに顏を見合せて探り合つた。本統を云ふと初めから何んにも分らなかつたのであるが、正直にさう云ふ事は、自分の理解力の乏しさを表はすものとして憚られたのである。

併し終に彼等は友達同志でそつと尋ね合つた。

『君はあの講義が分るかい。』

『君は。』

『僕は、實を云ふと分らないのだ。』

『僕だつて分らないね。』

彼等はお互ひに安心した樣に笑つた。何でも、怖ろしく六つかしさうなものだ、と云ふ事に意見が一致して、

れでも一生懸命にそれが分り出すやうに努めようと決心した。併し、それがはつきり分るまでにはいつまで待てばよいのか知れなかつた。その内に序論も終つた。學生は筆記のペンを措いてたゞ茫然としてゐた。彼等にはその中に何が說かれ、何が論ぜられたか、明白な概念を作り出す事は到底不可能であつた。たゞ僅かに間違ひなく分つたのは、それはBがこれから一年間に亘つて講義しようとしてゐる文學概論の序論だと云ふ事だけであつた。しかもその用語は飽くまで哲學的で、術語の連續で、それで高遠な暗示と難解な推理が包まれてゐるやうであつた。部分的には確かに何かえらいいものゝ集合であるとは受け取れた。併し何の集合であるか、又如何に集合されたものであるか、或はその集合して出來上つたものが何であるかは、誰にも分らなかつた。その點から彼の講義は學生逵に取つて一つのスフィンクスであつたが、同じ寄せ集めの怪物でも、身體は獅子で頭だけが女の形をしてゐると云ふ事の明白であるだけ、未だしも彼女の本質の方が單純であつたかも知れなかつた。斯うして學生がその謎の前に立つて當惑してゐる間に、B自身も初めて苦しいものを味つた。――眞に苦しいものを、腦髓の底の苦悶を、經驗した。――講義の分らなかつたのは學生のみではなかつた。本人のB自身にも分らなかたのつであつた。彼のその講義は留學中に見出した參考書と、S教授の紹介に依つてあちらで彼が近づきになるの光榮を辱うした二三の著名な老教授――それはS教授の講義の中に a friend of mine とか my great friend とか云ふ同格句を以つて夥しく引用された教授たち――の教示に依る書物とを凝結(コンデンス)して拵へあげようとしたものであつた。彼は何でもない積りでゐた。S教授の下に素直に根氣よくついて行きさへすれば容易に出來上つた仕事と同じやうに思つてゐた。而して彼の目算が非常に違つてゐたのに氣づいた頃には、もう聽講生が待ち構へてゐた。彼は否應なしに約束された講座に立たなければならなかつた。狼狽した彼は、彼がその旅カバンの中から手當り次第の書物を引き出したと丁度同じ具合に、またその書物の中から雜多な推理、批評、解說、考證を摑み出した。而してそれをそのまゝ學生の前に持つて來ていゝ加減に並べたり、積んだり、重ねたりした。或る場所では先に積んだものをきれいに壞はした。――否定と肯定が、一つの説明の中に相交つて現はれた。獨創力に就いて最も乏しく惠まれてゐる彼は、排列は出來ても綜合は出來なかつたのである。――偉大な綜合力は矢張り一種の獨創力であつたから。それ故

彼は自分の講義の缺陥を胡魔化すために、なるだけ曖昧な言葉と廻りくどい云ひ廻しを用ひた。若し無遠慮な學生があつて、鋭く切り込んだ質問が發せられる場合には、彼は却つて高びしやに學生の不勉強と理解力の魯鈍を責めた。

『それ位の事が分らないでどうするのです。質問する前に、諸君はもう少し自分の頭を働かせなくちやいけない。』

併し心の底では、彼はその度に重い溜息を吐いた。

一年目はまだそれでどうにか切り拔けられた。二年目に選んだ古代英語學史も苦しくはあつたが、今度の講義程はなかつた。苦痛は一年増しに大きくなつて行つた。――學生が漸く彼の足元を見透かして來たから。それに對する警戒と懊惱は日々の講義を拵へあげる苦しみ以外に、今一つ彼を脅かして片時も落ちつかせないものとなつた。彼は二重の意味に於て彼等が怖ろしくたまらなかつた。彼の假面を發き出さうとしてゐる問者として。彼に取つて代らうとしてゐる競爭者として。――彼は彼等の卒業論文を見る度にびく／＼した。少し頭のいゝ學生だと思ふと彼は殆んど敵對の目を以つて見た。

『おれはいつ彼から打ち倒されるか分らないのだ。』

研ぎ澄ました長劍が、一筋の毛髪に繋がれて下つてゐる下に坐ると云ふ帝王の疑惧が初めて分るやうに思へた。彼はこの恐怖の前に常におびえ、戰いた。その學生に對して激しい嫉妬と憎惡が湧き起つた。彼は彼の論文に能ふかぎりのからい點數をつけた。併し幾らからい點をつけたところで、相手からその本質的な優秀を一分一厘でも奪ひ得るのでもなければ、それを奪つて自分自身の上につけられるのでもないところに、知識上の競爭者の致命的な苦悶があつた。若しそれが單なる事務の仕事であつたならば、長い間には慣れると云ふ事があつた。平凡な頭腦にも六つかしい事が出來ないとは限らないであらう。併し學問の上の研究思索のみは、どんな小さい事であらうとも、慣れに依つて出來ると云ふものは一つもなかつた。これから二十年間教授の職を續けたところで、Bの知識の屑拾ひたるみじめな苦痛には、何等の變化も生じなかつたであらう。途方に暮れてゐるBに取つては、學問と云ふものは、死の如く清淨な、而して冷酷な沈默した壁のやうに思はれた。その中の一番小さい扉の一つでも、特別に惠まれたる天賦の黄金の鍵を要した。一寸し

た氣紛れや、間に含せた才智や、卑しい打算では、決して一歩も立ち入る事を許されなかつた。何と云ふ卒氣なさであらう。何と云ふ强さであらう。何と云ふ高貴さであらう。Bは初めて學問の嚴肅を感じて震えた。而して一生涯その壁の前から遁れ去る事の出來ない自分の運命を思うて怖ろしかつた。がそれ以上に怖ろしいのは、矢張りその秘密の悩みを他人に見破られる事であつた。彼はいつもびく〳〵してゐた。而して非常に疑ぐり深くなつて學生の何でもない質問にまで悪く氣を廻したり、癇癪を起したりした。それかと思ふと下らない自慢話をして一人で威張つた。彼は時間を知る爲めに教壇の机の上に時計を置いてゐたが、それは必ず恩賜の銀時計であつたのは勿論である。而して學生の方からその蓋に刻みつけた『恩賜』と云ふ文字が、なるたけ見え易いやうな位置に置く工夫を怠らなかつた。一時間のうちに彼は何度も時計をいぢつたり、捲いたりした。その存在を忘れさせないために。彼がこの次の講義の上で頻りとY氏の事を引き合ひに出すと云ふのも、要するに同じ意味の自己吹聽に外ならなかつたのであつた。自分の研究的能力に悲しい幻滅を感じ出してからは、彼は嘘でもよいから

『お前は矢張りえらいのだ。』

と云ふ聲にあこがれてゐた。他人が云つて呉れなければ、自分自身の聲でも聞き度かつたのであつた。併し彼はまだ安心してゐてよかつた。彼の弱點を嗅ぎ出したものは、たゞ僅かに彼の學生のみであつて、世間一般の目には依然たる秀才であり、花々しい未來を嘱望されてゐる少壯學者であつた。人々が彼の卓越した才能と、早い榮達を羨むことは、以前に勝るとも劣りはしなかつた。殊に近頃或る美しい子爵令嬢との間に婚約が成り立つたと云ふやうな噂が洩れてからは、世間は彼を一層幸福な人間に拵へあげて行つたのである。

『さう云へば、おれは矢張り幸福な人間に相違ないのだ。』

彼は自分自身を慰めて見る。講義の事なぞでさう一生懸命になつて苦勞するのは、何にもならない無駄事のやうな氣がして來る。現在の地位がぐらつかない程度で、まあ氣樂にやつておく方が得だ。——斯う思つて行く途中で一番に邪魔をするのは、學生の露骨な態度であつた。近頃ではそれが殊に甚しくなつたのが彼にはよく分つた。今日の教室での

出來事の如ぎその一例に過ぎなかつたのである。と云つてどうする事が出來たらう。怒つても、口惜しがつても、學生のその無禮な態度を一變させるに必要な、たつた一つのものを彼は持つてゐなかつたのだから。最後に同じく彼は諦めた。

『その一つの屈辱さへ我慢すれば、おれは矢張り幸福なのだ。』

數日の後、彼は、彼の歸朝後間もなく癇疾の心臟痲痺のために日本の土となつたS教授の銅像除幕式に列席するために、いつもより一時間も早目に起きた。而して身體を洗つたり顏をあたつたり、大騒ぎをして身仕舞をしながら、一方ではばあやを叱咜して簞笥の中から取り出したフロック・コート――彼が留學中に拵へさせた自慢の一着であつた――に念入りにブラシをかけさせた。ばあやは幾らか目が惡い上に、無遠慮に、大事な折目を間違へたりするのを、剃刀を手にしながら横目で睨めてゐた彼は、顏がすむとばあやからブラシを奪つて、猿股一つで、今度は自分で一生懸命に洋服をきれいにする事に骨折つた。丁度湯屋の三助が流しを掃除するやうな恰好で。又彼がその日〳〵の困難な講義を拵へる時の焦慮を以つて。やつとその手入がすむと、髮にかゝつて、油を塗つたり香水を振り撒いたりする。次にあわたゞしい朝飯、うがひの前にはスキートの三四粒を含む事を忘れなかつたのは勿論である。それから例のブラシの完全に行き亘つたフロック・コートに着換へて、彼は柱鏡の前にたつぷり十五分間は立つて、嚴重に頭から爪先までを檢査した。すべてが十分念入りに手入れの出來上つてゐるのを見屆けてしまつてから、彼は滿足の意を表するため、鏡の中を覗き込んで一寸愛惜笑ひをして見た。

『おかげで大層きれいになりました。』

すると鏡面の紳士もにつこりして禮を返した。

『どういたしまして。あなたは初めからおきれいです。』

斯う答へたかのやうに。玄關へ出ると沓脫ぎの上には新しい方の靴が、普通より二倍はたしかに磨ぎ立てられたに相違ない輝きを以つて彼を待つてゐた。彼の女のやうな華奢な足がすつぽりその中に吸ひ込まれる。その途端にばあやが、

これも十分よくブラシのかゝつた山高帽を壁の帽子掛から取つて渡しながら、丁寧に挨拶をする。

『行つてゐらつしやいまし。』

彼は鷹揚にうなづいて、上機嫌で家を出た。お天氣は日本晴れである。健康も申分はなかつたし、洋服もきつちり身について着心地がよい。彼は何か嬉しいものがぞく〳〵と身體ぢうに詰まつてゐて、それがアミイバのやうな小さい食指を無數に延ばして彼をくすぐり廻すかの如く感じた。彼は殆んど一歩毎ににや〳〵した。講義の困難や、學生の嘲笑などはこの瞬間彼の頭からは跡方もなく消え失せてゐたのである。而してその何もかも忘れたやうに、浮々した、愉快そうな顔つきと、今朝起きるとからの大げさなめかし方は、故人の銅像除幕式と云ふやうな、まだ幾らか追悼の涙の用意を要する儀式に列する人と云ふよりは、日比谷の大神宮へでも出掛けるにふさはしい位に見えた。併しそれに依つて彼を咎めてはならない。兎に角彼に取つては今日一日の儀式は故人の第一の高弟たる彼自身の晴れの舞臺でなければならなかつたから。

大學構內の池に近い小松の丘の中に建てられた胸像は、參列者のすべてに故教授の生前の優しい風貌や、善良な人格を忍ばせるに十分であつた。その人々の中にはBの同級なる學士の一團が可なり多く交つてゐたが、彼等は彼が赴任當時の溶け合はなかつた感情や、又それに對する子供らしい反抗心を、却つて興味ある昔話として、皆懐しそうに老人の顔を見あげた。眞ん中がきれいに圓く禿げた、鳶色の髪毛の上に、セミナリなどではよく赤い羅紗の古風な頭巾を冠つて、にこ〳〵してゐた樣子が目に見えるやうだなど〻話し合つた。

『おい、B。』

Bはその内の一人から呼び留められて彼等と一緒になつた。彼等は參列者一同で會食する筈になつてる晝飯の仕度が出來るまで、學生時代のやうに池の周圍の芝生に腰を下ろしたり、ベンチに凭つかゝつたりして話した。

『どうだ、久しぶりだな。』

『相變らずかね。』

『ちつとやつて來ないか。』

Bはすべての者からそんな挨拶を受け取つた。それ程彼は古い仲間から遠ざかつてゐたのである。それは彼等とは同一にならないB自身の現在の幸運な地位が持ち來たした自然の間隔であるとBは信じてゐた。Bは彼等からどんなに羨やまれてもよいわけであり、又事實羨やまれてゐるのを知つてゐた。併し今日の彼等はその弱點は氣振りにも見せなかつた。彼等は却つて上手に出て來た。Bは悪い處へ來合せたと後悔したけれども仕方がなかつた。彼に取つては、彼等がB、B、と同輩扱へにする事からして第一に不快でたまらなかつた。名譽ある助教授の名に對して彼等はもつと謹んでよい筈であつた。もつと凹んで、小さくなつてゐるべき筈であつた。――が氣の弱い、憐れな影辨慶には、その内心の不快を男らしく彼等の前に打ち出す勇氣はなかつた。彼は寧ろ媚びるやうな、おど〳〵した顏をして、一人々々の言葉に調子を合せたり、平凡な警句が誰かに依つて吐かれる度に、眞つ先に、一人でさもおかしさうに笑つたりした。

『B、君は何かえらいものを書いてゐるさうぢやないか。』

Bを呼び留めた先刻の磊落な男がきいた。何の間違ひだらう――とBは思つたが、その前に、聲の方が先へ出た。

『うん。』

『何だ、創作か。』

今一人の仲間がおつかけて聞いた。第一の噓は第二の噓を強ひた。

『いゝや、論文だ。』

Bは云つてしまつて一寸赤くなつたが、その後はずつと大膽になつて、

『本屋からうるさく頼まれるのでね、つい書く氣になつたのだが、大した自信もないのだ。』とさも得意らしい顏つきをしてつけ加へた。

『何しろ君のは肩書が別誂と來てゐるから。』

例の磊落な男は、冷やかすのだか、おだてるのだか分らない、がら〳〵した調子で、その書物の頁數から出版期から、

終には印税の割合まで聞いた。それに連れてBの嘘もだん〳〵と微細になり、巧妙になつて、終に動かすべからざる確實性を帶びて發達しなければならなかつた。斯うして彼等と二三十分一緒になつてゐる間に、Bは仲間の所謂別誂の肩書なる助教授以外に、尨大な數百頁の藝術論の著者にまでなつてしまつた。

『兎に角結構だ。出來たら一部僕にも送つて吳れ給ひな。』

『いゝとも。諸君には初めから一部づゝ謹呈する積りでゐたのだ。機會があつたら何かで批評して吳れると有難いな。』

Bは平氣で斯んな事まで云つてしまつた。彼はこの空想上の新著述に依つて、すつかり有頂天にされて、前よりも一層にこにこして愛惜よくなつた。要するにそんな噂は、聞いても聞かされても損のない、愉快な話に相違なかつたから。併し彼はその書物を何處から持つて來る積りだらう。ミネルヴァはジュピターの頭以外からは生れなかつた。——假りにもその一事に心づいたなら、彼は否寧ろ彼の『頭』——毎日の講義にさへ、さいなみ、悩まされ拔いてゐる、その哀れな固い生物——の方が、どんなにびつくりしたか知れなかつたであらう。併しBはまだ何處までもいゝ心持で、はしやいだり、喋べつたり、相手の機嫌をそらさないやうにする下から、際どい已惚れや、自己廣告を忘れまいとする、彼一流の念入りな會話に耽つてゐるうちに、先刻から片隅に默つて友達の話に耳傾けてゐた一人の男が突然話しかけた。

『B、君の今度の講義は大分評判のやうだぜ。』

Bはぎよつとしてその男の顏を見詰めた。彼は在學中から、深酷な皮肉屋として知られてゐた事をBはよく覺えてゐた。而して丁度當時の十八世紀英文學の中に出て來たサチリカルな副監督牧師の聯想から、スキフトと云ふ渾名を貰つてゐた事まで覺えてゐた。それ故今彼の口から講義の話の出た事は大なる警戒を要する。Bはどうにかしてその話題を避けようと骨折つて、急に今日の好都合なお天氣の事を云つたり、今頃赤城あたりへ旅行するといゝ氣持ちだらうが、學校があつて思ふやうにならないとこぼして見たりした。これは著述以外に職業を持たないその男に、時間の自由と云ふ點で媚びたのであつた。併し相手が冷然として取り合はないのを見ると、Bは仕方なしに、おづ〳〵と彼の持ち出した話へ戻つて來た。

『講義もやつて見ると思ふやうには行かないものでね。』

彼の返事は相手にはひどく氣取つた高慢なものに見えたらしかつた。彼は無遠慮に逆襲して來た。

『苦しいだらう。』

『さうでもないがね。』

『參考書を引つ張り廻すだけでも大變ぢやないか。』

『併しね、僕はなるたけ自分の持つてゐるものでやつて行く事にしてゐるのだ。參考書をあてにしてかゝるときりがないからね。』

『これを聞くと相手はにやりと笑つた。而してそのまゝ何とも返事をしないで、たしか一分間は默つてBの顏を見詰めてゐた末に、はつきり云つた。

『僕の從弟が、君の講義を聽いてゐるんださうだ。』

その聲と同時に其處にゐたほどの仲間の顏が皆笑つた。敎室の學生の笑ひ方とすつかり同じ笑ひ方で。それは、

『嘘も大概にし給へ。僕等はもう何もかも知つてゐるのだ。』

と云つてゐる笑であつた。Bは思はず眞つ赤な顏をした。油斷をして見事に彼等のわなにかゝつてしまつたと云ふ思ひが、彼を死ぬ種恥かしがらせ、怒らせ、口惜しがらせた。著述の話もみんな彼等のたくんだ落し穴に相違ないであらう。それをすつかり眞に受けて、いゝ氣になつて、あんな嘘まで吐いてしまつた。——跡方もない、口から出任かせの嘘だけれども、取り樣では眞面目な一身上にも關する程の嘘であつた。何と云ふ馬鹿な、まづい事を今日はしでかしたものだらう。彼等は勝ち誇つてゐるだらう。而してお互に顏を見合せて例の笑ひ方をするのだ。彼等の口が笑ふばかりならまだ我慢される。その口は話をするのだ。世間に向つてB自身の買ひ冠られた才能に就いて、不當の名譽に就いて、また今日の滑稽な嘘の著述に就いて觸れ歩くのは彼等の口でなければならない。Bは自分の運命も今日を限りになつたかの如く感じた。

彼はその怖ろしい仲間から離れると、見捨てられた犬にも等しいみじめな自分を、初めて、眞面目に、まともに見た。而してその恥ぢと悲しみと怒りとを、どこか隱すところでも探すやうに、一人で池の周りの木立の中をあちこちとうろつき廻つた末に、やつと會食場となつてゐる御殿の一室に現はれた時には、人々はもう大部分揃つて、今にも食事を始めるばかりになつてゐた。幹事達は、同じ幹事であり、殊に故人との生前の親しい關係上、挨拶代りの追懷談めいたものをする筈になつてゐたBが、何處へ行つたのか急に見えなくなつたのに不審を抱いて、氣を揉んでゐたところであつた。一人の幹事は行きなり彼の肩を叩いた。

『何處をぶらついてゐるのだ。今日は君が一番重な役者ぢやないか。』

平生の彼であつたならば、この一言ですつかり上機嫌になつて、而して得意で、少し位割の惡い持役でもおとなしく辛抱したであらう。併し今日の彼はさうするには余りに苦しかつたし、頭も疲れてゐた。彼は默つて、友達の冗談には一寸義理ばかりの微笑で答へておいて、奥へ行つて席に着いた。

『あの連中は何處へゐるのだらう。』

これはその部屋へ這入るまでの彼の恐怖であつた。彼は椅子に腰を下ろすと、長い食卓の端から端をそつと見廻した。彼等は、彼と反對の側の、ずつと上手に當る窓の下に順々に並んでゐた。彼は先づほつとした。其處からは大分離れてゐると思つたから。彼はなるたけそちらの方へは顔を向けないやうに注意した。

ほんの茶菓子代りの晝飯であつたので、皿は幾つも代へられないで、間もなく彼は食卓の前に立たなければならない順序となつた。實を云ふと、その食卓演説は、今朝までは、否、先刻の不意な出來事の前までは、お祭りを待つ子供のやうな樂しみを彼に與へてゐたのは拒む事も出來なかつた。朝起きるとから大騒きをしておめかしをしたのも、猿股一つでフロック・コートにブラシをかけたのも、ばあやを督勵してその靴を二倍も念入りに磨き立てさせたのも、要するにその一つの目的のために外ならなかつたのであつた。彼はそれに於て、彼自身がどんなに故人に愛されてゐたか、又その人が數多い學生の中から、たゞ一人見出された彼の才能が、如何に特殊な、すぐれたものであつたかを、默つて

ゐても、十分雄辯に知らせられるわけであつた。彼は短いけれども十分氣のきいた話をする積りで、昨夜からかゝつてその草稿まで拵へたのだが、今はすつかり事情が違つてしまつた。彼は立ち上つたけれども、何と云ひ出してよいか分らなかつた。彼は迷惑そうな陰鬱な顔をして、二三度咳拂ひをした。彼はやつと始めた。

『私はS教授には特別にいろ〳〵お世話に預りました爲めか、未だに教授が本統に亡くなられたとは信じられないほどの愛着の心を有つて居ります。――』斯んなことを云ふ積りではなかつたのだ。――彼は一寸まごついて、どぎまぎした後、今度は少し話具合を變へて、教授が赴任當時の淋しい、孤獨な生活を話さうとした。教授は初め日本の學生に強いイルージョンを投げかけてゐた。而して彼等と智識上の深い接觸をすると云ふ事に非常な悦びと期待を以つて遙々赴任せられたのであるが、來て見ると言葉の通じない事から生ずる不便や、その他感情の行違ひなどがあつて、此善良な老教授は一時殆んど絶望的孤獨を味はれたそうである。後に教授の口からその事を聞いて、我々學生の無遠慮な我儘な仕打が、あの立派な老人にそんな苦痛を與へたかと思ふと、誠にお氣の毒でたまらなかつたと、云ふ事を云ふ積りであつた。――この『我々』とは此場合では明かに『彼等』の意味であり、その話も彼等に對する一種のあてつけであつたのは勿論である。

『併しあの連中が聞いたら怒るだらうな。』

と思ふと、彼はそのまゝ話しつゞけるのが氣味が惡くなつた。今日の出來事以來、彼自身の運命はすべて彼等の手に握られてしまつたかのやうに、彼は彼等が怖ろしくてたまらなかつたのである。

『おれが斯んな苦しいはめに陷つたのも、本統を云ふとS教授のせゐだ。』――

この考へ方は、餘り我儘過ぎたけれども、彼の苦しい心持にはそれが一番安易な遁げ路であつた。而して何でもよいから彼を大學教授に仕立て上げようとしたのは彼自身ではなく、S教授であるとして彼は今では却つてそれを恨まうとさへした。

『おれは地方の高等學校の英語の先生になつてゐた方がたしかに氣樂だつたのだ。』

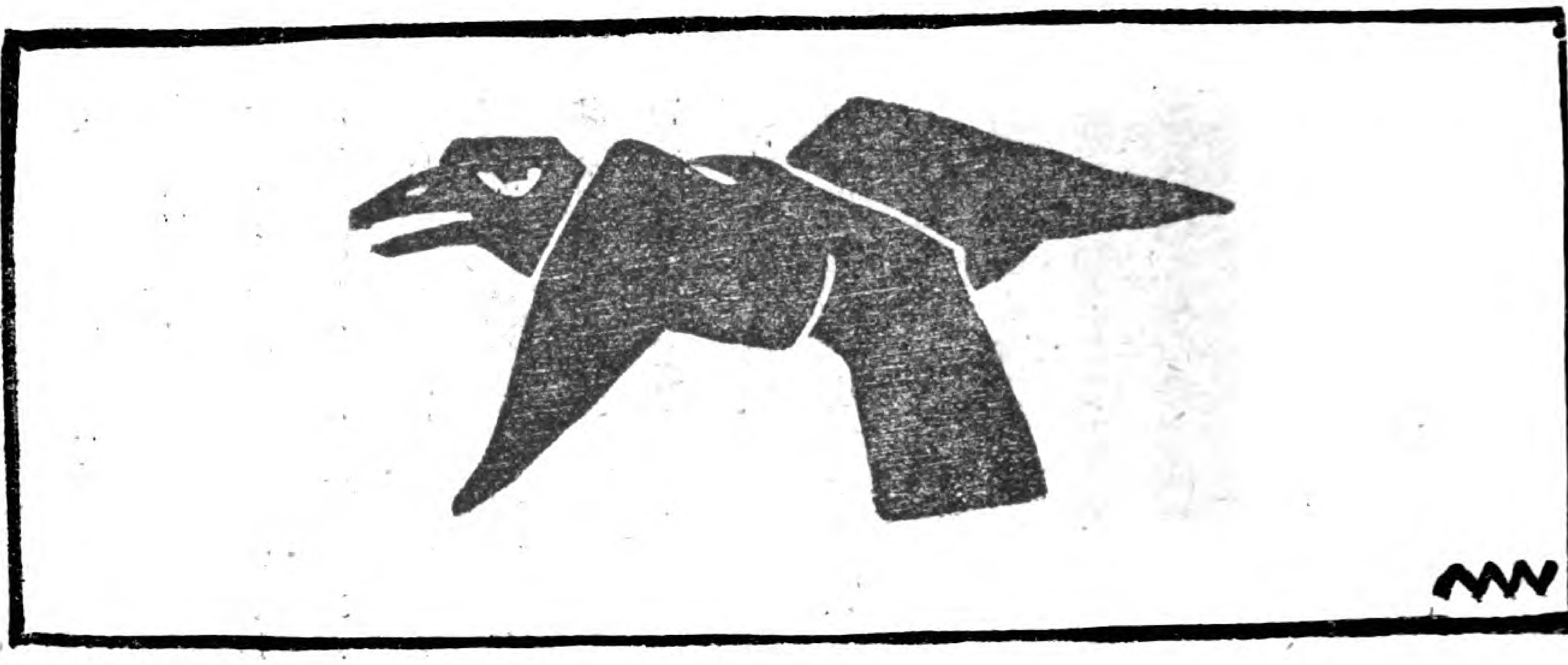
それにたつた一人後に取り殘されて、毎日不當な腦力を消耗した上に、絶えずびく〱して暮らさなければならない自分こそ、如何にも割の惡い、可哀想なものに感じられて來た。めちやくちやに情けなく、みじめで、悲しい。彼はたつた一日でもよい、その重荷を其處へ投げ出して、子供のやうに泣いて見度い氣がした。實際涙が出た。彼は女のやうにすゝりあげた。が、次の瞬間には彼の狡猾が機敏に働いた。その極端にエゴイスチツクな涙を、善良な故人のために流したものとして假裝する事を忘れなかつたのである。斯うして彼の話の三分の二から以後は、その涙と重い溜息でしどろもどろにされた。而してそれが又一座に深い感動を與へた。

翌日の新聞紙はS教授の銅像除幕式の記事を掲げて、助教授Bの亡くなつた恩師に對する稀れなる深い愛情に就いて書き立てないものはなかつた。彼の人格と才能は一層誇張されてあつた。Bはそれを寢床の中で腹這ひになりながら讀んだ。而して滿足さうに讀んでしまふと、布團から脫け出して、大きな欠呻を一つした。彼の勇氣はまたすつかり恢復されたのである。

彼は今夜仲介者の家で初て出逢ふ筈になつてゐる子爵令孃の事を思ひ浮べた。

『今一つ、これを旨くやらなくちやならない。』

（完）



密室の妄想

正宗白鳥

（一）

「こんなに暑いのに戸を締めて置くといふことがあるものか」

貰ひ物の蟲つ喰ひ梨に小刀を添へて二階へ持つて來た母親は、ムツと顏を襲つた溫氣に眉を顰めて、折角鎖された雨戸を慌たゞしく繰開けた。すると、眞暗な沖の方から靜かに吹寄せる汐風に、机の上のランプの火影がチラ〳〵しだした。机の前に坐つてゐた彌一は、母親が階子段を下りるのを待つて、ランプの風避けに障子を引寄せた。そして、小刀を執つて梨の皮を剝きだしたが、涼しい風が汗ばんだ頰に觸れるのを快く感じながらも、暗澹たる戸外の眺めは彼れの目にはあまり快く映らなかつた。二三の漁火の點々と闇の中にゆらめいてゐるばかりで、今夜は星の光さへ見えなかつた。

彼れは汁氣の乏しい梨をしやぶつて、その核子を闇を目掛けて投げつけた。何かに當つてコツ、と音がした。二つ目三つ目の梨の喰ひ殼をも投げつけたが、同じやうに物に當つて音を立てるのが氣持よく思はれた。怖い物憎い物厭な物、あるひは汚い物か何かを力一杯たゝきつけたやうな氣持がした。

蚊遣線香の煙が薄らぐにつれて、露はに出してゐる胸や手足や首筋に、喙の鋭い藪蚊が集つて來た。彌一は澁團扇で荒々しく煽立てながら再び雨戸を鎖したが、最早線

香は燃さないで、部屋の片隅に丸めてあつた重たい木綿蚊帳を釣つて、その中へ入つた。……いくら喧しく藪蚊が唸つてゐても、蚊帳の中にゐさへすれば些とも恐るゝところのないやうに、家の周圍を闇が取捲いてゐても、障子を締め雨戸を堅く鎖してゐれば安心して眠られさうであつた。ことに階下には、母も居るし父も居るし、筋骨の逞ましい作男も居るのだから、尚更心丈夫な筈であつた。

彼れは寢衣の代りに胸當てを着けて腹卷を締めて、澁團扇でをり〳〵風を呼びながら、薄つぺらな蒲團の上に細い身體を横たへてゐた。

納涼臺へは今夜は近所の者が寄つて來ないのか、人の聲はしないで、たゞ父親の煙管の音のみが其方から聞えて來た。その煙管の音は彌一の心にある力を與へた。いくら恐ろしい夢の中へ陷つても、その煙管の音は自分を呼醒まして呉れさうに思はれてゐた。……やがて、釣瓶の手繰られる音がして、父親が冷たい砂糖水を飲まうとしてゐることが夢心地で思出されてゐたが、

「彌一つあん」と、ふと雨戸の外から呼掛けられたので、彼れは目を見開いて頭を持上げた。化物でも幽靈でもない。聲の主はちやんと分つてゐるのであつたが、分つてゐるために却つていやな氣持がした。隣家の六郎の奴が例のやうに梅の樹傳ひに此方の屋根へ上つて、手摺の側へ來てゐるのである。碌なことを云ふ男ではないのだから、相手にしないで知らん顏をしてゐようと、彌一は暫く息を殺してゐたが、二度三度續けざまに呼立てられた上に、雨戸をも荒つぽく叩かれだしたので、何時までも打遣つとく譯に行かなくなつて、ふと蚊帳から匍出て一枚だけ雨戸を開けて、案の通り、低い手摺に寄つてゐる六郎の影を見詰めた。

「もう寢とつたのか、まだ勉強しとると思うて居つたのに」と、六郎は手摺を跨いで無遠慮に疊の上に下りて來た。

「暗いのに屋根を傳うても危うないのか」

「危いもんか。目を瞑つとつてもこんな屋根くらいは歩けらあ。君に屋根が歩けりや、これから僕の所へ行くとえゝがなあ。一つ面白い話があるんぢやから」

「話なら此處でゞも出來るぢやないか」

彌一は燈火を點けないで、机のほとりに六郎と並んで坐つた。相手の大きな目や厚い唇が薄ぼんやりと闇の中にも見えだした。

「今日お父さんの留守に土藏の中を捜して古い本や古い脇差を持出してあるんぢやから、是非君に見せたいよ。脇差は錆びとろて切れさうぢやないが、その中誰れにも見つけられんやうな時に、君とこの井戸端に置いてある大きな砥石で磨がして貰はふと思ふとる。磨いだらあれでも西瓜ぐらゐ切れんことはあるまい」

「刀なんぞ僕は見いでもえゝが、古い本といふのはどんな本なのか」

「どんな本なのか、僕とこへ來て見りやえゝ。君に見せようと思うて出してあるんぢやから。……今直ぐにでも行く氣はないか。屋根を歩くのが怖けりや、下から廻つて行つてもえゝ」六郎はさう云ひながらひよいと立つて手摺に凭れて、

「君とこにやこの頃蚊が多いぢやないか。これぢや敵はん。僕の家ぢや宵から燻べ通しとるからこんなにひどくはないよ」と云つて足をパタ〳〵させた。

「僕は夏の間蚊の居らん涼しい土地へ行つとりたいと思うとるけれど、一人で知らん土地へは行けんから仕樣がないよ」

「僕が一緒に行つてもえゝ。お父さんも君と一緒になら、僕を何處へでも行かせるぜ。……行かうぢやないか、面白さうな土地を考へ出して」

「だけど、暑い時に五里も十里も歩くのは大儀だからな」

彌一は小學卒業後しげ〳〵會つてゐる唯一人の親友である筈の六郎にも、此方から心置きなく交ることは稀だつたが、今夜のやうに不意に襲はれて心を亂されるのを殊に好まなかつたので、返事をするのも大儀さうにしてゐた。六郎は相手に構はずに、木下の新公と西瓜泥棒に出掛ける約束のしてあることなどを得意げに話して、「君は仲間にやなるまいが、取つて來たら合圖をするから、さうしたら僕のとこへ食べに來い」と云つてゐたが、間もなく、蚊責めに堪へか

ねて、再び手摺を跨いで屋根の上へ出て行つた。そして、彌一の擦つて出したマッチの火なんかは有難いとも思はないで、足許輕く梅の樹の方へ急いだ。梅の樹へ飛付いた音を聞いて、彌一は安心して雨戸を締めて蚊帳の中へ入つたが、一度妨げられた睡りは容易に彼の上に落ちて來なかつた。

階下では家の者の寢仕度の物音がしてゐたが、彼れの敏い耳は庭の木の葉の囁きをも、作男の寢返りする肌擦れの音をも、兩親の私語をも聞洩らさないほどに冴えてゐた。

彌一は今年は直ぐ前の靜かな海に浸るのをさへ躊躇してゐた。戸外へ踏出すことは極めて稀であつた。そして、日中にでもよく障子を締切つて、何代もの時代のついた天神机の前に坐つてゐたり、埃つぽい薄縁の上に寢そべつたりしてゐた。「えらい勉強家ぢや」と、兩親にも信ぜられ、隣近所の人達の噂にも上つてゐたが、彼れの蟄居は必しも讀書三昧のためばかりではなかつた。父親をせびつて農家に不似合な書物を頻りに買つては床の間に積重ねて置いて、手當り次第に讀耽ることもあつたが、傍の者の思つてゐるほど單純無邪氣に讀書を樂んでゐるのではなかつた。……二三年前までは、彼れも海邊に生れた男の子の一人として、夏が來ると、日にいく度となく海に浸る癖がひとりでについてゐて、か弱くとも二町や三町は苦もなく泳ぎ通せるほどになつてゐたのだつたが、去年の土用中のある日のある出來事から、彼れは恐水病のやうに海を恐れ海を嫌ひだした。他の時節には左程でもなかつが、梅雨が霽れて、村の子供等が垢染みた汚い衣服を脱棄てゝ、裸で海に親しむのを見るやうになつてから、その靜かな海も底に魔を潜ませてゐる恐ろしい深淵のやうに思はれだした。

去年のやうな布濱からの游泳團體が來てゐないことはよく知つてゐながら、かの目付の嶮しい腕力の強い文太郎といふ男が、微風に動き烈日にきらめいてゐる水面の何處かに顏を出してゐるやうに思はれてならなかつた。此方から些しも手向つたのではなかつたのに、ふとした過失を根にもつて怒り出した文太郎のために首筋を鷲摑みにされて、汐水の中へグイ〳〵と突込まれて、鹹い水をしたゝか飲まされて、半死半生の目に會はされたことが、その當座に讓らないほど

に鮮明に思浮べられるのであつた。思出に伴ふ恐怖の感じは、去年のその當座よりもこの夏の方がむしろ烈しかつた。

「貴様が水脹れになつて死んだつて誰れの所爲だか分りやせん」と、次太郎は云つたが、「性根が入つたらこれで泳へてやらう」と呟いて、やがて仲間の群つてゐる遠くの方へ泳いで行つた。彌一は夢中でやうやく濱まで泳ぎ着いて、暫らく人心地もなく石ころの上に寢ころんでゐた。青い顔して、二三日は飯もろくに食べられなかつたので、親達に怪まれていろ／＼と訊かれたが、母にも父にも友達にも本當の理由を明らさまには語らなかつた。明らさまに云へば自分の卑怯を知られることになるのが厭であつた。

「泳ぎは僕の身體の害になるから、これから決して海へは入らんことにするのぢや」と、六郎が屢々誘ひかけるのをも斷然として斥けた。

「だつて、君は此間までたび／＼海水浴の効能を説明しとつたぢやないか」

「そんなことはどうでもえゝ。僕は今は海を見ても逆吐きさうになるんぢや。海の無い土地へ行きたいよ」

彌一は當分は海を見ると、腹にまだ滯つてゐるらしい鹹い水が齒莖からしみ出しさうな氣持を覺えた。あの時に、も一度水の中へ突込まれて息が切れてゐたなら、自分は今かうして生きちやゐないのだが、さうしたら、何處でどうなつてゐるであらうと、折に觸れて考へられてゐた。「貴様が死んだつて誰れの所爲だか分りやせん」と、次太郎が云つてゐた通り、村の人々には泳ぎ疲れの溺死か、あるひは河童にひかれかと見做されたのに違ひないと思ふにつけて、他の死人の死様にさま／＼な疑ひが寄せられた。

この二三年は、村に一人の溺死者もなかつたが、以前をり／＼水泳中に子供の死んだことは、彌一もよく世間話に聽いてゐた。その中の一人の顔は彼れもよく知つてゐた。それ等の溺死者はたゞ手足が利かなくなつて死んだのであらうか。……彼れの疑ひは、溺死者の上ばかりではない。疊の上で死んだ人の身にまで近寄つて行つた。

「先日頓死した喜助爺さんだつて、病氣のためだが、誰れかの手で息を止められたのだか分りやせん」と、彼れはかねて顔を知り聲を聞いてゐた死人を一人々々頭の中に呼起して、眞實の死の原因に想像をめぐらしてゐた。新たに人の死ん

だ時を聞くたびに、以前のやうにぼんやり聞流してはゐられなくなつた。……庭から見える山腹に群がつてゐる墓石も、以前のやうにたゞの墓石としては見られなくなつた。

光の強い夏の日にはわけて鮮明に周圍の青葉を際立たせてゐる白い石の群の一つ〳〵が、それ〳〵に暗い秘密を伏せてゐるやうに思はれだした。「貴樣が死んだつて誰れの所爲だが分りやせん」と、憎さげに次太郎の云つた言葉は、あの時の自分の身についてばかりではない、どの死人の上にでも當嵌まりさうな氣がした。

彌一は眠苦しい夜にはひとりでに考へられる癖になつてゐることを、六郎の歸つた後で考へてゐた。晝間は水泳などで騷々しい濱邊の方もひつそりして、時々は眞夜中にも聞えて來る舟唄が今夜は一つも聞えなかつた。犬の聲さへ今夜は何處にもしてゐなかつた。かういふ時にこそ人に知られないでどんな惡事でも行はれさうであつた。空に月は無いし、しかもよく曇つてゐる。

六郎のやうな男が今時分山麓の西瓜畑へ盜みに行つてゐるかも知れない。彼方此方の物置小屋や二階で賭博打どもがどんな諍ひをはじめてゐるかも知れない。……彌一はさういふ他所の事からはじめて、自分や自分の家の上に何時落ちて來るかも知れない危險に思ひを馳せて、自分の描いた妄想に自分で恐れ戰いてゐたが、さうしてゐる間に、汐水を飲まされて以來一年越しに知らず〳〵腹の底で釀されてゐた、不思議な慾望が、闇の中にちらつきだした。

「貴樣が死んだつて誰れの所爲だが分りやせんぞ」と、彌一は自分で次太郎になつたつもりで、誰れ彼れの息の根を止める樣を闇の中に描いた。何時誰れかの手にかゝるか何物の毒氣を受けるかして死なねばならぬのなら、此方からも負けずにやつて見なければ損だと思はれたが、さう思つてゐる時だけは五體に力がついて、頭の中もいくらか活潑になるのであつた。

「六郎は土藏から脇差を持出したと云ふとつた」

彌一はふと六郎の脇差を見たくなつたが、やがて眠入つた彼れの夢の中では、ピカ〳〵光つてゐる脇差が、六郎の手

でさま〲に振廻されてゐた。西瓜がぶち切られたり野良犬が鏖殺しにされたり、あるひは漁夫の身體をした男が後から幹竹割りにされたりしてゐた。そして、顔中血まみれになつてゐながら、六郎の大きな眼がキョロ〲と動いてゐた。
「君も斬つて見い、面白いぜ」と云つてゐるやうに、六郎は脇差を此方へ手渡しゝかけた。

（二）

昨夜の雲は明け方から雨となつて、暑さも俄かに衰へた。締切つた部屋に閉籠つてゐる彌一の身には、雨と冷氣とはどんな靈藥にも優つた利目を見せた。草木が炎天に萎びるやうに、瓦屋根の照返しや、壁や疊や部屋の器物から放つてゐる溫氣に萎びてゐた彼れも、いくらか若い元氣を呼起した。雨祝ひで「仕事を休め」の觸れ聲が通つた。朝餐の箸を擱くと直ぐに、作男は煙管筒を腰に差して遊びに出掛けた。

彌一は緣側に蹲んで、荻の葉陰で穀物のこぼれか小蟲かを啄んでゐる鷄を見てゐたが、彼れの病身らしい横顔を、傍に立つて見てゐた父親は、氣遣はしさうな目をして、身體の加減についていろ〲と訊ねだした。彌一はひそかに父親を手頼りにしてゐながら、日に夜に頭の中に養つてゐる不快な思ひを打明けることは出來なかつたので、いろ〲と訊ねられるのがむしろ煩かつた。

で、父の話を振切つて二階へ上つたが、下を通つてゐる六郎は、塀の外から大きな聲して呼掛けた。雨休みで家に居るから遊びに來いと云ふのであつた。

彌一は六郎の兩親や姉に會つて話を仕掛けられるだけでも何となく好ましくなかつたので、平生なら無論招きに惹かれて出掛ける氣にはなれないのだが、今日は涼しい雨の力によつてか、珍らしく隣の家の閾を跨ぐ氣になつた。で、傘も持たないで驅出して小庭から隣の家へ入ると、丁度幸ひに他の人達は奥の方へ行つてゐて、六郎が魚を買つて歸つて來たところであつた。家の者に見られない間にと、彌一は急いで六郎の居間へ上つて行つた。そこは物置同様の汚い狹い二階の一室で、疊は敷いてあつても疊の形をしてゐないほどに破れてゐた。窓を開けると、屋根から直ぐに飛付けるやうに苔のついた老梅が枝を伸してゐた。

彌一は六郎が上つて來るまでに、部屋の中に拋出されてある黴臭い書物を取上げて見たが、判じ物のやうな分らない字を連ねた浄瑠璃本や、薄氣味の悪い繪の入つてゐる草双紙などで、彼れの讀みたいと思ふ書物は一冊もなかつた。奇怪不思議な相好をしてゐる男女の繪は見てゐると、彼れの神經には堪へがたい重荷となつた。異様に髮を結つた頭の長い女の腰を捩つて立つてゐる姿や、毛脛を出してゐる男のいやに鼻の高い面つきなど、彼れの目には滑稽として映らないで、妖怪變化も同様に思はれた。かういふ男女の住んでゐる世界は彌一の空想裡にはたゞ暗澹として澱んだ。そして六郎の祖父で和歌や發句を作つてゐたといはれてゐる昔の人が、こんな不思議な書物を京大阪から買つて來て讀んでゐたのかと、顔は少しも覺えてゐないが、辭世の和歌を横に彫込んだ石碑がこの村では珍らしいので、幼い時からよく心に留つてゐるその祖父のことを追想してゐた。すると、記憶してゐない祖父の顔が、草双紙に出てゐる、盗賊だか武士だか分らない、いやに鼻の高い眉毛のもじや〳〵してゐる男の顔と同一のやうになりだした。

彌一は表の破れた凹んだ疊の上に仰向けに寢て、表紙の取れて蟲の喰つてゐる浄瑠璃本を出鱈目に開けて、一字々々覺束なく判じながら音讀してゐた。

「……柏屋とほれば二階からちよいと招く。のつこれなんとしよ」

三度も四度も繰返して、やうやく字柄が分つてから、一氣に讀下すと、何となく可笑しくなつたので、クス〳〵獨笑ひをしてゐると、そこへ六郎がドシ〳〵梯子段を上つて來た。

「僕が烏賊の甲を取つて自分で煮付けといた。澤山有るから、君の午餐の菜に持つて行け。海から上げたばかりぢやから旨いぜ」と、六郎は年齡相應の晴々した顔して云つて、彌一の側へ寢そべつて、

「面白い本が有るかい」

「面白いやうだけれど、僕はかういふ本は讀みたうない。君の祖父さんは皆んな讀んだのか知らん。」

「そりや讀んで居らあ」と、六郎は祖先を誇るやうな氣で云つた。

二人は暫くめい〳〵の祖父だの祖母だの曾祖父だのゝ事を互ひに語合つてゐたが、さうしてゐると、彌一は久振りに

この友達に對する親しみを覺えた。今日は粗黎な小煩い男として厭ふ氣になれなかつた。思つてゐることを何でも打明けたいやうになつた。

樋を流落ちてゐる雨水の音は次第に强くなつてゐた。

「脇差を見せようか」と、六郎は暫くしてふと思出したやうに座を立つて、釣棚から取卸して彌一の前に置いた。見たところ蟲喰ひの埃まみれの古刀に過ぎなかつた。

でも、彌一はそれを手に取つて、不思議な力を有つてゐる者を手にしてゐるやうな氣持で胸をどきつかせながら見詰めてゐた。色の褪せた茶色の下緒、すかしのある鍔、柄の鮫白などが、物は駄物であつても、皆神秘不可思議な感じを彼れの心に與へた。ところ〲壞れかゝつたり蟲の喰つたりしてゐる黑鞘をソロリ〲と脫いて見ると、刀は刀に違ひなかつたが、赤錆びに錆びてゐて、昨夜の夢の中で六郎の振廻してゐたやうなピカ〲光つてゐる刀ではなかつた。

「これでも磨いたらよう斬れるぜ。祖父さんが差しとつたんだから、惡い刀ぢやないのに極つとる」と、六郎は刀を持つて、唾液で錆を研きなどした。

「海の中へ落ちて死ぬるのと、刀で斬られて死ぬるのと、どちらがつらいだらうか」と、彌一は、赤錆の間にところ〲刀らしい双金を見せてゐる刀身に目をつけながら訊ねた。

「そりや刀で斬られる方が苦しいのに極つてらあ。水の中へ沈むくらゐ何でもありやせん」

「だつて、自分でさういふ目に會つたことがなけりや分りやすまい」と、彌一は稍々興奮して云つて、「死ぬる時分にやどういふ風になつて死ぬるんだらうかなあ」と、六郎に話すよりもむしろ刀に向つて感慨を洩した。

「僕はまだ死んだ人間を見たことがない。祖父さんの死んだ時のこともよう覺えとらんから」と、六郎は何の氣なしに相手の話に調子を合せてゐた。

「祖父さんは何病に罹つて死んだのだらうか」

「卒中で死んだんぢやさうな。直ぐに息が切れたんだつて」

「死ぬる時は痛くも痒くもなかつたんだらうか」

死といふ言葉が頻りに二人の口から出てゐた。が、どちらも直接に死人の姿を見たことはなかつたので、生きた人間に比べて、目や鼻や顔形がどう違ふかさへ殆んど分らなかつた。

「猫や犬の死んだのなら何度も見て居るけれど。……臭うて汚いぜ」と六郎は屡々物好きにそれ等の死骸をいぢりまはしたことを思出した。

「犬でも猫でも人間でも、死んだ後では同じやうになるんだらうか。猫の死骸なら僕だつて見て知つとるが、あんないやらしい氣味の悪い者はないぜ」

「汚うても氣味の悪いことはないがな。僕はこの脇差を磨いたら、西瓜を切るだけぢや詰らんから、猫を一匹試しに斬つて見ようか。川田屋の三毛は先日僕が釣つた來た沙魚を食やあがつたから、その罰に尻尾でも斬つてやらうか」

「何を斬つたつてコツソリ上手にやりや分りやせんのだ。殺された猫が化けて出りやすまいし」

「さうだなあ。……これからでも磨いで來ようか」

六郎は二尺には足らない脇差を襤褸切れで包んで座を立つた。そして、彌一と共に彌一の家へ行つた。石段の下の井戸端には幸ひに誰れもゐなかつた。六郎は鎌だの鉈だのを磨ぐための砥石で矢鱈に錆刀を磨いでゐたが、はか／＼しく光は出なかつた。試すまでもなく刄先の鈍いことは彼等の目にもよく知られた。

「君の祖父さんの大切な刀がこんなに鈍刀ぢや仕様がないな。僕等の家は先祖からの土百姓で、身内に一人も武士がないんだから、まんぞくな刀は一本も無いんぢや」

彌一にさう云はれると、「なに、これだつて斬れんことがあるものか」と、六郎は負け惜みを云つて、手に力を籠めて脇差をリユウ／＼と振廻した。たとへ錆びてゐても刄が曲つてゐても、その逞ましい腕拳と面魂とで大抵の者が斷ち切れさうに彌一には思はれた。で、危かしいので後へ退いてゐたが、六郎は刀を鞘へ収めて腰に差して、武士氣取りで暫く井戸のほとりを歩いてゐた。

「何呆な眞似をせいで早う戻らんか。先つきから捜しとつたのに」と、知らぬ間に石段の上に立つてゐた姉に叱られたので、脇差は襤褸に包んで彌一に預けて置いて、急いで家へ歸つた。

（三）

炎天つゞきで罅隙の出來てゐた地びたも涼しげに潤つて、亂雜に茂つてゐる庭の小草もいき〱して來た。作男も下女も雨休みで遊びに出てゐるし、父親は連日の草臥休めに假睡をしてゐるし、母親は物置部屋で片付け物をしてゐるし、彌一は誰れにも累はされないで、預り物の脇差を持つて緣側に蹲んで、降頻る雨を眺めてゐたが、人を斬殺すための道具として知つてゐる本物の刀を生れてはじめて手に持つてゐるといふことが、刻々に彼れの心を尖らせた。

猫でも犬でも何でもいゝ、生物を自分の手で斬つて見たいやうな、また事もなく斬れさうな氣がした。殺される時には生物はどんな風になるのやら、死んだ後ではどうなるのやら、自分で手を下して、その生物の息の根を斷つたなら、まざ〱と見極められさうに思はれた。……目が見えなくなつて、口が利けなくなつて、手も足も動かなくなつて、つひに死骸になつてしまふ順序を、怖いもの見たさに見て置きたかつた。

そんなことを思ひながら、彌一は空間を見据ゑてゐたが、暫くの間生物の一つも彼の目には映らなかつた。何時の間にか鷄も姿を隱してゐた。ふと後を見ると、父親が毛脛を投出して口を開けて、正體なく眠つてゐたが、喉でも胸でも刄物で突かれゝば直ぐに突かれさうに、何の防禦もなく開かれてゐた。彼れが不斷手賴りにしてゐる只つた一人の父親も、今の彼れの目には脆い物のやうに其處に横たはつてゐるのだつた。

何處から飛んで來たのか、土藏の白壁に一匹の蟬が留つて、雨の音にも氣壓されずにジャン〱と鳴きだした。あたりは生物の聲が止絶えて、世は雨の音ばかりになつてゐたところへ、俄かに喧しい聲を立てたので、彌一はその蟬の身には例にました强い力が滿溢れてゐるやうに感じた。小さな身體に似合はず、勢ひのいゝのに暫く心を惹れてゐた。……

……すると、以前紙袋などを先に附けた蟬取竿で蟬を取つてゐたことが思出されて、彼れはふと手近かに置かれてあつた物干竿を持つて驅出した。が、蟬は竿で突かれない先に枇杷の葉蔭の方へ逃げてしまつた。

彌一が鳴く聲を心當てに、腐つた實のまだところ〳〵に殘つてゐる枇杷の樹を突廻してゐるのを、父親は午睡の夢のまだ消切らない目を開けて見やつてゐた。青い顏して一室に閉籠つてばかりゐた息子が、活潑な惡戲などするやうになつたのを喜んでゐた。

「着物がずぶ濡れになるぢやないか」と、父親に聲を掛けられると、彌一は今まで人に見られてゐたのを含羞んだやうに、慌てゝ家の中へ駈戻つて二階へ上つた。

讀みさしの世界百傑傳中のコロンブスの傳記を讀みつゞけるつもりで、腹這ひになつて書物を開いたが、さうしてゐると、小さな堅苦しい文字の間に、先つき六郎の部屋で讀んだ謎のやうな文句がぬらくらとちらついた。「柏屋とほれば二階からちよいと招く……」といふ語呂のいゝ文句が自から口に出た。そして、あの淨瑠本を讀通したなら、自分が買集めてゐる書物の中では見つからない面白いことがあるんぢやないかと、文字面の不思議から內部の意味の不思議さが頻りに連想された。

「彌一つあん」と、出拔けに屋根の上で例の聲がした。六郎は濡れ瓦の上をも身輕に傳つて、手摺を越えて部屋の中へ入つて來たが、烏賊の煑付の入つた丼を彌一に與へて、襤褸包みの脇差を受取ると、「これから東川まで使に行かされるんだから、戻つてからまた來るぜ」と云つて、直ぐに屋根へ出た。

彌一は百傑傳に頭を當てゝ知らず〳〵睡眠に落ちた。久振りの凉氣に、父も母も彼れも連日の暑さ疲れを回復しようとするやうに、一家擧つて睡眠に落ちて午餐時の過ぎたのをも忘れてゐた。下女や作男も容易に歸つて來ないで、靜かな家の中を蠅のみが臭氣を求めて飛迷つてゐた。

餘程經つてから、彌一は疊の跟のついた腕を小摩り〳〵目を開けたが、確かに階下の道で悲しげな叫び聲がしてゐたのに違ひないと思はれた。夢ぢやない、本當の人間の聲に違ひないと獨極めにして耳を傾けてゐたが、表ではそれつきり聲がしなかつた。今日は何處の家でも雨休みをして、草臥なほしの午睡をしてゐるのか、平生のやうな騷々しい物音は聞えて來なかつた。

やがて竈の烟が二階をも燻らせて、食事を知らせる母親の聲も聞えて來たので、彌一は貰ひ物の烏賊の煮付を持つて下りて行つたが、父親と向合つて話してゐる作男の酒氣を帶びた顔色が、先づ彼れに厭な思ひをさせた。話の樣子も變つた譯がありさうで、父の眉根の間に高い皺が盛上つてゐた。

彌一は赤い箱膳に向つて箸を執りながら、二人の話に耳を留めてゐたが、ある女がある男をどうしたかうしたと云つてゐるので、彼れの耳には聞きづらかつた。をり／＼作男の口に出す猥雜の話を無氣味に感じてゐた彼れは、今日うに父親を前に置いて、酒臭い息を吐きながら、得意げに男と女との關係を話すのは聞いてゐられなかつた。折角貰つのやた烏賊の煮付にも女臭い臭ひがうつゝて來たやうで、食べる者の味さへまづくなつた。

で、彼れはさつさと食事を濟まして二階へ上つて、最早雨が小降りになつて空の明るくなりかけたのを見てゐた。雨が霽れかけると、海の彼方此方に、水の冷たいくらゐには怯ぢない黒い身體が幾つも浮んで、頻りに水煙を立てだした。小舟や岸の上から水の中へ飛込むらしい音も聞えた。が、かうした海の賑はひは、人影の一つも見えなかつた時よりも、却つて無氣味な印象を彼れの心に與へた。自分も游泳の仲間に加はつて自在に遊び戲はれやうといふ少年らしい快活な氣持は、當年やうやく十五歲の彌一の心から全く消失せてゐて、密室の妄想にまだしも心安さを覺えてゐるのだつた。

讀苦しいのを辛抱して日暮れまでに讀終つたコロンブスの傳記にあつた新大陸の發見された筋路は一通り會得されて、さま／＼な難苦を凌いで目的地へ達した英雄の事業には、流石に少年らしい昂奮を覺えないでもなかつたが、自分でさういふ眞似が出來さうではないのだから詰らなかつた。ナポレヲンでもシーザーでも、一二ケ月以來讀んでゐる傳記中の英雄が、國を取つたり大戰爭に勝つたり、名言といはれることを云つたり、人民に尊敬されたりしてゐても、彌一自身に取つては、さういふ英雄どもは、自分達が一生の中に眞似の出來ない、種類の異つた人間であるので、崇拜する氣にもなれなかつた。

だけれど、傳記の一冊々々に仰山さうに出てるえらい人々も、今から見ると死んでゐるんぢやないかと、山腹の墓地の底にゐる村の人々に比べられた。

で、今日の彼れの妄想も何時の通りに、さまぐ〵な人間のさまぐ〵な死樣について行詰つた。涼しい雨や珍らしい安らかな眠りのお蔭で、何時もほどに彼れの妄想の影が暗くはならず、白晝の炎天に障子を開放すのをさへ憚るほどにはならなかつたが、何時自分を襲つて來るかも知れない死の姿を忘れることは出來なかつた。

　喜助爺さんも死に、六郎の祖父も死に、ナポレヲンも死に、あの男もこの男も死んだやうに、自分も父母も死ぬるのだと思ふと、かうぢつとしてはゐられなかつた。……ナポレヲンやコロンブスなどの死ぬ時の痛さ痒さは書物に書かれてもゐないし想像も出來ないけれど、次太郎に首根つ子を攫かまへられて海の中へ突込まれた時の苦しさ術なさは、萬人の死際の惱みを知らせるためのやうに、彌一の腦に浮んだ。

　夕餐後には例の通りに蚊遣線香を燻らせて、早くから雨戸を鎖してゐたが、午睡をしたゝめに、平生のやうな早寢は出來なかつた。昨夕と違つて納涼臺が賑はつて、作男が他家で貰つて來て晝間から井戸へ沈めてゐた西瓜が切られたりしてゐても、彌一は作男の淫らな口調のまじつた話を嫌つて、其處へ下りては行かなかつたが、しかし、其處から聞えて來る高い聲には自から心が惹かれて行つて、獨座の妄想がいくらか慰められてゐた。

「彌一つあん」と呼掛ける例の聲がふとまた雨戸の外から聞えたが、聲は例よりも低く潛められてゐた。

「西瓜を取つて來たのか」

　彌一は六郎がかねて話してゐたやうに西瓜泥棒をして、得物の裾分けに來たことゝ思ひながら雨戸を開けたが、六郎は手ぶらで入つて來て、

「川田屋の三毛を捕まへられなんだから、慶公の家の猫をやつゝけた。斬れるぜ」と、自慢げに云つた。

「死骸は何處にあるんぢや」

「溝の中へ突込んどいた。嘘と思ふんなら明日でも見せてやらうか。後から猫の頭に袋を被せて縛つといたから、斬らうと突かうと好きなやうになつたのぢや。僕の手に些つと爪を立てられたけれど、嚙みつかれも掻きむしられもせず、猫

の奴はウン〳〵唸りながら往生しやあがつた」

六郎の腕に血汐の染んでゐるのはランプの薄明りでもよく見えたので、それを猫の血だと思ふと、彌一はゾッとして脳を轟かしたが、死んだばかりの猫の形相を見たくないでもなかつた。

「明日まで待たずに、今夜これから行つて見ようか。」

「暗うて見えるもんか」

六郎は得意で慘殺の有様を物語つた。慶太の家の裏口で魚の骨をしやぶつてゐるところを掴へて、茄子や胡瓜の生つてゐる菜園へ連れて行つて、息の根を止めたのだが、「溝の中の死骸を見つけたら、慶太の家の者が怒るだらうな」と六郎もそれはいくらか氣遣つてゐた。

「だけど、君が默つてゐさへすりや、誰れの所爲だか分りやすまい。猫でなうて人間を殺したにしても、上手にやりや分りやせんのだぜ。……脇差の血を拭いて、人に見つけられん所に仕舞つて置いて、知らん顔しとれよ。君の着物には血の一雫も附いて居らんのだらう」年下の彌一が却つて兄分らしく注意を加へた。

「刀の血は溝で洗らうてよう拭いといた」と云つて六郎は立上つて、裾の短い浴衣の前後を燈火に照らしながら、「血は付いとらんだらう。よう見て呉れ」と、自分でも見廻した。

「それならえゝ」彌一はランプの心を捻上げて、相手の浴衣を微細に檢査してから云つた。

「猫があれだけに斬れるんだから、人間ならもつと旨い工合に斬れるに極つてらあ」

「さうかなあ」

彌一は不穩な思ひに驅られがらも口へは出さなかつた。

「僕はもう生物を殺したりなぞせんから、猫のことは誰れにも云はんやうして呉れ。賴むぜ」

「僕がそれを云ふものか。云へと云ふたつて云やあせん」と、彌一は六郎が行きかけるのを見て、「君は祖父さんの本を今直ぐに持つて來て貸して呉れんか」と云ふと、

「よし、直ぐ持つて來てやらう」と、六郎は無雜作に自分の部屋へ行つて、一抱への淨瑠璃本を持つて直ぐに引返して、手摺から抛り込んだ。

彌一は後で雨戸を鎖して、蚊遣線香の煙に顔を浸しながら、昨夕偶然目に觸れたくだりを捜して、其續きを讀みつゞけた。

「……念ごろな宿では斷り立出店へ泊りにいくよさは、女夫所帶をする心、同じ寢るのも身に付樣でうれしい。……私一人なら死んでなりと仕廻ふが、こなさん惡ふいはするが口惜い悲しい……」

考へ〳〵讀んで見ると、文句の意味も朧ろに理解されたが、その意味よりも、唄のやうな口調が、獨りで口ずさんでゐると、何とも云へずいゝ氣持であつた。一人の女が一人の男と一緒に死ぬるの死なぬの、死ぬるのが幸福だの幸福でないのと云つてゐるのは、平生讀馴れてゐる書物にはこれまでに見當らなかつた不可思議なことで、第一、「死にたい〳〵」と、人間が本氣でしかも樂しさうに云つてゐるのが、彌一には生れて以來聞いたことのない奇怪至極な聲であつた。「和女をのけて此世界に女子が有ると思ふにこそ……」といふ文句のところで、彌一は村の中での顔を見知つてゐる若い女の顔を思浮べて、此處でも奇怪至極に感じた。

一卷をやうやく讀通したころには、階下でも寢鎭まつて、彌一自身も眠氣さして、書物を片付ける暇もなく蚊帳の中へ入つたが、六郎の猫殺しの一件と、淨瑠璃本の文句とが、一緒こさに夢を襲つて來たので、彼れは眞夜中にいく度魘されたか知れなかつた。

「僕が試し斬りのことを云うて六郎を煽てなんだら、六郎も猫を殺したりなんぞせなんだであらうのに」と、彼れは今夜の殺生を半ば自分の所爲として、闇の中に、見覺えのあるその猫の死體を思出して怖がつたりなどしてゐたが、自分も生物を一大刀斬裂いて見たいと思ふ慾念は六郎の所行によつて一層唆かされてゐた。……死んだらどうなるか。急所を斬られて息の絶える時に、人間の魂といふ者は、何處へ飛んで逃げるか、見られるものなら見屆けたかつた。

屋根の何處かで鳴いてゐる猫の聲は、殺された奴の怨みの聲のやうにも思はれて凄かつた。

（四）

翌日彌一は、猫殺しの噂さが耳に入るのを待設けてゐたが、終日つひに一言も聞かれなかつた。そして六郎は朝早くから田圃へ手助けに行つてゐるので、日暮れ頃まで一度も顏を見せなかつた。

平生はむしろ煩がつてゐた六郎を待設けながら、彌一は夜になると、屋根の方へ耳を留めてゐたが、その夜は遲くまでつひに六郎の足音はしなかつた。で、何だか物足らなくて、おづ〳〵屋根を傳つて梅の樹の側まで寄つて見た。二階には燈火が點いてゐないで、階下でも雨戸が鎖されてゐて、皆んな寢入つてゐるらしかつた。

彌一は諦めて、再び格子に縋りつきながら、危かしい足取りで自分の居室へ戻つて來て、例の重たい木綿蚊帳を釣つてゐたが、すると、

「彌一つあん」と、コッソリ呼掛ける聲がした。例の聲とは察しながら、今夜は天井裏か疊の下から呼掛けられたやうな氣がして、身體が震へた。返事が直ぐには出來なかつた。

「彌一つあん」と、些つと間を置いて再び呼掛ける聲がした。二度目のは確かに屋根の上での六郎の聲に相違なかつた。

「どうしたのだ。君はもう寢とるのかと思うとつたら、まだ起きとつたのか」と云つて、彌一は今夜は雨戸を開けないで、横窓の格子の側へ顏を寄せた。

「僕は何時の晩だつてさう早う寢りやせんぜ。」と、六郎は格子の側へ寄つて、「君の云うた通り、僕が猫を殺したと思うとるものはないよ。今夜はこれから西瓜を取りに行くつもりだ。あの脇差を持つて。……君がまだ起きとれば、西瓜を此處へ持つて來ようか」

「西瓜なんぞどうでもえゝが、君が誰れにも捉まらいで取つて來られたら、知らせて呉れ。一言でえゝから聲を掛けて呉れ。僕は起きて待つとるから。」

「よし來た。待つとれ」

六郎は彌一の言葉に力を得た。西瓜盜みに一層の熱心を加へて活潑に出掛けた。彌一は蚊帳の中で目を開けて待つてゐたが、心の中では六郎に伴つて山麓の西瓜畝へ出掛けてゐるやうに想像を逞くしてゐた。そして、微細の音をも聞洩

らさないやうにして、時間の經つのを只管待遠しく思つてゐた。捉へられて毆られたり縛られたりしてゐる樣が夢のやうに目の前にちらついたりしてゐた。

「彌一つあん」と呼んだ六郎のせはしげな息が雨戸越しに聞えると、彌一は跳起きて雨戸を開けたが、訊ねるまでもなく、六郎の脊には大きな得物が脊負はれてゐた。脇差を差してゐる彼の不思議な格恰が、かの祖父の遺物の草双紙の繪のやうであつた。

六郎は風呂敷に包んでゐる脊中の西瓜を出して、「旨さうなのを撰つて來たんだ。ここで割らうか」と云つて、外に刄物がないので、錆のついてゐる脇差を拔いて、勢ひよく二つに切つた。血のやうな赤い汁が滴たつた。

二人は冷たい西瓜に顔を埋めて食つてゐたが、平生に增した親密さがお互ひの心に通つて來た。彌一は最早免かれがたい六郎の仲間になつてゐるやうな氣持になつてゐたが、六郎も彌一に智慧をつけられゝば何でも出來さうな氣持になつてゐた。

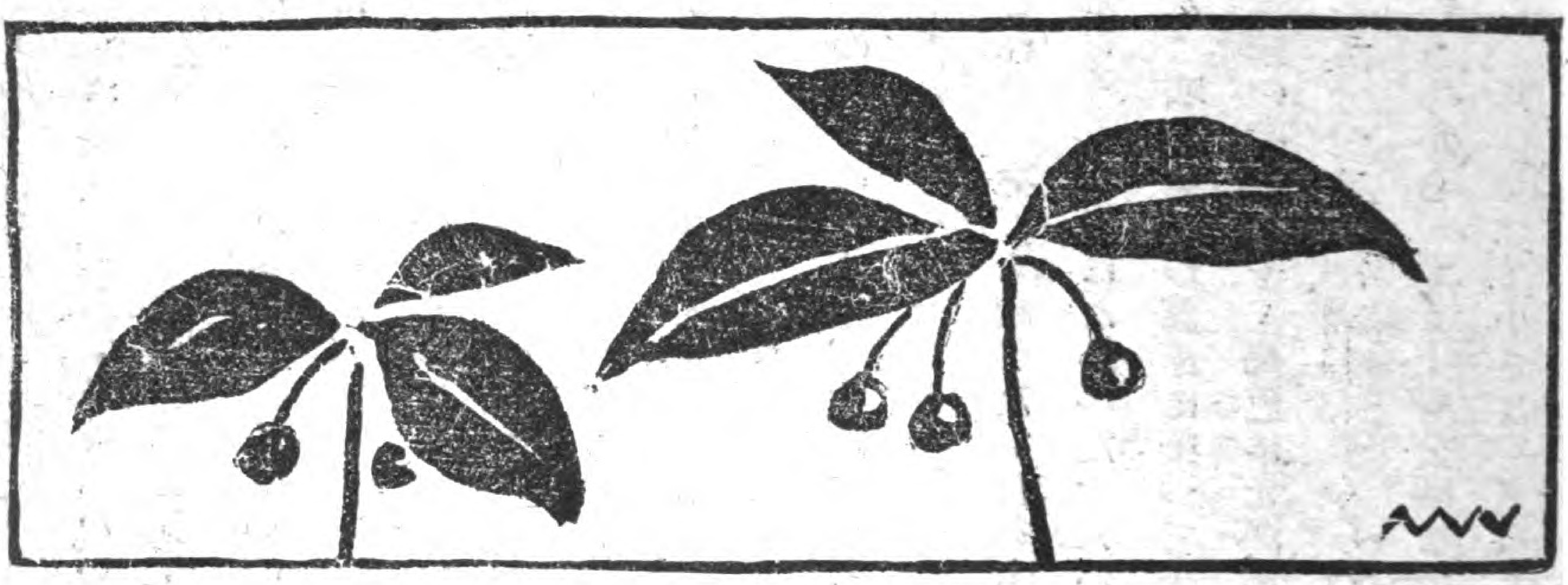
「僕は脇差を頭の所へ置いて寢るから、盜賊が來たつて怖うない。來たら叩切つてやらあ」と、六郎はお調子に乘つて云つた。

「だつて君は眠入つたら朝まで目の醒めんやうな人間ぢやないか。盜賊が來ようが誰れが來ようが分りやすまい」

「ぢや、戸が開いたら直ぐに分るやうに鈴でもつけて置かうか。……僕はこの脇差で人間を斬つて見たいと思ふとるから、盜賊でも入つて來るとえゝにな」

「人を斬るのでも上手にやりや分りやせんぜ」

彌一は自分や兩親なども免れがたい恐ろしい死の樣を、豫じめ他の人の身體の上で見たかつたので、六郎の强い手やかれの祖父の遺物の刀の力によつてでもそれを見たいやうな氣がしだした。



子ころし

里見弴

一

太田の控邸では庭の模樣變えにかゝつた。竹などは入梅うちでなければ動かせないと聞いて、では今からかゝつたら丁度よからうと、Ｋ——園からいつもの佐吉を入れさせたのは、六月にはいつたばかりの頃だつた。雨はその頃に續いて、どうやら今年は照り入梅らしく、期節にはいつてからは、ムシ／＼と降りみ降らずみにもてゝゐた。それで思つたより捗がいつて、幅つたく場所を塞いでゐた、堀り起されたのや新たに入れる大小の庭石も、どこへ持つて行つたかと思はれるほど、そちこちへ然るべく落ちついて了つた。今度は、いかさまお庭然としないやうにと云ふ主人の注文で、籔庭作りと云つた風な、自然に近い木石の布置が日に／＼面白く調つて行つた。もうあと四五日と云ふところまではこんでゐた。

「一服やらう」

發句の宗匠か賣卜者にでも似つかはしい朝鮮髭の、ムヅツとした佐吉がかう聲をかけると、いま植えた楓の根廻りをどう突いてゐたのや、下草ものゝそばでパチ／＼鋏を鳴らしてゐたのが、日影に集つて來て、めい／＼何かしら程よいものを見つけて腰を下ろした。親方に似たと云ふわけでもあるまいが、これもヒドく無口な已太郎は、

少し離れた鉢前の石に腰を据えて、前踞みに兩膝に肘を支つてヂッと地べたを見詰めてゐた。古綿を薄くのしたやうな雲を透して、直射するでもない陽光が、新らしくてそれで濕り氣の去つた土の上にぼんやり落ちてゐた。その、鬱陶しく、陰慘とした寂光と、土の乾き加減とが、已太郎に何か古い記憶を思ひ出させかけてゐた。十か十一くらゐの時分の心持で、不思議に血腥く怪い心持が、ぼんやりと浮んで來るばかりで、それがどう云ふ記憶に絡みついてゐるものだかはハッキリしなかつた。また別に思ひ出さうともしてゐなかつたが。

ふと、瞬がとまつて了つて、焦點がモヤ〳〵と煙のやうにぼやけて行くのが、已太郎には小供からの癖だつたが、十三で死別れた彼の祖母は、その瞳がない目を見る度に「あゝイヤだ。これは不吉な相だ」と、眞ッ白な斬切頭を振りながら、そばに人がゐようとゐまいと、必ず呟かずにはゐなかつたことを覺えてゐる。その頭の振り具合は、明かに氣に入らないと云ふ心持だつたが、それでゐて、ついぞその癖を矯めなほせと云ふ意味のことは口にしなかつた。彼も亦、一度でもよさうと思つたりしたことはなかつた。——丁度、いままた彼の目が瞳がなくなつてゐた。發條のもどけ切つた時計の振子のやうに、次第にけうとくなつて行つて、パタリと動かなくなる瞳と正しい聯絡を保つて、あたまのなかもモヤ〳〵と霞んで行くうちに全く放心して了ふ……灰色の、漠々たる空間に、丸いコロリとしたものが一つ浮んだ。——これは、誰でも瞳がない目をもつた人には、さう珍らしい現象ではない。已太郎もそれで醒まされはしなかつた。何んだらうとも思はなかつた。丸いコロリとしたものが、次第にチヤン〳〵坊主の首になつて來ても、少しも驚かなかつた。咽の切口が眞赤に染つて來ても平氣だつた。それが人形首だと云ふことが何故か分つてゐたから。たゞ辮髮だけ本統の毛髮がやゝ褐色に光澤あせてゐるのが、少し氣持が惡かつた。別に考へたのでもなく、もう彼にはこの幻覺のもとが分つてゐた。——十くらゐの頃に、誰からかパノラマの話を聞くと、見たくてたまらなくなつて、三島神社のそばのうちから一人で上野公園までたどりついたが、もとより一錢の錢もないので、グル〳〵圓い建ものを廻つてゐるうちに、思ひ切つて小さな空氣ぬきの穴から半身もぐり込んだことがある。その時に、つい鼻のさきにころがつてゐたのが、このチヤン〳〵坊主の切首だつたのだ。聲を立てんばかりに驚いて、直ぐ小さな體を引きぬいて了つたのだが、——そして

その後も中にはいつてゆつくり見物したことは一度もないのだが、そこの陰鬱な光線、チヤン／＼の人形首のほかにも朱を入れた溝のある青龍刀や血に染つた黄龍旗などの散らばつてゐた土の色、例へば日向で見る埃のやうに、粉末になつて充滿してゐた音ともつかないもの音、鼬鼠の巣のやうな匂ひ、さう云ふものが己太郎のあたまには深く烙きつけられてゐた。チヤン／＼坊主の切首が、目に見えない糸で引かれるやうに、クツクと向ふへ遠のいて行くうちに、ヘンに陰氣な、不吉と云つてもいゝやうな心持が、惡心のやうに胸もとにつき上げて來て、舌の裏に涎がたまつた……。

「坊ツちやん／＼。そんなにお駈けなすちやアいけませんよ」

その聲を聞くと、己太郎はうしろから突かれたやうに立ち上つた。三つくらゐになる小供がチヨコ／＼駈けて來る。畚とそれを荷負ふ丸太とが、ついその一間ほどの行手に擲り出してあつた。あれを取りのける暇はまだある、と己太郎は思つた。が、駈けよつた彼の手には、子供が抱き上げられてゐた。

「あぶないよ」

子供は吃驚した目を見張つて、己太郎の顏を見上げた。ヂツと見てゐるうちに、泣面をつくりだした。己太郎は慌てゝ子供を地におろして、それからまた思ひついて、兩腕で吊る下げるやうにして、畚や丸太の向ふ側へ下ろした。その時にはもう小供は泣き出してゐた。

「お前、そんな、坊ツちやんを亂暴にしちやアいかねえぜ」と云ひながら近よつて來たのは、己太郎の實父で、六十を越してゐながらまだ足腰のシヤンとした爺さんだつた。N――と云ふ溫泉場の或る富豪の別莊に、常雇の植木屋と云ふ定たゞの留守番も同樣に氣樂にしてゐたのを、もう永いこともない身で他國に暮すのも嫌だから、何んでも生れ故鄕の東京に歸りたいと云ふので、つい一年半ほど前から、佐吉の世話でこの太田の控邸に小使爺とし住み込むでゐた。もう三十年からの鰥暮しに、淋しさには馴れ切つて了つたものか、三人死なれて今ではたつた一人殘つてゐる現在の子の己太郎にも、――同じ東京に住みながら別段遇ひたがるでもなく、まして懸らうとするでもなく、物置に隣つた四疊半一間の小使部屋に、靜かな餘生を送つてゐた。

「坊ッちゃんも泣きなさるな、よ。轉ぶといかねえと思つて抱いただけなんだから、何んのこともありやアしねえさ。それよか、機嫌をなほして、またいつものやうに、みんなにおやつをやつておくんなせえよ」

　親爺の彌助がこんなことを云つてゐる間に、己太郎は、今自分のしたことが、思へば隨分突飛だつたと氣がついて、赤くなつて、コソ〳〵ともとの石のそばへ戻つて行つた。何故か腹立たしい氣持が急に己太郎を襲つた。自分の失策に自分で腹を立てゝゐるのだと思ひたかつた。が、その他に、彼の顏を見て小供が泣き出したことも、親爺がさも〳〵我がもの顏に小供を宥め賺してゐたことも、どうも癪にさはつてゐるらしかつた。然しそれでは、あんまり八ツ當りのやうでもあつた……。

　彌助は鹽煎餅を盛つた盆と、人數だけの茶碗をふせた盆と、大きな土瓶とを佐吉の腰かけてゐた沓脫の上に置いてから、やつと自分のものになつた兩手で小供を抱き上げて、

「坊ッちゃん、みんなにおやつを分けてやつて下さいよね」と、頑固な顏つきに全く不似合なほど優しく首をかしげて云つた。もう涙の收りかけてゐた小供は、急に體をもがいて地べたに下ろさせると、サッサと沓脫のところへ出かけて、一枚づゝみんなに持つて行つてやつた。植木屋たちも、その眞面目くさつた可愛らしい容子に、すなほに心を開いて、「へえ、ありがと」とか何んとか一こと二ことお愛想を云つては受け取つてやつた。恐らくは少し離れたところにゐたために、己太郎が最後の番に當つた。彼はまたいつの間にか瞳がなくなつた目を地べたに据えてゐた。その視野のはづれに、可愛らしい白靴が動いて來た。あゝ、自分の番だ、と思ふと、ヒョイと彼は慌て了つた。いつものやうに無心に手が出せさうになかつた。と云ふのは、その瞬間に、どう云ふ風にして受け取つたものだらうかと考へて了つたのだ。考へると、恥かしいやうな心持が動いた。それで、瞳がない目をそのまゝ小供の薄い水色の洋服に移して、モヂ〳〵と手を出した。小供の顏も、自分の手も見てはゐなかつた。たゞ薄い水色だけがぼんやり網膜の上に映つてゐた。掌に輕いカサ〳〵した觸覺を感じると、ちよいとその手先を持ち上げただけで、何も云はなかつた。

「あゝ、それでいゝ。あとはみんな勝手に食べますからね、坊ッちゃんはもうあつちへ行かうよ」

小供は彌助に抱かれて、奥庭の方へ廻つて行つた。
「彌助さん、よッぽど可愛がつてるとみえて、よくなついたもんだね」
「齢だね。あの人も若いうちアあゝちやアなかつたんだがね」
奥歯に煎餅がポリ〳〵と鳴つてゐるなかに、己太郎はぼんやりこんな話し聲を聞いてゐた。

二

「健ちやん〳〵。阿父様がハイチヤですよ。早くいらつしやい」と妾のおうたが小供を呼んだ。太田の主人は、立つて、帶に金鎖を巻きつけながら、廊下をベタ〳〵と踏んで來る可愛らしい足音に耳を傾けた。分別盛りの事業家も、たつた一人の愛兒には目も鼻もなかつた。帶の間に時計を挾む暇も惜しむやうに、大柄な上にデップリと肉づきのいゝ胸へ、輕輕と掬ひ上げた健造に頰摺りをした。一昨日あたりから剃らないらしい濃い頰髭をこすりつけられても、小供には小供だけの遠慮で、されるまゝになつてゐた。
「阿父様のホッペにチユウをしてあげないの」と云ひながら、おうたは、主人に身をピタリと寄りそつて、ブラさがつてゐる時計を帶の間に挾むでやつた。
「オイ、父さんのホッペにチユウしないか」
太田もかう云ひながら、心持頰をよせるやうにして、小供の顔を横目で窺き込んだ。その時小供はヂッと一ツところを見詰めて、兩手の指を胸のあたりで絡み合せたり、ほどいたり、何か苦しさうにモシヤ〳〵と動かしてゐた。
「オイ、どうしたい」
「どこか痛むのかい?」
「なアに、どこも痛いんぢやアないよ。ねえオイ、健坊」
ドンと一つ抱き上げられても、まだその視線を動かしもしなければ、瞬ひとつしなかつた。太田は笑ひだして、
「こりやア健ちやんの前からの癖さ。かうやつて何か見詰めだしたが最後、中々ひとの云ふことなんぞ耳へはいらない

んだからね。一寸かう何んだね、失敗の一二度もやつて、いくらか神經衰弱に罹つてゐる中年の男、と云つたやうな顏つきだぜ」

「まアいやだ。健ちやん、失敗なんぞしやアしないわねえ」

「ハヽヽハ。父さんも失敗しないやうに、早くお店へ行つて稼ぎませう」

「としや、旦那樣お歸りだよ」

太田は小供を抱いたまゝ玄關の方へ出て行つた。おうたは衣紋を輕く顎で抑へるやうにしながら、ゆかたの前をキリりと引き合せると、扮らないで五つ六つ若く見せる小柄な、婉軟かな體を彈ますやうに、小走りにあとを追つた。

「ちよいと、今日もすぐにお店?」

「さよう、嬶がこわござんすからね」

「それから?」

「それからとは?」

「お歸りは?」

「宅へ戻ります。嬶がこわござんすからね」

「そんなにおこわけりやア、眞ツ直にお歸りなさいましよ、へんな所により道をなさらないでね」

「おつしやるまでもなく、へんな所には當分來ないからね。この二三日またいつものが起りかけてるやうだから」

「どうぞお大事に、と申し上げたい所だけれど、一體、そりやアどこの奧樣のお話?」

「奧樣は一人しかもち合せません」

「へイ〳〵。大きに惡うございました」

「……明日……明後日と……十七日が……」

「當分いらつしやらない方がよござんすわ」

「赤間石を一つ買つたからね、その据え所を見に來るんだよ、うるさい」
「いつだつて、貴方のは、お庭を見にいらつしやるのよ、憎らしい」
玄關へ來ると、丁度、中の口との見切りに二三本の木を植えやうとしてゐた。遠くに離れて首を左右にかしげたりしながら、枝のふり具合を指圖してゐた佐吉は、主人を見て丁寧に腰をかゞめた。主人も眺めやつて、
「ア、、そこへもつて來たか。その羅漢柏はまづいな」
「さよですか」
「まづいよ。こゝは何んか一つおごらうぢやアないか」
直ぐもう夢中で、そのまゝ下駄を突ッ掛けて出やうとしたが、ふと抱いてゐた小供に氣がつくと、
「阿母ちやんとこいおいで、ね」
「ヘイ、健ちやんいらつちやい。まア、いやですつて」
「いやか。そいぢやアとしやンとこへ行くか。それもいやか。さうか、阿父さんが一番すきか」
「おんもが一番すきなんですわ」
「健坊にふられて、阿母ちやん、やいてます」
太田は勝ち誇つたやうに云つて、そのまゝおもてへ出て來た。
檜の幹をうしろから抑へて、親方に位置を見せてゐた已太郎は、チツと彼等を葉ごしに睨め据えてゐた。わけの分らない憤りで、急に手足が硬直して、ブル／＼震えて來た。太田も、妾も、小供も、親方も、一人殘らず憎かつた。終生の仇のやうに憎かつた。然しなぜ？と云ふ考は、まるで彼には起つて來なかつた。よつてたかつて、メチヤ／＼に侮辱されでもしたやうに、執念深い復讐心さえ含むだ憎しみで、氣が遠くなつて行くほど勢いつぱい憎んだ……。

三

太田の主人欣造は婿養子だつた。先代の親友でもあり、法律顧問でもあつた或る辯護士の玄關にゐた頃には、珍らし

く眞面目な、學問好きな青年だつた爲めに、破格の恩典で私立ながら某法科大學に通はせて貰つたが、日學も碌に出ないのに、そこの三年間をずツと優等で通した。丁度その頃、一人娘のさよ子の養子に死なれた先代の太田は、兼てから話にも聞き、現在幾度も通つてすつかり惚れ込んでゐた、この篤學で、併も覇氣もあり、沈着でもあり、また機敏でもありさうな一貧生を入れて、五十萬からの財産を繼がせる決心をした。首席の卒業から、續いて一躍して富豪の養嗣子と、トン〳〵拍子に行たつ幸運は、更に戰後鐵材の暴騰となつて、隱居した先代が、非常な滿足と安心と――その上感謝さえも――のうちに老病の床に目をつぶる時には、既に三倍以上の富を積ませてゐた。そこではまた、聟の身にとつてはこの上もなく厄介であるべき姑と云ふものが、とうの昔になくなつてゐた。いま彼は、どんなに羨まれてもいゝやうな身分だつた。商買にかけても、駈け出しの青二才のくせに！と同業者間に嫉視されるほどぬからなかつたし、どんな我が儘をしやうと、誰に憚るところもない筈だつた。

それが、有繋才氣煥發な欣造も、どう云ふものかいつも手古摺らされるのが妻のさよ子だつた。使つてゐるものに對しては勿論のこと、誰にでも、特に初對面の人に向ふと、ツンとけんだかに構へたがる女だつた。結婚當時の彼は、不快ながらもそのけんだかな態度を承認しなければならない義務でもあるやうな感じで、幾分自分から迎合し、增長させて了つた傾があつた。次に來た期間には、これだけ幸運な手形に、これ位の割引料は當り前だ、と諦めて了つて、良人としての自分をダツと三枚目に落して、嘲笑的な滑稽を自分自身の姿に嗤ふことを一種の慰めとした。勢彼は冷かになつた。するど彼よりも五倍以上も冷かに尖つた針の筵が、家庭に用意された。欣造は手を變えるより仕方がないと思つた。そこで、藝者あそびで訓練された、一上一下虛々實々な手練手管を用ゐてみた。脆くもおちて來た。「へゝ、矢ツ張り女だね……」と心で北叟笑むだ彼は、忽ち自分でつくつた泥濘に足を吸はれて悶掻かなければならなかつた。彼よりも五倍以上濃厚で執拗な褥が、家庭に用意された。彼はまた思案をしかえなければならないと思つた。次に取つたのは高壓手段だつた。自棄半分に、頭から抑へつけてかゝつた。ところが、彼よりも五倍以上自棄くそな敵對行爲が、彼の家庭を戰場にした。まるで彼は、五倍に擴大して見せる鏡の前で、笑つたり、齒をむいたりしてゐるやうなものだつた。そ

の擴大鏡には、皮肉、高慢、我意、偏蔑、猜疑、嫉妬、ふてくされ、いやがらせなど云ふイヤなものが、大きくはつきりと映つて、併もそれらが、近來は弊私的里（ヒステリア）と云ふ染色素で色濃く染め出されて來た。

今夜、欣造は、急ぎの調べものがあると稱して、うちへ歸ると直ぐ書齋に立て籠つて了つた。體裁に、別に株を持たうと云ふ氣もない新設會社の定款など、手あたり次第に讀んでみたりしてゐるうちに、ウト／＼として、いつか机の上に突ッ伏して了つたが、何かゴタ／＼とこみ入つた夢を見つゞけて、ヒドく胸さきが痛んで、苦み悶掻くやうにして目を覺ました。大分永く寢たらしく、あたりがシインとなつてゐた。あけ放した窓からではなく、ふと背中の方からフヮりと風が來た。ゾウツとしてふり返ると、そこにさよ子がしよんぼりと坐つて、靜かに團扇の風を送つてゐた。彼よりも一つ年上の三十九で、たゞおけば醜くはない顏に厚化粧をして、大丸髷も綺麗になでつけてゐた。上瞼（うはまぶた）の肉に早くも老が迫つて、窪んで却つて大きくなつた目を、やゝ上目づかひにヂツとものを見詰めたまゝ、欣造が目を覺ましたのも知らず顏に、無言で團扇の手を動かし續けてゐる。

「あゝ、寢た／＼」

欣造も馴れたもので、少しも弱味はみせなかつたが、それでもテレかくしに、伸をした手を机の上へかへすと、書類をあれこれと區分けでもするやうに、二つの山に積み上げたりした。

「お調べものは、お濟みになりまして？」

冷たい薄笑ひを含んだ聲で、妻が靜かにかう云つた。

「お前、ずツとあほぎ通してゐたんぢやア、さぞ腕がくたびれたらう。もう結構だ」

良人も冷かに、他のことを云つた。「おかげで蚊にも喰はれなかつたやうだ。さア、行つて寢るとしやうかね」

「お急ぎのお調べものは、およろしいのですか」

「用向きのことは、私が自分でシッカリ承知してゐるから、お前は心配しないでもいゝよ」

「でも、お部屋におはいりになるなり、五分もしないうちにおやすみになつてお了ひおなさいましたから、若しお急ぎ

でしたらねえ……」

「急ぎぢやアないよ」

「さようですか。……そんなに……嘘をおつきなさらなきアならないほど、寝室へいらつしやるのがおいやでしたら、どうぞご遠慮なく、お書齋に床をとれとおつしやつて下さいましな」

「そろ／＼始り、か。さア、行かう」

「一寸まア待つて下さい。始りとは……？」

「まア、い〻やね」

「よかアございません。始りとは、何が始まりましたのです」

「その、お前の、いやにネチ／＼した遠廻しな云ひ草がさ」

「まア……。どうしてさう私の申すことだと、一々お氣にさはるんでせう。……あの女にはお優しい旦那樣ですがねえ」

「あ〻、さうたかい。あれはお前のやうに刺をもつたもの云ひはしないからね」

「昨晩もあの女のところでございましたね」

「あ〻さうだよ。あすこには、可愛い〻俺の小供がゐるからね」

これが慘たらしい刄であることは、欣造もよく承知してゐた。十年もそつてゐて小供の出來ない妻の急所、——假令眞ツ芯ではなくとも、そこに近いあたりをグサと貫く毒刄であることはよく承知してゐた。それ故よく／＼の場合でない限り、この奥の手は出さないことにしてゐた。——餘り慘たらしいからではなく、屢々使ふことによつてその毒の效果を薄れさすことを惧れて……。

「なんと云つても、子ほど可愛い〻ものはないからね」と、慘忍な微笑を浮べて、欣造はうしろにゐる妻の顔を振り返つた。妻の目は焔のやうにギラ／＼して、良人の目のなかを覗き込んだ。同時に、上體を少し前こゞみに、人形首のや

うに白い顎を突き出して、落つきはらつて、
「その子は、どこもなんともありませんか。まだ、胸が痛いとは云ひませんか……」
全身水をあびたやうになつて、欣造の顔色は變つた。
「貴様、この頃神信心を始めたと思つたら……、馬鹿なまねをしてるな！」
「馬鹿なまねとは何んです」
「……つまらん迷信でもして、貴様……。それこそ、ほんとに承知せんぞ！」
「迷信をこわがるなんて……顔色を變えてこわがるなんて……。ハ、、、ハ」
紅唐紙の團扇を口にあてゝ、さよ子は身をもんで笑つた。

四

まる二年と二ケ月ばかり前のことである。その時分己太郎は、親爺の彌助と一緒にN――溫泉の方で住んでゐた。ほんの小僧ッ子から、親爺につれられて、入谷の或る植木屋へ年季とも手傳ひともつかずに通つてゐた彼は、その時分にはもう一人前の職人だつた。それで、旅館や別莊の庭で田舍ながらも一ツぱしやつてゐた或る親方の下について、年中さして暇な折もなく働いてゐた。

變人と云はれたほど生眞面目で、無口な、寧ろ悒鬱な性分でありながら、見かけは、スラリと延びた結構のいゝ手足や、目鼻だちの小供らしいながらに調つた、小さな顔が、小ざつぱりとした印半纏に似合つて、さも色ごとに身がもてなさうな若者らしく見えた。年はその時が二十五だつた。宿屋の庭にはいつてゐる時など、よく女中たちが、彼の噂でキヤツキヤと騷いでゐた。もう十年若けりやアたゞは置かない、などゝ、面と向つて平氣で云つてのける年增もあつたし、それとなく親切を見せる若い女もあつたが、まるで己太郎は動じなかつた。仕舞には、情しらずだ、うすのろだ、などゝ噂されるやうになつた。

たゞ小供たちばかりが、彼の悒鬱を追ひ拂ふ力をもつてゐた。どう云ふ場合でも、どう云ふ階級でも、小供さえ見れ

ば必ず彼はほゝ笑んだ。どの年ごろでも、——笑へるやうになつたのなら、そして幼時の無邪氣を失はない限りのものなら、彼のそのほゝ笑みに引き込まれない小供は殆どなかつた。信賴していゝ大人としてよりも、自分たちの仲間のやうに、小供たちの目に映るらしかつた。少しでも暇があれば、もう彼は小供たちに圍まれてゐた。さう云ふ時の彼は、生れ更つたやうに快濶になつて、小供たちと全く同じ樂しさに醉つてゐるやうに見えた。社の廣場などで、別莊の坊ツちやんも百姓の洟ツたらしも一緒になつて、彼の周りでキヤツキヤ云つて遊んでゐるのをよく人々は見かけたが、その人が、好奇心から、餘りそばへよつて立停つて眺めたりすると、まるで醉から醒めるやうに、次第に彼の快濶が失はれて、またもとの眞面目顏に返つて、サッサとそこを離れ行つた。それが丁度、小供の一人が、腹でもすかしてか、急に母親でも思ひだしてかして、プイと一人先に歸つて行くと云つた風だつた。また、彼を變人か氣違ひのやうに考へてゐる人の目には、化猫が澤山の子猫を呼び出して、踊をおどらせてゐるところのやうに、一種超自然な、不氣味なものとして映つた。——兎に角彼は、小供以外のものには一切興味を感じない男のやうに思はれてゐた。現在の父親さへ、そのことを承認してゐると云ふ風だつた。別莊の留守番小屋に二人さし向でゐながら、めつたに口一つ利かずに、何か考へ込でゝもゐるやうにモソリとして、寢るも起きるも思ひ〳〵にやつてゐた。それには、一つは、父と子との間にゐるやうな母親と云ふものゝ味を全く彼は知らなかつた。別れたのか、死んだのか、またはまるで同棲したことがないのか、兎に角彼の記憶が生じない以前から、そこには父よりほかゐなかつた。その父は彼の母親に就いて一ことも語らなかつたし、父以外のもので話してくれた人もなかつた。

　かう云ふ己太郎が、どうしてか、或る少女と關係した。少女は、强欲で名の通つた豆腐屋夫婦の貰ひ娘だつた。おとなしいと云ふより寧ろ影が薄いと云つた方がいゝやうな、例へば三四人よつてゐる席から、起つて行つたとしても、はいつて來たとしても、誰の注意も惹かないやうな娘だつた。顏かたちも、美しくもなければ、醜くもなく、どこに人目をひくところもなかつた。さう云ふ特徴の故でもあるまいが、二人の關係は、他人の秘密を日用品の一つのやうに欲してやまない田舍町の人々の耳目からも、全くのがれてゐた。どう云ふ機會に、いつごろから、どこで遇ひ初めたもの

か、誰も語ることは出來なかつた。たゞ娘の姙娠が、養父母に見とがめられた時に、彼女の口から吐き出されたたゞ一つの名が己太郎であつて、それがまた己太郎によつて承認されたので、この客觀的な證據の一つもない事實を事實としてたゞけであつた。

金錢よりほかに何物も考へられないやうな夫婦の、この場合にとつた處置としては不思議と云つてもいゝが、胎兒には何等の危害も加へられなかつた。けれども、出產と同時に奇怪なことが起つた。これが、前に云つた、今から二年と二ケ月ほど以前にあたるのだが、夕方產があつて、もうその夜なかには、嬰兒は豆腐屋に影も形もなくなつてゐた。

何んの知らせも受けたのではないが、その翌朝早く、己太郎がノソリと豆腐屋へはいつて來た時に、夫婦は困つたと云ふ目つきを交はし合つたが、忙しい最中で手が離されなかつた。

「生れたでせう」

豆腐屋の亭主はドギマギしながら、

「……あゝ……だがね……その……」と云つてゐるまに、彼はドン〳〵奥へ通つて行かうとする。「オイ、一寸お待ち、あの、ゆうべ慥かに生れはしたがね、――男の子だつたがね、その何んだよ、……やつちまつたよ、丁度いゝ里子の話があつてね、それで、……オイ〳〵お待ちツたら。さア、それが急な話でね、ゆうべのうちに、發つて行くと云ふ人なんでね。お前にもその前に一目なりと遇はせてやりたいとは思つたんでがね、さうでもねえ、却つてまた……。オイ、お待ちつたら……」

夫婦は顏を見合せながら、奥の間に耳を傾けた。低い話聲が二三分續いたと思ふと、急に己太郎の聲が鋭くなつて來た。亭主が土間から上つて行かうとすると、

「知らねえたツて、おめえが、……馬鹿!」

この迸るやうな聲と一緒に、ゴトンと何か投げつけたらしい音がして、顏色を變えた己太郎が、出會頭の亭主を突き倒すやうにして飛び出して行つて了つた。

それ以來己太郎は、一層無口に、一層人嫌ひになつて了つた。それよりも、特種な變化は、ピタリと小供たちがなつかなくなつて了つた。その二三日仕事にも出ずに、氣違ひか馬鹿のやうに、キョト〳〵しながら町ぢうをうろつき廻つてが、ゐた評判では、云ふまでもなく、いよ〳〵本ものになつて了つたと云はれた。

四日目に彼は豆腐屋へやつて來て、娘のおりえに遇せてくれと頼んだ。亭主は承知しなかつた。先達投げた十算盤は、たゞ肝癪まぎれに叩きつけたゞけで、娘を狙つたわけでもなく、また當りもじなかつたが、氣違ひじみたこの頃の容子では、亭主としても遇はせられなかつた。けれども云ふことに間違ひはなかつた。先達罵つたのは自分が悪かつたから許してくれ、そしてどうぞ夫婦になつてくれ、かうおりえに傳へてくれろと云つた。また亭主に向つては、土間に頭を擂りつけて、小供のありかを敎へてくれるやうに、娘との結婚を承知してくれるやうにと、繰り返し〳〵頼んだ。けれども、亭主が易くそれを承知するわけもなく、その上彼の熱情が、その場合の亭主には、どうしても氣違ひ沙汰としか見えなかつたので、仕舞には手荒いまねをした。往來に引づり出された時に、巳太郎はオイ〳〵泣いてゐた。

また一週間ほど過ぎた頃、豆腐屋の亭主が蒼ざめたおりえをつれて、夜おそく、停車場にゐたのを見たとふれ歩くものがあつた。M市へ女郎に賣られて行つたのだ、と云ふ噂もあつた。それと共に、消えてなくなつた嬰兒も、里子と云へば里子だが、或る金もちに法外な値で賣りつけたのだと私語くものが出て來た。產のある一ト月ほど前から、五十格構の、眼鏡をかけた立派な身裝の女が、必ず夜更に、豆腐屋へ尋ねて來るのを見かけたものは澤山あつた。少くも六七遍は來たと云ふ噂だつた。けれども嬰兒に何んだつてそんな大金を出すのだ、と反問するものがあると、人々はいゝ加減な想像を誠しやかに喋るより仕方がなかつた。

おりえがM市へ賣られて行つたと云ふ噂と前後して、己太郎の姿も、いつのまにかこの町から消え去つて了つた。彌助爺ひとり、何事もなかつたやうな顏つきで、ポツネンと留守番小屋に燻りかへつてゐた。

五

無神經とも、圖々しいとも、また氣丈とも云へるが、妾のおうたはこの頃毎夜のやうに襲はれるキミの悪い夢もさし

て氣にとめてゐなかつた。本妻が自分を呪ふのも當り前だし、一生懸命呪はれゝば惡夢をみるくらゐ當り前だ、と云ふほどの氣樂さだつた。欣造が來ても、何事も話さなかつた。

困じ果て、暇を貰はうかと思ふほどイヤな心持になつてゐたのは、女中のおとしだつた。三つにもなつて、まだウマ〳〵一つ云へないので、主人も、冗談半分だが啞ではないかしらと云つてゐたほどの健一が、毎晩夜なかになると、「アヽ、アヽ、ウヽ、ウン」と唸りだす。始めはそれほどでもなかつたのが、夜ごとに烈しくなつて來た。オズ〳〵ながらおうたに話してみると、却つて母親の方が、なアに、癇のせいだらう、くらゐで一向取り上げてくれないので、いかにも可哀想ではあるし、キミは惡いし、毎日灯（あかり）のつく時分になるともうイヤな氣持になつて來る。それでも、やつと三月（つき）かそこらの嬰兒から面倒をみて來た愛着で、このまゝに暇をとつて歸る氣にもなれず、思案に餘つて、これはいつそ旦那の耳に入れやうかと思つたが、ふと、その前に一度年のいつたものに相談してみやうと考へついたので、或る朝小使部屋へ出かけて行つた。

「よくこそ相談に來てくんなすつた」と、聞き終ると、彌助は大きく叩頭いて、「だが、今後、こりやア、必ず口外しなさんなよ、ウン、旦那にも話しなさんなとも。必ず話しなさんな。旦那が聞いたところで、どうしやうともない。誰にだつて、どうすることもならないことだ。なるとすれば、……イヤ、ならない。ま、然し、俺もほつたらかして置けないと思ふ心は同じだ。こりやア、神だのみよりほかはない。そこで、神樣に伺ひを立て貰つて來たいから、お前さん、何んだ、今日一日俺に暇をくれるやうに、話して來て貰ひたいな。――もとより、さうとは云はずにな」

やがて暇を貰つて出て行く前に、彌助は健造を抱いて庭の方へ廻つて來た。夜はおとしのそばに寢せられ、晝もめつたに母親のそばへよせつけられない健造には、この爺（おやじ）よりほか遊び相手と云ふものがなかつた。

「佐吉さん」と彌助は呼びかけて、「今日はちつと、已太の奴を貸しておもれえしてえが、イヤなアに、仕事の片手間でいいんだが、坊ッちやんの守りをさせてえんだ。おいら一寸出て來なけりやアならねえから」

「あゝあ、いゝとも」

「ぢやアな、己太、今日一ン日は、てめえに坊ッちやんを預けたぞ。シッカリと預れ。いゝか」

親爺にかう云はれると、己太郎は、處女のやうに眞赤になつて、目を伏せて了つた。

「今日一ン日、いゝか、わかつたか」

「だが、なつくかなア。……まアいゝや、おいてきねえ」

「ぢやア、佐吉さん、誠にすまねえが……」

「あゝいゝとも、今日はもう仕事はいくらも殘つてねえんだ。ほんのあと片づけくれえのもんだよ」

「ア、今日でしまひかい、ア、さうかい……」

彌助は小供を地上におろした。小供はそばに立つてゐる己太郎をヂッと見詰めたまゝで彌助の手をさまぐつて、その食指を一本摑むだ。

「今日は、これが一日坊ッちやんのお合手をしますから、おとなにお遊びなさるんですよ。爺やも夕方までには歸つて來ますからね」

腰をかゞめて、顏を覗き込むやうにしてから云つてから、彌助は、そうッと指をはなさせた。小供は地べたに目を落して、何か考へごとでもしてゐるやうに、暫くヂッと立つてゐた。何か、淋しさうで、彌助も直ぐ出かけかねたやうに、ボンヤリしてゐたが、

「いゝかね、今日一ン日、……わかつたかね」

と不意にゾンザイな言葉になつて、小供の耳に私語くと、クルリとうしろを向いて、トットと出て行つて了つた。

職人の一人がクス〱笑ひだしたので、佐吉もその視線の向いてゐる方を見ると、己太郎と小供とが、一間ほど間をおいて向ひ合ひに突ッ立つたまゝ、ヂッと睨み合つてゐた。佐吉のうちに身を寄せてからの己太郎の、どこがどうと云つて別段まぬけてゐるわけでもないが、何かかう少しづゝ勘どころがはづれるやうな、なみでない云つたり爲たりを、朋輩は一圖に低能兒のやうに馬鹿にしきつてゐた。佐吉ばかりはさうは思つてゐなかつたが、その場の容子を見ると、

ついふき出して了つた。

「己太、何をぼんやりしてるんだい。何んとかして遊ばしてあげなよ」

「へ」

己太郎は不機嫌に答へて、つと小供のそばへよつて行くと、無遠慮に手をとつた。さうして、もう一度赤面しながら、

「坊ツちやん、あつちへ行つて遊ばう」

意外なことには、小供は急に兩手をあげて抱かれやうと云ふ仕草をした。己太郎は直ぐ抱き上げやうとした。

「おめえ、泥だらけな手で、坊ツちやんのおべゝをよごすとわりイぜ」

「でも、しようがない」

抱き上げると、胸がキユウツと締つけられるやうな氣がして、不思議な涙が己太郎の目がしらに滲んで來た。兎も角朋輩に背を向けて、夢中で歩きだした。小供の足の折りかゞみあたりにかけた兩手にギツと力がこもつて、餘つた手先は、われとわが肋までシツカと抱きすくめてゐた。彼の肩に置かれた小供の手も、丁度、まだ打ちあけない初戀の、ふと初めて把り合つた手のひらに、こめたともない力が、ヂイツと、靜かに〳〵傳はるやうに、自と彼の肉へ吸ひついて來るのが、微かに、はつきりと感じられた。いつか涙が頰と觸つて流れてゐた。ふと足をとめて彼は振り返つた。みんなの働いてゐるところからは、丁度木の茂みで遮られてゐた。右の手を小供の頭にかけると、いきなり頰をすりつけた。見ると、小供もいつぱい涙をためてゐたが、兩手で己太郎の首ツ玉にシガミついて來ると、咽の奥で、アハ、アハと噎るやうな聲を立て泣き出した……。

己太郎は氣が遠くなつて行くのを感じた。どうしよう〳〵どうしよう、と慌たゞしく考へ續けてゐるうちに、微かに、殺して了ひたい！と云ふやうな心持がどこからともなく浮んで來て、直ぐまた消えて行つた……。

六

彌助は東京から西へ走る汽車を、一時間以上乘つた後、或る寂れ果てた停車場で下りて、そこからまたガタ馬車に二

十分も揺られてから、やつと川原に沿つた小さな村へ來た。

「伺ひを立て、あらたかに人の身の上をしらせて下さる女さんが、この村に住んでおいでだと聞いて來ましたが……」

彌助は、通り合はせた百姓に向つて、丁寧に尋ねた。

「あゝ、地藏樣かね、そんなら……」

斯々と敎へられた道を急いで、一軒のあばら家にたどり着いた。普通の百姓家の床を拂つて一面の土間にして了つたところへ、たゞ正面に小さな宮があつて、その周りに供えものか何かわけの分らないものがゴタ〳〵と置いてあるきりで、その外には家具はおろか戸じまりすらなかつた。たゞ一人小さな姿が、石ころのやうに神前に額づいてゐた。

「お勤中を心ないやうですが、急ぎますのでお許し願ひます。どうか一つお伺ひを立て頂きたうございます」

暫くして、

「ハイ〳〵」と優しく答へて神前から振り返つたのは、小柄で、斬切にしてゐるせいか、十五六の少年のやうにも見える若い女だつた。瘦せた蒼白い顏に、ヒタと目をふさいでゐたが、頬でもの音を聽くやうな顏の構え方さえなければ、盲人とは知れなからう。延びるに從つて、自分でいゝ加減に摘み上げて苅るらしい虎斑の斬切も、鼠色によごれた白衣も、そのいかにも盲らしくなく、眠つてゐるとも見える目と同じことで、例へば白紙のやうに、何んの奇もないで淸々しかつた。

この女の顏を一目見ると、彌助は雷に擊たれたやうに、ベト〳〵と土間に坐つて了つた。何事にも動じないつもりでゐた老つた心が、嵐のなかの木のやうに、亂れおのゝくのをヂッとこらへた。

「どう云ふことでおいでゞした」

「一人の小供の……」

彌助は杜絕れやうとする言葉に鞭をあてた。――「命が氣づかはしくて……」

「伺つてみませう」

女は宮の方へ向き返つて、先刻のやうにひれふした。やゝ暫くしてから、少しの感情もない、殆ど職業的と云つてもいゝやうな調子で云つた。

「どう云ふ小供」

「辰の二黒、男……」

「生れ月日は」

今度こそ彌助は口が利けなかつた。……たうとう彼も女と同じやうにひれふして了つた。

「……五月……二十一日……」

これが、おりえが已太郎の子を生むだ月日だ。けれども、彌助が惧れたやうな結果は起らなかつた。女の聲は同じやうに無感情に續いた。

「命數がない」

「あの呪ひを拂ふ力はござんすまいか」

「そのやうな力で命をおとすのではない。正しくない力は、正しいものゝ命まではふれられない」

「オ、オ、有難うございます。それでは……」

「命數はしかたがない。その子には、正しい力も強くふれてゐる。正しくない力もそれに劣らずふれてゐる。けれども、どちらの力も、命數を、縮めることも、また延ばすことも出來ない。たゞ二つのうち力のすぐれたものが、その子の死にあづかる。命數は定つたものだ。死は迫つてゐる。が、定つたものはしかたがない」

「有難うございます」

彌助は、わが子の運命を語る女、——今ごろ或は老の足腰を揉ませてゐたかも知れないおりえを、神のやうに禮拜して、漸く灯ともし頃、ハッハと息を切つて、太田の控邸に歸つて來た。

七

永い夏の日が、けれども巳太郎にとつては、見詰められない白光燦爛たる夢のやうな日が、短いとも永いともなく暮れちかくなつた。無言で彼と子供とが泣いたり笑つたりした楽しい悲しい一日が。

五時頃欣造が來て、縁側に立つて、すつかり出來上つた庭を眺めた。佐吉も一仕事片づいた快さに、いつになく調子づいて、傍から主人に何か庭について話してゐた。

そこに巳太郎が健造の手を引いて來かゝつた。いま欣造を乘せて來た自動車がもとてゞゴト〳〵、ドル、、ルとエンジンの音を響かしてゐるのを聞くと、小供が何よりも好きな自動車を見ようと、頻りに指をさすので、門の方へ連れて行かうとして來たところだつたが、それがこの家の主人を運んで來たものだとは思ひつかなかつた巳太郎は、そこに不意に主人の視線をあびると、ヒドく狼狽へて小腰をかゞめた。欣造は不思議さうな、面白くないやうな顔つきで眺めた。

「今日は爺やさんが」と佐吉が話した。「お暇を頂いて出かけたもんですから、あれが一ン日坊ツちやんのお相手をいたしました。あれが、何んです、爺やさんの倅です」

「ア、さうかい。彌助の倅がお前のとこにゐるとは聞いてたが、ア、さうだつたかい。……お前、大きに世話だつたね。まア一服おし」

巳太郎は、そこに立ちどまつて了つた子供の方を見おろしながら、默つてピョコリと一つ頭をさげた。

「でも、よく直ぐになついたね」

「へえ、何んですか、ヒドく子づきのやうでして」と佐吉が引き取つて答へた。

「ハ、ハ、矢ツ張り彌助に似たんだらう。あれがまた大變な可愛がりやうでね、よツぽど子づきだと見えるよ。……健坊おいで、阿父ちやんのとこにおいで……」

欣造は兩手をさし延べたけれども、小供は、そつちを見詰めてゐるきりで歩きださなつた。父親らしい寛大で笑ひながら、欣造が云つた。

「アヽ健坊はすつかり植木屋さんと仲よしになつちまつたんだね。いつそのこと、健坊は、植木屋さんの子になさお、へヽヽヽヽハ」

佐吉も世辭笑ひをしながら、手まねぎをして、

「坊ッちやん、阿父樣がお呼びですよ。早くあんよしていらつしやい。あたしがお靴をとつてあげますかな」

小供は、眞面目くさつて、一寸已太郎の顏を見上げてから、尙ほ手は離さうとしずに、チョコ／＼歩きだした。已太郎は具合惡さうな容子で、緣先まで引かれて行つた。

「お丶來たね。阿父さん、今日は、大きな、赤い自動車をおみやに買つて來たよ。……オイ、おとし／＼。今の、その、大きなボオル箱を持つて來てごらん」

「坊ッちやん、大きな赤い自動車のおみやですつて。うまいもんですね。サ、あんがして、阿父樣にお頂きなさるんでせう」

いつか已太郎の心は、一日のお守りを云ひつけられた植木屋に返つてゐた。不思議に、少しのこだはりもなく、出入のうちの坊ッちやんに對する、大事にかけながらもよそ／＼しい心持になつてゐた。父親としての愛を注ぐ欣造を見ることが、少しも彼の嫉妬心をかき亂さなかつたばかりでなく、それがたゞ、いかにも自然な情として快くさえあつた。その上、たつた今まで、わが子として、到底云ひ盡せないほどの愛に浸つてゐたものが、瞬くうちにかくばかり冷淡になれると云ふ、その已の心の不思議をさえ不思議としなかつたほど、そこに少しの無理もなかつた。もう云ふまでもないが、今が今までわが子に違ひないと信じてゐたのを、アヽ、矢ッ張りさうぢやアなかつたかと思ひ返したりしたのでは決してない。そんなつッかゝりは一つもなしに、硝子の上に流した水のやうに、靜かに滑かに彼の心は移つてゐた。一日の心の激動のあとで、その時分には、いくらかぼんやりしてゐたことも事實だが、それにしても、その晩歸つてからは、已太郎はこの不思議な心の移り變りを、どんなに解き憎い謎として考へたか知れない……。

「どツこいしよ」

とかけ聲をして緣側に腰をかけさせて、ひとりの父親の目の前で、小供の靴の紐をといてゐた他の父親の心は、實際このやうに靜かなものだつた……。

「ブ、ブウ、ブ、ブウ」

おうたが、立派な弄具(おもちや)の自動車を目八分と云ふ形につき出して、緣板を踵で蹴るやうに、細かな摺り足を刻んで、唇で器用に喇叭の音を眞似ながらそこへ出て來た。

「ホラ、自動車が來たぞ」

と勢をつけられると、小供は飛び立つて、バタ〳〵と駈けつけた。

「まア、いゝ自動車ね、どなたに頂いたんでせう。ね、健ちやん、いゝのねえ、阿父ちやまに、、、、あんがとしなけりやアだめね」

さう云ふおうたの言葉つきなり聲音(こはね)なりが、已太郎の耳を惹いた。慥かにずツと以前に一度聞いたことのあるやうな氣がした。それで、改めて顏を見直したが、どうも顏には覺えがなかつた。

その時、夢から覺めたやうに、初めて已次郎は自分の心持に常識的な吟味を加へた。N――の溫泉場でおりえの生んだ子が、どうしてこゝにゐるか。併もこの人々の子としてゐるか。考へて見れば實に突飛な話だつた。本妻ならば兎に角、妾に貰ひ子をさせると云ふ旦那があらうか。連れ子だとしても、……イヤ、そんな筈はない、五年このかた、まだ女が藝者をしてゐた頃から殆ど圍ひもの同樣だつたと、つい二三日前に親方が誰かに話してゐるのを傍聞きした。してみれば、この父親の子でないとすれば、この女が他の男で得たか、貰ひ子かのどちらかよりほかはない。どちらにしても、さう云ふ他人の子を、旦那として、妾宅におく氣にはなれさうもないことだし、第一この父親の容子を見ても、どうしたつてわが子に對する情合よりほかのものではない。この男が父親だとすれば、母親は誰だとしても、兎も角自分が父親でないことだけは慥かなのだ。……それでも、この子の父が自分で、母がおりえだとすると……成程その子は煙のやうに消えてなくなりはしたが……この人々を父母として、現在自分の目の前に[illegible]

何故N——で、町役場へ行つて、豆腐屋の戸籍謄本をとつてみる智慧が出なかつたかしら。よし〳〵、明日にもN——へ出かけよう……。さうだ、さうすりやア分る……。

とは思ふもの丶、巳太郎は理性的には全くもう絶望してゐた。折角思ひついた謄本にも、殆ど望みは抱けなかつた。よしそこにおりえの私生児の名が載つてゐて、その養子さきの所番地まで立派に分つたとしても、それがこの太田の名でない限り彼には無益(むやく)なものと云つてよかつた。何故なら、彼の感情は、どんなに理づめで立つ瀬をなくなされても、こ丶の健造よりほかにわが子はないと、深く彼に信じさせてゐるのだつた。この子でない限りは、いかに謄本が證明しやうとも、そんな子には用はないので、なんでもかでも、健造がわが子に相違ないと感じる心は動かせなかつた。併もまた、謄本に太田の名を見出し得ようとは、彼の理性が考へさせないことだつた……。

歸りの電車のなかも、錢湯でも、飯を食ひながらも彼はぼんやりと考へ沈んでゐた。

おうたの少し甘へたやうにベタつく調子と、その調子を托するのに最も似つかはしいやうな、丸味をもちながら甲高い音色とが、段々彼の耳のなかで熟して行くやうだつた。もう床についてからだつたが、ふと、その音色に伴つて、松の新芽(みどり)の匂ひが漂つて來た。……ア丶、さうだ、あの聲は、松の新芽(みどり)を摘みながら聞いたことがあるのだ……。

「……あのね、モシ〳〵、……あのね、お前たしかに婆やだね、……あのウ、あたしね、とんだことをしちやつたんだよ、……あのね、出がけにあんまり急いぢやつたもんだからね、モシ〳〵、……あたしね、納戸の長持の上にね、……あのね、あのウ……(急に低聲(こごゑ)になつて)赤いもんを置き忘れて來ちやつたんだよ、解つたかい? 赤いもん、……ね? 解つたね、(前の聲にかへつて)だからね、そんなことはないけどさ、若しヒョツト旦那にでも見つかつたら、それこそ大變だからね、直ぐに行つて仕末して了つとくれよ、直ぐにだよ、若し忘れちまつたりして、見つかりでもしたら、あたしほんとに承知しないよ、解つたね、ぢやアそいだけ、エ? ア丶、い丶よ、ぢやア直ぐにだよ、たのんだよ……」

それは、慥かおりえが産をする十日か半月ほど前のことだつた。巳太郎が或る宿屋の裏庭で小松の新芽(みどり)を摘みながら、脚榻(きやたつ)の上で聞いた電話の話し聲だつた。祕密らしく私語(さゝや)かれたその「赤いもん」と云ふのが何であらうかと、彼の好奇心は

種々な想像を動かしたが、その時の彼には遂に要領を得られなかつた。電話室を出てから、縁側を階段の方へ行つた女の下半身だけしか、高いところにゐる彼の目にははいらなかつた。フランネルを着たその女の腹が、丁度おりえのそれと同じ位に大きかつたので、特に彼の記憶に殘つてゐる……。

……巳太郎は煎餅布團の上にはね起きた。

「あの女だ！　さうだ、ずりやア愈々あの小供は俺の子だぞ！　旦那に見つかつてならない赤いもん……フン、たくんだな、臨月ほどの腹をしながら、月經があつてたまるもんか。月が重るにつれて、段々何か卷きつけて行つて、旦那の目を瞞着してゐやがつたんだ。それで、愈々と云ふ時に、子を生むためにと云つて、その實田舍に丁度よささうな子を買ひに來てやがつたんだ。度々豆腐屋へ尋ねて來た眼鏡をかけた女と云ふのは、棒組の產婆か何んかだらう。さうだ、一生太田に食ひついてゐるためには、太田の子を生むことが必要だつたんだ。それで、澤山な綿や布のなかゝら、俺たちの子を捻り出したと云ふ手品だ。よし、もうあの子は俺のもんだ！」

巳太郎はすぐ身仕度をして、そつとおもてに忍んで出た。蒸暑い、曇つた晩だつた。天心の月が、暗んだり明るんだりしてゐる。やつと赤電車に飛び乘つて、太田の控邸の門前に來かゝつた時には、もう一時を過ぎてゐた。

八

その晩は宵から、健造が泣いて〳〵誰れがどうだましてみてもだまらなかつた。どこか痛むと云ふ容子もなく、腹もすいてゐる筈はないのに、絶へ入りさうになるほど烈しく泣く。かゝりつけの小兒科の醫者に來て貰つたが、どこも變りはないと云つて、

「所謂虫のせいとでも云ふやつでせう」

などと氣樂さうに笑つて歸つて行つた。九時頃には、すつかり聲も嗄れ、疲れ切つて了つて、ウト〳〵とするかと思ふと、また直ぐ、グッチョリ汗をかいて、眞ッ赤になつて聲も立たないほど泣く。

「どうしたつてんだ。どうかしてだましつけて、寝せられないのか」などゝ癇癪聲でおとしに當つてゐた欣造も、十二時頃にまた起きて來て、――「よし〳〵、俺の方によこせ。……健ちやん、どうした。おとなにねんねするんですよ、阿父ちやんと阿母ちやんの間に入れてあげるからね。そんなに泣くと、仕舞には、だアれも構つてくれなくなつて了ひますよ」

さう云ひながら、奧の自分たちの寝間に抱いて來た。

「アヽ、寝苦しい」

おうたが蚊帳のなかで團扇をパタ〳〵やりながら、呻いてゐた。

「オイ、お前ちつと坊やをみてやれよ」

「だつて、いくら云つたつて駄目なんですもの。泣くだけ泣けば、自然寝て了ふわ。……それより、大變よ、蚊で。あなたが出たりはいつたり、バタ〳〵なさるから、いつぱいはいつちまつたわ」

「大袈裟なことを云ふない」

欣造は蚊帳の裾をあほつて、小供を抱いてはいつた。

「ほんとよ。ま、暫くヂツとして、ごらんなさい。……暑いねえ、この上また健ちやんまではいつて來ちやア……」

「邪見な阿母さんだナ」

「靜かになさいよ、寝さうだから。ねんねんようオ、おころりよウ……」

暫くおうたの子守唄が聞えた。

『成程、こりやヒドい蚊だ。とてもこりやア駄目だ、寝られやアしない。燒かうか」

「靜かに〳〵。……その袋戸棚に蠟燭がありますから……。健ちやんはいゝ子だ、ねんねしなア……」

欣造が蚊を燒いて了ふ頃には、小供も漸く寝ついた。

「これでやつと落ちついて寝られる。序に戸をしめて來やうか」

「いゝわよ。しめたりしたひにやア、とオても暑くつて……」
「不用心ぢやアないか」
「大丈夫よ」
「オイ、もうよせよ、うるさい」
それきり二人は默つて了つた。もう世間も靜まり返つてゐた。深い水底のやうな蒼みのなかで、欣造がつかつてゐる團扇が、おもての薄らあかりに、パタリ〳〵陰氣に動いてゐた。
「ちつとは風が出て來たかな」
「さうね、いくらか蚊が動きだしたやうだわね、……ア、ア、寢苦しい晩だ」
「オヤア、こりやアいけない。大分またはいつてるぜ。穴があいてやしないか」
「イヤよ。この間新調したばかりだわ。我慢して寢てお了ひなさいよ。また健ちやんが目を覺ますとうるさいから」
「いや、さつきまだ燒き盡せなかつたんだ。今度は一つ全滅させてやる。……おい、マッチは？」
おうたは枕もとを探つて、それを手渡さうとした。
「へえ」
「どこだい」
「イヤよ、今渡したぢやアありませんか」
「冗談云ふない。受け取りやアしないよ」
「だつて慥かに……」
「コラツ！　誰だ！」
鋭い聲と一緒に欣造は身を起した。マッチを受け取らうとして手探りをしてゐるうちに、自分の體と觸れる位そばにたつた今まで寢てゐた健造が、いつの間にかもうゐなくなつてゐるので、ハッと思ふトタンに、風のやうにスウッと枕も

とをかすめて庭へ出ようとするものがある！

「オイ、おうた刀を出せ！　健造を持つてかれたぞ」

「奥さんですよ！　さつきから足の方で、幮の裾をもちやげて、蚊を入れるやうにしてたの知てたんですけど、何されるか知れないから、わさと知らん顔をして一生懸命あなたの足を蹴つてあげれば……」

「さうか！　……畜生、さよ子のやつ！」

「あなた、あぶない！」

とめる手を撥かへして、欣造は幮をあほつて出た……。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

……人影が走せよつて來た。己太郎は木影に身を翻へす。と、心づかずに行きすぎる。右の手に……懐劍だ！　直ぐうしろから踊りかゝつてその手首にしがみついた。

「何する！」

見ると女だ。それよりも、左の腋の下に狭まれて、死んだやうにグッタリなつてゐるのは！

「コン畜生！」

拳で力いつぱいナグリつけたと思ふと、キヤツと叫んで女が倒れる。拳は懐劍を握つてゐた。乗りかゝつてメツタ切りに三四刄切りつけて置いて、得物を放り出すと、直ぐ小供を抱き上げた。——あたゝかい。生きてゐる。大きく瞠いた目に、月の光が宿つてゐる。

「オ、」

間ぬけのやうな息をはいて、よろけるはづみに、女の屍體を踏ンずけた。

「ア、俺は人を殺した！」と思つた。

……己太郎の右の親指が小供の咽輪にかゝつた。ヂリ〳〵と力がこもる。小供は、遠慮するやうに、そつと彼の手にすがつた。小さな可愛いゝ兩掌は、そつとつかまつたまゝで、ベツトリ己太郎の腕に吸ひついて來た。思はづ手を引かうとすると、ヌルリとすべる。振り拂つて、兩手に胴體を高く差し上げると、飛び石の一つを目がけて、力いつぱいたゝきつけた。直ぐ彼は兩手に頭を抑えて一散に駈け出した。

*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*

……跣足のまゝ飛鳥のやうに庭へ飛び下りて行つた欣造が、そこに見たものは、然し、薪割の大鉈を掉つて、まるで蛇でも殺すやうに、二つの屍骸を飛石の上でゴツン〳〵とミジンに叩きつぶしてゐる彌助爺だつた。

九

……直ぐその足で自首して出た己太郎の自白は、親の罪をかばふための虚構とより考へられなかつた。若し己太郎の自白を信だとすれば、さよ子のあとを追つて、寢室から十間と離れてゐない現場へ欣造が行きつく前に、己太郎の犯罪があり、その上、屋敷のはづれからはづれにあたる小使部屋から、締りのある二つの木戸をあけて、老の身で、しかも大鉈まで用意した彌助が、どうして既にそこにゐることが出來よう。第一助の彌犯行は、現在第三者によつて見られてゐるし、證據物件も充分であるのに、己太郎にはたゞ少しばかり血痕の附着した着物があるばかりだつた。その自白には、極度の亢奮でよく覺えのない箇所があるのに、彌助の方はハツキリと、よく辻褄が合つてゐた。

彼の云ふ所によれば、その夜、夜廻の間に怪しい女の忍び込むのを見て、大鉈を用意して奥庭に忍んでゐると、女が、自分が非常に、わが子よりすらも愛してゐたほどの、邸の坊ッちやんを抱いて出て、逃げて行かうとしたので、格闘の間に、誤つて大事な坊ッちやんに一撃を與へて了つた。それからあとは自棄になつて、女をメチヤ〳〵に慘殺した。また可愛いゝ坊ッちやんまで同じやうに叩きつぶしたのも、大事な器をソヽウした時に、いつそメチヤ〳〵にして了ひ

たくなる、あの気持を知つてゐる人ならば、よく解つてくれるだらう。——かう云ふ自白だつた。

* * * * * * * * * * * * * * *

彌助は死刑になつた。

己太郎は無罪になつた。けれども彼は、右の腕に吸ひつく、ねばりけのある小さな可愛らしい手のことばかりを語りつゝける狂人として一生を終らうとしてゐる……。

——七年八月——

高師直

小山内薫

（一）

野獸のやうな執事師直は、その肥えふとつた體を、柔い褥の中で悶えた。

檻の中に自由を縛められた獅子が、段々痩せ細つて來るやうに、戰爭をしないでゐると——人の血を流さないでゐると——師直はいつも體を惡くした。

何處と言つてはつきり惡い所があるのではない。唯何となく體中の筋力が弛んで、寐るのも起きるのも物倦くなるのである。

大渡八幡の合戰以來、世は小康を得てゐた。

『退屈だ。退屈だ。何か俺の體中の血を涌き立たせるやうな面白い事はないか。』

彼が身悶えをしながら、かう叫るやうに言ふと、病氣見舞に詰めてゐた恩顧の家人の一人が、恐る恐る前へ出た。

『けふは琵琶法師が二人參る筈になつてをります。』

『なんだ。平家か。面白くもない。俺はあのだら〱した眠くなるやうな語り口が大嫌ひだ。戰の事などを語つても、まるで齒の拔けた年寄がいつまでも同じ愚痴を言つてゐるやうだ。第一、俺にはあの歌のやうな詞がまるで分からない。出仕をして將軍と一緒に聞く時などは、地位の手前、感服したやうな顏をしてゐるが、實は今まで一度も歌の

意味が分かつた事はないのだ。』
師直が相手の方を見も返らずに、褥の上で仰向いた儘、かう言ふと、家人は更に恐る恐るその枕元へ近づいた。
『併し、御前、今日参るのは、眞都と申すのと覺一と申すのと、斯道でも名人と言はれる検校達でございます。』
『眞都か覺一か知らぬが、俺は平家は嫌ひだ。』
『でも、けふは合戦物でない變つた語り物を致すさうでございます。何か美女の事を語るさうにございまする。』
『なに。美女の事を。』
師直は急に大きく目を明いて、むく／＼と體を起した。
『はい。何か猛々しい内に色めいた趣のあるものを語るさうでございまする。』
『それは面白さうだが、何であらうな。兎も角、聞いて見よう。早くその何とやら申した法師どもを呼べ。』
執事はたつた今自分が平家を罵倒した事などは忘れて了つた。彼にとつての命は戰爭の流血でなければ、漁色の殘虐であつた。家人は主人の心を知り抜いてゐたのである。
直ぐと使者が琵琶法師の許へ立てられた。その積りではゐたが、更に火急のお召だと聞いて、眞都と覺一は頭巾をも冠らずに飛ぶやうにして、遣つて來た。
『早く語れ。早く語れ。俺は退屈でならんのだ。』
師直は検校二人の顔を見ると、その挨拶も碌々受けないで、かう言つた。
『畏りました。』
家人の一人が検校達に代つて答へた。
『勇ましい中に艶めいた節のあるとかいふ、その物語を語るのだぞ。』
『畏りました。』
検校二人が師直の註文の何であるかが分からないで、顔を見合はしてゐると、家人の一人が、又それに代つて答へた。

そして、直ぐ二人に耳打をした。

検校達は微笑みながら、琵琶を低く抱きかゝへた。丁度、月が出て、萩の葉を渡る風がさら／＼と鳴つた。

曲はさして珍しいものではなかつた。紫宸殿の上に鵺といふ怪鳥が飛んで來て、夜な夜な鳴いた。源三位賴政が勅命を受けて、それを射落した。その褒美に賴政はかね／＼見ぬ戀にあくがれてゐた藤壺の菖蒲を賜はる事になつた。但し、同じやうな装をした、十二人の女房の内から、自分でそれを選み當てなければならなかつた。女房達はどれもこれも同じやうに美しかつた。賴政は目移りがして、どれの袖を引いて好いか分からなかつた。そこで「さみだれに澤邊の眞菰水越えていづれ菖蒲と引きぞわづらふ」といふ歌を詠んだ。それを聞くと、近衞の關白がひどく感服して、自分で立つて出て、菖蒲の前の袖を引いて、これがお前の宿の妻だと言つた。

『――賴政鵺を射て、弓箭の名を揚げたるのみならず、一首の歌の御感に依つて、年月戀ひ忍びつる菖蒲の前を賜はりつる、數寄の程こそ面目なれ。』と、眞都が三重の甲を上げると、覺一が初重の乙に收めて、一段の語り物は首尾よく濟んだ。

師直は枕を押しのけ、寢床から半身を乘り出すやうにして、耳を傾けてゐた。床の上にゐる家人達も、庭上にうづくまる下郎達も、共に感嘆の聲を上げた。

平家が濟むと、若い家臣の一人がかう言つた。

『成程、賴政が鵺を射た褒美に、傾城を賜はつたのは、幸福だが、所領か引出物を貰つたのに比べれば何でもない。』

すると、師直が嘲笑ふやうに言つた。

『それはお前達が、まだ美女らしい美女を見た事がないから言ふ事だ。この師直は、菖蒲ほどの傾城の爲なら、國の十箇國、所領の二三十個所ぐらゐは、こつちから出しても惜しくないと思ふ。』

執事がかう詞を切ると、突然座敷の外で女の笑ふ聲が聞えた。やがて、障子が明くと、常々高家へ出入をする侍從といふ年増の女房が、轉げるやうにして這入つて來た。

『侍從殿。何がそのやうに可笑しい。』

師直は眞顔になつて、かう訊いた。

『でも。執事のやうな豪いお方が、女の事だと言ふと、まるでお目が違ふからでございます。』

『目が違ふと言ふと。』

『菖蒲の前は國を捨てるの所領を捨てるのと言ふ程の美人ではないと存じますもの。』

『それは又なぜに。』

『積つても御覽遊ばせ。若し、菖蒲の前がそれ程の美女なら、千人萬人の女房の中に据え置いても、直ぐと賴政の目につく筈でございます。それが目につかぬといふのは、菖蒲の前が左程の美女でないといふ證據かと存じます。』

『成程、それは如何にもそうだ。』

『それ程の女房にさへ國の十箇國ぐらいは捨てゝも好いと仰しやるあなたが、若し弘徽殿の西臺などを御覽じたら、日本、唐、天笠も惜しくないと仰しやる事でございませう。』

『弘徽殿の西臺と言ふと。』

『先帝の御外戚早田の宮の御女でございます。』

『ほほう。あれに左樣な美しい姫があつたか。』

『それは〳〵何とも申しやうのない美しいお方でございます。いつぞや宮中で美人の品定めがございました時も、あの方だけは何の花にも喩へやうがなかつたのでございます。まあ、梅が香を櫻の色に移して、柳の枝に咲かせたやうなお方でございます。』

侍從はかう言つて笑ひながら、障子を締めて行つて了はうとした。師直は慌てゝその袖を捉へた

『一體、その宮は今どこにゐるのだ。お年は幾つ位だ。』

『もうこの頃は田舍侍の妻になつて入らつしやるので、昔の面影はないだらうと存じてゐましたに、ついこなひだも

詣の歸りに見上げましたら、昔よりも尙美しう見えました。丁度、南向の御簾を高く揭げて、月の下で琵琶を鳴らして入らつしやいましたが、はら〳〵とこぼれかゝつた鬢のはづれから、仄に見えた眉の匂、芙蓉の眥、丹花の唇、それは〳〵如何な行を積んだ聖者でも迷はずにはゐられますまい。』

『して、その夫はどこの何者だ。』

『結ぶの神のお計らい程分からぬものはございませぬ。あれ程の姫が、女院御息所にでもなる事か、塔の鳩が鳴くやうな聲で物を言ふ、あの出雲の鹽谷判官に先帝から下されて、賤しい田舍住ひに身を朽ち果てさせて入らつしやるのが、わたくしはお氣の毒でならないのでございます。』

師直は目を細くして侍從の詞を聞いてゐたが、やがて何を思つたか、家臣の一人に命じて、色のある小袖を十重に沈の枕を添へて、それを侍從の局の前に据えさせた。

『面白い話で病の欝を散じた。これは當座の引出物。納めて呉れい。』

執事がかう言ふと、侍從は一度立たうとした膝を又卸した。すると、師直は侍從の側へゐざり寄つた。

『お蔭で師直の病氣はとんと癒えたやうな心地がするが、その代り又外の病に取りつかれて了うた。どうだ。侍從。その女房をどうともしてこの俺に世話をしては呉れまいか。話が出來たら、所領なりとも家藏の財寶なりとも、望み次第に遣はすが。』

侍從はとんだ事を話して了つたと思つた。人の妻であらうが何であらうが、そんな事に構ふ師直ではない。若し、うつかり出來ぬとでも言つたら、命を取られようも知れぬ。さう思ふと、侍從は自分で自分の顏の青くなつて來るのが知れた。

『わたくしの詞ではどうかと存じますが、まあ申しては見ませう。』

侍從はかう言ふと、そこ〳〵に座を辭した。

（二）

侍從のところからは二三日何の返事もなかつた。

師直は氣を苛つて、日に幾度となく酒肴を送つては、返事の遲いのを責めた。侍從は樣々に詞を構へて、一刻延ばしにこの不道德な責任を逃がれてゐたが、しまひにもうどうにも逃げやうがなくなつて來た。

侍從は爲方なしに、鹽谷判官の妻を訪ねた。そして、恐る〳〵執事の心を傳へた。

『何に致せ、當時飛ぶ鳥を落すやうな武藏守の仰しやりつけでございます。つい聞流しにも出來かねて、御相談を申しに上がつたのでございますが、一體まあ、かやうな事はどう致したら宜しいのでございませう。』

北の方は思ひも寄らぬ事だといふ顏をした。

『若し、少しでも慰めになるやうな事を仰しやつて下されば、判官樣のお爲にもなり、賴る邊のないわたくし共まで助からうと言ふものでございます。勿論、度重なつては人目にも憚りがございませう。一度や二度なら、誰も氣のつく事ではございますまい。』

侍從は段々に大膽な詞を吐いたが、判官の北の方は相手の方を振向きもしなかつた。

接穗がなくて、その日はそれで歸つたが、侍從はその明くる日も、又その明くる日も煩く判官の妻を訪ねた。

『どうしてもお聞入れがなければ、身の言譯に、わたくしが淵川へでも身を沈めるより外にしようはございませぬ。死んでから可哀さうだと思召しても、それは何の役にも立ちませぬ。どうか古いお馴染がひに、せめて一言でも御返事を遊ばして下さいませ。御恩は一生忘れませぬ。』

或日、侍從がかう言ふと、北の方は悲しさうな顏をして、始めて口を開いた。

『どうかもうそんな事は言つてお吳れでない。わたしは一人身ではないのだよ。武藏守樣にはお氣の毒でならないが、わたしも今になつて、夫に恥を搔かせたくはないからね。』

侍従はこの分では迚も駄目だと思つたが、兎にも角にも北の方の口づから返事を聞く事が出來たので、それを力に始めて師直の屋敷を訪れた。

『どうだ。どうだ。返事はどうだつた。』

師直は局の顔を見ると、いきなり座を乘り出して、かう訊いた。すると、侍従はひどく萎れたやうな顔をして、

『萬更でもないやうなのでございますが、一度や二度の使ではどうもむつかしいやうでございます。』

と、さも力なげに言つた。

『成程。それはさうだらう。よし。そんなら何度でも使を遣らう。』

師直は事もなげにかう言つた。

『でも、もうわたくしのお使では利き目がございませぬ。女同志では氣強い話も出來ませぬ故、文などお書きなされたら如何と存じまする。』

『成程。文か。戰とは大分行き方が違ふな。したが文を誰に書かさう。』

師直は文字がなかつたから、筆といふものを持つた事がなかつた。彼は公の文書も私の消息も、人に書かせるものに極めてゐた。

『雙が岡の兼好樣は如何でございませう。』

『それはどういふ奴だ。』

『「つれ〴〵草」と申す本を書きました世捨人でございます。ちと拗ねたお人ではございますが、能書では名高い方でございます。』

『一向聞かぬ奴だが、能書とあれば、それがよからう。直ぐに呼び寄せて呉れまいか。』

『畏りました。』

侍従はやつと責任が他人へ移つたやうな氣がして、ほつと安心の太息をついた。そこで、直ぐと雙が岡へ使者を立て

た。

兼好法師は侍從の局からの文を見ると、直ぐと好奇心に驅られた。師直が好色爺である事は前から知つてゐた。戰爭と女の外には人生のない痴呆者である事も噂に聞いてゐた。左樣な愚者が將軍家の執事として、天下を恐れさせてゐる事が、法師には常に不思議でならなかつた。いづれ惡運の强い親爺であらうが、一體惡運の所有者はどんな顏をしてゐるであらうと思つた。侍從の文は簡單でよく分からぬが、どうせ評判の餘り宜しくない女の周旋する事である、碌な用ではあるまいと思つたが、世に時めいてゐる馬鹿者を研究するのも、他日嘲世の文章を書く材料にはならうと思つた。そこで、使者と一緒に直ぐと草庵を出た。

師直の用命は果して不倫極まるものであつた。法師は心の内では怪しからぬ親爺だとは思つたが、顏には飽くまでも恐懼の色を見せた。

『これは一大事でござります。わたくし如き世捨人に、果して左樣な色めかしい御用が勤められませうかと杞憂に堪へませぬ。』

『いや。さうでない。法師は「つれ〴〵草」の作者ではないか。法師の能書能文を知らぬ者は天下にない。』

師直は直ぐと侍從の局の受賣をした。さうして、相手の歡心を得ようとした。勿論、法師は直ぐとそれを見破つて、なんの、この親爺が「つれ〴〵草」を讀む柄かと思つた。併し、顏には愈々恐懼の色を見せた。

『恐れ入りました。あのやうなお恥づかしいものがお目に留まりまして、何とも恐縮の至りでござります。』

師直は法師にかう言はれて、「つれ〴〵草」の內容に立ち入る事は出來なかつた。

『どうか法師の筆の力で、あの女をわしの者にして貰ひたい。褒美には領地も取らさう。家も進ぜよう。平に賴む。平に。平に。』

と言ひながら、執事は法師の前に兩手を突いて、匍ひつくばつた。法師は天下の執權が、女一人を得よう爲に、悉く自分を力にするのを、腹の中で快げに嘲笑つた。そこで、どうせ出來る事ではないと思つたが、いたづらをして見る氣

になつた。

『宜しうございます。それ程に仰しやるなら、兎に角認めては見ませう。併し、當る當らぬは御運でござりますぞ。』

『それは承知してをる。運強ければこそここまで經登つた師直ぢや。その邊の事は毛頭懸念に及ばぬ。』

そこで、兼好は紅葉重の薄樣の眞紅に燃えるやうなのに、光る程墨を濃く摺らせて、艶めいた詞の限りを淀みもなく認めた。そして、一先づ高家を退出した。

やがて、それを携へた使者が、判官の下屋敷へ立てられた。師直は艶めいた豫想に胸を躍らせながら、立つたりゐたりして、使者の歸るのを待つてゐた。間もなく、使者は靑い顏をして歸つて來た。

『返事はどうだつた。文か。傳言か。早う申せ。』

師直が氣を苛つて、かう言ふと、使者に立つた若い家臣は、力なげにさし俯向いた。

『お文を手にはお取りなされましたが、明けても見ずに、庭へ捨てゝおしまひになりました。それ故、人目にかけてはならぬと存じて、手前拾つて持ち歸りました。』

使者はさう言ひながら、少し皺になつた兼好代筆の文を、懷から出して、武藏守の前に置いた。

師直は急に面に朱を注いだ。そして、いきなり手紙をびり〳〵と二つに裂くと、それを緣先に叩きつけた。

『手書ほど物の用に立たぬものはない。學者が何だ。世捨人が何だ。もうあのやうなえせ法師は一歩なりとも門内へ入れる事はならぬぞ。』

さう言つて、獸のやうな息を切らしながら、足音高く殿中を步き廻つた。

兼好は人の噂にそれを聞くと、腹を抱へて笑つた。

（三）

師直が焦れに焦れてゐるところへ、丁度來合せのは、日頃から氣に入りの藥師寺次郎左衛門公義であつた。

『藥師寺聞いて呉れ。怪しからぬ薄情な女房もあつたものぢや。能書の兼好に筆を取らせまでして送つた文を、開いても見ぬと言ふのぢや。どうしたものであらうな。』

公義は突然かう言はれて、少し答に躊躇したが、執事がこの程から判官の妻に夢中になつてゐる事は、噂に聞いて薄々は知つてゐたので、何とか慰めの詞を吐かなければならぬと思つた。

『御落膽には及びませぬ。判官の妻とて岩木ではござりますまい。こちらからそれ程慕ふに、靡かぬ法はござりませぬ。もう一度文を遣はして御覧遊ばしませ。』

藥師寺は師直の幕僚としては、先づ文字のある方であつた。

『遣はすには遣はすが、もう兼好には頼まれぬ。その方書いて呉れるか。』

『直ぐに書いて差し上げませう。短冊を一枚御所望いたします。』

『短冊でよいのか。思の丈を成るべく長く書いた方がよいと思ふが。』

『いや。短冊に限りまする。文なら明けずに返すといふ憂もござりますが、短冊を裸で遣れば、たとへ一目でも見ずには置きますまい。』

『成程。それも一理ぢや。然らば、直ぐと取りに遣はさう。』

勿論、野蠻な高家に短冊のある筈はなかつた。家臣の一人が追ひ立てられるやうに、屋敷を駈けて出ると、やがて息せき切つて、短冊を求めて來た。墨硯の用意は、丁度兼好の爲にしたのが、その儘になつてゐた。

藥師寺は筆を取り上げると、直ぐにさら〳〵とかう認めた。

「返すさへ手や觸れけむと思ふにぞ我が文ながら捨ても置かれず」

前の使者でない他の使者が、直ぐそれを携へて、判官の下屋敷へ走つた。

間もなく飛ぶやうにして歸つて來た使者の報告はかうだつた。北の方は短冊を一目見ると、顔を赤くして、それを袖に入れた。そして、直ぐに立つて行かうとするのを、使者が袖を控へて、御返事はどうだと訊いた。すると、判官の妻

は「重きが上の小夜衣」とだけ言つて、どん〳〵奥へ這入つて行つて了つた。

師直はそれを聞くと、俄に相好を崩した。返事の意味は分からぬが、兎にも角には今度の使には矢答があつたのである。顏を赤めたといふ一事の内にも、幸福な謎があるらしいと思つた。

『併し、重きが上の小夜衣とはどういふ意味だらう。』

直ぐと藥師寺が呼び寄せられた。公義は取るものも取敢ずに驅けつけて來た。

『藥師寺。その方のお蔭ぢや。始めて返事があつたぞ。』

『何とござりました。』

『「重きが上の小夜衣」とだけぢや。併し、俺にはこの心が分からぬ。衣小袖を調へて送れといふ事かとも思ふが、若しそれなら、どんな裝束でも爲立てて取らさうと思ふが、どうあらう。』

公義は急に武藏守が氣の毒になつて來た。

『いや。さういふ意味ではござりませぬ。新古今十戒の歌の中に、「さなきだに重きが上の小夜衣、我が妻ならぬ妻な重ねそ」と申すがござりまする。判官の妻はやはり人目を憚りをると見えまする。』

師直はさう聞くと、一時に氣拔けがしたが、公義の手前、それを顏色に見せる事は出來なかつた。

『いや。その方は弓矢の道にのみ秀でてゐるのかと思うたら、歌道にさへ雙ぶ者のない達者ぢや。引出物をせう。』

武藏守はかう言つて、黃金作りの丸鞘の太刀一振を、手づから取り出して、藥師寺に與へた。

併し、公義が歸つて了ふと、俄に悶々の情に堪へられなくなつて來た。

『藥師寺は曖昧に申したが、我が妻ならぬ妻な重ねそと言ふからは、この俺の心を汲んでは呉れぬのぢや。我が妻。我が妻。何が我が妻だ。鹽谷づれの田舍者が、なんで我が妻だ。』

師直はこんな獨語を言つて、夜の目も寐ずに、褥の中を轉げ廻つた。

（四）

責任を兼好法師になすりつけた侍從の局は、法師がしくじつたと聞いて、又自分が賴まれるのではあるまいかと思つて、びく／＼してゐた。ところが、新しく又藥師寺といふ媒が出來たと聞いて、ほつと安心の太息をついた。すると、間もなく、その又藥師寺の代筆が面白からぬ返事を齎したと聞いて、今度は愈々自分の番だらうと思つた。果して、師直から呼出しの狀が來た。局がびく／＼しながら、高の屋敷を訪ねると、武藏守は褥をかついで焦れてゐた。

『侍從。まあ近う寄つて、この俺の顏を見て吳れ。人間の色はないぞ。そちが由ない事を申し出したばかりに、百萬の敵をも恐れぬ師直がこの衰へやうぢや。やがて空しうならうと思ふが、その時は厭でもそちを一緖に連れて、死出三途の旅をせずには置かぬぞ。』

師直は或は目を怒らして大聲に、或は首を垂れて蚊細い聲で、怨の數々を列べ立てた。侍從は持て扱つて、何と答のしやうもなかつた。

やがて、局は考へた。元はと言へば、自分の輕口から起つた事である。武藏守はまだ一度も判官の妻を見た事はないのである。と言つて、一旦、自分の口から美しいと言つたものを、今更美しくないと言ひ消したら、嘘をついたとあつて、どのやうな憂目に會はうも知れぬ。この上は、北の方の正の物の飾りのないところを見せて、自然に疎ませるより外にしやうはない。さう思つて、侍從は恐る恐るかう言つた。

『お怨みは御尤もでございますが、まだ御覽にもならぬお方の事でございます。わたくしはまあ、あのやうに申し上げましたが、御前のお心に召すか召さぬかは、實はまだ心元ないのでございます。どうでございませう。一度北の方を垣間見にでも御覽遊ばしたら。その內、よい折を見て申し上げます程に。』

かう聞くと、師直は俄に顏を和げた。

『せめてはお顔が拜みたいと思うてゐたに、それは辱けない。して、それはいつの事ぢや。』

『まだ日は確と申し上げられませぬが、いづれ兩三日内には、何とか御返事が出來ようと存じます。』

『それは有難い。どうか一日も早く見せて貰ひたい。』

『畏りました。』

侍從はやつと虎口を逃れたやうな氣がして、そこ〳〵に座を退いた。併し、高家の門を出ると、自分が一つの責任を逃れやうとして、また他の責任を背負つて來たのに氣がついた。局は思はず自分で自分の口の端を抓つた。

『あたしは何といふ馬鹿だらう。折角、執事が失望してゐたのだから、あの儘に失望させて置けば好かつたのに、ついあの目が恐ろしさに、又新しい希望を持たせて了つた。あたしは何といふ馬鹿だらう。』

侍從はさう思つて、自分の口の輕いのを嘆いたが、もう一旦引き受けて來た以上は、どうにかしてそれを實行するより外にしやうがなかつた。

『あの時は、北の方の正の物を見せたら、或は厭氣がさすかと思つて、あんな事を言つたのだが、事に依ると反對に、なほ思を募らせる事になるかも知れない。若し、さうでもなつたら、愈々大變だ。實際、判官の北の方は、あたしが口を極めて褒めた程の美人ではない。あたしの若い時の方が、あの人よりは餘つ程綺麗だつたと思ふ位だ。唯、執事が物語の菖蒲の前に、あんまり夢中になつてゐるのが笑止さに、尾鰭をつけて西の臺を褒めちぎつたのだが、今になつて見ると、飛んだ事をしたと思ふばかりだ。北の方の正の物を見て、ほんとに落膽して下されば有難いが、女であれば大抵なのには目の眩む御前の事だから、十人並の北の方を見せたら、愈々煩惱の奴になられうも知れぬ。これは飛んだ約束をした。』

侍從は折々足を停めて自分の愚鈍を嘆いたが、武藏守の双の目の赫と怒つたのを思ひ出すと、目の前に白刃を突きつけられたやうな氣がして、思はず身を竦ませた。

『一旦言ひ出した以上は、どうしても一度は見せなければお納るまい。局も色は褪せたが、まだ命は惜しい。』

侍従はさう心を極めると、直ぐその足で判官の館を裏口から訪ねた。そして、かねぐ\手なづけてある北の方づきの女童を呼び出すと、これに金の這入つた巾着を與へて、都合の好い時を知らせて呉れと頼んだ。

(五)

それから三四日經つた或日の暮れ方であつた。

判官方の女童が息せき切つて、侍従の宿へ駈けつけて來た。

『あの。今夜は殿樣がお留守のところへ、御寮樣がお湯をお召しになります。』

侍従はこの報告を聞くと、輿を飛ばせて、武藏守の屋敷へ駈つけた。

『早うお仕度をなさりませ。この上もない好い折が參りました。』

局が一言かう言ふと、師直の醜い顔にさつと血が登つた。

『おう。愈々お姿が拜めるが。それは有難い。辱けない。』

執事は聲を震はせて、かう言つたが、餘りに狼狽して、座を立つ事をさへ忘れた。

『さあ。何を落ちついてお出で遊ばすのでございます。向うから參るのでございませぬ。こちらから參るのでございます。早うお仕度を遊ばしませ。』

師直はやつと我に侍ると、姿を扮して、侍従と一緒に館を出た。もう秋風の立ち初むる時分であつたが、師直は滴るばかり汗をかきながら歩いた。

『大層なお息切れでございますね。わたくしの歩きやうが早うございますか。』

侍従がかう言ふと、師直は苦笑をしながら、

『馬鹿を申すな。戰場へ出ては、如何なる駿馬をも駈け拔いて見せる師直ぢや。この息切れはそちの足が早いからではない。』

『それでは、なぜでございます。』

侍從は態とからかふやうに言つた。

『もう何も申すな。急げ。急げ。』

師直は隱し切れぬ興奮を面に見せながら、かう言つた。

二人はやがて判官の館に着いた。もう日がとつぷりと暮れて、いつの間にか中天に滿月が懸かつてゐた。

師直は侍從に手を引かれて、そつと門の内へ忍び込んだ。そして、庭の内を館に附いて廻ると、ぽつと灯のさしてゐる所へ出た。

『あれがお湯殿でございます。』

『すると、湯を引くところを見せて呉れるのか。』

師直は侍從にその音が聞えるかと思ふ程胸をどき〳〵させながら、かう訊いた。

『その方が宜しいかと存じまして。』

『よい段ではない。そう聞いただけでも、もう身内の肉が疼くやうぢや。足元が危ない。手を取つて呉れ。手を取つて呉れ。』

侍從は師直の大きな手を、その細い肩に縋られて、あぶなく膝を地に敷かうとした。

『どう遊ばしたのでございます。』

『何やら頭がくら〳〵と致したのぢや。』

『そのやうなお心弱い事でどう遊ばします。まだ一目も御覽遊ばさぬ内から。』

局は師直の腰を押すやうにして、やつと執事が大きな體を屈めてゐられるやうな場所へ連れて來た。

『向うに見えてはなりませぬ。ちと御窮屈でも、お蹲ひ遊ばしませ。』

侍従が武蔵守の耳へ口を寄せて、から囁くと、師直は素直に併し苦しげに、この狭い所へ大きな體を屈めた。
『さあ。その前の垣の間から覗いて御覧遊ばしませ。』
師直は垣根の隙の少し大きく明いたところへ額を寄せて、目を大きく見張つた。
戸一枚鎖さぬ湯の殿が、晝のやうに明かるく、つい目の前に輝いて見えた。女は丁度今湯を上がつた瞬間であつた。
紅梅色の膚が先づ目を射た。氷のやうな練貫の小袖が、ふうわりとそれを包んだ。肩つき、腰つき、足つきが、自然の儘に弧を畫いて見えた。黒く濡れた髪の毛の長く垂れたのが、いたはるやうに抱きかかへられた。その髪の毛の中からか。小袖の脇の下からか。空だきの殘り香が垣根を洩れて、師直の鼻を撲つた。
執事は目が眩んで、あぶなくそこへ倒れさうにした。やつと、それを踏みこたへると、今度は全身がわな〳〵と慄へて來た。師直は垣根にしがみついた。
その物怪にでも附かれたやうな様子を見ると、侍従は驚いて、無理に師直を半蔀の外まで連れ出した。師直はなんにも言はずに、素直にそこまでは出て來たが、急にそこへ突つ伏して了つた。もう侍従が手を引かうと、腰を抱へようと、師直は石のやうに堅くなつて、身動き一つしなかつた。
局はこの儘執事が死んで了ふのではないかと思つた。

（六）

侍従の策は果して反對の結果を生んだ。
師直はその晩から、まるで病人のやうになつて了つて、寝ても覺めても譫言のやうに判官の妻の事ばかり口走つた。
家臣はどうにも手の附けやうがなくて、主人の臥所を遠巻にして、唯おど〳〵するばかりであつた。
局はこの噂を聞くと、これは一大事だと思つた。もうこの上この事件に關係すれば、やがて自分はどんな殘酷な目に會ふか分からないと思つた。そこで、或晩荷物を纏めて、行方も知らず逐電して了つた。

師直が戀の夢魔から目覺めた時、もうそこには兼好もゐなかつた。藥師寺もゐなかつた。最後までと頼んだ侍從の局もゐなかつた。執事は女への媒を悉く逃がして了つたのである。

執事は二三日欝々としてゐたが、その欝憂はやがて怨嗟となつた。怨嗟はやがて復讐の衝動となつた。師直に唯二つしかない人生が、一つから他へ轉換したのである。漁色が戰爭に所を變へたのである。艷書が白刄になつたのである。肉が血になつたのである。殘虐の本能は嵐のやうに師直の心の中を荒れ廻つた。

彼の憎惡は鹽谷判官に集注した。彼は先づ判官を滅ぼさうとした。そして、判官の妻を武力で奪はうとした。若し、それが出來なければ、判官夫婦を一緒に殺さうとした。もう女が第一の問題ではなかつた。復讐が第一の問題であつた。

師直にとつて自分の意志ほど貴いものはなかつた。その彼の意志は今日まで、道徳にも法律にも權威にも妨げられずに羽を延して來た。それが突然或田舍侍の妻に依つて、悉く束縛を受けて了つたのである。自分の意志に逆らふ者は悉く自分の敵だと思つてゐる師直は、どうしてもそれを見逃がす事は出來なかつた。小さな意志の貫徹の爲に戰ふのではない。大きな意志の障碍を叩き壞す爲に戰ふのである。執事はさう思つた。

武藏守は先づ鹽谷高貞に叛逆の企がある事を、將軍に讒した。そして、これが討伐の命令を乞うた。

高貞は貞節の堅い愛妻の爲に自分が師直から怨まれてゐるのを知つてゐた。そして、自分の運命のやがて悲慘なるべきを豫想してゐた。彼は一旦師直に睨まれたものの、大抵は滅びずにゐるのを、よく知つてゐたのである。

併し、高貞は暗々その運命に屈服するやうな怯懦な武士ではなかつた。彼は戰へるだけ運命と戰つて、その上で死なうとも殺されようとも決心をした。

或朝早く、判官は服心の若黨三十幾人かに狩裝束をさせ、小さな鷹を手毎に据えさせて、蓮臺野西山あたりへ賭狩にでも出かけるやうに見せかけて、寺手から急に山崎へ折れると、播磨路をどん〳〵落ちて行つた。女房や子供には身近い郎等を二十幾人か附けて、物詣にでも出かける一行のやうに見せかけさせて、半時ばかり後から、丹波路を落ちさ

せた。

判官の舍弟四郎左衞門は、兄を滅ぼしても身を立てようとする腹黒い侍であつた。彼は兄のこの行動を見ると、自分だけは隱れてゐて、二組の人數が館を出て了ふと、急いでその事を師直のところへ報告に來た。師直はそれを聞くと、機先を制されたと言つて、齒嚙みをした。それから、直ぐと將軍を訪ねて、かねがね申し上げて置いた高貞の陰謀が愈々實現された。一刻も早くと御沙汰を待つてゐたのに、何とも御挨拶がなかつた爲に、とうとう敵を逃がして了つたと、さも怨みがましく言つた。若し、出雲伯耆に下着して、一族を促し集め、城にでも立て籠られたら由々しい大事だとも申し上げた。

將軍もこれには驚いて、然らば直ぐと追手を向けようと仰せられた。併し、そこに居合せた人達の中には、それだけの器用を持つて居る者がなかつた。そこで、山名伊豆守時氏と桃井播磨守直常と大平出雲守とが呼び寄せられた。そして、高貞追討の命令が下された。

時氏は常の出仕の裝束で來てゐたが、宿へ歸つて武具をつけたり軍勢を集めてゐたりしたら、時刻が移つて、追ひつくものも追ひつかずに了ふだらうと思つた。そこで、武藏守が若黨に着せて來た物具を奪つて、それを肩に懸けると、いきなり馬に跨がつて、馬の上で高紐をかけながら、門の前から直ぐ驅足を出して、播磨路を揉みに揉んで追ひかけた。父子主從七騎である。

直常も大平も宿へは歸らず、中間を一人返して、乘替の馬物具を揃へて後から追ひつけと下知をして、丹波路を一散に追ひ下つた。

途中で何か怪しげな一行が通りはしなかつたかと訊くと、小鷹を手に据えた殿原達が十四五騎で、輿にのせた女房を守護するやうにして、忙がしげに通つた。もう二三里は行つた頃であらうと答へた。

敵との間隔が餘り遠くないのに安心した二人は、その晩波々伯部の宿に逗留して、おくれ馳の味方の來るのを待つた。やがて子供の左衞門佐、小林民部丞、同左京亮などが、二百五十騎を引具して、取る物も取敢ず追ひついて來た。

鹽谷の若黨達も、もう追手の懸る時分だと思つて、一足も早くと道を急いだが、女性や子供を連れてゐるので、氣を焦りながらも道が捗取らなかつた、兎角する内に、播磨の陰山で、とう〳〵敵に追ひつかれて了つた。

鹽谷の郎等達は、もう逃げる事は出來ぬと覺悟をした。そこで、輿を往來端の小さな家へ舁き入れさせて、敵に立ち向ひ、肌を脱いで散々に射た。

慌てて來た追手には落ちなく物具を鎧うてゐる者が少なかつた。それ故、驅け寄せては射落され、拔いて掛かれば射据えられて、忽ち戰死者が十一人も出來た。併し、後から後から人數が殖えて來るので、鹽谷方も決して油斷をする事が出來なかつた。

その内に、早くも鹽谷方は矢種が盡きて來た。そこで、一部に防ぎ矢を托しながら、一部は家の中へ驅けて這入つた。女性や子供達を刺し殺して、自分達も腹を切らうとしたのである。併し、萎れ果てた美しい女房が、恐怖と悲痛に身の置き所もない樣子で、膝の側に二人の子供を掻き寄せながら、うろ〳〵してゐる有樣を見ると、誰も彼も涙に目が眩んで、手を出さうとする者がなかつた。

やがて、愈々間近く取卷いて來た追手の内に、かういふ命令の下るのが聞えた。「この事の起りは何だと思ふ。たとひ鹽谷判官を討つても、北の方を奪ひ取らずば、執事の御所存には叶ふまい。一同その旨を忘るるな。」といふやうな意味の命令である。

それを聞いた鹽谷方の侍八幡六郎は、判官の次男の三つになるのが母に抱きついてゐるのを、無理に引放して、近くの辻堂にゐる修行者に托した。

『この子供衆をそちの弟子にして、出雲までお連れ申せ。無事に屆いたら、必ず所領一箇所の主にして取らせるぞ。』

さう言つて、小袖一重をつけて遣つた。

『確にお預かり申しました。きつと出雲まで安泰にお供申しませう。』

修行者はかう言つて、子供を抱き取つて呉れた。六郎は喜んで、元の小家に歸つた。

『さあ。俺は矢種の有らん限り、防ぎ矢を射ようぞ。そち達は内へ這入つて、奥方や小供衆を刺殺し、家に火をかけて、腹を切れ。』

六郎がかう叫ぶと、鹽谷の一族で山城守宗村と言ふ侍が、突と家の中へ駈け込んで、持つてゐた太刀を取直すかと思ふと、目を瞑つて、判官の妻の胸元を突き刺した。あつといふ聲が微に聞えて、女房が薄衣の下に俯伏せになると、五つになる女の子がわつと泣いて、母の死骸に取りついた。山城守はもう一度目を瞑つて、今度は子供の胸元を鍔元まで刺し貫いた。子供は母に抱きついた儘死んで了つた。

山城守の所置に心殘りのなくなつた二十二人の郎黨は、もう安心だといふ風で、髮を亂し、大肌脫ぎになつて、敵が近づいて來れば、走り懸り走り懸り、火花を散らして戰つた。

勿論、いつまで戰つたところで、迚も遁れる命ではないと思つた。併し、かうして暫くでも敵を支へてゐたら、少しでも判官が落ち延びる事であらうと思つたのである。

『鹽谷ここにあり。高貞これにあり。首とつて師直に見せぬか。』といふ聲が、そこにもここにも聞えた。

さうして、二時ばかり戰ふ内に、鹽谷方の矢種は全く射盡された。傷を負はぬ者は一人もなかつた。

やがて、家の戶口に火が懸けられた。二十二人の郎黨は猛火の中へ走り入つて、てんでに腹を切つて、燒け焦がれて死んだ。

家が燒け落ちて、火が弱ると、追手は灰の中を踏み躁つて步いた。俯伏せになつて燒け爛れてゐる女房の腹から、まだ胎内にある子が半ば飛び出して、血と灰に塗れてゐた。腹を切つて伏し重なつて死んでゐる者の中に、小さい子供を抱いて、一つ太刀に貫かれてゐる侍があつた。多分、これが鹽谷判官であらうといふ事になつたが、燒け損じた首故、持ち歸るにも及ぶまいといふ事になつた。そこで、その儘桃井も大平も京へ引き上げた。

山陽道を追つて下つた山名伊豆守の若黨達は、山崎財寺の前まで來ると、後から大聲に呼び留める者があつた。

『執事よりのお文でござります。暫くお待ち下さい。暫くお待ち下さい。』

そこで、一同が馬の手綱を控へると、追つて來た者は三町も向うで立ち留つて了つた。

『餘り急いで參つたので、息が切れて、もうそこまでも參る事が出來ませぬ。どうぞここまでお歸り下さい。』

かう言ふので、山名は馬から降りた。そして、若黨を四五騎返して、急いで用を聞いて來いと命じた。

五騎の兵は、使の前で馬から飛び降りると、何の用だと訊いた。すると、この使がにつこり笑つた。

『實は執事の使ではない。鹽谷殿の身內の者だが、判官殿の落ちらるるのを少しも知らずにゐて、つい供をせずに了うた。ここで主人の爲に命を捨て、冥途でその報告をする積りだ。』

と、言ひも果てずに、いきなり引き拔いて切り合つた。

暫く戰ふ內に、三人に手を負はせて、自分も二太刀切れた。そこで、もうこれまでと思つたか、いきなり自分の腹を掻き破つて、死んで了つた。

これに出し拔かれて、大分時刻が移つた。落人は遙に逃げ延びたであらうと、一同は愈々馬を早めた。

京から湊河まで十八里の道を二時ばかりに走つたので、馬が大分勞れた。けふはもう迚も追つつけまい。一晩馬の足を休めて、あした追ひつかうと言ふので、伊豆守の一隊は湊河に逗留した。

ところが、その時十四歳になる山名の息子の右衞門佐と言ふのが、氣早な若者共を呼び拔いて、かう言つた。

『敵は追手を恐れて、夜を日に繼いで逃げ下つてをる。然るに、俺達は馬が勞れたからと言つて、便々と夜の明けるのを待つてをる。こんな事をしてゐら、終にこの敵を追ひ討つ事は出來ない。自分の馬を强いと思ふ者は、俺に附いて來い。親父の知らぬ間に、今夜追ひついて、敵を討ち留めて了はうぞ。』

さう言ふかと思ふと、直に馬に飛び乘つて、一散に驅け出した。そこで、小林以下の若侍達が十二騎、我も我もとその後を追つた。

湊河から賀久河まで、十六里の暗い道を一夜に走つて、夜もほの〴〵と明け方になると、河霧の絶間から、遙に旅人とも覺えぬ騎馬の客が三十騎ばかり、馬の足並を亂して我先に急いで行くのが見えた。

右衛門佐はそれと見ると、川端に馬を据えて、後から大聲に叫んだ。

『それへ急いで行かるるは、鹽谷殿一家と見た。將軍を敵とし、我等を追手に受けて、何處まで落ち延びられうぞ。踏み留まつて尋常に討死し給へ。』

これを聞くと、判官の舍弟鹽谷六郎が若黨達に向つて言つた。

『俺はここで討死をするから、その方達は細道の口々で防ぎ矢射て、廷尉をお落し申せ。決して、一度に討死してはならぬぞ。』

六郎の主從七騎が引返すと、右衛門佐の一隊十二騎は、一度に河へ馬を乘り入れた。

鹽谷の弟達は向ひの岸に鏃を揃へて、散々に射た。右衛門佐は胄の吹返しや射向の袖に矢を幾筋か受けながらも、恐れず岸の上へ駈け上がつて、六郎と切り合つた。

暫く戰ふ內に、小林左京亮が鹽谷に切つて落された。既に討たれようとするのを見ると、右衛門佐が馳せ塞がつて、當の敵を切つて落した。

やがて、殘る六騎も、思ひ思ひに討死した。そこで、その首を道端に懸けて、時を移さず後を追つた。

この間に、判官は又五十町ほど落ち延びる事が出來たが、郎黨達は馬が勞れて、一歩も進めなくなつて了つたので、道端に馬を乘り捨てて、歩跣足で供をした。

この分では迚も本道を落ちる事は出來まいと思つた。そこで、御着の宿から道を變へて、小鹽山へ掛かつた。山名が續いてその後を追つかけた。鹽谷の郎黨三人が引返して、松の木の一叢繁つたのを楯にとつて、差し詰め引き詰め散々に射た。

山名の六騎を射て落すと、もう矢種が盡きたので、打物になつて、切り合つて死んだ。

追手の馬も終には疲れて來た。高貞はゆる〳〵と落ち延びて、とう〳〵出雲の國に着いた。

間もなく、追手の大將山名伊豆守時氏、子息右衛門佐師氏などが三百餘騎で、同じ國の屋杉の庄に着いた。やがて、

國中に觸れて言つた。

『高貞の叛逆が露顯したので、その誅罰に下向した。これを討つて差出した者には、非職凡下を問はず、恩賞を遣はすであらう。』

　これを聞くと、他人は勿論、親戚骨肉までが、慾心に恩誼を忘れた。判官は他國の兵ばかりか、自國の兵にまで、絶えず跟け狙はれて、一刻も身を安全に隱す場所がなかつた。

　この上は佐々布山に籠つて、一戰しようと、馬を早めて行きかけると、丹波路から落ちた若黨の中間一人が馳けつけて來て、判官の馬を控えた。

『誰が爲にお命を惜まれて、城に立て籠らうとはなされますぞ。御臺のお供を致した人々は、播磨の陰山と申す所で、敵に追ひつかれ、御臺をも公達をも皆刺殺して、一人も殘らず腹を切つて死にました。それを申し上げたいばかりに、生きて效なき命をながらへて、これまで參つたのでござります。』

　かう言ふかと思ふと、仲間はいきなり腹を掻き切つて、判官の馬の前に倒れた。

　これを見た鹽谷は甚しい絶望を感じた。

『一刻も離れ難い妻子を失つて、自分一人生殘つたところが爲方がない。これと言ふのも、皆あの師直めが爲業だ。よし。七生までも敵となつて、いつか思ひ知らせずには置かぬから。』

　さう言ひながら、馬の上で腹を切つて、倒に落ちて死んだ。

　三十何騎かゐた若黨達は、いづれも城になりさうな所を探しに出てゐて、判官の側には木村源三一人しか附いてゐなかつた。源三は、と見ると、馬から飛んで降りて、高貞の首を掻いて取つた。そして、それを鎧直垂に丁寧に包むと、遠くの深田の泥の中に埋めた。それから元の場所へ戻ると、自分の腹を切つて、腸を掴み出した。それで判官の首の切口を隱して、主人の死骸の上へ蔽ひかぶさるやうにして死んだ。

　間もなく、伊豆守の部下がこれを見つけた。木村の足の田の泥に汚れてゐたのが疑問となつて、高貞の首は譯もなく見出された。

　首はやがて師直の許へ送られた。



老死

らいてう

天保何年生れかの、今年八十三になつた桂子の祖母はこの二年あまりは只もう食慾と味覺ばかりで生きて居りました。一切の慾望が消失し、一切の感覺が鈍化（否その或者はもう殆ど死滅して居りました。）してしまつた後、この食慾と味覺だけは恰も人間の生に對する最後の恐ろしい執着を示してゐるかのやうに、異常な、病的な力をもつて彼女の全生活を支配したもので、それはこの二つが彼女の生活の全内容だとでも言つた方が妥當な位でした。

「もう何時よう」と祖母は殆ど銀白になつた頭を枕からやや浮かし加減にしては三度の食事を待ち兼ねたものです。桂子の母はこの「もう何時よう」があまり頻繁に出る時はたとへ何時であらうとも食膳を運ぶことにして居ましたから、彼女は日に四回位食事をとることは少くありませんでした。それでゐて一回の分量も桂子やその母達とたいした相違がありません。

「一日中からしてお寐てばかりゐらして、それで、こんなに召上れるのが、ほんとに不思議ぢやないかねえ、余つ程胃腸はお丈夫と見えるねえ、その上お食事の間はもうしつきりなしにお菓子を上つてゐらつしやるんだから。」

こんなことを母はよく桂子に言ひ言ひしました。

成程何時行つて見ても祖母の枕もとにはお菓子が置かれてありました。のみならず祖母の部屋の戸棚の中は勿論、時としては簞笥の中までもお菓子が大事そうに仕舞はれてありました。寐床の中は日に何回となく拂つてもくお菓子の粉だらけになります。又着物の袂の底からはお菓子の斷片や粉の出て來ないといふことがありません。こんな始末ですから祖母の寐床の周圍は夏になると、早くから蟻の群が列を作つて歩いて居ります。蟻にとつてはこんないゝ處はなかつたに相違ありません。いくら手を盡して退治しても退治しても又やがて何處からかもと通りに集つて來ました。ところが祖母と來たら又大の蟻きらいで彼女の老眼に蟻の姿が一つでも映つたが最後そのからだが粉微塵になるまで、自分自身の手で揉み殺さなければ氣が濟まないのですから、この蟻退治は結局年中不聊に苦しんでゐる祖母にとつては適當な仕事でもあつたのです。

「お祖母さんは蟻に夢中になつていらつしやるので、この頃はお腹をおこわしにならないでいい。」

家人は祖母が震へる手で蟻を抑へるのを見ながらかう言つて笑ふばかり別に止めやうともしませんでした。

祖母はこれほどいつもお菓子の中に置かれながら、それでもなほ滿足出來なかつたと見えて、寧ろ人目を盗むやうにして、隣の茶の間まで障子や襖づたひによろめきながら出かけて來ます。そしてお菓子戸棚の戸を細目に明けて、その中に顔を突込んでは、歯のない口を頻りに動かしてゐるのを桂子はよく見ました。

これ迄幾度となく仕舞つておいた大事なお菓子が知らない間になくなつてゐた、悲しい經驗をもつてゐる桂子の三人の子供たち(祖母から言へば勿論曾孫になります)はいち早く戸棚の前に祖母の姿を見出すと、敵意と怨恨の眼を彼女の背中に注ぎながら、

「ああら、又曾祖母さんが、いやだわ、私たちのとつときのお菓子を召し上つちやあ」

と叫びます。けれどそんなことはこの耳の聾してゐる祖母にとつては、何の係りもない他界の出來事に過ぎません。

「曾祖母さんのなさることだもの、仕方がない。赤ん坊みたいなものなのだから。」

子供たちはいつも大人からきかされてゐるこの言葉を心の中で繰返してすぐ次の瞬間には諦めるより外仕方がないの

でした。併しさうするとそれが何かしら大變大人らしい偉い態度であつたやうにでも思はれるのでせう、彼等は急に祖母を侮り賤める心で一杯になつたとでも言ふやうに汚らしく動く彼女の口を、たるんだ頰の肉を見守る彼等の眼の中には、同じ嘲笑ひの影が申合せたやうに浮んでゐるのを桂子は見逃すことが出來ませんでした。

また桂子や桂子の母は子供たちが小學校から歸るのを待つて「お三時」を與へることを久しく日課のやうに行つて居りましたが、いつかしら祖母をもその仲間の一人として加へることにしてありました。すると他の方面では耄碌しても、否耄碌すればするほど食べるものの上では却て極度の拔目なさを示すやうになつた彼女は、自分の前で四つに等分されるお菓子に對してまでも、その中のより大きなものを、より多くあるものを自分の分前として彼等に先立つて取ることに於て油斷しないばかりか、あたりにボーロやビスケツトの一つ二つがもし轉がつてでもゐやうものなら誰れ彼れのものだといふ區別もなしにそれまでも自分の中へ序にさらひ込むことさへもやり兼ねないのでした。何かにつけてかういふ風ですから、子供たちは祖母の姿さへ見れば、自分の競爭者か敵にでも出逢つた時のやうな用心深さでお菓子を握つた手を急いで背後(うしろ)へ廻したりします。

お菓子から起るかうした曾孫と曾祖母との間の暗鬪は、桂子の心を時としては只子供らしい滑稽じみた氣分に引き入れるに過ぎないこともないではありませんでしたが、しかし多くの場合は不快なものの中に投げ込むのでした。

「何といふ醜さ、淺間しさであらう。」

と彼女は思はず眉を寄せ、面を背けます。併し彼女は次の瞬間にはその感情から救はれた自分を見出すのが常のことでした。何故なら、彼女はさういふ時に限つて、彼女の記憶の中にまだ鮮かに生き殘つてゐるあの昔の孫思ひのやさしい祖母が、限りもなくなつかしい心で深く思ひ出されるのでしたから。そしてそれは現在、目の前にゐるこの汚ならしい祖母に對する彼女の不快や、憎惡や、咒咀を、忽ち涙ぐましいまでの悲しさ、傷ましさに轉じさせるに十分なものでしたから。

桂子の祖母は桂子の外になほ彼女の從弟妹である數人の孫をもつて居りました。しかし桂子は彼女の最初の孫として何といつても彼女の愛を最も豐かに受けたものに相違ありません。殊に桂子の生れた時は、彼女はまだ五十をやつと越

したばかりの至つて、小まめな婦人でありましたから、病身で、内氣で、その上年若かつた桂子の母を助けて、否母に代つて、幼少の桂子の世話は何くれとなく、彼女の手によつてなされたのでした。從つて桂子の記憶も自然その幼少の頃のことは祖母に關係したものが多いのでした。招魂社はその頃の桂子の家から一町あまりでしたが、彼女はやつと歩き習ふ時分から、降るか、風が吹くか、寒さが嚴しい日の外は殆ど毎日のやうに祖母に伴はれて遊びに行きました。初孫の小さな、丸い足が綠の滑かな芝生を覺束なげに蹈むとき、

「あんよはお上手、あんよはお上手」と彼女はどんなにたのしげに、また滿足げに手を叩いたことでせう。兄弟といふものを持たない桂子のお飯事のお相手は矢張りこの祖母を外にしてはありませんでした。家からお菓子やお飯事のおもちやをもらつて來ては、招魂社のあの池に向いたベンチの上で遊んだことを桂子は今もよく覺えて居ます。池には大きな鯉が浮んで居りました。祖母が麩を投げて手を打つてくれると赤いのや、白いのや、黒いのがいくつも〳〵集つて來て、大きな口を水面に見せて、麩を爭ひました。桂子が幼稚園へ通ふやうになつてからの送り迎ひも勿論祖母がしてくれました。又當時の桂子をたのしませた事の一つは、毎月一二回位京橋あたりのMと呼んだ大きなお煎餅問屋へ祖母に伴はれてお煎餅を澤山買ひ込みに行くことでした。無論電車のない頃のことでしたから、桂子はいつも歸り路は疲れて大抵祖母におんぶしてゐましたが、いつも丸の内をぬけて一つ橋から九段下まで來ますと、祖母はきつとそのお濠端の「下の招魂社」と呼ばれてゐた小公園の境内へはいつて行きます。そして、

「さおより」

と言つて大きな瓦煎餅を風呂敷包みから出してくれます。

「おんもでもの食べたいふとしかれるさかい、お父さんやお母さんにだまつてゐよしよ。」

彼女はきつとかう附け加へることを忘れませんでした。

冬になると桂子は祖母の部屋の火燵の周りで多くの時を過しました。桃太郎や、猿蟹合戰や、花咲爺などのお噺が一通りすむと、櫓の上で板ならべをしたり、いろは歌留多をしたり、坊主まくりをしたりして遊ぶのでした。それでも飽き

ると祖母は臺所へ行つて、お芋を小さく賽目に切つて煮て來てくれます。お飯事の小さなお皿や鉢に盛り分けながら、

「さあ、今度はお飯事だよ。」

けれど、かうまで孫の爲めにはどんな心身の勞苦も厭はないといつたやうな祖母も、桂子をあまり構つてくれない時がありました。それは彼女が熱心に陶宮に關する書物を讀み耽つてゐる時で、この時の祖母ほど桂子にとつていやな祖母はありませんでした。いくら話しかけても、遊びの相談を持ち込んでも生返事しかしてくれない淋しさ、便りなさから、桂子はよく怒つて祖母の手からその本を奪ひ取つたものでした。すると祖母は、それを制しながらかう言ふのがお極りでした。

「この本を讀むちうとお祖母さんがちつとも怒つたり腹立てたりせんやうなええ人になるのやさかいな。ほいたら桂坊もお祖母さんに叱られたりへんやうになつてええやないかい。」

全く祖母は桂子を叱つたことがありませんでした。のみならず父や母に桂子が叱られたとき、彼女を庇つてくれるものは、そして彼女に代つて謝罪つてきてくれるものはいつも祖母なのでした。

祖母が「陶宮のお會」に行く時だけは桂子はお留守居をしなければなりませんでしたが、しかしその時の桂子にはまたお土產といふ別なたのしみがありました。祖母は會で出たお菓子でもお辨當でも皆孫の爲にそのまゝ持ち歸るのでしたから祖母の歸りが桂子にとつて待ち遠しかつたのに無理もありません。

孫に對する彼女のかういふ態度は桂子の兩親から言へばあまりに子供を甘やかし過ぎたこととして非難されなければならないかも知れませんが、併しもし今日の桂子の心に幾分でも他愛の念があるならば、それは必ずこの孫思ひの彼女の無欲な、やさしい、溫い愛の泉から來てゐるものに相違ありません。

「何といふお變りになり方だらう」

と桂子は人間の一生といふものを悲しく、淋しく考へなければなりませんでした。

「さうだ、時の力が私のあのいいお祖母さんをこんなにして仕舞つたのだ。年といふものはあの限りない愛の泉をも涸

には惱して仕舞ふのだ。でも孫をあんなに迄可愛がつたその同じお祖母さんにどうして孫の子供を可愛がることを自然は許さないのであらう。人を愛する心の餘裕を全く失つてまでも人はなほ生きねばならないものだらうか。又それをめでたいことゝしてよろこばねばならないものだらうか。」

桂子はいつか祖母の死を願つてゐるやうな自分を見出して驚きます。併しすぐまた「ほんとにお祖母さんだつてあの時分に亡くなつてゐらしたらどんなに悲しまれたことだらう。そしていつまでも只いゝお祖母さんとして惜しまれたことだらう。」などと思ひ續けてゆくのでした。

こんな考への中にゐるとき、彼女はふと祖母の耳に口をあてて、その中に眠つてゐる昔のやさしい、なつかしい「お祖母さん」を再び目醒すまで大きな聲で「お祖母さん、お祖母さん」と呼び續けてみたいやうな衝動が涙と共に突き上げて來る自分を感じることがありますが、目をあげて現實の祖母を見ると、それもすぐ消えて仕舞ふのでした。祖母の長く生え延ひて、逆立つてゐるやうな汚い白髮頭や、皺だらけの、それでゐて、肥つて垂れ下つてゐるやうなだらけた頬の肉は、まるで昔「お祖母さん」と一緒に見た繪本の「舌切雀」のお婆さんそつくりなのですから。

そうして彼女はまたしてもどうしやうもない不快の中に落ちて行くのでした。

「お祖母さんは九十までもお生きになるかしら。」

或時桂子は誰れに向つてともなくつぶやきました。「ほんとに長生きなんかしたくない。」

すると、側にゐた母はすぐ引取つて、

「ほんとだね、お母さんなんかお祖母さんのやうに長生きしたくも出來やう筈はないけれど、それでも決してしたいとは思はないね。」

といかにも同感らしく言ふのでした。

桂子にはそれが「お祖母さんももういゝ加減でおめでたくおなりになつた方がいゝのに。」と言つてゐるのだとしか聞えませんでした。「ああお母さんも矢っ張り、さうなのだ、さう思つてゐらつしやるに違いない。あんなに可愛がられた孫

の私さへさう思ふのだもの。」しかし、たとへそれが眞實だとしても、矢張り彼女自身もそれとはつきり口へ出して言ふことは憚られましたので、
「でもお祖母さんもお若い時分はあんまりご丈夫ぢやなかつたんですつてね。」
などと別のことを言つてゐるのでした。
「さうだねえ、時々さしこみなんかでお苦しみになつたけれど。お前や、正ちやん達のお世話をなさるやうになつてから、自然運動をよくなさるやうになつたせいか、そんなこともなくなつたやうだねえ。」
「この頃又お肥りになつたやうぢやありませんか。」
「さう言へばそんなやうだね。それでおつむりの禿も不思議でならないね。五六年前から思ふと却て小さくなつた位いなのだもの。あの後の方のつる〳〵してゐたところへ薄く毛がかゝつてきたぢやないか。お年と共に餘っ程御丈夫におなりになつた證據だね。何にしろ、神經は一日〳〵と鈍くおなりになるのだし、召し上りものはあの通りなのだからお肥りになる道理さ。」
そして母は昨日自分の留守の間に又いつものやうに祖母が茶の間の戸棚を漁つたと見えて、折の中にはいつてゐた到來ものの蒸菓子が十ばかりもなくなつてゐたことなどを話しするのでした。
「お障りにならなければいゝがと思つて、案じてゐるのだよ。尤も氣が付くとすぐタカジアスターゼを差し上げてはおいたけれど、ほんとにお祖母さんの胃のご丈夫なのにも驚くぢやないか。若い者だつてとてもかなはない位だね。あんなにものがおいしく食べられたらほんとにおたのしみだらうと思ふよ。」
持前の愼ましさから日頃は深く心の底に疊み込んでゐる祖母に對する不平、不滿を母はかうした機會に、間接な言葉やあまりに下等にならない程度の皮肉な調子で娘に洩すのでしたが、桂子の方はそれを感じるよりも、
「成程この食べるといふおたのしみがおありになる以上はお祖母さんの立場から言へばまだ立派に生存の意義があり、生存を主張する權利もある筈だ。」

かう考へて、ともすればお祖母さんの死を願ふやうな心になる自分をあまりに彼女に對して同情のないことだと心に深く咎めるのでした。

老衰以外に、もとよりこれと言ふ病氣などのあらう筈もないこの祖母も、矢張り老人共通の心理から、絶えず「死」といふ黒いものの影に脅かされてゐたのでありませう。七十にやつと手のとどく頃は何かといふと「棺桶に片足つつ込んでるばばやもの」などと冗談らしく言つたものでしたが、もう八十といふ聲をきいてからはそんな呑氣な調子は見たくも見られませんでした。そして時候の變り目や、お天氣の具合で足腰の痛が烈しくなつたり、過食(たべすぎ)から下痢でも起さうものなら、今にも死なねばならぬもののやうに人の顔さへ見れば「私ももう今度は駄目やよ。」と幾度となく震へ聲で、繰返しては、どんよりとして凝視の力を失つた眼に涙を一杯ためてゐるのでした。こんな時、若し祖母の悲しい、淋しい、便りない心を慰めるつもりで、

「お祖母さん、そんなことがあるものですか、まだ〳〵大丈夫ですよ。」

などと耳もとで叫びでもしようものなら、それこそ却て機嫌を損じなければなりませんでした。何故なら彼女にはたとへその言葉はよく聞きとれなくとも、自分の病氣を案じてゐてくれない薄情な人のやうに思はれて淋しく、腹立たしくてならないのでしたから。

この夏はじめ、庭の楓が一日一日と目に見えて繁つて行く頃でした。祖母は年寄にありがちな便祕から腸をこはしたのと、膀胱カタルとがもとで、全く腰が立たなくなりました。祖母自身はいつものやうに「今度こそ駄目やよ」を言ひ續けて、いかにも大層らしくしてゐましたが、家の者たちは、

「なにもう一二週間も立てば、又のこ〳〵お茶の間へお出かけになるに違ひない」

かう言つて別段案じてもゐないらしいのでした。けれど今度はどうしたことか二週間が四週間になつてもお茶の間に再び祖母の姿を見出すやうにはなりませんでした。といつて別に悪くなつたといふのでもなく、二日か三日置きに見え

るかかりつけの醫者は「何處といつておわるいと申上げる程のところはムいません。心臓も八十のお老體とは思はれないほどまだ〲しつかりしていらつしやいます。」などといつて歸るのが常でした。

食事の方もさう大して減じませんでした。かうして寢たまゝで、一々人に食べさせて貰ふ病人として、まだあまりに多過ぎる位でした。

「こんなに役立たなくなつて、もう今日死ぬか、明日死ぬか分りもへん癖に、食べるものばかりよう食べて――」

皆がかう思つてゐやしないかと思ふ年寄の妙な僻み心から祖母はよくこんなことを辯解らしく言つて苦笑ひのやうな一種の表情をしました。

「御遠慮には及びません。召し上れるものならあがつた方が、お力がついてようございますわ。」と母は出來る丈の聲を張り上げるのでした。そしておかはりの時なども成る可くたつぷり盛つてあげるやうにしてゐましたが、どうかすると、祖母は、

「あほらしよう。もう死ぬ病人やないか。とてもさうは食べられへん。」

などと言つて、食べたいご飯も途中で止めたりすることもありましたが、でも大抵は矢張りさう言ひ言ひきれいに食べて仕舞ふのでした。

「ほんとに、變なお祖母さんだ。ことによつたらお腰の立たないのだつて、立たないのぢやなくてご自身で立てやうとなさらないのかも知れない。」

家の人達の心には或反感と共にこんな疑問さへ自然と起つてくるのでした。

「今朝も今朝で、何でも起きて見たいと仰有つてお止めしても聞きてなりませんから、そつと抱き起してさしあげやうと思ひましてね、お蒲團をちよつともちやげて、おからだへ手をかけやうとしますと、まだかけたか、かけないか位の中に、大きなお聲で「いたいよう」つてお怒鳴りになるので、びつくりして仕舞つたんでございますの、只私たちにあんなことを仰有つてごらんになるだけで、ほんとにお起きになるお氣なんかおありにならないのでございますね。」と母

は役所から歸つて、夕食の膳に向つてゐる桂子の父に話してゐたこともありました。

祖母の看護は無論母が主としてしなければなりませんでした。祖母の方でもまた母を絶えず自分の枕もとに引き付けて置かうといたしました。それは母の姑に對する義務ではないかと言つたやうに。

「誰れぞ來ておくれ。」

母が祖母のための用で——たとへばお飯やお湯をとりに行くとか、排泄物を捨てに行くとかいふやうな——立つた僅四五分の間さへ辛抱しないで、祖母はやかましく呼び立てました。それは淋しさ、人なつかしさからなのはもとよりですが、同時に獨りで置かれることは粗末にされてゐるやうな、又捨てられてゐるやうな氣がして、それが不平だからでした。呼んでもすぐ來てくれないやうな時は、もう皆が自分をいやがつてゐるのだ。自分のところへ來るのがいやでならないのだ。早く死ねばいゝと思つてゐるに相違ない。とばかり思ひ込んで、悲しさでいら〳〵してゐるのでした。

「何してゐたのよ。呼んでゐたのに。——小用がしたいのやないか。」

呼んだ以上は何かしら用を言ひ付けねば具合がわるい、用もないのにあんなに呼び立てたと思はれたくない、かうした心で祖母はさしあたり用もない便器をとらせて見たりしました。

併しこんな時は極無事なので、或時などは、

「お前らはみんな私がはよ死ねばええ思つてゐるんやろ」

かう言つてひどく怒つたことがありました。

「私だつてはよ死にたいのよ——だけど死ねんのやないか。」

この言葉は桂子の胸をどれほど强く打つたことでせう。桂子の眼には同時に涙がのぼりました。

「お祖母さん、何だつて、まあそんないやなことを仰有るのです。誰れがお祖母さんがお亡くなりになればいゝなんて思つてゐるものですか。誰れだつて自分の家からお葬式を出すのなんかいやぢやありませんか。」

母は祖母の耳に口を當てゝ、一生懸命に言ひきかせてゐましたが、桂子にはとてもそんなことを言ふ勇氣はありませ

んでした。
桂子は祖母の枕もとに突立つたまゝ、どうすることも出來ないと思ひました。どうしやうもないことだと思ひました。
しばらくして、
「お祖母さん、ごめんなさいね。」
から心の中で言つたとき、今迄歯をくひしばつて保つてゐた涙が一度に溢れて來ました。
桂子はこの時ほど純な心で目の前の祖母をお氣の毒に思つたことはありませんでした。
殆ど祖母のところへは來なくなつてゐた桂子の子供達も、いつの間に、どこから來たのか、祖母の部屋の前の廊下に立つて、柱のかげから代る〲覗いてゐました。何事が起つたかといふやうに好奇の眼を互に光らせながら。
夕方、父はいつもの通り役所から戻つて來ました。そして間もなく祖母の部屋へ顏を出しました。けれど母も、桂子も
「今日はお祖母さんか大變お怒りになつて――」
とばかりで、祖母の口走つたことなどは一言も言ひませんでした。
寡言な父は無言で肯いて、半ば眼を閉ぢた祖母の顏をぢつと見詰めてゐました。
この事があつてから、母は女中たちにも、お隱居樣がお召しの時は、誰れでも先に氣付いたものが早く行つてあげるやうに注意しました。けれども女中達は出來る丈それを避けやうとしました。一度や二度いつもの呼び聲が聞えても、聞えない風を裝つたりするのでした。何故なら誰れだつてこんな年とつた、汚らしい病人を見るのは有難いことでないのに、その上祖母は女中達の顏を見ると、
「お前ぢやないのよう」
から言つて手で拂ひのけるやうな身振りをするのでしたから。

「困つたものだ。かう人好みが烈しくちやあ、家にゐる女中にでさへかうなのだもの折角看護婦をたのんだところで、とても御氣に召すまい。……それにきつとお世話をするのがいやになつて、あんな他人をたのんだと僻んでおとりになるに極つてゐる——といつてこの先一年續くか、二年續くか分らない御病氣だし……」

母はとても堪へがたい疲勞の中でひとり思案するのでした。

梅雨期が明ける頃から、祖母の膀胱カタルはいけなくなりました。晝夜の別なく、祖母は一時間に三四回乃至五六回も便器をほしがりました。

「かうなつてはそんなことを言つてゐられるものか。かうして行けば、病人よりもお前はじめ、俺達が先に斃れて仕舞ふよ。——それにこれからは暑さもひどくなるのだからね。」

などと父は母に看護婦を使ふことを說き勸めるのでした。

翌日看護婦が來ました、けれどもそれは家人の豫期通り、徒らに祖母の感情を害したに過ぎませんでした。

「おまはんはどこの人よ。どこから來たのよ。はよあちへいつてくだ。」

若い看護婦は只呆氣にとられ、途方に暮れました。

「私には悴もあるし、嫁も、孫も居るのやさかいな。他人の世話になるのはいやゝよつて。」

「これでは御看護のいたしやうがございませんから……」

かう言つて看護婦は半日ばかりで歸つて仕舞いました。

祖母には家の人達が皆疲れ切つてゐることなどは少しも察しられないのでした。

又以前の通り晝は母と桂子とで、夜は父と母とが更代で看護することになりました。桂子には祖母の病氣よりも兩親の疲勞を見るのが遙に苦痛になつて來ました。最早老年に達してゐる彼女の兩親は、ふだんから餘程いゝ時間に、いゝ狀態に自分を置いて寢るのでなければ、容易に眠られない方でしたから、たとへふたりが交代で祖母を見るのだとしても必

すしもその間眠れるといふ譯ではありませんから、積り積つて睡眠不足やそれからくる食慾不進で、父の顔も母の顔も暗く濁つて見えました。殊にふだんから痩せてゐる母の落ち窪んだ眼の廻りには小皺が増えて俄に年をとつたやうに見えました。

「お父さんとお母さんを少しでも休ませて上げるやうにしたい。さうしなければならない。」

桂子は心にどれほどさう思つたことでしてせう。そしてどれほどそれをしない自分を心の中で責めて居たことでしてせう。けれど桂子にはどうしても父や母に代つて、夜の看護を引受る氣にはなれませんでした。夜中只一人あの祖母の枕もとにぢつと座つてゐる、かういふことはちよつと考へてみた丈でももう彼女にはとても暗い、無氣味な、そして壓しつぶされるやうな不快なことなのでしたから。その上弱い、疲れ易い神經と、多くの睡眠を必要とする病氣をもつてゐる桂子の身體は生理的に普通以上の眠りを要求して止まないので、徹夜など餘議ない事情でした翌日は、まるで病人のやうなものなのでしたから。(桂子の兩親は桂子のかうした身體の狀態をよく知つて居ましたから自分達がいかほど疲れても、桂子に代らせやうとは少しもしませんでした。)

かうして桂子は又してもいつかしら祖母の死を願つてゐるのでした。

「お祖母さんさへ早くお亡くなりになればお父さんだつて、お母さんだつて救はれるのだ。私のやうに弱いあのお母さんから早くあの重荷をとつてあげたい。——家庭だつてさうしたらもつと今よりも明るい、愉快なものになるに相違ない。」

桂子の父が青島へ一月あまりの出張を命ぜられたのは六月末か、七月始めのことでした。

母は「さぞ御留守中、お父さん、お父さんと仰有ることでせうね。」と困つたやうな顔をしてゐました。

祖母には母の口から船などに乗らずに行ける近いところとして話されました。

「では留守を頼むよ。皆の身體も大事にしておくれ。俺は船の中で充分休んで行く。」

父はかう言ひ置いて、門前に待つてゐる自働車の中へ隠れて仕舞ひました。
父にしろ、母にしろ、桂子にしろ、その時どうしてこの僅一月の間に、祖母の上に死が歩み寄からうなどといふことを考へることが出來ましてせう。
やがて夏中休暇が來て、地方の大學や高等學校に學んでゐた桂子の從弟達が前後して皆別々の地から、東京にある最も近しい親戚である桂子の家へと集つて來た頃から、祖母の様子が俄に變つて來ました。
最初一番目の兄の正が歸つて來た時は、自分の病氣が重態なので、わざ〳〵呼びよせられて來たものとばかり早合點して、顔を見るなり、聲をあげて泣き出した祖母が、五日ほどして三番目の雄三が歸つて來た時にはもう病氣のことも、死のことも言ひませんでした。祖母は寧ろ不思議に堪へないとでも言つたやうに、しばらく孫の顔を睨み付けて居りましたが、どうやら分つたらしく、いくらかゆるやかな表情に變ると同時に、意外な言葉がその口から吐き出されました。
「どこいくのよ。」
そして祖母は向ふの鴨居の水繪の額の方を指さしました。
「お祖母さん、耄碌しちやつたのね。僕來たばかりよ。」
併しそんなことが祖母に分らう筈はありません。彼女はそれつきり何も言ひませんでした。
「いやだ、お祖母さんは、僕がこの家にゐた時分と間違へてゐるんだ。」
雄三はここから中學へ通つてゐた二三年前のことを思ひ出しました。祖母は彼が何處かへ出かけやうとすると、きつと「どこいくのよ。」と、その行先をたづねましたから。またその當時繪に凝つて、日曜日や、祭日といへば、大抵スケッチ箱をさげて、郊外へ出かけてゐた彼は、「繪を描きに。」から祖母に答へたことが少くありませんでしたから。
最後に二番目の武が二三日して歸つて來ましたが、その時祖母の眼はもう自分が曾て愛したこの孫の顔さへ見分けることが出來ませんでした。
「お祖母さん、お祖母さん、武ですよ。たーけーし、たーけーし。武が歸つて來たんですよ。」

から耳に口をあてて言はれるのを祖母はたまらなくうるささうに首を振つたばかりでした。

その頃祖母はもう流動物の外何も食べなくなつて居りました。たまにスープの中に僅ばかりのうどんを入れてさへ、祖母は必ず舌で突出して仕舞ふのでした。

「お祖母さん、さ、お上んなさい。上らなければ駄目。――おいしいの、それはおいしいの。」

新手として看護に加はつて來た從弟たちは、から言つて自分の頬を叩いて見せなどして、一杯のスープやミルクを飲ませるのに骨折らねばなりませんでした。

「さあ、お祖母さん、ああんと――ああんと――」

正は子供に示すやうに自分の口を大きくあけて見せては、祖母の口もとをつづきましたが、祖母はそれでも容易に口を明けやうとしませんでした。

「ええいよ――」仕舞には祖母はうるさくなつて怒り出しました。たまに無理に口を明けて一匙か二匙の液を注ぎ込んだと思ふと、それはいつまでも嚥下されずに口の中に含まれて居たりするのでした。

こんなに食をとらなくなつてからの祖母は一日一日と衰弱が目立ちました。あの垂れ下つてゐた頬の肉もげつそり落ちて、顏が急に怖くなつて仕舞ひました。もう便器をほしがりもしませんでした。誰れがはいつて來ても怒りもしませんでした。父の出張をすぐ忘れて仕舞つては「おとはんは？」と訊ねることもしなくなりました。そして朝からうとうとと眠つてゐるやうな日ばかり多くなりました。

「お祖母さんは何ておとなしくおなりになつたのでせう。何だか氣味がわるい。」

家人たちはかう言ひ合つては居ましたけれども、まだそれを祖母の前にいよ〳〵歩みよつて來た死と結びつけて考へることは容易に出來ないのでした。あまりに久しく、そしてあまりに多く祖母の死を、祖母自身からきかされてゐた彼等の頭には、自分達さへ知らない中に、

「お祖母さんはなか〳〵お亡くなりになりはしないのだ。」

かう言ふ反動的な考が深くしみ込んでゐるのでしたから。そして彼等は、ともすれば照り續きのこの頃の烈しい暑氣からきた一時的の衰弱と信じ様として居るのでした。

或る醫者は診察を終つてからや丶改まつた調子で、母にたづねました。

「お主人の御歸りはいつでございますか。」

「八月五日頃の豫定で――」

「は丶あ、あとまだ半月ですなあ。」

かう言つたきりしばらく考へ込んでゐましたが、

「――さうですなあ、こゝ一月や一月半は大丈夫だらうとは思ひますが、併し何にせよ老體ではあり、この二三日の御衰弱ではちとどうも……尤もかうなつてから、なか〳〵粘り强いこともありますけれど――」

と醫者は言葉を濁して、再び首を傾けました。

醫者のこの注意は先の知れない日夜の看護と暑氣とに倦み切つてゐた家人たちの心を忽ち緊張させるに十分でした。

「どうしてもお父樣のお歸りまでもたせねばならぬ。」

彼等の心は急に一の目的を見出したかのやうに活潑に動きはじめました。

母は父へ委しい手紙を書きました。祖母の看護のため近く彼の地を立つ筈になつてゐた父の妹であり、從弟たちの母である朝鮮の叔母へは特別電報で上京を急がせました。同時に外國へ留學中のこの家の養嗣子である桂子の良人へも通知されました。

翌朝は父の友人であるといふ老博士を招きました。博士は、

「是非御老衰はかういふ風になつてくるものです。あんまりお食事がいけませんでしたら滋養灌腸をなさつて下さい。」

達者な頃の祖母をよく知つてゐる博士は絶えず祖母の上に親切らしい眼を注ぎながらかう言ひました。

「は丶あ、あと十五日ほど。なに滋養灌腸の方さへうまく行けばその位はおもちになりませう。」

そして博士は自分が今預つてゐる患者の中に盗養灌腸ばかりでもう二十日ばかりも生きてゐるもののあることなどを話しました。これは家の者たちをやゝ安心させました。

母は過勞から腦貧血を起し、桂子たちに勸められて早く寢床にはいりましたので、その夜の看護は正と武が引受けることになり、桂子は隣りの部屋に休んで時々見舞ふことにしました。暑い、暑い夜でした。雨戶はいつまでも開け放たれてありましたが、蚊帳の裾を動かすほどの風さへありませんでした。

桂子は無論眠れませんでした。もとより眠る氣もありませんでしたが、死を前にした祖母が時々苦痛を訴へる唸聲と、又その聲の度毎に、「平氣、平氣、」「我慢、我慢、」などと應じる從弟たちの强い聲を壁一重の隣りでぢつと目を閉ぢて聞いてゐることは、桂子の神經にはとても堪へられないことでした。

「ね、私もあなた方と一緒にお祖母さんの御看護するわ。その方が餘つ程いゝわ。私だつて一人でなければ平氣ですもの。」

桂子は、まぶしさうな眼をしばたゝきながら、祖母の枕もとに座りました。

祖母は兩眼を堅く閉ぢ半は開いた口は思ひきり曲つて、その間から舌の先端が見えて居ました。桂子はまたいやなものを見せられたやうな氣がして、眼をちよつとそらすのでした。

「何だか先刻から、少しよくないやうなの。」

正は心配さうに、桂子の顏を見ると、すぐ言ひました。正にはかうした病人に對する知識も經驗もつよく持たない自分が我ながら心細くてならなかたので。

「僕達はお祖母さんを見て上げる氣は十分あるのだけれどね、どうして上げたらいゝのだか、まるで分らないから。」

先刻から祖母は異樣な唸り聲を上げては、手を延して正や武の手をそつと握つて自分の方へ引寄せたり、袖をひつぱつたりするのでした。

「桂ちやん、全く變だつたのよ。かういふ風にひつぱつて行かうとなさすもの。それで僕は矢つ張りつぶつていらしやるの。」

んでした。

夜が明けると、庭の朝顔はいつもと同じやうに美しく咲き揃つてゐました。

祖母の死骸は既に清められた白布ですつかり蔽はれてゐました。その死顔は桂子に昔のあの「いいお祖母さん」を思ひ起させるに十分なほどやさしい、美しいものでした。

靜に閉ぢられた眼、廣い色白な額、鼻筋の通つた高い鼻、やさしく結ばれた大きな、けれど薄い唇。そこには平和と安靜と滿足がありました。

桂子は善良なそして高貴な老人の典型としていつまでも保存しておきたいやうな氣さへしました。

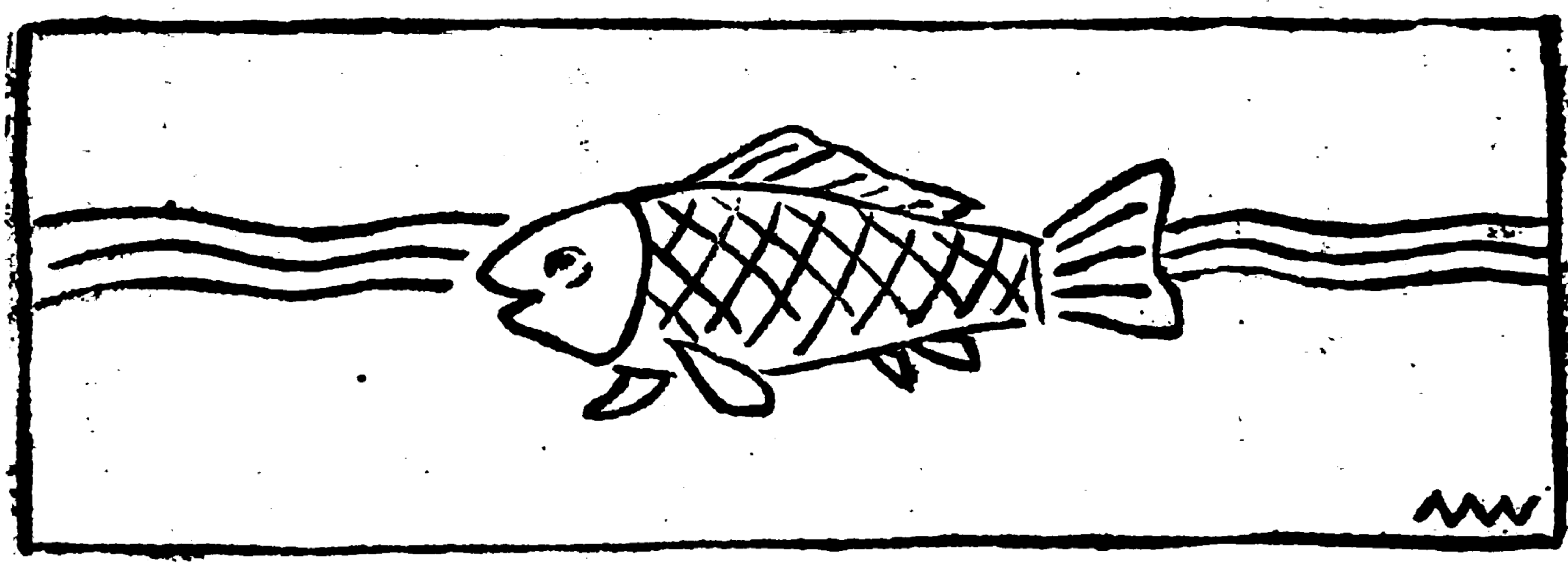
「まあ何ていゝお祖母さんにおなりになつたのでせうね。こんなに氣持よく靜にお眠みになつて……」

桂子はかう言つて飽かず見入りました。

「ほんとに皺までもなくなつて、きれいなお祖母さんにおなりになつたこと、欲や僻を離れるとこんなに人間は顏まできれいになるのだものね。」

母も側から覗き込みました。

(終)



嘆きの門

谷崎潤一郎

われ過ぎて嘆のまちに、
われ過ぎてとはの惱に、
われ過ぎてほろびの民に、

——ダンテ神曲、上田敏譯

一

銀座通りのカフェエ、ド、パリのウェイタアを勤めて居る菊村は、五六日前から何だか奇妙にそはそはして落ち着かない風であつた。用をしながら、折々不安な怯えたやうな眼つきをして、硝子戸越しに往來の人通りを眺めて居る。表から客が這入つて來ると、その度ごとにぎよつとして眼を睜る。何か知ら非常に氣になる事があるらしい。平素から口數の少い、かう云ふ處の給仕には珍らしく溫厚な、氣だての優しい少年ではあるけれど、其れが一層無口に沈鬱になつてぼんやりと考へ込んで居たりする。ゆふべも餘りぼんやりしてビールのコップを割つたので、「大方色でも出來たんだらう。」と、バア、マネェジャアに冷かされたりしたが、菊村は可愛らしい色白の頰つぺたを眞赤にしてにやにやと笑つたゞけであつた。その笑ひ方が怪しいと云つて、仲間のボーイが茶々を入れると、彼はいよいよ赤くなつてうつむいてしまつた。

彼は仲間の奉公人から「華族樣」と云ふ仇名を貰つて居た。此處のカフェエに勤めて

居るボーイたちは、一體に西洋人の好きさうなハイカラな顔だちをした、小綺麗な男ばかりであるが、しかし其の中でも今年十八になる菊村が一番年が若く、容貌も一と入水際立つて居た。その目鼻立ちの上品なのと、性質のおつとりとした所とは、實際華族のお坊つちやんのやうで、小柄な、すつきりした痩せぎすの體に給仕服を着けた樣子は、ちよいと見ると學習院の生徒と間違へられさうであつた。あんまり色が白く鼻筋が通つて居て、洋服がよく似合ふせゐか、時々此處のバアへ飲みに來る西洋人が「お前は合の子ではないか。」と云つて聞く事もあつた。

ところが、今からちやうど半月ばかり前、――七月の末の或る晩に、一人の美しい少女をつれて此のカフェエへ立ち寄つた三人の青年があつた。青年の一人は胴の細い意氣な形のリンネルの服を着て、恐ろしく派手な、薄桃色の荒い縞のあるワイシャツに黒い蝶型のネクタイを結び、あとの二人は何處かの劇場のオーケストラの部員のやうななりをして居た。三人とも、髮の毛をてかてかと分けて、意氣ではあるが何となく野卑に見える、いかにも不良少年らしい風采であつた。彼等は表のガラス戸を肩で押し明けながら、どやどやと流れ込むやうに這入つて來ると、少女を中に挾んで扇風器の傍のテエブルに陣を取つた。さうして、生ビールに油漬のサラディンを注文して、それを飲んだり喰つたりしながら、大きな聲でいかゞはしい冗談を云ひ合つたりした。少女の年は十六七ぐらゐに見えた。目鼻立ちは其れ程整つて居るのでもないが、體つきがアラビア馬の四肢のやうにすらりとして居て、長い頂（うなじ）や優雅な肩の曲線が水際立つて居る爲めに、色白の頰つぺたの紅い、まんまるなお月樣に目鼻を畫いたポンチ繪のやうな、愛嬌たつぷりな顔だちが、何處となくエキゾティックに感ぜられるのであつた。やゝ紅味のある柔かさうな髮の毛を鏝でちゞらせて左右へ分けて、派手なモスリン友禪の一重物（ひとへもの）に、ひどく不調和な、誰かのお古らしい垢じみた地味な羽二重の帶をしめた、花やかな器量のわりには少し氣の毒な服裝をして居ながら、左の手頸には金の腕時計を篏めて居た。さうして連れの男たちと一緒に、ビールも飲めば冗談の相手にもなつて、盛んにきやつきやつとふざけ散らす樣子が、やはりその青年等と同じ仲間の踊り子か何かであるらしかつた。その晩、ボーイの菊村は自分の番ではなかつたので、部屋の片隅にある大きな鉢植ゑのゴムの樹の葉蔭に隱れながら、賑かな、傍若無人な彼等の騷ぎ方を、をりをりちらちらと遠くの方から偸み視て居た。其處

の食堂の内部は、兩側の壁へ一面に鏡を張つてあつたので、菊村は彼等の方へ脊中を向けたまゝ、こつそりと彼等の素振りを窺ふことが出來た。菊村が彼等に注意を拂つたのは云ふまでもなく例の少女の態度や風采に好奇心を動かされたからであつた。好奇心？さうだ、たしかに最初の菊村の氣持ちは單純な好奇心に過ぎなかつた。正直を云ふと、彼は其の女の顏を、初めに一と目見た時は「ちよいと綺麗だな。」と思つた。が、つくづくと見て居るうちに、だんだん方々にアラが出て來て、美人でも何でもないと感じ出した。たゞ背恰好がきやしやで、頸筋のすらりとした、胴のくびれた、臀の大きい、脚の長い、西洋の女が和服を着たやうな一種の味はひのある全體の肉附きが、美人であるかの如く人の目を欺くだけで、橙のやうに圓い顏の造作を、一つ一つ吟味すると何處と云つて取り柄はない。鼻は高いけれども獅子つ鼻だし、眉毛は細く長く尻の方が輕薄さうに下つて居るし、いやに色の紅い薄い唇が蓮つ葉らしく大きく切れて、而も三日月型に上の方へしやくれて居るし、惡く云へば牛屋の女中にだつて此のくらゐな御面相はいくらもある。それに、なんぼ藝人の仲間とは云へ、少女の癖に若い男を向うに廻して、こましやくれた冗談口を叩いて居るのが、頗るつきの擦れつ枯らしのやうに見えて、菊村はあまりいゝ氣持がしなかつた。全體此の女は何者だらう、踊り子だとすれば何處の劇場に出て居る奴だらう。さうして又、此の少女を取り卷いて、ちやほやとお世辭を使つて御機嫌を取つて居る此の青年どもは何者だらう。――さう云ふ風に考へながら、菊村は彼等の自墮落な境涯が苦々しくもあり、羨ましくもあるやうな氣持ちで、それとなく眼を配つて居たのであつた。少女は自分の左右に取り附いて來る男たちを滿遍なく見廻しながら、口をきく度毎に花やかな生き生きとした笑ひを浮かべた。笑ふ時には、全くポンチ繪のお月樣がニコニコして居る顏のやうに、ゆたかな頰つぺたが更に横の方へだぶついて、三日月型の唇の切れ目が一層深く弓なりにしやくれ上ると同時に、粒の細かい、眞白な齒並びが、眞珠の鎖のやうに其の隙間から洩れるのであつた。それが、菊村には、見て居るうちに次第に吸ひ寄せられるやうな不思議な心地を覺えさせて、知らず識らず彼の頭へ沁み込んで行つた。「此れは變だ、此の女はやつぱり牛屋の女中とは比べ物にならない。何處かに美人の資格がある。」と、彼はいつの間にか考へ直した。さうなつて來ると、今まで彼の注意を惹かなかつたいろいろの美點が、彼女の體中の到るところに捜

じ出された。小器用な手つきでフォークを動かして居る指先のしなしなした鹽梅だの、舶來の人形の眼のやうにパッチりと冴えた大きな瞳だの、薄くほんのりとお白粉を塗つて、たゞさへ血色のいゝ兩頬へ日の丸のやうに頬紅をさした工合だの、ちゞれ毛の先が渦を卷いて居る襟足の子供子供した愛らしさだの、しまひには生意氣な口のきゝやうやお轉婆らしい動作までが、その女の持つて居る愛嬌の一つとして、みんな捨て難い特長の内に數へられた。さう思つて、菊村は鏡の中の彼女の姿をだんだん頻繁に覗き込むやうになつた。すると、暫くさうして居る内に、彼等の方でもやがて鏡に映つて居る菊村に心づいたのか、二三度此方を振り返つて、急に低い調子でこそこそと囁き交した。中でも少女は一番しげしげと彼の方へ無遠慮な流眄(ながしめ)を送つた。ゴムの樹の葉蔭に立つて居る彼の横顔を、ちらりと見ては傍の男に何か知ら耳こすりをする。と、男は意味ありげな表情で少女と眼を見合はせた後、忽ちからから大聲で笑つたりする。菊村は、明かに自分が噂をされて居るのだと感づくや否や、きまりが惡くなつて、それきり彼等の方を顧みなかつた。

　少女の印象は、二三日の間菊村の頭の隅の方にぼんやり殘つて居たが、程なく彼はきれいに其れを忘れてしまつた。しかし少女は、その後一週間ばかり立つてから、或る晩の夜更けの十二時ごろに、此の前の連中とは全く違つた二人の青年を伴つてやつて來た。青年の一人は茶のアルパカの上着に白い縞のヅボンを穿いて、緣なしの鼻眼鏡をかけた、見るから氣障な二十二三の男。もう一人は格子縞の背廣を着て、ヘリオトロープの香水の匂をぷんぷんさせながら、上着のボタンに造花のチューリップを挿した、此れも氣障の方では引けを取らない同じ年配の紳士であつた。が、それよりも更に菊村の眼を欹てたのは、海軍の水兵の上着のやうな水色の襟のある白地の洋服に、踵の高い意氣な赤革の靴を穿いて居る、此の前の身なりとは打つて變つた少女の姿であつた。その晩も菊村は、彼等の占めたテエブルが自分の番にあたらなかつたので、遠くの方から彼等の樣子を見守つて居た。少女は此の間のやうなはしたない風は見せなかつたが、それでも例のきらびやかな笑ひを浮かべて、時々、西洋人がするやうにピクリと肩を聳やかしつゝ、小聲で二人に戯れて居る間にも、絶えずさまざまなしなを作つた。それがいかにも、輕くしなやかな手足の運動を誇示して居るやうであつた。かうして見ると、たしかに其の女は洋服の方がよく似合ふし、體のこなしが凡べて洋服にしつくり嵌まつて

居た。菊村は何となく西洋の活動寫眞の或る場面を見るやうな氣がした。少女は最初、二人の青年の先へ立つて、つかつかと表から這入つて來て、そこの倚子へ腰をかけながら、ちらりと菊村を一瞥したらしかつた。さうして、青年の方を顧みて、何か眼顔で合圖をすると、今度は青年たちが一度に菊村の方をぢろぢろと眺めた。その様子に心付いた菊村は、何だか自分が馬鹿にされて居るやうな氣がした。どう云ふ譯か分らないが、兎に角自分は、此の間の晩から此の少女の注目を惹いて、何か問題の種にされて居るのである。今夜も多分、彼女は自分を見せる爲めに、二人の青年をわざわざ此處へ案内して來たものらしい。それにしても、なぜ彼奴等は己の顏を見てはあんなにくすくす笑ふんだらう。どんなおかしい事があつて、己に横眼を使つては内證話をするんだらう。變な奴等だ。と、菊村は内々で少し癪に觸つたくらゐであつた。

少女は、それから中一日置いて又やつて來た。やはり前の晩と同じ水兵服を着て、手には銀製の鎖で出來たオペラ、バツグを提げて、今度は年のころ三十二三の一人の紳士をつれて居る。紳士は色の青白い、圓顏のむつちりとした、小柄に太つた男で、絹絲の緣の附いた黒羅紗の上着に、地味な縞柄の變りヅボンを穿いて居るのが、あまりキツチリと小ひさな體に嵌まり過ぎて居るせゐか、遠くから見るとまるで紳士の人形のやうに子供じみて居た。それでもさすがに此の前の連中のやうな不良少年とは違つて、何處となく品格のある鷹揚な態度で、兄が妹をいつくしむやうな、やさしい言葉づかひで頻りと少女の歡心を買つて居た。が、此の紳士も、話の合間合間に、妙な上眼を使つて、菊村の顏をぢつとまともに視詰めるのであつた。菊村の方でもだんだん好奇心を起して、わざと大膽に彼等の傍へ寄つて行くと、しまひには二人とも話を止めて彼の立ち姿を穴の明くほど見上げ見下して居る。菊村はいよいよますます變な氣がした。「あなたがたは、私の顏にお祭でも通ると思つて居らつしやるんですか。」かう云つて聞いてやらうかとさへ思つた。

「ちよいと、ボーイさん。果物は何があつて?」

すると、その時、少女は極く當り前な、ちつともきまりの惡さうな様子もなく、朗かな、花やかな聲で斯う菊村に云つた。

「はつ、果物は……林檎と、バナ、と、水蜜がございます。」

から云つて、菊村の方が不意を喰つて狼狽した。

「さう、それぢやバナ、と水蜜を持つて來て下さい。」

「はつ」

と云つて、菊村は續けざまに二三度お辭儀をした。そのうちに受け持ちのウエイタアが來たので、彼はこそこそと逃げるやうに其の場を外した。

その後、少女は幾度此のカフエエを訪れたか知れなかつた。いつも大概二三人の男をつれて來るが、たまには同じ踊り子らしい女優を誘つて來ることもあつた。ちやうど四度目に來た時には、菊村の番にあたつたので、それから次第に親しく言葉を交すやうになつた。尤も、菊村の方は持ち前の上品な顏をツンを濟まして、馴れ馴れしく話しかけられても、例の如く「はつ」と云ふ返辭ばかりで取り合はうともしない爲めに、少女は多少あつけないやうな風であつた。菊村はもう少し彼女を喜ばせるやうに、愛憎よく笑つて話をして見たいとは思ひながら、なぜか彼女の前へ出ると、はにかんで口がきけなかつた。殊に、彼女を取り卷いて居る不良少年どもが、遠廻しに皮肉を云つて冷やかしさうなので、彼はいつでも顏を眞赤にして、をづをづと引き退つてしまふのであつた。

「菊村さん、ちよいと、ちよいとまあ此處へ入らつしやいよ。あたし今夜はね、あなたにい丶物を買つて來て上げたのよ。」

或る時、少女はこんな事を云つて、懷から小ひさな箱を出した。中には一對の銀のカフスボタンが這入つて居た。

「ねえ、い丶ボタンでせう、嫌でなかつたらあなたに上げるわ。」

「はあ、有り難うございます。ですがこんな物を頂いては濟みませんから、どうぞ何です、甚だ失禮ですけれど、此れはお返し申しませう。」

菊村は軍人が上官に答へる時のやうに、眞直ぐに衝つ立つたまゝ微かなふるへ聲で云つた。何だか胸の中が急にドキ

ドキと動悸を打ち出したやうであつた。

「でも嫌でなかつたら使つて頂戴よ。あたしの上げる物なんか氣に入らないかも知れないけれど。」

「變な飾りがなくつて、さつぱりしたいゝカフスボタンだわ。此の人が上げると云ふんだから貰つてお置きなさいよ。」

と、連れの女優が傍から口を挾んで、笑ひを堪へるやうなをかしな眼つきをした。

「ね、遠慮しないで受け取つて頂戴よ。實は買つて來たんぢやないの。ある人に貰つたんだけれど、女が持つて居たつて仕様がないからあなたに上げるのよ。ほんたうよ。」

と、又少女が云つた。その態度は生意氣ではあるけれど、しかし可愛らしい生意氣さで、幼兒が大人にぢやれて居るやうな、あどけない趣があるせゐか、決して相手に反感を起させはしなかつた。さうして、やはり十六七の乙女らしい初ひ初ひしさを失つては居なかつた。見やうに依つては擦れつ枯らしのやうでもあるが、善意に解釋すれば生れつき活潑な、こだわりのない性質の女であるかとも注量された。

此の少女はきつと惡氣のある女ではないんだ、まだほんの子供なんだ、さうだとすると、折角親切にくれると云ふものを貰はないのは却つて惡い。貰つたところで別段差支へはないだらう。菊村はさう氣が付いたので、

「有り難うございます。では折角ですから頂いて置きます。」

かう云つてボタンの箱をポツケツトの中に收めた。

「ねえ菊村さん、あなたの名前は菊村何て云ふの。」

或る時少女はこんな事を尋ねた。

「わたくしですか。私は菊村千太郎と云ふんです。名前を聞いてどうなさるんですか。」

「どうつて少し譯があるの。それぢや菊村千太郎つて云ふのね。」

少女は獅子つ鼻の先を擡げて、つんと拗ねるやうな笑ひを浮かべながら、

「まあいゝわ。譯はいづれ後で分るから。」

と云つた。

その明くる晩の十時ごろになると、彼女はいつもの水兵服を着て、二十ぐらゐな書生を一人伴つて來た。書生と云ふのは洗ひ曝しの糊の硬い白地の絣に小倉の袴を穿いた、キチンとした身なりの、肺病でもありさうな瘦せぎすな體格で、中高の瓜實顔の、血色の靑白い、表情の鈍い、小綺麗ではあるがそつけない風つきの男であつた。さうして、いかにもお孃樣のお附き人のやうに、愼み深く彼女の後に從つて居て、ニコリともしなければ冗談一つ云ひもしなかつた。

「菊村さん、ちよいと、ちよいと。」

と、彼女はテエブルへ就くや否や、右の手を高くさし上げて、露はな二の腕をしなしなと波打たせながら、菊村を手招きした。

「何か御用ですか。」

「あのね、此の間のカフスボタンはどうして？」

「此の通り早速嵌めて居ります。」

菊村は洋服の袖口を上げて、兩手のカフスを出して見せた。

「あゝ、よく似合ふわ。」

と、少女は頗でちよいと頷いて、眞面目くさつて立つて居る菊村の顔を、暫くモヂモヂと見上げて居たが、忽ち例の三日月型の唇の線が、ゴムの伸びるやうに大きく引張られたかと思ふと、その間から白い細かい齒の粒がチラチラとこぼれて、少女はにこにこ笑ひ出した。

「あなたに今日はいゝ銀貨入れを上げませうか。それともいらない？」

から云つて、手に持つた物を二三度菊村の鼻先で振つて見せて、やがてテエブルの上に置いた。それは茶色の琥珀の切れで拵いた小ひさな銀貨入れであつた。

「ほら、菊村さんに上げようと思つて、ちやんと此處のところにS、K、と縫はして來たのよ、きのふ名前を聞いた譯

が此れで分つたでせう。」

成る程其處には菊村の名前の頭文字が、白い絹絲で可愛らしく縫ひ取つてあつた。

何だか女の持つやうな財布なので、菊村はあまり欲しくもなかつたけれど、晴れ晴れとした少女の笑顔を眺めると、とても斷る氣にはなれなかつた。

「やあ、どうも有り難うございます。そんなに度び度びいろいろの物を頂いては濟みませんが、……」

彼は辛うじて斯う云つたゞけで、うやむやの裡にその銀貨入れを貰つてしまつた。

「菊村さん、あなたはちつとも喪へ遊びに出る暇はないの？」

すると今度は、少女がこんなことを云つた。

「暇がないこともありませんが、まあ月に一度か二度ぐらゐです。」

「さう？ そんなに忙しいの。それぢや暇があると何處へ遊びに行くの。若しも淺草へでも行くのなら、あたしいくらでも切符を上げてよ。今月はいつ出られるの？」

「さあ、いつごろ出られるかちよつと分らないんです。」

實は菊村は、もつと打ち解けて話したいやうな氣がしたけれど、傍に書生が控へて居るので、ハラハラしながらやつと受け答へをするばかりであつた。書生と云へば、その男は何故か先から一と言も物を云はないで、徒らに眼をパチクリやらせながら二人の樣子を等分に見比べて居た。それが菊村には妙に煙つたくて、薄氣味惡く感ぜられた。

「ほんたうにいつごろだか分らないの？ 分つて居るなら教へてよ、菊村さん。ねえ、教へたつていゝでせう。」

「暇な時ならばいつでも出られるんですけれど、此の頃は實際忙しくつて、とても淺草なんかへ行つて居る時間はありません。まあ時々、此の近所の活動寫眞を見に行くくらゐなものなんです。」

「それぢや京橋の相生館にかゝつて居るアイランド、オブ、ニンフを見て？ 見なければいつか一緒に見に行きませうよ。ね、一緒に行かない？」

「えゝ、行けたら行つてもよござんす。」
と云つて、菊村はちらりと書生の顏色を窺つた。
「ほんとに行きませうよ。きつと約束してよ。ね、いゝでせう。——菊村さんは此の男に氣がねをして居るのね。此れは內に使つて居る書生で、耳が遠くつて唖なんだから大丈夫なの。」
少女は嘲るが如き口調で云つて、わざと書生の眼の前に顏を突き出して、人の惡い笑ひ方をした。それでも書生には分らないのか、何の手答へもなくぽかんとして、默つてヘムサラダをたべて居た。
初めの內は出來るだけ消極的な態度で、程よくあしらつて居た菊村は、かう云ふ風にしていつからともなく少女に惹き付けられて行つた。彼女が訪ねて來た晩には、その艷麗な笑ひ顏や、愛嬌に充ちた言葉の端々や、細く滑かな手足の線狀や、さう云ふものが一と夜中生き生きと彼の頭に殘つて、どうかすると夢にさへ見ることがあつた。何の爲めに、彼女は自分にいろいろの物を買つてくれたりするのだらう。自分を戀ひして居るのだらうか？ 戀ひする男の歡心を繫いで置いて、その內に關係を結ばうとするのだらうか？ だがそれにしては餘りやり方が大膽である。まさか十六七の娘が、そんな惡だくみを持つて居ようとは信じられない。どうしても彼女はまだ子供に違ひない。藝人の仲間へ這入つて居る爲めに、いろいろと卑しい習慣を覺えて、表面だけは擦れ枯らしになつて居るが、その實精神も肉體も極めて純潔な處女に違ひない。たゞたわいのない簡單な心持ちで、何となく自分を好いて居るのだらう。それでなければ、自分に對してあんな露骨な、無遠慮な眞似が出來るものではない。——そんな風に、菊村は始終彼女の事ばかり考へて居るやうになつた。
「さう云へば君、此の頃よくやつて來るあの女はありやあ何だね。子供の癖にいやにチョコマカした生意氣な女ちやないか。」
ボーイ仲間でも噂の種になつて居るらしく、時々菊村はこんな質問を受けた。
「さあ、何だらう。僕にもよく分らないんだけれど。」

「まあそんなに隠さないでもいゝや。ありや君に惚れて居るんだらう。」
「どうだかなあ。」
と云つて、菊村は耳の附け根まで眞赤にする。
「おい、おい、空つ惚けるなよ。時々君にいろんな物を買つて來るぢやないか。あれで大いに買收する積りなんだぜ。」
「だけど、ありやまだほんの子供なんだ。買收するなんて、そんな意味がある譯ぢやないんだよ。」
「なあに、年こそ行かないが、どうして餘程の擦れつ枯らしだぜ。たしかに君に惚れて居るんだ。」
「さうかなあ、そんな擦れつ枯らしかなあ。」
菊村はさう云つて、ちよつと心配らしい顏つきをする。「いゝや、擦れつ枯らしの筈はない。あの可愛らしい、クリクリとした眼を見給へ。」と、飽く迄も辯護してやりたいのだが、交ぜ返されさうなのでぢつと我慢をして居る。が、正直を云ふと、少女が果して純白な處女であるかどうか、いろいろ菊村にも腑に落ちない點があつて、氣が揉めて仕方がなかつた。彼は今日まで、仲間のボーイに誘惑される折があつても、嘗て一度も遊里へ足を蹈み入れたことがなく、心がけの好い青年どして主人にも信用されて居た。從つて、自分が無垢な青年であるところから、知らず識らず彼女を善意に解釋して居るのかも分らなかつた。さうなつて來ると、女性に就いて經驗のある仲間のボーイたちの批評の方が、中つて居るやうにも感ぜられる。
「どうして餘程の擦れつ枯らしだぜ。」
と、彼等の一人の云つた言葉が、グンと菊村の胸にこたへて、それを想ひ出す度毎に、そんな事を云つた奴が腹立たしくもあり、少女の身の上が心配で溜らなくもあつた。
一番菊村の氣になるのは、少女が多數の男の友達を持つて居るらしい事であつた。彼女につれられてカフヱエへ來る男たちは、殆んど毎回別の人間で、中年の紳士だの、えたいの知れない不良少年だの、浮浪人じみた男だの、その外俳優らしいのや、文士らしいのや、繪かきや音樂家や、最も奇拔なのは啞の書生や、次ぎから次ぎへと種々雜多な人間が

彼女と共に出現する。まだ此の後も、どんな變つた連中がやつて來るか分らない。彼女が踊り子だとすれば、それ等の連中は多分彼女を最負にするお客であつて、御馳走につれて歩くのかも知れない。しかし、それなら勘定は大概お客が拂ひさうなものだのに、「今夜はあたしが奢る番だわ。」と云つて、少女が金を拂ふことも屢々ある。のみならず、カフスボタンの一件を始めとして、銀貨入れだの、襪だの、香水だのと、その後も度び度び菊村に土産物を買つて來る樣子では、少女としては不似合ひな程澤山な小遣ひ錢を持つて居るらしく、踊り子の給金ぐらゐでは到底積きさうもない。菊村は又、少女が此の間啞の男を指して、「内に使つて居る書生だ。」と云つたのを、小耳に挾んで忘れなかつた。家に書生を使つて居るやうな身分だとすると、彼女は或ひは卑しい藝人ではないのかも知れない。金づかひの荒い所から見れば、たとへば良家の令孃であつて、母親か何かに甘へて育てられた我が儘娘のやうにも、想像出來ない事はない。――成るべくならば菊村は、此の最後の想像が事實であることを祈つて居た。金づかひの荒いと云ふ事は、褒めた話ではないまでも、男に媚びを呈して其の金を搾り取る藝人根性よりは、まだまだ遙かに增しである。少くとも彼女が、金で操を賣るやうな種類の女でないと云ふ證據にはなる。……さう考へると、彼はいくらか慰められた。

しかし、「淺草へ行くなら切符をいくらでも上げる。」と云つた言葉から判斷すれば、やつぱりあの邊の劇場へ出る藝人らしくもなつて來る。若しさうだとしたら、あの小遣ひ錢は全體何處から出るのだらうか、誰に貰ふのだらうか、蔭に立派な旦那でも附いて居るのだらうか。すると彼女の貞操だつて、果して純潔だかどうだかあてにはならない。菊村の眼に彼女が可憐な乙女のやうに映ずるのも、要するに惚れた慾目であつて、あどけない口のきゝやうや、無邪氣らしい素振りや表情は、みんな喰はせ物かも知れない。……イヤ、そんな事はなからう。たとへ藝人だからと云つて、必ずしも汚れて居ると限つては居なからう。現にカフェエのボーイをして居ても、自分のやうな眞面白な青年もあるぢやないか。……毎日毎日、此の問題が菊村の頭の奥にこんがらかつて渦を卷いた。あんまり思ひ詰めて居ると、何も彼もムシヤクシヤに分らなくなつて、たゞ美しい少女の笑顔ばかりが、光の中に燃え狂つて居る大輪の花のやうにハツキリと眼の前に吊る下つて居た。

八月の上旬になつてから、少女のカフェエを訪れる度はますます頻繁になつて、殆んど毎晩缺かさなかつた。さうして此の頃は、大抵啞の書生ばかりを連れて來て、ヴニラ、ソーダにあつさりとした料理を二た皿ぐらゐ取つて、菊村が相手をして居ればいつ迄でもしやべつて居た。

「菊村さん、今夜は少し眞面目な話があるんだから聞いてくれない?」

と、或る晩、折よく菊村の手の空いて居る時に、かう云つて彼女は話しかけた。

「菊村さんにね、會ひたいと云ふ人があるのだけれど會つてくれないでせうか。あたしの知つて居る人なんだけれど、女ぢやないのよ。男なのよ其の人は。」

「へゝえ、なんの御用で?」

聞かれてから、少女は暫くうつむいて考へ込んで居た。いつになく落ち着いて、しんみりとした樣子であつた。默つて、テーブルの上に肘を衝いて、つやつやした柔かい手頸をくるりくるりと動かしながら、ソーダ水の管を面白さうにいぢくつて居た。薄紅い、透き徹つたヴニラ、ソーダのコップの底からは、細かい瓦斯の粒が涼しさうにピチピチと泡立つて、それが眞白なテーブルの大理石の上に、さうして殊に瀟洒とした水兵服の少女の前に置かれてあるのが、或る爽やかな色彩の對照をなして、菊村の見馴れた眼にも、貴い寶石か何かのやうに綺麗であつた。やがて少女は、薄い唇を薄いコップの縁に吸ひ着かせて、チユウと音をさせながら一と息に飮んでしまふと、皮を剝いた果物のやうに濡れて光つて居る唇の周りを、二三遍ハンケチで强く擦つた。

「用と云ふ譯ぢやないんだけれど、その人は菊村さんを引き取つて世話をして見たいつて云ふの。……若しも承知をしてくれゝば、學校へも入れて上げるし、何でも菊村さんの好きな事をさせて上げると云ふ譯なの。菊村さんだつて、かうして此處に勤めて居たつて詰まらないでせう。」

「えゝ、そりや此處に斯うして居たつて面白い事はありませんが、一體世話をして下さると云ふのは、孰方の方なんです。」

菊村は、少女が何處まで本氣なのか疑はずには居られなかつた。けれども彼女の先からの話し振りや態度を見れば、どうしても冗談とは思はれない。彼はテーブルの端に兩手を衝いて、ぼんやりと彳んだまゝ、夢のやうな心持ちで、じろじろと少女の顔つきを眺めて居た。

「何處の人だか其れはまだ云ふ譯には行かないわ。菊村さんの方では覺えて居ないかも知れないけれど、先では菊村さんを知つて居るのよ。」

「ぞれぢや何ですか、あなたと御一緒に此處へいらしつた事のある人なんですか。」

「えゝさう。いつか一遍、私と一緒に來た三十二三ぐらゐの小柄な人があつたでせう。絹絲の縁の附いた黑羅紗の洋服を着た、色の青白い、圓顔の男の人。あなた覺えて居ないか知ら?」

「あゝ成る程、覺えて居ます。あの方はたしか、たつた一遍入らしつたきりぢやありませんか。」

「えゝさうよ。何でも私がまだ、此處へ來出してから間もない時分だつたわね。」

「失禮ですが、あの方は一體どう云ふ方なんです。あなたのお友達にしては、あまり歳が違ひ過ぎるやうですね。」

「お友達?まあお友達だわ。あたしは今あの人の所に居るの。」

「すると、あなたの御親戚か何かなんですか。」

「いゝえ、さう云ふ譯ぢやないの。たゞあたしの知つて居る人なの。」

「するとあなたの——」

と云ひかけて、菊村はハッと氣が付いてバツが惡さうに默つてしまつた。が、少女は別段何とも思はなかつたらしく、平氣で水蜜の喰ひかけを、飴を舐めるやうにピショピショとしやぶつて居る。果實の實の間から、清水の湧くやうに滾々としたゝる汁が、綺麗な彼女の兩手の指の股を傳はつて、青い血管の透いて見える生白い手の甲を、涙の如く流れて行つた。

「まあその人は物好きで、自分の氣に入つた子供があると、それを引き取つて世話を焼くのを道樂にして居るのよ。だ

から菊村さんもつまりあの人の氣に入つたんだわ。」

「ですが、たつた一遍私を見たばかりで、氣に入ると云ふのもおかしいですね。私の何處が氣に入つたんでせう。」

「菊村さんを有望な青年だと思つたんだわきつと。私にもよくは分らないけれど。……それでね、私から是非菊村さんにすゝめて、兎も角一遍內へ來てくれるやうに話してくれろと云つて、實は此の間から賴まれて居たの。その人に會つてくれれば、どう云ふ積りであなたを養はうと云ふのだか、事情が分るだらうと思ふわ。さうして會つて見た工合で、あなたの方の考へを極めたらいゝぢやありませんか。ね、さうして下さいよ。」

「えゝ、伺ふだけは伺つてもよござんすが、お宅は孰方なんですか。」

「築地の居留地の直き傍だから、近い所だわ、內はその人と、あたしと、それから此處に居る此の書生ね、それに風呂番と女中と五人暮らしなの。別に商賣もして居やしないし、ごく呑氣な、氣樂な內よ。菊村さんが來てくれゝば賑かになつて面白いわ。」

　少女は斯う云つて、別段不思議な、非常識な事とも感じて居ないらしく、熱心に、たわいもなくしやべり捲くるのであつた。菊村には何から何まで合點が行かなかつた。自分はたしかに、いつぞや彼女につれられて來たあの紳士を覺えて居る。その時はよくも氣に留めては居なかつたが、小太りに太つた、ゆつたりとして、品のいゝ顏つきの男であつた。少女が此の間から自分の內と稱して居るのは、あの紳士の家であつて、そこに彼女が同棲して居るのだとすれば、さてはあの紳士が彼女の旦那であるかも知れない。しかしそれにしても、何の目的で自分を引き取らうと云ふのだらう。女の世話を燒くならば分つて居るが、自分のやうな男の子を養つてどうする氣だらう。第一、たつた一遍自分を見たばかりで、將來有望な人間であるかどうか、そんな事が分らう筈はない。物好きだとしても餘りに不思議な話である。

「ねえ菊村さん、向うはいつでもいゝのだから、菊村さんの暇な時にあたしが連れて行つて上げるわ。決して心配な人ぢやないの。名前を云へば菊村さんだつてきつと聞いた事のある人よ。菊村さんが承知してくれさへすれば、きつとあなたを弟のやうに大事にして可愛がつてくれると思ふわ。窮屈な事なんかちつともありはしなくつてよ。あたしだつて、

まるで其の人の娘のやうにして貰つて、我が儘放題に暮して居るんですもの。だからほんたうに、會つて見た工合で、嫌でなかつたら內へ入らつしやいよ。折角世話をするつて云ふのに、遠慮なんかしたつて詰まらないわ。ねえ、ほんたうにさうしたらどう？さうなると、菊村さんとあたしとは何だか兄弟のやうになるわねえ。」

少女はかう云つて、テーブルの上に兩腕を違はせて、茫然と衝つ立つたまゝうなだれて居る菊村の瞳を、下から覗き込むやうにした。

取り留めのない、お伽噺の筋のやうにふわふわとした、空想じみた少女の言葉をぢつと聞いて居る菊村は、或る思ひがけない奇妙な運命が、自分を待ち構へて居るやうな氣がした。菊村に取つては、うすうす顏を見覺えて居るあの紳士も、此處に居る噂の書生も、斯うして現在自分に話しかけて居る少女も、凡べてが解き難い謎であつた。あの紳士が果して少女の旦那だとすれば、自分のやうな若い男を、一つ家の中に住まはせて置く譯がない。して見ればやつぱりあの紳士は、一種の物好きから此の少女を養つて、「娘のやうに」可愛がつて居るのかとも考へられる。自分が若し、此の少女と同じ屋根の下に住んで、朝夕「兄弟のやうに」暮らすことが出來るとしたら、――そんな夢のやうな事が、若しほんたうに出來るのだとしたら、――どんなに自分は嬉しいだらう。たとへ一日でも半日でもそんな境遇になつて見たい。此の少女の傍に居るのなら、カフエのボーイよりもつと厭な仕事でも自分は喜んで辛抱する。まして自分を學校へ上げてくれて、籠を放れた鳥のやうな好き放題にさせてくれる。こんなうまい話が何處にあるだらう。殆んど現在の菊村が、及びも付かない妄想として心に描いて居る幸福の、最上のものではないか。

「菊村さんの方の都合はいつがいゝの。近いんだから、ちよいと一時間も暇を潰せばいゝんだわ。今夜は駄目？」

「今夜？今夜はもう遲ござんす。そんなに急いで居らつしやるんですか。」

「えゝ、急いで居るの。一日も早い方がいゝつて云ふの。」

「なぜです？まるで狐につまゝれたやうですがなあ。」

「そんならいつがいつがいゝの。明日か明後日は駄目？都合で朝でも晩でもいゝのよ。」

「それぢや明後日の午前中に願ひませう。だけど何だか妙ですなあ。」

菊村はまだ半分ぼんやりして、格別嬉しくもないやうな顔つきであつた。さうして少女が歸つてしまふと、その時からムツツリと塞ぎ込んで、明くる日一日、魂のない人間のやうにぽかんとして居た。

約束の日の朝早く、明け方の靄の中を漸う電車が走り出した時分に、「ちよいと其處まで買物に行つて來る。」と云つて、菊村はコック部屋の裏口の戸を明けて表へ出た。さうして築地の本願寺の前まで來ると、かねて牒し合はせて置いた通り、例の水兵服にタスカンの麥藁帽子を阿彌陀に被つた少女の姿が、其處に獨りで立つて居た。少女は菊村に氣が付くと、半町ばかり隔つたところから手を振つて合圖をしながら、ひらりと身をひるがへして居留地の方へすたすたと歩き始めた。白い帽子のリボンに、白い洋服、白い襪、白い半靴――すがすがしい彼女の後ろつきが、曉の蓮の花が開いたやうに、爽やかな朝の空氣に匂つて居た。(以下次號)

作者曰く、此れは可なりの長篇にする計劃で、最初の第一回だけを本誌の九月號へ載せたのである。今後、一と月に一回乃至五六回ぐらゐづゝ二三箇月に亘つて連載しようと思つて居る。

本誌の發行日遲延について

本誌の發行日は近來多少遲れ勝ちになつて、大抵一日の晩か二日の朝でなければ出來ぬやうになつた。本號の如きはひよつとするともつと後れるかも知れない。愛讀者諸君、殊に遠隔の地に居らるゝ愛讀者諸君には誠に申譯のない次第である。併しながら之は編者等が怠けて居る爲めではない。本誌が兎に角雜誌界の重鎭と認められて、讀書界から多大の注目を受けて居る結果、寄稿者も編輯者も、よきが上にもよきものを出さうとして、おいそれと手ッ取り早く行かなくなつたのが、雜誌の後るゝ最大原因である。本誌の爲めに執筆せらるゝ人は、最もよき材料に全力を盡さるゝの結果、どうしても大事をとつて進行が遲くなる傾がある。又校正でも筆者自身で見なければ氣が濟まなくなつて『今度の校正は是非私に見せて呉れ』といはるゝ程筆者の愛着の籠つた作物が多くなつた。中には「『中央公論』に書く時だけは妙に堅くなる」といふ人が可なり多い程本誌の舞臺は大事にされる。之は誠に編者等にとつて有り難い次第であるが、それが矢張り〆切期日が後れ、從つて發行日の後るゝ一原因にはなる。又編者等も成るべく最近の時事問題や社會問題を逸したくない。近來は發行日の迅速と云ふやうな、殆んど無意味な競爭の爲めに、政治雜誌でありながら、前月の央ば頃に起つた大事件に對して何等の批判も研究も發表してゐない雜誌さへある。編者等はそんな事はしたくない。出來るならば前月の廿二三日頃までの事件は洩らしたくない、そして夫等の事件を、日々の新聞に報道され批判さるゝ以上に、もつと詳細にもつと根本的に報道し批判したいと思つてゐる。之れが又〆切りを無暗に急ぐことが出來ぬといふ結果を起し、從つて發行日の後るゝ他の一つの原因となる。それから又前月に豫告したものは、作者の病氣と云ふやうな不可抗力な原因が起らざる限り、是非載せたいと思ふ。或雜誌のやうに豫告の中の主もなるものが二つも三つも出來ないと云ふやうな、無責任な信用のない眞似はしたくない。現に今月の小說などには隨分編輯者を手古摺らした人もあつたけれど、我等がお百度を踏むやうにして前號に豫告した七人の第一流作者を殘りなく網羅したのは、兎に角我等の滿足であり、誇りである。發行日が後れずに、而かもよい材料と最近の出來事を洩らさぬやうに出來れば此上ない。それが編者等の理想であることは無論である。理想を只理想とせずして其實現に努力すべきことも無論である。然し今日では殘念ながら其處まではまだ行き得ない。材料に重きを置く爲めに發行日の後るゝことになつて居るのは遺憾である。然し之は決して編者等の怠慢の罪でないことを此餘白を籍りて讀者諸君に一言辯解して置く次第である。(一記者)

◎本號特價金六拾錢郵税金四錢

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂
同 神田區裏神保町 上田屋
同 京橋區銀座三丁目 東海堂
同 京橋區元數寄屋町 北隆館
同 京橋區西紺屋町 良明堂
同 日本橋區本石町 至誠堂
大阪市北區梅田町 盛文館
同 北區東梅田町 立盛堂
京都市七條停車場前 共盛社
同 四條西洞院 前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目 日韓書房

○定價 金參拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

册數＼國別	內國	國外
六册	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二册	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵税は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を**本郷區西片町十番地中央公論社**とし、拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるゝ虞なし
一振替貯金口座は**東京三十四番**なり
一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢　及送料共）
一受領證請求は必ず返信料を要す

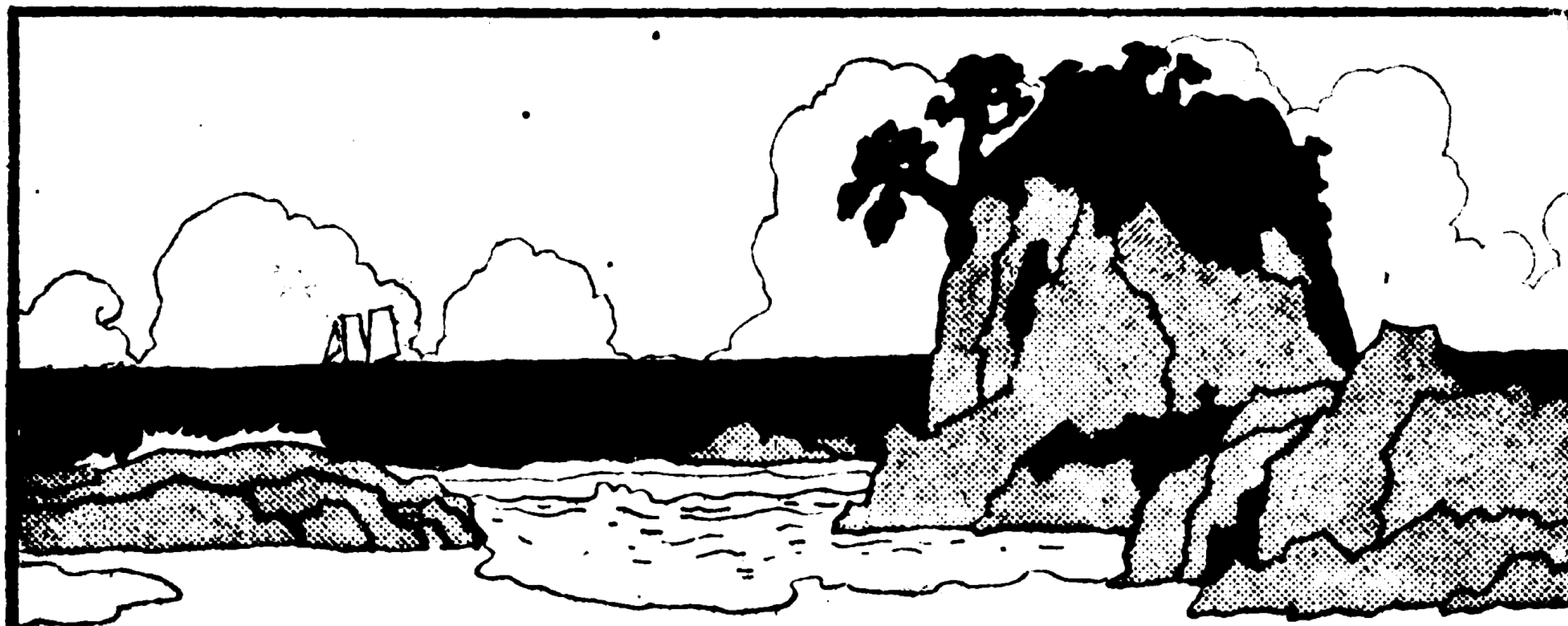
大正七年八月卅一日印刷納本
大正七年九月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 菅谷憲治
印刷人 高木酉三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所 中央公論社
電話(長)小石川一四四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter



東京漫畫會展覽會

九月十一日より十五日まで開會、樂天、一平、百穗、浩一路及びその他の諸先生の畫かれたものです……

抹茶及煎茶器陳列會

九月十五日より廿一日まで催ほします、第一流の技工の手に成つたお茶道具が盡く揃つて居ります……

裾模樣新圖案陳列

九月十五日より陳列致します、本年の秋の流行を代表すべき新意匠の圖案が各種陳列されます……

東京 三越呉服店

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す